

太宰府・佐野地区遺跡群

佐野土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
日焼遺跡第7次調査

—第1 冊 本文編—

平成 年

太宰府市教育委員会

序

日焼遺跡第7次調査は、佐野土地区画整理事業に伴って実施した埋蔵文化財の発掘調査です。

調査地は「買地券」が出土した大宰府官人の葬送の地として知られる宮ノ本遺跡の東側に位置し、調査地内では奈良時代の須恵器の窯や製鉄遺構をはじめ、平安時代の墳墓、近世の墳墓群など当時の生活空間を知る上で貴重な成果を得ることができ、大宰府の歴史を考える上で重要な手がかりになるものと考えられます。ことに奈良時代の製鉄遺構の発見は佐野地区の地域史はもとより国内の鉄の需給体制の解明にとっても大きな意義を持っております。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財調査に対してご協力頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成17年3月

大宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例 言

1. 本書は、太宰府市大字向佐野342-1番地他に所在する日焼遺跡第7次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、太宰府市教育委員会の指導のもと榊理蔵文化財サポートシステムが実施した。
3. 出土した人骨の整理および分析については、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏に依頼し、その結果に関する玉稿を賜った。
4. 検出された須恵器窯の考古地磁気分析については、秋田大学工学資源学部地球資源学科 西谷忠郎氏、川崎地質株式会社 菊山浩喜氏に依頼し、玉稿を賜った。
5. 出土した鉄滓については、株式会社九州テクノロジーサーチ 大澤正己、鈴木瑞穂氏に依頼し、玉稿を賜った。なお、製鉄関連の自然科学分析に付随する資料分析については、下山覚、平島義孝が行った。
6. 遺構実測の基準点は、国土調査法第II座標系を基準としている。よって図中に記載される方位は特に注記のない限り座標北 (G.N) を指している。
7. 現地での航空写真撮影は、ふじた航空写真 藤田勝一が行った。
8. 発掘調査および報告書作成に際して、下記の方々から多くの御指導・御教示を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

小田 富士夫 (福岡大学 名誉教授)	渡邊 和子 (筑紫野市教育委員会)
吉留 秀敏 (福岡市教育委員会)	長家 伸 (福岡市教育委員会)
上角 智希 (福岡市教育委員会)	舟山 良一 (大野城市教育委員会)
石木 秀啓 (大野城市教育委員会)	高橋 章 (九州歴史資料館)
吉村 靖徳 (九州歴史資料館)	鈴田由紀夫 (佐賀県教育庁文化課)
松井 和幸 (北九州市立自然史・歴史博物館学芸員)	下村 智 (別府大学 教授)
9. 本書に記載される遺構番号は以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SB:掘立柱建物跡, SA:欄列跡, SK:土坑, ST:墳墓, SD:溝, SX:その他の遺構などであり、詳細は「佐野地区遺跡群I」に記載している。

日	7	ST	001
遺跡名	調査回数	遺構種別	遺構番号

10. 報告書作成業務は榊理蔵文化財サポートシステムにて行った。なお、具体的な関係者については調査組織の項に記載している。
11. 出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。
12. 本書の執筆者名については、各分担箇所の文末に明記する。なお、遺物については主に島内浩輔が担当した。
13. 調査・整理の方法については、基本的に「佐野地区遺跡群I」および「太宰府市における埋蔵文化財調査指針」(2001年9月改正版)に準じている。なお、遺物の分類については下記の文献に従った。

須恵器	太宰府市教育委員会編	1992	「宮ノ本遺跡II-窯跡編-」太宰府市の文化財 第10集
	太宰府市教育委員会編	2002	「太宰府-佐野地区遺跡群I4」太宰府市の文化財 第63集
土師器	太宰府市教育委員会編	1983	「太宰府条坊跡II」太宰府市の文化財 第7集
陶磁器	太宰府市教育委員会編	2000	「太宰府条坊跡XV」太宰府市の文化財 第49集
黒色土器	横田賢次郎・森田勉	1976	「太宰府出土の土師器に関する覚え書き」 九州歴史資料館 研究論集 2 九州歴史資料館
瓦質・土師質土器	山村信榮	1990	「太宰府出土の瓦質土器」 [中近世土器の基礎研究VI] 日本中世土器研究会
14. 近世以降の墳墓については、P167・168において分類概念を呈示している。
15. 本書の編集は、下山覚、松崎卓郎、平島義孝、小石龍信がこれを行った。

本文目次

第1冊 本文編

I 総説

1. 位置および歴史的環境	1
2. 調査・整理の組織	3

II 調査の概要

1. 調査概要および調査区域・群の設定	6
2. 各地区の基本土層	14
(1) A地区の土層	14
(2) B地区の土層	14
(3) C地区の土層	15
(4) D地区の土層	15
3. 各遺構の調査	16
(1) 近世以降の墳墓	16
①A群	16
②B群	75
③C群	109
④D群	129
⑤E群	154
⑥原位置不明な石製墓標	162
(2) 近世以前の墳墓	182
(3) 掘立柱建物	206
(4) 窯	208
(5) 製鉄関連遺構	228
(6) 竪穴状遺構	234
(7) 旧河川	250
(8) 柵列	254
(9) 溝	254
(10) 土坑	256
(11) 包含層出土遺物	266
(12) その他の遺構の出土遺物	270

III 総括	280
--------	-----

第2冊 自然科学 析・写真図版編

IV 付編（自然科学分析）	311
福岡県太宰府市日焼遺跡の考古地磁気調査	313
日焼遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査	331
日焼遺跡第7次調査で出土した鉄原材料の事前加工工程について	365
日焼遺跡第7次調査で出土した製鉄について	371
日焼遺跡第7次調査で出土した鉄滓について	375
太宰府市日焼遺跡出土の近世人骨	389
近世期における葬送儀礼—筑紫地区周辺の様相—	429

説

1. 位置および歴 的環境

太宰府市は福岡平野の最深部に位置し、立地は北から東にかけて三郡山系、西から南にかけては脊振山系が連なり、その両山系に囲まれた狭小な平野を中心に所在する。

古代では、この地形を利用して北西の山間部に「水城」、北の四王寺山に「大野城」、南の基山に「基肆城」と防衛施設を築造し、平野部に大和朝廷の出先機関である「大宰府」を設置した。また、それに伴い碁盤の目のような区画構造（条坊）を採用した都市空間が造られ、通称「大宰府条坊」と呼ばれている。

現在までに、「大宰府条坊」内と推定される範囲で200回以上の発掘調査が行われ、当時の都市景観が明らかにってきている。

日焼遺跡第7次調査区は、太宰府市の西側にある脊振山系から東に延びた宮ノ本丘陵の東端部に位置し、丘陵から丘陵裾部にかけて遺跡が展開している。遺構は須恵器窯、製鉄関連遺構、火葬墓、木棺墓等の奈良・平安時代に比定される遺構および近世以降の墳墓が検出された。

以下、今回の発掘調査で確認された遺構に関連する周辺遺跡を取り上げてみる。

奈良時代に比定される遺跡は大宰府条坊跡を筆頭に数多く発見されている。その中でも本調査区周辺に位置する遺跡は、水城西門から大宰府条坊南端に続く古代官道跡が検出された前田遺跡をはじめ、島本遺跡、大宰府条坊跡第99次調査等が挙げられる。また、前田遺跡やカヤノ遺跡^{註1}等では竪穴住居、掘立柱建物群が検出されており、集落が形成されたことが窺える。さらに、前田遺跡では金属生産に関連する遺構・遺物が出土しており、前田遺跡の北側に位置する原口遺跡、久郎利遺跡では官衙的要素が見られる掘立柱建物群が確認されている。

太宰府市の西側丘陵で出土する須恵器の窯跡は、本遺跡を含め、宮ノ本遺跡、長浦窯跡、神ノ前窯跡などともに牛頭窯跡群に包括され、6世紀中頃～9世紀前半まで続いた須恵器の一大生産地として、それぞれの時代の生産体系を担っていた。

特に、神ノ前窯跡では6世紀末～7世紀前半に比定される須恵器とともに九州最古級といわれる瓦も出土しているなど、古くから官営の生産体系を維持してきた地域である。

さて、太宰府市では古代の製鉄関連遺構の出土例は多くはない。製鉄関連事例として挙げられる遺跡には本市の東側に位置する丘陵で発見された池田遺跡、宝満山遺跡がある。特に、宝満山遺跡では官営の鉄生産地の可能性が考えられている。

さらに、本調査では平安時代の木棺墓、火葬墓が発見されたが、本遺跡の西隣に位置する宮ノ本遺跡では、奈良時代から平安時代の木棺墓、火葬墓が検出され、本調査区と合わせて一つの墓域を形成する。

また、他に古代墓が確認された遺跡は、篠振遺跡、君畑遺跡、馬場遺跡等の低丘陵地に立地するものから平野部の大宰府条坊内におよぶ範囲まで確認されている。

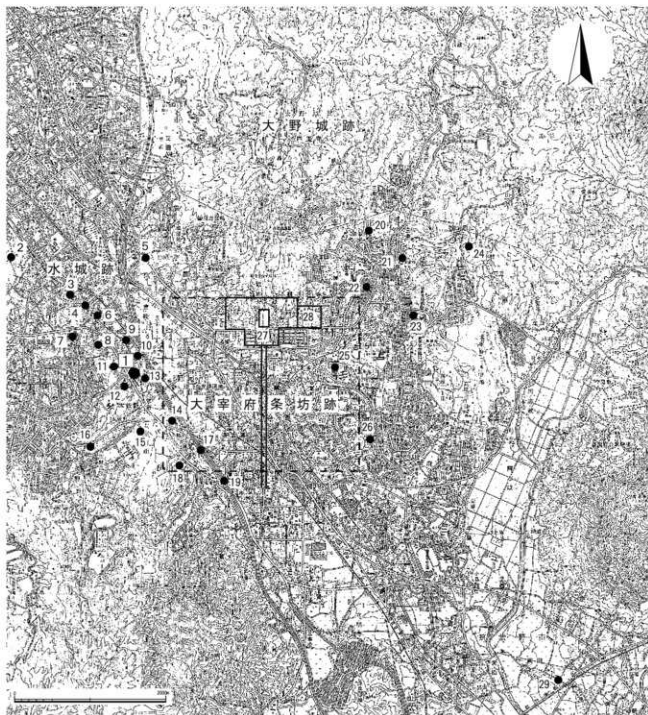
今回の調査成果は、奈良・平安期における大宰府条坊外区域の歴史的景観や機能を復原するための材料の一部となったと考えられる。特に、市内において数少ない製鉄関連遺構の発見は、古代の製鉄技術や生産体系、そして、その変遷を知る上で貴重な情報をもたらしている。

(文責 平島義孝)

註1 カヤノ遺跡の調査報告書は未報告である。

【参考文献】

- | | | | |
|-------------|------|-----------------|-------------------|
| 太宰府市教育委員会編 | 1992 | 「宮ノ本遺跡Ⅱ—窯跡編—」 | 太宰府市の文化財 第10集 |
| 太宰府市史編集委員会編 | 1992 | 「太宰府市史 考古資料編」 | 太宰府市 |
| 福岡県教育委員会編 | 2002 | 「宝満山遺跡群 浦ノ田遺跡Ⅲ」 | 福岡県文化財調査報告書 第169集 |
| 太宰府市教育委員会編 | 2000 | 「太宰府・佐野地区遺跡群X」 | 太宰府市の文化財 第50集 |



- | | | | | |
|---------|-----------|-----------|------------|------------|
| 1. 日焼遺跡 | 7. 神ノ前竈跡 | 13. 前田遺跡 | 19. 桶田山遺跡 | 25. 君畑遺跡 |
| 2. 池田遺跡 | 8. 篠振遺跡 | 14. 糸坊99次 | 20. 原遺跡 | 26. 池田遺跡 |
| 3. 谷川遺跡 | 9. 原口遺跡 | 15. 殿城戸遺跡 | 21. 安楽寺天満宮 | 27. 大宰府政庁跡 |
| 4. 水城西門 | 10. 久郎利遺跡 | 16. カヤノ遺跡 | 22. 新町遺跡 | 28. 観世音寺 |
| 5. 水城東門 | 11. 長浦竈跡 | 17. 唐人塚遺跡 | 23. 馬場遺跡 | 29. 岡田遺跡 |
| 6. 島本遺跡 | 12. 宮ノ本遺跡 | 18. 脇田遺跡 | 24. 宝満山遺跡 | |

Fig.1 日焼遺跡第7次調査 周辺遺跡図 (1/50,000)

2. 調査・整理の組織

日焼遺跡第7次調査区は、太宰府市大字向佐野342-1番地他に位置しており、「佐野土地区画整理事業」に伴って調査を実施したものである。調査面積は4,997㎡、調査期間は平成15年12月1日～平成16年7月31日である。調査・整理の具体的な組織については下記のとおりである。

太宰府市文化財課 調査組織一覧（平成16/2004年度）

総括 庶務	教育長	關 敏治
	教育部長	松永栄人（4月1日～）
調査	文化財課長	木村和美
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	事務主査	藤井泰人（～6月30日）
		齋藤実貴男（7月1日～）
	主任主事	大石敬介
	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮（調査・整理担当）
		中島恒次郎（事前調整担当）
	主任技師	井上信正
技師（嘱託）		高橋 学
		宮崎亮一
		下川可容子
		森田レイ子
		柳 智子
		渡邊 仁
		長 直信
	松浦 智（7月1日～）	

輿理藏文化財サポートシステム 調査組織一覧

社長	川谷昭彦
調査部部长	松尾直子
福岡支店長兼主任研究員	下山 覚
調査部技師	近藤晋一郎
調査部技師	小石龍信
調査部技師	大坪芳典
調査部技師	七高陽子
調査部技師	島内浩輔
調査部技師	秀嶋龍男
調査部技師	黒木正行
調査部技師	宇田貝将
福岡支店係長	栗田正治
福岡支店技師	中尾陽介
福岡支店技師	江頭英樹
福岡支店技師	執行敏秀
福岡支店技師	中島朋子

また、現地調査および報告書作成にあたっては、下記の方々の御協力を頂いた。記して感謝致します。

筑原善和、川辺美英子、武広正純、城野一郎、伊東利純、岡上幸子、井上嘉隆、池田公一、池田ひろみ、中島 太、内田賢一、内田雅文、伊藤博樹、村上浩明、本川美穂子、吉田久美子、福原 盛、浦田雅利、野田典子、福田京子、堤 圭子、光石逸子、村上久美子、古賀栄子、古閑健一、種浦加代子、堤浩一郎、毛利恒彦、松尾昌広、多々良正人、中田裕樹、東 貴之、本山千絵、椎葉博昭、岡本泰寛、山田大輔、久留島清恵、上高原聡、石川哲哉、池田あゆ子、大谷伸宏、田中 貴、須田朗平、高塚輝美、上川路直光、鎌田浩平、上瀧美奈子、古賀恵美、宮吉正明、早木恵奈、立石智容子、吉川知恵、青柳 愛、新井久美、土井マサ子、天本加代子、上田光子、木村美子、今岡一恵 (敬称略)

凡 例

- 1 遺構図版の遺物出土状況図中に付与されている「○」番号と、遺物図版中の「レイアウト番号」が対応する。
- 2 S番号とは、調査時に検出された「遺構」や「包含層」等に付与される管理番号である。
- 3 R番号とは、遺物に付与される整理番号であり、S番号に付与された「遺構」・「土色」・「遺物取り上げ番号」ごと付与される。
- 4 各「遺物観察表」中の「土色」・「土色・取り上げ番号」の項目は、現場で付与された「土色名」または「遺物取り上げ番号」を掲載している。本書中では、この「遺物取り上げ番号」を「土色名」に変更して記載しているもの等があるが、整理の都合上、「土色」・「土色・取り上げ番号」の欄は変更前の「土色名」または「遺物取り上げ番号」を掲載しているため、本書中の記載とは一致しない。
- 7 各「遺物観察表」については、実測図を作成した遺物、あるいは、写真撮影を行った遺物についてのみ、表にまとめている。
- 9 「土器観察表」(Tab.26~28, pp..273~275)中の「備考」欄の凡例については、次のとおりである。「イト・ヘラ」は切離し。「板瓦」は板状瓦疵。「内底ナデ」は土器器にのみ表記。「内底ナデ・板瓦」の「○」は「有」、「×」は「無」の意。また、摩滅等により遺物の観察が困難なものや欠損等により観察部位がないものについては表記していない。
- 10 「石製品観察表」(Tab.23, p.252)中の略号は、ob(黒曜石)、and(安山岩)、UF(微細剥離など使用痕のある剥片)、AP(石鏃)である。石核の場合は、最終剥離面ないし最も明瞭な剥離面を正面にして図示している。
- 11 「選別遺物台帳」(Tab.43~55, pp..298~310)については下記のとおりである。
 - ①「S番号」出土遺物は個別番号、土色で取り上げた。また、包含層出土遺物は土色で取り上げた。個別番号、取上げ土色ごとで作成した。「No」は「遺物取り上げ番号(個別番号)」である。
 - ②()は出土点数を、「」は接合しないが同一個体の出土点数を表す。包含層出土土器は数量表記を行っていない。
 - ③石製墓標、クサビ石、基礎石等を含めて選別台帳では墓石として扱った。
 - ④鉄洋類については大分類として、鉄洋、鉄鉱石、炉壁を表記した。
 - ⑤鉄洋類、棺材、人骨は点数表記が困難であったため数量表記は行っていない。ただし、鉄洋は本書の「IV 日焼遺跡第7次調査で出土した鉄洋について」の「遺構別鉄洋出土一覧」(Tab.1~11, pp..377~387)に表記されている。また、鉄洋類の小分類を示している。
- 12 「遺構番号台帳」(Tab.34~42, pp..289~297)については下記のとおりである。
 - ①遺構や出土遺物が報告された「S番号」に対して、「遺構番号」を付与した。
 - ②複数のグリッドにまたがる遺構については、その遺構の最東南に位置するグリッドのみ記載している。

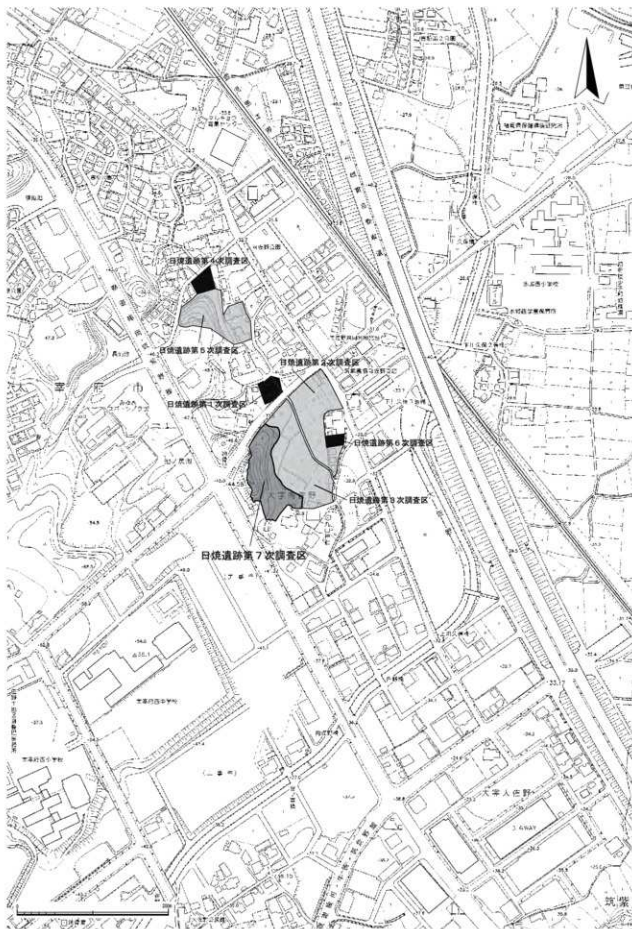


Fig.2 調査区位置図 (1/5,000)

調査の概要

1. 調査概要および調査区域・群の設定

日焼遺跡第7次調査区は、西側から延びてきた宮ノ本丘陵が調査区のほぼ中央付近でその裾部となり、博多湾に注ぐ御笠川の源流の1つである大佐野川が形成した河岸段丘へと続く箇所に位置している。

調査区北側には、近世・近代を中心とした墓域が形成されており、調査開始当初から、墓に伴って構築された盛土（墳丘）や墓標石が数十基確認されていた。また、日焼遺跡第7次調査区のすぐ西側にあたる宮ノ本遺跡や長浦窯跡では、古墳～古代にかけての墳墓および窯跡が検出されており、調査区内の近世墓が位置する地点から南側にかけての丘陵部において、それらの遺構が検出されることが予想された。

そのため、調査の便宜上、近世墓が位置する地点をA地区、A地区の南側をB・C地区とし、A地区の東側をD地区として調査区を4つに区分し、調査時間がかかることが予想される近世墓の調査を継続しながら、他の地区の調査を併行して行うことにした。さらに、近世墓は調査区北側の丘陵中腹から裾部にかけて、大きくわけて3段ほどの大規模な段造成を行って形成されており、細かくみるといくつかの群構成が見られると予想されたため、最上段をA・E群、中段にあたる箇所をB・C群、そして、最下段に位置する群をD群と呼称して調査を行った。

調査は、まず、重機にて遺構が検出できる面まで掘り下げた後に遺構検出を行い、1/100の略測図を手測りとトータルステーションによるデジタル実測と併用して作成した。そして、遺構の掘り下げを行い、必要に応じて1/10の個別図あるいは1/20の全体図を作成した。その後、トレンチを設定して下層の遺構面の有無を確認し、遺構面が認められた場合はさらにその面まで掘り下げて遺構検出を行った。

最終的には、A・B地区で1面、C地区で2面、D地区で3面の遺構面を確認した。また、遺構内出土の遺物の取り上げについては、遺物が出土した埋土の土色に「土色帖」を使用せず土色名をつけて取り上げを行った。その後、土層断面図等の作成においては、「土色帖」を使用して土色名をつけた。そのため、遺物取り上げ時の土色名と土層断面図の土色名が異なっているが、両者の対応関係については表にまとめた^{註1}。

A地区では、近世以降の墳墓の盛土がいくつか残存しており、盛土が残存するものについては、それぞれ4分割して土層断面図を作成し、その後、盛土を除去して墓壇の検出を行った。検出された墓壇形態には円形や方形など形にバリエーションが認められた。また、盛土と墓壇が必ずしも正位置に一致しないため、墓壇を検出した際に調査軸を改めて設定して調査を進めた。また、B群の一部には基盤層である花崗岩岩盤の二次堆積層の上面に、第四紀層である八女粘土層・鳥栖ローム層に由来する粘質土壌が堆積しており、縄文・旧石器時代の遺物確認のためトレンチを設定して調査を行ったがこれらの時期に該当する遺物・遺構は確認できなかった。

B地区では、丘陵の中腹にて地山面である花崗岩風化土面に掘り込まれた木棺墓・土壇墓・火葬墓等を検出した。また、丘陵裾部では奈良期の須恵器の窯跡1基を検出した。各遺構の調査が終了した後に、重機にて斜面に垂直にトレンチを設定し、土層の堆積状況を確認した。

C地区では、奈良期の窯跡1基と、窯に付随すると考えられる遺構を検出した。また、東半部では旧河川を検出した。旧河川についてはトレンチを設定して土層の堆積状況等を確認したものの、人為的な痕跡が認められなかった。

D地区では、7c後半～近世に至る遺構面を3面検出した。特に2面目では、奈良時代の鉄の製錬跡と考えられる遺構やそれに付随すると考えられる竪穴状遺構や掘立柱建物等を検出した。また、ピットや土坑と共に、大量の須恵器を廃棄したと考えられる遺構^{註2}なども検出した。

各地区の遺構調査修了後に、トレンチを10箇所程設定して土層の堆積状況を確認して調査を終了した。

(文責 松崎卓郎)

註1 Tab.32・33 (p.278・279) を参照。

註2 7SK634

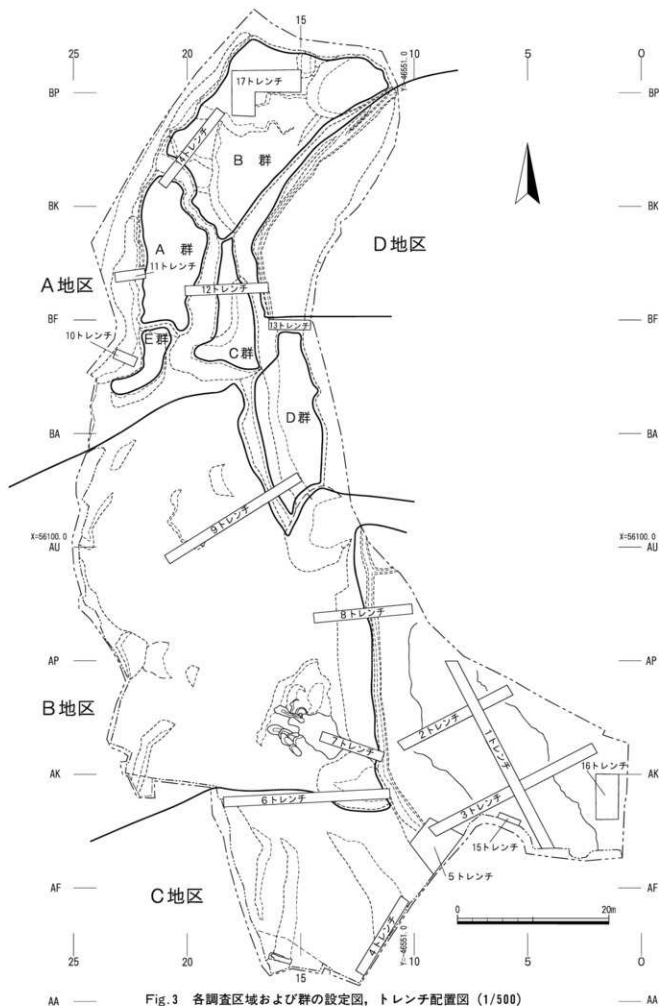


Fig.3 各調査区域および群の設定図, トレンチ配置図 (1/500)

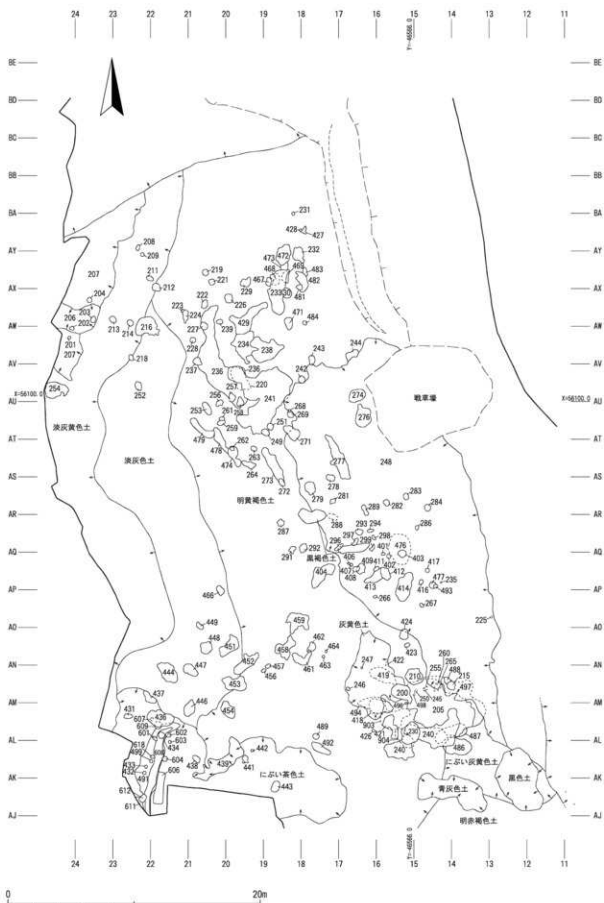


Fig.5 B地区略测图(1/300)

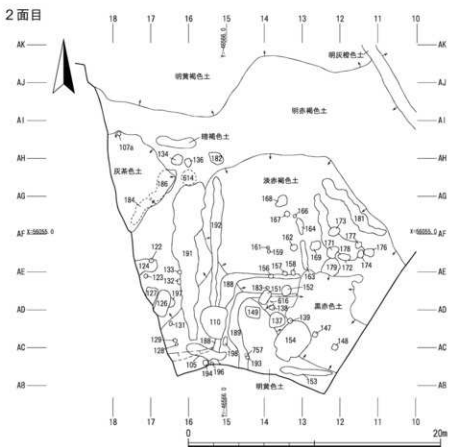
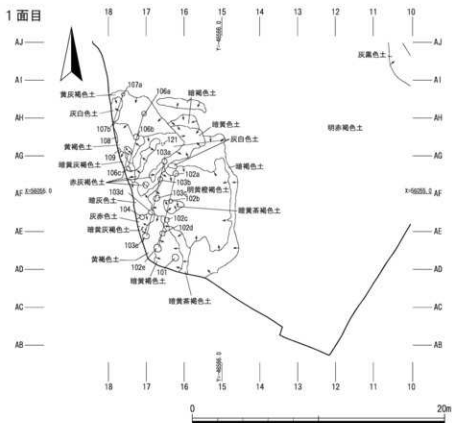


Fig.6 C地区西半1面・2面目略测图 (1/300)

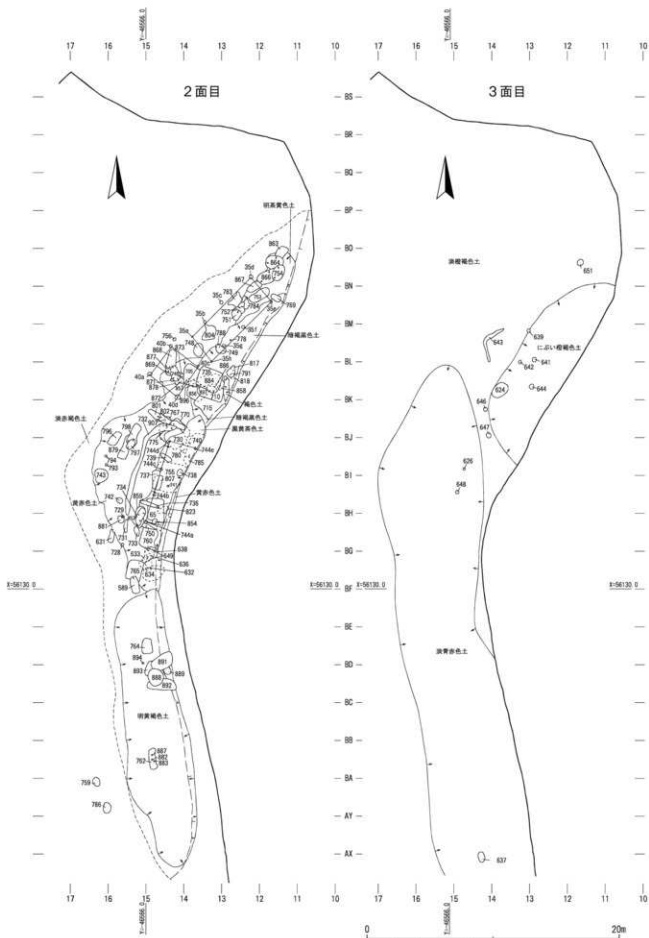


Fig.8 D地区2面・3面目略测图(1/300)

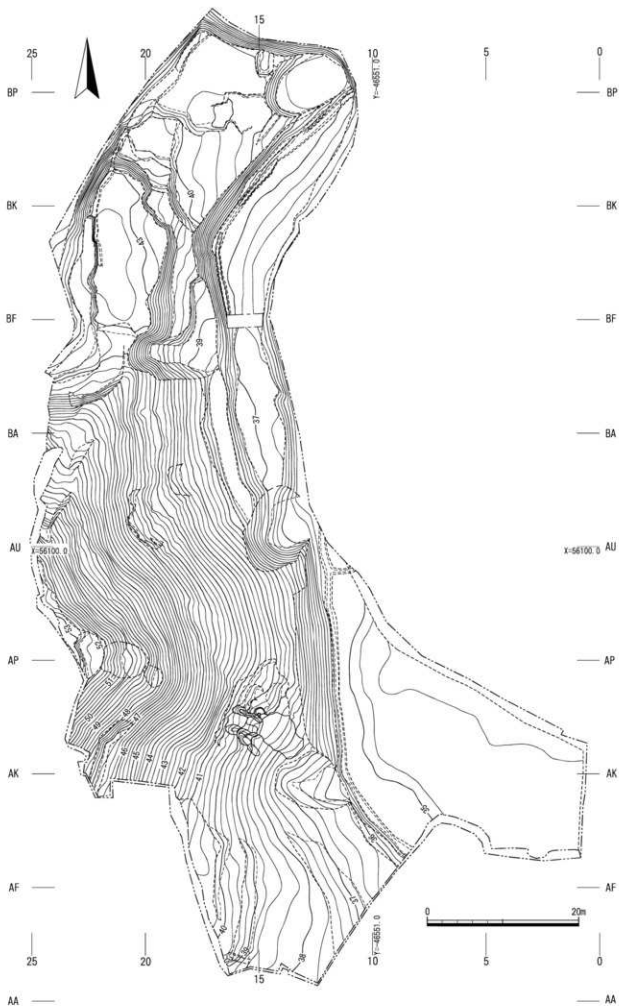


Fig. 9 地形測量圖 (1/500)

2. 各地区の基本土層

日焼遺跡第7次調査区では、花崗岩の岩盤層を基盤としてその上に花崗岩の風化土壌が堆積していた。調査区のはほぼ中央から西側に展開する丘陵部（A・B地区およびC地区西半）では、主にこの花崗岩風化土壌面にて遺構を検出した。

また、丘陵裾部には、丘陵上半部から供給された土壌が堆積しており、特にD地区では、比較的厚みのある包含層を形成していた。また、C地区東半には河川起源の土が堆積している。以下、各地区ごとに土層について述べる。なお、土色名は1/100略測図記載の土色名である。

1) A地区の土層

A地区は、A・C・E群など、主に花崗岩風化土壌面に遺構が形成されていた。しかし、B群の北半では花崗岩風化土の上面に、他区では見られない八女粘土層・鳥栖ローム層に比定される粘質土壌が堆積していた。また、丘陵裾部が延びるD群の西側では明黄褐色土が堆積しており、そこが遺構面となっている。それより下位の層は地山となり遺構・遺物は認められない。包含層は、近世以降の墳墓が形成されている面の縁辺部にわずかに残る程度である。

2) B地区の土層

B地区はその大半が丘陵の斜面に位置している。丘陵頂部付近は傾斜が緩やかであり、淡灰黄色土が部分的に堆積していた。中腹では急傾斜をなしているためか遺物包含層は欠如し、部分的に残存するもので、地形の窪みに溜まった土壌に遺物が混在する程度であった。

遺構は花崗岩の風化土あるいはその二次堆積層において確認した。丘陵裾部は比較的緩斜面をなしており、明黄褐色土が堆積しているが、一部丘陵裾部を削って現代の排水路が廻っており、そのような箇所では花崗岩の岩盤が露出した状況となっていた。

丘頂部付近に堆積する淡灰黄色土と丘陵裾部付近に堆積している明黄褐色土はいずれも包含層であり、

12トレンチ土層 (A地区)

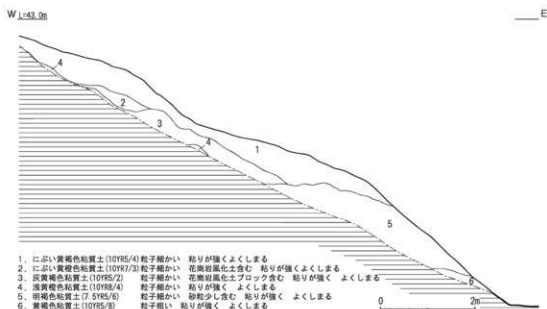


Fig.10 各地区の基本土層 1 (1/80)

さらにB地区の遺構面となっている。

3) C地区の土層

C地区は、丘陵が西から東へ緩やかに傾斜している。丘陵裾部では現代の排水路設置のために削られた、高さ1.5m程の段差を経てC地区の東側へと続く地形であった。

花崗岩風化土壌の二次堆積層上面が遺構検出面であるが、C地区最西端ではB地区側から供給された土壌も見られ、互層となって堆積している。

C地区の東側は、近世の水田面除去後に、暗青灰褐色土・明白灰色砂の8c代の遺物を中心とした包含層が見られる。その層を除去すると、旧河川(7SD115)が検出され、また、旧河川の東西には包含層が見られる。

7SD115の東側は赤褐色土で縄文時代後・晩期～弥生時代早期に該当する包含層が確認された。また、西側は上層から淡灰黄色土・赤灰色土・明灰橙色土が堆積している。淡灰黄色土は8cの遺物を中心とした縄文時代から近代までの遺物を含む包含層である。

赤灰色土は7SD115の遺構面に相当し遺物を含まない。河川内埋土については7SD115で詳述したい。

4) D地区の土層

D地区では、花崗岩風化土の上面に丘陵上から供給された土壌が厚く堆積しており、遺物包含層を形成している。

遺構は、表土を除去した面に近世の遺構検出面が見られ、さらにその下位で2面の包含層を確認した。

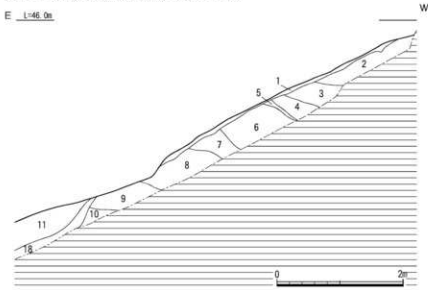
1面目は、赤黒色土・淡茶色土・褐褐色土・褐黒色土を検出面とする近世の遺構が確認された。

2面目は、淡赤色土・明茶黄色土・黄赤色土・暗褐黒色土・黒黄茶色土を検出面とする8c～12c代の遺構が確認された。

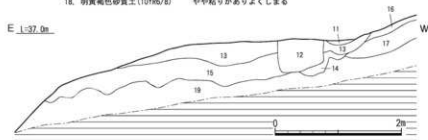
3面目は、淡赤褐色土(地山)・淡青赤色土(地山)・にぶい橙褐色土等を検出面とする7c後半代の遺構が確認された。

(文責 平島義孝・黒木正行
宇田貝将・島内浩輔)

9トレンチ斜面部土層(B地区)・平坦部土層(A地区D群)



- | | | |
|-------------------------|-------------------|-------------------|
| 1. にぶい黄褐色粘質土(10YR7/3) | 細砂 | しまりはない |
| 2. 浅黄褐色粘質土(10YR8/4) | 細砂 | 黒色粒子多く含む粗い花崗岩風化土 |
| 3. 反白色シルト(5YR8/1) | 細砂 | 淡赤色粒子多く含む |
| 4. 暗褐色粘質土(7.5YR3/3) | 細砂 | 淡赤色粒子多く含む粗い花崗岩風化土 |
| 5. 反白色シルト(7.5YR2/1) | 細砂 | 淡赤色粒子多く含む |
| 6. 暗褐色粘質土(2.5YR7/6) | 細砂 | 淡赤色粒子多く含む粗い花崗岩風化土 |
| 7. 反白色シルト(2.5YR8/1) | 細砂 | 砂粒含む |
| 8. 淡赤褐色粘質土(2.5YR7/4) | 反白色シルトを含む粗い花崗岩風化土 | しまりはない |
| 9. 淡褐色粘質土(2.5YR5/3) | 暗褐色粘質土 | 反白色シルトを多く含む |
| 10. 反白色シルト(10YR8/1) | 細砂 | 淡赤褐色粘質土ブロック含む |
| 11. にぶい黄褐色粘質土(7.5YR7/4) | 細砂 | しまりはない |
| 12. 明黄褐色粘質土(10YR6/8) | 細砂 | やや粘りがありよくなる |



- | | | |
|-------------------------|------|-------------|
| 11. 浅黄褐色粘質土(10YR8/4) | 細砂 | 粘りはなくしまりもない |
| 12. にぶい黄褐色粘質土(10YR7/3) | 粘砂含む | やや粘りよくなる |
| 13. にぶい黄褐色粘質土(10YR7/3) | 粘砂含む | 粗い粒子多く含む |
| 14. 黄褐色粘質土(10YR5/3) | 粘砂含む | 粘りはないがよくなる |
| 15. 明黄褐色粘質土(10YR7/6) | 細砂 | 反白色シルト |
| 16. にぶい黄褐色粘質土(10YR7/4) | 細砂 | 粘りはなくしまりもない |
| 17. にぶい黄褐色粘質土(7.5YR7/4) | 細砂 | 粘りはないがよくなる |
| 19. 褐色粘質土(10YR4/4) | 細砂 | 粘りがありよくなる |

Fig.11 各地区の基本土層 2 (1/60)

3. 各遺構の調査

1) 近世以降の墳墓

近世以降の墳墓は調査区の北側に位置しており、丘陵の一部を掘削して平坦に段造成を行っている。丘陵の中腹から裾部にかけて、A・E群にあたる1段、B・C群にあたる1段およびD群にあたる1段の、合計3段の段造成が見られる。また、B群からC群にかけては緩やかな下り勾配となっており、小規模な段造成が風雨等により浸食されたと考えられる。

B群北西部に見られる現代墓の形成やD群北側における耕作等により、後世の削平を部分的に受けているものの、近世墓群は、盛土が約60基ほど残存し、墓によっては石製墓標が倒壊せずに残っているなど比較的残りのよい状態であった。

なお、調査終了後に、検出された近世墓の形態および用語等を整理して分類しているため、本文中にて使用する用語については註1 (p.167) を参照されたい。

最終的にはTab.1に掲載している基数を確認することができた。

また、調査の手順上、上部構造である盛土と下部構造である墓壇の調査軸が異なるものもある。図版の表記凡例についても註2 (p.168) を参照されたい。

なお、各遺構の法量については、Tab.3~5 (pp.169~171) に一括して表記している。

また、人骨に関する形質学的分析については、「IV 太宰府市日焼遺跡出土の近世人骨」(p.389) を参照していただきたい。

①A群

A群は調査区北西側に位置する丘陵上にある近世墓群である。この丘陵上は平坦面が見られ、近世墓造成に伴う整地が行われた可能性がある。本調査区内の各近世墓群は調査開始前、表土とする黒褐色土(植物腐植土壌)に覆われていた。

盛土上の黒褐色土は盛土表面土壌が植物の植生の繰り返しにより植物腐植土壌化したものであり、盛土の一部の可能性がある。したがって、A群では黒褐色土(表土)も含めて調査し、記録を作成した。

7ST001

遺構 (Fig.15, Pl.3-5, 6)

A群の最北西端、BK21区他に位置する盛土を持つ近世墓である。墓壇は7ST581の墓壇を切る。

盛土の周囲を廻る溝状遺構も検出された。

盛土は上端が隅丸方形を呈しており、その上端の稜線から溝の下端までは変化点はなくなだらかに移行している。

このことから、盛土と溝状遺構は同時に存在していたと考えられる。この溝が墓地の区画を示すものなのか、あるいは盛土の造成・修復のために周囲の土を掘削した跡を示すものなのか、性格は不明である。

盛土の墳頂部では石製墓標が見られ、石製墓標設置に伴う掘り方(盛土土層1~3層)が確認できた。したがって、石製墓標は盛土造成後に設置されたと考えられる。

墓壇は隅丸方形を呈する。

棺材は残存していないが、平面観察および土層断面の棺痕跡(墓壇土層3層)から長方形横棺だと考えられる。また、棺痕跡範囲内から人骨が出土した。

Tab.1 検出された近世以降の墳墓数

	A群	B群	C群	D群	E群	合計
盛土	28	12	10	10	6	66
墓壇	66	40	25	24	6	161
盛土のみ		1				1
墳墓総数	66	41	25	24	6	162

※盛土のみの7ST301も1基と数えた。

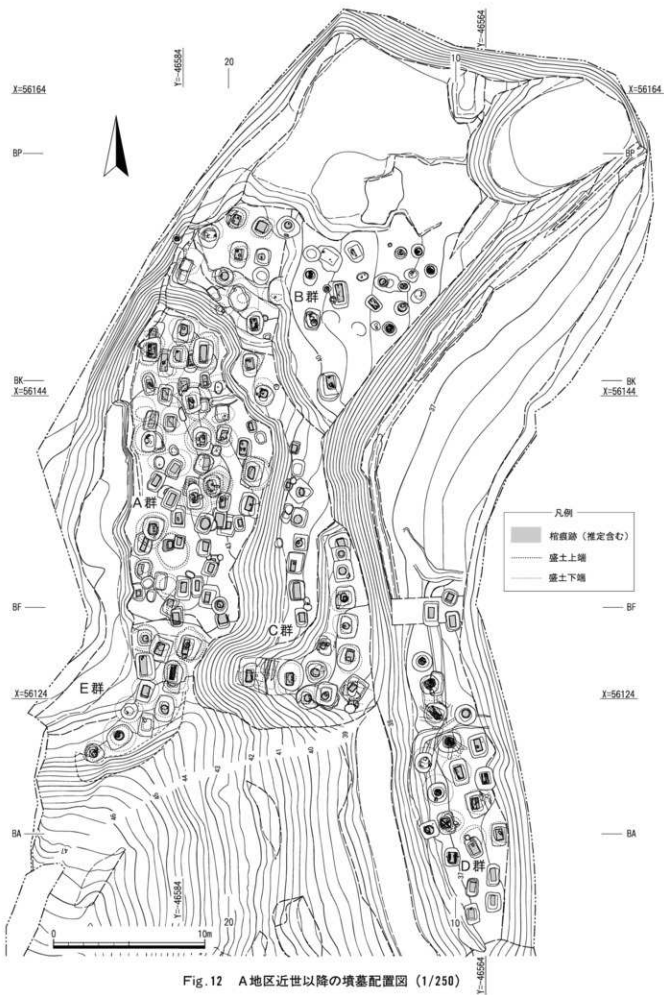


Fig. 12 A地区近世以降の墳墓配置図 (1/250)

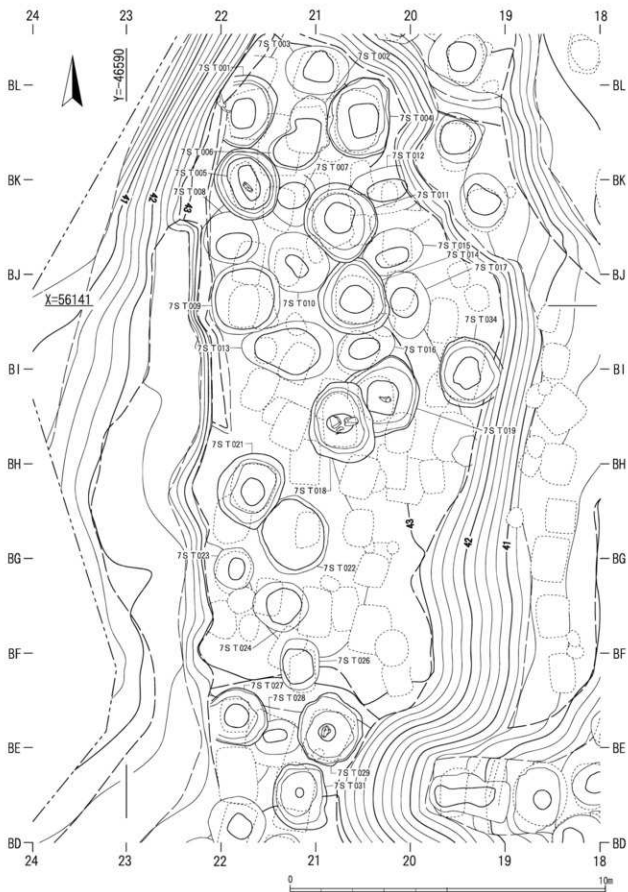


Fig. 13 A地区A群近世墓配置図 盛土および墓壕 (1/120)

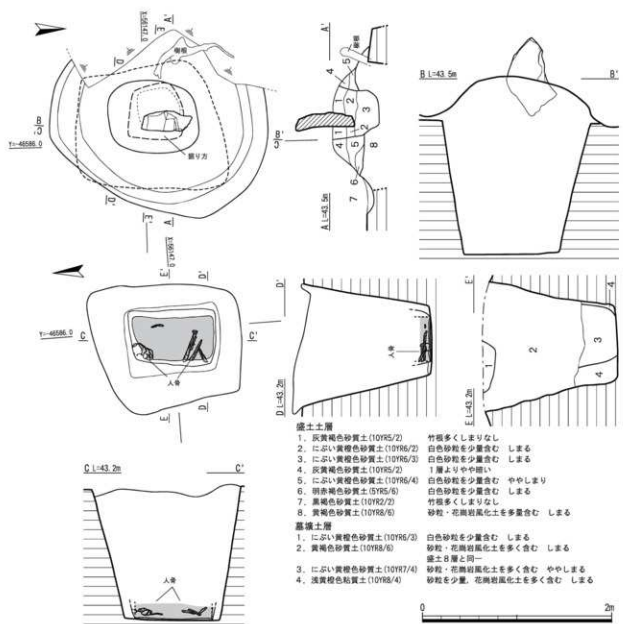


Fig.15 75T001平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig.16, Pl.25-116・1, 38-172)

石製品

石製墓標 (1) 花崗岩の自然石を用い成形している。縦断面はわずかに窪んでいる。墓碑銘はない。

75T001褐灰色土

国産陶器

椀 (1) 大ぶりの京焼風陶器である。高台は高く斜め上方に胴部が延びる。全面に施釉し、高台置付は釉を掻き取る。文様や銘款は見られない。肥前産であると考えられる。17~18c頃と考えられる。

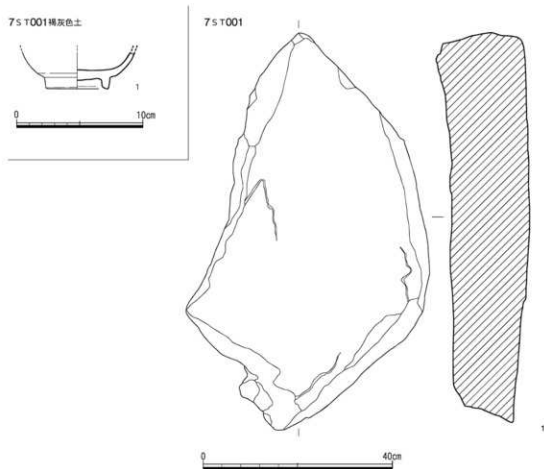


Fig.16 7ST001出土遺物実測図 (1/3, 1/8)

7ST002

遺構 (Fig.17)

A群北側, BK20区他に位置する盛土を持つ近世墓である。

盛土は7ST004の溝状遺構に切られ, 墓壇は7ST394・396の墓壇を切る。また, 7ST006との先後関係については土質の相違が不明確であり, 平面上でその切り合いを確認することは困難であった。しかし, 最終的に7ST006を切っていることが土層断面から判明した。

墓壇は隅丸方形を呈し, 棺痕跡内(墓壇土層2層)から頭蓋骨が出土した。頭位は北向きであった。

また, 棺材は残存していないが, 頭蓋骨の出土状況および棺床痕から長方形横棺と考えられる。

7ST003

遺構 (Fig.18)

A群北側, BK20区他に位置する盛土を持つ近世墓である。盛土は, 墳頂ではややいびつな方形を呈するが, 下端では楕円形を呈している。墓壇は不整な方形を呈する。

盛土を除去し墓壇を検出した際に, 方形を呈するピットが認められた(墓壇土層1層)。その性格を指し示す遺物の出土等は見られないものの, 墓壇上に掘削されていることから墓標あるいは供養等の痕跡と考えられる。

墓壇の土層断面において墓標設置の痕跡が認められ, 盛土に墓標痕跡が認められないことから, 当初墓標が存在していたと思われるものの, その後, 改葬などの要因によって盛土が再構築されたため, 当初の墓標痕跡が欠失している可能性が考えられる。

棺材は残存していないが, 平面および土層観察(墓壇土層5層)から長方形横棺だと考えられる。

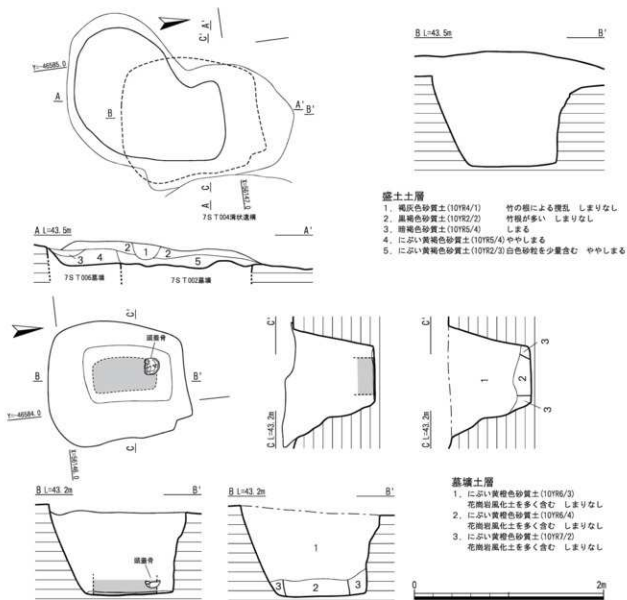


Fig.17 7ST002平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST004

遺構 (Fig.19)

A群北側、BK20区他に位置する近世墓で、盛土周囲で検出された溝状遺構は7ST002の盛土を、墓塚は、7ST394の墓塚を切る。盛土の上端が隅丸方形で、下端では楕円形となる。また、盛土の土層中には、周囲では見られない褐色土（盛土土層4層）が輪状に廻って堆積している。周辺に見られない土壌であることから、この土壌は客土の可能性が高いと思われるが、機能、目的は不明である。

盛土周囲で検出された溝状遺構の性格は、区画溝であるのか、盛土構築時の土壌掘削の痕跡なのか不明である。墓塚は隅丸長方形を呈する。

棺材の出土は見られないものの、平面観察および土層断面の棺痕跡（墓室土層5・6層）から長方形の横棺だと考えられる。また、棺材・遺体が土壌化したと思われる痕跡（墓室土層5層）、棺の底板が土壌化したと考えられる痕跡（墓室土層6層）も確認できた。

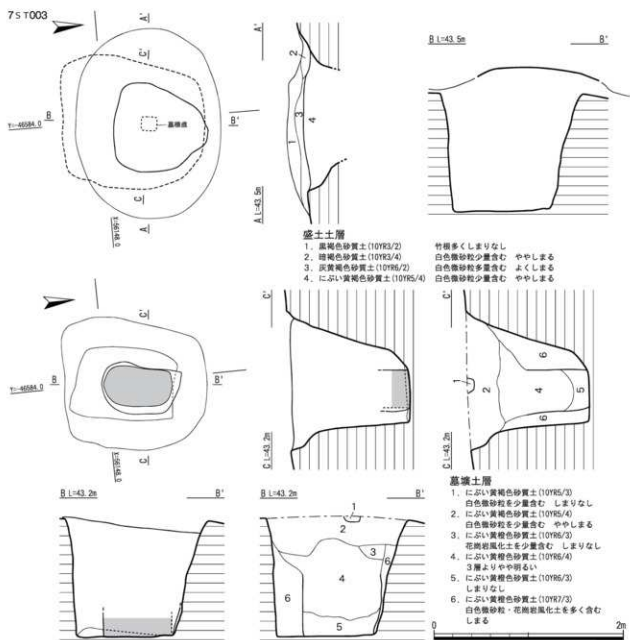


Fig. 18 7ST003平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig. 20, Pl. 26-120・1・2)

7ST004暗灰茶色土

金属製品

留金 (1・2) 鉄製の留金である。1は、断面正方形で一辺0.2cm、長さは $0.7 + \alpha$ cmを測る。全体に椀材の木質が残存しており、木目は横方向を向く。大きさから飾り金具の留金であると考える。

2は、正方形の断面形は0.2cm、長さは0.7cm、上部の球形部分は最大径0.5cmを測る。大きさから飾り金具の留金であると考える。

7ST005

遺構 (Fig. 21)

A群北側、BJ21区に位置する、楕円形を呈する盛土を持つ近世墓である。

周囲に溝状の遺構を持つ。溝状遺構は、7ST007・008の盛土を切るが、7ST001と同様に溝状遺構の性格

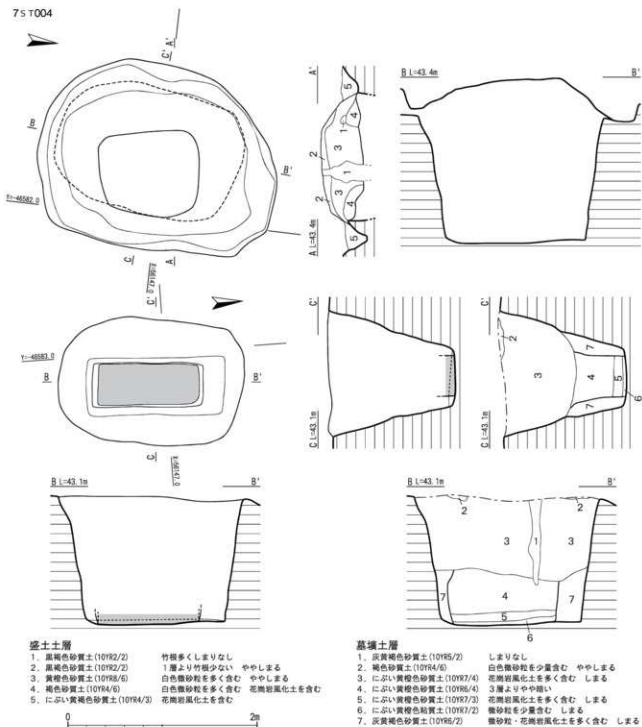


Fig.19 75T004平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

等は不明である。

土層断面を観察すると、表表面に本来存在していた盛土状の小地形を利用して墓壇が構築されていることが分かる。

墓壇は隅丸長方形を呈する。棺材は残存していなかったが、床面上では棺床痕が残存していた。その棺床痕から長方形横棺であったと考えられる。

また、墓壇内の埋土中から不整形だがほぼ長方形を呈する石が出土した。この石は棺蓋上に意図的に載せていた可能性が考えられる。

75T004陪灰帯土

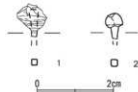


Fig.20 75T004出土遺物
実測図 (1/1)

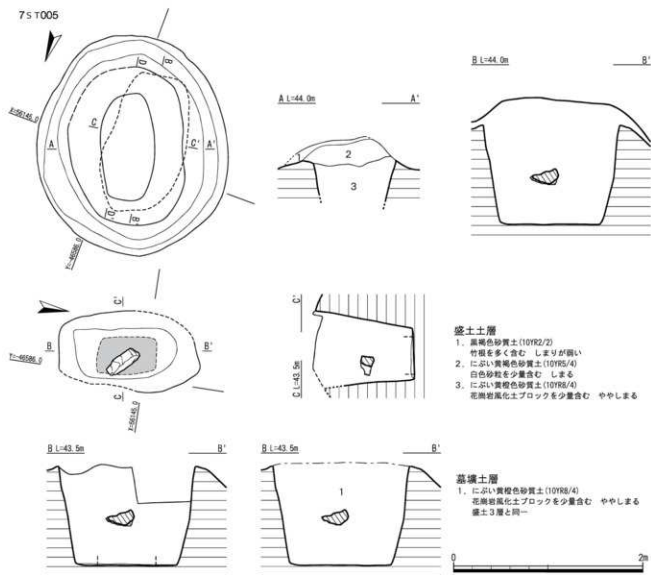


Fig.21 7ST005平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST006

遺構 (Fig.23)

A群北側、BK21区に位置する、盛土を持つ近世墓である。7ST005に切られており、また、平面上では確認できなかったものの、掘り下げ段階で7ST002に切られていることが確認できた。

盛土は不整形を呈しており、墓壇との平面位置関係は、ややずれて位置していた。また、墓壇は長方形を呈する。

土層観察において墓標あるいは供養等の方形ピットが検出できた。しかし、平面上は盛土からやや離れた位置で検出されている。これらのことから、この周囲の近世墓が造成された際に、盛土が再構築され、それと同時に墓標も除去された可能性が考えられる。

棺材そのものの出土は見られないが、平面観察および土層観察（墓壇土層5層）から長方形横棺であったと考えられる。



Fig.22 7ST006出土遺物実測図 (1/3)

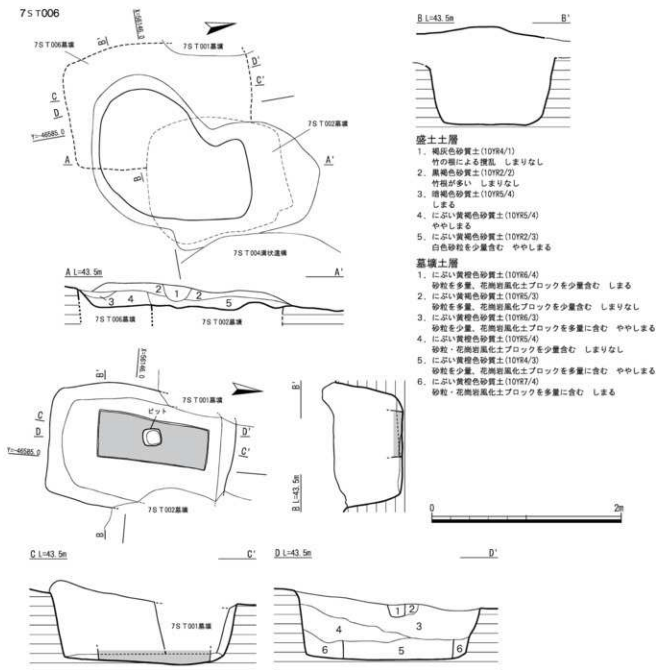


Fig.23 75T006平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig.22, Pl.25-116・2)

75T006黄褐色土

肥前系染付

皿(1) 高台径は小さく、低い。釉薬は透明釉を全面施釉している。高台畳付に砂目が見られる。見込みに絵付を施し、口縁部に圏線を施しその内部に雑な文様を施文している。外面に文様は見られない。

75T007

遺構 (Fig.24, Pl.3-7, 8)

A群北側, BJ21区他に位置する, 盛土を持つ近世墓である。盛土は75T005・011の溝状遺構に, また, 006の盛土に切られる。

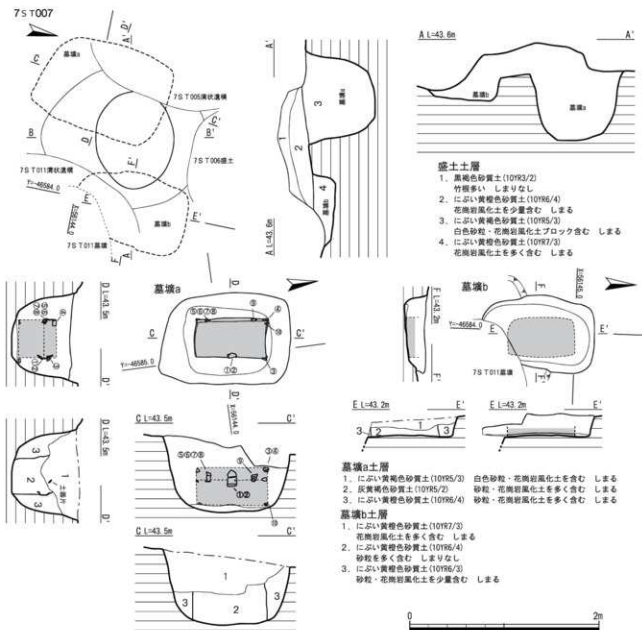


Fig. 24 7ST007平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

盛土は楕円形を呈するが、墓壇a・bの中間に位置しており、両者の切り合いが認められないことから、どちらの墓壇に帰属するか不明である。

墓壇aは長方形を呈する。棺材は残存していないが、棺に使用されたと思われる鉄製飾り金具等が出土した。この飾り金具はほぼ原位置を保っていると考えられ、その出土状況から棺の法量が推定できた。長軸0.76m、短軸0.42m、高さ0.40mであったものと思われる。

角に飾り金具、正面に錠前、蓋と箱の境目に蝶番を使用したと思われる、長持形の棺が想定される。

墓壇bは隅丸長方形を呈する。棺材は残存していないが、棺床痕および土層断面の棺痕跡(墓壇土層2層)から長方形横棺だと考えられる。

遺物 (Fig. 25, Pl. 26-121)

金属製品

錠前(1) 長持形棺の箱部正面に取り付けられた鉄製の錠前である。長さ10.4+ α cm、幅9.8cm、厚さ0.1cm前後を測る。表面には棺材の木質が付着しており、木目は正位置に対して横方向である。錠前の構造は銹化のため不明である。

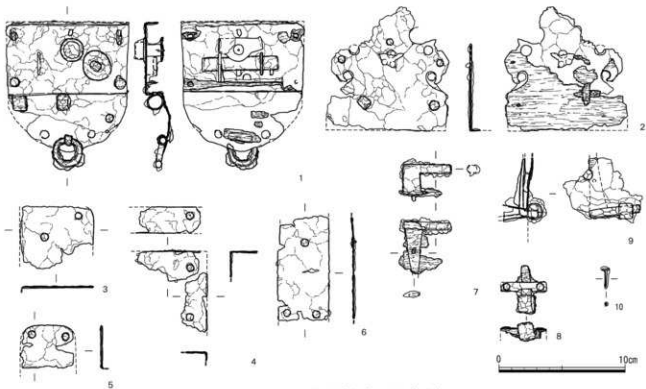


Fig. 25 7ST007a出土遺物実測図 (1/3)

飾り金具(2～6) 鉄製の飾り金具である。2は長持形棺の蓋部正面に取り付けられた飾り金具である。錠前に相対する位置に取り付けられ、下部では錠前に関連した部品が存在していたと考えられる。長さ $9.9+\alpha$ cm、幅 $9.8+\alpha$ cm、厚さ0.1cm前後を測る。3・4は長持形棺の蓋部角に取り付けられた飾り金具である。角部形状に合うように鉄板状製品を折り曲げている。また、4は蓋部上面側にも折り曲げている。3は長さ $4.9+\alpha$ cm、幅5.8cm、厚さ0.5cm、4は長さ $6.3+\alpha$ cm、幅 $6.1+\alpha$ cm、厚さ0.5cmを測る。5・6は7に付帯する可能性のある飾り金具である。5は長さ3.4cm、幅 $3.3+\alpha$ cm、厚さ0.1cm前後、6は長さ8.4+ α cm、幅4.1cm、厚さ0.5cmを測る。

蝶番(7～9) 鉄製の蝶番である。7は蝶番の軸部、8は蝶番の管状部、9は蝶番軸部が蝶番管状部に差し込まれた状態である。出土状況から軸部は棺の蓋部に、管状部は棺の箱部に取り付けられたと考えられる。また、軸部の棺材に打ち込む部位の中央部には棺材からの離脱防止のため、釘を打ち込んだ痕跡がみられる。軸部、管状部には飾り金具が付帯する。軸部の長さは3.8cm前後、断面は1辺0.7cm前後、軸部が棺材から突出する長さ2.2cm、棺材に打ち込まれた部位の長さ3.4cm前後、厚さ0.2cmを測る。管状部の直径1.4cm、管状部の厚さ0.2cm、棺に打ち込まれた部位の長さは2.3cmを測る。

留金(10) 鉄製の留金である。長さ1.5cm、断面は1辺0.1cmを測る。飾り金具はこの規格の留金で取り付けられていたと思われる。

7ST008

遺構 (Fig. 26)

A群西側、BJ21区他に位置する、盛土を持つ近世墓である。

盛土は楕円形を呈し、7ST005・009の溝状遺構に切られている。

墓壇は長方形を呈しており、棺材は確認できなかったが、棺床痕および土層の観察(墓壇土層2層)から、長方形横棺と考えられる。

墓壇は盛土とはややずれた位置に構築されている。改葬あるいはその他の要因等により盛土を再構築する際に、墓の位置を示す墓標等が欠失し、墓壇の位置が把握できていなかったためにずれたものと考えられる。

75T008

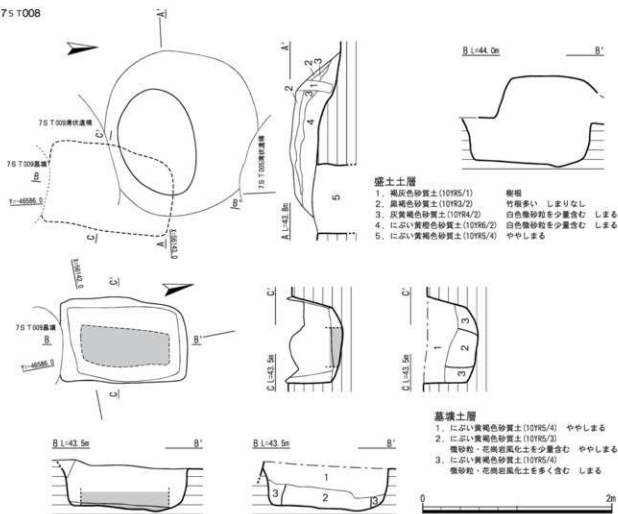


Fig.26 75T008平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig.27, Pl.25-116・3)

75T008黒褐色土

国産磁器

菊皿 (1) 菊花状に内面型打し, 高台は貼り付けている。

白磁質で, 釉薬は胴部下半まで施釉され, 高台は露胎である。文様は見られない。肥前産と考えられる。

75T009**遺構 (Fig.28, Pl.3-9,10)**

A群北側, BI21区他に位置する, 盛土を持つ近世墓である。盛土は7ST364を切る。

盛土は円形を呈する。その周囲には溝状遺構が検出され, 75T008・010・013の盛土を切る。この遺構が区画を示す溝か, あるいは盛土構築の際の土壌掘削の痕跡なのかは確定要素に欠ける。

盛土の東側では, 石製墓標が倒れた状態で確認された。盛土の墳頂部が西から東にかけて斜めに崩れており, その状況から, 石製墓標は盛土より崩れ落ちた可能性も考えられる。

墓壇は隅丸方形を呈しており, 棺材は見られないが, 棺痕跡内 (墓壇土層4層) から人骨が出土した。膝関節と思われる部位の骨の直下からは銭貨が6枚出土した。

棺は, 人骨の出土状況および土層観察 (墓壇土層4層) から長方形横棺であったと考えられる。

75T008黒褐色土



0 10cm

Fig.27 75T008出土遺物
実測図 (1/3)

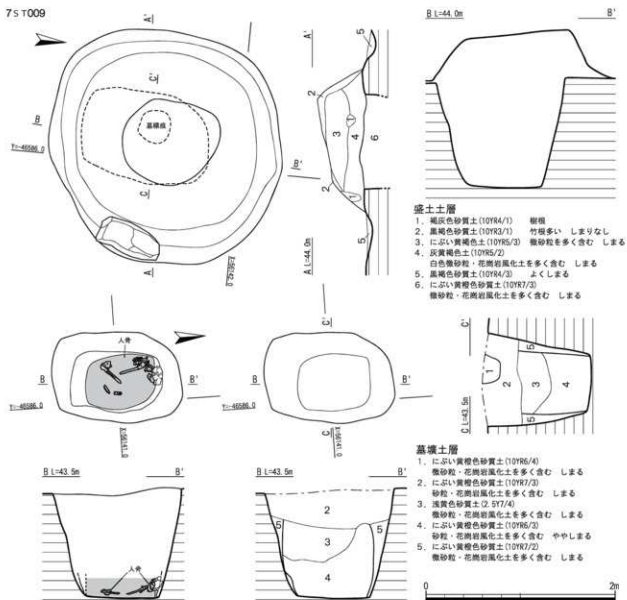


Fig.28 7ST009平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

土層断面では付帯施設の設置痕跡(墓壇土層1層)が確認できたが、盛土の土層断面では見られなかった。したがって、盛土造成前に付帯施設が設置されていたが、盛土造成の際に付帯施設を除去した可能性がある。

遺物 (Fig.29, Pl.34-143・144, 40-188)

7ST009暗灰茶色土

銭貨

銅銭 (1・2) 棺内から新寛永1枚, 古寛永3枚, 不明2枚が出土した。1は新寛永で, 2は古寛永である。

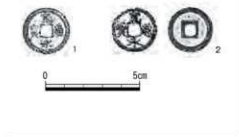
表土

石製品

石製墓標 (1) 7ST009東側で出土した花崗岩製墓標である。正面は平坦に調整し, 墓碑銘があり, 下部に蓮華文が陰刻されている。

「(右) 享保五年」

7S T009 曜灰青色土



表土

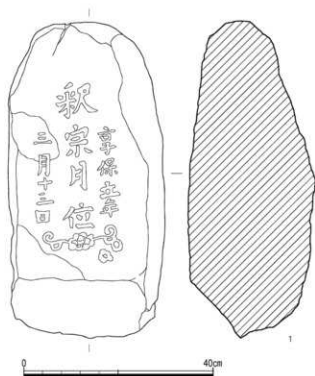


Fig.29 7ST009・表土出土遺物実測図 (1/2, 1/8)

〔中〕 親宗月位

〔左〕 三月十三日

7ST010

遺構 (Fig.30)

A群北側, BI20区他に位置する盛土を持つ近世墓である。

盛土は楕円形を呈しており, 7ST009・011の溝状遺構に切られる。

墓壇は隅丸長方形を呈する。

棺材は見られず, 土層断面で棺痕跡は確認できなかったが, 床面上では棺床痕が残存していた。その形状から長方形棺であったと考えられる。

7ST010関連遺構

7SK058

遺構 (Fig.30)

BJ20区他に位置し, 7ST010の盛土除去後に検出された土坑である。平面形は楕円形を呈する。

7ST010に伴う遺構の可能性も検討したが, 両者の関係を積極的に言及できる痕跡は確認できなかった。

7ST011

遺構 (Fig.32)

A群の北側, BJ20区他に位置する盛土を持つ近世墓であり, 盛土周囲で検出された溝状遺構は, 7ST007・010・012・014の盛土を切り, 墓壇は7ST327の墓壇を切る。

盛土は円形を呈し, 墳頂部には扁平の石が置かれていた。このような石は, 地域の葬送儀礼に伴う民俗事例³⁾では, 棺の蓋の釘打ちに使用された後に盛土の上に廃棄するという習俗が見られ, そのような用法の石 (野面石) である可能性がある。盛土周囲の溝状遺構の性格は, 区画溝であるのか, 盛土構築時の土壌掘削の痕跡であるのか不明である。

7S T010, 7SK058

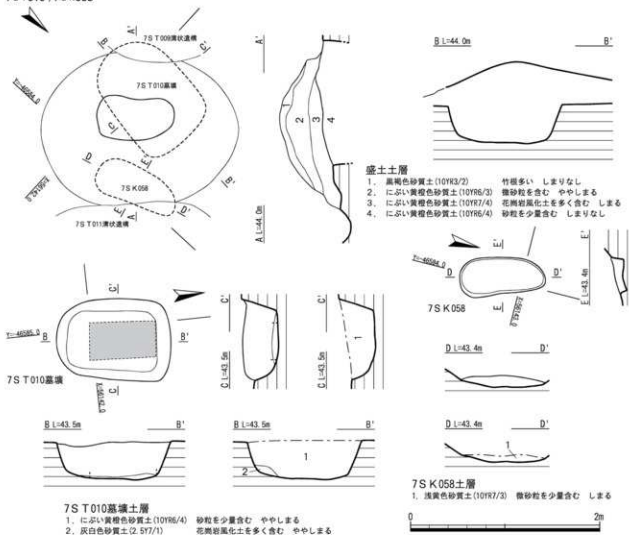


Fig. 30 7ST010, 7SK058平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

墓壇は隅丸方形を呈する。

棺材は見られないが、平面観察および土層観察（墓壇土層6層）から長方形横棺だと考えられる。

土層断面では墓標の設置された痕跡（墓壇土層1・2層）が確認でき、墓標の安定を図るため比較的深い位置まで達していた。また、墓標痕跡に対する掘り方は確認されなかったので、墓標を立てた状態で墓壇を埋めたものと考えられる。

しかし、盛土の土層断面では墓標痕跡が見られなかったため、盛土は改葬などに伴い、改築された可能性がある。

遺物 (Fig. 31, Pl. 38-173)

石製品

石製墓標(1) 花崗岩の自然石を用い成形している。正背面は自然面を残す。墓碑銘はない。

7S T011

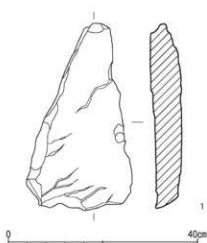


Fig. 31 7ST011出土遺物
実測図 (1/8)

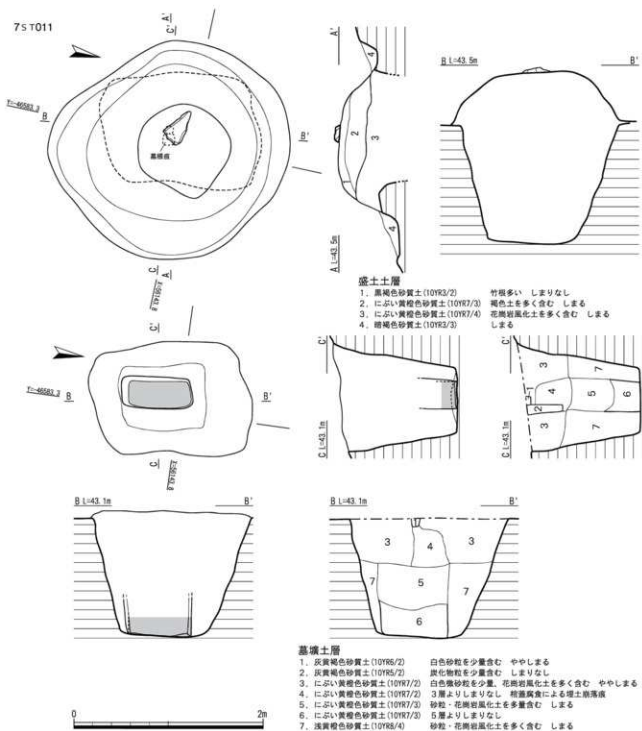


Fig.32 7ST011平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST012

遺構 (Fig.33)

A群北側, BJ19区他に位置する, 盛土を持つ近世墓である。盛土は楕円形を呈し, 7ST011の溝状遺構および7SD312に切られる。また, 東側の一部が削平を受けていた。

墓壇aは長方形を呈する。

棺材は残存しておらず, 土層断面でも棺痕跡は確認できなかったが, 床面上では棺床痕が残存しており, 棺床痕の形状から長方形横棺であったと考えられる。

土層断面では, 墓標痕跡 (墓壇土層 1・2層) が確認できた。その痕跡には掘り方があるため, 埋葬後に墓標を設置したと考えられる。墓標痕跡は棺床痕の直上まで達していた。したがって, 埋葬時期と墓標

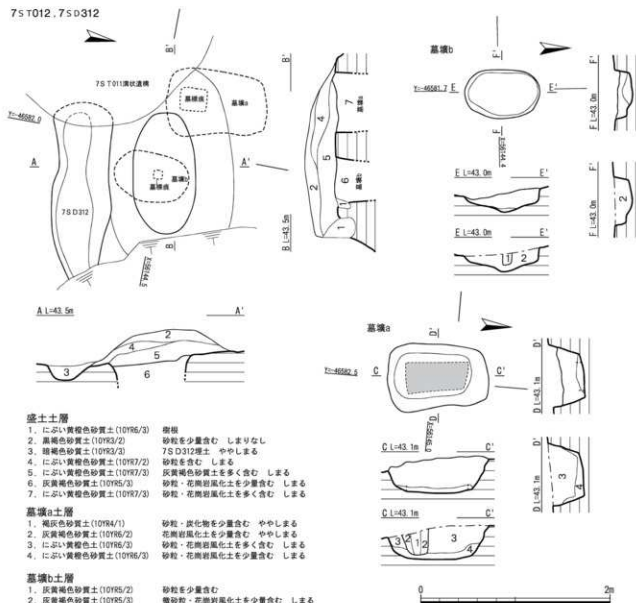


Fig. 33 7ST012, 7SD312平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

設置時期としては棺材が腐植する程度の時間差があったものと考えられる。

墓壇bは楕円形を呈する。

墓壇の土層断面では墓標痕(1層)が確認できたが、盛土の土層断面では墓標痕を確認できなかった。改葬等により、盛土が再構築された可能性がある。

棺材および棺痕跡等は認識できなかったが、盛土に対して中央部に位置するため、埋葬施設であると考えられる。ただし、規模が小さいことから、小児・乳児が埋葬されたものと考えられる。

墓壇a・bは同じ盛土の下から検出されたが、両墓壇の関係については切り合いがないため不明である。

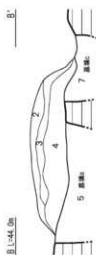
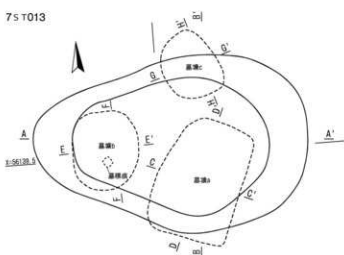
7ST012・015関連遺構 7SD312

遺構 (Fig. 33)

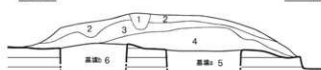
A群北側, BJ19区他に位置する溝状遺構である。7ST012・015を切る。

7ST012・015の間に位置し、西側は7ST011の溝状遺構と交差する。東側はA群とB群の境まで延びて

75T013

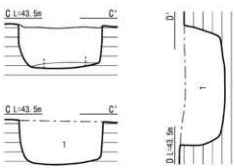
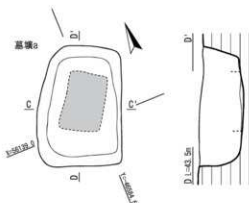


A L=44.0m



盛土土層

- | | |
|----------------------------|--------------|
| 1. 黒褐色砂質土(10YR3/1) | 竹垣多い しまりなし |
| 2. 黒褐色砂質土(10YR3/2) | 1よりやや明るい |
| 3. 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) | 微砂粒を多く含む しまる |
| 4. にぶい黄褐色砂質土(10YR6/3) | 砂粒を多く含む しまる |
| 5. にぶい黄褐色砂質土(10YR7/3) | 微砂粒を多く含む しまる |
| 6. にぶい黄褐色砂質土(10YR7/3) | 微砂粒を多く含む しまる |
| 7. 盛土b埋土 微砂粒・花崗岩風化土を含む しまる | |
| 8. 盛土c埋土 砂粒を少量含む しまりなし | |

墓壇a
1. にぶい黄褐色砂質土(10YR7/3) 微砂粒を多く含む しまる

0 2m

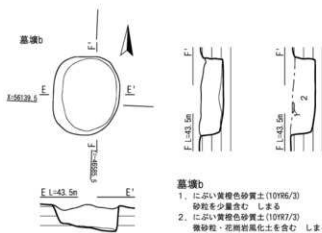
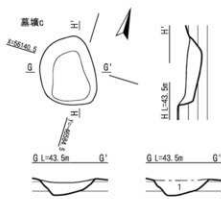
墓壇b
1. にぶい黄褐色砂質土(10YR6/3) 砂粒を少量含む しまる
2. にぶい黄褐色砂質土(10YR7/3) 微砂粒・花崗岩風化土を含む しまる墓壇c
1. にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 砂粒を少量含む しまりなし

Fig.34 75T013平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

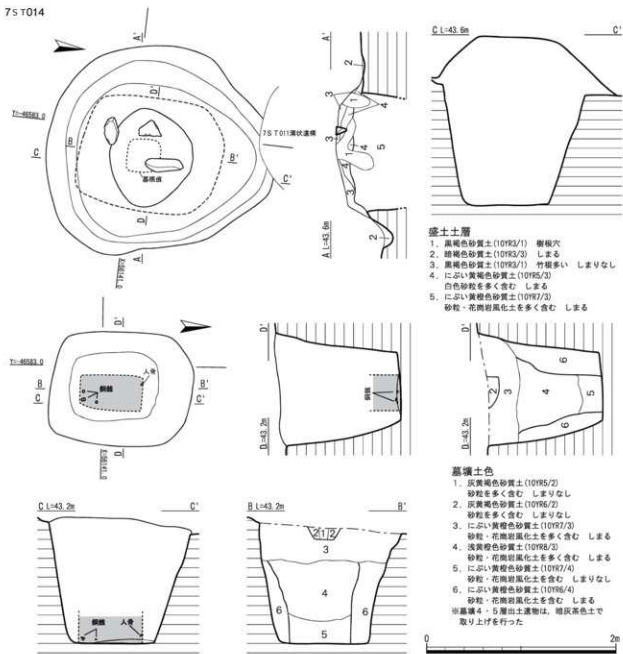


Fig.35 7ST014平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

おり、A・B群をつなぐ墓道の可能性も考えられる。

7ST013

遺構 (Fig.34)

A群中央部よりやや北側、BH20区他に位置する、盛土を持つ近世墓である。盛土は不整形を呈し、7ST009の溝状遺構に切られる。

墓壙aは長方形を呈する。

棺材は残存せず、土層断面でも棺痕跡は確認できなかったが、床面上では棺床痕が残存していた。その棺床痕から推定すると、長方形棺であったと考えられる。

墓壙bは楕円形を呈する。

土層断面では墓標痕（1層）が確認できたが、盛土の土層断面では墓標痕跡が見られないため、改葬等

に伴い盛土が再構築された可能性が考えられる。

棺痕跡は確認できなかったが、墓壇b上に盛土が確認することから、埋葬施設であると考えられる。規模が小さいことから、小児・乳児が埋葬されたものと考えられる。

墓壇cは楕円形を呈する。

墓壇a・b・cは同じ盛土の下から検出されたが、それぞれの墓壇相互の関係については切り合いがなく、不明である。

また、盛土が不整形であることから改葬等の影響があったものと考えられる。また、盛土の切り合いによる新旧関係の情報は得られなかった。

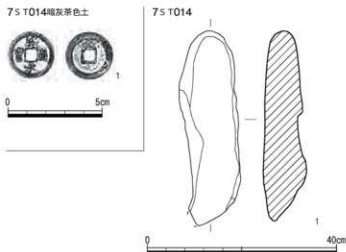


Fig. 36 7ST014出土遺物実測図 (1/2, 1/8)

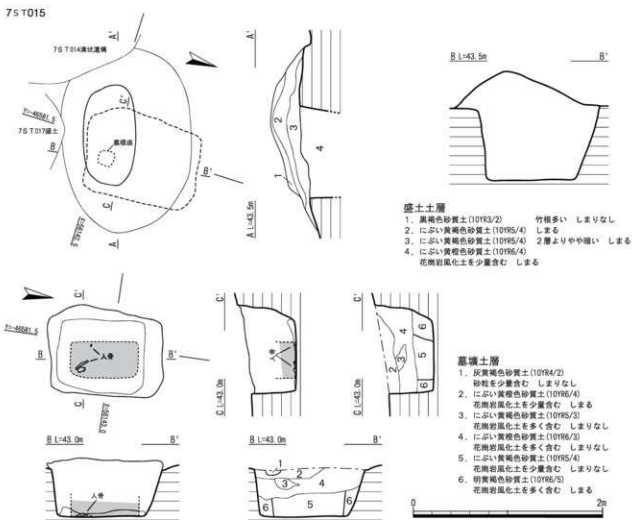


Fig. 37 7ST015平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST016

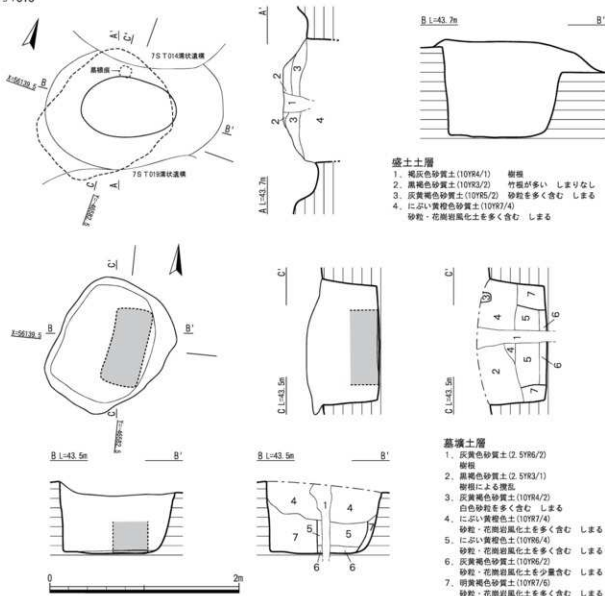


Fig.38 7ST016平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST014

遺構 (Fig.35)

A群中央部よりやや北側、BI20区他に位置する、盛土を持つ近世墓である。盛土周囲で検出された溝状遺構は、7ST015・016・017の盛土を切る。

盛土はやや不整な楕円形を呈する。

墳頂部には扁平の石が3個置かれていた。これらの石はいわゆる「野面石」や墓標の固定のための可能性が考えられる。

墓壇は隅丸方形を呈する。

棺材は見られないが、平面観察および土層断面の棺痕跡(墓壇土層5層)から長方形横棺だと考えられる。また、棺痕跡内の北側から人骨片、南側から銭貨が6枚出土した。

土層断面では墓標痕(墓壇土層1・2層)が確認できた。その痕跡には掘り方があるため、埋葬後に墓標を設置したと考えられる。しかし、

7ST016黒褐色土

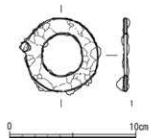


Fig.39 7ST016出土遺物実測図(1/3)

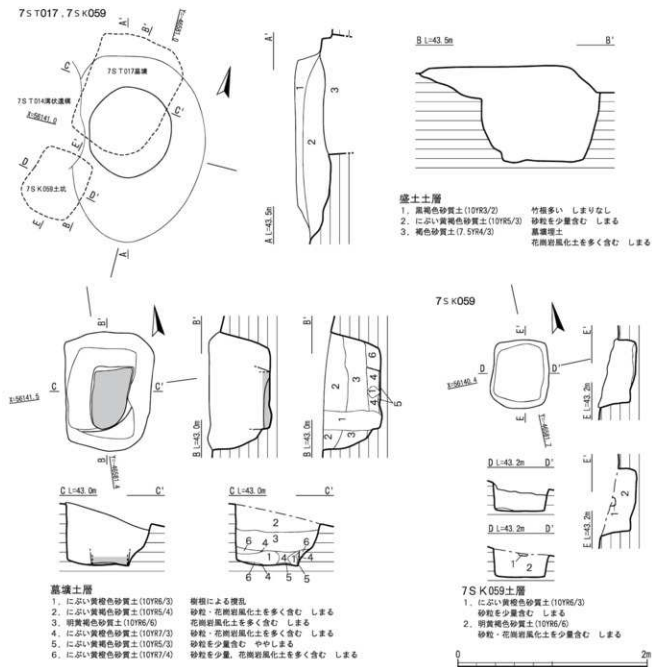


Fig. 40 7ST017, 7SK059平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

盛土の土層断面においては、木の根による攪乱のため墓標痕は確認できなかった。墓標については埋葬当初は存在していたものの、その後、改葬等に伴う盛土の改築、または樹木生育により、確認できなかった可能性がある。

遺物 (Fig. 36, Pl. 34-145, 38-174)

石製品

石製墓標 (1) 細長い花崗岩の自然石を用い成形している。体部上半が変色しており基部が2/3を占めている。墓碑銘はない。

7ST014暗灰茶色土

銭貨

銅銭 (1) 棺内から新寛永1枚、古寛永3枚、不明2枚が出土した。1は新寛永である。

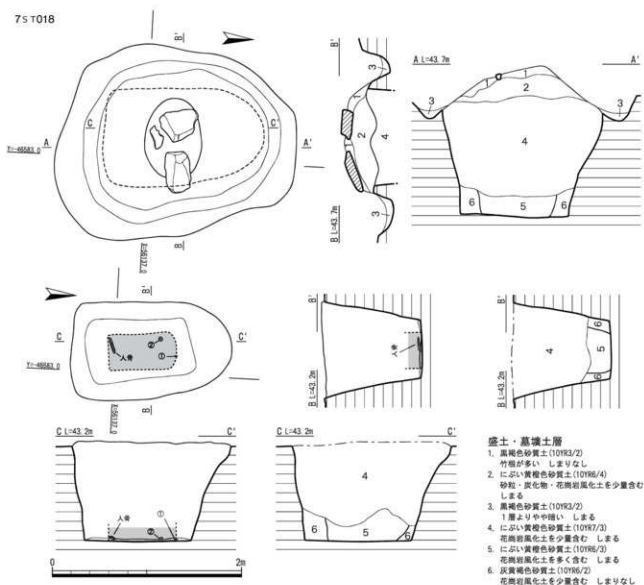


Fig. 41 75T018平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

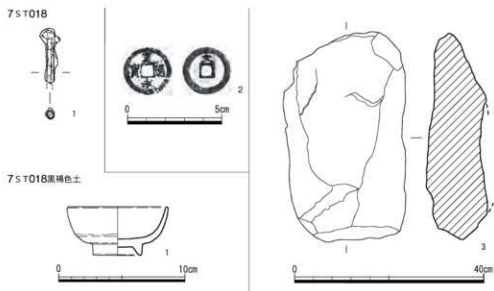
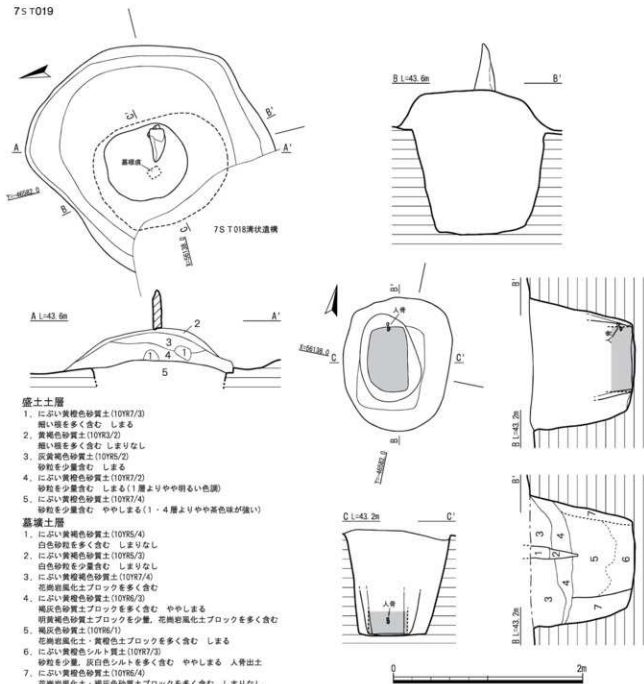


Fig. 42 75T018出土遺物実測図 (1/2, 1/3, 1/8)

7ST019



盛土土層

1. にぶい黄褐色砂質土(10YR7/3)
粗い縞を多く含む しまる
2. 黄褐色砂質土(10YR5/2)
粗い縞を多く含む しまりなし
3. 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
砂粒を少量含む しまる
4. にぶい黄褐色砂質土(10YR7/2)
砂粒を少量含む しまる(1層よりやや明るい色調)
5. にぶい黄褐色砂質土(10YR7/4)
砂粒を少量含む ややしまる(1・4層よりやや茶色味が強い)

墓塚土層

1. にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)
白色砂粒を多く含む しまりなし
2. にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)
白色砂粒を少量含む しまりなし
3. にぶい黄褐色砂質土(10YR7/4)
花崗岩風化土ブロックを多く含む
4. にぶい黄褐色砂質土(10YR6/3)
凝灰色砂質土ブロックを多く含む ややしまる
明黄褐色砂質土ブロックを多く含む
5. 凝灰色砂質土(10YR6/1)
花崗岩風化土・黄褐色土ブロックを多く含む しまる
6. にぶい黄褐色シルト質土(10YR7/3)
砂粒を少量、灰白色シルトを多く含む ややしまる 人骨出土
7. にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4)
花崗岩風化土・凝灰色砂質土ブロックを多く含む しまりなし

Fig.43 7ST019平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST015

遺構 (Fig.37)

A群北側, B20区他に位置する, 盛土を持つ近世墓である。盛土は楕円形を呈し, 7ST011・014の溝状遺構および7ST017盛土, 7SD312に切られる。

墓塚は長方形を呈する。

棺材は見られないが, 土層断面の棺痕跡(墓塚土層5層)から長方形横棺だと考えられる。

棺痕跡内の南側から下肢骨が出土した。人骨の出土状況から頭位は北向きと考えられる。

土層断面では墓標痕(墓塚土層1層)が確認できたが, 盛土の土層断面では墓標痕が確認できず, 改葬に伴い, 盛土が改葬された可能性がある。墓標は埋葬当初は存在していたものの, その後の盛土改葬時には存在していなかった可能性がある。

7ST016

遺構 (Fig. 38)

A群中央部よりやや北側、BI20区他に位置する、盛土を持つ近世墓である。7ST014・019に切られる。

盛土は楕円形を呈する。

墓壇は隅丸長方形を呈し、棺痕跡内(墓壇土層5・6層)の北側から人歯が出土した。人歯の出土状況から頭位は北向きであったと考えられる。

棺は平面観察および土層観察(墓壇土層5・6層)から長方形横棺だと考えられる。

遺物 (Fig. 39, Pl.26-120・3)

7ST016黒褐色土

金属製品

用途不明品(1) 外径5.8cm, 内径3.4cm, 厚さ0.2cmの鉄製環状製品である。墓壇中の樹根跡から出土した。

7ST019

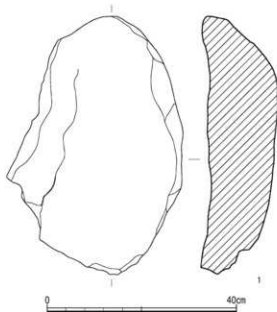


Fig. 44 7ST019出土遺物実測図(1/8)

7ST017

遺構 (Fig. 40)

A群中央部よりやや北側、BI19区他に位置する、盛土を持つ近世墓である。盛土は楕円形を呈し、7ST014の溝状遺構に切られ、7ST015の盛土を切る。盛土の除去後に、7ST017墓壇および7SK059が検出された。

墓壇は長方形を呈する。

棺は、平面観察および土層断面の棺痕跡(墓壇土層4・5層)から長方形横棺だと推定される。5層は棺底板が腐植し土壌化したものと考えられる。

7ST017関連遺構

7SK059

遺構 (Fig. 40)

BI20区に位置し、7ST017盛土除去後に検出された土坑である。

平面形は方形を呈する。

近世墓群の中で検出された遺構なので、墓壇の可能性を考えたものの、棺材・人骨等の埋葬に伴う痕跡が確認できなかったため、遺構種別を土坑に留めた。

7ST018

遺構 (Fig. 41)

A群中央、BH20区他に位置する、盛土を持つ近世墓である。盛土周囲で検出された溝状遺構は7ST019・511・513・514を切り、墓壇は7ST382墓壇を切る。

盛土は楕円形を呈する。

墳頂部には扁平な石を3個確認した。これらの石は「野面石」の可能性もある。しかし、その内2個の石は片手に持てない程度の大きさであることから判断して、石製墓標を安定させるために置かれた石の可能性などが考えられる。

盛土周囲の溝状遺構については、区画溝か、盛土修復に周囲の土壌を使用したため生成された痕跡か、性格は不明である。

墓壇は隅丸長方形を呈し、棺痕跡内(墓壇土層5層)の北側から鉄釘、銭貨が5枚、南側から下肢骨が

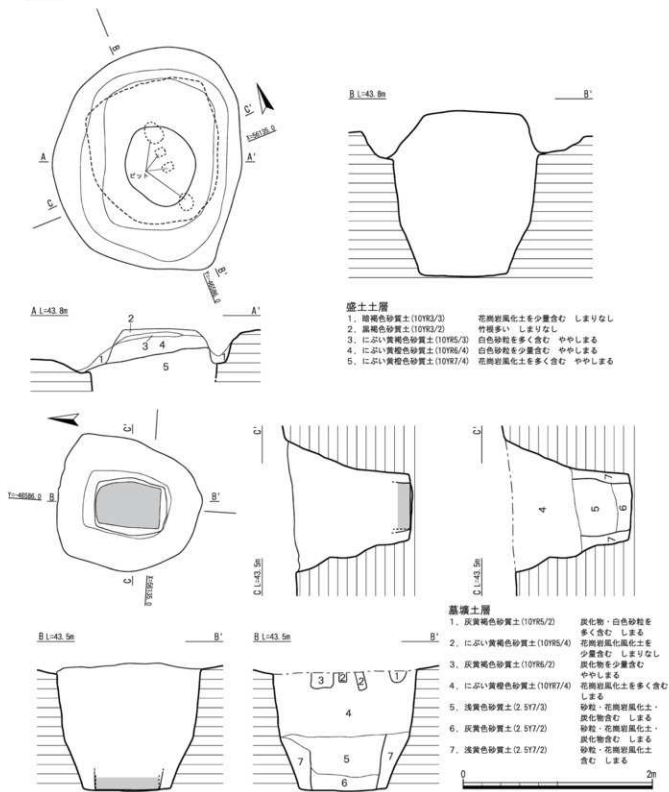


Fig.45 7ST021平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

出土した。人骨の出土状況から頭位は北向きと推定される。棺は、人骨出土状況および土層観察（5層）から長方形横棺だと考えられる。

7ST022

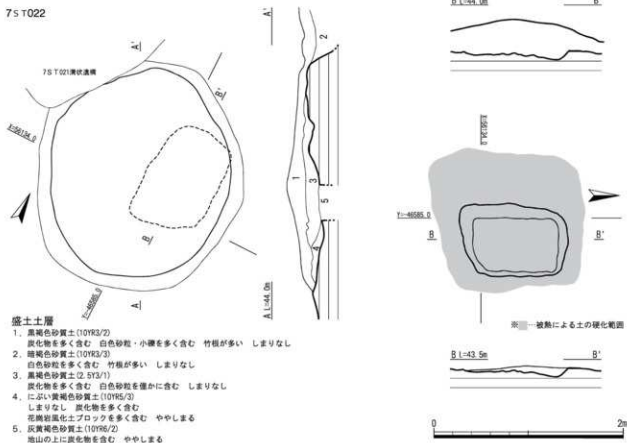


Fig.46 7ST022平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig.42, Pl.25-116・4,26-120・4, 34-146, 38-175)

金属製品

鉄釘 (1) 断面形状は方形で、頭部は残存するもの、全体の形状は不明である。

銭貨

銅銭 (2) 棺内から新寛永 2枚, 不明 4枚が出土した。新寛永の文銭である。

石製品

石製墓標 (3) 花崗岩の自然石を用い成形している。断面形状はレンズ状を呈する。墓碑銘はない。

7ST018黒褐色土

国産陶器

坏×椀 (1) 高台は高く、削りはシャープで高台脇と高台の境は明瞭である。釉薬は胴部下半まで施こされ、高台は露胎である。細かな貫入が見られる。肥前産である。

7ST019

遺構 (Fig.43)

A群中央, BH19区他に位置する、盛土を持つ近世墓である。盛土周囲から検出された溝状遺構は7ST018の溝状遺構に切られ、7ST016の盛土を切り、墓壇は7ST832の墓壇を切る。

盛土は方形を呈する。

墳頂部では石製墓標が見られた。石製墓標には、掘り方等は確認できず、後世に立てられたと考えられるため、被葬者と石製墓標との一致性については疑問が残る。

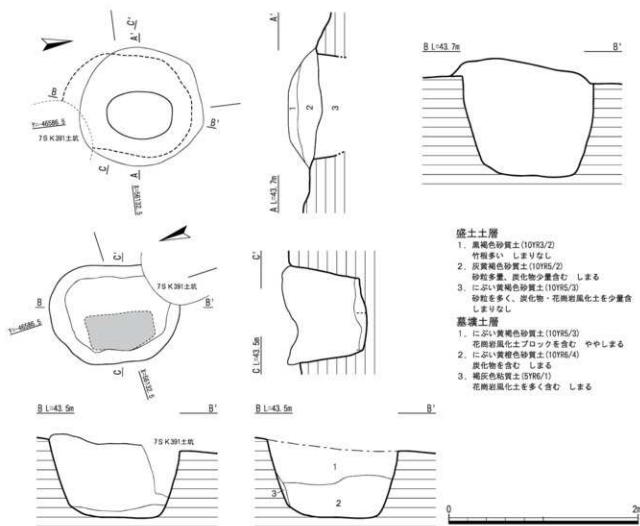


Fig. 47 75T023平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

盛土周囲の溝状遺構は、区画溝か、盛土修復に周囲の土壌を使用したという痕跡か、確定要素に欠ける。

墓壇は隅丸長方形を呈し、棺痕跡内（墓壇土層5・6層）の北側では人骨片が出土した。その周囲の埋土は黒色を呈しており、また、南側では人骨は出土していないが、同様に黒色土が見られた。この土は遺体が腐植土壌化したものであると考えられる。

棺は、平面および土層観察から長方形横棺だと考えられる。

土層断面では墓標の痕跡（墓壇土層1・2層）が確認できた。墓標の安定を図るためか、深い位置までその痕跡が見られた。

遺物 (Fig. 44, Pl. 38-176)

石製品

石製墓標（1）花崗岩の自然石を用い成形している。縦断面はレンズ状を呈する。墓碑銘はない。

75T023黒褐色土

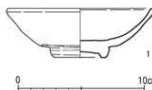


Fig. 48 75T023出土遺物実測図 (1/3)

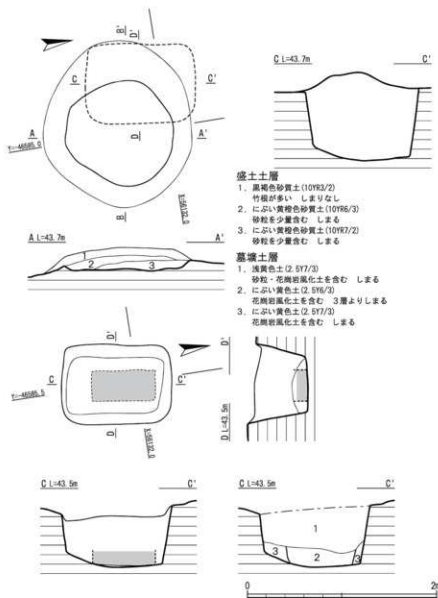


Fig.49 7ST024平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST021

遺構 (Fig.45)

A群中央よりやや南側、BG21区他に位置する、盛土を持つ近世墓である。盛土は楕円形を呈する。盛土周囲で検出された溝状遺構は、7ST022の盛土を切り、墓壇は7ST704の墓壇を切る。

また、この溝状遺構が区画溝か、盛土の修復に周囲の土壌を使用したかどうかは不明である。

墓壇は不整形形を呈する。

棺は、平面観察および土層断面の棺痕跡（墓壇土層6層）から長方形横棺だと考えられる。

土層断面では付帯施設と思われるビット状の痕跡が4箇所見られた（墓壇土層1～3層）。これら4箇所の遺構は1列に並んだ状態で検出され、楕円形ビット2つに方形ビット2つが挟まれた状態であった。深さはそれぞれ16cm前後である。盛土の土層断面では確認できないことから、盛土は再構築された可能性がある。これらのビット状遺構の性格は不明である。

7ST024黒褐色土



Fig.50 7ST024出土遺物実測図 (1/3)

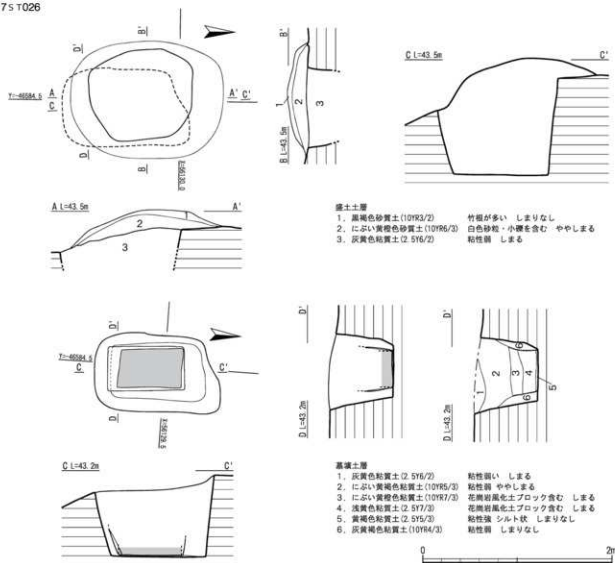


Fig.51 7ST026平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST022

遺構 (Fig.46, Pl.3-11)

A群中央よりやや南側, BF20区他に位置する, 盛土を持つ近世墓であると思われる。7ST021に切られる。

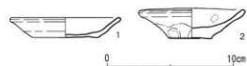
盛土は楕円形を呈する。また, 墓壇は隅丸長方形を呈し, 埋土中に炭化物が含まれていた。さらに墓壇の周囲には熱を受けて硬化した範囲が見られる。

墓壇の深さは非常に浅い。墓壇埋土から人骨は確認されず, 容積から考えて遺体を埋葬した施設であるかどうか疑問である。

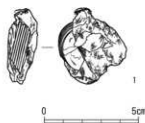
また, 墓壇内の炭を含む層や, 墓壇周辺の土壌硬化状況から, 墓壇周辺で火を使用した可能性が考えられる。

このような状況を総合すると, 墓壇周辺で燃やした物を墓壇に埋めた可能性がある。地域の民俗事例では, 行方不明者等で遺体がない被葬者の葬送を行う場合, 被葬者の愛用品等を燃やして, その灰を墓壇に入れるという儀礼が見

7ST027黄褐色土



7ST027暗灰茶色土

Fig.52 7ST027出土遺物
実測図 (1/2, 1/3)

7ST027

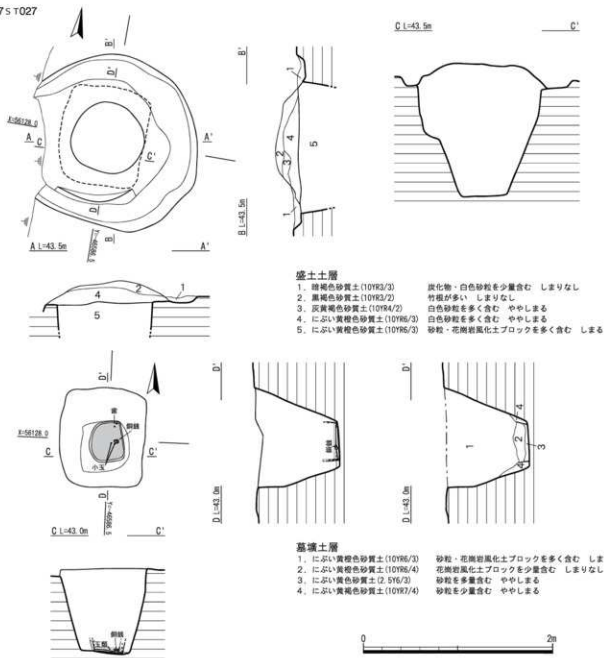


Fig.53 7ST027平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

られる⁽⁴⁾。したがって、7ST022では遺体のない葬送儀礼が行われた可能性も考えたい。

7ST023

遺構 (Fig.47)

BF21区他に位置している。墓塚の南西隅は7SK391の土坑に切られる。盛土および墓塚の形状は楕円形である。棺材の出土は見られず、また、墓塚の土層中においても棺痕跡は確認できなかった。しかし、墓塚底面の西側に偏った位置から長方形の棺床痕を確認できたことから、長方形棺を使用していたと思われる。

遺物は、盛土の上層から近世の陶磁器類が出土した。人骨は出土していない。

7ST028

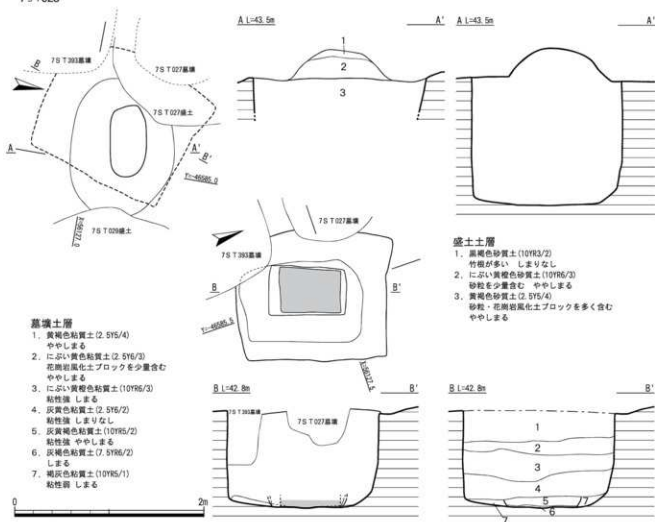


Fig.54 7ST028平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig.48, Pl.25-116・5)

7ST023黒褐色土

国産陶器

皿(1) 高台の削りはシャープで、高台脇と高台の境が明瞭である。
釉薬は胴部下半まで施されている。

7ST024

遺構 (Fig.49)

BF21区に位置している。墓域は7SK391の土坑に切られる。

盛土は円形を呈し、墓域の形状は長方形を呈する。

棺の形状は、土層観察から長方形横棺だと考えられる。

遺物は、盛土の上層から陶器片が出土した。人骨は出土していない。

遺物 (Fig.50, Pl.25-116・6)

7ST024黒褐色土

国産陶器

小杯(1) 高台の削りはシャープで、高台脇と高台の境は明瞭である。褐釉を胴部下半まで施し、高台は露胎である。

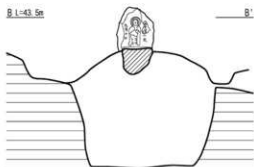
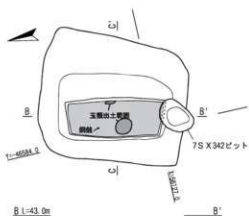
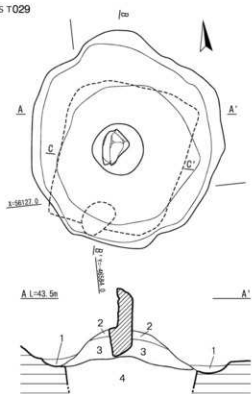
7ST028褐色土



0 10cm

Fig.55 7ST028出土遺物
実測図 (1/3)

7ST029

**盛土土層**

1. 黒褐色砂質土(10YR2/2)
ややしまる
2. 黒褐色砂質土(10YR3/2)
粘性が多い しまりなし
3. にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)
砂粒を多く含む しまる
4. にぶい黄褐色粘質土(10YR5/2)
砂粒・花崗岩風化土ブロックを多く含む しまりなし

墓壇土層

1. にぶい黄褐色粘質土(10YR6/3)
砂粒・花崗岩風化土ブロックを多く含む しまりなし
2. 黄灰色粘質土(2.5Y6/1)
粘性強 ややしまる
3. にぶい黄褐色粘質土(2.5Y6/2)
シルト 粘性強 しまりなし
4. にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)
しまりなし

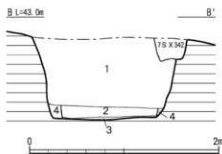
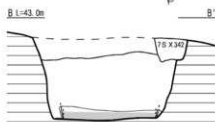
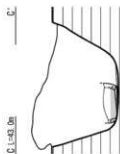


Fig. 56 7ST029平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST026

遺構 (Fig. 51)

BE20区他に位置している。墓壇は、7ST389の墓壇の南東隅を切る。

盛土の形状は隅丸方形を呈し、墓壇の形状は長方形を呈する。

棺の形状は、平面および土層断面（墓壇土層3・4層）で確認され、長方形横棺と推定できる。

遺物、人骨等は出土していない。

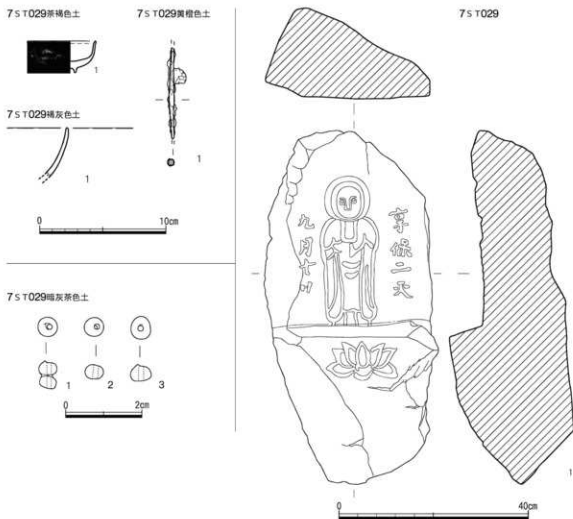


Fig. 57 7ST029出土遺物実測図 (1/1, 1/3, 1/8)

7ST027

遺構 (Fig. 53)

BD21区他に位置している。盛土、墓壇ともに7ST028の墓壇を切る。盛土の形状は円形で、墓壇の形状は方形を呈する。

棺は、平面および土層断面（墓壇土層2・3層）で確認され、方形棺と考えられる。

遺物は、埋土中から土師器の小皿が出土した。副葬品は、棺床面中央から銭貨6枚を重ねて布に包んだ状態のものや、小玉2点が出土した。棺痕跡の北東隅から人歯が出土した。

遺物 (Fig. 52, Pl. 25-116・7・8, 34-147)

7ST027黄褐色土

土師器

小皿a (1) 復原口径8.8cm, 復原底径5.2cm, 器高1.6cmを測る。イト切りである。

国産陶器

皿 (2) 灯明皿である。底部平底でイト切りである。釉薬は褐釉が内・外面に施釉されるが、底部は

75 T031

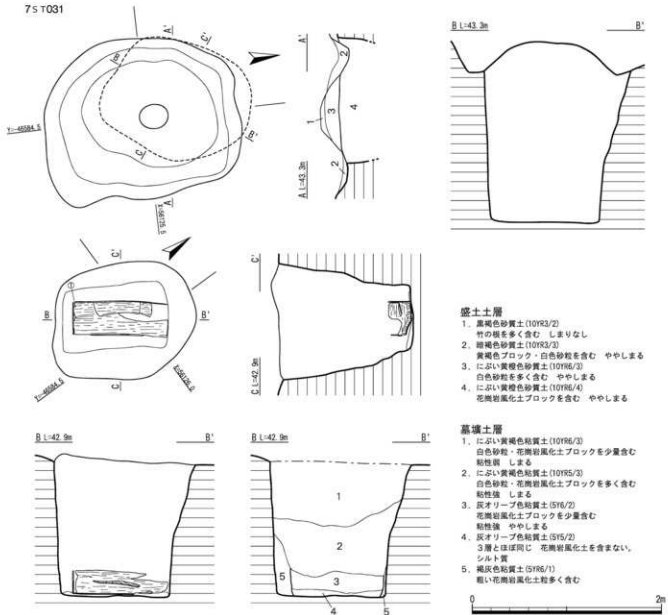
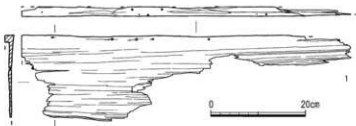


Fig.58 75T031平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75 T031



75 T031黒褐色土



Fig.59 75T031出土遺物実測図 (1/3, 1/8)

75T034

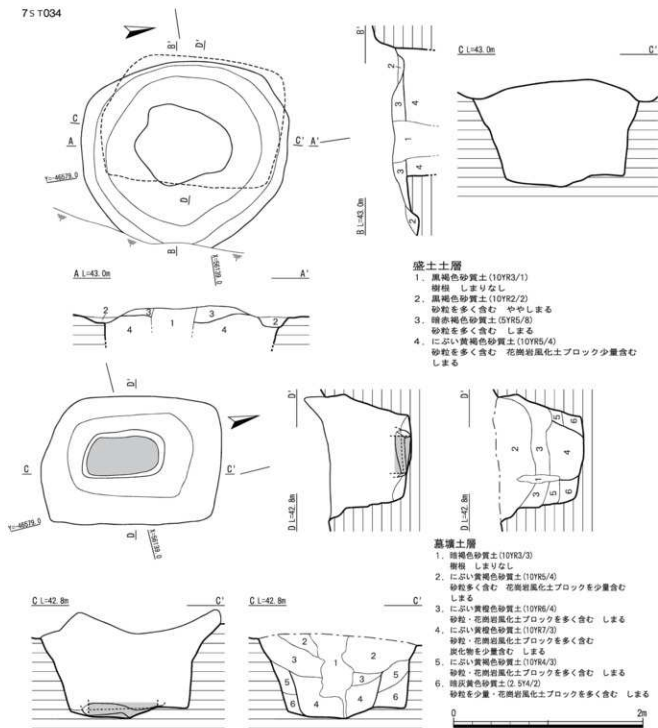


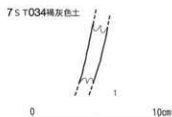
Fig. 60 75T034平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

露胎である。肥前産である。

75T027暗灰茶色土

銭貨

銅銭 (1) 布に包まれている銅銭であるが、錆による融着のため種類は確認できない。

Fig. 61 75T034出土遺物
実測図 (1/3)

7ST028

遺構 (Fig. 54)

BD21区他に位置している。盛土は7ST027・029の溝状遺構に切られ、墓壇は7ST027・393の墓壇に切られる。

盛土の形状は楕円形、墓壇の形状は方形を呈する。墓壇の大きさと比べて盛土が非常に小さく、主軸も合わない。

棺の形状は、平面および土層断面（墓壇土層5・6層）で確認され、長方形横棺と推定できる。

遺物は、墓壇の最下層（7層）から肥前系染付が出土している。人骨は出土していない。

遺物 (Fig. 55, Pl. 25-116・9)

7ST028褐灰色土

肥前系染付

小坏（1） 高台からほぼ上方に向けて緩やかに胴部が延びる。口縁部付近で器壁が若干薄くなり、弱く外反する。全面に施

7ST327

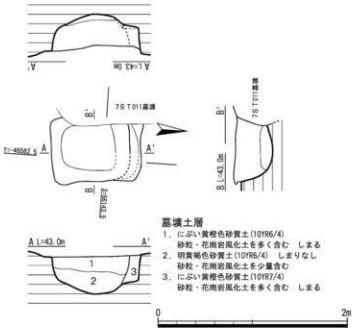


Fig. 62 7ST327平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST328

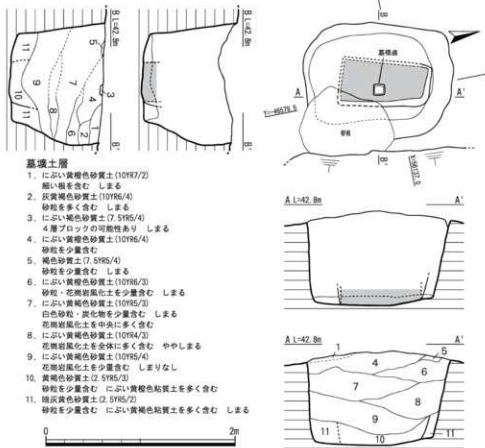


Fig. 63 7ST328平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

釉され、外面に呉須による文様を染め付けている。

7ST029

遺構 (Fig. 56, Pl. 3-12, 4-13・14)

BD20区他に位置し、盛土および石製墓標を持つ近世墓である。盛土周辺で検出された溝状遺構は、7ST028の盛土を切る。

盛土の形状は凹形で、墓壇の形状は方形を呈する。盛土の上部には、地蔵が彫り込まれた石製墓標が、正面を西に向けて据えられている。また、盛土の周囲には溝状の遺構が見られる。

棺の形状は、平面および土層断面(墓壇土層2・3層)で確認され、長方形横棺と思われる。

遺物は、埋土中から近世の陶磁器が出土し、副葬品は、棺の中央付近から数珠玉が集中して出土した。また、銭貨が6枚重なって出土した。人骨は出土していない。

遺物 (Fig. 57, Pl. 25-117・1・2, 26-120, 32-123・138・143・177・5, 38-177)

石製品

石製墓標 (1) 花崗岩の自然石を用い成形している。正面の上部は6cm程切り取られ龕部を造りだしている。龕部は工具痕の残らない丁寧な面調整が施され地蔵立像が彫り込まれている。頭部は浮彫りで、体部は線彫りされる。龕部の下には台座を造りだし、蓮華が線彫りされる。墓碑銘は1面で地蔵立像の両脇に施される。

「(右) 享保二〇」

「(左) 九月十日」

7ST029茶褐色土

肥前系染付

小坏 (1) 坏と皿の間のような器形である。口縁部の器壁が薄く、端部で弱く外反する。高台径が小さい。全面に施釉され、外面に文様を染め付けている。また、細かな貫入が見られる。

7ST029褐色土

国産磁器

椀 (1) 口縁部片のみ出土した。細かな貫入が見られる。肥前産である。

7ST029黄橙色土

金属製品

鉄釘 (1) 断面方形で、両端とも欠損している。

7S T328黄橙色土



Fig. 64 7ST328出土遺物実測図 (1/2)

7S K329

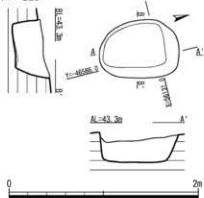


Fig. 65 7SK329平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7S T364

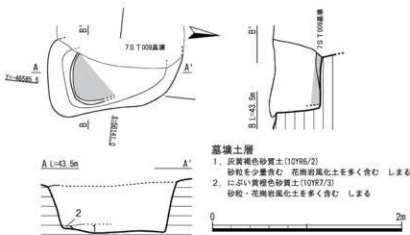
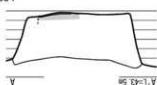


Fig. 66 7ST364平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST382

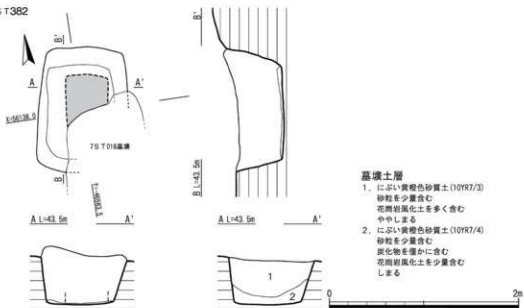


Fig.67 7ST382平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST388

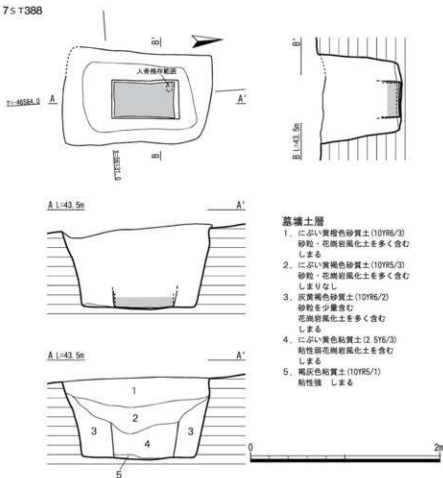


Fig.68 7ST388平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST389

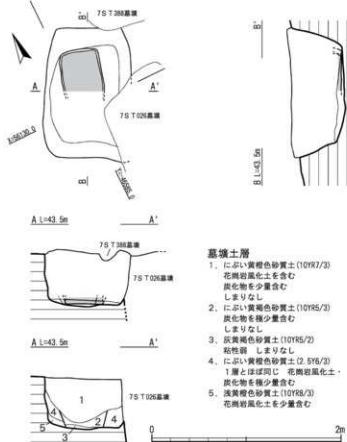


Fig. 69 7ST389平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST029暗灰茶色土

その他

小玉 (1~3) 棺内からガラス製の小玉が97点出土した。法量は直径4.5~5.5mm, 厚さ2.5~4.0mmの範囲に集中するが, 直径5.6mm以上の小玉と厚さ4.5mm以上の小玉が2点ずつ出土した。

1は2連の小玉。2は平均的な小玉。3は直径5.9mmを測る。平均値と異なる大きさの小玉が4点出土しており四天珠の可能性ある。数珠玉と思われる。

7ST031

遺構 (Fig. 58, Pl. 4-15)

A群の南側, BD20区他に位置している。墓墳は7ST706の墓墳を切る。盛土の形状は不整形, 墓墳の形状は不整形である。また, 盛土の周囲には溝状の遺構が見られた。

墓墳内には棺材が残存していた。棺は, 木製の棺で, 蓋・側板・底板が長方形に組まれた状態で出土した。墓墳の深さは, 約1.5mでA群の墓墳としては非常に深い。

遺物は, 盛土上層から近世の肥前系染付の碗が出土した。人骨, 副葬品は出土していない。

遺物 (Fig. 59, Pl. 25-117・3, 27-123)

木製品

棺箱底板 (1) 銅釘, 鉄釘, 木製釘が見られる。ノミ痕等の工具の痕跡は見られなかった。

7ST031黒褐色土

肥前系染付

小碗 (1) 高台から斜め上方に向かって緩やかに胴部が延びる。高台脇と高台内に線が施され, コン

7SK391

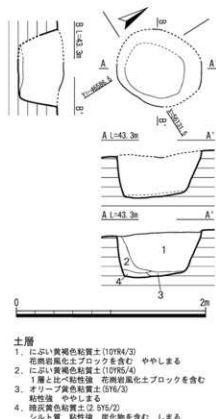


Fig. 70 7SK391平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75T393

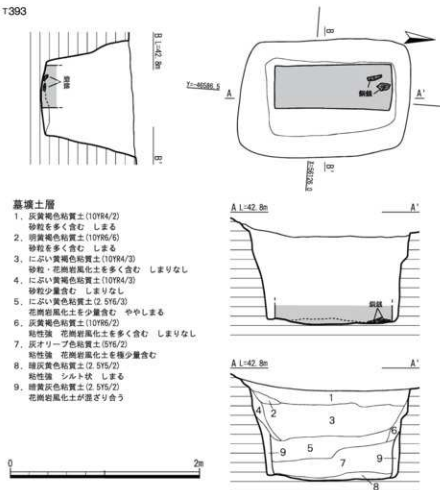


Fig.71 75T393平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

ニャク印判が胴部外面に押される。見込みには圏線は認められない。

75T034

遺構 (Fig.60)

A群東側, BH19区他に位置する近世墓である。墓塚は75T828・829の墓塚を切る。

盛土は円形を呈する。盛土周囲には溝状遺構が検出された。この遺構は区画溝か、盛土修復に周囲の土壌を使用したためにできた痕跡か、確定要素に欠ける。

墓塚は長方形を呈する。棺は、土層断面の棺痕跡(4層)から長方形横棺だと考えられる。

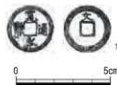
遺物 (Fig.61, Pl.25-118)

75T034褐灰色土

国産陶器

甕(1) 胴部片が出土した。外面に施釉している。タタキの痕跡がある。産地不明である。

75T393埋灰赤色土

Fig.72 75T393出土遺物
実測図 (1/2)

7ST327

遺構 (Fig. 62)

A群北側, BJ20区に位置する近世墓である。墓墳のみが検出され, 7ST011の墓墳に切られる。

平面形は長方形を呈する。人骨等の遺物出土は見られないが, 墓域内に構築されていることや, 形態が定型化されていることから, 近世墓と考えたい。ただし, 他と比較して小規模なので, 小児用墓の可能性が考えられる。

7ST394暗灰褐色土

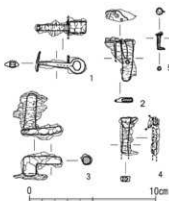
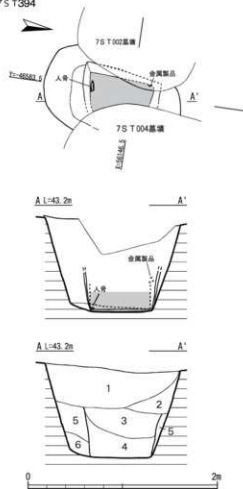


Fig. 73 7ST394出土遺物実測図 (1/3)

7ST394



墓墳土層

1. ぶい黄褐色砂質土 (10YR6/3)
砂粒を少量, 花崗岩風化土ブロックを多く含む しまる
2. 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2)
砂粒を少量, 花崗岩風化土ブロックを多く含む しまる
3. 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2)
砂粒を少量, 花崗岩風化土ブロックを多く含む ややしまる
4. ぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2)
砂粒を少量, 花崗岩風化土ブロックを多く含む しまりなし
鉄製品出土
5. 灰白色砂質土 (8Y7/1)
砂粒を少量, 花崗岩風化土ブロックを多く含む ややしまる
6. 灰白色砂質土 (2.5Y8/1)
砂粒を少量, 花崗岩風化土ブロックを多く含む ややしまる

Fig. 74 7ST394平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST328

遺構 (Fig. 63)

A群東側, BG19区他に位置する近世墓である。包含層除去後に墓墳を検出した。墓墳は7ST831の墓墳を切る。

平面形は長方形を呈する。

土層断面では, 客土と思われる褐色土 (5層) が帯状に堆積している。類似する状況が7ST004にも見られる。

また, 土層断面では南側と北側から交互に堆積した状況が見られた。

棺は, 南側では確認できなかったが北側で長方形プランの一部を確認できた。

土層断面の棺痕跡 (墓墳土層10層) から長方形横棺だと考えられる。

遺物 (Fig. 64, Pl. 26-120・6)

7ST328黄橙色土

金属製品

用途不明品 (1) 鉄製品である。3本の棒状製品が錆により付着している。長さは平均 $0.8 + \alpha$ cm, 断面は平均直径 0.4cmを測る。

7ST364

遺構 (Fig. 66)

A群北側, BI21区に位置する。墓墳のみが検出され, 7ST009の墓墳に切られる。平面形は隅丸長方形を呈する。

北側では棺の平面形態および土層断面を欠失してしまった。しかし, 南側でその一部を確認することができたが, 棺の形態は不明である。

7ST382

遺構 (Fig. 67)

A群中央, BH20区他に位置する墓墳である。7ST018に切られる。

平面形は長方形を呈する。

土層では棺痕跡は確認できなかったが, 棺床痕が残存しており, 長方形棺であったと考えられる。

75T396

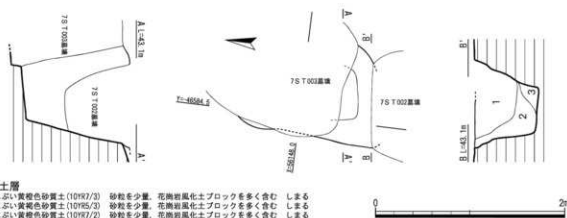


Fig. 75 75T396平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75T508

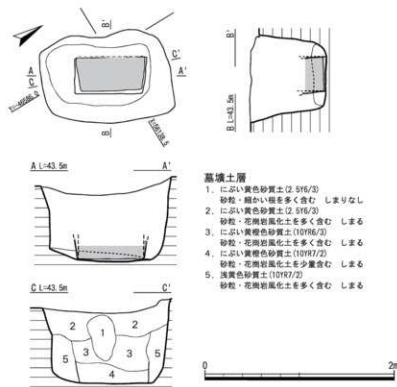


Fig. 76 75T508平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75T388

遺構 (Fig. 68)

BF20区他に位置している。墓塚のみを検出し、75T519の墓塚を切る。

墓塚の形状は長方形である。

棺痕跡は平面観察および土層断面 (4・5層) で確認でき、長方形横棺だと考えられる。また、棺と推定される範囲 (4・5層) の南東隅から人骨片が出土した。副葬品等は出土していない。

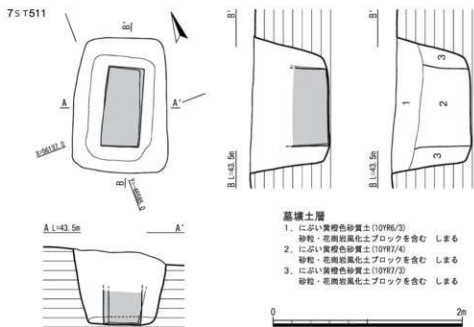


Fig.77 7ST511平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST389

遺構 (Fig.69)

BE21区他に位置している近世墓である。墓墳のみを検出し、7ST026・388の墓墳に切られる。

墓墳の形状は長方形である。当初、墓墳内の南側から掘削を行ったが、途中で土層断面に棺の痕跡が認められたため、墓墳の北側にて棺の平面形態を確認した。そのため、南側の棺平面形態が欠失した。

北側で確認できた棺の平面形態および土層断面（2・3層）から、長方形横棺だと考えられる。遺物、人骨等は出土していない。

7ST393

遺構 (Fig.71)

BD21区他に位置している。7ST028の墓墳の南西部を若干切る。

墓墳の形状は長方形である。棺の形状は平面、土層断面（7・8層）で確認された。長方形横棺だと考えられる。

遺物は、副葬品として銭貨6枚が木製の底板上から出土した。人骨は出土していない。

遺物 (Fig.72, Pl.34-148)

7ST393暗灰茶色土

銭貨

銅銭（1） 棺内から新寛永5枚、不明1枚が出土した。1は新寛永の文銭である。

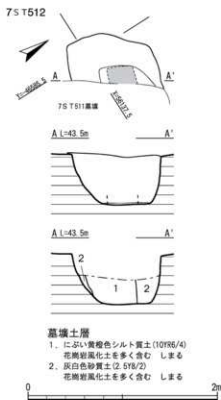


Fig.78 7ST512平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75 T513

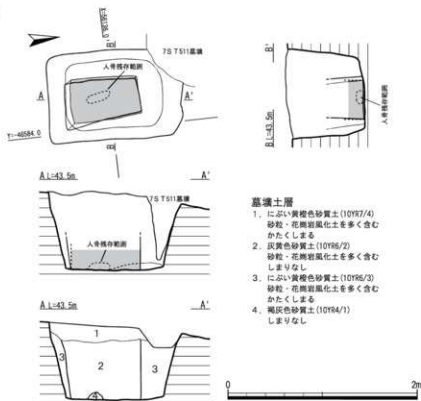


Fig.79 75T513平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75 T514

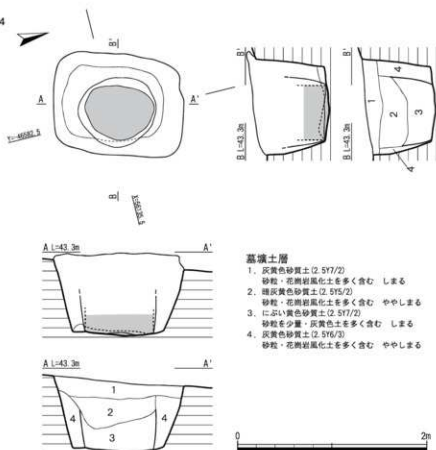


Fig.80 75T514平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

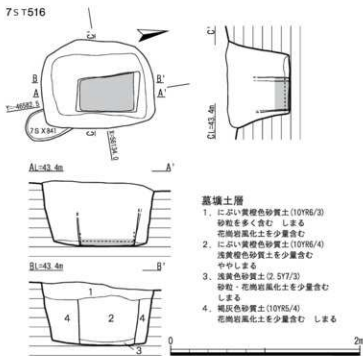


Fig. 81 7S T516平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

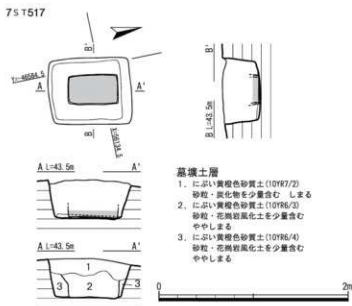


Fig. 82 7S T517平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

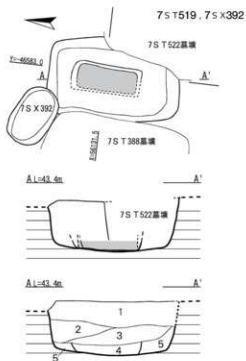


Fig. 84 7S T519, 7S X392平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

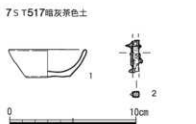


Fig. 83 7S T517出土遺物実測図 (1/3)

7S T394

遺構 (Fig. 74)

A群北側, BK20区に位置する近世墓である。墓壇のみを検出し, 7ST002・004の墓壇に切られる。

墓壇の平面形は長方形を呈する。棺の平面形態は, 東側で一部が欠失したものの, 西側で確認でき, 土層断面においても棺痕跡(3・4層)が確認できた。

また, 埋土中から, 鉄製の飾り金具の留金, 蝶番が出土した。したがって, 7ST007の墓壇aの棺と同様に, 長持形の棺であったと考えられる。

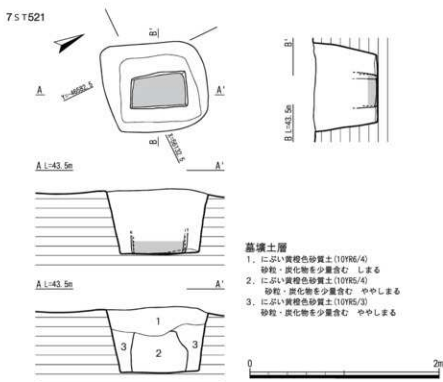


Fig.85 7ST521平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

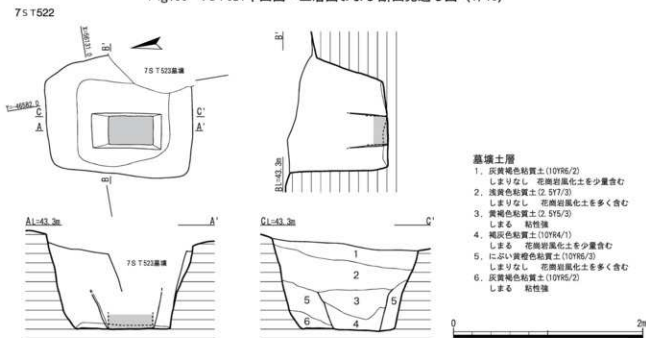


Fig.86 7ST522平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig.73, Pl.26-120・7~11)

7ST394暗灰茶色土

金属製品

螺番(1~4) 1~4は鉄製品である。1は螺番管状部である。棺内に打ち込まれる部位の先端部は棺内で上下に屈曲させている。したがって、木質残存範囲は材の厚さを反映しており、その長さは2.4cmである。管状部は全長3.9cm、管状部直径1.2cm、厚さ0.1cm~0.4cmを測る。

2は軸部の棺材に打ち込まれる部位であり、中央部には棺材からの脱離防止に備え、釘状製品を打ち込

75T523

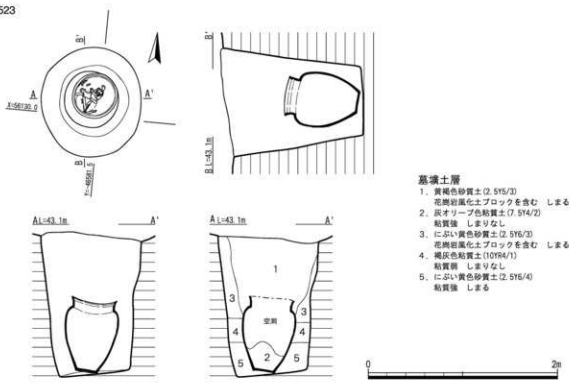
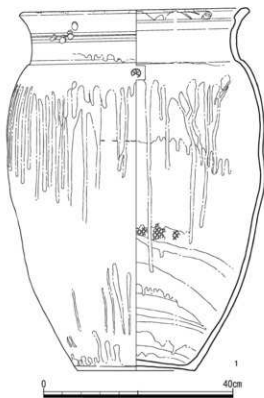


Fig. 87 75T523平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75T523明灰褐色土



75T523明灰褐色土

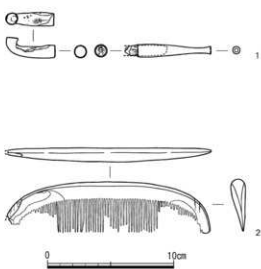


Fig. 88 75T523出土遺物実測図 (1/3, 1/8)

んだ痕跡が見られる。また、留金で打ち付けられた飾り金具もわずかに確認できる。

3は雌番軸部である。軸の長さ3.0cm、軸断面は1辺0.6cm、棺材に打ち込んだ部位の長さ2.9cmを測る。

4も管状部の棺材に打ち込まれる部位である。

留金(5)鉄製品の飾り金具の留金と考える。長さ1.2cm、断面は円形を呈し、直径0.3cmを測る。木質が付着し、先端部が屈曲する。

7ST396

遺構 (Fig. 75)

A群北側、BK20区他に位置する近世墓である。墓壇のみを検出し、7ST002・003の墓壇に切られる。平面形は長方形を呈すると思われる。

墓壇の大部分は7ST003の構築で破壊されており、棺痕跡は確認できなかった。

7ST508

遺構 (Fig. 76)

A群西側、BH21区に位置する近世墓である。平面形は不整長方形を呈する。

棺は、平面観察および土層断面の棺痕跡(3・4層)から長方形横棺だと考えられる。

7ST511

遺構 (Fig. 77)

A群中央、BH21区に位置する近世墓である。墓壇のみを検出し、7ST512・513の墓壇を切る。

平面形は長方形を呈する。棺は、平面観察および土層断面の棺痕跡(2層)から長方形横棺と考えられる。

7ST512

遺構 (Fig. 78)

A群中央、BH21区に位置する近世墓である。7ST511の墓壇に切られる。墓壇の大部分が7ST511の構築により破壊されている。

平面形は残存部分から方形か長方形と思われるが、断定はできない。棺材等の出土はなかったが、棺床痕が確認できた。土層断面の棺痕跡と照らし合わせたが、棺の形態は不明である。

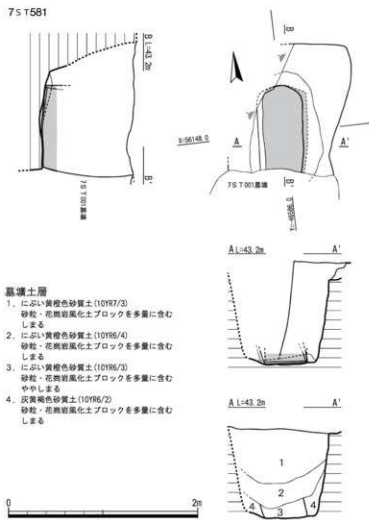


Fig. 89 7ST581平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

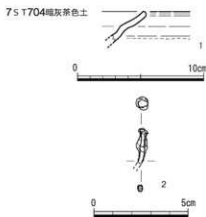


Fig. 90 7ST704出土遺物
実測図 (1/2, 1/3)

7ST513

遺構 (Fig. 79)

A群中央, BG20区他に位置する近世墓である。7ST511の墓域に切られる。

平面形は長方形を呈する。棺は、平面観察および土層断面の棺痕跡(2層)から長方形横棺だと考えられる。

7ST514

遺構 (Fig. 80)

A群中央, BG20区他に位置する近世墓である。平面形は長方形を呈する。棺は、土層断面の棺痕跡(3層)や平面観察から、円形棺だと考えられる。

7ST516

遺構 (Fig. 81)

A群中央部よりやや南側, BG20区に位置する近世墓である。平面形は長方形を呈する。棺は、土層断面の棺痕跡(3層)から長方形横棺だと考えられる。

7ST517

遺構 (Fig. 82)

A群中央部よりやや南側, BG20区他に位置する近世墓である。7ST022の墓域に切られる。平面形は方形を呈する。棺は、平面観察および土層断面の棺痕跡(2層)から長方形横棺だと考えられる。また、規模が小さいことから、小児が埋葬されていたと考えられる。

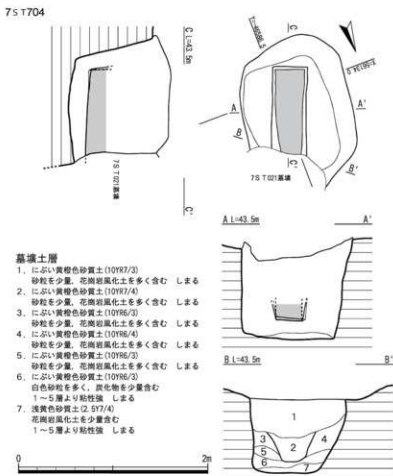


Fig. 91 7ST704平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig. 83, Pl. 25-119・1, 26-120・12)

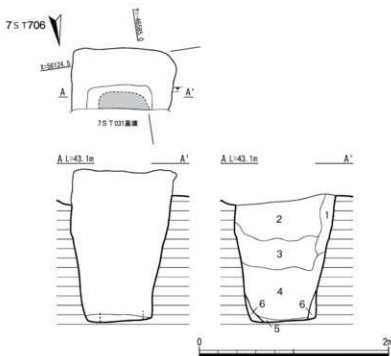
7ST517暗灰茶色土

土師器

小皿 b (1) 口径6.2cm, 底径3.6cm, 器高2.2cmを測る。イト切りである。

金属製品

鉄釘 (2) 長さ2.6+ α cm, 長方形の断面は長さ0.5cm, 幅0.4cmを測る。木質が残存しており, 2つの棺材の境目が確認できる。2つの棺材残存部は, それぞれ0.5cm, 2.1cmを測る。



墓壇土層

1. にぶい黄褐色粘質土 (10YR7/4)
粘性弱 花崗岩風化土を含む
しまりなし
2. 明黄褐色粘質土 (10YR7/6)
粘性弱 花崗岩風化土を少量含む
しまる
3. オリーブ褐色粘質土 (2. 5Y4/4)
粘性弱 しまりなし
4. 灰オリーブ色粘質土 (5Y6/2)
3層に比べ粘性強 花崗岩風化土を少量含む
しまりなし
5. 黒色砂質土 (10YR6/3)
粘性弱 シルト状 しまる
6. 灰オリーブ色粘質土 (5Y5/2)
粘性強 4層よりしまる

Fig. 92 7ST706平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST519関連遺構

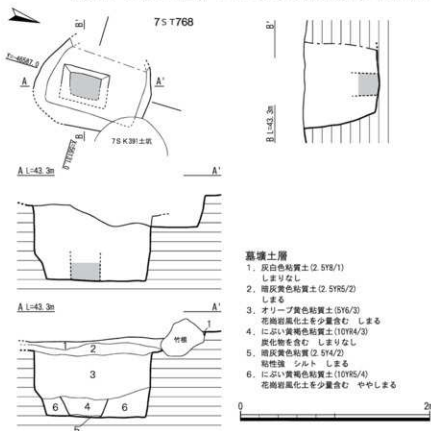
7SX392

遺構 (Fig. 84)

BF20区に位置している。7ST519の墓壇を切る。

形状は楕円形である。

平面および土層断面では棺痕跡は確認されず, 人骨や副葬品等の出土も見られない。追善供養等に利用されたと考えられる。



墓壇土層

1. 灰白色粘質土 (2. 5Y8/1)
しまりなし
2. 暗灰黄色粘質土 (2. 5Y8/2)
しまる
3. オリーブ黄色粘質土 (5Y6/3)
花崗岩風化土を少量含む しまる
4. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3)
炭化物を含む しまりなし
5. 暗灰黄色粘質土 (2. 5Y4/2)
粘性強 シルト しまる
6. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4)
花崗岩風化土を少量含む ややしまる

Fig. 93 7ST768平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

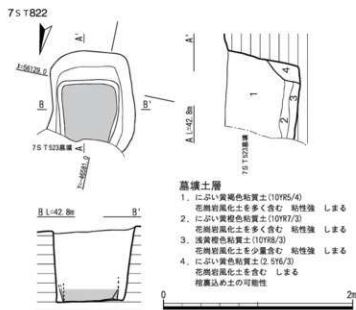


Fig. 94 7ST822平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

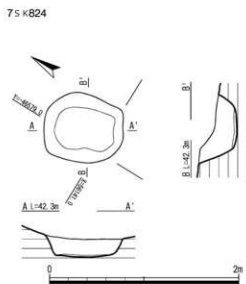


Fig. 95 7SK824平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

7ST522

遺構 (Fig. 86)

BE20区他に位置している。7ST523に墓壇の南東隅を切られる。

墓壇の形状は隅丸長方形である。棺は平面視察および土層断面 (4層) で確認でき、長方形横棺であると思われる。墓壇に对し棺の大きさが小さい。遺物、人骨等は出土していない。

7ST523

遺構 (Fig. 87, Pl. 4-16)

BE20区他に位置している。墓壇のみを検出し、7ST522・822の墓壇を切る。

墓壇の形態は円形である。棺は甕棺で、肥前系陶器の甕が用いられていた。

棺内としては空洞になっており、棺の下部から人骨が出土した。副葬品としては、木製の櫛、銅製の煙管が出土した。木製の櫛を副葬することから、埋葬されているのは女性であると思われる¹⁹⁾。

遺物 (Fig. 88, Pl. 26-120・13, 27-122, 35-157, 158)

7ST523明灰褐色土

国産陶器

甕 (1) ハズ (半胴) 甕である。口縁部は玉縁状に作られ、外反し、肥厚する。

鉄軸を、外面は口縁部と底部の二方向からかけ流し、口縁部と胴部の境は軸剥きされる。内面は、底部から口縁部にかけて螺旋状のハケ塗り施軸がなされる。底面も施軸される。格子目のタクキ痕がみられる。

胴部上方に「〇」に「大」の字の刻印が見られる。口縁端部、底面には目積みの痕跡も見られた。肥前産であると考えられる。

7ST523暗灰茶色土

金属製品

煙管 (1) 銅製品である。火皿部の直径は0.9cm、雁首部の長さは3.9cm、断面直径1.0cm、銅板の厚さ

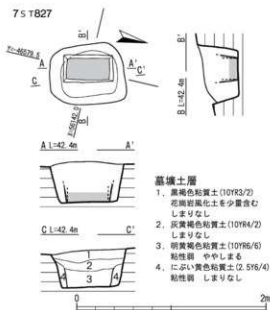


Fig. 96 7ST827平面図・土層図および
断面見通し図 (1/40)

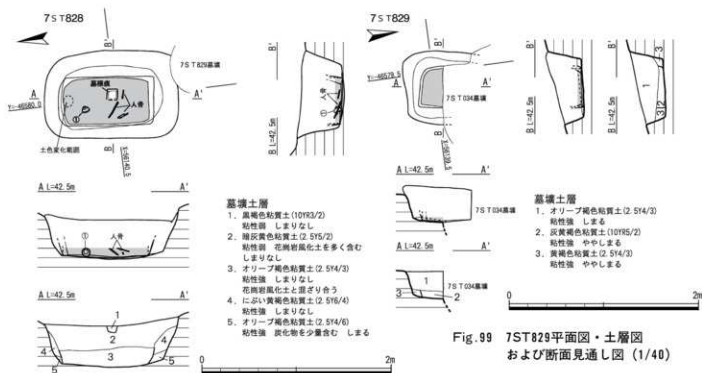


Fig. 97 7ST828平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

Fig. 99 7ST829平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

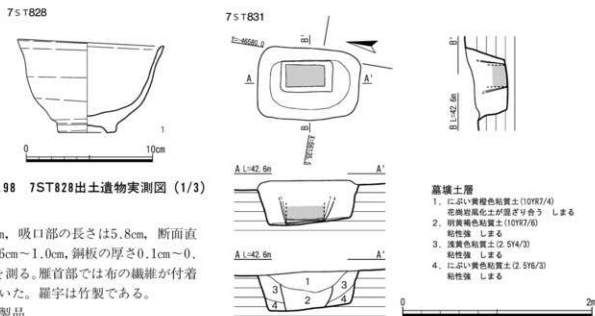


Fig. 98 7ST828出土遺物実測図 (1/3)

Fig. 100 7ST831平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

0.1cm, 吸口部の長さは5.8cm, 断面直径0.6cm~1.0cm, 銅板の厚さ0.1cm~0.3cmを測る。雁首部では布の織帷が付着していた。羅字は竹製である。

木製品

櫛(2) 木製の櫛で歯部の目が細かい。

7ST581

遺構 (Fig. 89)

A群北側に位置する近世墓である。

墓壇のみを検出し, 7ST001の墓壇に切られる。

墓壇の西側には崖面があり, 安全面を考慮して一部を掘り残した。

平面形は不整な長方形を呈する。棺の平面形態が確認でき, 土層断面の棺痕跡(3層)から長方形横棺

だと考えられる。

7ST704

遺構 (Fig. 91)

A群中央部よりやや南側、BG21区に位置する近世墓である。墓墳のみを検出し、7ST021の墓墳に切られる。

平面形は不整形を呈する。

棺は、平面観察および土層断面の棺痕跡(2層)から長方形横棺だと考えられる。また、棺痕跡の下層には6・7層が充填されている。

遺物 (Fig. 90, Pl. 25-119・2・3, 26-120・14)

7ST704暗灰茶色土

国産陶器

皿(1) 口縁部片が出土した。接合しないが後述する皿の口縁部片と同一個体と考えられる。灰軸が施軸されているが、屈曲部下は露胎である。肥前産である。

金属製品

鉄釘(2) 長さ1.8+αcm, 断面は長さ0.3cm, 幅0.2cmを測る。飾り金具の留金の可能性も考えられる。

7ST704明灰褐色土

国産陶器

皿(1) 胴部が屈曲し口縁部にいたる器形である。高台をケズリ出し、高台脇と高台の境は明瞭である。灰軸を用いて施軸される。高台は露胎である。胎土目積みの時期になると思われる。肥前産である。

7ST706

遺構 (Fig. 92)

BD21区に位置している。墓墳の北側の大半を7ST031の墓墳に切られる。

墓墳は、方形もしくは長方形と推定される。棺は、平面観察および土層断面で僅かであるが確認でき、方形または長方形になると思われる。

墓墳の深さは、約1.3mで、A群の墓墳としては非常に深い。遺物、人骨等は出土していない。

7ST768

遺構 (Fig. 93)

BF21区他に位置している。墓墳は7SK391の土坑に北東隅を切られる。

墓墳の形状は隅丸長方形であると思われる。棺は、平面観察および土層断面で確認され、方形棺または

7ST832

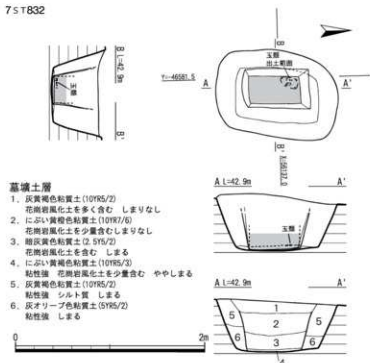


Fig.101 7ST832平面図・土層図および断面見通し図(1/40)

7ST834

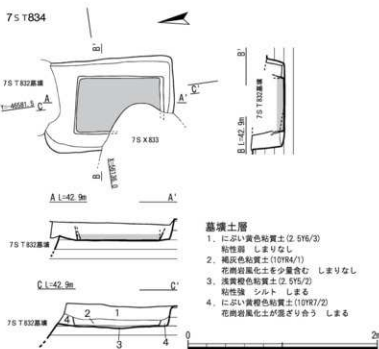


Fig.102 7ST834平面図・土層図および断面見通し図(1/40)

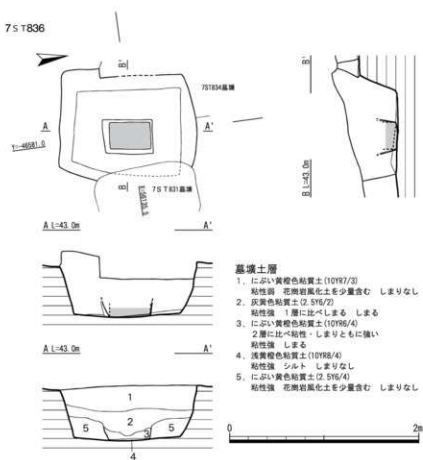


Fig.103 7ST836平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

横棺と思われる。

墓壇の大きさに対して棺痕跡が小さい。遺物、人骨等は出土していない。

7ST822

遺構 (Fig.94)

BE19区他に位置している。7ST523の墓壇に北側を切られる。

墓壇の形状は隅丸長方形である。棺は、平面観察および土層断面で確認でき、棺幅の広い方形あるいは長方形の棺と思われる。遺物、人骨等は出土していない。

7ST827

遺構 (Fig.96)

BE19区他に位置している。切り合い関係はない。墓壇の形状は隅丸方形である。棺の形状は平面、土層断面（3層）で確認され、長方形横棺と思われる。

遺物、人骨等は出土していない。墓壇、棺痕跡の規模が小さいため小児用の墓壇の可能性が高いと思われる。

7ST843, 7SX841・842

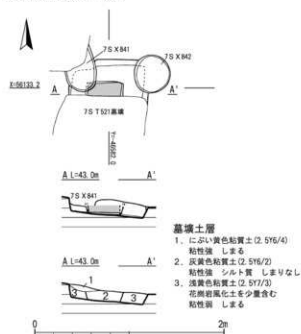


Fig.104 7ST843, 7SX841・842平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST828

遺構 (Fig.97)

BH19区に位置している。7ST829の墓壇に南東隅が若干切られる。

墓壇の形状は隅丸長方形である。棺痕跡は平面、土層断面（3層）で確認された。

また、棺痕跡の中央部から大腿骨、下肢骨などが「く」の字に曲がった形で出土した。また、棺の北西隅からは骨片は残存していないが頭蓋骨の腐食による土色の変化の範囲が円形に確認できた。このような人骨出土状況からも長方形横棺であったものと考えられる。

胸の部分と思われる位置からは肥前系陶器の椀が出土した。椀を抱かせる形で埋納したと思われるが、棺上に置かれたものが棺崩落時に落下した可能性も考慮する必要がある。

遺物 (Fig.98, Pl.25-119・4)

国産陶器

椀（1） 高台から斜め上方に向かって緩やかに胴部が延び、口縁部が外反する端反形の器形である。高台ケズリ出しで、高台脇もケズリが施されている。このため、高台脇と高台の境が明瞭である。軸葉は高台内まで、全面透明釉を施軸する。底部は砂目の跡が残る。

7ST829

遺構 (Fig.99)

BH19区に位置している。7ST034の墓壇に北半が切られる。墓壇が残存している南側において、方形あるいは長方形を呈する棺の平面形態および土層断面（2層）が確認できた。人骨等は出土していない。

7ST831

遺構 (Fig.100)

BG・BH19区に位置している。7ST836の墓壇を切る。

墓壇の形状は隅丸長方形である。墓壇の東側に偏った位置から棺のプランが検出された。

棺の形状は平面観察および、土層断面（2層）で確認され、長方形横棺と思われる。

遺物、人骨等は出土していない。

7ST832

遺構 (Fig.101)

BG19区他に位置している。墓壇のみを検出し、7ST834墓壇の北側を切る。

墓壇の形状は隅丸長方形である。棺の形状は平面観察および土層断面（3・4層）で確認され、長方形横棺と思われる。

遺物は副葬品として棺の北西隅から集中して数珠玉が出土した。人骨は出土しなかった。

7ST834

遺構 (Fig.102)

BG20区他に位置している。墓壇のみを検出し、7ST832の墓壇と7SX833に切られる。

墓壇の形状は隅丸長方形である。棺の形状は平面観察および土層断面（2・3層）で確認され、長方形横棺と思われる。

遺物は墓壇埋土から土師器片が数点出土している。人骨、副葬品は出土しなかった。

7ST836

遺構 (Fig.103)

BG19区他に位置している。墓壇のみを検出し、7ST831・834の墓壇に切られる。

墓壇の形状は長方形である。棺の形状は平面観察および土層断面（3・4層）で確認され、長方形横棺と思われる。

墓壇に対し棺痕跡が非常に小さい。墓壇の容積から判断し、小児用の棺の可能性がある。遺物、人骨等

は出土していない。

7ST843

遺構 (Fig.104)

BF20区他に位置している。包含層除去後に検出された。7ST521の墓域に南側の大半が切られ、7SX841・842に墓域北側の東西隅を切られる。

墓域は方形または長方形と推測される。棺の形状は平面観察および土層断面（2層）で僅かに確認され、方形棺、あるいは長方形棺と思われる。

遺物、人骨等は出土していない。

土坑

7SK329

遺構 (Fig.65)

BF21区に位置している。切り合い関係はない。土坑の形状は楕円形である。

墓域と考えていたが平面観察および土層断面での棺痕跡、人骨や副葬品等も出土しなかったため土坑と判断した。小児用の直葬の墓域の可能性も考えられる。

7SK391

遺構 (Fig.70)

BF21区に位置している。7ST023・024・768を切る。土坑の形状は円形である。

当初は墓域と考えていたが、平面観察および土層断面での棺痕跡は確認されず人骨、副葬品も出土しなかったため土坑と認識した。しかし、埋土や形態等、他の墓域との脈絡から近世墓の可能性も考えられる。遺物は出土していない。

7SK824

遺構 (Fig.95)

BI19区に位置している。切り合い関係はない。

楕円形の土坑が確認された。棺痕跡は確認されず、遺物・人骨等出土していないため、土坑と判断した。

その他の遺構

7SX841, 842

遺構 (Fig.104)

BG20区に位置している。

7ST843墓域の北東隅、北西隅を切る円形のピットである。掘り込みは浅く単層である。遺物などは出土していないが、墓域に掘削されていることから、葬送儀礼に伴う施設跡あるいは行為の痕跡ではないかと考えられる。

(文責 平島義孝・島内浩輔)

②B群

A地区B群は、7次調査範囲内の北側に位置する。

当群は近世～現代の墓で構成されるが、特に近世の墓の個体数が多く確認された。当群の旧地形は西から東へと傾斜をなすが、この地形を階段状に削平することにより墓域を造成している。

近世墓は本来、盛土を有していることは周知のことであるが、当群内の東側一帯に位置する近世墓には調査当初から盛土が確認されなかった。これは当群内で近世墓の先後関係による破壊によるものとも考えられる。また、後世に構築された現代墓の存在も盛土が消失した原因のひとつであると思われる。

7S T061

遺構 (Fig.107)

BN19区他に位置する。盛土が残存していた。盛土上では方形の墓標痕が認められる。

盛土を0.4m程度掘り下げた際、「野面石」または叩き石と思われる花崗岩石を確認した。

墓域は楕円形を呈する。約1.2m掘り下げた地点において長軸0.65m、短軸0.44mの長方形の棺痕跡を検出した。平面観察等により棺は長方形横棺であったと考えられる。

遺物は、銭貨とそれを収納していた布片を確認した。また人骨片も出土した。

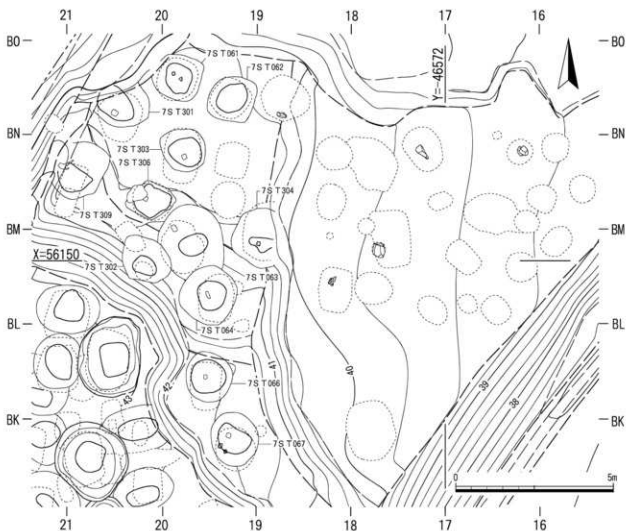


Fig.105 A地区B群近・現代墓配置図 盛土および墓墳 (1/120)

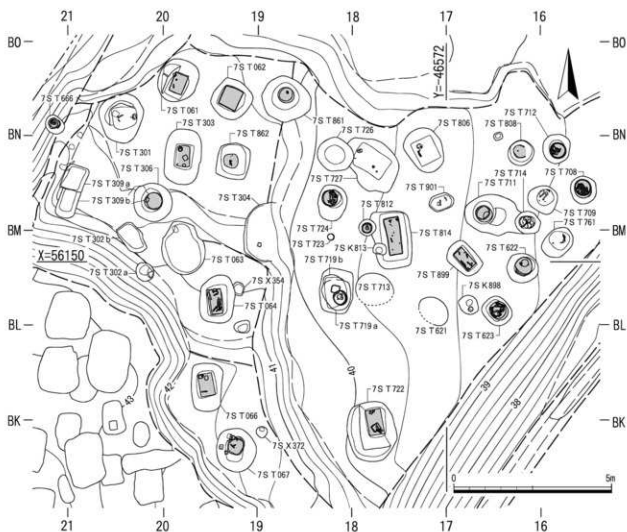


Fig.106 A地区B群近・現代墓配置図 墓墳および棺 (1/120)

遺物 (Fig.108, Pl.34-149,150)

7ST061明赤褐色土

銭貨

銅銭(1・2) 棺内から新寛永2枚, 古寛永2枚, 不明2枚が出土した。1は古寛永である。2はマ頭・京都七条銭である。

7ST062

遺構 (Fig.109)

BN18区他に位置し, 7ST061の東に隣接する。盛土が残存していた。

墓壇は隅丸方形を呈する。

約1.0m掘り下げた地点で長軸0.3m, 短軸0.61mの方形の棺痕跡を確認した。棺は方形縦棺であったと考えられる。遺物の出土は認められない。

7ST063

遺構 (Fig.110)

BL19区他に位置し, 7ST302の東に隣接する。盛土が残存していた。盛土は7ST302の盛土と一部重複するが, 土層観察において7ST063の盛土が先に造られ, 後に7ST302の盛土が造成されたことが確認できた。

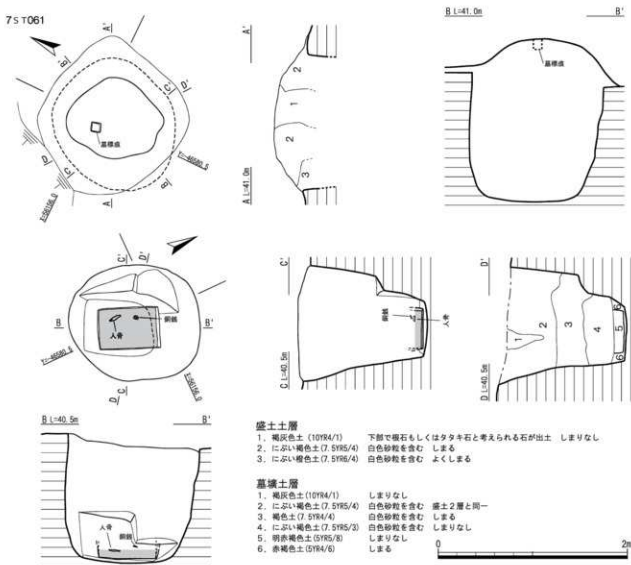


Fig.107 7ST061平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

また、盛土から大量の炭化物を確認した。墓域は楕円形を呈する。

墓域検出時、北側に方形の墓標痕を確認した。

墓域を掘り下げた結果、棺材は残存せず、棺痕跡も確認できなかった。

遺物の出土は認められない。

7ST064

遺構 (Fig.111)

BL19区に位置し、7ST063の南に隣接する。盛土が残存していた。当群内では他に比して盛土の残存が良好であるが、一部7ST063の盛土と重複関係にあり、土層観察において7ST063の盛土が先行し、後に7ST064の盛土が造成されたと考えられる。

盛土頂部からの息抜き竹^⑩の跡と考えられる筒状の痕跡が棺の検出面付近まで確認された。

墓域は楕円形を呈し、約1.0m掘り下げた地点で長軸0.80m、短軸0.44mの長方形の棺痕跡を検出した。棺材は確認できなかった。

遺物は、棺痕跡の中央部から、布製品に包まれた状態で銭貨が出土した。人骨の残存状況は良好であり、頭位が北向きである。

7ST061明赤褐色土



Fig.108 7ST061出土遺物実測図 (1/2)

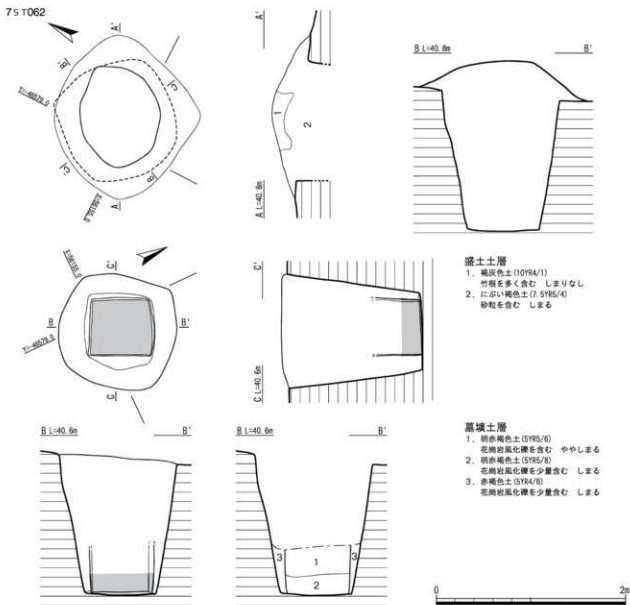


Fig.109 7ST062平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

人骨の出土状況や土層観察等から、棺は長方形横棺であったと考えられる。

遺物 (Fig.112, Pl.27-124・1)

7ST064黒褐色土

国産陶器

皿 (1) 口縁部片が出土した。口縁端部は内・外面に沈線状のものがはいる。内面には白化粧土で刷毛塗りした刷毛目文が見られる。

7ST066

遺構 (Fig.113)

BK19区に位置する。盛土が残存していた。墓壇は隅丸長方形を呈する。

墓壇検出時に、方形の墓標痕を確認した。また、約1.0mほど掘り下げた際に、長軸0.71m、短軸0.46mの長方形の棺痕跡を検出した。棺材は見られなかった。

遺物は棺痕跡内の北西側より数珠玉を3点確認した。人骨片も出土し、頭位は北である。

人骨の出土状況や土層観察等から、棺は長方形横棺であったと考えられる。

7ST063

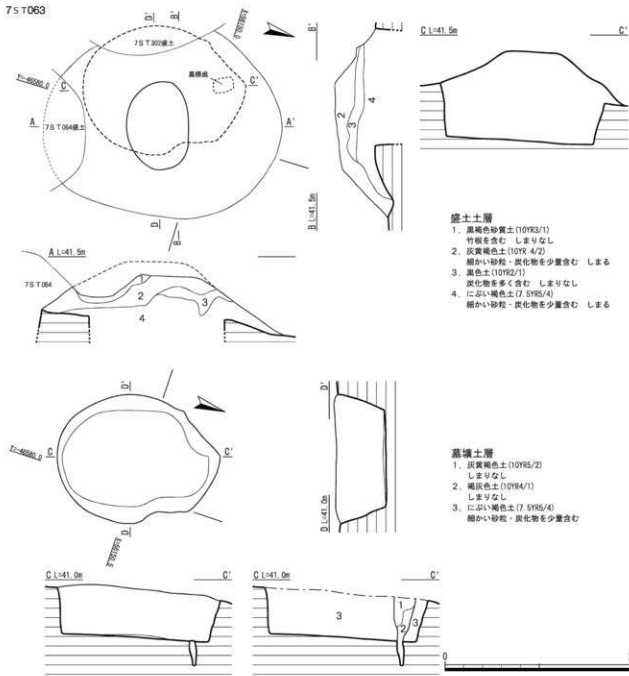


Fig. 110 7ST063平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST067

遺構 (Fig. 114)

BJ18区他に位置する。盛土が残存していた。盛土頂部に方形の墓標痕を確認した。

墓壇は円形を呈する。また、墓壇検出時に、西側より方形の墓標痕を確認した。

約0.3m掘り下げた地点で直径0.59mの円形の棺痕跡を検出した。棺材は残存していなかった。

遺物の出土は認められない。人骨は頭蓋骨、上腕骨等が出土しており、出土状態から座葬であったと考えられる。頭位は北である。

人骨の出土状況や棺痕跡から、棺は円形棺と考えられる。

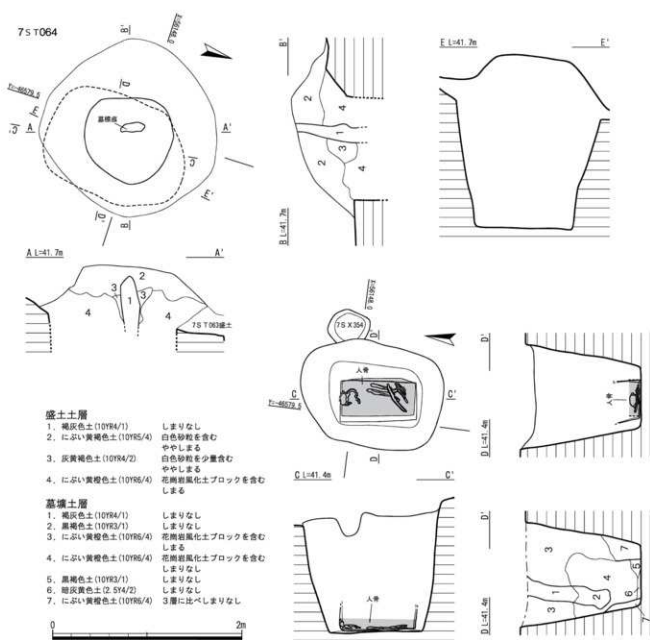


Fig.111 7ST064平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST301

遺構 (Fig.115)

BN20区に位置し、7ST061が隣接する。盛土が残存していた。

墓壇は円形を呈する。墓壇検出時に中央に方形の墓標痕を確認した。

約1.1m掘り下げた地点で長軸0.70m、短軸0.58mの方形の棺痕跡を検出した。棺材は残存していなかった。

遺物の出土は認められない。人骨は頭蓋骨等が出土しており、出土状態から座葬であったと考えられる。頭位は東である。

人骨の出土状況や土層観察等から棺は方形縦棺であったと考えられる。

7ST302

遺構 (Fig.116)

BL19区他に位置し7ST063に隣接する。盛土が残存し、土層観察において7ST063の盛土の後に造成されたことが確認できた。

7ST064黒褐色土



Fig.112 7ST064出土遺物実測図 (1/3)

75T066

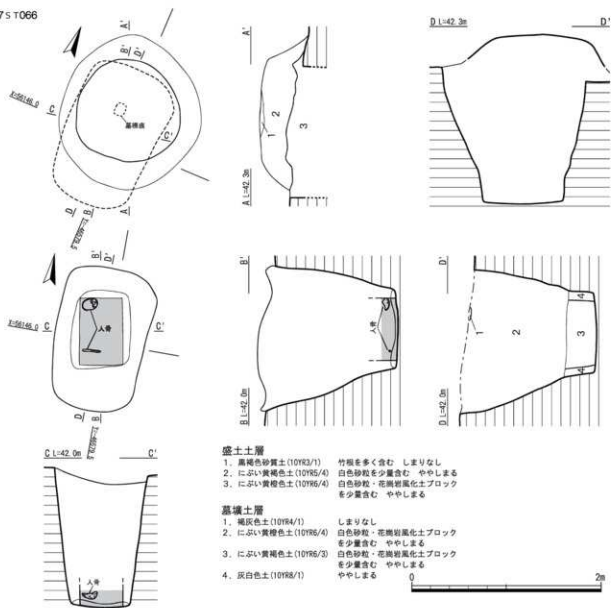


Fig.113 75T066平面図・土層図および断面見通し図(1/40)

墓壇は、盛土中央の直下に円形の墓壇aと、その北側に不整長方形の墓壇bを確認した。直径0.61m、短軸約0.56m、深さ約0.14mを測る。遺物の出土は認められない。bは、長軸約1.04m、短軸約0.65m、深さ約0.26mを測る。遺物の出土は認められない。a・bの時期差は不明である。両墓壇ともに棺材は見られなかった。

また、墓壇の規模から小児用の墓の可能性が考えられる。

75T303

遺構 (Fig.117)

BM・BN19区に位置する。盛土が残存していた。墓壇は隅丸長方形を呈する。

墓壇検出時に中央に方形の墓標痕を確認した。約1.1m掘り下げた地点では、長さ0.70m、短軸0.41mの長方形の棺痕跡を検出した。

遺物は棺痕跡内の南側から数珠玉が55点出土し、その内の1つには糸の付着が確認される。人骨は頭蓋骨等が出土しており、頭位は北である。

人骨の出土状況や土層観察等から長方形横棺であったと考えられる。

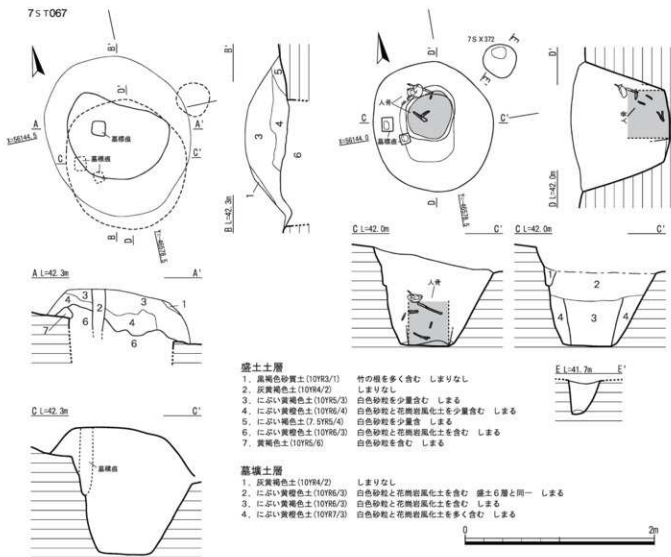


Fig.114 7ST067平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig.118, Pl.27-124・2)

7ST303にぶい黄褐色土

国産磁器

小坏 (1) 高台をケズリ出し、口縁端部は外反する。全面に透明釉を施軸する。

7ST304

遺構 (Fig.119)

BL18区他に位置する盛土状の遺構である。盛土頂部から方形の墓塚痕を確認した。

約10cm掘り下げた地点で地山面を確認し、棺は確認できなかった。これは盛土が後世の削平を受け、造成時の位置が判断できなかったため、盛土のみを造成し墓標を立てたものと推定する。

7ST306

遺構 (Fig.120)

BM19区他に位置する。盛土が残存していた。盛土頂部に方形の墓塚痕を確認した。

墓塚は円形を呈する。約1.8m掘り下げた地点で直径約0.57mの円形の棺痕跡を検出した。人骨の出土状況や土層から棺は円形棺であったと考えられる。

遺物は銭貨が出土した。人骨も出土し、その残存状況から座葬の可能性が高い。

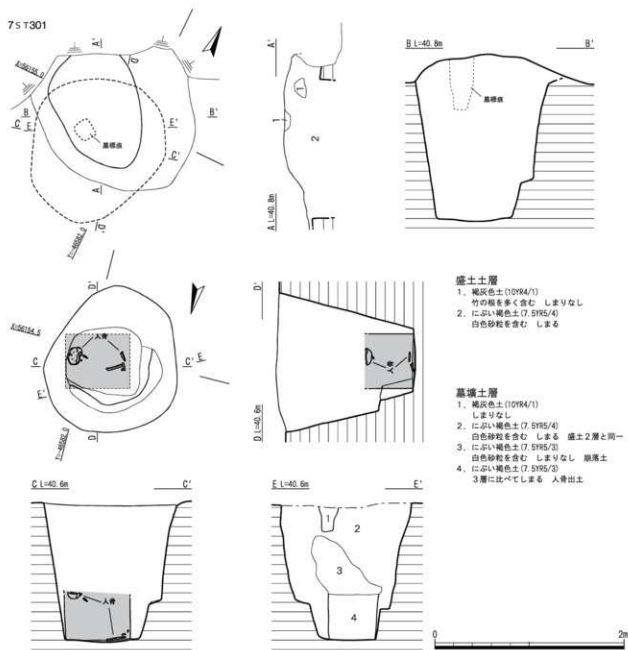


Fig.115 7ST301平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST309

遺構 (Fig.121)

BM20区他に位置し、一部削平を受けている。盛土が残存していた。

墓城aは方形を呈する。

墓城bは、墓城aに切られており隅丸長方形を呈する。その規模は長軸1.08m、短軸0.62m、深さ0.64mを測る。

遺物の出土は認められない。

7ST622

遺構 (Fig.122)

重機掘削によって甕棺が検出された遺構でBL16区に位置する。

甕棺内には埋土の流入が認められ、埋土上面まで冠水していた。

当遺構からは人骨が出土しており、その埋葬体位は座葬の可能性が高い。

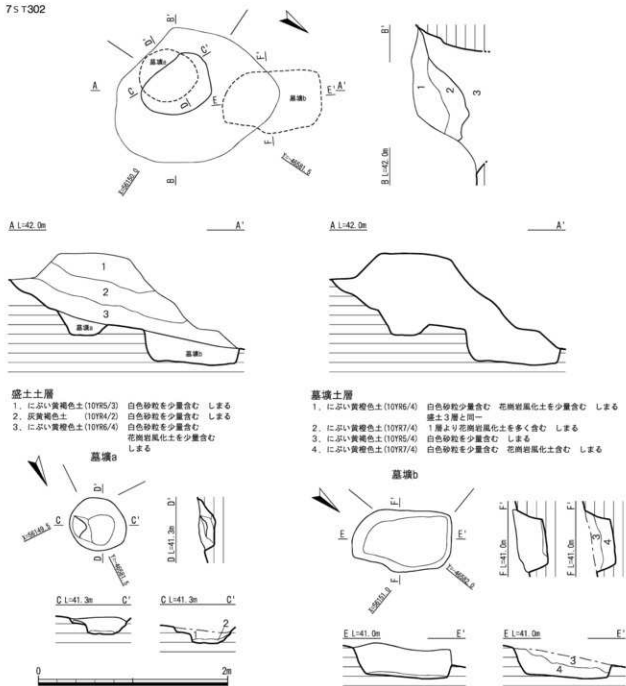


Fig. 116 7ST302平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig. 123, Pl. 27-124・3, 35-159)

7ST622暗黒赤褐色土

国産陶器

甕 (1) ハンズ (半胴) 甕である。口縁部は玉縁状に作られ、外反し、肥厚する。鉄軸を内・外面とも口縁部から流しかけ、底部は露胎である。外面は口縁部と胴部の境は軸刺ぎされる。タタキ痕跡は見られないが、断面が縞状に観察できることからタタキが行われている。刻印はない。口縁端部、底部には砂目積みの痕跡が見られた。肥前産である。

7ST622灰黄褐色土

国産磁器

瓶 (1) 形抜きで整形される。近代以降のものと考えられる。

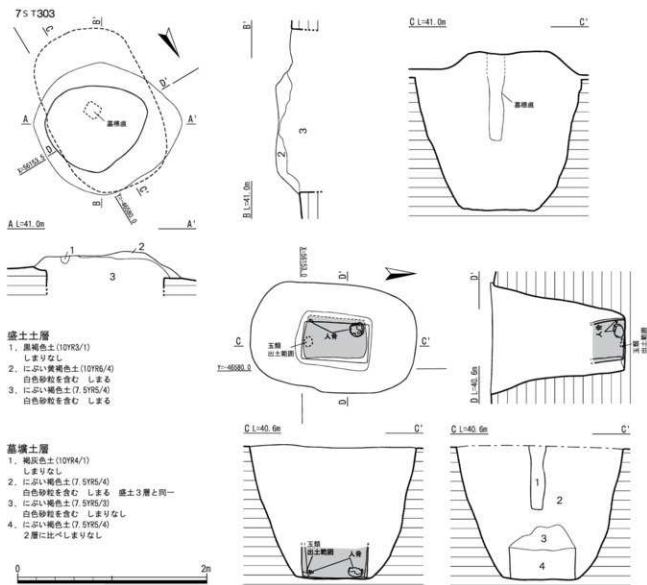


Fig.117 7ST303平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST623

遺構 (Fig.124)

重機掘削によって検出されたBK16区他の遺構で、7ST622の南西側に位置する。

墓壇は隅丸方形を呈する。棺は平面観察および土層断面の棺痕跡 (1層) より円形棺と推定できる。

棺内からは人骨の出土が認められたが、B群内では最も残存状況が良好である。人骨の埋葬体位は座葬の可能性が高い。

遺物は銭貨が6枚確認されている。

7ST303にぶい黄褐色土

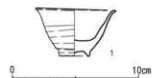


Fig.118 7ST303出土遺物実測図 (1/3)

7ST666

遺構 (Fig.126)

BN21区で検出した。調査終了後の開発工事中に見えられたため、大部分が重機による削平を受けていた。盛土の有無は不明である。

墓壇は不整形円形を呈し、甕棺を有する。明治期以降と思われる国産磁器の小環が1点出土しているが、この遺物の帰属する遺構が盛土か墓壇か不明である。

また棺内から人骨が出土しているが、1体分はないことから改葬墓の可能性が高い。

遺物 (Fig.125, Pl.27-124・4, 36-160)

国産陶器

甕 (1) ハンズ (半胴) 甕である。器高47.5cm, 復原口径31.8cm, 底部径17.1cmを測る。

輪積目が認められる。口縁部には回転ナデを施し、体部は全体的にタタキ後にナデを施す。底部内面の一部に指頭圧痕が見られる。釉は1度内・外面全体に薄く施したあと、内面のみ掛け釉が胴部付近まで施されている。

国産磁器

小坏 (2) 底部は上げ底で、口縁部が直立する器形である。ケズリは見られず、型を用いた成形である。肥前産であると考えられる。

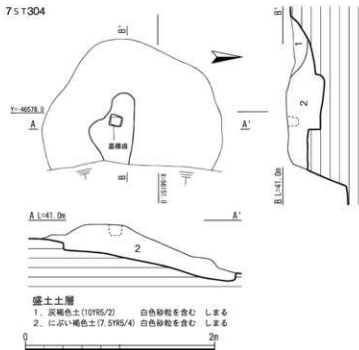


Fig.119 7ST304平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST708

遺構 (Fig.127)

BM15区に位置する遺構である。

墓壇は円形を呈し、遺体収納容器としては甕棺が認められた。

また、甕棺底部残付には「通古賀 △川形 ■ 青柳又一様」と見られる墨書が認められ、本来、生活用具としての甕が葬送用具へ転用された可能性も考えられる。

棺内には人骨が確認されたが、保存状態は良好である。頭蓋骨が残存していた。

その出土状況から埋葬体位は座葬の可能性が高い。

人骨の上面まで冠水しており、人骨の保存に寄与したものと考えられる。

遺物は小玉等が出土している。

遺物 (Fig.128, Pl.28-126・1, 32-139・131-178, 36-161)

国産陶器

甕 (1) ハンズ (半胴) 甕である。口縁部は玉縁状に作られ、外反し、肥厚する。

鉄釉を口縁部と底部の2方向からかけ流したものである。口縁端部は釉のふき取り、底部付近は布で釉を塗り延ばしている。また、口縁部と胴部の境は釉剥ぎされる。底面は露胎で、墨書が見られる。胴部には格子目のタタキ痕が見られる。口縁端部、底部には目積みの痕跡も見られた。肥前産である。

墨書は、以下の通りである。なお、△は屋号の「ヤマ」である。

「(右) 通ノ古賀」

「(中) △川形 ■」

「(左) 青柳又一様」

7ST708灰褐色土

金属製品

用途不明品 (1) 円筒状の製品の中に断面直径0.3cmの鉄製品が入り込んでいる状態である。円筒状製品は長さ5.5+αcm, 断面直径1.2cm前後を測り、残存状態が悪いため材質は不明である。矢柄の可能性も考えられる。

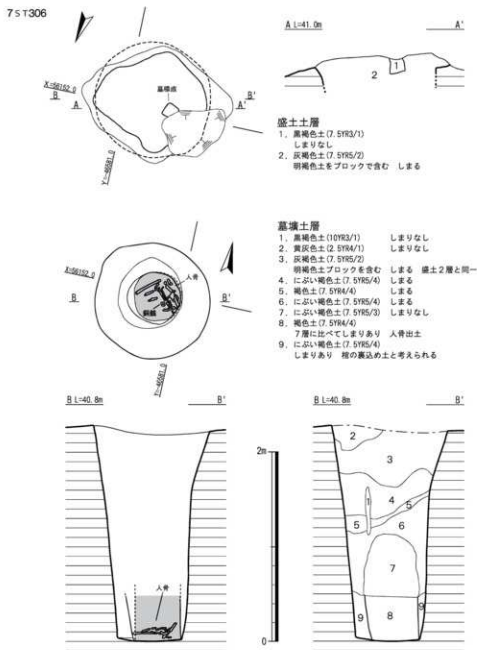


Fig.120 7ST306平面図・土層図および断面見通し図(1/40)

その他

小玉(2~4) 棺内から木製小玉が47点出土した。これらは、直径4.5~5.5mm、厚さ3.5~4.7mmの範囲に集中するが、平均値を上回る大きさの小玉が4点出土した。

2は直径7.2mmを測る。他の小玉と比較して大きい。母珠かと思われる。3は平均的な大きさの小玉である。4は平均値より若干大きく、四天珠の可能性が考えられる。

7ST709

遺構 (Fig.130, Pl.5-19)

BM15区他、7ST708の西側に位置する。墓壇は不整な円形を呈し、棺は円形の平面形態が確認された。

土層断面の棺痕跡(3層)より、桶棺と推定される。

棺内には埋土が流入したことが土層観察から確認されるが、これは桶蓋が崩落した後に埋土が流入したことを意味する。本来の桶蓋は2・4層の境に位置すると思われる。桶蓋の崩壊が1層の凹みへとつなが

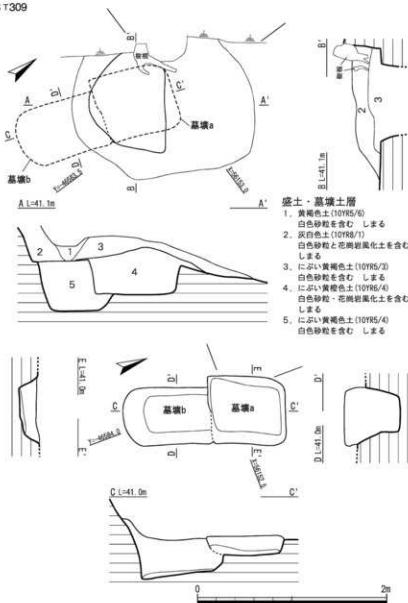


Fig. 121 75T309平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

ると考えられよう。

棺内からは人骨が出土しており、埋葬体位は座葬である。

遺物は釘・煙管が確認されている。釘は桶の固定に使用された可能性が高い。煙管は雁首・吸い口が直線に出土していることから、埋土流入等による遺物移動の可能性は低い。したがって、煙管本来の長さは出土状況から判断して30cm前後のものと思われる。

遺物 (Fig. 129, Pl. 28-126・2・3・4)

金属製品

鉄釘 (1・2) 頭部が屈曲する鉄釘である。1は頭部屈曲部では飾り金具と思われる厚さ0.1cm以下の板状鉄製品が見られる。木質は板状鉄製品下位から見られ、2つの棺材の目目が確認できる。木質残存範囲は上から1.7cm・2.1cmを測る。2は頭部のみが残存する。

煙管 (3) 銅製品である。火皿部の直径は1.5cm、雁首部の長さは4.2cm、断面直径1.0cm、銅板の厚さ0.1cm、吸い口の長さは7.4cm、断面直径0.5~0.9cm、銅板の厚さ0.1cmを測る。雁首部・吸い口では布の織羅が付着していた。羅字は竹製である。

7ST622暗黒赤褐色土

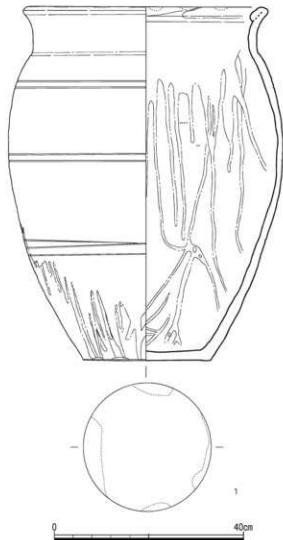


Fig.123 7ST622出土遺物実測図 (1/3, 1/8)

7ST622灰黄褐色土

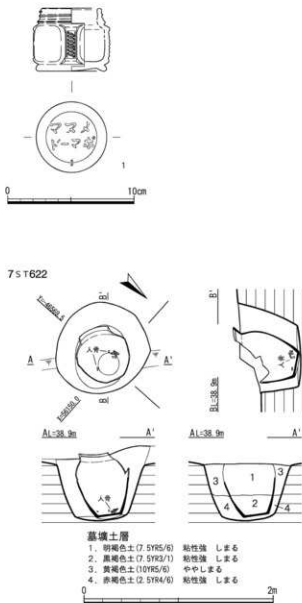


Fig.122 7ST622平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST711

遺構 (Fig.131)

BL16区他に位置する。墓坑は7ST711a・bが検出された。重複遺構の先後関係は7ST711aが古く、7ST711bが新しいことが確認された。

墓坑は不整な楕円形を呈する。

墓坑aの棺の平面形態は当初は確認できなかったが、遺物の出土位置や他の遺構との関連から、円形棺の可能性もある。

遺物は銭貨が5枚重なった状態で出土しており、紐で銭貨を束ねた可能性が高い。

墓坑bの遺体収納容器は甕を用いていた。

土層観察によれば甕は西側へ傾斜していたが、これは埋葬時の埋め戻しの際、東側からの埋土の流入により土圧によって傾斜したと推測できる。

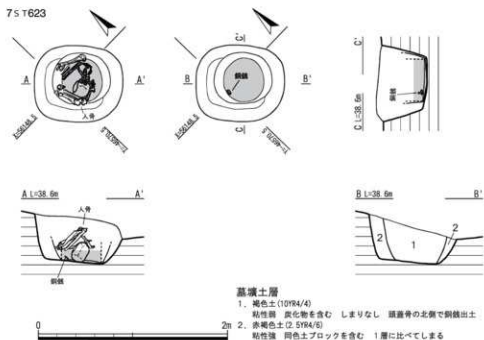


Fig. 124 7ST623平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST666

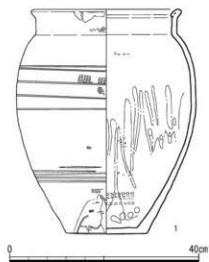


Fig. 125 7ST666出土遺物
実測図 (1/3, 1/8)

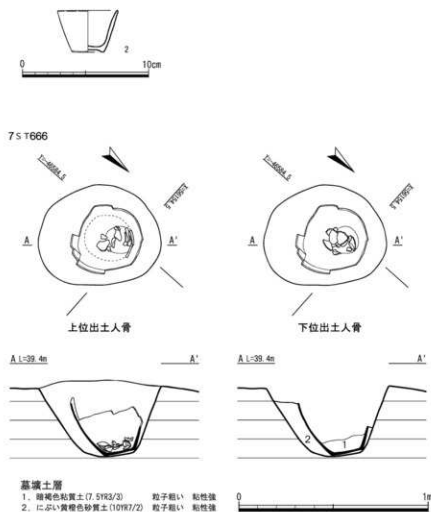


Fig. 126 7ST666平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

75T708

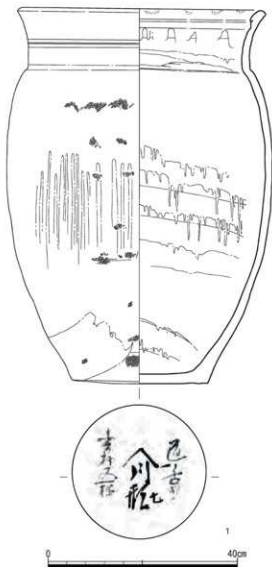


Fig. 128 75T708出土遺物
実測図 (1/1, 1/3, 1/8)

遺物

(Fig. 132, Pl. 27-124・5, 36-162, 163)

国産陶器

甕 (1) ハンズ (半胴) 甕である。口縁部は玉縁状に作られ、外反し、肥厚する。

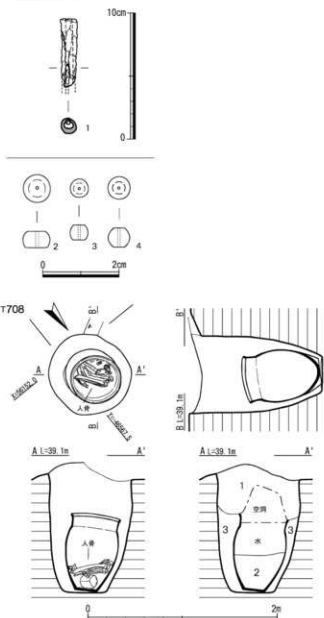
鉄釉を外面は二回以上流しかけ、内面は一回の流しかけである。外面は口縁部と胴部の境は軸剥ぎされ、内面は見込み、胴部の釉をふき取る。また、底面も施釉される。胴部には格子目のタキ痕が見られる。胴部上方には「○」に「上」の字の刻印が見られる。口縁端部、底部には目積みの痕跡も見られた。肥前産である。

75T711灰褐色土

国産陶器

土胎 (1) 胴部片が出土した。上半部に緑釉が認められる。下部と内面は露胎である。肥前産である。

75T708灰褐色土



墓填土層

1. 灰褐色土 (7.5YR4/2) 花崗岩風化土ブロックを含む
2. 暗灰色土 (7.5YR6/1) 花崗岩風化土ブロックを少量含む
3. 灰白色土 (7.5YR8/2) 粘性強

Fig. 127 75T708平面図・土層図および
断面見通し図 (1/40)

75T709

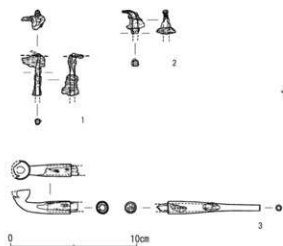
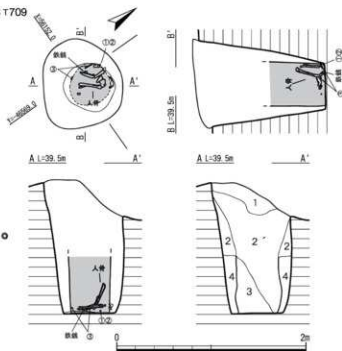


Fig. 129 75T709出土遺物実測図 (1/3)

75T709

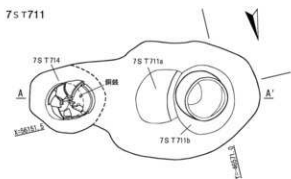


墓墳土層

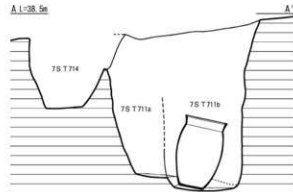
- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------|
| 1. 灰褐色土 (7.5YR4/2)
硬土 | 3. 褐灰色土 (10YR7/4)
粘性弱 しまりなし |
| 2. 灰褐色土 (7.5YR4/2)
粘性弱 花崗岩風化土を含む | 4. 黒褐色土 (5Y6/2)
しまる |
| 2* 2層が崩落した土 | |

Fig. 130 75T709平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75T711



A L=38.5m



墓墳土層

- | |
|---|
| 1. 明褐色土 (7.5YR5/5)
粘性弱 花崗岩風化層を含む
磁砂層を含む |
| 2. 明褐色土 (7.5YR5/5)
褐色砂と交互に堆積 花崗岩風化層を含む |
| 3. 明褐色土 (7.5YR5/5)
1層と同じ 磁砂層は含まない
花崗岩風化層を含む |
| 4. 褐色土 (7.5YR4/3)
粘性弱 しまりなし |
| 5. 褐色土 (7.5YR4/4)
礫の埋土 |
| 6. 褐色土 (7.5YR4/4)
粘性弱 花崗岩風化土を含む しまりなし |
| 7. 褐色土 (7.5YR4/3)
明赤褐色土を含む しまりなし |
| 8. 褐色土 (7.5YR4/4)
明赤褐色土を中や多く含む しまりなし |
| 9. 褐色土 (7.5YR4/4)
礫安定用粘土敷き
8層に似る しまる |

Fig. 131 75T711平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST712

遺構 (Fig. 133, Pl. 5-20)

BM15区, 7ST708の北西に位置する。

墓壇の平面形態は円形を呈する。

棺の平面形態も円形であり、甕棺であることが確認された。

甕内からは棺蓋および人骨が出土した。棺蓋では椀木が見られた。

7ST708同様に、甕棺内に冠水していることが、木製品・人骨の保存状態に寄与したものと考えられる。

遺物では他に、足袋の留め金(小鈎)も出土している。

遺物 (Fig. 134, Pl. 28-126・8~13, 29-127, 128, 36-164, 165)

7ST712灰褐色土

国産陶器

壺(1) 高台から斜め上方に丸く立ち上がる器形。高台と高台脇は不明瞭である。内面はロクロ目を明瞭に残す。暗赤黒色に光沢をもつ釉が施される。胎土に白色砂粒をやや多く含む。高取系かと思われる。

甕(2) ハンズ(半割)甕である。口縁部は玉縁状に作られ、外反し、肥厚する。鉄釉を口縁部から流しかけ、内面は布状のもので底部から口縁部にかけて螺旋状に塗られている。底部は露胎である。外面は口縁部と胴部の境は釉剥ぎされる。胴部には格子目のタタキ痕が見られる。胴部上方には「司製」と刻印がある。口縁端部、底部には砂目積みの痕跡も見られた。肥前産である。

7ST712緑灰色土

金属製品

小鈎(1) 鉄製品である。長さ1.7cm, 幅1.4cm, 厚さ0.1cm, 3つの小孔の直径0.2cmを測る。

木製品

櫛(2) 小型の木製の櫛である。櫛の歯部は残存していない。目は細かい。

甕蓋(3) 甕棺の蓋である。2枚を組み合わせた正八面形の形状にしている。椀は2本確認され、金属製の釘で打ち付けられている。最大長は45cmで甕の口径よりも小さいため屈曲部付近に落し蓋状に据えたものと思われる。

7ST713

遺構 (Fig. 106)

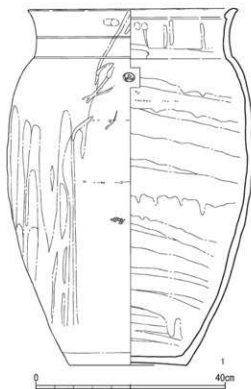
BL17区にて墓壇のみ検出した近世墓である。木の根により掘り下げる事が困難だったため、1/100の略測図にのみ記録して調査を終了した。

遺物 (Fig. 135, Pl. 40-183)

石製品

石製墓標(1) 花崗岩の自然石を用い成形している。正面は平坦な面調整を施す。墓碑銘が正面の若干窪んだ面に彫られている。

7ST711



7ST711灰褐色土

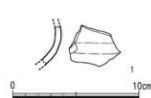


Fig. 132 7ST711出土遺物実測図(1/3, 1/8)

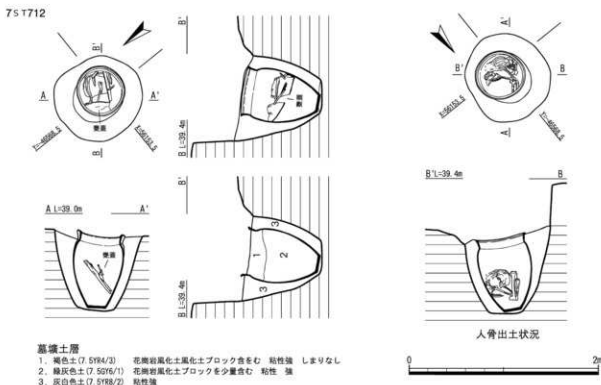


Fig.133 7ST712平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

〔右〕文化三年

〔中〕釈尼妙吟信女

〔左〕十月四日

7ST714

遺構 (Fig.136)

7ST711の東、BL16区他に位置する。墓壇のみが検出され、7ST711の墓壇と切り合った状態であった。7ST714の墓壇は7ST711の墓壇より新しい遺構であることが確認された。

墓壇は不整な円形を呈する。甕棺を用いている。

甕は西側へ傾斜していることから、埋葬時の埋め戻しは東方向から埋土充填した可能性が高い。

また、甕棺は東側のみが割れた状態で検出されている。本調査区内の他の遺構にも例がないことから、改葬等により、埋葬後に一度掘り返された可能性が高い。

遺物は銭貨が1枚出土しているが墓壇検出面からの出土である。銭貨が7ST714に伴うものであれば、墓が掘り返された仮説を補強する。

遺物 (Fig.137, Pl.34-151, 37-166)

銭貨

銅銭 (1) 棺内から1枚出土した。新寛永の文銭である。

7ST714明褐色土

国産陶器

甕 (1) 直立気味の短い口縁を持つ。口縁端部はT字形である。胴部上半は沈線状に轆轤目を残す。釉薬は、口縁部から胴部にかけて黄褐色の釉で施軸している。口縁部の上部は白色の釉で施軸し、胴部上半には白色釉のあとに青灰色の釉で意匠化している。底面は露胎である。高取系と思われる。

7S T712灰褐色土



7S T712緑灰色土

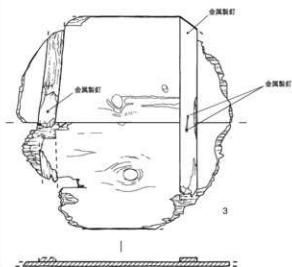
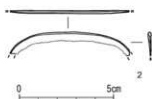
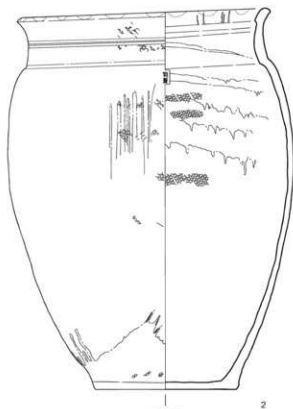


Fig.134 7ST712出土遺物実測図 (1/1, 1/2, 1/3, 1/8)

7S T719

遺構 (Fig.138)

BL17区他に位置する。7ST719は2つの異なる墓塚が切り合っており、墓塚aと墓塚bと個別に報告する。先後関係は墓塚a→墓塚bの順である。

検出時には1辺20cm四方の石製墓標痕が確認され、墓塚aは不整楕円形を呈するが、墓塚bは不明である。墓塚aからは、甕棺が出土した。

土層観察で甕は南側へ傾斜しており、埋葬時に北側から埋土の充填が行われたことがわかる。

甕棺内からは人骨・土製品が出土している。また甕の口縁片が北側へ集中していることから、改葬等により掘り返された可能性が高い。

7ST713

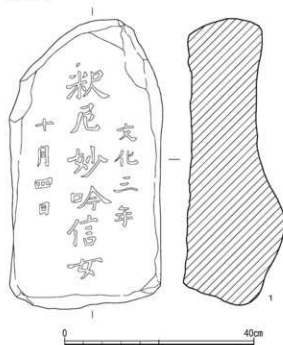


Fig. 135 7ST713出土遺物実測図 (1/8)

7ST714



7ST714明褐色土

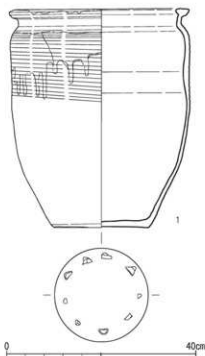


Fig. 137 7ST714出土遺物実測図 (1/2, 1/8)

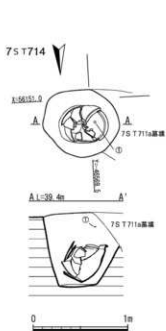


Fig. 136 7ST714平面・土層図および断面見通し図(1/40)

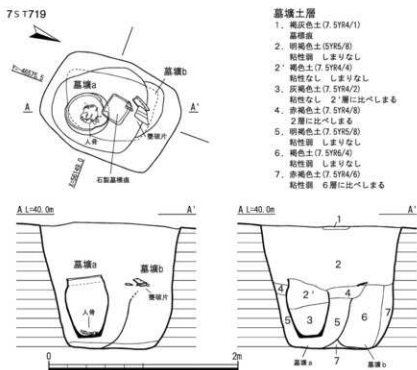
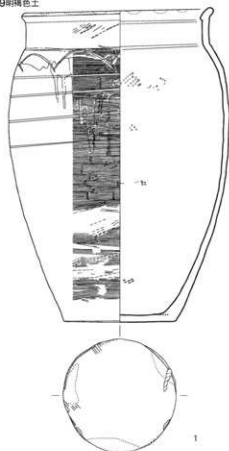


Fig. 138 7ST719平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

墓塚土層

1. 褐灰色土 (7. 5YR4/1)
墓塚底
2. 明褐色土 (5YR5/0)
粘性弱 しまりなし
- 2' 褐色土 (7. 5YR4/4)
粘性なし しまりなし
3. 灰褐色土 (7. 5YR4/2)
粘性なし 2'層に比べしまる
4. 赤褐色土 (7. 5YR4/8)
2層に比べしまる
5. 明褐色土 (7. 5YR5/8)
粘性弱 しまりなし
6. 褐色土 (7. 5YR6/4)
粘性弱 しまりなし
7. 赤褐色土 (7. 5YR4/8)
粘性弱 6層に比べしまる

75 T719 褐色土



75 T719 褐色土

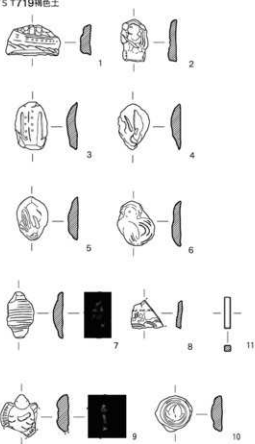
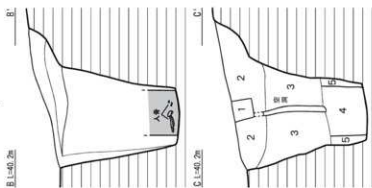
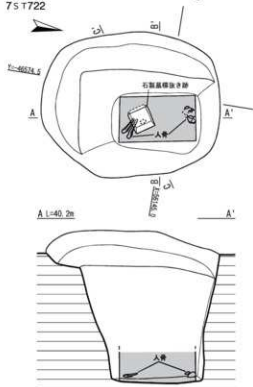


Fig. 139 75T719出土遺物実測図(1/2, 1/8)

75 T722



墓壇土層

1. 褐色土(7.5YR4/2)
石製墓壇遺き痕
2. 褐色土(7.5YR4/4)
粘性強 花崗岩風化土を含む しまり
3. 褐色土(7.5YR4/3)
花崗岩風化土・明赤褐色土を含む
4. 暗褐色土(7.5YR3/3)
粘性強 しまりなし
5. 暗褐色土(7.5YR3/4)
粘性弱 しまりなし



Fig. 140 75T722平面図・土層図および断面見通し図(1/40)

墓域bの棺の平面形態等について不明である。
 棺内からは人骨・遺物等は認められなかった。
 遺物 (Fig. 139, Pl. 28-125, 37-167)

7ST719明褐色土

国産陶器

甕 (1) ハンズ(半胴)甕である。他の近世墓の甕と比べ小型である。口縁部は玉縁状に作られ、外反し、肥厚する。胴部外面はハケ目が見られている。鉄軸を内外面とも口縁部から流しかけ、底部は露胎である。見込みの軸はふき取りを行っている。口縁端部と口縁部と胴部の境は軸剥ぎされる。胴部上半に波文様を沈線とその下に一条の沈線を螺旋状に施している。内面にタタキ痕が見られる。刻印はない。口縁端部、底部には砂目積みの痕跡が見られた。肥前産である。

7ST719褐色土

土製品

おはじき (1-10) 甕棺内から計10点出土した。1は船で、丸い船窓がつく。2は依乗り大黒である。3は軍服と考えられる。4・5は兎と思われる。6は鶏である。7は提灯と思われる。8は欠損しており、不明である。9は亀で表面に墨書がある。10は桃の実である。船や軍服の状況から、明治以降の所産のものと思われる。

その他

鉛筆芯 (11) 0.3×0.3cmの断面正方形の形状である。使用痕はみられない。

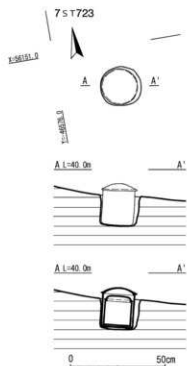


Fig. 141 7ST723平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

7ST724

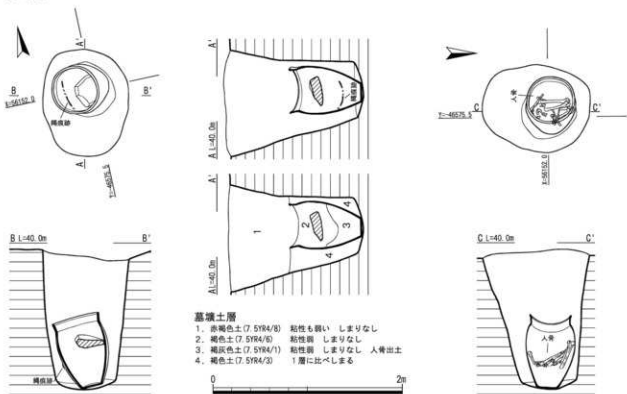
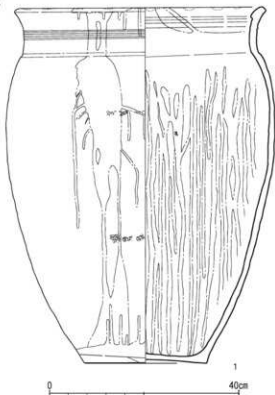


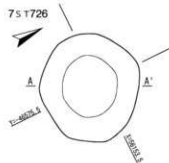
Fig. 142 7ST724平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST724

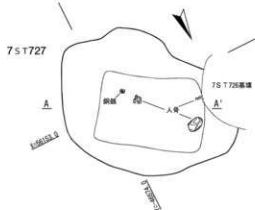


7ST724褐色土

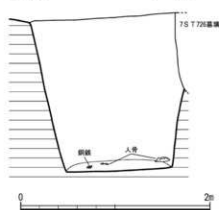
Fig. 143 7ST724出土遺物実測図 (1/1, 1/8)

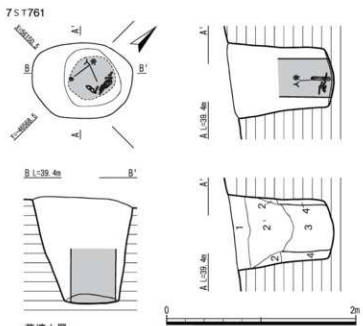


A L=40.0m

Fig. 144 7ST726平面図・土層図および
断面見通し図 (1/40)

A L=40.0m

Fig. 145 7ST727平面図・土層図および
断面見通し図 (1/40)



基壇土層

1. 灰色土(7.5YR4/2) 盛土 しまりなし
2. 灰褐色土(7.5YR4/2) 基壇埋土 灰白色の肥礫岩風化土ブロックを含む 粘性弱
3. 灰褐色土(7.5YR4/2) 基本的に2層と同じ
4. 褐色土(7.5YR4/1) 階内に落ちた崩落土 2層に比べしる 粘性強
5. 黒褐色土(10YR2/2) 階外の裏詰め土 3層に比べしる

Fig.146 7ST761平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST761増補色土

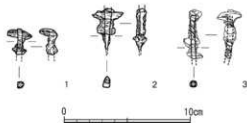
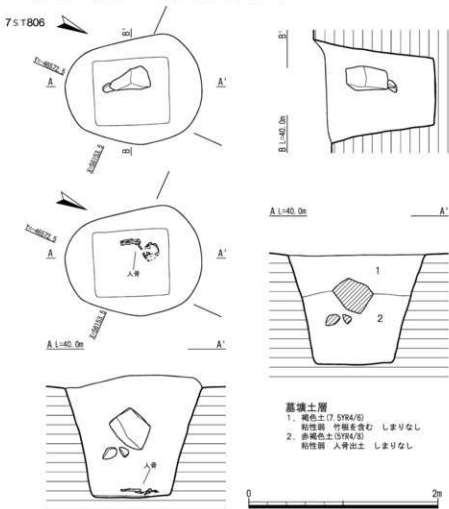


Fig.147 7ST761出土遺物実測図 (1/3)



基壇土層

1. 褐色土(7.5YR4/3) 粘性弱 竹藪を含む しまりなし
2. 赤褐色土(5YR4/3) 粘性弱 人骨出土 しまりなし

Fig.148 7ST806平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

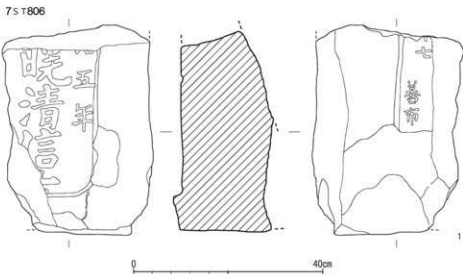


Fig.149 7ST806出土遺物実測図(1/8)

7ST722

遺構 (Fig.140, Pl.5-21,22)

BJ17区他に位置する。墓壇は楕円形を呈する。墓壇検出時には1辺20cm四方の石製墓標抜き取り痕が確認できた。

棺痕跡は平面観察および土層断面(4層)より確認された。また、棺痕跡内からは人骨が出土し、頭位は北向きであった。

人骨出土状況および平面観察等から棺は長方形横棺であったと考えられる。主軸は南北方向であった。また、土層断面に幅6cm程の空洞化した箇所が見られた。息抜痕跡の可能性もある。空洞化した箇所内は部分的に繊維質が腐食した状態が見られた。

繊維質は黒色に変色しているが繊維形態から竹を素材にした可能性が考えられる。

7ST723

遺構 (Fig.141, Pl.37-168)

BL18区他、7ST719の北側に位置する。

調査時にはすでに白色の蔵骨器が露出していた。

この遺構の時期は現代に比定できる。

7ST724

遺構 (Fig.142)

BM18区、7ST723の北側に位置する。

墓壇は直径約1.0m前後の楕円形を呈する。

墓壇内からは甕棺が確認された。甕棺は全体的に北側寄りへ置かれ西側へ傾斜していたことから、埋土を東側から充填したものと思われる。

甕棺内からは蓋石が東側へずれて傾斜した状態で出土した。

土層観察では蓋材の痕跡は認められなかったが木製の可能性が高い。また、甕棺外面に密着する状態で藁縄が確認されている。これは甕を墓壇内へ安置する際、甕を結索するための縄と思われるが、劣化が著しいため取り上げは不可能であった。

遺物 (Fig.143, Pl.28-126・14-17, 37-169)

国産陶器

甕(1) ハンス(半胴)甕である。口縁部は玉縁状に作られ、外反し、肥厚する。鉄軸を外面に全面施軸し、1回目は口縁部から、2回目は底部から流しが行っている。内面は2回以上口縁部から流しが

けをおこない、見込みの軸をふき取る。底面も施釉される。口縁端部と口縁部と胴部の境は釉割きされる。外面に格子状のタタキ痕が見られる。刻印はない。口縁端部、底部には目積みの痕跡がみられた。肥前産である。

7ST724 褐灰色土

金属製品

小鈎(1) 鉄製品である。長さ1.7cm、幅1.6cm、厚さ0.1~0.5cm、3つの小孔の直径0.2cmを測る。製造元の名前と思われる銘が刻まれているが、解读できない。

7ST726

遺構 (Fig.144)

BM17区他に位置する。棺等は検出されず、また、人骨・遺物の出土も確認されなかったが、平面形態および深さから近世墓と考えられる。

7ST727

遺構 (Fig.145)

BM17区他、7ST726墓墳の南東に重複した状態で確認された。切り合い関係から、7ST727の墓墳は、7ST726の墓墳以前に作られたものである。

墓墳は楕円形を呈する。

人骨は小片であるが確認され、また、遺物も銭貨が6枚、布か付着する状態で出土している。この布は銭貨を入れた取納袋と思われる。

7ST761

遺構 (Fig.146)

BL15区他、7ST714の東方向に位置する。墓墳は楕円形を呈する。

棺材は残存していないが、平面および土層の観察から円形棺であると考えられる。棺内からは人骨が出土している。

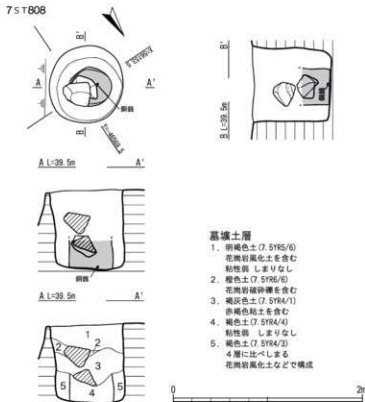


Fig.150 7ST808平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

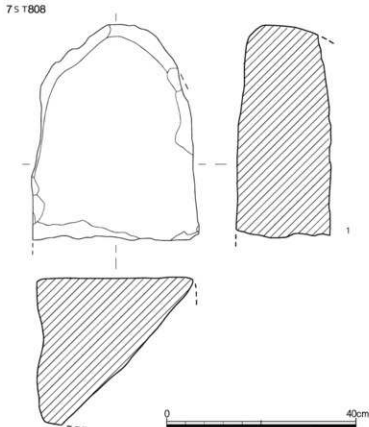


Fig.151 7ST808出土遺物実測図 (1/8)

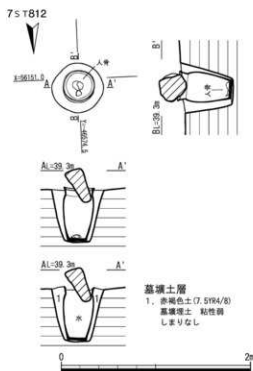


Fig. 152 7ST812平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

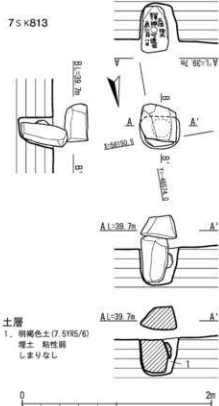


Fig. 154 7SK813平面図・土層図および
断面見通し図 (1/40)

7ST812

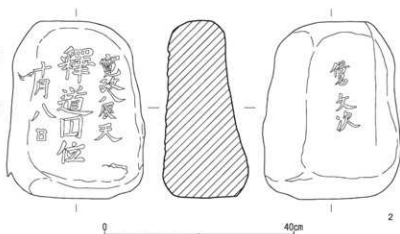
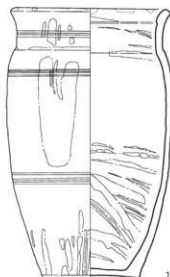


Fig. 153 7ST812出土物実測図 (1/8)

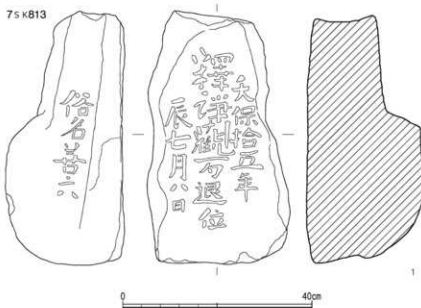


Fig. 155 7SK813出土物実測図 (1/8)

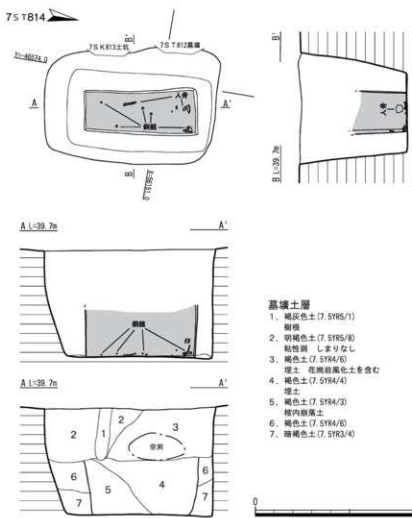


Fig.156 7ST814平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig.147, Pl.28-126・5～7)

7ST761暗褐色土

金属製品

鉄釘 (1～3) 1・3は鉄釘上部が残存しており、棺材の木質が付着している。1は頭部が屈曲する。また、屈曲部から下位1.6cmの範囲で木質が見られる。3は2.6cmの木質残存範囲が確認できる。

2は鉄釘下部が残存しており、棺材の木質が付着する。また、2つの棺材の境目が確認でき、木質残存範囲は上から2.0cm・1.2cmを測る。

7ST806

遺構 (Fig.148)

BM17区他に位置する。墓塚は楕円形を呈する。

当初、墓塚の平面は検出できず土坑として調査を行ったが、小片の骨片が出土したため墓と認識した。また、埋土上層付近から石製墓標が出土した。石製墓標の用途は不明であるが、改葬等により故意に埋められた可能性がある。棺の形態等については確認できなかった。

遺物 (Fig.149, Pl.40-184)

石製品

石製墓標 (1) 花崗岩の自然石を用いる。墓碑銘が正面の一段下げられた面と背面に彫られている。正面「(右) □治五年」

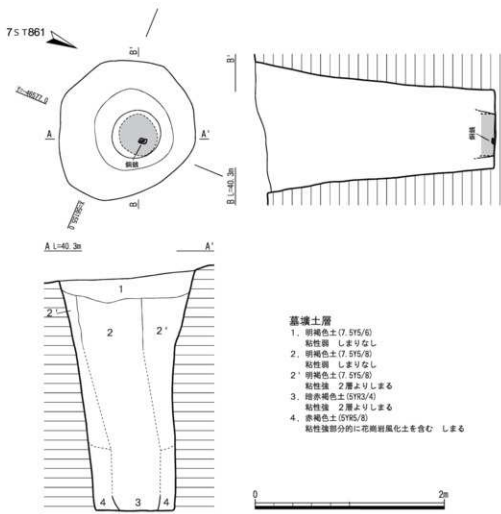


Fig.157 7ST861平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

「(中) □晚清信土」

背面「□七 善市」

なお、「治」は実測ではほとんど見えていないが、明治22年作成の「墓籍簿」⁷⁾で明治5年に埋葬の記載がある。正背面の墓碑銘の□は何文字入るか判断できない。

7ST808

遺構 (Fig.150)

BM16区, 7ST712の西側に位置する。墓壇は円形を呈する。

2・3層から2点の石製墓標が出土した。2層出土のものには加工痕が認められる。いずれの石製墓標にも銘は確認できない。

埋葬形態は平面および土層観察から円形棺であると考えられ、棺内の底からは4枚の銭貨が出土した。

遺物 (Fig.151, Pl.40-185)

石製品

石製墓標 (1) 花崗岩の自然石を用いるが、体部下半は欠損している。方柱状を呈していたと思われる。墓碑銘はない。

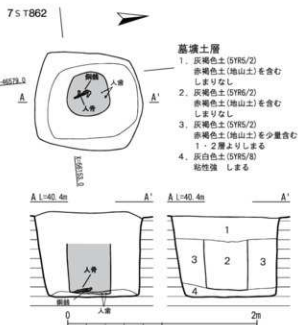


Fig.158 7ST862平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

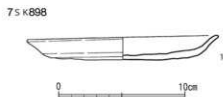


Fig. 159 7SK898出土遺物実測図 (1/3)

7ST812

遺構 (Fig. 152)

BL17区に位置する。7ST814の墓壙と切り合う状態で墓壙が検出され、当遺構が新しい。

墓壙は円形を呈する。遺体収納容器は甕棺であるが、この甕棺内に石製墓標が落ち込み、かつ、石製墓標は銘が逆を向いている状態で検出されたことから、改葬等により、埋葬後に掘り返されたものと考えられる。

石製墓標が本遺構に伴うかどうか疑わしい。

甕棺内からは頭蓋骨の一部が出土した。

遺物 (Fig. 153, Pl. 37-170, 40-186)

国産陶器

甕 (1) 小型であるが、ハンズ(半胴)甕である。口縁部は玉縁状に作られ、外反し、肥厚する。鉄軸を外面は全面施軸後口縁部から流しかけ、内面は布状のもので横方向に塗られている。底面も施軸される。口縁部と胴部の境は軸刺ぎされる。タキの痕は見られなかった。

刻印はない。口縁端部、底部には目積みの痕跡が見られた。肥前産である。

石製品

石製墓標 (2) 花崗岩の自然石を用いる。正背面は内湾気味に面調整し、墓碑銘がある。

正面 「(右) 寛政八辰天」

「(中) 釋道円位」

「(左) 十月八日」

背面 「俗名丈次」

なお、明治22年の「墓籍簿」に寛政8年埋葬の記載がある¹⁷⁾。

7ST814

遺構 (Fig. 156, Pl. 6-23)

BL17区他に位置する。墓壙のみを検出し、7ST812・7SK813と切り合い、当遺構が古い。

墓壙は長方形を呈する。棺は平面および土層観察から長方形横棺であったと考えられる。

棺内からは頭位を北に向けた状態で頭蓋骨が出土し、遺物は6枚の銭貨が棺内に点在する状態で出土した。棺蓋の上に銭貨を置き、蓋の倒壊時に棺内へ散乱したとも考えられる。その論拠は、土層観察において、4・5層の土層境界に棺蓋があった可能性が高いということである。

また、銭貨の出土レベルが棺床からではないことも根拠の1つである。

銭貨以外にも長方形横棺の部材が釘付きで出土しており、表面には漆塗りの痕跡が見られる。

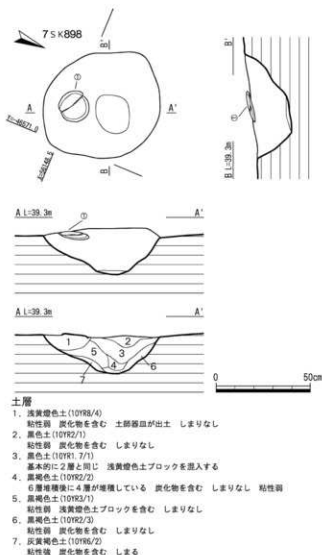


Fig. 160 7SK898平面図・土層図
および断面見通し図 (1/20)

土層

1. 淡黄褐色土(10YR8/4)
粘性弱 炭化物を含む 土部器面が出土 しまりなし
2. 黒色土(10YR2/1)
粘性弱 炭化物を含む しまりなし
3. 黒色土(10YR1, 7/1)
基本的に2層と同じ 淡黄褐色土ブロックを混入する
4. 黒褐色土(10YR2/2)
6層埋積後に4層が埋積している 炭化物を含む しまりなし 粘性弱
5. 黒褐色土(10YR3/1)
粘性弱 淡黄褐色土ブロックを含む しまりなし
6. 黒褐色土(10YR2/3)
粘性弱 炭化物を含む しまりなし
7. 反黄褐色土(10YR6/2)
粘性強 炭化物を含む しまる

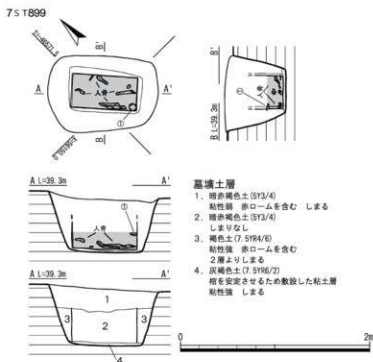


Fig. 161 7ST899平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

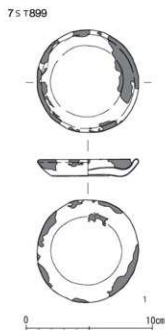


Fig. 162 7ST899出土遺物実測図 (1/3)

7ST861

遺構 (Fig. 157)

BN18区に位置する。墓壇は円形を呈する。棺の平面形態は調査途中まで不明であったが、土層に残る腐植土塊の状況から円形であることが確認された。円形棺であったと考えられる。

本遺構からは銭貨が布製品の上から4枚出土しているが、布製品は銭貨の収納袋であったものと推定できる。

7ST862

遺構 (Fig. 158)

BM19区、7ST303の東に位置する。墓壇は方形を呈する。遺体収納容器は、平面観察および土層断面より円形棺であると推定される。棺内からは人骨が確認され、周辺からは4枚の銭貨が集中した状態で出土した。

7ST899

遺構 (Fig. 161, Pl. 6-24)

BL16区、7SK898の北側に位置する。墓壇は隅丸長方形を呈する。

遺体収納容器は平面観察および土層断面より長方形横棺であると推定される。棺痕跡内からは人骨が出土した。

遺物も棺内南側から土師器皿および土師器片が出土している。土師器皿は口縁および口縁端部に煤の付着が認められることから灯明皿であると考えられる。浮いた状態で出土しており、棺蓋上に埋置された可能性が考えられる。

遺物 (Fig. 162, Pl. 27-124・7)

土師器

小皿a (1) 灯明皿である。口径8.0cm、底径5.6cm、器高1.3cmを測る。口縁部に煤が付着する。イト切

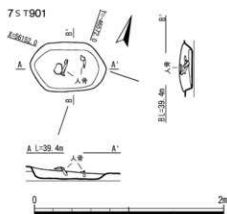


Fig. 163 7ST901平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

りである。

7ST901

遺構 (Fig.163)

BM16区他、7ST711の西側に位置する。重機による表土除去の際に検出したもので、検出段階から人骨が出土している状態であった。そのため、本遺構は同群の他の遺構よりも本来高い位置に墓が存在したことが考えられる。

周辺の7ST711・714・812・814の墓壇検出面は本遺構の底面のレベルに該当することになり、当時の地形を考慮すると、この付近を造成した他の墓に対し比較的新しい段階の墓とも考えられる。

土坑

7SK813

遺構 (Fig.154)

BL17区、7ST812の南側に位置する。

石製墓標が確認されたため墓として調査を行ったが、墓壇の平面形態は検出されず、遺体収納容器も認められなかった。

このことから、当遺構は墓そのものとしての可能性は低い。

石製墓標は破片で3点確認され、うち1点には銘が見られる。7SK813周辺の墓のものとも考えられる。

遺物 (Fig.155, Pl.40-187)

石製品

石製墓標 (1) 花崗岩の自然石を用いる。正面・左側面は平坦な面調整を施し、墓碑銘がある。

正面 「(右) 天保拾五年」

「(中) 釋禪觀為退位」

「(左) 辰七月八日」

側面 「俗名善六」

7SK898

遺構 (Fig.160)

BL16区に位置する。直径約0.6mの不整円形を呈する遺構が検出された。検出面では土師器皿が出土した。

埋土はすべて黒色系統で単色である。有機物の腐食あるいは火を用いたことが考えられる。

本遺構は7ST621に近いことから追善供養等の儀礼行為に伴う施設である可能性がある。

遺物 (Fig.159, Pl.27-124・6)

土師器

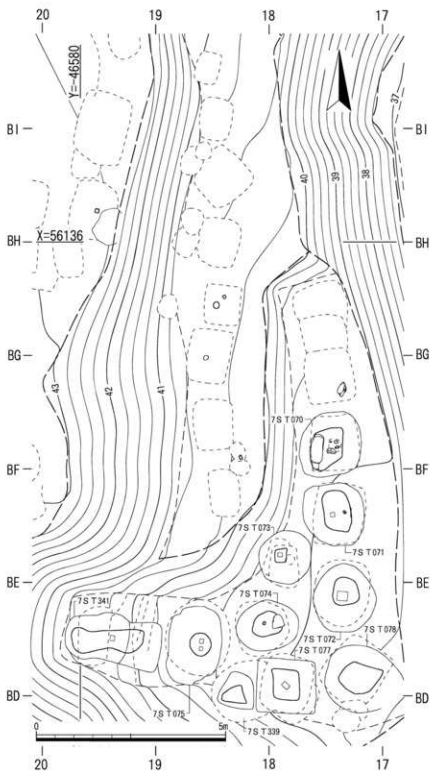
皿a (1) 口径15.2cm、底径11.7cm、器高2.0cmを測る。底部が突出し、口縁部は短く外反する。ヘラ切りである。流入品である。

(文責 東 貴之・中尾陽介)

③ C群

C群はA地区のほぼ中央部に展開しており、地形的に墓域を大きく上・中・下段と分けたとき、その中段にあたり、BD17~20区とBJ17~19区の範囲に位置している。

C群内の墓は、地権者からの情報収集および養原善和氏所蔵の「墓籍簿」⁽⁷⁾の記載により、集団の異なる2つのグループに分けられ、グループ1は地形的に上段の近世墓群に属し、グループ2は下段に属するものと考えられる。



上段のグループ1は、南側の7ST331から北側へ向かって展開していると考えられ、下段のグループ2は、7ST341から東側へ向かう列と7ST373から南へ延びる列で形成される。

7ST070

遺構 (Fig. 166, Pl. 6-26, 27, 7-29)

BF17区他に位置している。盛土は比較的良好に残る。盛土上には石製墓標が倒置の状態で見つかった。また、墓標が埋め込まれていたと考えられる根石の詰まった方形の掘り込みも検出された。

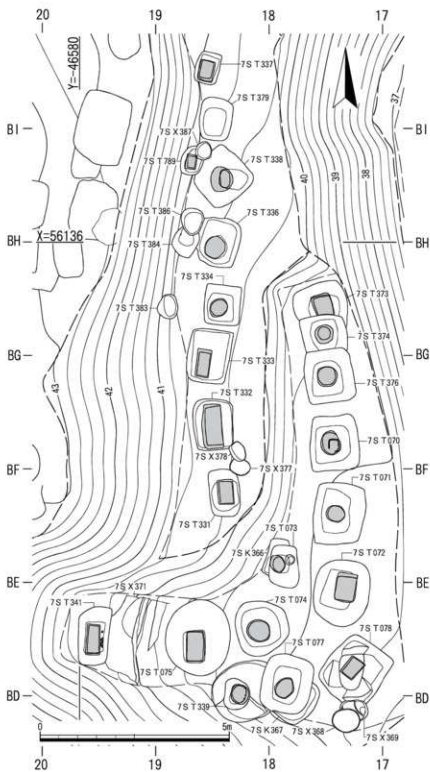


Fig. 165 A地区C群近世墓配置図 墓墳および棺 (1/100)

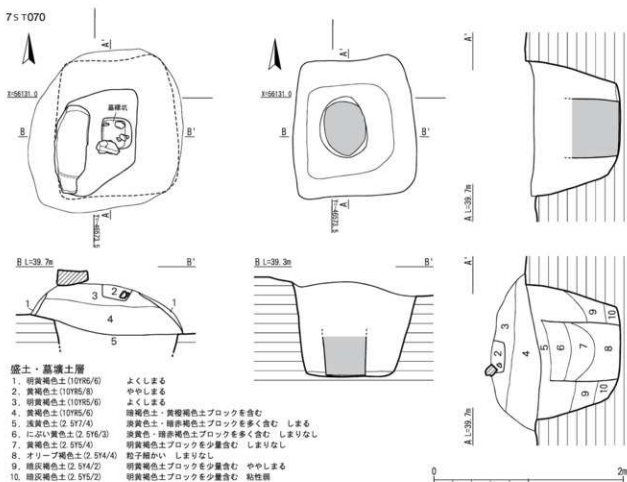


Fig.166 7ST070平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

盛土は不整形を呈するが、構築当初は方形台状であったと推定される。当初の盛土の1辺は1.50mで、高さは0.45m程の方形台状であったと推定される。

墓壇は長方形を呈する。棺痕跡は墓壇中央で見られ、楕円形を呈する。平面観察および土層断面の棺痕跡(7・8層)より、円形棺であったと推定される。

遺物 (Fig.167, Pl.39-180)

石製墓標 (1) 花崗岩の自然石を用いる。縦断面はレンズ状を呈する。墓碑銘はない。

7ST071

遺構 (Fig.168)

7ST070の南側、BE17区に位置している。盛土はよく残り、不整形を呈する。

盛土中央部には12cm(4寸)角の木製墓標を立てたものと考えられる痕跡が確認された。また盛土上には、いわゆる「野面石」として使用されたと思われる石も残っていた。

墓壇は長方形を呈する。棺は墓壇中央部に埋置されており、直径0.45mの円形棺の痕跡が確認された。棺形状より、埋葬体位は座葬と推定される。

7ST072

遺構 (Fig.169)

7ST071の南側、BD17区他に位置する。盛土が残存する。盛土の形態は、長方形台状を呈していたと推定される。

盛土中央には27cm×24cm、深さ30cmの木製墓標の掘り方の痕跡が確認され、1辺が9cm角程度の木製墓標の掘り方と考えられる。

墓壇は楕円形を呈する。棺は平面観察および土層断面の棺痕跡（9・10層）より方形縦棺の痕跡が、墓壇のやや北東よりで検出された。

遺物 (Fig.170, Pl.29-129・1)

7ST072黄褐色土

肥前系染付

碗(1) 胴部が丸みを持って立ち上がる器形である。外面は線描きによる草花文および蝶が染付けられる。細かい貫入が見られる。肥前産である。

7ST073

遺構 (Fig.171)

7ST072の西側、BD17区他に位置する。墓壇は7SK366の土坑を切る。

本遺構の東側には墓道があったと考えられ、墓道に向いた面には、花立ての可能性がある竹筒等を埋め込んでいたと思われる痕跡が検出された。

また、盛土中央部に10.5cm×12cmの規模の長方形の痕跡が見られた。この痕跡は、盛土の流出等によって墓標痕が浅くなったものと考えられることができるが、別の施設の存在を想定する必要もある。

墓壇は楕円形を呈する。

棺は平面観察および土層断面の棺痕跡（8～10層）より円形棺の痕跡を確認した。この棺は本遺跡出土の円形棺痕跡に比べるとおよそ規模が半分の大きさであるため、小児用に小桶や樽を転用した棺が、改葬された遺骨が埋葬されていたものと推定される。

7ST070

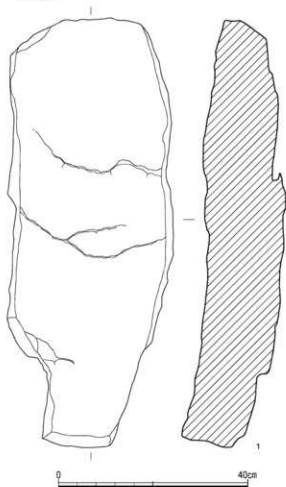


Fig.167 7ST070出土遺物実測図(1/8)

7ST073関連遺構

7SK366

遺構 (Fig.171)

7ST073の墓壇に切られており、BE17区他に位置する。長方形を呈する遺構である。近世墓と断じがたいが、7ST073とほとんど重なる状況であるため、7ST073に関連する施設の可能性が考えられる。

7ST074

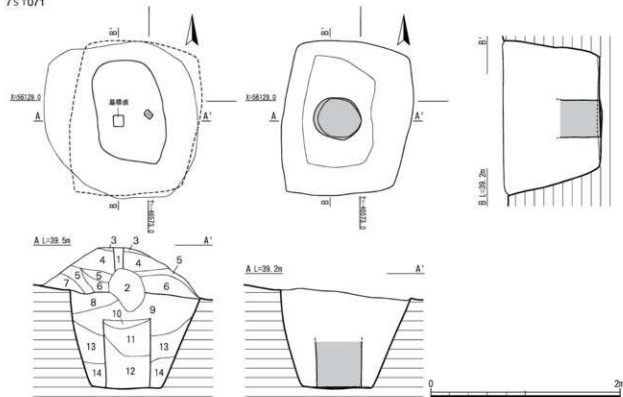
遺構 (Fig.172, Pl.17-30)

7ST073の南側、BD17区他に位置する。現状の盛土はややいびつで不整形な形状を呈する。石製墓標は、花崗岩を扁平に成形したもので、倒置の状態で残存していた。また「野面石」が盛土の表面に見られ、国産磁器の小坏も盛土上部から出土した。

墓壇は円形を呈する。墓壇内では平面観察および土層断面の棺痕跡程度の円形棺の痕跡が検出された。棺の形状から埋葬体位は座葬と推定される。

また、墓壇埋土中から国産陶器の碗の破片が出土している。

7ST071



盛土・墓塚土層

- | | | | | | |
|-----------------------|-------------------|-------|--|----------------------------|--|
| 1. 黒褐色土 (2. 5/3/2) | しまりなし | | | | |
| 2. オリーブ褐色土 (2. 5/4/6) | 粒子が細かい | しまりなし | | | |
| 3. 明黄褐色土 (2. 5/6/8) | しまる | | | | |
| 4. 明黄褐色土 (2. 5/6/6) | しまる | | | | |
| 5. 黄褐色土 (2. 5/5/6) | 粒子が細かい | しまる | | | |
| 6. オリーブ褐色土 (2. 5/4/3) | 粒子が細かい | しまる | | | |
| 7. 黄褐色土 (2. 5/5/4) | 暗赤褐色土・赤褐色土ブロックを含む | | | | |
| 8. 暗灰黄色土 (2. 5/4/2) | | | | 灰白色土ブロックを含む | |
| 9. 黄褐色土 (2. 5/5/3) | | | | 暗赤褐色土・暗赤褐色土・明黄褐色土ブロックを多く含む | |
| 10. 黄褐色土 (2. 5/5/4) | | | | しまりなし | |
| 11. 暗灰黄色土 (2. 5/5/2) | | | | 黄褐色土ブロックを少量含む | |
| 12. 黄灰色土 (2. 5/5/1) | | | | 砂粒を多く含む | |
| 13. にぶい黄色土 (2. 5/6/3) | | | | 明黄褐色土・灰白色土ブロックを少量含む | |
| 14. 黄灰色土 (2. 5/6/1) | | | | 砂粒・褐色土ブロックを多く含む | |

Fig.168 7ST071平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig.173, Pl.29-129・2・3, 39-181)

石製品

石製墓標 (1) 花崗岩の自然石を用いる。背面を外湾させ、縦断面はレンズ状を呈する。墓碑銘はない。7ST074黄褐色土

国産磁器

小坏 (1) 高台をケズリ出し、口縁部はやや外反する端反形の器形である。やや青みを帯びた透明釉が胴部下半まで施釉される。全体的に細かい貫入が認められる。白磁である。

7ST074黄灰色土

国産陶器

椀 (1) 高台脇のケズリはシャープで高台と高台脇の区分は明瞭である。高台内は兜巾を持たず高台内と高台脇との深さは同じ。白黄色の胎土に透明釉が施され、全体的に細かい貫入が見られる。

7ST075

遺構 (Fig.174)

7ST074の西側、BD18区に位置する。盛土上面には9cm角の木製墓標のものと考えられる痕跡を確認した。また、盛土から土師器の小皿が出土した。

墓塚は不整形長方形を呈し、平面観察および土層断面の棺痕跡 (14層) より長方形横棺と思われる棺痕跡

75T072

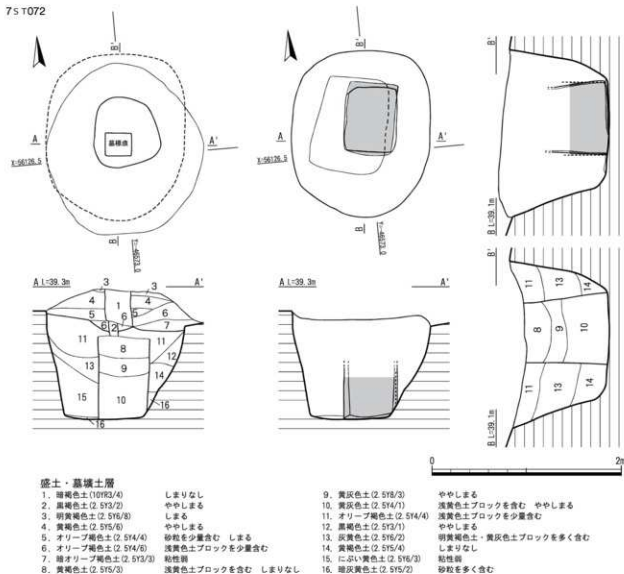


Fig.169 75T072平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

を墓城のほぼ中央において確認した。

遺物 (Fig.175, Pl.29-129・4)

75T075暗オリーブ色土

土師器

小皿a (1) 復原口径7.4cm, 復原底径5.8cm, 器高1.1cmを測る。イト切りである。

75T077

遺構 (Fig.176)

75T074の南側, BD17区他に位置する。この近世墓は方形台状の盛土の2辺がよく残る。

残存する高さ0.30mの盛土中央部には12×18cm角の方形の痕跡が認められるが、木製墓標最下部の痕跡なのか、その他のものかは不明である。

また、盛土中から磁器の小坏と土師器小皿が出土している。

墓城は長方形を呈する。平面観察および土層断面の棺痕跡 (9・10層) より円形棺の痕跡が確認できた。

75T072黄褐色土

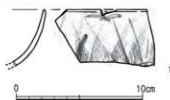


Fig.170 75T072出土遺物実測図 (1/3)

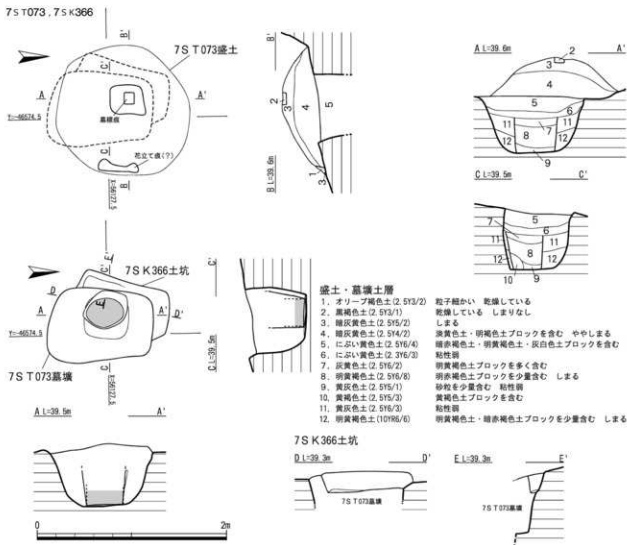


Fig. 171 7ST073・7SK366平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

棺痕跡は墓壇はほぼ中央にて確認できた。

棺形状より、座葬であったものと考えられる。

遺物 (Fig. 178, Pl. 29-129・5・6)

7ST077オリーブ褐色土

土師器

小皿 a (1) 復原口径8.8cm, 底径6.3cm, 器高1.1cmを測る。口縁部に煤の付着が見られることから灯明皿として用いられたものと思われる。

7ST077黒褐色土

国産磁器

小坏 (1) 口縁部がわずかに外反する国産磁器の小坏である。全体に白濁の釉が施され、ケズリ出しの高台がつく。全体に細かい貫入が入る。墓前供養に用いられたと考えられる。

7ST339

遺構 (Fig. 176)

7ST074の南側, BC18区他に位置する。盛土の残りは悪く、現状での大きさは1m四方の盛土が残っていた。また、盛土の土層状況から判断すると、現存している盛土は当初からのものではなく、後から再構築されているようである。

盛土上には7.5cm角の痕跡が見られ、木製墓標の痕跡であると考えられる。

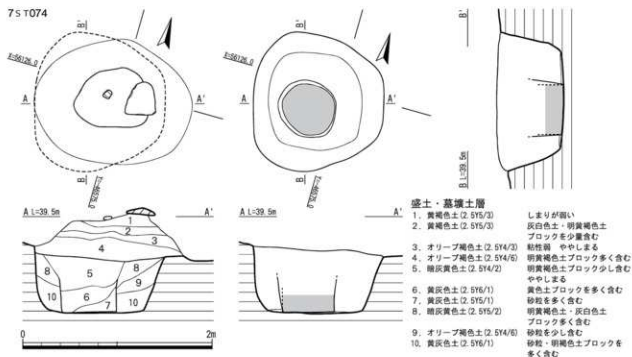


Fig. 172 7ST074平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

墓壇は楕円形を呈する。

墓壇は、段掘りにしてあり、棺の安定をはかるものであったと思われる。棺は墓壇共々その上部は削平を受けているため完全ではないが、平面観察および土層断面の棺痕跡 (11層) より円形棺であったものと思われる。

7ST077・339関連遺構 7SK367

遺構 (Fig. 176)

7SK367は、7ST077の墓壇に切られ、BC17区他に位置する。

墓と断定し得ない。1辺1.30mの方形の遺構である。7ST336と共にこの遺構は、7ST331から7ST337が形成するC群上段の近世墓群に属していたものと考えることができる。

新しく墓域を造営するにあたって、この部分が「拡幅掘削されたため上部構造が削平を受けたと考えられ、そこに新しく7ST073や7ST077が掘り込まれたものと推定する。

7ST078

遺構 (Fig. 177)

7ST077の東側、BC17区他に位置する。盛土の遺存状況は良くない。

墓壇は方形を呈する。また、墓壇四隅の中位に段があり、棺埋置の際に使用された可能性がある。

棺は平面観察および土層断面の棺跡 (7~10層) より、方形縦棺の痕跡が確認できた。

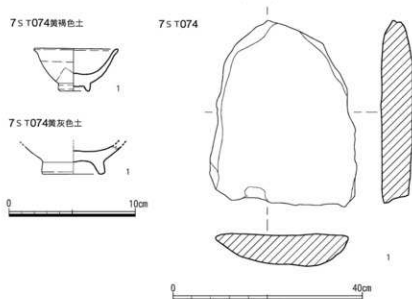


Fig. 173 7ST074出土遺物実測図 (1/3, 1/8)

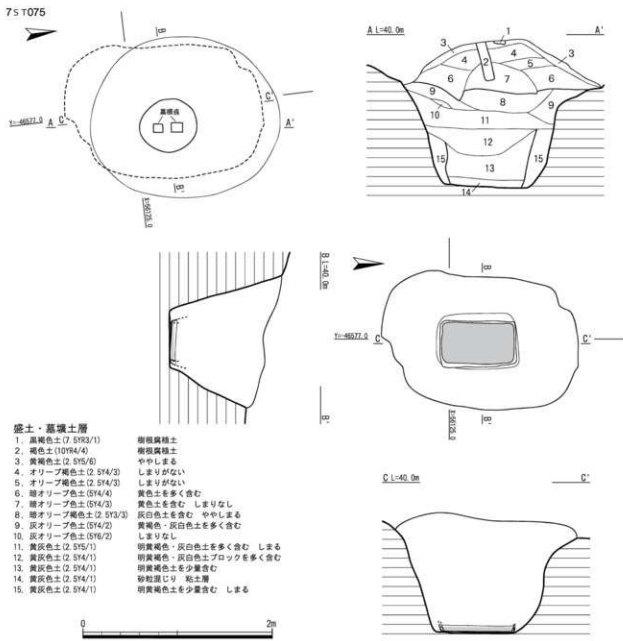


Fig. 174 7ST075平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST078関連遺構

7SX368

遺構 (Fig. 177)

7ST078の南に近接し、7SX369を切っており、BC17区に位置する。長軸0.70m、短軸0.60m、深さ0.15mの浅い楕円形を呈する。7ST078の近世墓に伴うものと考えられ、追善供養等に供された品物が埋納されたピットと考えられる。

7ST075暗オリーブ色土

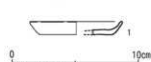
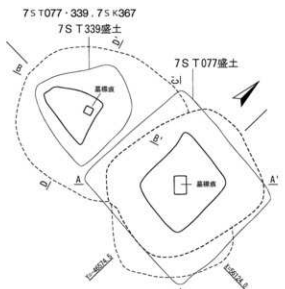


Fig. 175 7ST075出土遺物
実測図 (1/3)

7SX369

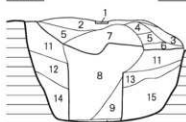
遺構 (Fig. 177)

7SX368に切られ、BC17区に位置する。7SX368と同様な用途を持つ遺構と考えられる。



7S T077盛土・墓墳

A1-39.3m

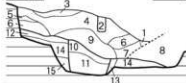


7S T077盛土・墓墳土層

1. 黒色土(2.5YR2/1) しまりなし
2. 明黄褐色土(2.5YR6/8) しまる
3. オリーブ色土(5Y6/6) しまる
4. オリーブ褐色土(2.5Y4/3) 暗赤褐色土ブロックを含む しまる
5. オリーブ褐色土(2.5Y4/6) 明黄褐色土ブロックを含む しまる
6. オリーブ褐色土(2.5Y4/4) やしまる
7. オリーブ黒色土(5Y3/2) しまりなし
8. 灰オリーブ色土(5Y6/2) 灰白色土ブロックを含む しまりなし
9. 黄灰色土(2.5Y6/1) 砂粒・明黄褐色土ブロックを含む
10. 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘性強
11. 黄褐色土(2.5Y5/8) しまる
12. 暗黄褐色土(2.5Y5/2) 黄褐色土ブロックを少量含む
13. 明黄褐色土(2.5Y6/6) 砂粒を少量含む しまる
14. 黄褐色土(2.5Y5/1) 明黄褐色土ブロックを少量含む
15. 灰白色土(2.5Y7/1) 暗褐色土・黄褐色土・灰白色土ブロックを多く含む

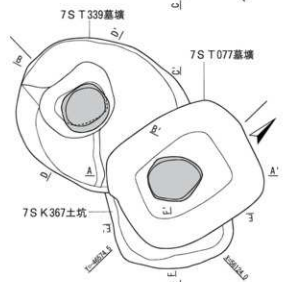
7S T339盛土・墓墳

B1-39.7m



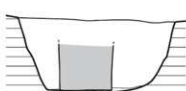
7S T339盛土・墓墳土層

1. 高褐色土(10YR2/2) 表土
2. 黒色土(2.5Y2/1) 樹根腐植土
3. 高褐色土(2.5Y3/2) 樹根により腐炭 しまる
4. 明黄褐色土(2.5Y7/6) 黄色土を多く含む しまる
5. 黄褐色土(2.5Y5/4) しまる
6. オリーブ褐色土(2.5Y4/6) 黄色土を少量含む
7. 暗黄褐色土(2.5Y4/2) 粘質土 しまりなし
8. 明黄褐色土(2.5Y5/8) しまる (7S T077盛土土層)
9. 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3) 黄色土を含む しまりなし(暗陥没痕跡)
10. 暗黄褐色土(2.5Y5/2) 明黄褐色土を少量含む ややしまる
11. 黄褐色土(2.5Y4/4) 明黄褐色土を多く含む ややしまる
12. オリーブ褐色土(2.5Y4/6) 砂粒を少量含む しまる
13. 灰黄色土(2.5Y6/2) しまる
14. 淡黄色土(2.5Y7/3) 黄色土を多く含む しまる
15. 淡黄色土(2.5Y7/4) 黄色土・灰白色土を多く含む しまる



7S T077墓墳

A1-39.3m



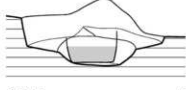
7S K367土坑

F1-39.3m



7S T339墓墳

D1-39.7m



F1-39.3m



7S K367土坑土層

1. オリーブ褐色土(2.5Y4/4) 砂粒を少量含む しまる
2. 黄褐色土(2.5Y6/2) 砂質土 しまる

B1-39.7m

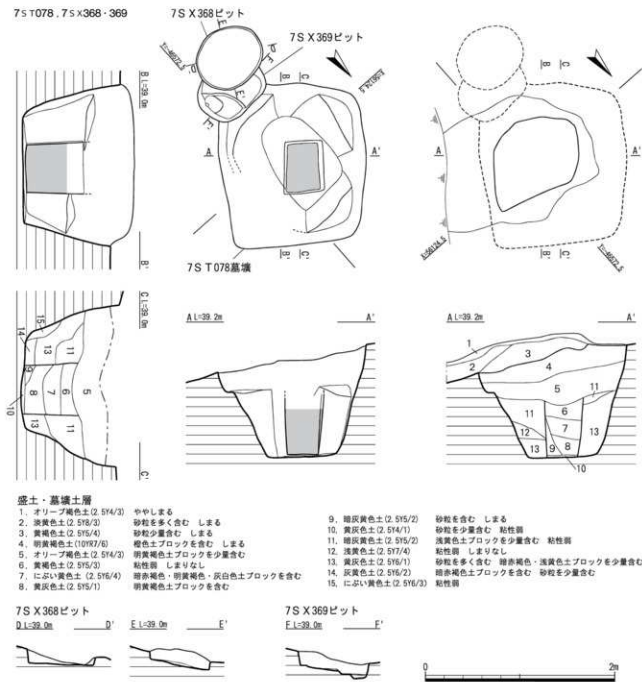


F1-39.3m



Fig. 176 7S T077・339, 7S K367平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7S T078, 7S X368・369



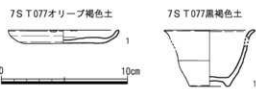
7S T331

遺構 (Fig. 179)

7S T070の西側, BE18区に位置する。盛土は残存していなかった。

墓壇は長方形を呈する。墓壇内埋土上部には, 盛土上から続いていたと思われる12cm角の方形を呈する痕跡(1層)が認められる。木製墓標の痕跡であると思われる。

棺は平面観察および土層断面の棺痕跡(6層)より長方形横棺であると考えられる。



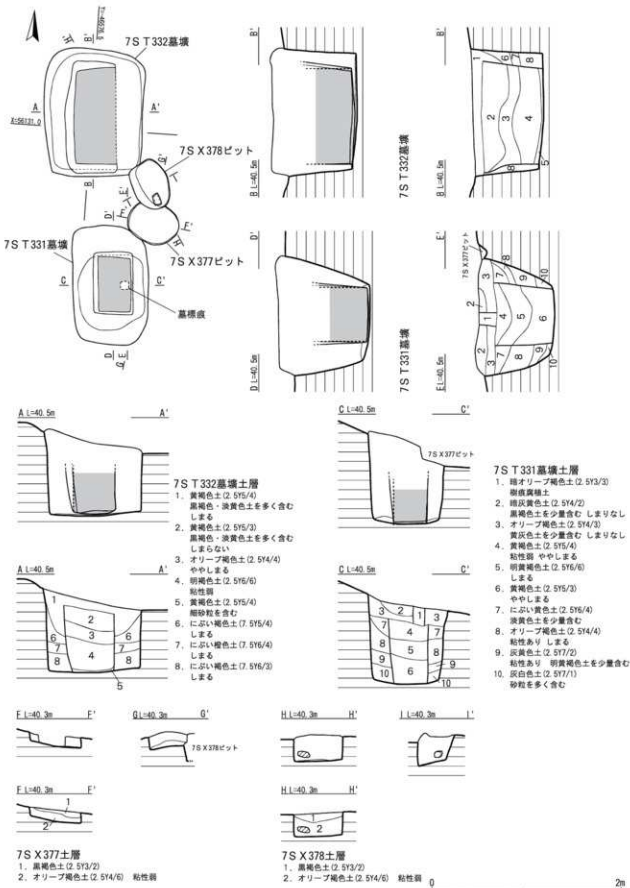


Fig. 179 7ST331・332, 7SX377・378平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST332

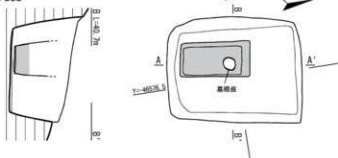
遺構 (Fig.179)

7ST331の北側、BF18区に位置する。盛土は残存していなかった。

墓墳は、長方形を呈する。

棺は、平面観察および土層断面の棺痕跡(4・5層)より長方形横棺が確認された。

7ST333



7ST331・332関連遺構

7S X377

遺構 (Fig.179)

7ST331を切り、BE18区他に位置する。この遺構も近世墓に伴うものと考えられる楕円形の浅いピットである。道普供養等に供された品物が埋納されたものと考えられる。

墓塚土層

1. 褐色土(10YR4/4) 墓標石
2. 明黄褐色土(10YR6/6) しまりなし
3. にぶい褐色土(7.5YR6/4) 砂粒を多く含む しまる
4. にぶい黄色土(2.5Y6/4) 粘性弱 ややしまる
5. にぶい褐色土(7.5YR6/3) 粘性弱
6. にぶい褐色土(7.5YR6/4) 粘性弱
7. にぶい褐色土(5YR6/4) 粘性弱 しまる
8. にぶい黄褐色土(10YR7/4) 粘性弱 砂粒を少量含む しまる

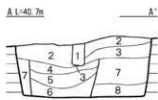
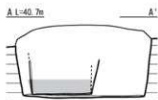


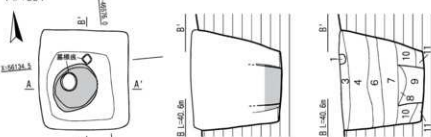
Fig.180 7ST333平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7S X378

遺構 (Fig.179)

7SX377と7ST332を切り、BF18区に位置する。長軸0.50m、短軸0.40m、深さ0.25mの楕円形を呈している。埋土中から両端に敲打痕の残る小石が出土した。7ST332は長方形であるので、この棺の蓋を打ちつける釘打石の用途を持ったものではないかと推測される。

7ST334

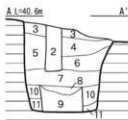
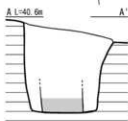


7ST333

遺構 (Fig.180)

7ST332の北側、BF18区他に位置する。盛土は残存していなかった。

墓墳は長方形を呈する。墓墳内埋土上部に直径12cmの墓標ないしは息抜き竹と思われる痕跡(1層)が認められる。棺は、平面観察および土層断面の棺痕跡(6層)が確認できたため、長方形横棺であると考えられる。



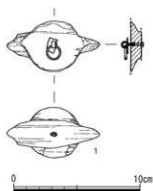
墓塚土層

1. 黄灰色土(2.5Y4/1) 断崖腐植土
2. オリーブ褐色土(2.5Y4/1) しまりなし(息抜き竹・墓標痕か)
3. 明黄褐色土(2.5Y6/6) しまる
4. 黄褐色土(2.5Y5/4) 粘性弱 しまる
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ややしまる
6. にぶい黄褐色土(10YR7/4) 砂質土 灰白色土を少量含む
7. にぶい黄褐色土(10YR6/4) 灰白色・淡黄褐色土を少量含む ややしまる
8. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粘性弱
9. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 粘性弱 灰白色・赤褐色土を含む
10. 黄褐色土(10YR5/3) 粘性あり しまる
11. にぶい黄褐色土(10YR7/2) 粘性弱 灰白色土を含む



Fig.181 7ST334平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST384

Fig. 182 7ST384平面図・土層図
および断面見通し図 (1/3)

7ST334

遺構 (Fig. 181)

7ST333の北側, BG18区に位置しており, 盛土は残存していなかった。

墓壇は方形を呈する。墓壇の中央部に直径0.53mの円形棺の痕跡が確認された。円形棺であったものと思われる。高さが他の円形棺に比べ低いことから, 半切桶などの小型の桶が棺として使用され, 小児が改葬遺骨が埋葬されていたと考えられる。

7ST336

遺構 (Fig. 183)

7ST334の北側, BG18区他に位置し, 小児用と考えられる7ST384に切られている。盛土は残存していなかった。

墓壇は方形を呈する。埋土下半部には直径0.60mの円形棺の痕跡が確認された。棺の形状から座葬であったと思われる。

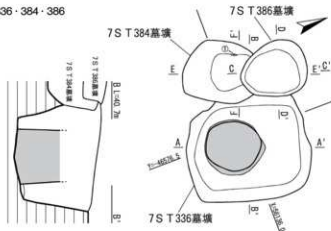
7ST384

遺構 (Fig. 183)

墓壇のみを検出し7ST336の墓壇を切る。BG18区他に位置している。墓壇は楕円形を呈している。

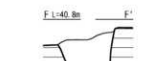
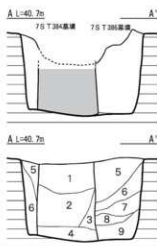
棺の痕跡は土層から確認できなかったが, 墓壇西側の壁際で円瑣の付く銅製金具付きの木片が出土した。おそらく飾り金具の付いた小型木製の箱が埋置されていたと思われる。小児用の棺として使用されたものと考えられる。

7ST336・384・386



墓壇土層

1. にぶい黄褐色土 (10YR6/3)
流黄褐色土を少量含む 砂質土
2. にぶい黄褐色土 (10YR6/3)
黄褐色土・褐色土を多く含む ややしまる
3. にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
粘性弱
4. にぶい黄褐色土 (10YR7/2)
砂質土
5. にぶい黄褐色土 (10YR7/3)
流黄褐色土を少量含む しまる
6. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
流黄褐色土を少量含む ややしまる
7. にぶい黄褐色土 (10YR7/4)
流黄褐色土を少量含む ややしまる
8. 反黄褐色土 (10YR4/2)
砂質土 しまりなし
9. にぶい黄褐色土 (10YR7/4)
砂質土 7層と同一



7ST386墓壇土層

1. にぶい黄褐色土 (10YR6/3)
砂粒を少量含む しまる
2. にぶい黄褐色土 (10YR6/3)
しまりなし

7ST384墓壇土層

1. 流黄褐色土 (2.5Y7/3)
灰白色土を少量含む ややしまる
2. にぶい黄褐色土 (10YR7/4)
灰白色土を含む しまりなし

Fig. 183 7ST336・384・386平面図・土層図
および断面見通し図 (1/4)

遺物 (Fig.182, Pl.29-130)

金属製品

飾り金具 (1) 銅製の環状の飾り金具である。また、板状の飾り金具がわずかに残存している。留具は一端が棺外で管状を呈し、棺内で上下一文字に開いていたと考えられる。

環状飾り金具は直径1.1cm、断面直径は0.1cm、板状飾り金具は厚さ0.1cm以下、留具の全長は1.8cm、管状部直径0.5cm、管状部銅板の厚さ0.2cmを測る。また、棺材の厚さは0.9cmである。

7ST386

遺構 (Fig.183)

墓壇のみが検出された。7ST384の墓壇を切る。BH18区に位置する。この遺構も7ST383と同様、乳見ないし小児用のものと考えられる。盛土はなく、墓壇は長軸0.70m、短軸0.60m、深さ0.25mの楕円形を呈する。棺の痕跡は確認できなかった。

7ST337

遺構 (Fig.184)

7ST379の北側でC群北端、BH18区に位置する。盛土は残存していなかった。

墓壇は長方形を呈する。棺痕跡が確認され、平面観察および土層断面の棺痕跡 (3層) より小型の方形縦棺であったものと思われる。棺の推定容量から、小児用の棺であったものと考えられる。

7ST338

遺構 (Fig.185)

7ST336の北側にあり、BH18区に位置する。墓壇のみを検出し、小児用と考えられる7ST789の墓壇に切られている。

墓壇は方形を呈する。墓壇中央に棺痕跡が確認でき、直径0.66m程度の円形棺であったと推定できる。

7ST338・789関連遺構

7ST789

遺構 (Fig.185)

7ST338の西、BH18区に位置し、盛土は残っていない。墓壇は楕円形を呈し、棺は平面観察および土層断面の棺痕跡 (3層) より方形縦棺と思われる。土層観察から、小型の木製箱が棺として使用されたと考えられ、おそらく乳幼児が埋葬されたと想定される。

7SX387

遺構 (Fig.185)

7ST338の墓壇を切り、BH18区に位置する。この遺構も他のピットと同様に、7ST338の近世墓に供された品物が埋納されたものと推測される。

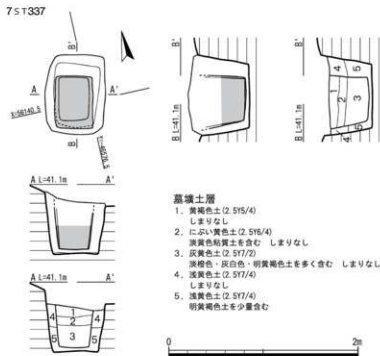


Fig.184 7ST337平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75 T338・789, 75 X387

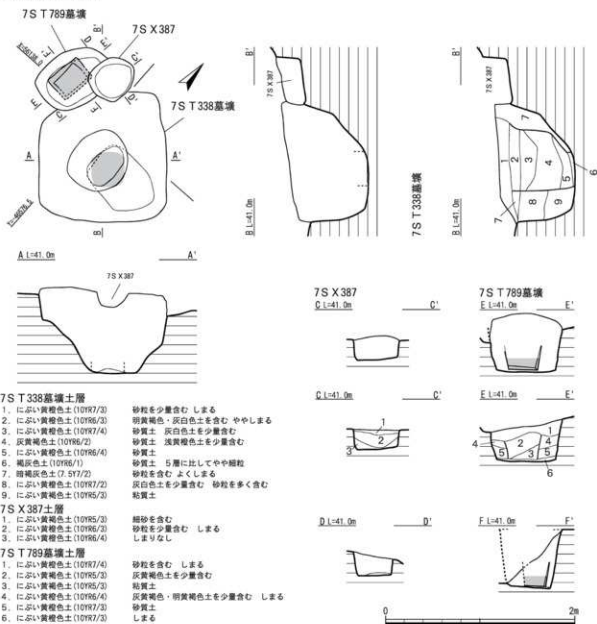


Fig. 185 75T338・789, 75X387平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75 T341

遺構 (Fig. 187, Pl. 7-31, 32)

75T075の西, C群の西端にあたり, BD19区他に位置する。残存する盛土は細長く, 当初2基の近世墓の盛土が接合したものと考えたが, 断ち割った結果, 75T341の盛土と判明した。

当初の盛土は残存する盛土長から1辺1.80m程度のもとと推定できる。

後に, 周辺の土が盛土の東側に付加して積み上げられた結果, 現状の細長い盛土になったと考えられる。改葬等により, 盛土形態については, 可変的であったと思われる。

盛土上では, 12cm角の痕跡が認められ, 木製墓標の痕跡であると考えられる。

墓壇は長方形を呈する。

棺は墓壇の土層断面 (16層)の棺痕跡から, 長方形横棺と推定される。棺底からは銭貨6枚とガラス製の小玉が2個出土した。

75 T341

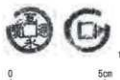
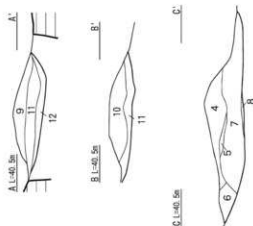
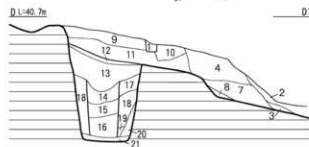
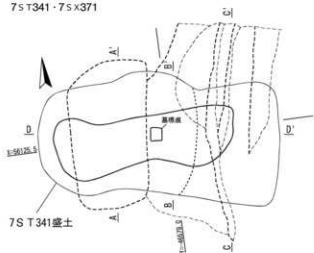


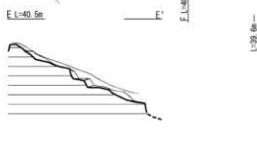
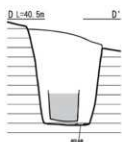
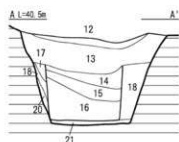
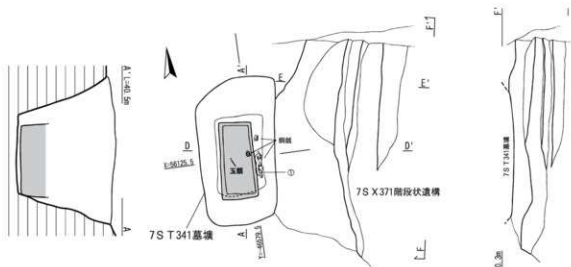
Fig. 186 75T341出土遺物実測図 (1/2)

7ST341・7S×371



盛土土層

- | | |
|---------------------|----------------|
| 1. 黒褐色土(2.5Y3/2) | 表土 |
| 2. 淡黄色土(2.5Y3/2) | 表土 |
| 3. オリーブ褐色土(2.5Y4/4) | ややしまる |
| 4. にぶい黄色土(2.5Y6/4) | 砂粒多量 花崗岩風化土を含む |
| 5. 明黄灰色土(5Y7/1) | しまる |
| 6. 明黄褐色土(10YR7/2) | 粘質土 しまりなし |
| 7. 黄褐色土(2.5Y5/4) | 粘質土 しまりなし |
| 8. 灰黄色土(2.5Y7/2) | 砂質土 |
| 9. 明黄褐色土(2.5Y6/6) | しまりなし |
| 10. 橙色土(7.5Y6/8) | 灰白色土を多く含む |
| 11. 黄褐色土(2.5Y5/4) | 地山土を少量含む ややしまる |



墓室土層

- | | | | |
|--------------------|--------------------|---------------------|--------------|
| 12. 黄褐色土(2.5Y5/3) | 明褐色粘質土を少量含む | 17. にぶい黄色土(2.5Y6/3) | 明黄褐色粘質土を多く含む |
| 13. 橙灰黄色土(2.5Y5/2) | 明黄褐色粘質土を少量含む しまりなし | 18. 黄灰色土(2.5Y6/1) | 明黄褐色土少量を含む |
| 14. 灰黄色土(2.5Y6/2) | 明黄褐色粘質土を多く含む | 19. 黄灰色土(2.5Y6/2) | 砂質土 |
| 15. 黄灰色土(2.5Y5/1) | 砂質土 明黄褐色粘質土を少量含む | 20. 明黄褐色土(10YR6/8) | 灰白色粘質土を少量含む |
| 16. 灰黄色土(2.5Y5/2) | 明黄褐色粘質土を多く含む | 21. 黄灰色土(2.5Y6/1) | 砂質土 |

Fig.187 7ST341, 7SX371平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

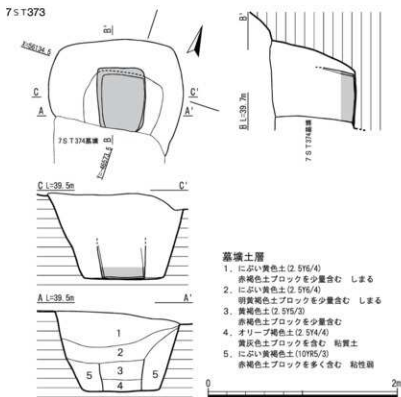


Fig.188 75T373平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

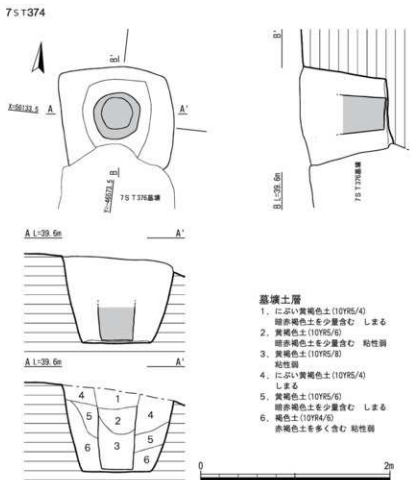


Fig.189 75T374平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

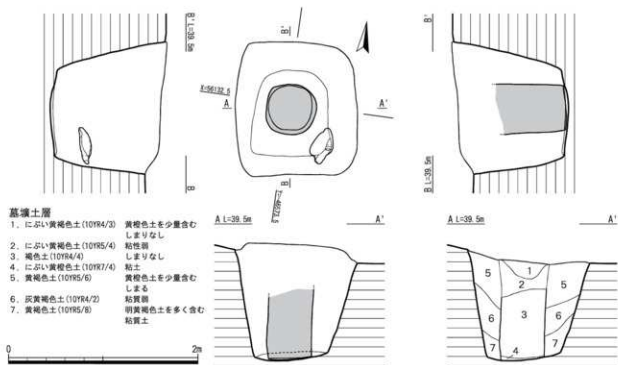


Fig.190 75T376平面図・土層図および断面見通し図(1/40)

75T379

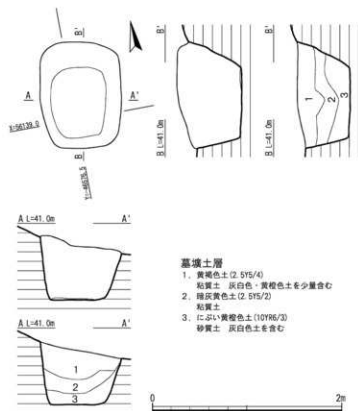


Fig.191 75T379平面図・土層図および断面見通し図(1/40)

遺物 (Fig.186, Pl.34-152)

銭貨

銅銭 (1) 棺内から新寛永1枚, 古寛永2枚, 不明銭2枚が出土した。1は古寛永である。

7ST341関連遺構

7S X371

遺構 (Fig.187)

7ST341の付け加えられた盛土下から検出され, BD18区他に位置する。7ST341に近世墓に供された遺構であり, 簡単な地形削平による階段状遺構である。当遺跡の近世墓群は段差のある地形に形成されており, 所々このような階段状の地形造成が見られる。

7ST373

遺構 (Fig.188)

C群下段の北端, BG17区に位置する。墓塚のみを検出し, 7ST374の墓塚に切られている。

墓塚は不整形長方形を呈する。棺は, 平面観察および土層断面の棺痕跡 (4層) より長方形横棺であると推定される。

7ST374

遺構 (Fig.189)

BG17区に位置する。墓塚のみを検出し, 7ST373の墓塚を切り, 7ST376に切られる。墓塚は方形を呈する。墓塚中央部では棺痕跡を確認し, 直径0.50mの円形棺であったと推定できる。

7ST376

遺構 (Fig.190)

7ST070の北側, BG17区他に位置し, 盛土は残存していなかった。

墓塚は方形を呈する。棺は棺痕跡から直径0.53mの円形棺であったと思われる。棺形状より座葬であったものと推定される。

7ST379

遺構 (Fig.191)

7ST338の北側, BH18区他に位置し, 盛土は残存していなかった。

墓塚は隅丸長方形を呈する。棺の痕跡は確認できなかったが, 他の類型と比較してみるとおそらく長方形の小型の木棺が埋置されていたと考えられる。

7ST383

遺構 (Fig.192)

7ST334の西, BG18区に位置する。小児用の近世墓と思われ, 墓塚は楕円形を呈する。土層からは棺の痕跡は検出できなかったが, 7ST334に近接することと, 埋土状況が他の小児用近世墓に類似していたことから, 乳児用ないしは小児用の墓塚と判断した。

7ST383

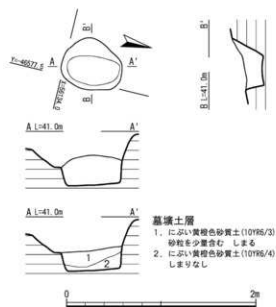


Fig.192 7ST383平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

(文責 秀嶋龍男)

④ D群

D群は、宮ノ本丘陵の東側裾部、標高37m程度に位置しており、細長いテラス状を呈する平坦部を利用して墓地を造営している。

近世墓群内においては、南東端の最下段に位置し、調査前の現況地形観察においても、上部構造となる盛土と地蔵を含む石製墓標が確認されており、当初は十数基程度の墓地群であろうと考えていた。

表土を除去した結果、墓域が南側にも拡がること確認され、最終的には、24基の近世墓を検出することができた。

全体的に、盛土は比較的残りが良いものの、形状に関しては円形あるいは不整形円形といったものが多い。造営時において、方形の盛土を構築する例が見られることを考えると⁹⁾、風雨や竹根・樹木などの影響により本来の形状は失われたとも考えられる。特にD群内において西側に位置している近世墓(7ST313・317など)は、上段からの流出土に覆われ、盛土自体が確認できないものも多く存在した。平坦面を有する地形は、B地区の斜面とD群東側落ち際の基本土層が対応することから、本来緩やかな斜面であったと考えられる。

D群は、人骨等の遺存状態は良くなかったが、棺材の残りが大変良好であり、このことが埋葬主体部を特定する要因となった。近世墓群内において、最も低い場所に位置し、墓壇の底面付近は水分が多く粘質土が堆積していた事などにより木質の残存状況が良好であったと考えられる。

7ST037

遺構 (Fig.195)

AY14区他、平坦部の南側丘陵裾部に位置し、墓壇のみを検出した。7ST043・313と隣接する。

墓壇は隅丸方形を呈し、底面から一段掘り下げて棺を安置している。

棺は、側板と底板の一部が残存しており、長方形横棺であると推定される。

墓壇内の土層観察では、棺蓋が落ち込んだ際に生じた埋土の崩落が認められた。

また、墓壇内の壁面斜面には、木杭が二箇所打ち込まれていた。これは、民俗事例⁹⁾にある「六道」(「ろくどう」、「ろくろ」などと呼ばれる葬送儀礼)に伴う墓壇外に灯笼等を設置するものである可能性も考えられるが、本例の場合は、墓壇内で確認されたため、「六道」の痕跡であると特定できない。あるいは、納棺に伴う施設の痕跡の可能性もある。

遺物は、須恵器の小片が出土しているが混入したものである。

7ST042

遺構 (Fig.197)

AX14区他、平坦部の南側、東方に位置し、7ST043・096等と隣接する。盛土は、ほとんど残存せず、検出段階で確認できなかった。

墓壇は隅丸長方形を呈する。棺については、土層観察で棺痕跡などは確認できなかったが、墓壇底面において地山の変色(棺床痕)が認められた。これは、7ST088・089等の例から考慮すると、長方形横棺の痕跡の可能性が考えられる。

遺物は、墓壇内より土師質土器等が出土した。

遺物 (Fig.196, Pl.30-133・1)

7ST042黒灰色土

金属製品

鉄釘(1) 長さ5.9+αcm、断面は長さ1辺0.3cmを測る。腐食により鉄釘が膨らむように変形している。

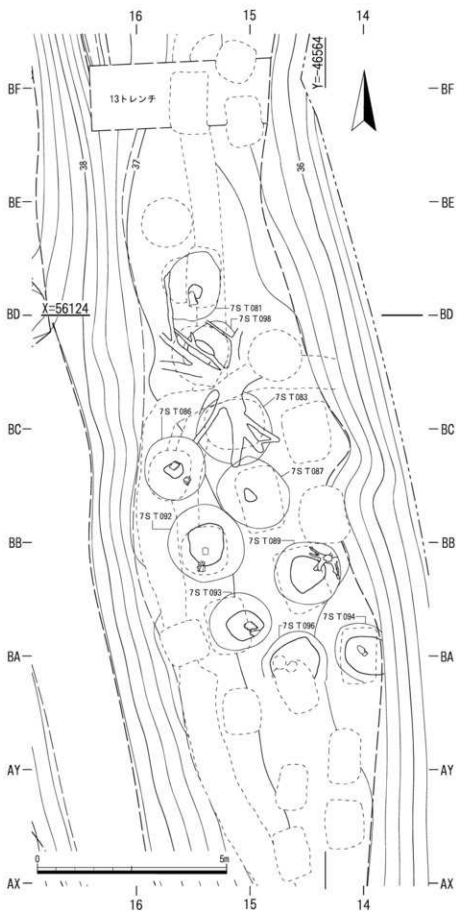


Fig. 193 A地区D群近世墓配置図 盛土および墓壕 (1/100)

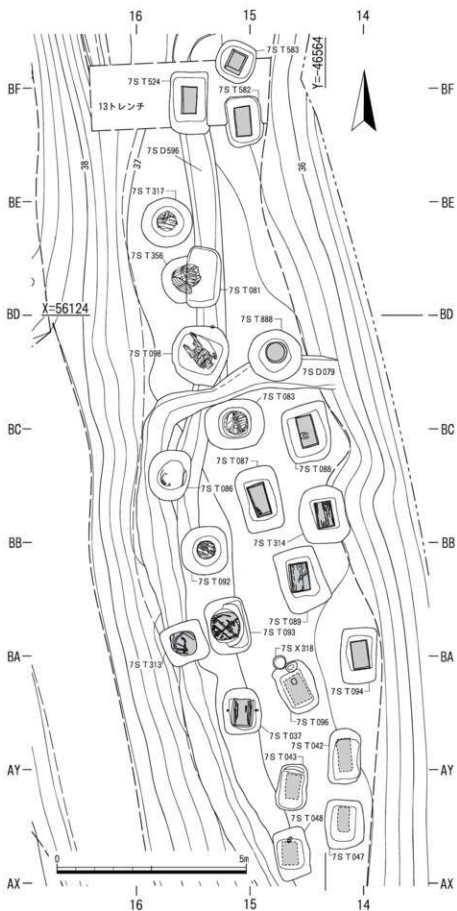


Fig. 194 A地区D群近世墓配置図 墓墳および棺 (1/100)

7ST043

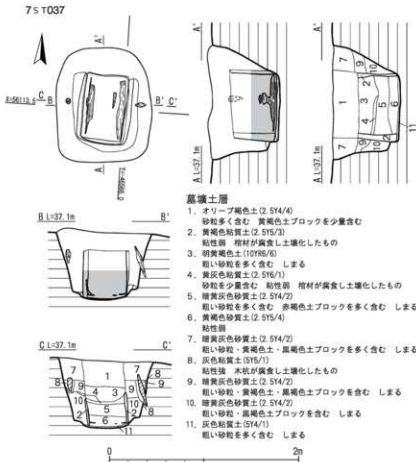
遺構 (Fig. 198)

AX14区他, 平坦部の南側中央に位置し, 7ST047・048等と隣接する。

盛土は確認できず, 墓墳は隅丸長方形を呈する。底面北側にテラスが設けられている。

棺は, 土層観察において痕跡等は確認できなかったが, 墓墳底面において棺床痕が見られた。よって, 7ST088・089等の例から, 長方形横棺の痕跡と推定される。

遺物は, 墓墳内より須恵器・土師器片が多く出土しているが混入したものである。



墓墳土層

1. オリーブ褐色土 (2. 514/4)
砂粒多く含む 黄褐色土ブロックを少量含む
2. 黄褐色粘質土 (2. 515/3)
粘性弱 棺材が腐食し土壌化したもの
3. 明黄褐色土 (10760/5)
粗い砂粒を多く含む しまる
4. 黄灰色粘質土 (2. 516/1)
砂粒を少量含む 粘性弱 棺材が腐食し土壌化したもの
5. 暗黄灰色砂質土 (2. 514/2)
粗い砂粒を多く含む 赤褐色土ブロックを多く含む しまる
6. 黄褐色砂質土 (2. 515/4)
粘性弱
7. 暗黄灰色砂質土 (2. 514/2)
粗い砂粒・黄褐色土・黒褐色土ブロックを多く含む しまる
8. 灰黄色粘質土 (515/1)
粘性強 木杭が腐食し土壌化したもの
9. 暗黄灰色砂質土 (2. 514/2)
粗い砂粒・黄褐色土・黒褐色土ブロックを含む しまる
10. 暗黄灰色砂質土 (2. 514/2)
粗い砂粒・黒褐色土ブロックを含む しまる
11. 灰色粘質土 (514/1)
粗い砂粒を多く含む しまる

Fig. 195 7ST037平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST047

遺構 (Fig. 199)

AX14区, 平坦部の南側東方中央に位置し, 7ST043・048と隣接する。盛土は確認できず, 墓墳は隅丸長方形を呈する。棺は, 土層観察において確認できなかった。

墓墳底面では, 棺床痕が見られ, 7ST088・089等の例から考慮し, 長方形横棺の痕跡の可能性が考えられる。

遺物は, 墓墳内より須恵器片・越州窯系青磁楯・李朝陶器が出土しているが混入である。

遺物 (Fig. 200, Pl. 30-133・2)

7ST047黒灰色土

金属製品

鉄釘 (1) 長さ1.5+αcm, 断面は最大径0.4cmを測る。

7ST042黒灰色土

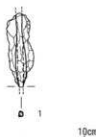


Fig. 196 7ST042出土遺物実測図 (1/3)

7ST048

遺構 (Fig. 202)

AX14区, 平坦部の南側, 丘陵裾部に位置し, 7ST043・047等と隣接する。D群内において最も南側に位置する近世墓である。

盛土は確認できなかった。

墓墳は隅丸長方形を呈する。

棺およびその痕跡は, 確認できなかった。

墓墳底面では, 棺床痕が見られ, 7ST088・089等の例から考慮すると, 長方形横棺の痕跡の可能性が考えられる。

遺物は, 墓墳底面北端において, 土師器小皿aが2点出土している。出土状況から, 棺痕跡の外側に位置している事から, 墓墳と棺の隙間に入れた副葬品と考えられる。

他に墓境内より須恵器が多く出土しているが混入である。

遺物 (Fig. 201, Pl.30-131・1・2)
土師器

小皿a (1・2) 1は口径9.1cm, 底径6.3cm, 器高1.8cmを測る。2は口径9.5cm, 底径7.2cm, 器高1.4cmを測る。1・2ともイト切りである。

7ST081

遺構 (Fig. 203)

BC15区他, 7ST081は平坦部中央やや北より丘陵裾部に位置し, 墓墳は7ST356墓墳を切り, 7ST098・317等と隣接する。

盛土の平面プランは不整楕円形であり, 南側にある大木の根の影響により擾乱を受けている。

墓標は, 盛土上に存在したと考えられる石製地藏像が倒置の状態で見つかった。

墓墳は隅丸長方形を呈する。棺は, 材自体は検出できなかったが, 土層断面観察により長方形横棺の痕跡(墓墳土層5・6・7層)を確認した。

遺物 (Fig. 204, Pl.39-182)

石製品

石製墓標(1) 花崗岩の自然石を用い成形している。正面中央に地藏座像が浮彫りされる。座像の下には台座を造りだし, 蓮華文が線彫りされる。背面は側面に細かい調整を施し丸みを持たせている。墓碑銘はない。

7ST083

遺構 (Fig. 205, Pl.8-34, 35, 36)

BB14区他, 平坦部中央に位置し, 7ST087・097等と隣接する。

盛土の平面形態は不整円形である。盛土は大木に覆われ, その根により擾乱を受けていた。

墓墳は隅丸長方形を呈する。棺は桶棺であった。棺内に蓋材の一部と思われる部材も出土したが,

7ST042

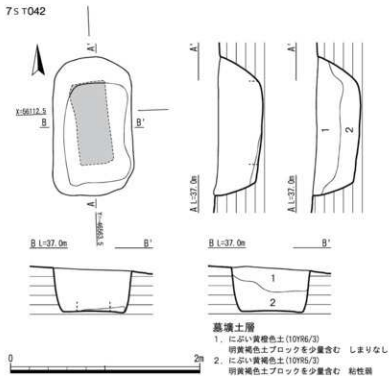


Fig. 197 7ST042平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST043

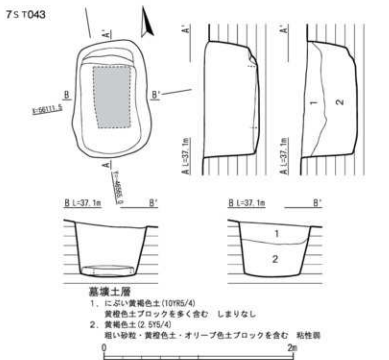


Fig. 198 7ST043平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST047



Fig.199 7ST047平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST047黒灰色土



7ST048



7ST048

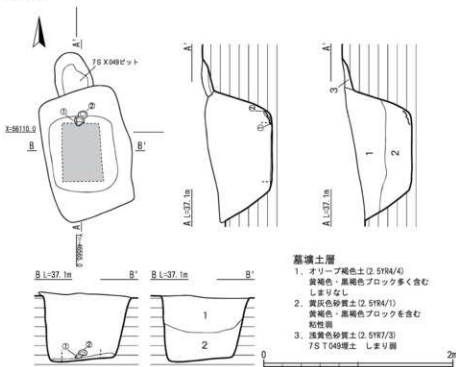


Fig.202 7ST048平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

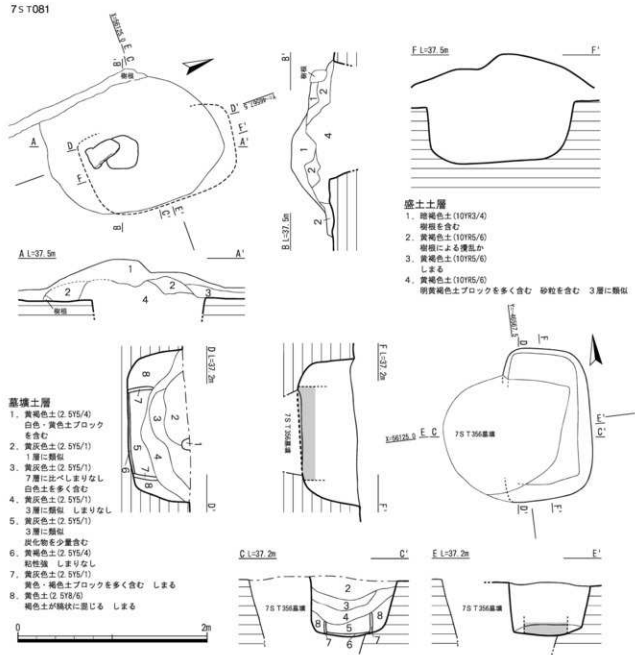


Fig. 203 75T081平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

腐食が著しく取り上げは行えなかった。

墓填内土層観察では、棺蓋が落ち込んだ際に埋土が流入した痕跡が観察できた。また、棺材取り上げ時に桶タガ痕跡を二条確認できた。

遺物は、墓填内より須恵器・土師器・土師質土器、また白磁碗が出土しているが、混入したものと考えられる。



Fig. 204 75T081出土遺物実測図 (1/8)

7ST083

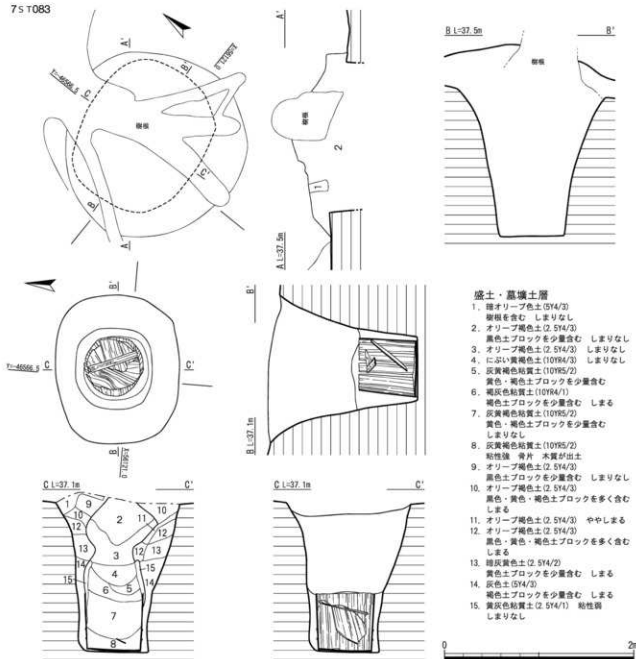


Fig. 205 7ST083平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST086

遺構 (Fig. 206, Pl. 8-37)

BB15区、平坦部中央丘陵裾部に位置し、7ST083・092等と隣接する。

盛土の平面形態は円形を呈する。盛土頂部には、石製墓標が割れた状態で2個見られたが、これらは同一個体である。この墓標のうち、盛土頂部のものは、ほぼ原位置を保っていると考えられ、盛土中腹の墓標は上部を欠損しており崩落したものと考えられる。

墓壇の平面形態は楕円形を呈する。

墓壇底面からは竹籠が残存しており、腐食が著しく取り上げは困難であったものの、「×」字状に編んだ状態で出土した。人骨は残存していなかった。

墓壇内の土層観察において、他の楕円埋葬墓(7ST083・092等)と同様に、棺蓋が落ち込んだ際に生じた

7ST086

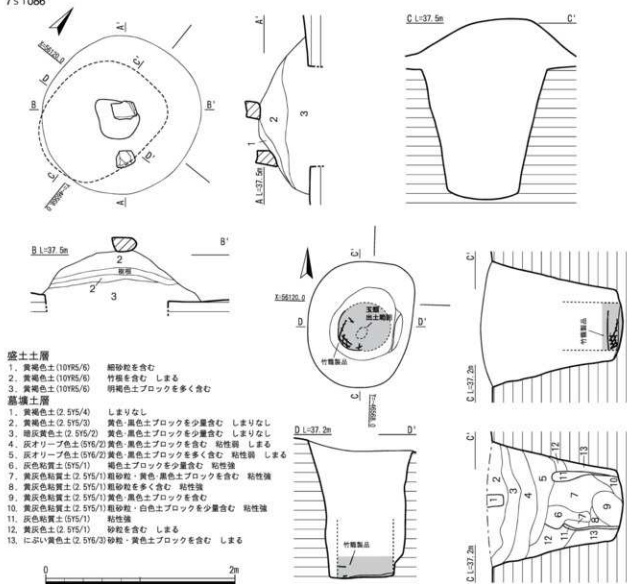


Fig. 206 7ST086平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

埋土の流入が認められることから、本来、蓋材が存在したものと推定できる。

遺物は、棺内の中央から小玉が出土した。また、須恵器片が出土しているが混入したものである。

遺物 (Fig. 207, Pl. 30-131・3)

7ST086黒褐色土

肥前系染付

小坏 (1) 高台から斜め上方に胴部が伸び、口縁部が外反する。全面施釉し、外面の文様 (紅葉文) はコンニャク印判で染め付けられる。

7ST087

遺構 (Fig. 208)

BB14区他、平坦部中央に位置し、7ST083・089・092等と隣接する。

盛土の平面形態は楕円形を呈す。

7ST086黒褐色土



0 10cm

Fig. 207 7ST086出土遺物実測図 (1/3)

75T087

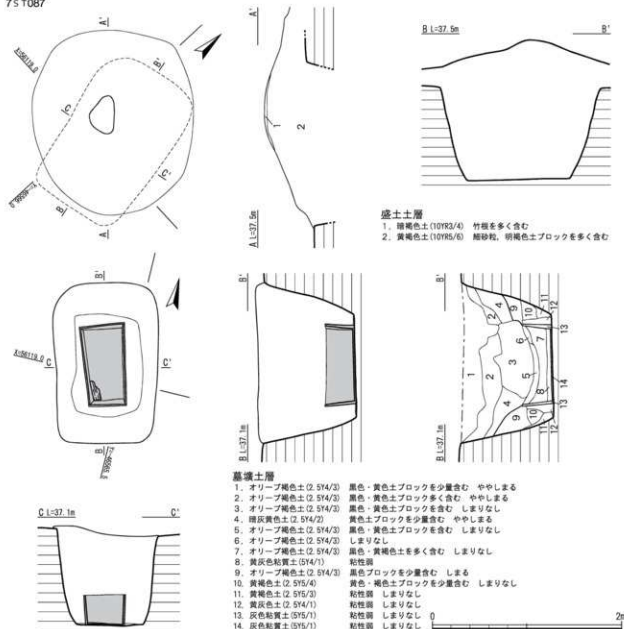


Fig. 208 75T087平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

墓壙の平面形態は隅丸長方形である。棺材は残存していなかったが、土層断面観察(墓壙土層5~8, 13・14層)により長方形横棺であると考えられる。人骨は残存していなかった。

墓壙内の埋土断面観察において、棺蓋が落ち込んだ際に生じた埋土の流入が観察できた。

遺物は、棺内の中央から小玉が出土した。また墓壙内より須恵器・土師器片が出土しているが混入したものである。

遺物 (Fig. 209, Pl.30-134)

75T087にふい橙色土

土製品

円盤状土製品? (1) 土器の周囲を打欠き円盤状に成形したものである。用途は不明である。

75T087にふい橙色土

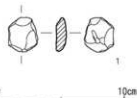


Fig. 209 75T087出土遺物実測図 (1/3)

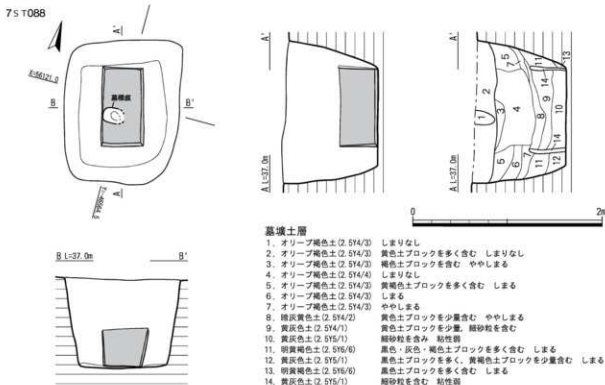


Fig. 210 7ST088平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST088

遺構 (Fig. 210)

BB14区他、平坦部中央の東側に位置し、7ST314・888等と隣接する。盛土は確認できなかった。本来は存在していたと思われる。墓塚は隅丸長方形を呈する。棺材は残存していなかったが、土層断面観察 (8~10, 14層) により長方形横棺と考えられる。

墓塚内土層観察において、棺蓋が落ち込んだ際に生じた埋土の崩落が観察できた。

また、墓塚完掘時、長方形横棺の痕跡とした墓塚底面において著しい地山の変色 (棺床痕) が見られる事から、木棺材が土壌化し、しみ出した樹脂などの影響とも考えられる。人骨は残存していなかった。

遺物は、墓塚内より国産陶器壺が出土した。また、須恵器・土師器片が出土しているが混入したものである。

遺物 (Fig. 211, Pl. 30-131・4)

7ST088黒灰色土

国産陶器

壺 (1) 口縁端部が肥厚する。断面で縞状の重なりが確認できることから、タキカが施されている。釉薬は鉄釉を薄く施軸している。肥前産である。

7ST088黒灰色土



0 10cm

Fig. 211 7ST088出土遺物実測図 (1/3)

7ST089

遺構 (Fig. 212)

BA14区他、平坦部中央のやや東側に位置し、7ST087・314等と隣接する。

盛土の平面形態は円形であり、東側は樹痕により攪乱を受けている。

墓塚は隅丸長方形を呈する。棺は底板が残存している。土層観察 (墓塚土層9~15層) により長方形横棺の立ち上がりが確認できた。なお、底板は状態が不良で、取り上げは困難であった。

75T089

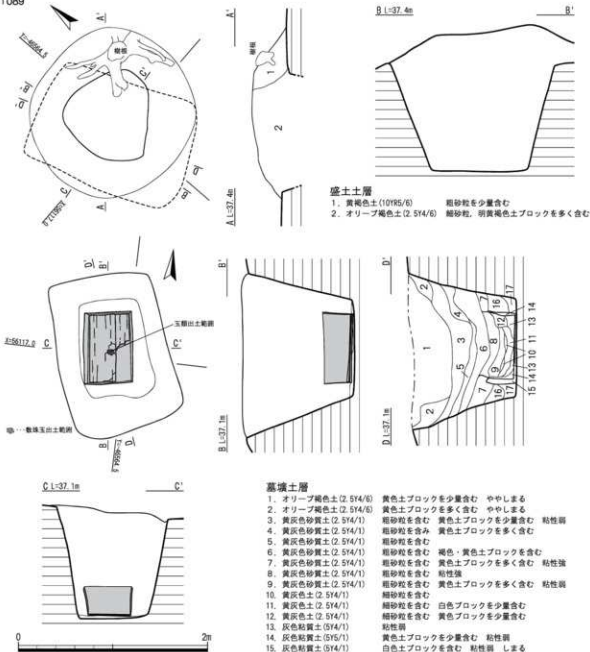


Fig. 212 75T089平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

墓坑内土層観察において、棺蓋が落ち込んだ際に生じた埋土の崩落が観察できる。また、墓坑完掘時、墓坑底面において、底板と同範囲内に著しい地山の変色(棺床痕)が見られる。

遺物は、底板中央付近において小玉が、また、墓坑内より国産磁器小坏が出土した。また、須恵器・土師器片が出土しているが混入したものである。

遺物 (Fig. 213, Pl.30-131・5)

75T089黒灰色土

国産磁器

小坏(1) 底部片が出土した。高台は削りだし高台で胴部が上方に延びる器形と思われる。高台は露胎である。肥前産である。

75T089黒灰色土



Fig. 213 75T089出土遺物実測図 (1/3)

7ST092

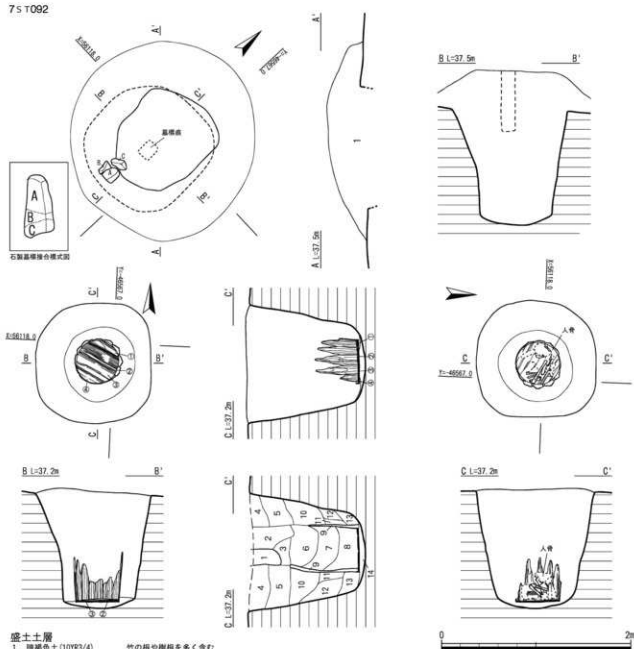


Fig. 214 7ST092平面図・土層図および断面見通し図(1/40)

7ST092

遺構 (Fig. 214, Pl. 9-39, 40, 10-41)

BA15区他, 平坦部中央やや南の丘陵裾部に位置し, 7ST086・093等と隣接する。

盛土の平面形態は円形である。盛土上には, 石製墓標を3基配していたが同一個体のものである。墓標は, 盛土頂部よりやや南に位置していた。

墓標は隅丸方形を呈する。棺は, 桶棺であり, 棺材は墓標底面付近において良好に残存していた。特に底板は非常に良く残っており (Fig. 215), 4枚の板材を木製釘を用いて接合している状況が確認できた。

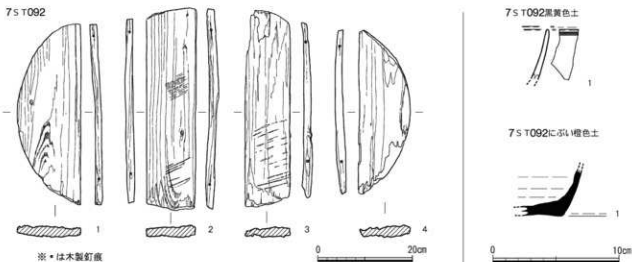


Fig. 215 7ST092出土遺物実測図 (1/3, 1/8)

また、D群内において最も人骨の残りが良く、残存状況から西向きの座葬と考えられる。頭部が大腸骨の直上部に位置していた事から、棺内への土砂流入時に、頭部が崩落したものと考えられる。

遺物は、墓壇内より肥前系染付桶が出土した。また、須恵器・土師器片が出土しているが混入したものである。

遺物 (Fig. 215, Pl. 30-131・6・7, 31-135)

木製品

桶底板 (1~4) 棺材で、材質は不明である。円形になるよう4枚の板を成形し木製釘でつなぎ合わせている。工具の痕跡は見られない。

7ST092黒黄色土

肥前系染付

桶 (1) 口縁部片が出土した。口縁部は直行する器形である。口縁部の外面に圏線が見られる。肥前産である。

7ST092にぶい橙色土

須恵器

壺×鉢×蓋 (1) 未分類資料である。底部は平坦面で稜を持って上方に胴部が延びる器形である。調整は、全体にナデが施される。底面は磨耗により不明である。流入したものである。

7ST093

遺構 (Fig. 216, Pl. 10-42, 43)

BA14区他、平坦部中央やや南に位置し、7ST092・313等と隣接する。

残存する盛土の平面形態は円形であり、石製墓標を2基配しているが、同一個体のものである。これら墓標は、盛土頂部よりやや南東に位置していた。

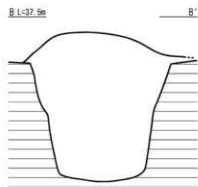
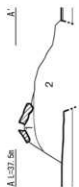
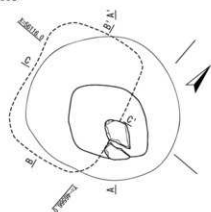
墓壇は隅丸長方形を呈する。

棺は、残存する材より竹籠棺であると考えられる。棺材は墓壇底面付近において良好であり、特に竹籠底部は「×」状に竹を組んで補強していることなどが確認された。

竹籠の構造は、竹を約1cm幅毎に裂き、底部から胴部にかけて竹表面を内側に向け、竹か外に開かぬよう外側にタガ状の「わっぱ」を掛けている。

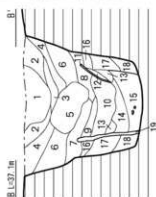
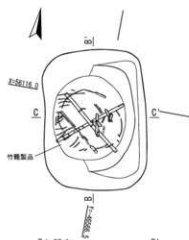
人骨片は、若干残存している程度であった。埋葬状況は不明であるが、D群内において丘陵裾に位置する墓壇は、座葬を主体とする桶棺が多いことから、竹籠棺とした本遺構の場合も座葬であったと推定される。

75T093



盛土土層

1. 暗褐色土(10YR3/4) 竹根が多い しまりなし
2. 黄褐色土(10YR5/6) 粒子的かい 明褐色土ブロックを含む



基壇土層

1. にがい黄褐色土(10YR5/3) 黄色・黒色土ブロックを少量含む しまる
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄色土ブロックを少量含む しまる
3. 灰黄褐色土(10YR5/2) 褐色土ブロックを少量含む しまる
4. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 黄色・黒色土ブロックを少量含む しまる
5. 灰黄褐色土(10YR5/2) 褐色土ブロックを含む しまりなし
6. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 黄褐色・黒色土ブロックを多く含む しまる
7. 褐色土(10YR5/1) 褐色・黄褐色土ブロックを少量含む ややしまる
8. 褐色土(10YR5/1) 黄色・黒色土ブロックを少量含む ややしまる
9. 黄褐色土(10YR3/2) 灰色土ブロックを少量含む ややしまる
10. 黄灰色粘質土(2.5Y5/1) 黄色・灰色土ブロックを少量含む 粘性弱
11. 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘性強 しまりなし
12. にがい黄色粘質土(2.5Y6/3) 粘性強 しまりなし
13. 黄灰色土(2.5Y5/1) 褐色土ブロックを少量含む
14. 黄灰色粘質土(2.5Y4/1) 灰白色・黄色土ブロックを多く含む 粘性強
15. 黄灰色粘質土(2.5Y4/1) 粘性強
16. 黄灰色土(2.5Y5/1) 黄色・黒色土ブロックを少量含む しまる
17. 黄灰色土(2.5Y4/1) 灰色・黒色土ブロックを少量含む しまる
18. 黄灰色土(2.5Y4/1) しまる
19. 黄灰色粘質土(2.5Y4/1) 粘性弱 しまりなし



Fig. 216 75T093平面図・土層図および断面見通し図(1/40)

75T094

遺構 (Fig. 217)

AY13区他、平坦部中央よりやや南東側に位置し、75T089・096等と隣接する。

盛土の平面形態は楕円形であり、東側は法面により削平を受けている。

また、石製墓標を配している。墓標は盛土頂部に位置するが、竹根等により横転していた。墓壇は隅丸長方形を呈する。

棺材自体は出土しなかったが、土層断面観察（墓壇9～10層）により長方形横棺の痕跡と思われる立ち上がりを確認できた。

墓壇内土層において、棺蓋が落ち込んだ際に生じた埋土の崩落が観察できる。人骨は残存していなかった。墓壇底面においては、棺床痕が見られた。

遺物は、墓壇内より国産陶器甕、国産磁器小坏が出土した。

7ST094

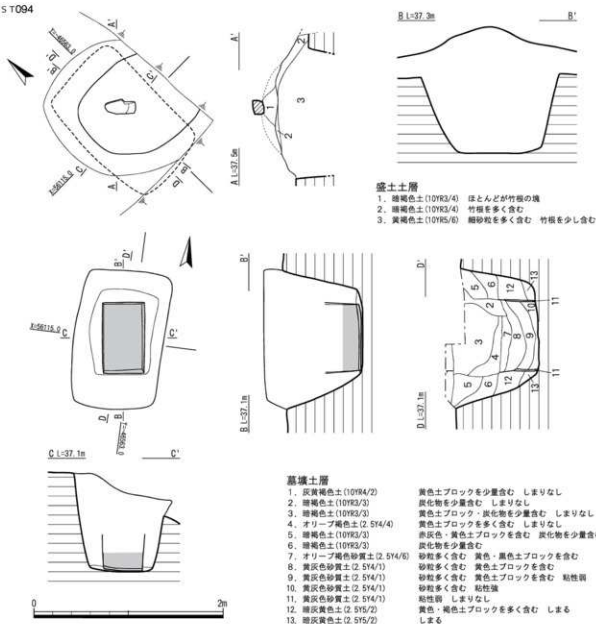


Fig. 217 7ST094平面図・土層図および断面見通し図(1/40)

遺物 (Fig. 218, Pl.30-131・8, 133・3)

7ST094黒灰色土

国産磁器

小坏(1) 口縁部片が出土した。わずかに口縁端部が外反する。透明釉を施軸している。

金属製品

鉄釘(2) 長さ3.3+αcm, 断面は長さ0.4cm×幅0.4cmを測る。

7ST094黒灰色土

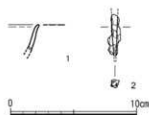


Fig. 218 7ST094出土遺物実測図(1/3)

7ST096

遺構 (Fig. 219)

AY14区他, 平坦部中央よりやや南に位置し, 7ST037・042等と隣接する。

盛土の平面形態は楕円形を呈すると思われる。墓壇は隅丸長方形を呈する。

棺は墓壇底面において棺痕跡と考えられる棺床痕が確認でき, その痕跡から長方形横棺と推定される。

7ST096, 75X318

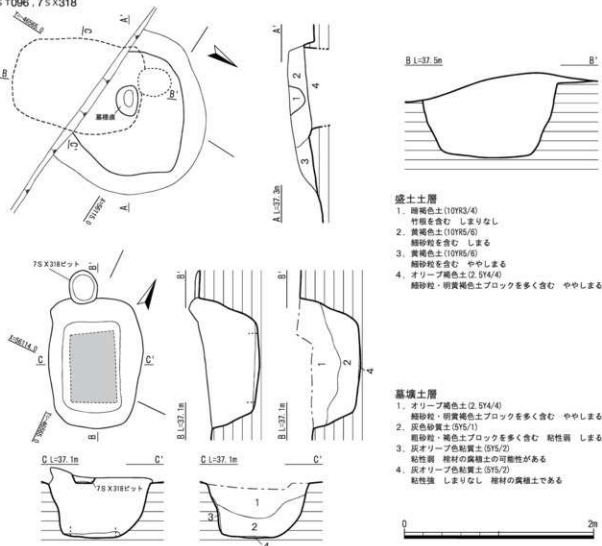


Fig. 219 7ST096, 75X318平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

人骨は残存していなかった。

遺物は、墓域内より土師質土器鉢・国産陶器摺鉢が出土した。また、須恵器・土師器片が出土しているが混入したものである。

遺物 (Fig. 220, Pl. 30-132・1・2, 133-4・5)

7ST096黒灰色土

土師質土器

鉢AIVc (1) 胴部から直線的に外反する器形である。口縁端部を肥厚させ、平坦面に沈線を施している。AIVcタイプと考えられる。

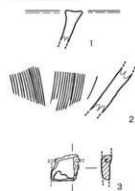
国産陶器

摺鉢 (2) ロクロ成形された胴部片が出土した。内面に縦方向の摺目が2本構描きされる。内面は磨かれており、使用の痕跡が見られる。施釉されていない。

金属製品

用途不明品 (3) 3は長さ4.0cm, 幅2.1+αcm, 厚さ0.7cmを測る板状鉄製品である。

7ST096黒灰色土



7ST096炭黄褐色土



Fig. 220 7ST096出土遺物
実測図 (1/3)

7ST098

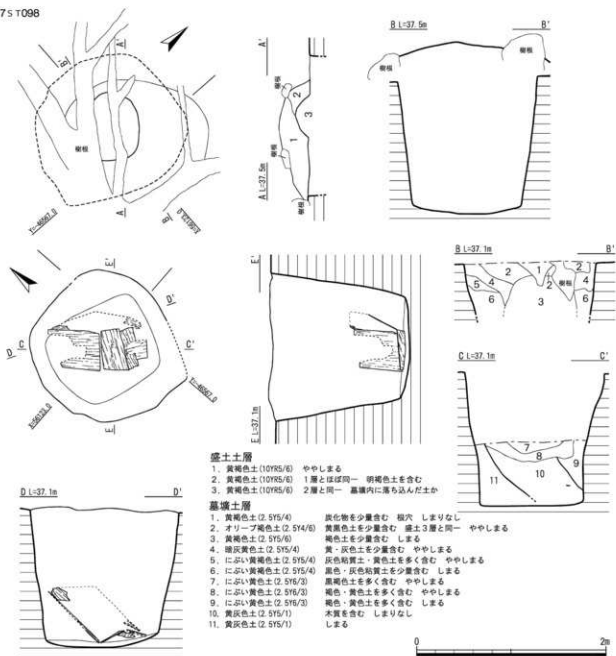


Fig. 221 7ST098平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST096淡黄褐色土

金属製品

用途不明品 (1) 1は長さ2.1+αcm, 幅2.3+αcm, 厚さ0.5cmを測る板状鉄製品である。一部分で棒状の鉄製品が見られ、確定できないが棒状製品は板状製品を貫通しているように見える。

7ST098

遺構 (Fig. 221)

BC15区, 平坦部中央に位置し, 7ST083・356等と隣接する。

盛土の平面形態は楕円形であり, 直上に大木があり攪乱を受けていた。墓墳は不整形を呈する。

棺は, 残存する棺材より方形縦棺であると考えられる。棺材は腐食が著しく取り上げは困難であった。人骨は残存していなかった。

D群内において唯一の方形縦棺としたが, 斜めに棺が倒壊したような状態で検出されており, 出土状況

75T313

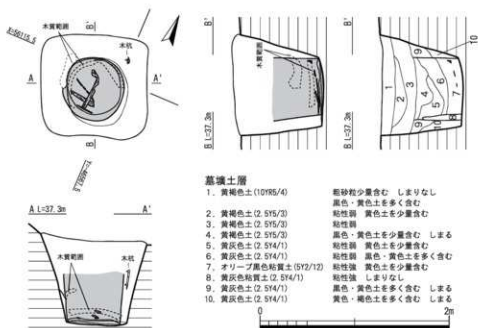


Fig. 222 75T313平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

が75T356と同様に特異である。底板と思われる板材が墓壙底部中央において比較的平らなまみ出土しており、側板から西側に傾いている事から、遺体が棺内に安置されている状態で横倒しになったと想定される。この状況は、棺を墓壙内に降ろす段階が墓壙内に土を充填していく段階に横倒しになったものと思われる。そのまま埋められたものと考えられる。

遺物は、墓壙内より中国製陶器殘片・土師器環a・須恵器・土師器片が出土しているが混入したものと考えられる。

75T313

遺構 (Fig. 222, Pl.10-44)

AY15区他、平坦部中央丘陵裾部に位置し、75T093と隣接する。

盛土は上段からの流出土により失われたと思われ、確認できなかった。墓壙は隅丸方形を呈する。

棺は、残存する棺材より竹籠棺であると推定される。

棺材は墓壙底面において若干残存している程度であり、竹編みの痕跡が確認できたが、腐食が著しく取り上げは困難であった。人骨は骨片が少量残存している程度であった。

墓壙内の土層観察において、他の桶棺埋葬墓(75T083・092等)と同様に、棺蓋が落ち込んだ際に生じた埋土の崩落が観察できる事から、本来、蓋材の存在していたことが想定できる。また、墓内において75T037同様に木杭が出土したが用途については不明である。

75T314

遺構 (Fig. 223, Pl.10-45,46)

BA14区他、平坦部中央の東側に位置し、75T088・089等と隣接する。

盛土は確認できなかった。墓壙は隅丸長方形を呈する。また、墓壙東側は法面となり、その後の造成による削平を受けたものと考えられる。

棺材は、底板が残存しており、土層断面において、長方形横棺の立ち上がりが確認できた。

底板は遺存状態が不良で取り上げは困難であった。人骨は残存していなかった。

また、墓壙完掘時の墓壙底面観察では、底板と同範囲内にて著しい地山の変色(棺床痕)が見られた。

遺物は、棺内北端にて銭貨6枚が出土した。また、墓壙内より須恵器・土師器片が出土しているが混入したものである。

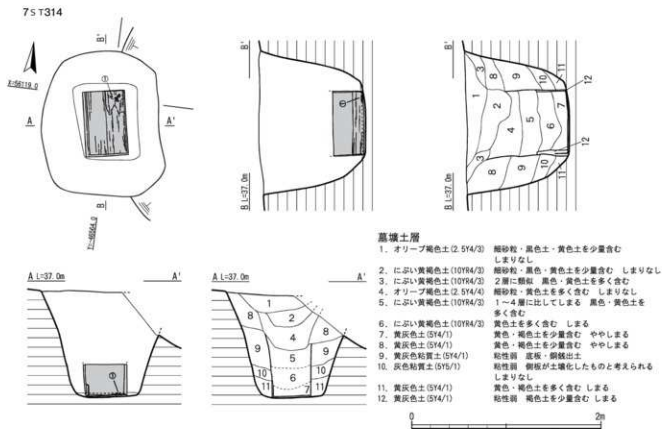


Fig. 223 75T314平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

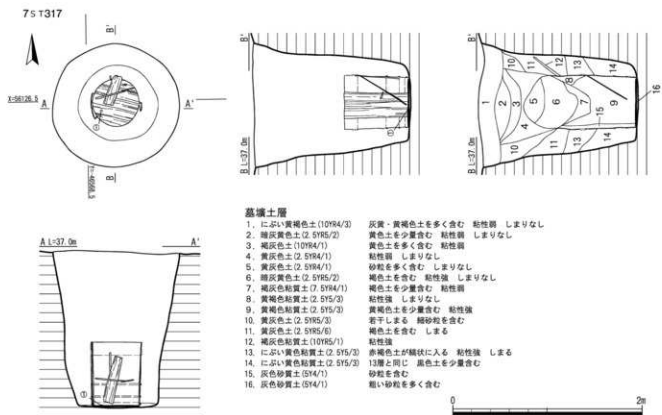
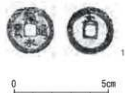


Fig. 224 75T317平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75T314

Fig. 225 75T314出土遺物
実測図 (1/2)

75T317



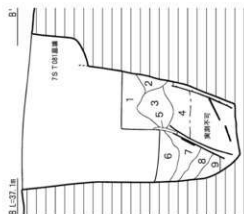
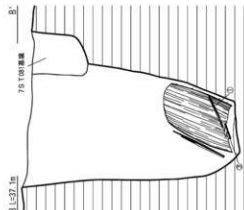
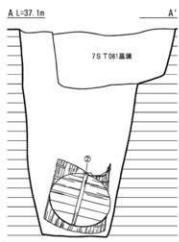
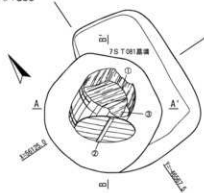
Fig. 226 75T317出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

75T317黒灰色土

75T317暗黒色土



75T356



基壇土層

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1. 暗灰黄色粘質土 (2. S14/1) | 明褐色土ブロックを少量含む 粘性強 |
| 2. 黄灰色粘質土 (2. S16/1) | 明褐色土ブロックを少量含む 粘性強 |
| 3. 黄褐色粘質土 (2. S15/3) | 明褐・黒色土ブロックを少量含む |
| 4. 灰黄色粘質土 (2. S16/2) | 赤褐色土を稀状に少量含む 粘性強 |
| 5. 灰黄色粘質土 (2. S15/2) | 褐色土ブロックを少量含む 粘性強 |
| 6. 黄灰色土 (2. S15/1) | 粘性強 |
| 7. 黄灰色土 (2. S14/1) | 赤褐色土・灰色土・黄色土ブロックを含む 粘性強 |
| 8. 黄灰色土 (2. S14/1) | 灰白・褐・黒色土ブロックを多く含む 粘性弱 |
| 9. 黄灰色粘質土 (2. S14/1) | 赤褐色土(鉄分か)・灰色粘土を少量含む |
| | 黒色土ブロックを含む 粘性強 |

Fig. 227 75T356平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig. 225, Pl.35-153)

銭貨

銅銭 (1) 棺内から新寛永 4 枚, 古寛永 2 枚が出土した。新寛永の文銭である。

7ST317

遺構 (Fig. 224, Pl.10-47)

BD15区他, 平坦部北側の丘陵裾部に位置し, 7ST081・356等と隣接する。

盛土は確認できなかった。

墓壇は円形を呈する。棺は, 残存する棺材と土層断面から桶棺であると考えられる。

棺材の残りは部分的に良好であり, 特に側板3枚と底板は完全に残っていた。また, 底板は5枚の板材を木製釘を用いて接合している状況が確認できた。

墓壇内土層において, 棺蓋が落ち込んだ際に生じた埋土の崩落が観察できる。また, 桶棺材の上位に幅6.0cmで1条, 中位~下位に幅1.5cmで3条の竹編み状の植タガを上下4条確認できた。

遺物は, 底板直上より銭貨2枚が出土した。墓壇内より, 肥前系染付系小椀・丸椀が出土した。また, 墓壇内より須恵器片・白磁皿が出土しているが, 混入したものである。

遺物 (Fig. 226, Pl.30-132・3・4, 35-154)

銭貨

銅銭 (1) 棺内から古寛永2枚, 不明1枚が出土した。古寛永である。

7ST317黒灰色土

肥前系染付

小椀 (1) 高台径が小さく, 胴部下半で丸みをもって口縁部が立ち上がる器形である。器壁が非常に薄い。全面施釉されるが, 高台畳付けは露胎である。高台には圓線を2本, 高台脇に圓線1本, 外面に文様が染付けられている。

7ST317暗黑色土

肥前系染付

丸椀 (1) 口縁部片が出土した。外面に文様が染付けられる。

7ST356

遺構 (Fig. 227, Pl.10-48)

BD15区, 平坦部やや北より丘陵裾部に位置する。墓壇のみを検出し, 7ST081の墓壇に切られ, 7ST098・317等と隣接する。墓壇は円形を呈する。

棺は桶棺であり, 棺材は蓋材まで確認できたが, 遺存状態は不良で, 墓壇が深かった事等もあり, 部分的な取り上げに留まった。

さらに, 7ST098と同様に, 斜めに棺が横倒しになったような状態で検出され, 蓋材は南側に滑落し, 底板は北側が押し上げられた状態であった。

このような状況は, 棺を墓壇内に降ろす段階が墓壇内に土を充填していく段階に横倒しになったものと思われる。そのまま埋められたものと考えられる。

遺物は, 棺内より銭貨4枚が出土した。

遺物 (Fig. 228, Pl.31-136)

木製品

桶側板 (1) 最大長71.3+ α cm, 最大幅6.5cm, 最大厚1.5cmを測る。木材は杉と思われる。

桶蓋 (2) 最大長62.6cm, 最大幅11.9+ α cm, 最大厚1.3cmを測る。木材は杉と思われる。

木製釘痕が確認できた。蓋材の接合方向と直角に接合される。

7ST356



Fig. 228 7ST356出土遺物実測図 (1/8)

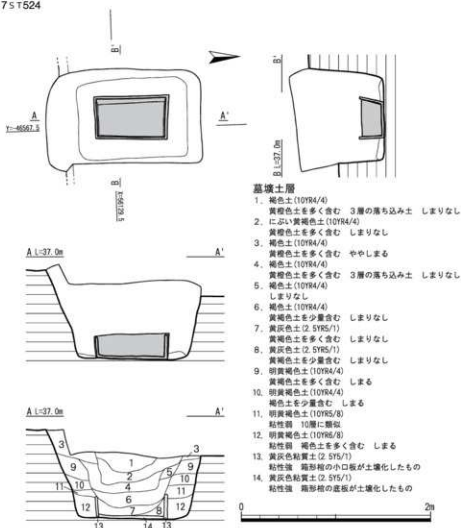


Fig. 229 7ST524平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

桶蓋枚 (3) 最大長62.8cm, 最大幅4.2cm, 最大厚2.4cmを測る。木材は杉と思われる。木製の釘を9~15cm程の間隔で蓋材に打ち付けている。

7ST524

遺構 (Fig. 229)

BE15区他, 平坦部北側の丘陵裾部に位置し, 7ST582・583等と隣接する。

盛土は残存していなかった。墓坑は隅丸長方形を呈する。

棺は, 材自体の出土は見られなかったが, 土層断面観察 (墓坑土層7・8, 13・14層) により, 長方形横棺の痕跡と思われる立ち上がり確認できた。人骨は残存していなかった。

墓坑内土層観察において, 棺蓋が落ち込んだ際に生じた埋土の崩落が観察できた。

遺物は, 墓坑内より須恵器・土師器片が出土しているが混入したものである。

7ST582

遺構 (Fig. 230)

BE14区他, 平坦部北側の東側に位置し, 7ST524・583等と隣接する。

盛土は確認できなかった。墓坑は隅丸長方形を呈する。

棺は, 材自体の出土は見られなかったが, 土層断面観察 (2・4層) により方形横棺の痕跡と思われる立ち上がり確認できる。人骨は残存していなかった。

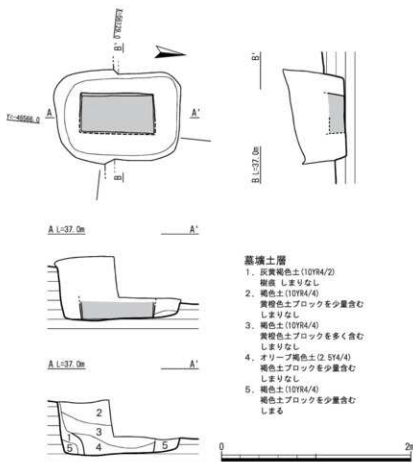


Fig. 230 7ST582平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

墓城内土層観察において、棺蓋が落ち込んだ際に生じた埋土の崩落が観察できる。遺物は、墓城内より須恵器・土師器片が出土していたが混入したものである。

7ST583

遺構 (Fig. 231)

BF14区他、平坦部北側の東側に位置し、7ST524・582等と隣接する。

盛土は現状において確認できなかった。

墓壇は隅丸方形を呈する。

棺は、材自体の出土は見られなかった、土層断面観察（2・3層）により方形棺の痕跡と思われる立ち上がりを確認できた。人骨は残存していなかった。

遺物は、墓城内より須恵器・土師器片が出土していたが混入したものである。

7ST888

遺構 (Fig. 232)

BC14区、平坦部やや北より東側に位置し、7ST088・098等と隣接する。

盛土は大木の根により攪乱を受け失われており確認できなかった。墓壇は円形を呈する。

本遺構は、大木の根が集中している箇所位置しており、当初より墓壇の存在は把握していたが、掘削作業が困難であったため、最終的に重機により大木を除去した後調査を行った。

棺は桶棺であり、棺材の残りは不良で、ほぼ土壌化している状態であった。

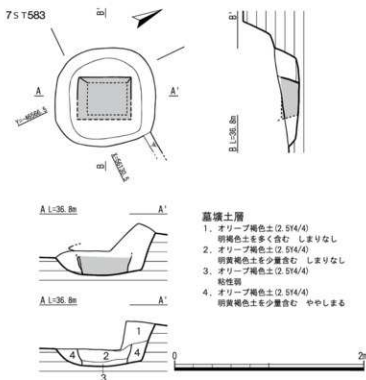


Fig. 231 7ST583平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

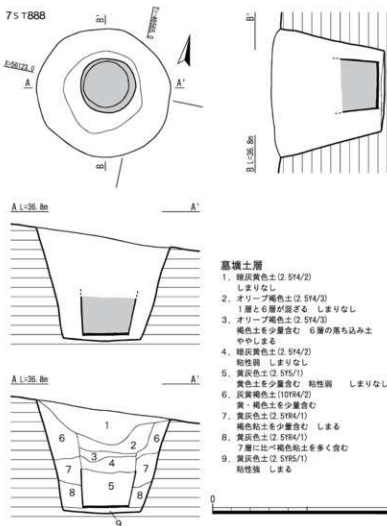


Fig. 232 7ST888平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

遺物は、墓城内より国産陶器碗が出土した。また、須恵器・土師器片が出土しているが混入したものである。

遺物 (Fig. 233 PL.30-132・5)

7ST888暗灰黄色土

国産陶器

碗 (1) 口縁部片が出土した。褐釉が施釉され、細かな貫入がはいる。

(文黄 小石龍信)

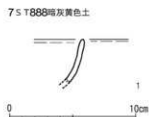


Fig. 233 7ST888出土遺物実測図 (1/3)

⑤ E群

E群は、今回調査を行った近世墓の中で最西端に位置しており、6基の近世墓を確認することができた。盛土や墓壇の埋土は、共に黄灰褐色土を基調としており、花崗岩風化土がブロック状に混入している状況であった。

E群の近世墓は、他群の近世墓に比べて盛土の保存状態がよく、7ST053等では、近世墓における石製墓標の設置状況の詳細が分かる資料を得ることができた。

なお、当該地区における地山は花崗岩風化土であるが、7ST051の墓壇の内壁において、花崗岩風化土直上に花崗岩風化土をブロック状に含んだ土層を確認できた。

このことは、個別の墓が形成される前段階に、一帯を造成した可能性もあることを示している。

7ST051

遺構 (Fig. 236)

BC21区他で検出した近世墓である。盛土は不整形、墓壇は長方形を呈し、墓壇底面は平坦である。石製墓標は確認できなかった。棺材の出土は見られないが、平面観察および土層断面観察（墓壇土層7・8層）より、円形棺であったと考えられる。遺物は出土していない。

7ST052

遺構 (Fig. 237)

BC21区他で検出。盛土は方形で、盛土上において石製墓標を確認できたが、倒れており原位置を留めていなかった。

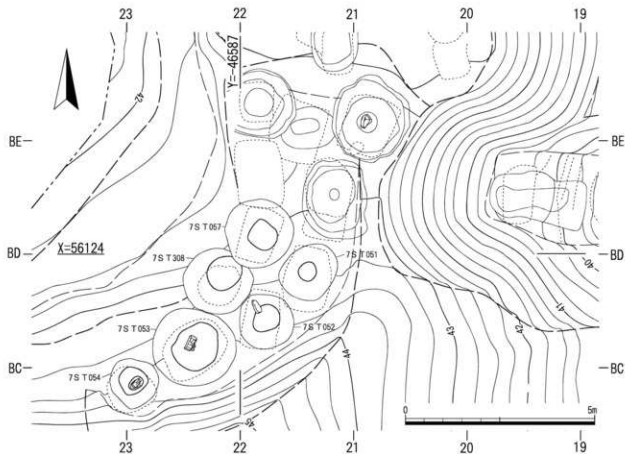


Fig. 234 E群近世墓配置図 盛土および墓壇 (1/100)

墓壇は長方形を呈する。墓壇底面は平坦である。また、墓壇平面および断面において棺の痕跡は確認できなかった。遺物は出土していない。

7ST053

遺構 (Fig. 238, Pl.12-51・52)

BB22区他で検出した。盛土は楕円形であった。

盛土掘り下げの際には、石製墓標設置に伴う構造を確認することができた。

石製墓標は、「墓標石」1個、墓標石を設置する台となる「基礎石」1個、墓標石を直立させるための「クサビ石」3個、「用途不明石」1個で構成されていた。

石製墓標の構造および盛土の土層断面から、7ST053の盛土築造過程は、下記のように推測される。

- ① 遺体を埋納して墓壇内に土砂を充填した後に、1次盛土（盛土土層2層）を構築する。
- ② 基礎石、クサビ石、墓標石を1次盛土上に設置する。
- ③ 2次盛土（盛土土層1層）を構築する。

なお「用途不明石」は平坦な面が上に向けられていること、また、他の石とは接していないことから、1次盛土構築後の供養等に使用されたとも考えられる。しかし、その詳細な機能を明確にすることが困難であったため、「用途不明石」とした。

石製墓標には銘がほぼ完全に残っており、「享保七年 法名 釈裕閑信士 十月六日」とあった。享保七年（西暦1722年）の墓碑銘より、被葬者の埋葬年代は資料のとおりであると考えられる。しかし、盛土および墓壇については、改葬や修繕など再構築される場合が考えられるため、墓碑銘と墓の築造年代が異なる可能性は否定できない。

墓壇は楕円形を呈する。墓壇底面は平坦である。棺は平面観察および土層（墓壇土層6層）断面におい

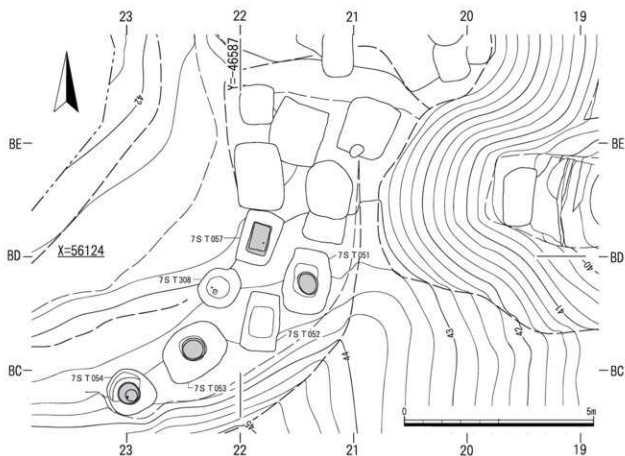


Fig. 235 E群近世墓配置図 墓壇および棺 (1/100)

7ST051

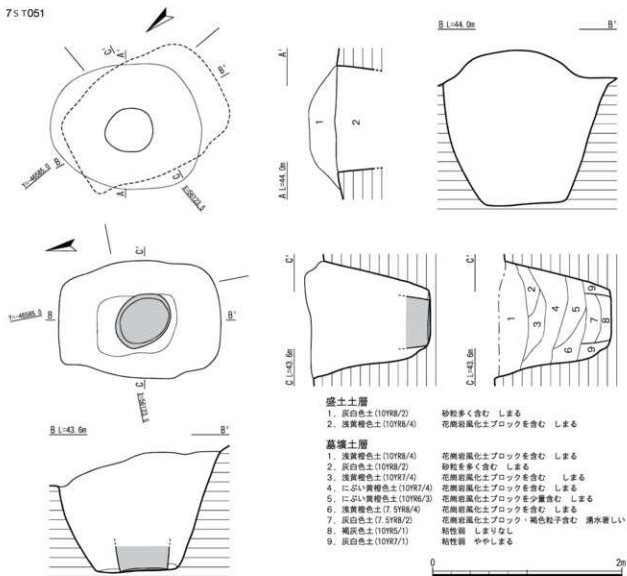


Fig. 236 7ST051平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

て円形棺と思われる。また、棺内底面と考えられる箇所から小玉、銭貨6枚が出土した。

遺物 (Fig. 239, Pl.39-178)

石製品

石製墓標 (1) 花崗岩の自然石を用い成形している。正面は工具痕の残らない丁寧な面調整を施し、墓碑銘が彫られている。

「(右) 享保七年」

「(中) 法名釈祐閑信士」

「(左) 十月六日」

7ST053灰黄色土

銭貨

銅銭 (1) 棺内から新寛永4枚、古寛永2枚が出土した。新寛永の文銭である。

7ST054

遺構 (Fig. 241, Pl.12-53, 54)

BB22区他で検出した。残存する盛土は不整形であった。

「基礎石」および「クサビ石」などは確認できなかった。しかし、石製墓標を埋置するための掘り方を確

75 T052

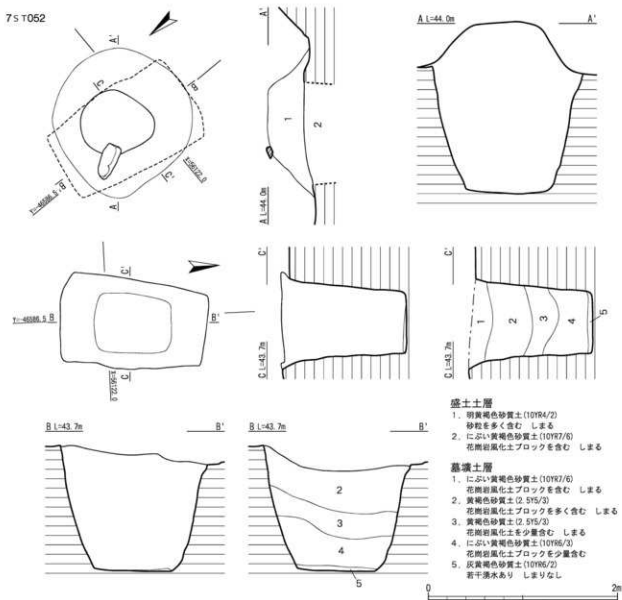


Fig. 237 75T052平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

認することができた。なお、石製墓標の墓碑銘は確認できなかった。

墓壇は円形を呈する。墓壇底面は狭く平坦となっている。

棺は突棺を用いている。墓壇内の中位北西側がテラス状になっており、棺を墓壇内に下ろす際の足場であると考えられる。

突棺底面から小玉、および銭貨6枚が出土している。

遺物 (Fig. 240, Pl. 35-155, 156, 37-171, 39-179)

石製品

石製墓標 (1) 細長い花崗岩の自然石を用い成形している。縦断面はレンズ状を呈する。

墓碑銘はない。

75T054褐色土

瓦質土器

甕 (1) 器高60.6cm, 口径60.7cm, 底径31.8cmを測る。ほぼ完形で出土した。

内・外面全体にナデを施し、そのあと口唇部を一周するようにハケ目、体部内・外面に斜め方向のハケ目、底部内面に横方向のハケ目が施されている。またハケは2種類使用しており、内・外面ともに下部を細いハケ、口縁-体部を太いハケで調整している。産地は不明である。

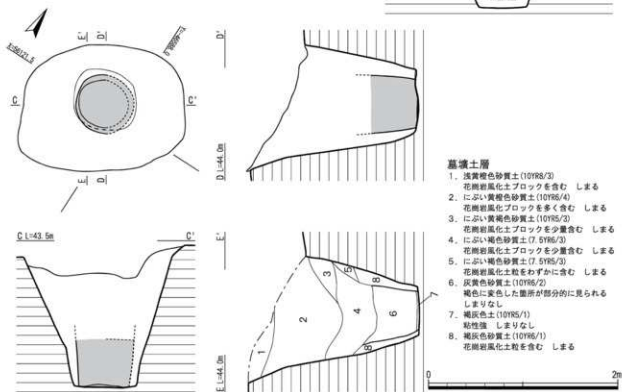
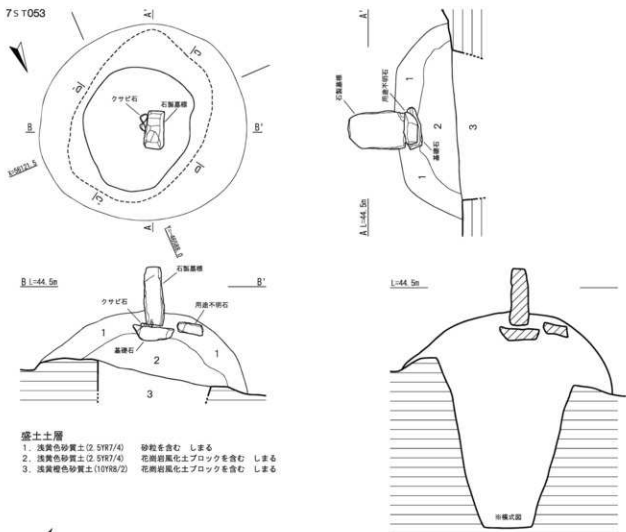
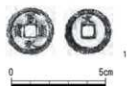


Fig. 238 75T053平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7S T053灰黄色土



7S T053

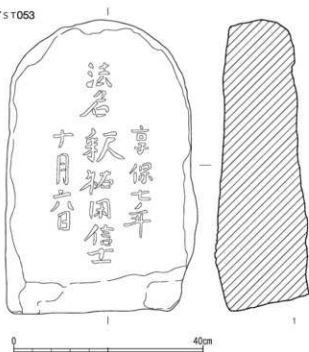
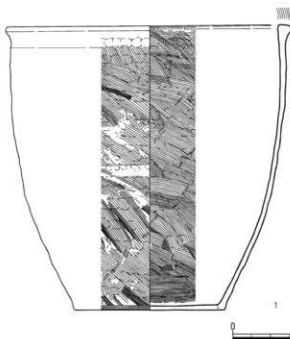
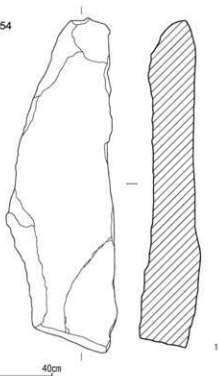


Fig. 239 7ST053出土遺物実測図 (1/2, 1/8)

7S T054精灰色土



7S T054



7S T054灰白色土

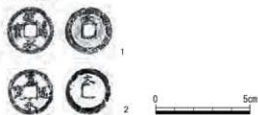


Fig. 240 7ST054出土遺物実測図 (1/2, 1/8)

7ST054

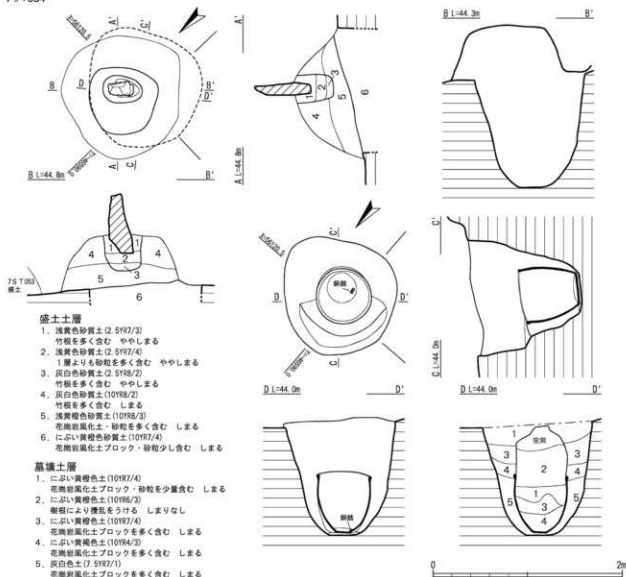


Fig. 241 7ST054平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST054灰白色土

銭貨

銅銭 (1・2) 棺内から新寛永4枚, 古寛永1枚, 不明1枚が出土した。新寛永の文銭である。

7ST057

遺構 (Fig. 242)

BC21区他で検出した。盛土は円形を呈する。石製墓標は確認できなかった。

墓壇は、長方形を呈する。墓壇底面は平坦である。棺は平面および土層断面 (墓壇土層4層) より長方形横棺と思われる。

盛土内から国産磁器の小坏片1点, また墓壇底面から布製品に包まれた状態で銭貨6枚が出土している。

遺物 (Fig. 243, Pl. 31-137)

7ST057褐色土色土

国産磁器

小坏 (1) 口縁片である。透明釉をごく薄く施し細かい貫入が多く入る。18~19cのものと考えられる。

7ST057

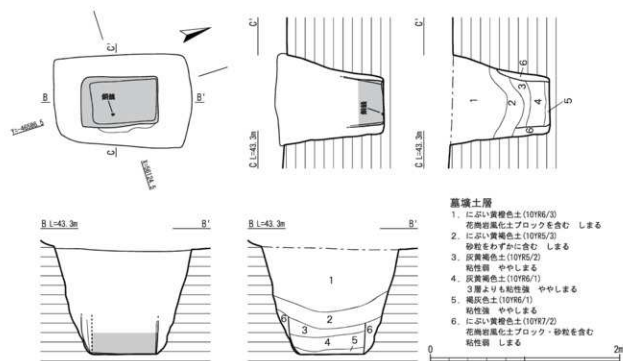
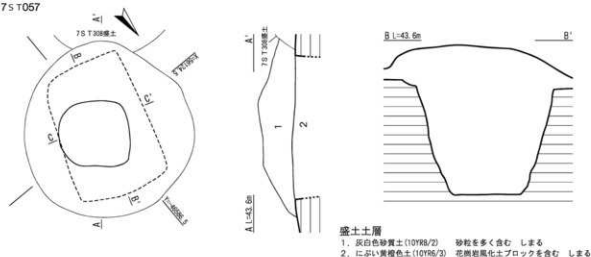


Fig. 242 7ST057平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7ST308

遺構 (Fig. 244)

BC21区地で検出した。

7ST057の盛土土層断面において新たに確認され、当該盛土のほとんどが7ST057の盛土掘削時に削平されてしまった。そのため盛土については土層断面のみの記録保存となった。図中の盛土平面は断面からの推定復原である。墓石は確認できなかった。

墓墳は不整形を呈し、墓墳底面は平坦である。また墓墳底面において銭貨が6枚出土している。

7ST057褐灰色土



Fig. 243 7ST057出土遺物
実測図 (1/3)

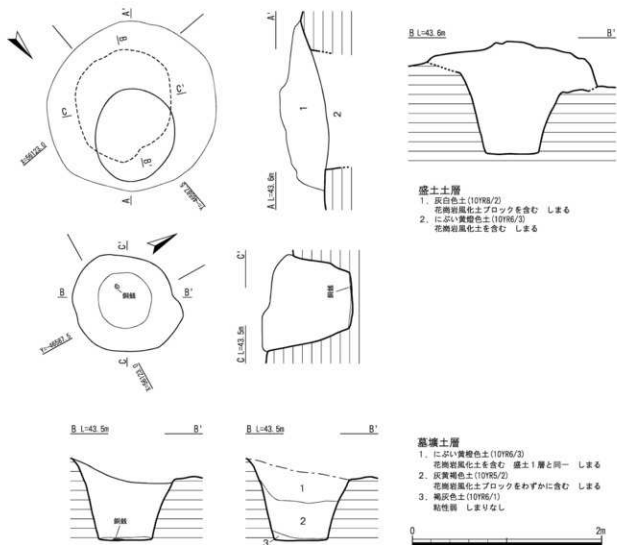


Fig. 244 7ST308平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

⑥ 原位置不明な石製墓標

これまで、出土位置が明確な石製墓標については、各遺物の項目にて紹介してきたが、本遺跡では出土位置が不明確な石製墓標も多数出土している。ここでは、それらについて一括して、各遺物とは別に掲げておくことにする。

遺物 (Fig. 245~247, Pl. 41, 42)

石製品

石製墓標 (1) 花崗岩自然石を用いる。縦断面はレンズ状を呈する。正面は平坦な面調整を施し、記銘がある。

「(右) 宝永四年」

「(中) 釈妙吟信女」

「(左) 二月十二日」

石製墓標 (2) 花崗岩自然石を用いる。縦断面はレンズ状を呈する。正面は若干内湾気味に平坦な面調整が施され、墓碑銘がある。

「(右) 寛政二年」

「(中) 釈旭山信士」

「(左) 三月廿九日」

石製墓標 (3) 火山岩を用いるが、ほとんど欠損している。正面は平坦な面調整が施され、墓碑銘がある。

「(右) 享保□」
「(中) 釈妙心□」
「(左) 十月廿二□」

なお、(右)の□は「七」もしくは「十」であると考えられる。

石製墓標 (4) 花崗岩の自然石を用いる。縦断面はレンズ状を呈する。正面は内湾気味に平坦な面調整が施され、墓碑銘が、正面の一段下げられた面に彫られている。

「(右) 享保十八年」
「(中) 法名釈為慈」
「(左) 九月廿九□日」

なお、(左)の□は「小」かとも読める。

石製墓標 (5) 火山岩を用いるが、上下は欠損している。正面は平坦な面調整が施され、墓碑銘がある。

「(右) □十年」
「(中) □ (為) 霊 (□) 位」
「(左) 九月十二日三七」

なお、(為) (□) は異体字がはいる。

石製墓標 (6) 花崗岩の自然石を用いる。正面は平坦な面調整を施し、墓碑銘がある。

「(右) 享保十六年」
「(中) 法名釋宗源」
「(左) 亥七月四日」

石製墓標 (7) 花崗岩の自然石を用いる。正面は平坦な面調整を施す。墓碑銘は正背面の一段下げられた面に彫られている。

正面 「養原武吉之墓」
背面 「(右) 明治廿四年旧十二月廿四日」
「(左) 年七十九」

石製墓標 (8) 花崗岩の自然石を用いて成形している。正背面は平坦な面調整を施す。墓碑銘は正背面の一段下げられた面に彫られている。

正面 「養原武吉妻墓」
背面 「(右) 明治三十年旧十二月五日」
「(左) 年八十二」

石製墓標 (9) 火山岩の自然石を用いて成形している。正面は平坦な面調整を施す。側面も雑であるが面調整がなされる。正面と左側面に墓碑銘がある。

正面 「(右) 享保十五年」
「(中) 釈□□ (□) 位」
「(左) 七□」
側面 「幼七」

(文責 黒木正行・島内浩輔)

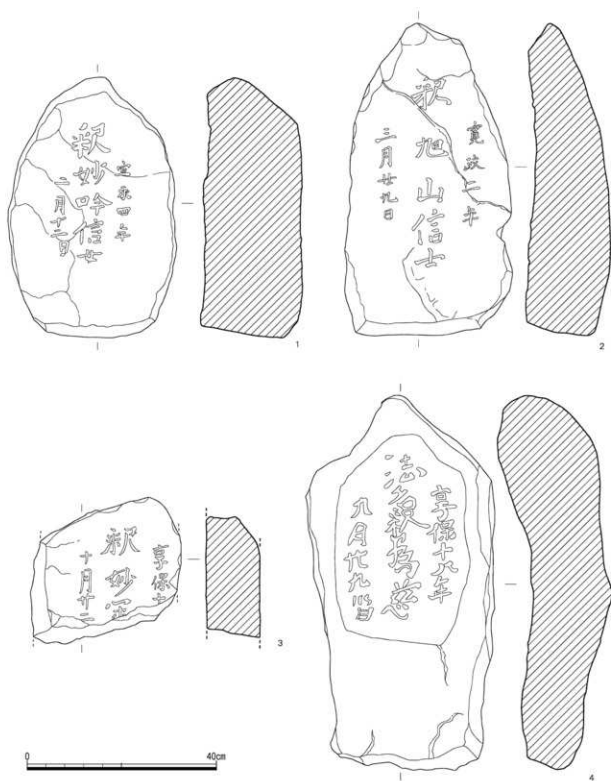


Fig. 245 石製墓標実測図 (1) (1/8)

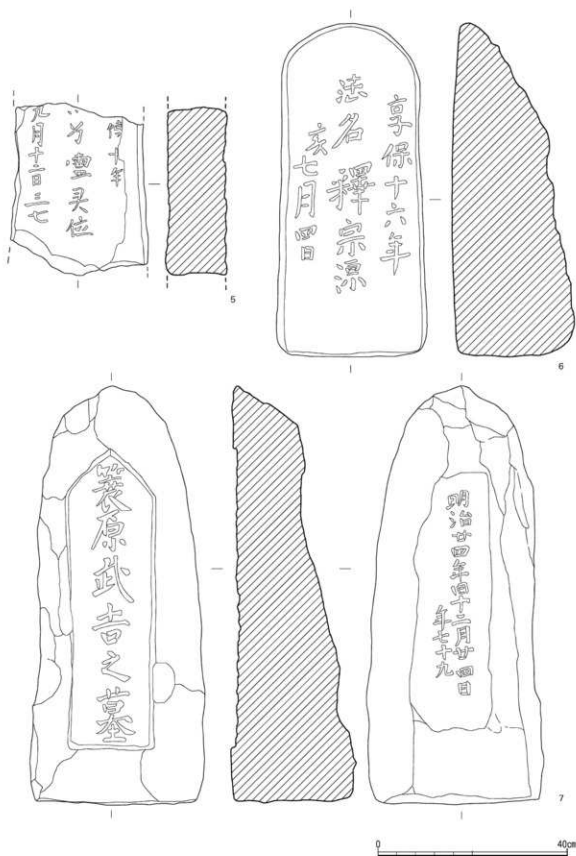


Fig. 246 石製墓標実測図 (2) (1/8)

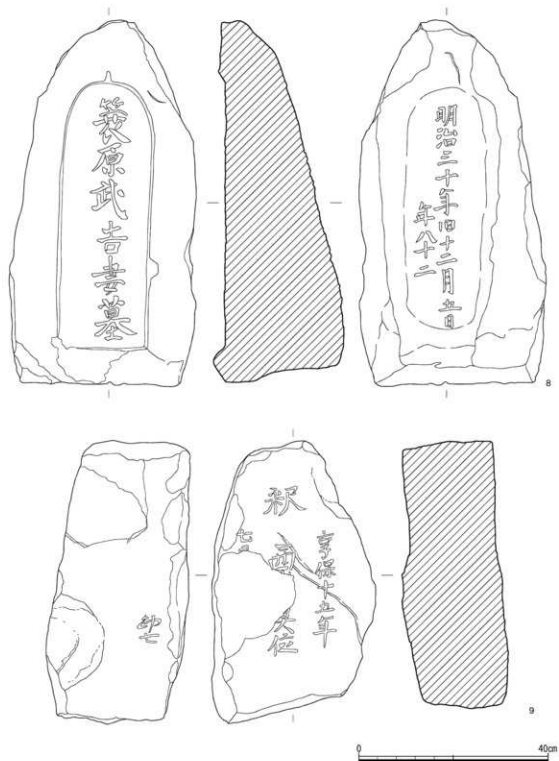


Fig.247 石製墓標実測図(3)(1/8)

註1 本遺跡で確認した近世以降の墳墓について、下記のように整理を行い、使用する用語を統一した。
まず、地面上にて近世以降の墳墓と確認できる属性と、地表面下において確認できる属性とに分離し、前者を上
部構造、後者を下部構造と呼称する。

上部構造を構成する属性としては、一般的に、盛土、石製墓標(墓石)、木製墓標、石製卒塔婆、木製卒塔婆等が知
られている。本遺跡では、盛土、石製墓標、木製墓標の痕跡等を確認することができた。

下部構造を構成する属性としては、埋葬主体部および遺体収納容器に分離できると思われる。一般的に、埋葬主体
部には、墓壇と柩室から構成されるもの、あるいは墓壇単独で構成されるものなどが見られるが、本遺跡では墓壇単
独のもののみ確認できた。

遺体収納容器は、棺材が残存するものいくつか存在し、甕、桶(早桶)、竹籠、箱形の木棺、長持形の木棺などを
確認することができた。また、箱形の木棺については、平面形態が方形あるいは長方形を呈するものが確認でき、方
形については縦に長い形態のものが確認できた。それぞれ、甕棺、桶棺、竹籠棺、方形縦棺、長方形横棺、長持形棺
と呼称したい。

また、棺材が残存していなかった墳墓についても、平面・土層断面で確認できる棺痕跡や、人骨・副葬品等の出土
状況から、遺体収納容器についての想定が可能であった。この場合、棺痕跡の平面観察において円形・方形・長方形
のものが確認されているので、それぞれ、円形棺、方形棺、長方形棺と呼称したい。なお、棺(棺痕跡)の平面形態
と、遺体収納容器との具体的な関係については、Tab.2にまとめている。

人骨が残存している墳墓もいくつか検出されている。埋葬体位については、座葬、仰臥屈葬、側臥屈葬、伸展葬など
が想定される。なお出土人骨の人類学的分析については、本書の「IV 太宰府市日鏡遺跡出土の近世人骨」(p.389)
も合わせて参照して頂きたい。

註2 本遺跡で確認できた近世以降の墳墓には、上部構造と下部構造の両方を有するものも見られ、それら墳墓の大半は、
調査の便宜上、上部構造と下部構造で調査軸を異にしている。そのため、1つの平面図上に図示すると煩雑になるこ
とから、分離して図示することにした①と②。また、上部構造および下部構造の側面位置関係を図示するため、合
成図を作成している③。

①では、上部構造が残存する墳墓のみ図示し、上部構造を実線で、下部構造(墓壇の上端)を短破線にて図示し
ている。

また、盛土を掘削して確認できた遺構(石製墓標の掘り方や木製墓標の痕跡など)については長破線にて図示し
ている。

Tab.2 棺の平面形態と遺体収納容器との関係

※【 】は想定される棺材。

棺の平面形態	棺材残存状況および 平面・土層断面での棺痕跡の確認状況	遺体収納容器	本書で使用 する名称
円形	棺材が残存するもの	桶(早桶)	桶棺
		甕	甕棺
		竹籠	竹籠棺
	棺材が残存せず、痕跡有り	【桶】 or 【竹籠】	円形棺
方形	棺材が残存するもの	縦長で箱形の木棺	方形縦棺
	棺材が残存せず、痕跡有り	【縦長で箱形の木棺】	方形棺
長方形	棺材が残存するもの	縦長で箱形の木棺	長方形縦棺
		横長で箱形の木棺	長方形横棺
	棺材が残存せず、痕跡有り	【縦長で箱形の木棺】 or 【横長で箱形の木棺】 or 【長持形の木棺】	長方形棺

②では、下部構造を図示している。本遺跡で見られる近世以降の墳墓では、大半は棺材が残存していなかった。しかし、下部構造の調査を行う際に、墓壇をある程度深さまで掘り下げた段階で、円形や方形・長方形等のプランを検出することができた。これは、棺内に土砂が流入した際の埋土の移動を示す痕跡と思われる。墓壇内の土層断面においても同様に、棺材が残存していなくても、棺材が腐食・土壌化したと思われる立ち上りの痕跡や、場所によっては棺材の厚みまで確認することができ、棺材が残存せずとも、棺の形態を推測することが可能であった。

そのため、平面図および見通し図上では、棺材が残存している場合には棺材を図示し、棺材が残存していなくても先述した痕跡等が確認できた場合には、その上・下端を実線にて図示している。また、棺材が残存せず、先述した痕跡等も確認できない場合でも、棺床痕や人骨の出土状況等からある程度の推測が可能である場合には、短破線にて図示している。

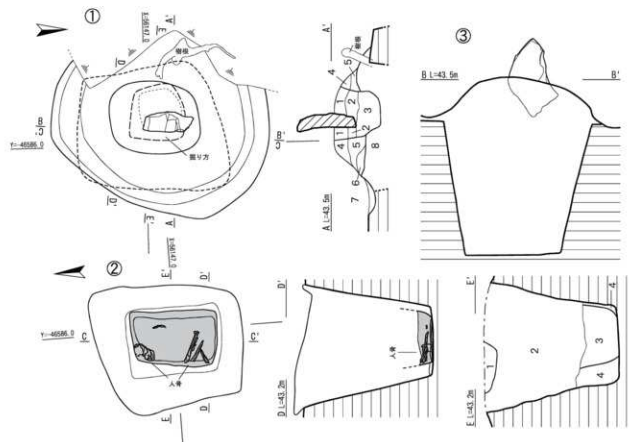
なお、棺材が残存していない墳墓については、棺の形態が推定できる場合に限り、平面図および断面見通し図上の推定範囲に、トーン（網）を貼って棺を復原しているが、棺の高さについては、確認できた高さに留めている。

- 註3 「太宰府市史 民俗資料編」太宰府市史編集委員会編 1993を参照。
 註4 「太宰府市史 民俗資料編」太宰府市史編集委員会編 1993を参照。
 註5 本書の、「IV 太宰府市日焼遺跡出土の近世人骨」(p.389)を参照。
 註6 「太宰府市史 民俗資料編」太宰府市史編集委員会編 1993を参照。
 註7 荻原善和氏の御協力により、明治22年に作成された「墓籍簿」を拝見する機会を得られた。記して感謝する次第である。
 註8 太宰府市史 民俗資料編に、方形の土流れ防止の囲いをした例が報告されている。

【参考文献】

太宰府市史編集委員会編 1993『太宰府市史 民俗資料編』太宰府市

註2 遺構図凡例



Tab. 3 近世以降の墳墓一覽表(1)

所在地は同。マヤは保存状。()内は埋葬品出所。

遺構番号	地上		地下		墓室		棺		備考
	プラン	最大径	高さ	高さ	長さ	幅	厚	厚	
1	7S-001	1.69	1.34	0.44	1.30	0.37	1.30	0.35	人骨出土
2	7S-002	1.04	1.24	0.25	1.46	0.30	1.46	0.34	人骨(頭蓋骨)出土
3	7S-003	1.20	1.17	0.27	1.50	0.28	1.50	0.32	人骨出土
4	7S-004	1.84	1.82	0.32	1.41	0.28	1.41	0.30	人骨出土
5	7S-005	1.98	1.94	0.29	1.46	0.27	1.46	0.30	人骨出土
6	7S-006	1.94	1.94	0.29	1.46	0.27	1.46	0.30	人骨出土
7	7S-007	1.65	1.15	0.23	1.36	0.30	1.36	0.30	人骨出土
8	7S-008	1.62	1.20	0.30	1.44	0.28	1.44	0.30	人骨出土
9	7S-009	1.69	1.20	0.30	1.44	0.28	1.44	0.30	人骨出土
10	7S-010	2.09	1.89	0.45	1.30	0.31	1.30	0.31	人骨出土
11	7S-011	0.60	0.60	0.19	1.20	0.35	1.20	0.70	人骨出土
12	7S-012	0.60	0.60	0.19	1.20	0.35	1.20	0.70	人骨出土
13	7S-013	1.82	1.44	0.32	1.44	0.28	1.44	0.30	人骨出土
14	7S-014	2.00	1.82	0.38	1.37	0.38	1.37	0.43	人骨出土
15	7S-015	1.96	1.82	0.38	1.37	0.38	1.37	0.43	人骨出土
16	7S-016	1.96	1.82	0.38	1.37	0.38	1.37	0.43	人骨出土
17	7S-017	1.96	1.82	0.38	1.37	0.38	1.37	0.43	人骨出土
18	7S-018	1.96	1.82	0.38	1.37	0.38	1.37	0.43	人骨出土
19	7S-019	1.96	1.82	0.38	1.37	0.38	1.37	0.43	人骨出土
20	7S-020	1.96	1.82	0.38	1.37	0.38	1.37	0.43	人骨出土
21	7S-021	1.96	1.82	0.38	1.37	0.38	1.37	0.43	人骨出土
22	7S-022	1.96	1.82	0.38	1.37	0.38	1.37	0.43	人骨出土
23	7S-023	1.96	1.82	0.38	1.37	0.38	1.37	0.43	人骨出土
24	7S-024	1.96	1.82	0.38	1.37	0.38	1.37	0.43	人骨出土
25	7S-025	2.44	2.17	0.32	1.11	0.72	1.11	0.11	人骨出土
26	7S-026	1.70	1.69	0.41	1.37	1.01	1.37	0.83	人骨出土
27	7S-027	1.39	1.39	0.32	1.16	0.84	1.16	0.66	人骨出土
28	7S-028	1.39	1.39	0.32	1.16	0.84	1.16	0.66	人骨出土
29	7S-029	1.39	1.39	0.32	1.16	0.84	1.16	0.66	人骨出土
30	7S-030	1.39	1.39	0.32	1.16	0.84	1.16	0.66	人骨出土
31	7S-031	1.21	0.94	0.64	1.76	1.27	1.76	0.82	人骨出土
32	7S-032	0.63	0.63	0.28	1.06	1.20	1.06	0.88	人骨出土
33	7S-033	1.45	1.29	0.31	1.24	0.94	1.24	0.94	人骨出土
34	7S-034	0.53	0.53	0.29	1.27	0.74	1.27	0.74	人骨出土
35	7S-035	-	-	-	1.21	0.89	1.21	0.89	人骨出土
36	7S-036	-	-	-	1.21	0.89	1.21	0.89	人骨出土
37	7S-037	-	-	-	1.21	0.89	1.21	0.89	人骨出土
38	7S-038	-	-	-	1.21	0.89	1.21	0.89	人骨出土
39	7S-039	-	-	-	1.21	0.89	1.21	0.89	人骨出土
40	7S-040	-	-	-	1.21	0.89	1.21	0.89	人骨出土
41	7S-041	1.60	1.31	0.35	1.47	1.54	1.47	0.28	人骨出土
42	7S-042	0.39	0.48	0.32	1.56	0.52	1.56	0.33	人骨出土
43	7S-043	0.39	0.48	0.32	1.56	0.52	1.56	0.33	人骨出土
44	7S-044	0.39	0.48	0.32	1.56	0.52	1.56	0.33	人骨出土
45	7S-045	0.39	0.48	0.32	1.56	0.52	1.56	0.33	人骨出土
46	7S-046	1.89	1.28	0.43	1.41	0.87	1.41	0.87	人骨出土
47	7S-047	1.99	1.99	0.19	1.11	1.25	1.11	0.27	人骨出土
48	7S-048	1.75	1.75	0.31	1.24	1.21	1.24	0.93	人骨出土
49	7S-049	1.75	1.75	0.31	1.24	1.21	1.24	0.93	人骨出土
50	7S-050	1.75	1.75	0.31	1.24	1.21	1.24	0.93	人骨出土
51	7S-051	1.75	1.75	0.31	1.24	1.21	1.24	0.93	人骨出土
52	7S-052	1.75	1.75	0.31	1.24	1.21	1.24	0.93	人骨出土
53	7S-053	1.75	1.75	0.31	1.24	1.21	1.24	0.93	人骨出土
54	7S-054	1.75	1.75	0.31	1.24	1.21	1.24	0.93	人骨出土
55	7S-055	1.75	1.75	0.31	1.24	1.21	1.24	0.93	人骨出土

Tab. 5 近世以降の墳墓一覽表 (3)

※墓石はm, +は埋没あり、1)近世後世に遺す。

標高	墓石		墓土		墓壇		塚		墳		備考	
	ブワン	ブワン	ブワン	ブワン	長方形	楕圓形	長方形	長方形	円形	長方形		楕圓形
108	75.5734	-	-	-	不明	0.85-1	0.84	0.84	-	0.30	-	-
109	75.5733	-	-	-	長方形	1.43	0.95	0.79	長方形	0.91	0.44	人骨出土
110	75.5732	-	-	-	長方形	1.89	0.93	0.85	長方形	0.95	0.34	-
112	75.5716	-	-	-	長方形	1.19	0.93	0.65	長方形	0.95	0.13	-
113	75.5717	-	-	-	不明	0.88	0.79	0.41	長方形	0.82	0.31	-
114	75.5718	-	-	-	楕圓形	1.39	0.73	0.38	長方形	0.74	0.29+*	人骨出土
115	75.5721	-	-	-	長方形	1.65	0.93	0.61	長方形	0.91	0.37	-
116	75.5722	-	-	-	不明	1.15	0.73	0.48	長方形	0.89	0.17	-
117	75.5723	-	-	-	不明	1.19	1.48	1.48	不明	0.45	-	人骨出土
118	75.5724	-	-	-	楕圓形	1.61+*	1.00+*	0.64	長方形	0.79	0.17	-
119	75.5721	-	-	-	不明	1.21	0.88	0.4	長方形	0.81+*	0.17	-
120	75.5722	-	-	-	不明	1.21	0.88	0.4	長方形	0.81+*	0.17	-
121	75.5735	-	-	-	不明	1.59+*	1.05+*	0.43+*	長方形	0.87	0.30+*	-
122	75.5702	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
123	75.5702	-	-	-	不明	1.0	0.6+*	0.6+*	不明	0.52+*	-	人骨出土
124	75.5702	-	-	-	不明	0.66	0.37	0.33	不明	0.42	-	人骨出土
125	75.5702	-	-	-	不明	1.28	0.72	0.38	不明	0.42	-	人骨出土
126	75.5704	-	-	-	不明	1.38+*	1.28	0.72	不明	0.42	-	人骨出土
127	75.5706	-	-	-	不明	0.64+*	0.64+*	0.64+*	不明	0.42	-	人骨出土
128	75.5709	-	-	-	不明	0.89	0.53	0.33	不明	0.27+*	-	人骨出土
129	75.5709	-	-	-	不明	0.89	0.53	0.33	不明	0.27+*	-	人骨出土
130	75.5711	-	-	-	不明	0.84	0.53	0.33	不明	0.43	-	人骨出土
131	75.5711	-	-	-	不明	0.84	0.53	0.33	不明	0.43	-	人骨出土
132	75.5711	-	-	-	不明	1.02+*	1.23	1.22	不明	0.47	-	人骨出土
133	75.5711	-	-	-	不明	0.92	-	1.38	不明	0.53	-	人骨出土
134	75.5711	-	-	-	不明	0.88+*	-	-	不明	0.49+*	-	人骨出土
135	75.5711	-	-	-	不明	0.88+*	-	-	不明	0.49+*	-	人骨出土
136	75.5710	-	-	-	不明	1.29	1.07	1.39	不明	0.81	-	人骨出土
137	75.5729	-	-	-	不明	1.82	1.39	1.61	不明	0.81	-	人骨出土
138	75.5729	-	-	-	不明	0.23	0.55	0.14+*	不明	0.10	-	人骨出土
139	75.5729	-	-	-	不明	1.43	0.95	1.12	不明	0.11	-	人骨出土
140	75.5728	-	-	-	不明	1.41	0.95	1.12	不明	0.11	-	人骨出土
141	75.5727	-	-	-	不明	1.43	0.95	1.12	不明	0.11	-	人骨出土
142	75.5703	-	-	-	不明	1.05	0.79	1.13	不明	0.19	-	人骨出土
143	75.5709	-	-	-	不明	0.78	0.59	0.61	不明	0.19	-	人骨出土
144	75.5709	-	-	-	不明	1.41	1.13	1.13	不明	0.19	-	人骨出土
145	75.5706	-	-	-	不明	0.81	-	0.95	不明	0.15	-	人骨出土
146	75.5704	-	-	-	不明	0.50	-	0.56	不明	0.13	-	人骨出土
147	75.5704	-	-	-	不明	0.79	-	0.79	不明	0.13	-	人骨出土
148	75.5704	-	-	-	不明	0.81	-	0.95	不明	0.13	-	人骨出土
149	75.5704	-	-	-	不明	0.81	-	0.95	不明	0.13	-	人骨出土
150	75.5703	-	-	-	不明	0.81	-	0.95	不明	0.13	-	人骨出土
151	75.5703	-	-	-	不明	0.81	-	0.95	不明	0.13	-	人骨出土
152	75.5703	-	-	-	不明	1.42	0.93	1.11	不明	0.13	-	人骨出土
153	75.5703	-	-	-	不明	0.81	-	0.95	不明	0.13	-	人骨出土
154	75.5703	-	-	-	不明	1.30	0.91	0.96	不明	0.13	-	人骨出土
155	75.5703	-	-	-	不明	1.12+*	0.94	0.84	不明	0.13	-	人骨出土
156	75.5704	-	-	-	不明	1.46	1.12+*	0.88	不明	0.13	-	人骨出土
157	75.5703	-	-	-	不明	1.44	-	2.30	不明	0.13	-	人骨出土
158	75.5703	-	-	-	不明	1.14	1.03	0.85	不明	0.13	-	人骨出土
159	75.5702	-	-	-	不明	1.17	0.89	0.61	不明	0.13	-	人骨出土
160	75.5706	-	-	-	不明	0.81	0.59	0.61	不明	0.13	-	人骨出土
161	75.5709	-	-	-	不明	0.81	0.59	0.61	不明	0.13	-	人骨出土
162	75.5701	-	-	-	不明	0.86	0.81	1.11	不明	0.13	-	人骨出土

Tab. 6 五類観察表(1)

種標記mm. - 土計簿許可.

出土層序(階位)	土色・取り上り層号	固結%	塑性%	材質	色	直径	孔径	層径	備考	種号	写取回原%
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.0	2.0		0 0 3	75-134
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.5	2.8		0 0 4	32-135-2
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.2	3.2		0 0 5	32-138-3
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.2	3.3		0 0 6	32-135-4
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.7	3.0		0 0 7	32-136-5
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.3	1.6	3.1		0 0 8	32-134-6
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.8	2.8		0 0 9	32-132-7
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.7	2.7		0 1 0	32-135-8
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.5	4.0		0 1 1	32-134-9
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.7	3.1		0 1 2	75-134-10
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.4	3.1		0 1 3	32-138-11
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.7	2.8		0 1 4	32-135-12
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.2	3.0		0 1 5	32-138-13
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.3	1.6	3.2		0 1 6	32-135-14
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.7	3.4		0 1 7	32-138-15
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.7	3.3		0 1 8	75-134-16
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.6	2.6		0 1 9	32-136-17
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.0	1.4	2.9		0 2 0	32-138-18
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.5	2.9		0 2 1	32-138-19
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.0	1.6	2.7		0 2 2	32-138-20
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.6	3.0		0 2 3	32-138-21
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.7	3.1		0 2 4	32-138-22
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.0	1.4	3.2		0 2 5	32-136-23
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.5	2.9		0 2 6	32-138-24
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.7	1.7	2.7		0 2 7	32-138-25
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.4	3.1		0 2 8	32-138-26
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.0	1.5	3.2		0 2 9	32-138-27
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.7	3.1		0 3 0	75-134-28
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.0	1.2	2.9		0 3 1	32-138-29
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.7	2.8		0 3 2	32-138-30
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.8	2.7		0 3 3	32-138-31
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.4	2.7		0 3 4	32-138-32
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.4	3.4		0 3 5	32-138-33
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.7	3.2		0 3 6	32-138-34
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.9	2.7		0 3 7	32-138-35
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.3	1.2	3.6		0 3 8	32-138-36
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.7	3.0		0 3 9	32-138-37
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.5	3.4		0 4 0	75-134-38
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.5	2.9		0 4 1	32-138-39
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.3	1.5	3.0		0 4 2	32-138-40
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.6	3.0		0 4 3	32-138-41
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.4	2.5		0 4 4	32-138-42
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.7	3.0		0 4 5	32-138-43
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.7	3.0		0 4 6	75-134-44
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.2	2.9		0 4 7	32-138-45
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.2	3.0		0 4 8	32-138-46
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.7	3.0		0 4 9	32-138-47
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.7	3.0		0 5 0	32-138-48
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.7	3.0		0 5 1	75-134-49
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	0.8	3.0		0 5 2	32-138-50
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.4	1.4	2.3		0 5 3	32-138-51
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.3	2.2		0 5 4	32-138-52
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.6	1.8	2.5	2.5-3.1	0 5 5	32-138-53
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.2	3.4		0 5 6	32-138-54
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.7	1.7	2.6		0 5 7	75-134-55
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.7	1.0	3.1		0 5 8	32-138-56
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.6	2.9		0 5 9	32-138-57
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.5	2.9		0 6 0	32-138-58
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.5	1.7	2.8		0 6 1	32-138-59
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.4	3.2		0 6 2	32-138-60
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.3	1.5	3.6		0 6 3	32-138-61
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.0	3.0		0 6 4	32-138-62
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.6	2.7		0 6 5	32-138-63
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.6	1.8	2.2		0 6 6	32-138-64
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.4	2.9		0 6 7	75-134-65
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.6	3.2		0 6 8	32-138-66
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.2	2.9		0 6 9	32-138-67
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.3	1.2	2.9		0 7 0	32-138-68
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	3.7	1.2	2.6		0 7 1	32-138-69
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.4	2.7		0 7 2	32-138-70
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.8	1.6	3.1		0 7 3	75-134-71
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.5	2.9		0 7 4	32-138-72
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.5	3.1		0 7 5	32-138-73
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.8	2.6		0 7 6	32-138-74
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.5	3.2		0 7 7	32-138-75
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.4	1.0	3.4		0 7 8	32-138-76
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.4	3.4		0 7 9	75-134-77
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	3.9	1.4	3.0		0 8 0	32-138-78
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.4	2.5		0 8 1	32-138-79
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.0	1.7	2.6		0 8 2	32-138-80
75 T001	陥没赤色土			ガラス	黄	4.9	1.1	3.0		0 8 3	32-138-81
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.2	1.5	3.6		0 8 4	32-138-82
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.3	1.5	3.0		0 8 5	75-134-83
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	4.1	1.5	3.8		0 8 6	32-138-84
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	6.1-6.4	2.2	4.3		0 0 1	32-138-85
75 T004	陥没赤色土			ガラス	黄	6.1-6.3	2.0	5.1		0 0 2	32-138-86
75 T015	陥没赤色土			ガラス	黄	6.9	1.9	6.5		0 0 1	32-138-87
75 T015	陥没赤色土			ガラス	黄	7.1	2.0	4.9		0 0 2	32-138-88
75 T015	陥没赤色土			ガラス	黄	6.1	1.8	4.6		0 0 3	32-138-89
75 T015	陥没赤色土			ガラス	黄	6.9	2.1	5.5		0 0 4	32-138-90
75 T015	陥没赤色土			ガラス	黄	7.5	2.2	5.1		0 0 5	32-138-91
75 T015	陥没赤色土			ガラス	黄	7.5	2.4	5.0		0 0 6	32-138-92
75 T015	陥没赤色土			ガラス	黄	6.4	2.1	5.4	3.6-4.1	0 0 7	75-134-93
75 T015	陥没赤色土			ガラス	黄	6.7	2.4	4.0		0 0 8	32-138-94
75 T015	陥没赤色土			ガラス	黄	6.6	2.1	3.9		0 0 9	32-138-95

不透明
不透明

Tab.7 五類観察表(2)

葉幅単位:mm. — は計測不可.

田土濃度(濃度)	土色・取り上げ番号	固分%	炭素%	材質	色	直径	孔隙	厚さ	備考	試片	写真図版%
7.5 T 016	暗灰褐色土			ガラス	白	6.8	2.3	3.9	不適切	010	32-138-86
7.5 T 016	暗灰褐色土			ガラス	白	5.6	2.2	3.7	不適切	011	32-138-87
7.5 T 016	暗灰褐色土			ガラス	白	6.2	2.3	3.9	不適切	012	32-138-88
7.5 T 016	暗灰褐色土			ガラス	白	5.4	2.3	3.6	不適切	013	32-138-89
7.5 T 016	暗灰褐色土			ガラス	白	7.0	2.2	3.5	不適切	014	32-138-90
7.5 T 016	暗灰褐色土			ガラス	白	7.3	2.4	3.8	不適切	015	32-138-91
7.5 T 016	暗灰褐色土			ガラス	白	6.2	2.1	3.9	不適切	016	32-138-92
7.5 T 027	2			ガラス	黄	4.7	1.4	3.5		017	32-138-103
7.5 T 027	2			ガラス	白	6.2	1.8	5.3	不適切	018	32-138-104
7.5 T 027	2			ガラス	白	6.2	1.8	5.3	不適切	019	32-138-105
7.5 T 029	1			ガラス	青	5.3	1.6	2.8	不適切	020	32-138-106
7.5 T 029	2			ガラス	紫	6.1	1.6	3.4		021	32-138-107
7.5 T 029	3			ガラス	白	5.2	1.9	2.8		022	32-138-108
7.5 T 029	4			ガラス	黄	4.4	1.8	2.9		023	32-138-109
7.5 T 029	5			ガラス	青	5.1	1.5	2.9		024	32-138-110
7.5 T 029	6			ガラス	黄	4.9	1.3	2.9		025	32-138-111
7.5 T 029	7			ガラス	黄	5.0	1.7	3.3-4.3		026	32-138-112
7.5 T 029	8			ガラス	黄	5.3	1.6	2.7		027	32-138-113
7.5 T 029	9			ガラス	白	4.9	1.9	3.1		028	32-138-114
7.5 T 029	10			ガラス	白	6.2	1.9	3.2		029	32-138-115
7.5 T 029	11			ガラス	青	5.5	1.9	2.8		030	32-138-116
7.5 T 029	12			ガラス	黄	4.8	1.8	3.0		031	32-138-117
7.5 T 029	13			ガラス	青	5.3	1.7	2.8		032	32-138-118
7.5 T 029	14			ガラス	黄	5.0-4.7	1.9	4.2		033	32-138-119
7.5 T 029	15			ガラス	黄	5.4	1.7	3.2		034	32-138-120
7.5 T 029	16			ガラス	黄	5.0	1.8	3.7		035	32-138-121
7.5 T 029	17			ガラス	紫	4.7	1.6	3.5		036	32-138-122
7.5 T 029	18			ガラス	黄	4.9-4.9	1.9-1.7	7.3		037	32-138-123
7.5 T 029	19	37	1	ガラス	黄	5.1	1.9	3.7	二葉	038	32-138-124
7.5 T 029	20			ガラス	青	5.3	1.7	2.9		039	32-138-125
7.5 T 029	21			ガラス	紫	5.4	1.9	3.9		040	32-138-126
7.5 T 029	22			ガラス	青	5.3	1.7	3.6		041	32-138-127
7.5 T 029	23			ガラス	紫	5.3	1.6	3.7		042	32-138-128
7.5 T 029	24			ガラス	黄	5.2	1.9	3.7		043	32-138-129
7.5 T 029	25			ガラス	青	5.5	1.7	3.1		044	32-138-130
7.5 T 029	26			ガラス	青	5.4	1.8	2.7		045	32-138-131
7.5 T 029	27			ガラス	青	5.2	1.7	3.2		046	32-138-132
7.5 T 029	28			ガラス	青	4.9	1.6	2.7		047	32-138-133
7.5 T 029	29			ガラス	青	5.2	1.7	2.5		048	32-138-134
7.5 T 029	30			ガラス	青	5.8	1.7	3.5		049	32-138-135
7.5 T 029	31			ガラス	青	5.3	1.7	3.0		050	32-138-136
7.5 T 029	32			ガラス	青	5.3	1.7	3.3		051	32-138-137
7.5 T 029	33			ガラス	黄	4.8	1.7	3.4		052	32-138-138
7.5 T 029	34			ガラス	黄	4.8	1.7	3.7		053	32-138-139
7.5 T 029	35			ガラス	青	5.3	1.7	3.2		054	32-138-140
7.5 T 029	36			ガラス	黄	5.0	1.8	3.7		055	32-138-141
7.5 T 029	37			ガラス	黄	5.1	1.9	3.6		056	32-138-142
7.5 T 029	38	37	2	ガラス	黄	5.0	1.3	3.0		057	32-138-143
7.5 T 029	39			ガラス	黄	4.9	1.8-1.7	2.7		058	32-138-144
7.5 T 029	40			ガラス	白	4.7	1.6	2.6		059	32-138-145
7.5 T 029	41			ガラス	黄	5.2	1.6	4.2		060	32-138-146
7.5 T 029	42			ガラス	黄	5.3	1.7	3.3		061	32-138-147
7.5 T 029	43			ガラス	黄	5.4	1.7	3.6		062	32-138-148
7.5 T 029	44			ガラス	黄	5.1	1.7	3.7		063	32-138-149
7.5 T 029	45			ガラス	黄	5.2	1.7	3.4		064	32-138-150
7.5 T 029	46			ガラス	黄	4.9	1.7	3.4-3.8		065	32-138-151
7.5 T 029	47			ガラス	白	4.3	1.6	3.5		066	32-138-152
7.5 T 029	48			ガラス	黄	5.5	1.8	3.1		067	32-138-153
7.5 T 029	49			ガラス	青	5.3	1.7	3.2		068	32-138-154
7.5 T 029	50			ガラス	青	4.9	1.8	2.7		069	32-138-155
7.5 T 029	51			ガラス	青	4.7	1.7	3.3		070	32-138-156
7.5 T 029	52			ガラス	白	4.1	1.3	2.8		071	32-138-157
7.5 T 029	53			ガラス	白	4.4	1.3	3.1		072	32-138-158
7.5 T 029	54			ガラス	黄	5.2	1.2	4.9		073	32-138-159
7.5 T 029	55			ガラス	青	4.9	1.7	2.8		074	32-138-160
7.5 T 029	56			ガラス	黄	5.0	1.9	3.8		075	32-138-161
7.5 T 029	57			ガラス	白	5.2	1.3	2.6		076	32-138-162
7.5 T 029	58			ガラス	白	4.6	1.3	3.0		077	32-138-163
7.5 T 029	59			ガラス	青	5.2	1.7	3.1		078	32-138-164
7.5 T 029	60			ガラス	黄	4.8	1.7	3.2		079	32-138-165
7.5 T 029	61			ガラス	黄	4.9	1.7	3.2		080	32-138-166
7.5 T 029	62			ガラス	黄	4.6	1.8	4.6		081	32-138-167
7.5 T 029	63			ガラス	黄	4.5	1.7	3.0		082	32-138-168
7.5 T 029	64			ガラス	青	5.6	1.7	2.4		083	32-138-169
7.5 T 029	65			ガラス	青	5.3	1.7	2.8		084	32-138-170
7.5 T 029	66			ガラス	青	5.3	1.7	2.7		085	32-138-171
7.5 T 029	67			ガラス	青	5.3	1.8	2.9		086	32-138-172
7.5 T 029	68			ガラス	青	5.5	1.7	3.4		087	32-138-173
7.5 T 029	69			ガラス	黄	4.8	1.8	3.7		088	32-138-174
7.5 T 029	70			ガラス	白	5.3	1.7	2.7		089	32-138-175
7.5 T 029	71			ガラス	黄	4.6	0.9	3.5		090	32-138-176
7.5 T 029	72	37	3	ガラス	青	5.5-5.9	1.9	5.2		091	32-138-177
7.5 T 029	73			ガラス	青	5.0-5.8	1.8	3.5		092	32-138-178
7.5 T 029	74			ガラス	青	5.1	1.7	2.6		093	32-138-179
7.5 T 029	75			ガラス	黄	4.9-5.1	1.9	3.5		094	32-138-180
7.5 T 029	76			ガラス	黄	4.6	1.7	3.2		095	32-138-181
7.5 T 029	77			ガラス	黄	4.9	1.7	4.0		096	32-138-182
7.5 T 029	78			ガラス	黄	4.8	1.7	3.6		097	32-138-183
7.5 T 029	79			ガラス	黄	4.8	1.7	3.3		098	32-138-184
7.5 T 029	80			ガラス	黄	5.0	1.9	4.4		099	32-138-185
7.5 T 029	81			ガラス	黄	5.1	1.7	3.6		100	32-138-186
7.5 T 029	82			ガラス	黄	4.9	1.8	3.3		101	32-138-187
7.5 T 029	83			ガラス	黄	4.8	1.8	2.6		102	32-138-188
7.5 T 029	84			ガラス	黄	4.5	1.8	3.3		103	32-138-189
7.5 T 029	85			ガラス	黄	4.6	1.8	2.6		104	32-138-190

Tab.8 五類観察表(3)

単位はmm, 注記欄不可。

出汁盛付(部位)	土色・取り上げ番号	因別名	産別名	材質	色	直径	孔径	厚さ	備考	場所	写真図版No.
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	灰	3.1	1.8	3.7		01 13	32-138+191
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	黄	4.9	1.8	3.6		01 13	32-138+192
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	白	5.9	1.2	3.7		01 14	32-138+193
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	白	6.1	1.4	3.1		01 15	32-138+194
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	黄	5.1	1.4	3.6		01 16	32-138+195
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	白	4.3	1.3	3.9		01 17	32-138+196
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	白	4.9	1.2	3.7		01 18	32-138+197
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	白	6.6	1.1	2.7		01 19	32-138+198
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	白	1.5	1.2	2.7		02 02	32-138+199
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	白	4.4	1.4	2.7		02 03	32-138+200
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	白	4.4	1.5	3.2		02 02	32-138+201
75 T 029	緑灰茶色土			ガラス	白	4.8	1.3	3.8		02 03	32-138+202
75 T 053	黒灰黄色土			ガラス	黄	4.6	1.6	3.0		02 01	32-142+1
75 T 053	黒灰黄色土			木	黒	6.6	0.3	4.8		02 02	32-142+2
75 T 053	黒灰黄色土			木	赤	3.3	0.3	3.3		02 03	32-142+3
75 T 054	白灰黄色土			ガラス	黄	3.8	1.4	2.5		02 06	32-142+4
75 T 054	白灰黄色土			ガラス	黄	3.9	1.1	2.4		02 07	32-142+5
75 T 054	白灰黄色土			ガラス	黄	3.6	1.2	2.1		02 08	32-142+6
75 T 054	白灰黄色土			ガラス	黄	3.8	1.1	2.5		02 09	32-142+7
75 T 054	白灰黄色土			ガラス	黄	3.8	1.1	2.1		02 10	32-142+8
75 T 054	白灰黄色土			ガラス	黄	3.7	1.2	2.2		02 11	32-142+9
75 T 057	緑灰茶色土			ガラス	黄	6.0~6.3	1.3	3.5		02 02	32-142+10
75 T 061	明赤褐色土			ガラス	黄	4.1~4.4	1.5	3.1		02 04	32-150+1
75 T 066	4			ガラス	白	7.4	2.1	6.4		02 04	32-150+8
75 T 066	3			ガラス	黄	3.4	2.0	3.7		02 02	32-150+3
75 T 066	2			ガラス	黄	3.1	2.1	3.2		02 01	32-150+2
75 T 066	1			ガラス	黄	3.5	2.0	3.6		02 01	32-150+7
75 T 066	に赤い黄褐色土			ガラス	白	7.4	1.8	6.6		02 02	32-150+9
75 T 067	に赤い黄褐色土			ガラス	白	6.3	1.7	4.7		02 03	32-150+7
75 T 067	に赤い黄褐色土			ガラス	白	6.2	1.7	4.8		02 04	32-150+10
75 T 067	に赤い黄褐色土			ガラス	白	3.2	1.5	4.0		02 04	32-150+11
75 T 067	に赤い黄褐色土			ガラス	白	4.9	2.0	3.9		02 05	32-150+12
75 T 067	に赤い黄褐色土			ガラス	白	4.9	1.6	3.1		02 06	32-150+13
75 T 067	に赤い黄褐色土			ガラス	白	4.6	1.7	3.8		02 07	32-150+14
75 T 067	に赤い黄褐色土			ガラス	白	4.6	1.5	2.6		02 08	32-150+15
75 T 067	に赤い黄褐色土			ガラス	白	3.1	1.8	2.9		02 09	32-150+16
75 T 067	に赤い黄褐色土			ガラス	白	5.2	2.0	2.4		02 10	32-150+17
75 T 083	灰赤褐色土			ガラス	黄	4.8	1.8	3.2		02 01	32-144+1
75 T 083	灰赤褐色土			ガラス	白	3.2	1.6	3.1		02 02	32-144+2
75 T 083	灰赤褐色土			ガラス	白	5.3	1.1	4.2		02 03	32-144+3
75 T 083	灰赤褐色土			ガラス	白	5.0	1.4	3.1		02 04	32-144+4
75 T 083	灰赤褐色土			ガラス	白	6.5	1.0	3.3		02 05	32-144+5
75 T 086	1			ガラス	黄	7.1	2.6	6.3		02 01	32-144+8
75 T 086	2			ガラス	黄	2.1	2.6	2.7		02 02	32-144+9
75 T 086	3			ガラス	黄	3.9	1.6	3.8		02 03	32-144+10
75 T 086	4			ガラス	黄	3.8	1.6	2.5		02 04	32-144+101
75 T 086	5			ガラス	黄	4.9	1.1	3.6		02 05	32-144+102
75 T 086	6			ガラス	黄	3.1	1.7	2.5		02 06	32-144+103
75 T 086	7			ガラス	黄	3.4	1.9	3.9		02 07	32-144+104
75 T 086	8			ガラス	白	4.7	1.5	3.9		02 08	32-144+105
75 T 086	9			ガラス	白	4.7	1.3	3.5		02 09	32-144+106
75 T 086	10			ガラス	白	5.8	1.1	4.3		02 10	32-144+107
75 T 086	11			ガラス	白	4.9	1.1	4.1		02 11	32-144+108
75 T 086	12			ガラス	白	3.2	1.3	2.7		02 12	32-144+109
75 T 086	13			ガラス	白	4.8	1.1	3.8		02 13	32-144+110
75 T 086	14			ガラス	白	5.0	1.1	4.2		02 14	32-144+111
75 T 086	15			ガラス	白	4.8	1.0	3.8		02 15	32-144+112
75 T 086	16			ガラス	白	5.0	1.4	4.2		02 16	32-144+113
75 T 086	17			ガラス	白	4.9	1.4	3.8		02 17	32-144+114
75 T 086	18			ガラス	白	4.1	1.1	4.4		02 18	32-144+115
75 T 086	19			ガラス	白	4.7	1.3	3.3		02 19	32-144+116
75 T 086	20			ガラス	白	5.0	1.4	3.5		02 20	32-144+117
75 T 086	21			ガラス	白	4.9	1.1	4.1		02 21	32-144+118
75 T 086	22			ガラス	白	4.7	1.3	3.5		02 22	32-144+119
75 T 086	23			ガラス	白	4.8	1.3	4.6		02 23	32-144+120
75 T 086	24			ガラス	白	4.8	1.1	3.9		02 24	32-144+121
75 T 086	25			ガラス	白	4.9	1.1	3.6		02 25	32-144+122
75 T 086	26			ガラス	白	5.3	1.1	4.0		02 26	32-144+123
75 T 086	27			ガラス	白	5.2	1.3	3.5		02 27	32-144+124
75 T 086	28			ガラス	白	4.8	1.1	3.6		02 28	32-144+125
75 T 086	29			ガラス	白	5.2	1.4	3.7		02 29	32-144+126
75 T 086	30			ガラス	白	4.8	1.4	3.3		02 30	32-144+127
75 T 086	31			ガラス	白	4.7	1.1	3.5		02 31	32-144+128
75 T 086	32			ガラス	白	4.9	1.4	3.5		02 32	32-144+129
75 T 086	33			ガラス	白	6.9	1.3	3.6		02 33	32-144+130
75 T 086	34			ガラス	白	3.3	1.4	3.5		02 34	32-144+131
75 T 086	35			ガラス	白	4.9	1.3	3.7		02 35	32-144+132
75 T 086	36			ガラス	白	4.8	1.1	3.8		02 36	32-144+133
75 T 086	37			ガラス	白	4.6	1.3	4.3		02 37	32-144+134
75 T 086	38			ガラス	白	5.2	1.1	4.2		02 38	32-144+135
75 T 086	39			ガラス	白	4.6	1.3	3.8		02 39	32-144+136
75 T 086	40			ガラス	白	5.2	1.4	4.0		02 40	32-144+137
75 T 086	41			ガラス	白	4.9	1.1	4.2		02 41	32-144+138
75 T 086	42			ガラス	白	5.2	1.1	3.3		02 42	32-144+139
75 T 086	43			ガラス	白	4.6	1.1	3.8		02 43	32-144+140
75 T 086	44			ガラス	白	5.0	1.1	4.0		02 44	32-144+141
75 T 086	45			ガラス	白	4.7	1.1	3.5		02 45	32-144+142
75 T 086	46			ガラス	白	5.1	1.5	4.0		02 46	32-144+143
75 T 086	47			ガラス	白	4.5	1.3	3.8		02 47	32-144+144
75 T 086	48			ガラス	白	4.6	1.1	3.8		02 48	32-144+145
75 T 086	49			ガラス	白	3.1	1.3	4.7		02 49	32-144+146
75 T 086	50			ガラス	白	4.7	1.3	3.7		02 50	32-144+147
75 T 086	緑褐色土			ガラス	黄	5.3	1.4	3.7		02 01	32-144+8
75 T 086	緑褐色土			ガラス	黄	4.5	1.3	3.1		02 02	32-144+7

Tab.9 五類観察表(4)

※編入はmm、-は計測不可。

品ノ名称(種名)	土色・取り上げ番号	泥炭%	腐物%	材質	色	直径	孔径	厚さ	備考	採寸	写真図版No.
7S T066	輝緑色土			ガラス	青	5.1	1.3	3.8		0 0 3	33-111-8
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.1	3.5		0 0 4	33-141-9
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.1	3.5		0 0 5	33-141-10
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.9	0.8	3.4		0 0 6	33-141-11
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.1	1.3	3.4		0 0 7	33 111-12
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.1	3.3		0 0 8	33-141-13
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	3.7	0.9	2.3		0 0 9	33-141-14
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	3.9	1.7	2.8		0 1 0	33-141-15
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	3.7	1.1	3.4		0 1 1	33-141-16
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	3.7	1.1	2.6		0 1 2	33-111-17
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	3.6	1.7	2.8		0 1 3	33 111-18
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	3.4	1.3	2.4		0 1 4	33-141-19
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.1	1.5	2.6		0 1 5	33-141-20
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	3.7	1.6	2.3		0 1 6	33-141-21
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.2	1.5	3.0		0 1 7	33-141-22
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	3.3	1.1	2.6		0 1 8	33-111-23
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	3.5	1.1	2.2		0 1 9	33 111-24
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.3	4.3		0 2 0	33-141-25
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.3	3.2		0 2 1	33-141-26
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.1	1.6	3.7		0 2 2	33-141-27
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.9	1.5	3.1		0 2 3	33-141-28
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.3	4.6		0 2 4	33-141-29
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.1	3.5		0 2 5	33 111-30
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.1	1.6	3.6		0 2 6	33-141-31
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.7	1.1	3.4		0 2 7	33-141-32
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.8	3.1		0 2 8	33-141-33
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.4	3.7		0 2 9	33-141-34
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.7	1.3	3.4		0 3 0	33-111-35
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.9	1.3	3.7		0 3 1	33 111-36
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.1	1.4	3.8		0 3 2	33-141-37
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.5	1.3	3.6		0 3 3	33-141-38
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.3	1.3	3.1		0 3 4	33-141-39
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.6	1.3	2.7		0 3 5	33 111-40
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.3	3.8		0 3 6	33-141-41
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.4	3.7		0 3 7	33-141-42
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.1	1.8	3.4		0 3 8	33-141-43
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.9	1.3	3.5		0 3 9	33-141-44
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.5	1.1	4.6		0 4 0	33-111-45
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.3	3.4		0 4 1	33 111-46
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.6	1.5	3.8		0 4 2	33-141-47
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.9	1.3	3.5		0 4 3	33-141-48
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.3	1.1	3.1		0 4 4	33-141-49
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.1	1.6	4.1		0 4 5	33-141-50
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.3	4.1		0 4 6	33-111-51
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.5	3.9		0 4 7	33 111-52
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.1	1.6	3.6		0 4 8	33-141-53
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.9	1.4	3.5		0 4 9	33-141-54
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.1	4.0		0 5 0	33-141-55
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.1	1.3	4.3		0 5 1	33-141-56
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.7	1.6	3.9		0 5 2	33 111-57
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.2	1.6	3.6		0 5 3	33-111-58
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.3	4.1		0 5 4	33-141-59
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.3	4.1		0 5 5	33-141-60
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.7	1.5	3.2		0 5 6	33-141-61
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.6	1.3	3.3		0 5 7	33-141-62
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.3	4.2		0 5 8	33 111-63
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.1	3.5		0 5 9	33-111-64
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.6	3.8		0 6 0	33-141-65
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.1	4.1		0 6 1	33-141-66
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.1	1.6	3.6		0 6 2	33-111-67
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.1	1.6	3.3		0 6 3	33-111-68
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.5	3.5		0 6 4	33-141-69
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.1	4.5		0 6 5	33-141-70
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.3	3.5		0 6 6	33-141-71
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.5	1.3	3.8		0 6 7	33-141-72
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.9	1.6	3.6		0 6 8	33 111-73
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.1	1.1	3.6		0 6 9	33-141-74
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.1	1.6	3.5		0 7 0	33-141-75
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.3	3.9		0 7 1	33-141-76
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.7	1.3	3.9		0 7 2	33-141-77
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.3	3.3		0 7 3	33-141-78
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.9	1.5	3.7		0 7 4	33 111-79
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.9	1.6	3.1		0 7 5	33-111-80
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.3	3.5		0 7 6	33-141-81
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.6	4.1		0 7 7	33-141-82
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.7	1.3	3.1		0 7 8	33-141-83
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.6	4.0		0 7 9	33-141-84
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.2	1.6	3.8		0 8 0	33 111-85
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.8	1.6	3.1		0 8 1	33-111-86
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.2	1.4	3.9		0 8 2	33-141-87
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.8	3.7		0 8 3	33-141-88
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.7	1.3	3.2		0 8 4	33-141-89
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.9	1.4	3.2		0 8 5	33-141-90
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.5	1.1	3.2		0 8 6	33 111-91
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.3	3.5		0 8 7	33-111-92
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.7	1.6	3.3		0 8 8	33-141-93
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.0	1.1	3.8		0 8 9	33-141-94
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.9	1.3	3.8		0 9 0	33 111-95
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	5.2	1.6	4.1		0 9 1	33-111-96
7S T066	暗黒色土			ガラス	青	4.6	1.5	3.9		0 9 2	33-141-97
7S T067	灰色土			ガラス	青	7.8	1.5	6.9		0 0 1	33-141-146
7S T067	灰色土			ガラス	青	4.3	1.4	4.2		0 0 2	33-141-149
7S T067	灰色土			ガラス	青	5.4	1.7	3.6		0 0 3	33-141-150
7S T067	灰色土			ガラス	青	4.9	1.1	4.3		0 0 4	33 141-151
7S T067	I			ガラス	青	5.0	2.0	4.2		0 0 1	33-141-152

測定値

Tab.10 五類観察表(5)

※単位はmm。→は計測不可。

出汁産地(樹皮)	土色・取上り番号	産地No.	産物No.	材質	色	直径	孔径	厚さ	備考	番号	写真撮影No.	
TS T087	2			ゴラス	白	5.3	1.8	3.8		0 0 2	33-141-153	
TS T087	3			ゴラス	白	5.1	1.8	3.7		0 0 3	33-141-154	
TS T087	4			ゴラス	白	5.1	1.7	3.5		0 0 4	33 141-155	
TS T087	5			ゴラス	青	4.7	1.0	3.9		0 0 6	33-141-158	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	靑	5.7	1.8	4.4		0 0 3	33-141-157	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	靑	4.5	1.7	3.3		0 0 2	33-141-156	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	A	4.0	1.5	3.7		0 0 2	33-141-159	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	靑	4.8	1.7	3.1		0 0 4	33-141-160	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	靑	4.7	1.6	3.5		0 0 5	33 141-161	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	5.6	0.75	3.1		0 0 6	33-141-162	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	4.1	1.5	3.3		0 0 7	33-141-163	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	4.1	1.4	2.8		0 0 8	33-141-164	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	4.2	1.4	2.9		0 0 9	33-141-165	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	4.3	1.6	2.3		0 1 0	33-141-166	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	3.7	1.7	2.1		0 1 1	33 141-167	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	4.2	1.4	2.6		0 1 2	33-141-168	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	4.2	1.7	2.1		0 1 3	33-141-169	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	4.3	1.5	2.7		0 1 4	33-141-170	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	5.0	1.1	2.7		0 1 5	33 141-171	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	4.6	1.4	2.7		0 1 6	33-141-172	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	4.1	1.4	2.9		0 1 7	33-141-173	
TS T088	黄灰色土			ゴラス	白	4.1	1.5	2.8		0 1 8	33-141-174	
TS T089	1			ゴラス	A	5.0	1.8	3.1		0 0 1	33-141-175	
TS T089	2			ゴラス	靑	4.7	1.7	3.8		0 0 2	33-141-178	
TS T089	3			ゴラス	靑	5.0	2.0	2.9		0 0 3	33 141-177	
TS T089	4			ゴラス	靑	4.9	1.9	4.0		0 0 4	33-141-179	
TS T089	5			ゴラス	靑	4.6	1.1	3.4		0 0 5	33-141-173	
TS T089	6			ゴラス	白	4.4	0.9	2.8		0 0 6	33-141-180	
TS T089	7			ゴラス	白	4.0	1.5	3.5		0 0 7	33-141-181	
TS T089	8			ゴラス	白	4.6	1.1	2.6		0 0 8	33-141-182	
TS T089	9			ゴラス	白	4.2	1.3	2.6		0 0 9	33 141-183	
TS T089	10			ゴラス	白	4.2	1.9	2.4		0 1 0	33-141-184	
TS T089	11			ゴラス	白	4.2	1.8	2.5		0 1 1	33-141-188	
TS T089	12			ゴラス	白	4.0	1.1	2.7		0 1 2	33-141-180	
TS T089	13			ゴラス	白	4.2	2.0	2.4		0 1 3	33-141-187	
TS T089	14			ゴラス	白	4.2	1.8	2.5		0 1 4	33-141-189	
TS T089	15			ゴラス	白	4.1	1.5	3.1		0 1 5	33 141-189	
TS T089	16			ゴラス	白	4.0	1.4	2.7		0 1 6	33-141-190	
TS T089	17			ゴラス	靑	4.0	1.4	2.8		0 1 7	33-141-191	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	靑	4.9	1.7	3.8		0 0 1	33-141-198	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	靑	4.9	1.6	3.3		0 0 2	33-141-199	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	靑	4.8	1.7	3.6		0 0 3	33 141-198	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	靑	4.9	1.7	3.3		0 0 6	33-141-198	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	靑	5.2	1.6	3.4		0 0 6	33-141-197	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	靑	4.3	1.7	3.3		0 0 7	33-141-198	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	靑	4.9	1.8	2.9		0 0 8	33 141-199	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	靑	4.6	1.7	3.5		0 0 9	33-141-200	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	A	5.0	1.7	3.8		0 1 0	33-141-201	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	A	4.3	1.6	3.6		0 1 1	33-141-202	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	靑	4.3	1.5	4.4		0 1 2	33-141-203	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	靑	4.3	1.5	2.5		0 1 3	33 141-204	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	3.3	1.3	2.8		0 1 4	33-141-205	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	3.9	1.7	2.4		0 1 5	33-141-206	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	3.8	1.75	2.6		0 1 6	33-141-207	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.1	1.7	2.4		0 1 7	33-141-208	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.2	1.6	2.6		0 1 8	33-141-209	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	5.1	1.7	2.1		0 1 9	33 141-210	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	5.1	1.7	2.1		0 2 0	33-141-211	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.2	1.8	2.3		0 2 1	33-141-212	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.0	1.7	3.3		0 2 2	33-141-213	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	3.9	1.0	2.2		0 2 3	33-141-214	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	3.9	1.1	3.1		0 2 4	33-141-215	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	3.8	1.5	2.8		0 2 5	33 141-216	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.1	1.7	2.1		0 2 6	33-141-217	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.3	2.5	2.4		0 2 7	33-141-218	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.1	1.4	2.7		0 2 8	33-141-219	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.5	1.6	3.3		0 2 9	33-141-220	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.5	1.7	2.6		0 3 0	33-141-221	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.0	1.7	2.2		0 3 1	33 141-222	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.5	2.2	2.2		0 3 2	33-141-223	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	3.9	1.7	2.4		0 3 3	33-141-224	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.1	1.7	2.8		0 3 4	33-141-225	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	5.4	1.6	2.8		0 3 5	33 141-226	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	5.1	1.7	2.3		0 3 6	33-141-227	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.5	1.6	2.8		0 3 7	33-141-228	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	3.9	1.4	2.3		0 3 8	33-141-229	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.4	1.8	2.6		0 3 9	33-141-230	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.3	1.8	2.4		0 4 0	33-141-231	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	5.2	1.8	2.2		0 4 1	33 141-232	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.5	1.8	2.9		0 4 2	33-141-233	
TS T089	黄灰色土			ゴラス	白	4.2	1.7	2.1		0 4 3	33-141-234	
TS T091	黄灰色土			ゴラス	白	4.3	2.1	3.2		0 0 1	33-141-236	
TS T093	黄灰色土			ゴラス	白	4.0	1.4	3.7		0 0 2	33-141-238	
TS T303	3			石×ゴラス	白	4.0	1.4	2.9		不透明	0 0 1	32-126-07
TS T303	3			石×ゴラス	白	3.6	1.3	2.9		不透明	0 0 2	32-126-08
TS T303	3			石×ゴラス	白	4.1	1.3	3.1		不透明	0 0 3	32-126-09
TS T303	3			石×ゴラス	白	3.9	1.6	2.8		不透明	0 0 4	32-126-08
TS T303	3			石×ゴラス	白	4.0	1.5	2.5		不透明	0 0 5	32-126-06
TS T303	3			石×ゴラス	白	4.0	1.9	3.0		不透明	0 0 6	32-126-07
TS T303	3			石×ゴラス	白	3.8	1.1	2.9		不透明	0 0 7	32-126-05
TS T303	3			石×ゴラス	白	3.9	1.3	2.7		不透明	0 0 8	32-126-09
TS T303	3			石×ゴラス	白	4.0	1.5	2.8		不透明	0 0 9	32-126-07
TS T303	3			石×ゴラス	白	3.7	1.5	2.7		不透明	0 1 0	32-126-04
TS T303	3			石×ゴラス	白	3.9	1.3	2.9		不透明	0 1 1	32-126-02

一部欠損

Tab.11 玉類観察表(6)

※単位はmm、—は計測不可

出土層位(層位)	土色・取り上り層位	図説No.	産物No.	材質	色	直径	孔径	厚さ	備考	図引	写真収録No.
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.7	1.4	2.0	不透明	0 12	135-100-73
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.1	1.6	2.6	不透明	0 13	32-120-71
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.1	1.3	2.0	不透明	0 14	32-120-75
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.1	1.1	2.0	不透明	0 15	32-120-76
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.5	1.5	2.9	不透明	0 16	32-120-77
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.8	1.1	2.0	不透明	0 17	32-120-78
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.8	1.1	2.9	不透明	0 18	32-120-79
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.3	2.8	不透明	0 19	32-120-80
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.6	1.1	2.1	不透明	0 20	32-120-81
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.5	1.6	2.1	不透明	0 21	32-120-82
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.3	3.1	不透明	0 22	32-120-83
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.7	1.1	2.7	不透明	0 23	32-120-84
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.6	1.7	2.2	不透明	0 24	32-120-85
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.3	1.4	2.8	不透明	0 25	32-120-86
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.8	1.6	2.3	不透明	0 26	32-120-87
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.1	1.1	3.4	不透明	0 27	32-120-88
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.9	2.7	不透明	0 28	32-120-89
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.1	1.5	3.5	不透明	0 29	32-120-90
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.5	2.7	不透明	0 30	32-120-91
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.8	1.6	2.7	不透明	0 31	32-120-92
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.7	1.3	2.6	不透明	0 32	32-120-93
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.5	1.4	2.7	不透明	0 33	32-120-94
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.9	2.4	不透明	0 34	32-120-95
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.6	2.6	不透明	0 35	32-120-96
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.9	3.6	不透明	0 36	32-120-97
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.2	1.1	2.7	不透明	0 37	32-120-98
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.0	1.5	2.7	不透明	0 38	32-120-99
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.6	2.6	不透明	0 39	32-120-100
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.1	2.7	不透明	0 40	32-120-101
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.5	1.9	2.9	不透明	0 41	32-120-102
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.0	1.6	2.1	不透明	0 42	32-120-103
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	0.9	2.8	不透明	0 43	32-120-104
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.1	2.7	不透明	0 44	32-120-105
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.7	1.5	2.3	不透明	0 45	32-120-106
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.7	1.2	2.1	不透明	0 46	32-120-107
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.8	1.8	2.4	不透明	0 47	32-120-108
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.1	2.5	不透明	0 48	32-120-109
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.1	1.5	3.1	不透明	0 49	32-120-110
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.5	1.1	3.6	不透明	0 50	32-120-111
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.3	1.1	3.5	不透明	0 51	32-120-112
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.4	1.6	2.7	不透明	0 52	32-120-113
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.7	1.4	2.1	不透明	0 53	32-120-114
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.0	1.3	2.7	不透明	0 54	32-120-115
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.0	1.6	2.9	不透明	0 55	32-120-116
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.7	1.7	2.5	不透明	0 56	32-120-117
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.6	2.5	不透明	0 57	32-120-118
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.1	1.1	2.7	不透明	0 58	32-120-119
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.6	1.5	2.8	不透明	0 59	32-120-120
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.5	2.8	不透明	0 60	32-120-121
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.8	1.6	3.5	不透明	0 61	32-120-122
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.4	2.9	不透明	0 62	32-120-123
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.1	2.1	不透明	0 63	32-120-124
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.9	1.3	2.9	不透明	0 64	32-120-125
7S 1303	3			石ノガウス	白	3.5	1.1	2.3	不透明	0 65	32-120-126
7S 1303	3			石ノガウス	白	4.0	1.6	2.4	不透明	0 66	32-120-127
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	4.0	1.3	2.4	不透明	0 67	32-120-128
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.7	1.1	2.6	不透明	0 68	32-120-129
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.9	0.9	2.9	不透明	0 69	32-120-130
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	4.0	0.9	2.9	不透明	0 70	32-120-131
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	4.4	1.4	3.0	不透明	0 71	32-120-132
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.5	1.7	1.8	不透明	0 72	32-120-133
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.9	1.3	2.5	不透明	0 73	32-120-134
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	4.2	1.5	2.7	不透明	0 74	32-120-135
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	4.1	1.6	2.7	不透明	0 75	32-120-136
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	4.0	1.4	2.9	不透明	0 76	32-120-137
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.6	1.6	2.4	不透明	0 77	32-120-138
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.9	1.3	2.5	不透明	0 78	32-120-139
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.7	1.3	2.2	不透明	0 79	32-120-140
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.9	1.3	2.2	不透明	0 80	32-120-141
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.7	1.1	2.1	不透明	0 81	32-120-142
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.9	1.7	2.1	不透明	0 82	32-120-143
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.8	1.1	2.1	不透明	0 83	32-120-144
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	4.2	1.5	2.8	不透明	0 84	32-120-145
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.9	1.6	2.1	不透明	0 85	32-120-146
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.9	1.8	2.7	不透明	0 86	32-120-147
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.6	0.9	2.5	不透明	0 87	32-120-148
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	4.0	1.4	2.1	不透明	0 88	32-120-149
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	4.4	1.6	3.0	不透明	0 89	32-120-150
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.6	1.4	2.1	不透明	0 90	32-120-151
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	4.4	1.6	3.0	不透明	0 91	32-120-152
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.6	1.4	2.1	不透明	0 92	32-120-153
7S 1303	3	比呂・黄褐色土		石ノガウス	白	3.1	1.1	3.3	不透明	0 41	32-120-55

一 墓穴内

Tab.12 玉類観察表(7)

測定単位mm, +0は標準値。-は計測不可。

出土順序(層位)	土色・取り上げ番号	器形	量物%	材質	色	直径	孔径	厚さ	備考	器号	写真裏面
7S T303	緑が黄褐色土			ガラス	白	3.8	1.4	3.3		01 21	30-139+189
7S T303	白			ガラス	白	3.7	1.4	2.3		01 23	32-139+49
7S T303	緑が黄褐色土			ガラス	白	4.3	1.2	3.6		01 24	32-139+51
7S T341	?			ガラス	白	6.6	1.6	5.6		01 25	33-140+1
7S T341	?			ガラス	白	7.0 ^{±0.2}	1.6	5.7	1/2欠損	01 27	33-140+2
7S T033	褐色土			ガラス	白	4.9	0.9	4.8		01 28	30-139+197
7S T033	褐色土			ガラス	白	4.7	1.1	3.9		01 29	32-139+128
7S T033	褐色土			ガラス	白	4.3	1.1	4.6		01 30	32-139+129
7S T033	褐色土			ガラス	白	4.9	1.7	4.2		01 33	30-139+130
7S T708	灰褐色土	128	2	木炭	黒	7.2	0.6	4.3		01 34	30-139+131
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.0	0.3	4.1		01 35	30-139+132
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	3.5	0.3	4.9		01 36	30-139+133
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	3.3	0.3	4.1		01 38	32-139+135
7S T708	灰褐色土	128	3	木炭	黒	4.8	0.3	4.5		01 39	30-139+136
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.8	0.3	4.5		01 40	30-139+137
7S T708	灰褐色土	128	4	木炭	黒	5.8	0.4	4.9		01 41	30-139+138
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.2	0.3	4.2		01 42	30-139+139
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.8	0.3	3.8		01 43	30-139+140
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.9	0.3	4.7		01 44	32-139+141
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.2	0.3	4.4		01 45	30-139+142
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.0	0.3	4.4		01 46	30-139+143
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.1	0.3	4.5		01 47	32-139+144
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.3	0.3	4.3		01 48	30-139+145
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.9	0.3	3.9		01 49	32-139+146
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.2	0.3	4.2		01 50	32-139+147
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.9	0.3	3.3		01 51	30-139+148
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.9	0.3	4.4		01 52	30-139+149
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.1	0.3	4.3		01 53	30-139+150
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.1	0.3	4.6		01 54	30-139+151
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.9	0.3	4.2		01 55	30-139+152
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.0	0.3	3.8		01 56	32-139+153
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.0	0.3	4.6		01 57	30-139+154
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.1	0.3	4.6		01 58	30-139+155
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.9	0.3	4.4		01 59	30-139+156
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.7	0.3	4.2		01 60	30-139+157
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.9	0.3	3.8		01 61	32-139+158
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.7	0.3	3.9		01 62	32-139+159
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.8	0.3	4.4		01 63	30-139+160
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.9	0.3	4.2		01 64	30-139+161
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.0	0.3	4.2		01 65	30-139+162
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.9	0.3	4.3		01 66	30-139+163
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.8	0.3	3.8		01 67	32-139+164
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.0	0.3	3.9		01 68	32-139+165
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.0	0.3	4.7		01 69	30-139+166
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.0	0.3	4.2		01 70	30-139+167
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.9	0.3	4.1		01 71	30-139+168
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.9	0.3	4.5		01 72	32-139+169
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.4	0.3	3.9		01 73	32-139+170
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.8	0.3	4.0		01 74	30-139+171
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.0	0.3	3.5		01 75	30-139+172
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	4.5	0.3	4.9		01 76	32-139+173
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.3	0.3	4.6		01 77	32-139+174
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.3	0.3	4.1		01 78	30-139+175
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.3	0.3	4.1		01 79	30-139+176
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.1	0.3	4.1		01 80	30-139+177
7S T708	灰褐色土			木炭	黒	5.0	0.3	3.8		01 81	30-139+178
7S T708	灰褐色土			ガラス	白	4.3	1.5	3.5		01 82	30-139+179
7S T708	褐色土			ガラス	白	5.0	1.1	2.5		01 83	30-139+180
7S T814	褐色土			ガラス	白	3.3	1.0	1.5		01 84	32-139+183
7S T814	褐色土			ガラス	白	3.2	1.2	4.5		01 85	30-139+184
7S T814	褐色土			珪石	白	4.9	1.6	4.1	不透明	01 86	30-139+185
7S T814	褐色土			珪石	白	5.3	1.4	4.5	不透明	01 87	30-139+186
7S T814	褐色土			ガラス	黄	5.6	1.2	4.7		01 88	30-139+187
7S T814	褐色土			ガラス	黄	5.6	1.3	5.4		01 89	32-139+188
7S T814	褐色土			ガラス	白	3.2	0.9	4.7		01 90	32-139+189
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.3	2.0	5.4	不透明	01 91	30-139+200
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.0 ^{±0.4}	1.6	5.3	不透明	01 92	32-139+204
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.1	2.0	5.0	不透明	01 93	-
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	-	-	-	不透明・計測不可	01 94	-
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.3 ^{±0.4}	1.5	5.6	不透明・1/2欠損	01 95	31-138+205
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.4	1.7	5.4	不透明	01 96	30-138+206
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.7 ^{±0.4}	1.7	4.6	不透明・1/2欠損	01 97	30-138+207
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.5	2.0	5.7	不透明	01 98	32-138+208
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.3	2.0	5.1	不透明	01 99	30-138+209
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	-	-	-	不透明・計測不可	01 100	32-138+210
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.2	1.4	4.6	不透明	01 101	30-138+211
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	4.4	0.9 ^{±1.4}	4.9	不透明	01 102	30-138+212
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.6	1.9	4.8	不透明	01 103	32-138+213
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.7	1.8	5.3	不透明	01 104	32-138+214
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.6	2.0	6.0	不透明	01 105	32-138+215
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.3	1.5	6.6	不透明	01 106	32-138+216
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.5	1.8 ^{±2.0}	5.3	不透明	01 107	32-138+217
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.6	1.9	6.8	不透明	01 108	30-138+218
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.7	1.7	5.3	不透明・計測不可	01 109	30-138+219
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.5	2.0	5.2	不透明	01 110	32-138+220
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	6.4	1.9	5.7	不透明	01 111	32-138+221
7S T832	暗灰茶色土			珪石	白	7.0	2.0	5.1	不透明	01 112	-
7S T888	暗灰茶色土			ガラス	白	5.1	1.6	4.6		01 113	33-141+237
7S T888	暗灰茶色土			ガラス	黄	5.5 ^{±1.8}	1.5	3.5		01 114	01 272+1

Tab.13 銭貨観察表

半量単位以上は不明、一aは現在在庫

出土遺跡 (層位)	土色 掘り上げ番号	図庫 No. No.	器物 材質	種類	直径	孔径	厚さ	内円	鋳字	番号	写真掲載順	
75 T 709	43	29	2	銅	(内) 寛永通宝	2.41	0.59	0.18	1.95		0 0 2	34-113
75 T 709	43			銅	(内) 寛永通宝	2.02	0.67	0.18	-		0 0 3	
75 T 709	43	29	1	銅	(新) 寛永通宝、(古) 寛永通宝、焼戻し不明	2.59	0.60	0.14	1.9	4枚付帯		34-145
75 T 714	1			銅	(古) 寛永通宝	2.48	0.60	0.20	-		0 0 1	
75 T 714	2			銅	(古) 寛永通宝	2.48	0.49	0.21	1.90		0 0 2	
75 T 714	3			銅	(古) 寛永通宝、焼戻し不明	2.51	0.68	0.18	2.00	2枚付帯		0 0 3
75 T 714	1			銅	(古) 寛永通宝	2.04	0.54	0.17	1.95		0 0 4	
75 T 714	3			銅	(古) 寛永通宝	2.05	0.65	0.18	2.00		0 0 1	34-145
75 T 728	3			銅	(新) 寛永通宝、(新) 寛永通宝(文)、焼戻し不明	2.84	0.80	0.13	1.80	5枚付帯		34-146
75 T 727	1	52	1	銅	(新) 寛永通宝、焼戻し不明	2.49	-	0.18	-	4枚付帯、ワラ紐、糸		34-147
75 T 729	増塚茶色土			銅	(古) 寛永通宝、焼戻し不明	2.66	0.53	0.20	-	4枚付帯、ワラ紐、糸		0 0 1
75 T 731	増塚茶色土			銅	(新) 寛永通宝	2.43	0.51	0.19	1.95		0 0 1	
75 T 731	増塚茶色土			銅	(新) 寛永通宝	-	-	0.16	-	破片		0 0 2
75 T 733	炭灰色土			銅	(新) 寛永通宝、(古) 寛永通宝	2.56	0.63	0.18	1.90	2枚付帯		0 0 1
75 T 733	炭灰色土			銅	2枚と不明	2.57	0.55	0.14	1.70	2枚付帯		0 0 2
75 T 733	炭灰色土			銅	(古) 寛永通宝	2.07	0.67	0.18	1.90		0 0 3	
75 T 733	炭灰色土	239	1	銅	(古) 寛永通宝	2.44	0.49	0.19	1.90		0 0 4	
75 T 734	白灰色土			銅	(新) 寛永通宝	2.49	0.60	0.14	1.90		0 0 1	
75 T 734	白灰色土			銅	(新) 寛永通宝	2.30-a	0.61	0.17	-		0 0 2	
75 T 751	白灰色土	210	1	銅	(新) 寛永通宝(文)	2.53	0.67	0.18	2.00		0 0 3	35-155
75 T 754	白灰色土			銅	(古) 寛永通宝、焼戻し不明	2.46	0.67	0.20	-	2枚付帯		0 0 1
75 T 754	白灰色土	210	2	銅	(新) 寛永通宝(文)	2.41	0.58	0.13	1.88		0 0 5	35-156
75 T 757	増塚茶色土			銅	(新) 寛永通宝、焼戻し不明	2.53	0.53	0.18	-	4枚付帯、糸、紙		0 0 1
75 T 758	河津褐色土	208	1	銅	(古) 寛永通宝、焼戻し不明	2.48	0.65	0.17	1.95	2枚付帯		0 0 1
75 T 758	河津褐色土			銅	(新) 寛永通宝(ワラ紐七本)、(古) 寛永通宝	2.46	0.55	0.14	1.90	2枚付帯		0 0 2
75 T 758	河津褐色土			銅	(新) 寛永通宝(ワラ紐七本)	2.56	0.50	0.17	2.00	2枚付帯		34-150
75 T 758	河津褐色土	268	2	銅	(古) 寛永通宝	2.56	0.50	0.17	2.00	2枚付帯、ワラ紐		0 0 2
75 T 767	仮山(新)褐色土			銅	(新) 寛永通宝、(古) 寛永通宝、焼戻し不明	2.55	0.65	0.17	1.90	4枚付帯、ワラ紐		0 0 1
75 T 767	仮山(新)褐色土			銅	焼戻し不明	2.22	0.55	0.11	1.85		0 0 1	35-238
75 T 7306	仮山(新)褐色土	317	2	銅	(新) 寛永通宝	2.52	0.60	0.14	-	2枚付帯		0 0 1
75 T 7306	仮山(新)褐色土			銅	(新) 寛永通宝	2.52	0.50	0.11	-	2枚付帯		0 0 1
75 T 7306	仮山(新)褐色土			銅	(新) 寛永通宝	2.52	0.50	0.14	-	2枚付帯		0 0 1
75 T 7306	仮山(新)褐色土			銅	(新) 寛永通宝	2.42	0.59	0.14	1.90	2枚付帯		0 0 1
75 T 7306	仮山(新)褐色土			銅	(古) 寛永通宝	2.53	0.53	0.11	1.85		0 0 3	
75 T 7306	仮山(新)褐色土			銅	(古) 寛永通宝	2.28	0.59	0.14	1.70		0 0 4	
75 T 7306	仮山(新)褐色土			銅	不明	-	-	0.09	-	破片		
75 T 3388	増塚茶色土			銅	(新) 寛永通宝、焼戻し不明	2.54	0.50	0.21	1.85	4枚付帯、ワラ紐、糸		0 0 1
75 T 314	2			銅	(新) 寛永通宝(文)	2.51	0.58	0.18	1.95		0 0 1	
75 T 314	1			銅	2枚と不明	2.54	0.60	0.18	1.95	2枚付帯		0 0 2
75 T 314	4			銅	(古) 寛永通宝	2.59	0.58	0.17	1.95		0 0 3	
75 T 314	6	225	1	銅	(新) 寛永通宝	2.54	0.67	0.18	1.95		0 0 4	35-153
75 T 314	8			銅	(古) 寛永通宝	2.35	0.53	0.11	1.95		0 0 5	
75 T 317	4	226	1	銅	(古) 寛永通宝、焼戻し不明	2.39	0.65	0.16	1.95	2枚付帯		35-154
75 T 317	4			銅	(古) 寛永通宝	2.51	0.69	0.18	2.00		0 0 1	
75 T 334	炭灰色土			銅	(古) 寛永通宝	2.22	0.60	0.14	1.85		0 0 1	
75 T 341	3			銅	(?) 寛永通宝	-	-	0.10	-	破片		0 0 2
75 T 341	4			銅	(?) 寛永通宝	-	-	0.11	-	破片		0 0 3
75 T 341	6			銅	(古) 寛永通宝	2.39	0.62	0.18	2.05		0 0 4	
75 T 341	5	285	1	銅	(古) 寛永通宝	2.47	0.54	0.27	1.97		0 0 5	34-152
75 T 341	炭灰色土			銅	不明	-	-	-	-	破片		-
75 T 341	炭灰色土			銅	不明	-	-	-	-	破片		-
75 T 356	18			銅	(新) 寛永通宝	2.58	-	0.20	-	本銀付帯		0 0 1
75 T 356	炭灰色土			銅	(新) 寛永通宝	2.46	0.43	0.18	1.80		0 0 2	
75 T 356	炭灰色土			銅	(新) 寛永通宝	2.43	0.52	0.12	1.90	破片		0 0 3
75 T 356	炭灰色土			銅	(内) 寛永通宝	2.48	0.55	0.18	1.95		0 0 4	
75 T 356	炭灰色土			銅	(新) 寛永通宝	2.44	0.50	0.12	1.95		0 0 1	
75 T 353	1			銅	2枚と不明	2.39	0.53	0.11	1.95	2枚付帯		0 0 1
75 T 330	1	72	1	銅	(新) 寛永通宝(文)	2.53	0.67	0.16	1.75		0 0 2	34-148
75 T 330	1			銅	(新) 寛永通宝	2.34 a	0.61	0.18	-	破片		0 0 3
75 T 330	2			銅	(新) 寛永通宝	2.29	0.61	0.16	1.75		0 0 4	
75 T 330	2			銅	不明	2.23	0.64	0.11	1.85	破片		0 0 1
75 T 330	2			銅	(新) 寛永通宝	2.29	0.64	0.11	1.85	破片		0 0 1
75 T 823	2			銅	(新) 寛永通宝、永徳通宝、焼戻し不明	2.85	0.55	0.12	1.85	4枚付帯、シロ紐		61-276
75 T 709	3			鉄	不明	0.53	0.00	-	-	紐		0 0 2
75 T 711	2			鉄	(新) 寛永通宝、焼戻し不明(新銀)	2.39	0.60	-	-	3枚付帯、糸		0 0 1
75 T 711	2			鉄	(新) 寛永通宝	2.29	0.63	0.16	-		0 0 2	
75 T 711	2			鉄	(新) 寛永通宝	2.60	0.50	0.22	1.95		0 0 3	
75 T 711	2			鉄	(新) 寛永通宝	2.66	0.62	0.22	-		0 0 4	
75 T 714	1	37	1	銅	(新) 寛永通宝(文)	2.51	0.52	0.21	1.95	4枚付帯、銅紐		34-151
75 T 727	1			銅	(新) 寛永通宝、焼戻し不明	2.41	0.55	0.16	1.80		0 0 1	
75 T 808	3			銅	(新) 寛永通宝、焼戻し不明	2.52	0.55	0.16	1.98		0 0 1	
75 T 814	2			銅	(古) 寛永通宝	2.46	0.58	0.13	1.95		0 0 1	
75 T 814	3			銅	(新) 寛永通宝	2.56	0.55	0.13	1.75		0 0 2	
75 T 814	5			銅	(古) 寛永通宝	2.49	0.54	0.13	1.92		0 0 3	
75 T 814	6			銅	(内) 寛永通宝	2.55	0.61	0.15	1.95		0 0 4	
75 T 814	7			銅	(古) 寛永通宝	2.43	0.53	0.15	1.95		0 0 5	
75 T 814	8			銅	(?) 寛永通宝	2.0 a	-	0.17	-	破片		0 0 6
75 T 801	1			銅	不明	2.44	0.55	0.20	-	4枚付帯、糸		0 0 1
75 T 862	1			銅	(内) 寛永通宝	2.29	0.55	0.15	1.65		0 0 2	
75 T 862	1			銅	(内) 寛永通宝	2.59	0.57	0.14	1.75		0 0 2	
75 T 862	1			銅	(古) 寛永通宝、焼戻し不明	2.41	0.60	0.12	-	2枚付帯、ワラ紐、紙		0 0 1
75 T 862	1			銅	(古) 寛永通宝	2.32	0.60	0.12	1.95		0 0 3	
75 T 862	1			銅	(古) 寛永通宝	2.40	0.51	0.12	1.90	紐		0 0 4
75 T 862	1			銅	大銀通宝	2.36-a	0.70	0.17	-		0 0 1	60-270
75 T 862	1	360	1	銅	寛永通宝(新)	2.47	0.61	0.11	1.75		0 0 1	60-271
75 T 862	1	363	2	銅	本銀貨	2.25	0.51	0.12	2.00		0 0 1	60-278
75 T 862	1	363	1	銅	(新) 寛永通宝	2.44	0.55	0.16	1.88		0 0 2	60-269

Tab. 14 石製墓標觀察表

※ 単位はcm、+は残存数、文字の○は異体字、□は判読不明

出土場所 (墓ID)	取上げ番号	面積%	遺物%	石材	最大径	最大幅	高さ	備考	検出	写真撮影%
75-T001	土倉なし	10	1	花崗岩	54.0	51.0	15.0	彫刻なし	0/1	30-175
75-T006	土倉なし	-	-	花崗岩	53.0	52.0	10.5	彫刻なし	0/1	42-190-9
75-T011	土倉なし	31	1	花崗岩	49.0	53.0	6.5	彫刻なし	0/1	30-175
75-T021	土倉なし	30	1	花崗岩	43.0	42.0	9.0	彫刻なし	0/1	30-175
75-T034	土倉なし	-	-	花崗岩	37.0	38.0	8.0	彫刻なし	0/2	43-180-10
75-T038	土倉なし	42	3	花崗岩	41.0	39.0	12.0	彫刻なし	0/1	30-175
75-T038	土倉なし	-	-	花崗岩	49.0	39.0	8.0	彫刻なし	0/2	43-180-11
75-T038	土倉なし	-	-	花崗岩	36.0	38.0	8.0	彫刻なし	0/2	43-180-14
75-T039	土倉なし	44	1	花崗岩	54.0	37.0	15.0	彫刻なし	0/1	30-175
75-T039	土倉なし	-	-	花崗岩	34.0	32.0	8.0	彫刻なし	0/2	43-180-17
75-T039	土倉なし	33	1	花崗岩	14.0	35.0	15.0	【注】 ① 字跡(門) ② 地蔵堂(地蔵) ③ 大文字	0/1	30-175
75-T052	土倉なし	-	-	花崗岩	46.0	46.0	15.0	彫刻なし	0/1	42-190-1
75-T052	1	239	1	花崗岩	42.0	41.0	16.5	【注】 ① 字跡(年) ② 刻名(刻名) ③ 小文字	0/1	30-175
75-T052	2	-	-	花崗岩	24.0	29.0	10.0	彫刻なし	0/2	42-190-3
75-T053	3	-	-	花崗岩	42.0	49.0	17.0	彫刻なし	0/3	42-190-4
75-T053	4	-	-	花崗岩	3.1	8.7	6.4	彫刻なし	0/4	43-180-13
75-T053	5	-	-	花崗岩	3.1	8.5	7.0	彫刻なし	0/2	43-180-13
75-T053	6	-	-	花崗岩	3.0	13.0	8.0	彫刻なし	0/6	43-180-12
75-T054	土倉なし	260	1	花崗岩	71.0	25.0	11.0	彫刻なし	0/1	30-175
75-T061	土倉なし	-	-	花崗岩	19.0	18.0	4.0	彫刻なし	0/1	43-180-12
75-T069	土倉なし	107	1	花崗岩	41.0	38.0	17.0	彫刻なし	0/1	30-175
75-T074	土倉なし	173	1	花崗岩	39.0+	21.0	6.0	彫刻なし	0/1	30-180
75-T085	土倉なし	204	1	花崗岩	38.0	22.0	15.0	彫刻なし	0/1	30-182
75-T086	土倉なし	-	-	花崗岩	21.0	16.0	17.0	彫刻なし	0/1	42-190-1
75-T086	土倉なし	-	-	花崗岩	29.0	19.0	18.0	彫刻なし	0/2	42-190-3
75-T092	土倉なし	-	-	花崗岩	17.0	12.0	8.0	彫刻なし	0/1	42-190-8
75-T092	土倉なし	-	-	花崗岩	16.0	18.0	9.0	彫刻なし	0/2	42-190-7
75-T092	土倉なし	-	-	花崗岩	33.0	38.0	18.0	彫刻なし	0/2	42-190-8
75-T093	土倉なし	-	-	花崗岩	33.0	25.0	15.0	彫刻なし	0/1	42-190-2
75-T099	土倉なし	-	-	花崗岩	16.0	8.0	7.0	彫刻なし	0/2	42-190-5
75-T094	土倉なし	-	-	花崗岩	33.0	34.0	8.0	彫刻なし	0/1	42-190-7
75-T118	土倉なし	130	1	花崗岩	61.0	32.0	30.0	【注】 ① 文化年輪 ② 刻名(刻名) ③ 十字の痕	0/1	42-190
75-T066	1	119	1	花崗岩	41.0+	31.0+	19.0	【注】 ① 刻名(年) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名)	0/1	42-190
75-T068	1	131	1	花崗岩	29.0+	22.0	15.0	彫刻なし	0/2	42-190
75-T068	2	-	-	花崗岩	36.0	25.0	18.0	彫刻なし	0/3	42-190-8
75-T122	土倉なし	130	3	花崗岩	37.0	29.0	18.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名) ④ 刻名(刻名) ⑤ 刻名(刻名)	0/2	42-190
75-K012	2	132	1	花崗岩	33.0	36.0	21.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名) ④ 刻名(刻名) ⑤ 刻名(刻名)	0/1	42-192
75-K013	1	-	-	不明	33.0	31.0	22.0	彫刻なし	0/2	42-190-1
墓主	39	1	花崗岩	47.0	33.0	27.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名)	0/1	42-190	
墓石下部	242	1	花崗岩	50.0	36.0	24.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名)	0/2	42-190	
墓石下部	242	2	花崗岩	66.0	38.0	19.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名)	0/3	42-190	
墓石下部	242	3	花崗岩	31.0+	32.0	11.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名)	0/4	42-190	
墓石下部	242	4	花崗岩	79.0	50.0	21.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名)	0/2	42-190	
墓石下部	242	5	花崗岩	34.0+	29.0	13.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名)	0/6	42-190	
墓石下部	242	7	花崗岩	46.0	37.0	20.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名)	0/7	42-190	
墓石下部	242	8	花崗岩	76.0	32.0	26.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名)	0/8	42-190	
墓石下部	317	2	花崗岩	71.0	29.0	27.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名)	0/9	42-190	
墓石下部	317	3	花崗岩	66.0	34.0	22.0	【注】 ① 刻名(刻名) ② 刻名(刻名) ③ 刻名(刻名)	1/10	42-190	
墓石下部	-	-	花崗岩	53.0	28.0	27.0	彫刻なし	0/1	42-190-4	
墓石下部	-	-	花崗岩	16.0	11.0	3.0	彫刻なし	1/2	42-190-5	
墓石下部	-	-	花崗岩	24.0	6.0	12.0	彫刻なし	1/3	42-190-9	
墓石下部	-	-	花崗岩	36.0	14.0	10.0	彫刻なし	1/4	42-190-12	
墓石下部	-	-	花崗岩	34.0	18.0	12.0	彫刻なし	1/4	42-190-12	
墓石下部	-	-	花崗岩	47.0	39.0	8.0	彫刻なし	0/6	42-190-10	

Tab.15 堯棺觀察表

出土遺物	土色 取り上げ番号	取戻%	遺物%	種類	器種	口径	器高	底径	備考	器番号	写真図版%	非単位はcm, □は残存値
												器高
7S T 964	黄灰色土	240	1	瓦質土器	甕	60.0-60.0	55.0-60.7	51.0-51.8		0 0 1	37-171	
7S T 923	暗灰褐色土	88	1	瓦質陶器	甕	48.0-49.5	76.0-77.0	24.4-24.5		0 0 1	35-137・138	
7S T 922	暗灰褐色土	123	1	山形陶器	甕	51.7-52.4	74.5-74.7	26.8-27.3		0 0 1	35-139	
7S T 960	上黄色土	150	1	瓦質陶器	甕	(31.8)	47.2-47.6	17.1		0 0 1	36-150	
7S T 708	1	128	1	山形陶器	甕	55.0-55.1	79.2-80.6	28.4-28.8		0 0 1	36-161	
7S T 711	1	132	1	山形陶器	甕	44.3-46.4	74.7-76.4	24.6-25.5		0 0 5	36-162・163	
7S T 712	灰褐色土	134	2	瓦質陶器	甕	52.8-53.8	78.5-80.5	29.8		0 0 1	36-164・165	
7S T 714	明褐色土	137	1	瓦質陶器	甕	37.8-38.0	56.0-56.3	20.0		0 0 1	37-166	
7S T 719	明褐色土	139	1	瓦質陶器	甕	40.5-42.0	66.3-66.5	23.8		0 0 1	37-167	
7S T 723	1	—	—	外官器類	外官器身	15.0	4.1	—		0 0 1	37-168・1	
7S T 723	1	—	—	外官器類	外官器身	18.2	5.1	16.4		0 0 2	37-168・2	
7S T 723	1	—	—	外官器類	外官器身	11.5	3.9	7.7		0 0 3	37-168・4	
7S T 723	1	—	—	外官器類	外官器身	15.1	3.3	13.6		0 0 4	37-168・3	
7S T 724	1	143	1	瓦質陶器	甕	52.6-54.9	76.0-76.3	26.0		0 0 1	37-169	
7S T 812	土黄色土	153	1	山形陶器	甕	32.5-34.9	56.4-57.4	20.3-20.3		0 0 1	37-170	

Tab.16 木製品観察表

出土遺物	土色 取り上げ番号	取戻%	遺物%	器種	最大長	最大幅	最大厚	備考	器番号	写真図版%	非単位はcm, +は残存値
											器高
7S T 631	3	59	1	角材板状	59.7+α	13.1+α	2.0	木釘痕 金具跡あり	0 0 1	37-213	
7S T 682	29	215	1	板状	38.2+α	13.5	2.2	木釘痕あり	0 0 1	33-135・1	
7S T 692	30	215	2	板状	42.5+α	10.5	2.3	木釘痕あり	0 0 2	33-135・2	
7S T 692	31	215	3	板状	36.5+α	9.5	2.1	木釘痕あり	0 0 3	33-135・3	
7S T 692	32	215	4	板状	34.6+α	10.7	2.3	木釘痕あり	0 0 4	33-135・4	
7S T 220	18	254	14	不明	18.9-20.0	器高4.9+α	—	黒漆	0 1 4	48-217	
7S T 356	20	226	1	板状	71.3+α	6.5	1.6	木釘痕あり	0 0 2	33-136・1	
7S T 356	26	228	3	棒状 (板)	62.8	4.2	2.4	木釘痕あり	0 0 3	33-136・3	
7S T 356	26	228	2	棒状	62.0	11.9+α	1.3	木釘痕あり	0 0 4	33-136・2	
7S T 823	暗灰色土	86	2	棒	16.1+α	4.1	1.1		0 0 2	27-22	
7S T 606	29	262	13	不明	27.2	18.7	—	黒漆	0 1 6	48-218	
7S T 712	緑灰色土	134	2	棒	6.3+α	1.3+α	0.5	黒漆	0 0 2	35-227	
7S T 712	緑灰色土	134	3	棒	6.0	46.8+α	1.8	金具跡あり	0 0 3	35-228	

Tab.17 瓦・土製品観察表

出土遺物 (部位)	土色	取戻%	遺物%	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	備考	器番号	写真図版%	非単位はcm, +は残存値
												器高
7S T 687	江戸川褐色土	209	1	土製品	片蓋状土製品?	2.7	2.4	2.0		0 0 1	39-214	
7S T 633	黄褐色土	354	3	土製品	管状土器	6.1	0.5-0.7	1.6		0 0 3	57-251	
7S T 634	灰褐色土	387	9	瓦器	瓦	15.9+α	16.9+α	1.2	(底面裏)	0 1 0	37-252・4	
7S T 713	1	126	9	土製品	2014じき	2.3	2.0	2.6	色 墨帯あり	0 0 2	38-126・10	
7S T 719	2	139	10	土製品	2014じき	1.9	2.0	2.6	滑り痕	0 0 3	38-126・11	
7S T 719	褐色土	139	1	土製品	2014じき	1.6	2.0	2.6		0 0 4	38-126・1	
7S T 719	褐色土	139	2	土製品	2014じき	2.2	1.6	2.4	滑り痕	0 0 2	38-126・2	
7S T 719	褐色土	139	3	土製品	2014じき	2.5	1.7	2.6	滑り痕	0 0 3	38-126・3	
7S T 719	褐色土	139	4	土製品	2014じき	2.4	1.7	2.3	滑り痕	0 0 4	38-126・4	
7S T 719	褐色土	139	5	土製品	2014じき	2.3	1.7	2.3	滑り痕	0 0 5	38-126・5	
7S T 719	褐色土	139	6	土製品	2014じき	2.4	2.0	2.5	滑り痕	0 0 6	38-126・6	
7S T 719	褐色土	139	7	土製品	2014じき	2.4	1.4	2.0	滑り痕? 墨帯あり	0 0 7	38-126・7	
7S T 719	褐色土	139	8	土製品	2014じき	1.5	1.7	2.2	不明	0 0 9	38-126・8	
7S T 719	褐色土	139	11	土製品	2014じき	1.7	0.3	0.3		0 0 8	38-126・9	
7S X 878	6層褐色土	304	1	土製品	三次土製品	—	3.9+α	—		0 0 1	64-238	
7S X 878	黄褐色土	362	8	土製品	土器	2.6	1.1	1.0	器高0.3	0 0 7	39-202・5	
7S X 878	褐色土	361	4	瓦器	瓦	10.4+α	8.3+α	6.2		0 0 1	39-201・4	

2) 近世以前の墳墓

7ST030

遺構 (Fig. 248, Pl.15-69, 70)

B地区北側, AW18区他の標高40.5m付近, 平地からの比高差約5.5mに位置している火葬墓である。長軸約0.80m, 短軸0.40mの楕円形プランを呈する。

7ST030を中心とする直径約1.1mの円形の範囲内では, 検出時に炭化物の拡がり(3層)が見られた。

墓境内の状況は一度底面まで掘り下げた後, 10cm程度の厚さで土砂を入れ, さらに5cmほどの厚さで粉状の炭化物を敷き詰めて, 骨を入れた須恵器甕を安定させて埋置したものである。

須恵器甕の中には, 土師器環が入った状況で出土したが, これは甕に土師器の環を蓋として用いていたようである。調査段階では, すでに遺構上部は崩れていたため, 明確にし得ないが, 墓境周辺に拡がる炭化物の層からは鉄釘が6点出土している。炭化物の主体は木棺であった可能性があり, 出土した鉄釘は木棺に用いられていたと思われる。これらのものは, 他の場所で火葬され, 灰を墓境に持ち込んだ可能性がある。出土遺物から遺構の埋没時期は大宰府編年VI B期(9c前)以降と考えられる。

遺物 (Fig. 250, Pl.44-200, 45-207)

須恵器

甕(1) 丸底の底部から胴部が丸みを持って立ち上がる器形である。頸部と胴部の境には割れ面と, 胴部が見られることから, 頸部は特殊な形態を持つことが推測できる。調整は外面に格子目のタキ, 内面

7ST030

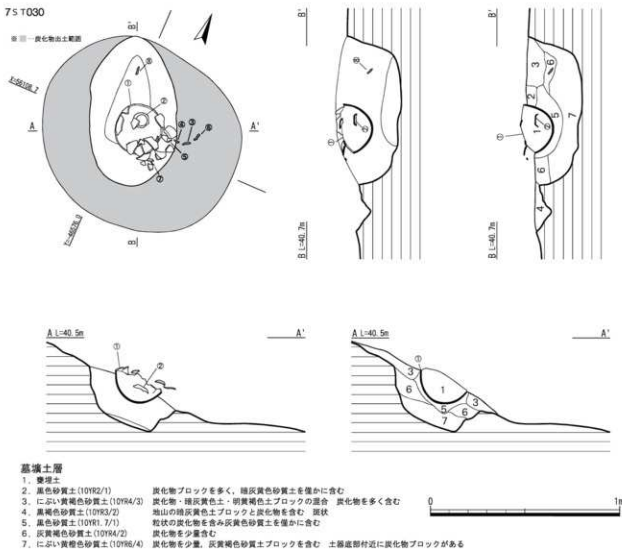


Fig. 248 7ST030平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

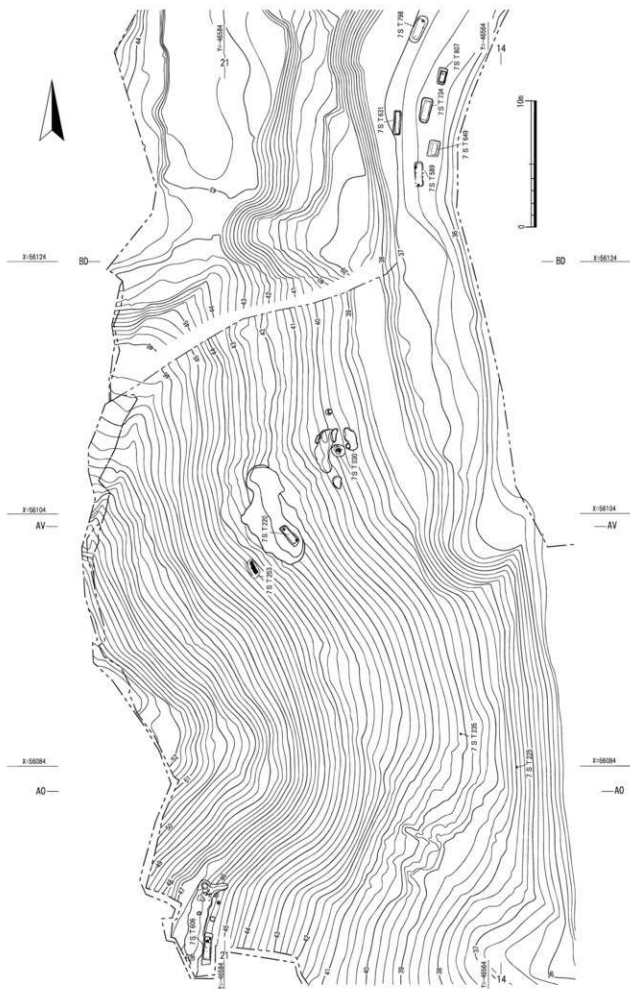


Fig. 249 近世以前の墳墓遺構配置図 (1/300)

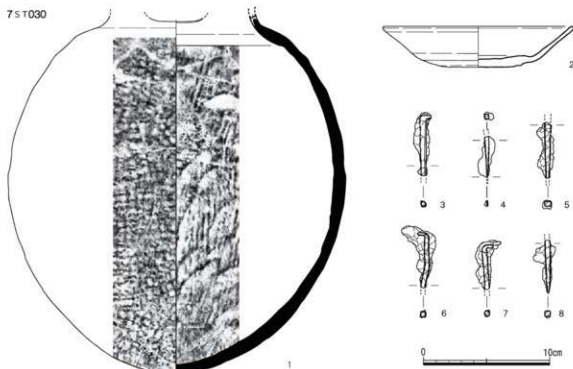


Fig. 250 7ST030出土遺物実測図 (1/3)

に約7本の溝を一単位にしたあて具痕が残っている。色調は赤色を帯びる。

土師器

環a(2) 復原口径15.2cm, 復原底径9.0cm, 器高3.3cmを測る。底部から不明瞭な稜を持って胴部が直線的に外にひろく器形である。ミガキは施されない。ヘラ切りである。色調は褐灰色を呈する。

金属製品

鉄釘(3~8) 墓塚の埋土中から炭化物とともに出土したものである。全部破片で端部が残るのみである。3・6・7の頭部は、1cm程度折り曲げている。幅は0.4~0.5cmで断面方形である。鉄釘の錆には木質の痕跡は残っていない。

7ST030周辺遺構

7SK233

遺構 (Fig. 251)

B地区北側の斜面, 7ST030の西側で検出された。等高線に沿って掘られた窪み状の遺構である。出土遺物はない。埋土は単層である。7ST030造営に際しての, 土地の整形跡と考えられる。

7SK467

遺構 (Fig. 251)

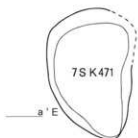
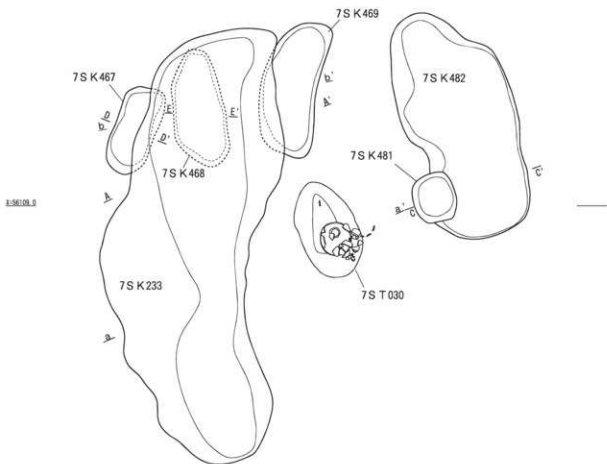
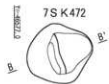
B地区北側の斜面, 7ST030の西側で検出された。隅丸長方形を呈した土坑である。東側半分は7SK233に切られる。埋土は単層で遺物はわずかに須恵器片が出土している。

7SK468

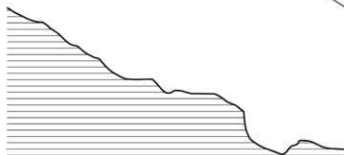
遺構 (Fig. 251)

B地区北側の斜面, 7ST030の西側で検出された。不整楕円形を呈した土坑である。上面を7SK233に切られる。

埋土は単層で遺物は須恵器片がわずかに出土している。



W a L=41.00m



W b L=41.20m

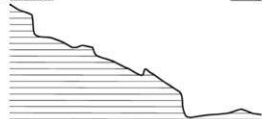


Fig. 251 7ST030周辺遺構実測および断面図 (1/30)

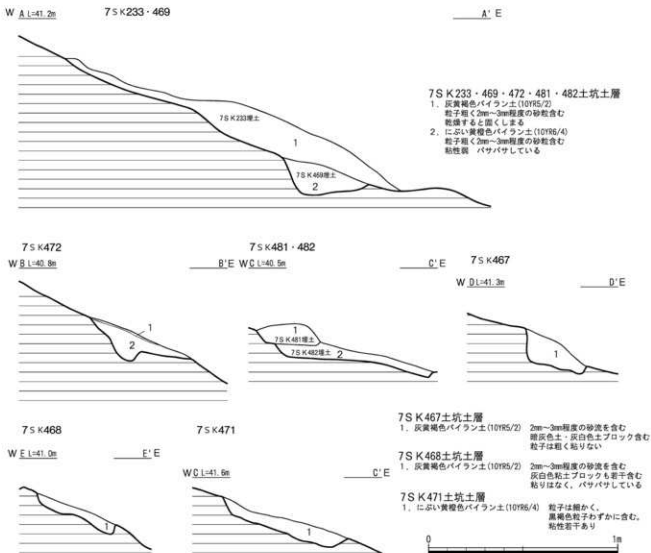


Fig. 252 7ST030周辺遺構土層図 (1/20)

7S K469

遺構 (Fig. 251)

B地区北側の斜面, 7ST030の北側で検出された。不整楕円形を呈した土坑である。西側半分は7SK233に切られる。

埋土は単層である。

7S K471

遺構 (Fig. 251)

B地区北側の斜面, 7ST030の南側で検出された。不整楕円形を呈した土坑である。

埋土は単層である。

7S K472

遺構 (Fig. 251)

B地区北側の斜面, AX18区他で検出された。隅丸方形を呈する土坑である。検出面に炭化物が拡がっているが非常に薄い。埋土は炭化物層を含め2層見られる。

7S K481

遺構 (Fig. 251)

B地区北側の斜面, AW17区他で検出された。隅丸方形を呈する土坑である。埋土は単層で遺物も出土していない。

7S K482

遺構 (Fig. 251)

B地区北側の斜面, AW17区他で検出された。不整形の浅い土坑状の遺構である。南端は7SK481に切られている。埋土は単層で遺物も出土していない。7ST030を築造するときに使った作業空間であったことも想定できる。

7S T220

遺構 (Fig. 253, Pl. 12-55-57)

B地区北側の斜面, AU19区の標高43m付近で検出した木棺墓である。墓壇はN-40°-Wに長軸方向をとり、長軸1.87m、短軸0.72mで、床面は北側が一段高く、南側に向かうにつれて緩やかに傾斜している。

遺構上面は崩落により崩れていた。また、墓壇の認知の遅れにより南側半分の情報も欠失してしまった。7ST220の木棺の木質は残存していなかった。平面掘り下げ段階では棺痕跡の認識は困難であったものの、土層断面にて木棺と考えられる痕跡を確認した。また、出土した鉄釘の位置から木棺は長軸1.52m、短軸0.43mであったと推定される。

推定される棺痕跡範囲内からは、北側の床面が高いほうから漆製品が出土し、その上から鉄製紡錘車が重なって出土した。また、南側から灰釉陶器碗が出土した。そのほかに鉄釘が26本出土した。漆製品・灰釉陶器碗ともにほぼ原位置で出土したものと考えられ、これらの遺物は棺内に副葬品として納められたものと思われる。灰釉陶器碗は故意に半分に割られていると考えられ、当時の葬送儀礼など、意図的な破砕行為の痕跡が想定できる。

鉄製紡錘車が出土していることから、一般的な当時の性差に伴う役割の違いを考慮すると、遺物より、被葬者は女性の可能性が考えられる。人骨が残っていないため、頭位の方向や埋葬体位などは不明である。遺構の埋没時期は10c前半以降と考えられる。

遺物 (Fig. 254, Pl. 44-201, 45-208, 46-209, 48-217)

灰釉陶器

碗(1) 口径14.9cm、器高5.0cm、高台径8.0cmの灰釉陶器碗である。体部内・外面ともにナデを施す。口縁部をさらにナデを施し、端部を外につまみ出すように成形している。底部外面には外に踏ん張るような高台を貼付する。

また、底部内面には重ね焼きの痕跡が、底部外面には重ね焼きの痕跡とイト切り痕が残る。

口縁部から体部にかけて内・外面ともに透明釉をツケガケにより施軸する。器壁が厚く、施軸方法がツケガケであることから10c前半頃の特徴を有するものと思われる。

口縁部は両端を打ち欠き、そこから半分に割れている状況が見える。これは故意によるものと考えられる。

金属製品

鉄釘(2-12) 墓壇の床面近くから出土しており、木棺に使用されたと思われるものである。比較的残りが悪い。途中で折れ曲がっているものがほとんどであった。

4の残存状況は良好で、長さ7cm程度、厚さ0.5cmの断面方形で、頭部には木質が残る。頭部は太く、先端部にいたるにつれて細くなっていく。9は両端部が折れ曲がっており、鏡のような役割を考えることができる。

紡錘車(13) 軸の残存長15.3+ α cm、最大の軸の太さ0.5cm、円盤の最大径5.1cmの鉄製紡錘車である。軸の端部は欠損しており、円盤部は湾曲する。漆製品の直上で出土した。

木製品

漆器(14) 口径20cm前後、残存器高4+ α cm、底径約15cmの円形の漆製品である。生地は腐食しており、

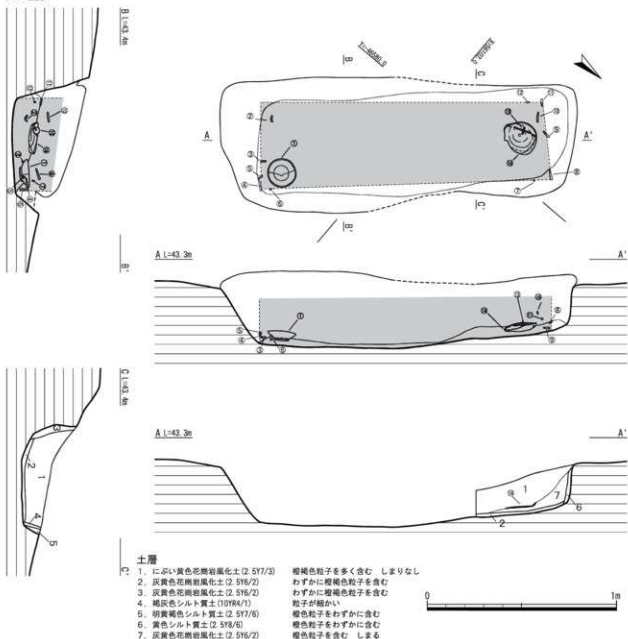


Fig. 253 75T220平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

残存していない。内・外面の漆膜のみが残存している。器高はA-A'の漆膜残存状況から復原口径は5.4 cmよりも若干高くなると思われる。底部内面には直径約9 cmの円形状に漆膜の割れが見られる。このことから底部外面に高台が付いている可能性も考えられる。

漆膜の状況は、内・外面の2枚に分かれている。おそらく漆膜の間に木質素地があったものと考えられるが、現状では完全に腐食しており残存していない。体部付近の漆膜は黒色の漆膜の他に、赤色の漆膜も見られる。赤色漆膜の下には別の黒色漆膜が残っていた。

遺物の出土状況は、墓壇内の棺痕跡の北端にあたり7層上位で出土した。製品は上方からの土圧により、蛇腹のように幾重にも折れ曲がり潰れていた。遺物の上より鉄製紡錘車が出土した。

遺物を境に1層と7層が堆積している。1・7層は共に花崗岩風化土である。1層は、墓壇上位からの埋土と考えられ、その埋土流入時の土圧によって北側の棺材が倒壊したと思われる。7層はその棺材下に流入した埋土だと考えられる。本調査で棺台と断言できるものは確認できなかったが、漆器が棺台上に置かれていたものなのか、供献品として棺床に置かれていたのかということは判断しがたい。漆器の上にあっ

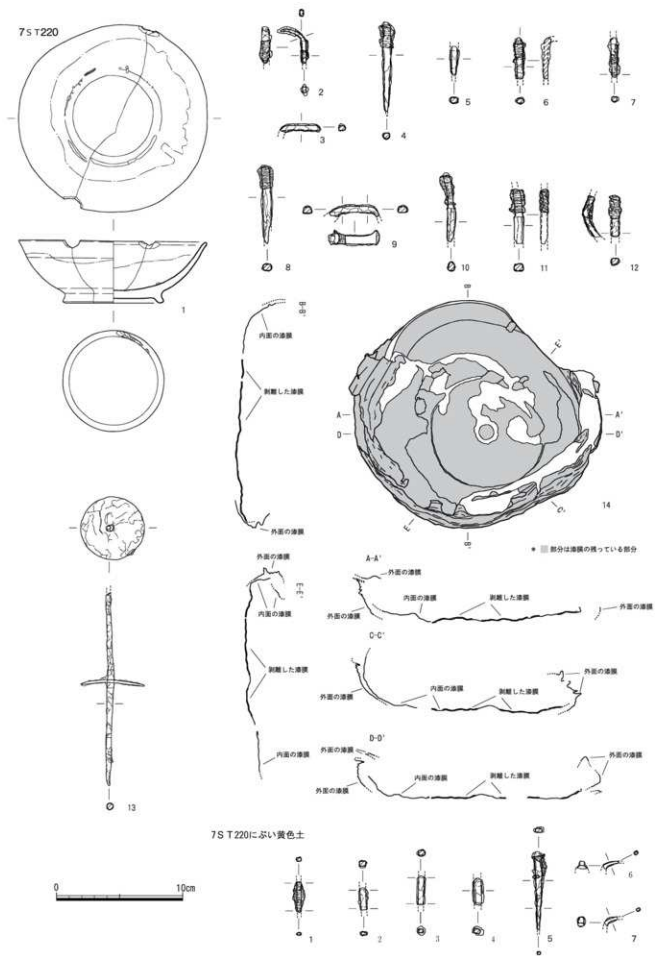


Fig. 254 7S T220出土遺物実測図 (1/3)

た鉄製紡錘車は、漆器よりも大きく、漆器内に取められていたとは考えにくい。漆器内には別の物が取められていた可能性もある。

7ST220にふい黄色土

金属製品

鉄釘（1～7） 木棺に使用されたと思われる鉄釘である。これらは、掘り上げた埋土中から採集したものもある。そのため墓域内における原位置を記録することができなかった。

鉄釘には、5のように長さ6cm近くあるものもあるが、他の鉄釘は破片で全体の形をつかめない。断面形については、ほとんどが一辺0.3～0.4cmの方形を呈している。1・5には、木質が残っていた。

7ST220周辺遺構

7SK236

遺構 (Fig. 255)

B地区北側斜面、AT19区他の標高約42～43mで検出された土坑である。7SK236を掘り下げた結果、7ST220を検出した。7ST220を構築する際の造成跡と考えられる。規模は長軸約8.1m、短軸約3.2mで、床面が緩やかに傾斜するもの、ほぼ平坦に造られている。須恵器・土師器片が出土した。

7ST225

遺構 (Fig. 256)

B地区南側斜面、AO12区の標高38m付近で検出された蔵骨器である。表土除去段階において須恵器長頸壺が露出していた。墓壙形態と土層観察を欠失し、焼骨などは出土していないものの、他の調査事例¹⁾から火葬墓と考えられる。

長頸壺は頸部が破損した状態で、墓壙底面のにふい茶色土内から出土した。墓壙の大きさを推定すると、本来、直径・深さともに長頸壺が入る程度の墓壙であったらう。

また、この遺構の検出された場所は急斜面である。本来は、長頸壺が埋納できる程度の深さを確保できる位置に当時の地表面を想定し得る。遺構の埋没時期は大宰府福年田期（8c中）以降と考えられる。

遺物

(Fig. 257, Pl. 44-202・1)

7ST225にふい茶色土

須恵器

壺b（1） 長頸壺である。胴部上半で鈍角に屈折する器形を呈する。胴部下半は回転ヘラケズリを施している。底部と胴部の境には低く下面の平坦な高台を貼り付けており、底面には板状圧痕が見られる。打ち欠いた痕跡は見られない。

7ST235

遺構 (Fig. 256)

B地区南側斜面、AP14区の標高40m付近で検出された蔵骨器である。表土除去段階ですでに須恵器小

7ST220・253周辺遺構

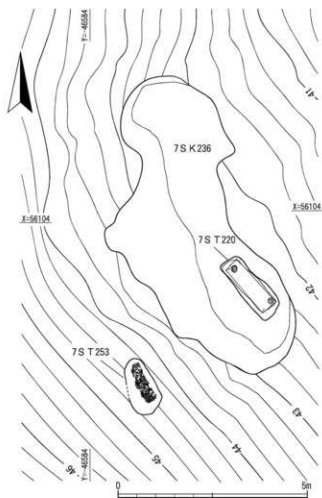


Fig. 255 7ST220・253周辺遺構配置図 (1/100)

壺が露出した状態であったため、小壺を埋納した本来の墓壙形態と土層観察を欠失した。小壺は墓壙底面のにぶい茶色土内から出土した。

墓壙の底面の大きさは、小壺の底部とほぼ一致することから、小壺が埋納できる程度の大きさの掘り方であったことが想定できる。

遺物 (Fig. 257, Pl. 44-202・2)

7ST235にふい茶色土須恵器

小壺(1) 底部平坦面から丸みを持って胴部が立ち上がり、口縁部は短く外反する器形である。胴部下半は回転ヘラケズリを施している。色調は赤茶色を呈する。

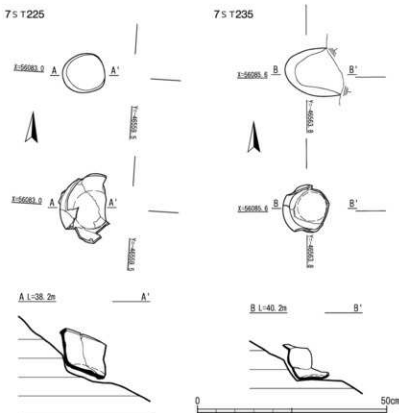


Fig. 256 7ST225, 235平面図・土層図および断面見通し図 (1/10)

7ST253

遺構 (Fig. 258, Pl. 15-71~74)

B地区北側斜面、AT20区の標高45m付近で検出した土壇墓である。N-25°-Wに長軸方向をとる楕円形の墓壙で、長軸は1.53m、短軸0.82mである。

遺構の北側は、一部樹根により攪乱を受けているものの、墓壙全体には及ばず、墓壙底部はほぼ完全に残存していた。

遺物は、須恵器の坏片が数点出土しているだけで棺材などは出土していないが、7ST220や7ST606とはほぼ同じ標高に位置している点や、墓壙形態や長軸方向が類似する点から土壇墓と判断した。

この墓の特徴として、墓壙の底面には木炭が非常に多く残っていることがあげられる。しかし、墓壙内には灰土や焼土痕跡はみられず、また、窯の考古地磁気測定の際に用いられた帯磁率計を用いて墓壙内を測定した結果、周辺土壌と磁気量の差はなく、遺構内において、キュリー一点に達するような火の使用は行われていなかったことが判明した。⁽²⁾

また、これらの木炭は棒状の固まりで破損もほとんどなく、本例ではこれらの木炭は未使用のもので、意識的に墓壙底面に敷き詰め、その上に埋葬したものと考えられる。

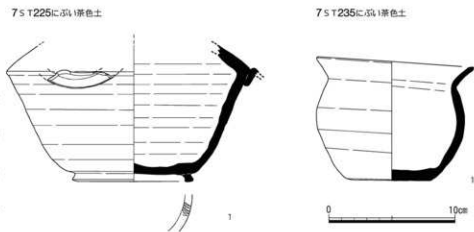


Fig. 257 7ST225, 235出土遺物実測図 (1/3)

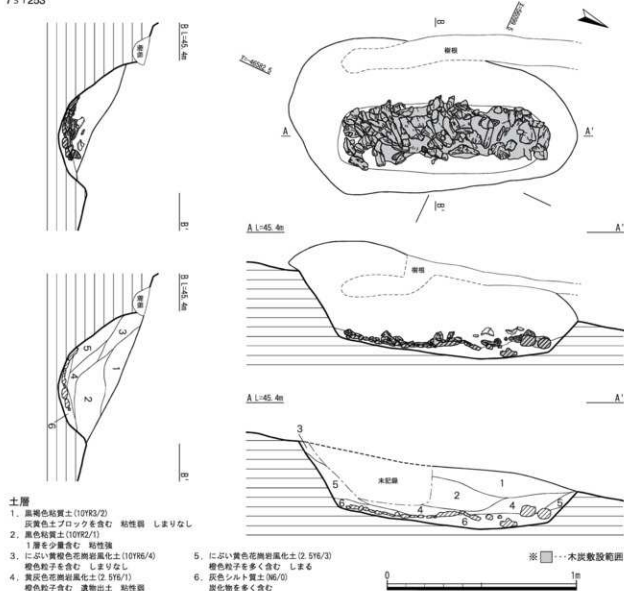


Fig. 258 7ST253平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

遺物は、須恵器片が出土しているが、出土地点が樹根による攪乱との境界部分であることから混入の可能性がある。

7ST589

遺構 (Fig. 259)

BE15区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.5m前後の緩斜面に形成された土壌墓である。7ST524・583に切られ、墓壙の一部は失われている。主軸をN-4°-Wにとる。

墓壙は、隅丸長方形を呈し、長軸1.98m、短軸0.66m、深さ0.35+ α mを測る。出土遺物には、土師器環a・椀cなどVI期の遺物および刀子等が見られたが、土器の天地が転位していたり、刀子が床面より浮いた状態で出土していることから、これらは、本来、木蓋上に置かれた供献品であった可能性が高い。

土層断面において棺の痕跡が認められないことから、本遺構は木蓋土壌墓と考えられる。出土した環aはVIA期の特徴が見られるものが主体であるが、底部から胴部にかけての椀cがあいまいになるVIB期の特徴も見られる。また、椀cも出土しており、遺構の埋没時期が大宰府編年VIA~VIB期(9c初~前)以降と考えられる。

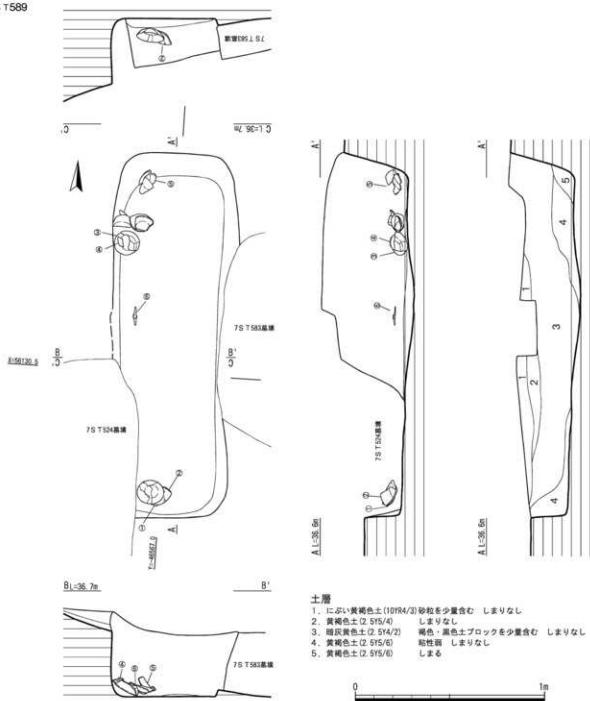


Fig. 259 75T589平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

遺物 (Fig. 260, Pl.44-203, 46-210)

土師器

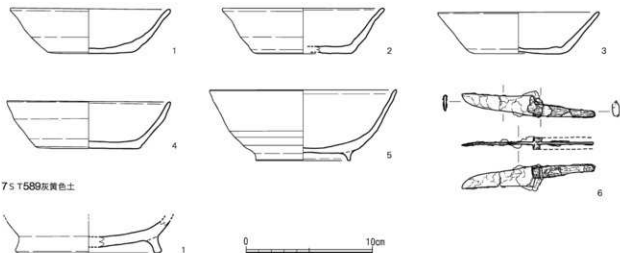
坏a (1~4) 口径12.8cm前後, 器高3.6cm前後を測る。3の器高は若干小さく3.3cmを測る。底部と胴部の境は明瞭で胴部が直線的に立ち上がる器形である。調整はナデが施されており, ミガキやヘラケズリは見られない。1~3は黄灰色, 4は赤色を帯びる。ヘラ切りである。

椀c (5) 胴部が丸みを持って立ち上がる。中椀の2タイプ。高台は断面三角形である。切り離しは確認できない。

金属製品

刀子(6) 鉄製品である。刀身部5.8cm, 中子4.9cm, 刀身部の厚さ0.2cm, 中子の厚さ0.2cmを測る。中

7ST589



7ST589灰黄色土

Fig. 260 7ST589出土遺物実測図(1/3)

子では柄が若干残存しており、柄残存部は幅1.2cm、厚さ0.6cmを測る。

7ST589灰黄色土

土師器

碗c×大皿(1) 底部片が出土した。高台の底面に平坦面を持ち、高く器壁が厚い。底径が復原で11.0cmを超えるため、大型の器種になるとと思われる。

7ST606

遺構 (Fig. 261, Pl. 12-58, 13-59~61)

B区南西の斜面、AJ21区他の標高46.5mに位置し、7SF608にはほぼ平行した状態で検出された木棺墓である。主軸をN-4°-Eにとる。

棺材の出土は見られないものの、木棺に使用したと思われる鉄釘が出土している。花崗岩風化土層を削り平坦面を形成して造られている。北半分は重機により墓壙上端を欠失し、さらに南半分は樹痕により攪乱を受けており、良好な検出結果を残すことができなかった。

墓壙は長軸2.54m、短軸0.74m、深さ0.44+ α mを測り、平面長方形を呈し、床面は水平で、壁面は西側以外は垂直に立ち上がる。棺材残存状況と鉄釘の出土状況により木棺平面形は長さ1.82m、幅0.46mの長方形であると推定される。

出土遺物は、土師器環a 2点、漆器 1点、鉄釘約20本等である。

出土状況と土層観察により土師器環aを逆位にして蓋とし、正位の土師器環a×皿aに重ねて棺内に副葬したものとと思われる。

漆器は水平を保って出土したが、横軸方向が棺形態に対して正置となっていないこと、小口より0.25~0.47mの位置にあることなどを考えると、被葬者の胸上に副葬された可能性もある。遺構の埋没時期は大宰府編年VIA期(9c初)以降と考えられる。

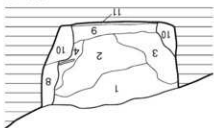
遺物 (Fig. 262, Pl. 44-204・1~3, 46-211, 48-218)

土師器

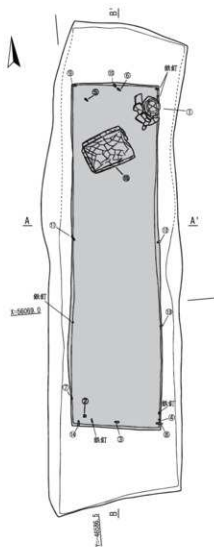
環a(1) 復原口径11.9cm、底径7.4cm、器高3.6cmを測る。底部から稜を持って胴部が直線的に立ち上がる器形である。磨耗が著しく調整は不明である。色調は黄橙色を呈する。大宰府編年のVIA期と思われる。

金属製品

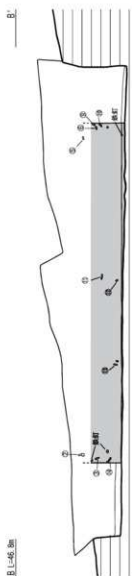
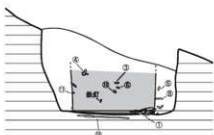
鉄釘(2~14) 2・10・12・13は銹部に木質残存部がみられ、それぞれ、2.4cm・1.5cm・2.8cm・1.4cm



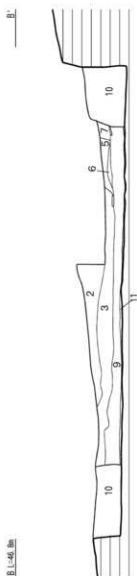
A' 1-46.9m



A 1=46.9m



B 1=40.0m



B 1=40.0m

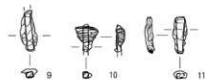
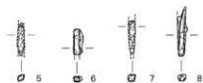
0 1m

土層

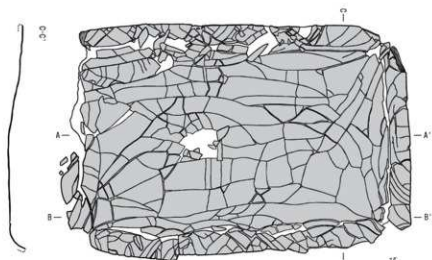
1. 褐灰色土 (5YR5/1) 黄白色花崗岩風化土ブロックを多く含む。小礫を多く含む
2. 褐灰色土 (7.5YR5/1) 褐黄色シルトブロックを多く含む。礫を含む
3. 褐灰色土 (7.5YR5/1) 淡赤色・淡黄色を疎らに含む
4. 黒褐色土 (5YR3/1) 黄褐色土ブロックを含む。4層と8層間で根材残存を確認
5. 明黄褐色砂礫 (2.5Y7/8) 礫・白色粘質土ブロックを含む
6. 黄灰色土 (2.5Y5/1) 礫を多く含む
7. 灰白色土 (7.5YR8/2) 褐黄色シルトを疎らに含む
8. 褐灰色土 (7.5YR4/1) 暗黄褐色シルトブロックを疎らに含む
9. 褐灰色シルト質土 (5YR6/1) 黄褐色土ブロックを含む
10. 明褐灰色土 (7.5YR2/1) 淡黄・淡赤色花崗岩風化土ブロックを含む
11. 暗黄灰色粘質土 (5P4/1) 明褐灰色土を含む

Fig. 261 75T606平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

75T606



75 T606 焼灰色土



*黒い部分は漆膜が残っている部分



(復原図)

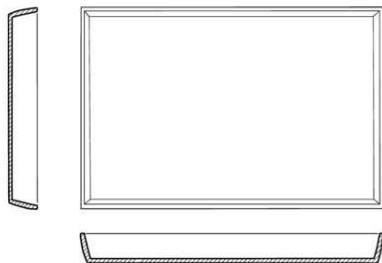


Fig. 262 75T606出土物実測図 (1/3)

の範囲で残存している。

木製品

漆器 (15) 長軸27.2cm, 短軸18.7cmの漆製品である。破片にわずかに木質が残っていることから、素地は木と考えられる。この漆製品の周囲では、幅1.5cmの帯状のものがみられ、これは、漆製品の体部であると考えられる。

埋葬後、土圧で体部がつぶれ床面に押し付けられたものと思われ、復原すると、長軸24cm前後、短軸13.7cm前後、高さ1.5cm前後の「お盆」状の漆製品であると思われる。(Fig.262 右下)

顕微鏡による観察によれば、この漆製品は漆と土を混ぜ合わせた漆地粉を、布着せを施した後、塗り、再度、漆地粉を塗り、これを下地としている。漆層は3層あり、1層目には黒色微粒子を混ぜ合わせた黒色漆を下地の凹凸を埋めるように塗り、2、3層目は透明漆を塗って仕上げているものである。

7ST606褐色土

土師器

坏a×皿a(1) 底部片が出土した。磨耗が著しく調整は不明である。ヘラ切りと思われる。

壺(2) 把手の部分である。扁平な形状を示し、全体的に指押さえて調整している。下面は二次被熱で赤褐色に変色する。

7ST606周辺遺構

7SF608

遺構 (Fig. 263, Pl. 12-58, 13-62-64, 14-65・66)

B地区南西の斜面、AJ21区他の標高46.5mに位置し、主軸をN-6°Eにとる。30°-50°の急斜面に掘削し、地山である花崗岩風化土に「U」字状に溝を掘り、砂礫土を平らに敷設して丁寧に造られた道である。雨水による浸食部に砂礫土を充填している所も見られた。

斜面を平坦にするために掘削した部分は、長さ7.90m、幅1.40mにおよび、調査区南壁にはほぼ直直し、北端から東に0.8m折れる。その先は、後世の浸食等により欠失していた。

砂礫敷設部は長さ7.54m、幅0.41~0.83mで、やや蛇行しつつ硬化面を形成している。緩やかに北に下っており、硬化面の南北の高低差は0.4mほどである。

土層観察A・Bでは、二度の砂礫土補修が見られた。出土遺物は、一回目の砂礫層より土師器破片などが出土した。

なお、中心軸付近に他遺構は検出されなかったが路肩に柱穴2基(7SX602・609)とビット等の遺構が同面で検出された。いずれも、地山である花崗岩風化土壌に掘られている。以下7SF608に関連するとみられる柱穴・ビットについて状況を述べる。

7SX602は、7ST608が北端で東に折れる方向変化点の東側に位置し、硬化砂礫面を切って形成されている。柱穴は、円形を呈し直径0.38m、深さ0.56m、柱痕底面直径0.12mを測る。遺物は出土していない。

7SX609は、7ST608が北端で東に折れる変化点の西側に位置し、硬化砂礫層を切って形成されている。柱穴は、円形を呈し直径0.54m、深さ0.33m、柱痕底面直径0.12mを測る。遺物は出土していない。

7SF608を挟み相対する両柱間は1.20mを測り、この箇所には破砕された遺物が集中し出土している。これらことから考慮すると、墓域と周辺とを分ける境界としての場と考えられる。

その他のビット(7SX499・601・603・604・612・618)は、不規則に傍らにあり、各々の相関性は認められなかった。しかし、これらのビットについては、すべて7SF608の両脇に存在しており、また、変化点部分に集中する。このことから、墓道祭祀や境界などに使う何らかの施設があったことが考えられる。

7ST631

遺構 (Fig. 264)

BG15区に位置し、丘陵裾部から東に抜がる標高36.5m前後の緩斜面に形成された木棺墓である。主軸はN-5°Eにとる。

墓域は、長方形を呈し、長軸1.90m、短軸0.55m、深さ0.20+ α mを測る。土層断面観察と平面観察により、長軸1.76m、短軸0.33m、深さ0.20+ α mを測る棺の痕跡が認められた。

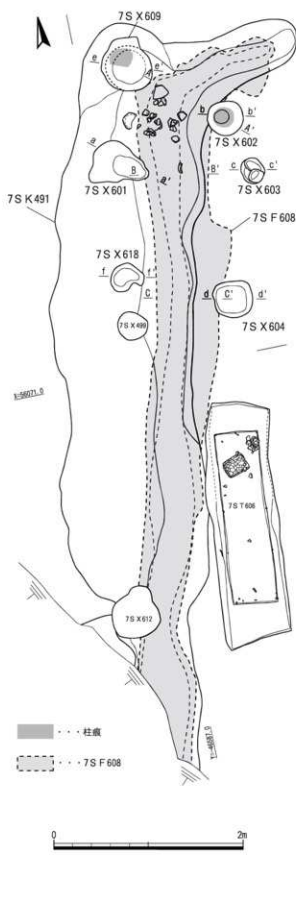
D地区3面目にて検出された遺構であるが、7ST798とはほぼ同じ標高に位置し、墓域の形状・規模がほぼ共通することから木棺墓の一つと考えられる。

遺物は、須恵器・土師器の小片が少量出土しており、土師器の小皿a・bも含まれるが、混入した遺物であると思われる。棺内において鉄釘が1点出土している。

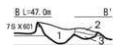
遺物 (Fig. 265, Pl. 44-204・4, 47-212)

金属製品

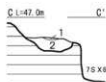
鉄釘(1) 長さ3.7cm、断面は長さ0.7cm、幅0.6cmを測る。頭部は屈曲し、上部から先端部にかけて緩



- 7S F608 A A' 土層
1. 淡黄砂礫 (2.5Y8/4)
鉄分沈着が強い
 2. 淡黄橙花崗岩風化土 (2.5YR7/4)
 3. ぶい黄シルト (2.5Y6/4)
砂礫が多い



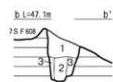
- 7S F608 B B' 土層
1. 淡黄砂礫 (2.5Y8/4)
上・下位に鉄分沈着が強い
 2. 明褐炭シルト質土 (7.5YR7/1)
腐体を含む
 3. 灰褐シルト質土 (7.5YR6/2)
砂礫が多い



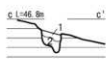
- 7S F608 C C' 土層
1. 灰褐色シルト質土 (10YR6/6)
 2. 淡黄砂礫 (2.5Y8/4)
鉄分沈着が強い



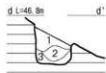
- 7S X601 土層
1. 淡黄褐色シルト質土 (10YR6/2)
磁灰ブロックを散らら含む



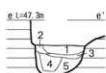
- 7S X602 土層
1. 淡黄色シルト質土 (2.5Y7/2)
灰白色シルト中ブロックが混ざる
 2. 淡黄色シルト質土 (2.5Y7/3)
礫を多く含む
 3. 暗黄色シルト質土 (2.5Y7/4)
灰黄色土ブロックを散らら含む



- 7S X603 土層
1. 灰黄色シルト質土 (2.5Y7/2)
黄褐色シルトブロックを含む
 2. 灰黄褐色花崗岩風化土 (10YR6/2)



- 7S X604 土層
1. 灰褐色シルト質土 (7.5YR6/2)
 2. 淡黄色シルト質土 (2.5Y7/3)
礫を含む
 3. 明黄褐色花崗岩風化土 (2.5Y7/6)
灰褐色土ブロックを含む



- 7S X609 土層
1. 淡黄色花崗岩風化土 (2.5Y7/2)
 2. 淡赤褐色花崗岩風化土ブロックを含む
 3. 暗黄褐色シルト質土 (2.5Y5/2)
しまる
 4. 暗黄褐色シルト質土 (2.5Y5/2)
 5. 明黄褐色花崗岩風化土 (2.5Y7/6)
花崗岩風化土ブロックを含む



- 7S X618 土層
1. 明黄褐色シルト質土 (2.5Y7/6)
砂礫を含む しまる

Fig.263 7ST606・7SF608周辺遺構平面図および土層図 (1/40)

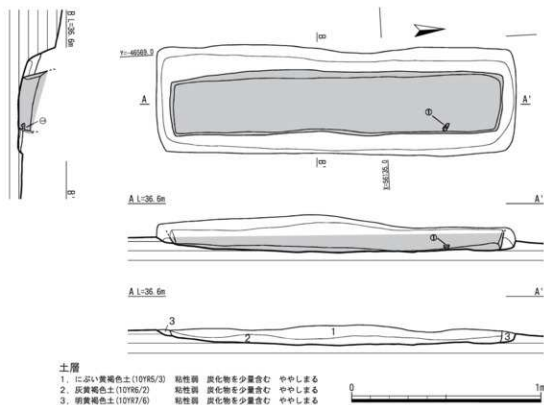


Fig. 264 75T631平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

やかに曲がる。断面方形を呈する。

75T631黄褐色土

須恵器

摺鉢(1) 天井部が出土した。上面には回転ヘラ切り痕が明瞭に残り、刺突痕や格子目はない。流入品である。

75T649

遺構 (Fig. 266)

BF14区他に位置し、丘陵裾部から東に拡がる標高36.0m前後の緩斜面に構築された木棺墓である。棺材は出土していないものの、木棺と思われる腐食土壌の痕跡を確認した。検出当初は、75T649と75SX638が切り合うと考えていた。しかし、同斜面上に構築されていることや、他の木棺墓・土坑墓群との主軸の関係、また、刀子の出土状況や、想定される棺の主軸方向との関係などから、75T649と75SX638が同一遺構であると判断した。主軸はN-15°-Eにとる。墓壙は、隅丸長方形を呈し、長軸 $1.20+\alpha$ m、短軸 $0.87+\alpha$ m、深さ $0.20+\alpha$ mを測る。

遺物 (Fig. 267, Pl. 47-213)

75T649褐色土

金属製品

刀子(1) 鉄製品である。刀身部の長さ8.9cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm、中子の長さ $2.7+\alpha$ cm、幅0.6cm、厚さ0.3cmを測る。

75T631

75T631黄褐色土



Fig. 265 75T631出土遺物実測図 (1/3)

7ST734

遺構 (Fig. 268)

BG15区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.5m前後の緩斜面に形成された木棺墓である。主軸はN-13°-Eにとる。

墓壇は、隅丸長方形を呈し、長軸1.98m、短軸0.84m、深さ $0.35 + \alpha$ mを測る。土層断面において棺の痕跡は確認できなかったが、鉄釘が出土している事から木棺墓であると考えられる。

鉄釘は、墓壇内北東隅・南東隅においては、その方向などからは原位置を保って出土したものと考えられる。一方、北西隅・南西隅では鉄釘の出土状況はまばらで、西側からの土砂流入によって移動したことも考えられる。

墓壇形状および北東隅・南東隅において出土した鉄釘から棺を復原すると、長軸1.52m、短軸0.49m、深さ $0.15 + \alpha$ mを測る。出土遺物は実測に耐えないが、VI期の特徴を有する椀cの破片が出土しており、遺構の埋没時期が大宰府編年のVI期（9c初）以降のものと考えられる。

遺物 (Fig. 269, Pl. 47-214)

金属製品

鉄釘（1～12） 棺材木質が付着する鉄釘は1・2・5・6・8である。それぞれの木質残存範囲は、3.3cm・2.0cm・2.3cm・4.3cm・1.0cmを測る。また、6では2つの棺材の境目が確認でき、木質残存範囲は上から1.8cm・2.5cmを測る。4・11は頭部が屈曲する。

7ST798

遺構 (Fig. 270)

BI15区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高37.0m前後の緩斜面に形成された木棺墓であり最も丘陵裾寄りに位置する。主軸はN-22°-Eにとる。

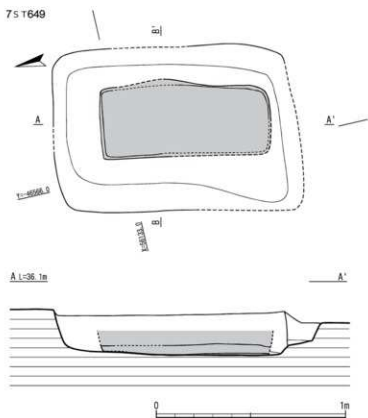


Fig. 266 7ST649平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

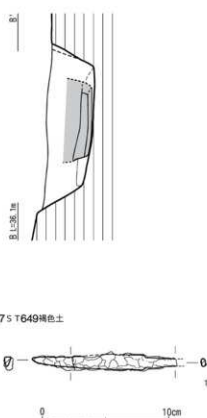


Fig. 267 7ST649出土遺物
実測図 (1/3)

墓壇は、隅丸長方形を呈し、長軸2.24m、短軸0.87m、深さ0.58+ α mを測る。鉄釘が出土している点および土層断面観察による棺の痕跡から木棺を使用していたと考えられる。しかし、出土した鉄釘の方向は不規則であることから、原位置を保っていないと思われる。土砂流入等により移動したと考えられ、棺の規模を復原することは困難である。

遺物は、黒色土器Aの椀が墓壇北端の床面で出土している。複数の破片に割れているが、一個体に接合でき、また、まとまって出土していることから、この遺物はほぼ原位置を保っていると考えられる。副葬品であろう。副葬品により遺構の埋没時期は9c後半～10cと考えられる。

遺物 (Fig. 271, Pl.45-206,47-215・1～6)

黒色土器A

椀(1) 底部から胴部が丸みをもって立ち上がり口縁部は若干外反する。底部と胴部の境は不明瞭である。底部には高台の痕跡が残る。磨耗が著しく椀内の黒色部はほとんど残らない。高台については、ほぼ同時期の椀形態より復元している。

75T734

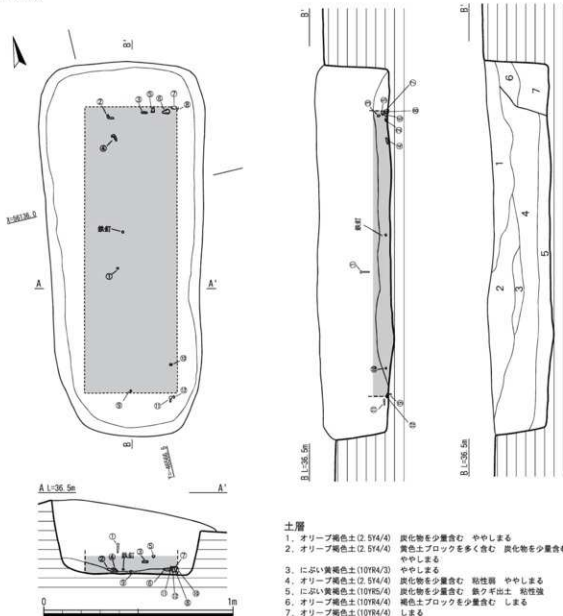


Fig. 268 75T734平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

金属製品

鉄釘（2～7） 棺材の木質が付着する鉄釘は4～6である。それぞれの木質残存範囲は、1.4cm・2.0cm・1.1cmを測る。3は頭部が屈曲する。

7ST807

遺構 (Fig. 272, Pl.15-67・68)

BH14区に位置し、丘陵裾部から東に拡がる標高36.3m前後の緩斜面に形成された木棺墓である。主軸はN-15°Eにとる。

墓壇は、隅丸長方形を呈し、長軸1.30m、短軸0.66m、深さ0.15+ α mを測る。

棺材は残存していないものの、土層断面観察から棺の痕跡と思われる立ち上がりを確認した。鉄釘が出土していることから本遺構は木棺を使用したと考えられる。棺の復原値は、長軸0.91m、短軸0.47m、深さ0.15+ α mを測る。

棺は、小口板・側板の痕跡と思われる箇所を土層断面および平面で確認できたが、底板の痕跡を確認することはできなかった。樹種の違いにより残存状況に差異があるとも考えたが、側板の残りが良好であることから、棺床の材は無かったと考えた。これについては、棺床の材が無い棺の類例に注意したい。

墓壇内において、少量の炭化物が検出されているが、集中する箇所は無くばらである。また、地山中にも少量の炭化物が含まれている。墓壇・棺自体が小さいため、小児用の棺の可能性も考えておく必要がある。

遺物は、棺内北寄りの位置から八稜鏡が出土した。出土状況は、鏡面を上に向け墓壇底に張り付いた状態であった。また、須恵器・土師器片が出土したが混入したものと思われる。

遺物 (Fig. 273, Pl.47-215・7~14, 48-216)

金属製品

鉄釘（1～8） 鉄釘全てに棺材の木質が付着する。1～8の木質残存範囲は、0.6cm・3.8cm・1.6cm・6.2cm・1.2cm・1.0cm・2.7cm・1.1cmを測る。4は鉄釘の上部と下部に付着した木質から棺の部位の違いが見られ、それぞれの木質残存範囲は、1.2cm・5.0cmを測る。1・4・7・8は頭部が屈曲する。

八稜鏡（9） 外区径10.1cm、内区径6.9cm、厚さ0.3~0.4cmを測る。外縁断面は三角形を呈し、鏡背面では文様を区画する段差（外区・内区）が見られる。

外区・内区では、草花文系かと思われる文様が確認できたが、不明瞭である。また、外区の文様位置は、宮ノ本遺跡出土の八稜鏡¹⁾が外縁の花弁形状中央部で確認できるのに対し、本鏡はややずれている。

このような状況から踏み返し鏡であることが分る。

(文責 宇田貝将・大谷伸宏・小石龍信・平島義孝)

7ST734

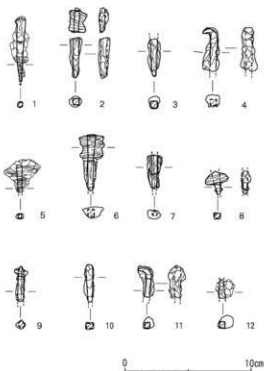
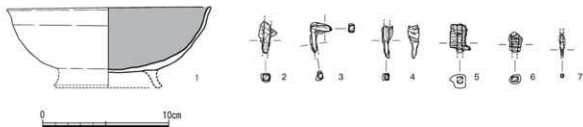
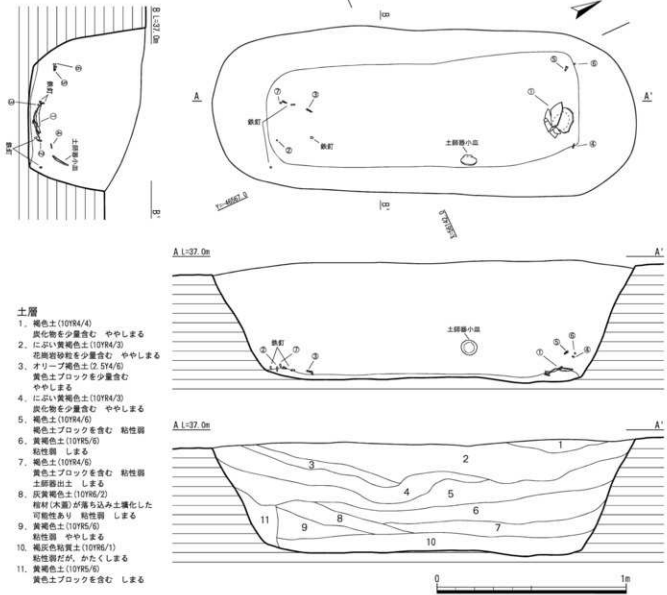
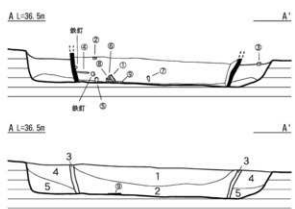
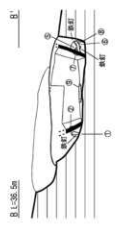
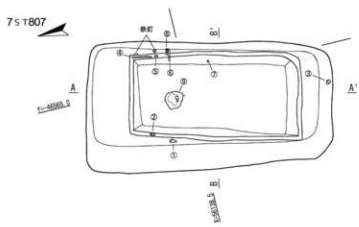


Fig. 269 7ST734出土遺物実測図 (1/3)





- 土層
1. にぶい黄褐色土(10YR5/4)
砂粒・炭化物を少量含む しまる
 2. 黄褐色土(10YR5/6)
灰色砂粒ブロックを少量含む しまる
 3. 黄褐色土(2.5Y5/6)
青銅製品・鉄釘が出土
粘性弱 椀の小口板の痕跡 しまる
 4. 褐色土(10YR4/6)
花崗岩砂粒を少量含む しまる
 5. 褐色土(10YR4/5)
炭化物を少量含む 粘性弱 しまる



Fig. 272 7ST807平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

7ST807

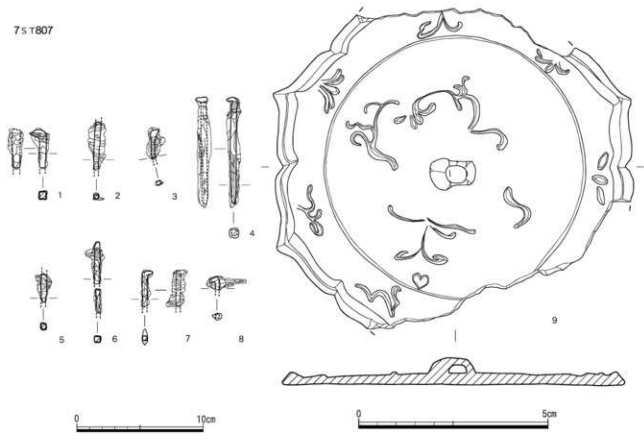


Fig. 273 7ST807出土遺物実測図 (1/1, 1/3)

註1 「太宰府・佐野地区遺跡群 17」の10ST001や、「宮ノ本遺跡II-古墳・墳墓編」の7号墓など。

註2 本書の、「IV 福岡県太宰府市日焼遺跡の考古地磁気調査」(P.313)を参照。

註3 宮ノ本遺跡第7次調査にて出土している。

【参考文献】

太宰府市教育委員会編 1993 「宮ノ本遺跡第7-1次調査」『太宰府・佐野地区遺跡群IV』太宰府市の文化財 第21集

太宰府市教育委員会編 1995 「宮ノ本遺跡第7-2次調査」『太宰府・佐野地区遺跡群V』太宰府市の文化財 第27集

Tab.18 近世以前の墳墓一覧表

※単位はm。1aは推定値。

遺跡番号	種別	墓塚				塚				備考			
		プラン	長軸	短軸	深さ	長軸方向	プラン	長軸	短軸		深さ		
1	7S T030 大塚古	楕円形	0.98	0.49	0.25+a	N-24°-W	楕円形	0.56	0.25	0.17+a	腰骨部	鉄釘出土	
2	7S T020 木塚古	長方形	1.87	0.72	0.35+a	N-80°-W	長方形	1.52	0.43	0.27+a	腰骨部	鉄釘出土	
3	7S T025 大塚古	-	-	-	-	-	円形	-	-	10.9a	腰骨部	腰骨部のみ出土	
4	7S T035 大塚古	-	-	-	-	-	円形	-	-	5.0~5.8	腰骨部	腰骨部のみ出土	
5	7S T263 十塚古	楕円形	1.33	0.62	0.43 1 a	N 25° W	-	-	-	-	-	原所に多数に本塚を定める	
6	7S T059 上塚古	楕円長方形	1.98	0.69	0.35+a	N-4°-W	-	-	-	-	-	-	
7	7S T066 木塚古	長方形	2.34	0.74	0.44+a	N-4°-E	長方形	1.82	0.48	0.23+a	腰骨部	埴輪(陶)	埴輪・土師
8	7S T051 上塚古	楕円長方形	1.99	0.55	0.50+a	N-5°-E	長方形	1.76	0.33	0.29+a	腰骨部	鉄釘出土	
9	7S T049 木塚古	楕円長方形	1.20+a	0.67	0.50+a	N-15°-E	長方形	0.81	0.41	0.07+a	腰骨部	鉄釘出土	
10	7S T074 上塚古	楕円長方形	1.98	0.84	0.35+a	N-13°-E	長方形(墓室)	1.52	0.49	0.15+a	腰骨部	鉄釘出土	
11	7S T098 木塚古	楕円長方形	2.24	0.87	0.58+a	N-22°-E	長方形(墓室)	1.07+a	0.43+a	-	-	-	鉄釘出土 灰層出土
12	7S T067 木塚古	楕円長方形	1.70	0.66	0.15+a	N-15°-E	長方形	0.81	0.47	0.15+a	腰骨部	埴輪(陶)	九塚遺跡出土 鉄釘出土

Tab.19 掘立柱建物一覧表

※単位はm

遺跡番号	南北(m)	東西(m)	前行	後行	北軸方向	備考	
1	7S R005	6.72	2.60	3間	1間	N 45° E	b c dに柱礎が残る
2	7S R043	3.00	2.66	1間	1間	N-38°-E	aに柱礎が残る

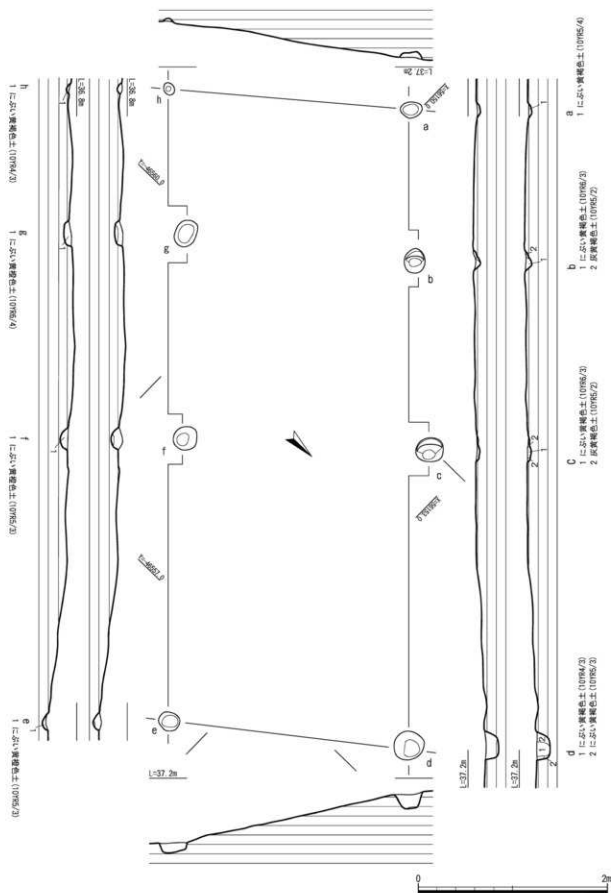


Fig. 274 75B035平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

3) 掘立柱 物

7S B035

遺構 (Fig. 274)

D地区北側BL13区他に位置する。1×3間の掘立柱建物で、梁行2.50m、桁行約6.72m、面積約17.58㎡を測る。主軸方向は、N-45°-Eである。

柱穴の間隔は、b-c・f-g間と比較して、c-d・e-f間は広く、a-b・g-h間は狭い。それぞれ間隔は、約2.10m、約3.04m、約1.60mである。また、a-d・e-h間とh-a・d-e間は直交しないが、柱穴内の埋土の土色がほぼ共通するため一つの遺構として捉えた。柱穴hは他の柱穴より小規模である。したがって、柱穴a・hは庇等の付帯施設の柱穴である可能性も考えられる。遺物は、柱穴dから鉄滓、柱穴fから須恵器が出土した。

7S B040

遺構 (Fig. 275)

D地区中央よりやや北側BK14区他に位置する。1×1間の掘立柱建物で、柱穴間は約2.6～約3.0mあり、面積は約8.4㎡を測る。主軸方向は、N-38°-Eである。やや歪な平面形態を呈するが、柱穴内の埋土が褐色土あるいは橙色土とほぼ共通することから、一つの遺構として捉えた。遺物は、柱穴dから須恵器蓋や鉄滓が出土した。

(文責 平島義孝)

7S B040

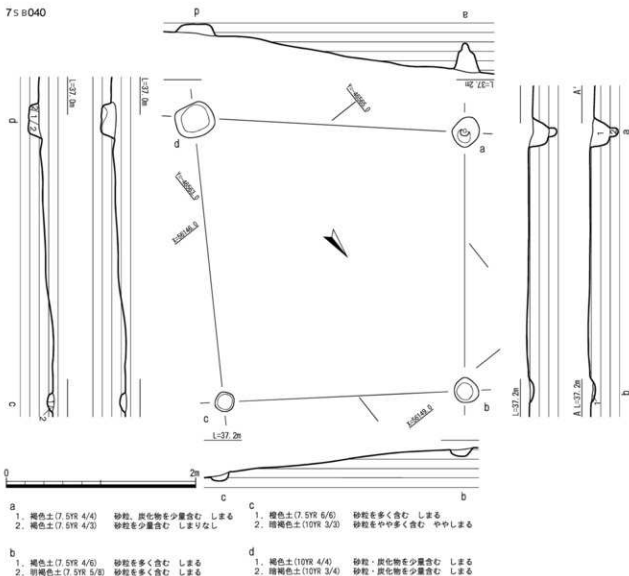


Fig. 275 7SB040平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

4) 窯

7SX105

遺構 (Fig. 277, Pl. 17-77・78)

7SX105は、C地区の調査区を拡張した際に新たに見つかった須恵器窯である。

C地区上段南側斜面のAB15区他で検出し、標高39m付近に位置している。窯上半部は著しく削平を受けた状態で検出され、前庭部と焚き口から焼成部の窯床面および窯壁面の一部を残すのみとなっていた。

主軸方向はN-75°-Wを測り、全長2.88+ α m、最大幅0.69m、残存床面傾斜角21°である。

窯本体は勾配のある斜面にあったが、焚き口付近を境にして前庭部側へは平坦な立地であった。灰原は窯主軸方向においては、確認できなかったが、北側に接する7SK110は本窯の廃棄に関連する遺構と思われる。以下、窯の各部を詳述する。

① 焚き口・前庭部

焚き口は幅0.65mでその幅のまま前庭部へ続くと考えられるが、調査の過程において平面図の情報を欠失した。貼り床は残存せず、窯の再構築あるいは製品の取り出し時に破壊された可能性が考えられる。

また、平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.10m、短軸0.65mを測る前庭部土坑を検出した。西側の土坑の立ち上がりは窯床硬化面の下位に至る。底面が硬化したような状況は見られなかったが、土坑底面にて焼土(5層)が見られた。遺物は、床面直上にて須恵器蓋・坏・皿が出土した。大宰府編年III期に帰属する遺物が出土している。

② 燃焼部

床面東端部付近において著しく破損している範囲があり、その範囲が燃焼部と考えられる。F土層の1層が貼り床面と考えられ、表面は被熱により著しく劣化していた。長さ0.46m、残存幅0.63m、傾斜角9°を測る。

③ 焼成部

焼成部から立ち上がる部位をさす。残存長1.12m、残存幅0.68m、傾斜角32°を測る。最も削平を受けていた部位ではあるが、窯床面の補修痕が検出された。これについては別項にて詳述する。

④ 奥壁・煙道部

削平されており、残存していなかった。

⑤ 灰原

前庭部より東側では灰原が確認できなかった。しかし、7SX105の北隣に位置する7SK110からは7SX105とほぼ同時期の遺物が出土しており、本窯の廃棄の場であったと考えられる。

7SX105窯床面の補修痕について (Fig. 279, Pl. 18-79)

残存焼成部の上半で検出された。最大長31.5cm、最大幅30.5cmを測る。厚さは不明である。

窯体と同材質の補修材(粘土)を最低5枚は貼り付けてある(図中の①~⑤)。その表面には補修者の手形や右足形が多数残っており、確認できた貼り付け方には、掌によるタクキ、指によるタクキおよびオシ、右拳外面によるタクキ、右足つま先によるオシが認められる。

右拳外面によるタクキが他とは違う方向からひとつだけ施され、右足型も手によるタクキ等とは違う方向から施されたものであることから、複数人で補修した可能性もある。

また、窯本体の規模から考えると、窯天井部が存在する状態では天井が低いため、作業を行う際は立って足型をつけることは不可能である。従って、この補修は窯天井部が存在しない状態で行われたと推察する。

ところで、補修材間の段差をなくすためナデが施されている部分も一部確認できたが、全体的に見ると、雑な補修であると言え、窯床の破損箇所の被覆のみを目的とした補修であったと考えられる。

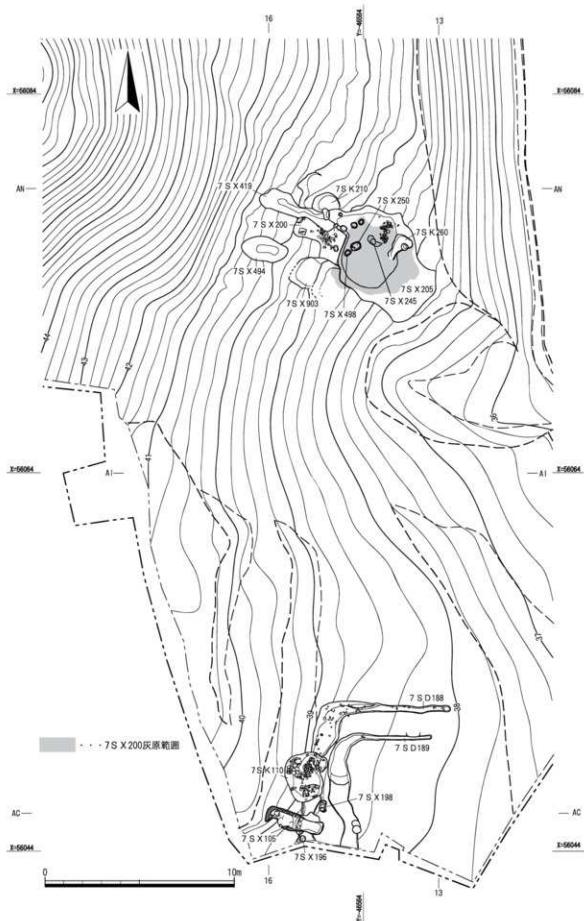


Fig.276 7SX105·200周边地形测量图(1/200)

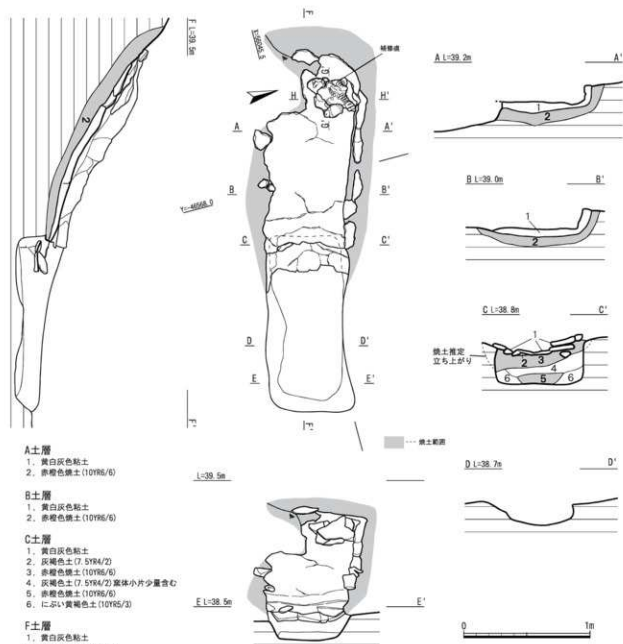


Fig. 277 75X105平面図・土層図および断面見通し図(1/30)

遺物 (Fig. 278, Pl. 49-220)

75X105灰褐色土

須恵器

蓋c 3 (1) 天井部につまみ貼り付けナデが確認できる。口縁端部は小さいがしっかりした断面三角形の肥厚部をもつ。天井部はへら切り痕を顕著に残す。

坏c 3 (2) 底部から稜を持って胴部が立ち上がる器形で、断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられる。

皿a (3) 底部と胴部の境に稜を持ち、胴部は短く口縁部が外反気味に立ち上がる器形である。へら切りである。

75x105灰褐色土

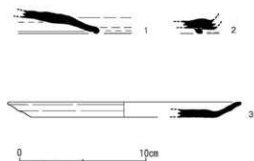


Fig. 278 75X105出土遺物実測図(1/3)

7S X105補修痕跡

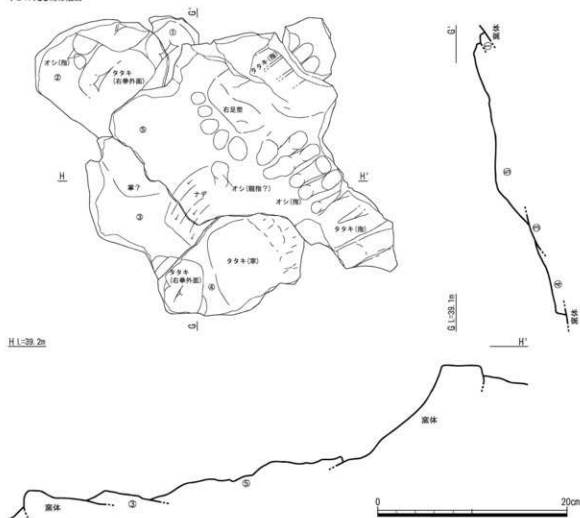


Fig. 279 7SX105補修痕跡実測図 (1/4)

7S X105周辺遺構

7SK110

遺構 (Fig. 280・281, Pl.18-80・81)

AC14区他の7SX105の北隣で検出された。平面形は不整形で長軸2.60m、短軸1.92m、深さ1.04mを測る。焼き損じて歪みのある須恵器の蓋や坏、さらには窯体片や焼台等、窯に関連のある遺物が多量に出土しており、7SX105に伴い造られた廃棄土坑と考えられる。

土層断面および遺物出土状況から大別して2層群見られる。

ここでは、便宜上、下層を黒灰色土群で、上層を黄灰褐色土群で大別して説明したい。

黄灰褐色土群

土層断面図の1・2層を指す。全体に炭化物を含むが量はわずかである。大量の須恵器蓋・坏が一部は折り重なった状態で出土し、ほぼ全てに歪みが見られ、破損しているものも多かった。

また、多量の窯体片および焼台とともに土師器甕・椀、製塩土器等も出土した。

出土遺物は大宰府編年Ⅲ期(8c中)を主体としている。

遺物 (Fig. 282, Pl.49-222, 50-223)

7SK110黄灰褐色土

須恵器

小蓋3 (1) つまみは不明である。口縁端部は小さいがしっかりした断面三角形の肥厚部を持つ。天井部は回転ナデが施される。

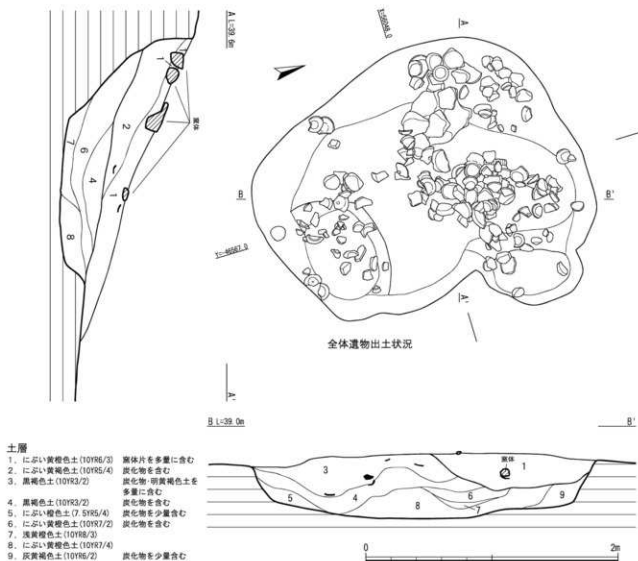


Fig. 280 7SK110平面図・土層断面図 (1/30)

蓋c 3 (2・3) 2のつまみは高いボタン状を呈し、天井部に回転ヘラケズリはない。3は扁平なボタン状を呈し、回転ヘラケズリが施される。口縁端部は2・3とも大きくしっかりした断面三角形の肥厚部を持つ。3は復原口径18.8cmを測り、7SK110の中では大型の蓋である。

坏a 2 (4) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。底部は平坦面をなす。軟質である。

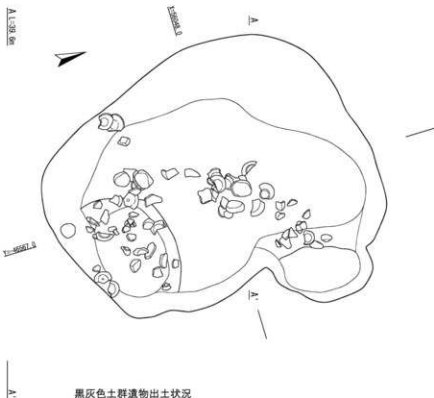
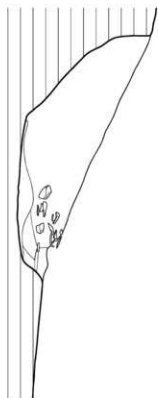
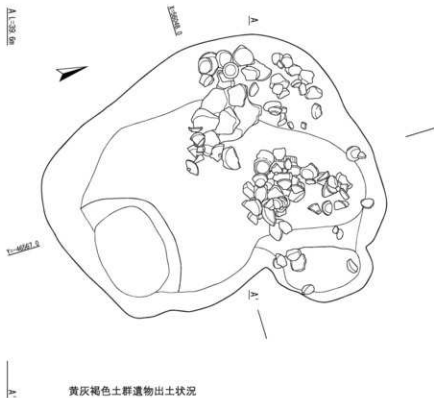
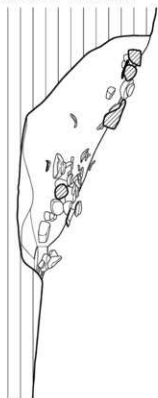
坏c 3 (5) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられる。ヘラ切りである。

坏c 2 × 3 (6) 底部と胴部の境に回転ヘラケズリが見られ、口縁部が直立する器形である。断面四角形の低高台がヘラケズリ部に貼り付けられている。軟質である。

碗c (7) 底部と胴部の境に不明瞭な稜を持ち、胴部が長く直立する器形である。底面に断面四角形の低高台を貼り付けている。坏c 3と同様の特徴を持つが、口径が大きく深い形態である。

皿a (8~11) 底部と胴部の境に稜を持ち口縁部が短く立ち上がる器形である。8のみ底部と胴部の境は丸みを帯び、稜は不明瞭である。9は復原口径18.7cmを測り、7SK110の中で大型の皿である。9・10は軟質である。回転ヘラ切りが見られる。

7SK110上層・下層遺物出土状況



0 2m

Fig. 281 7SK110上層・下層遺物出土状況図 (1/30)

把手(12) 先端部上面にやや広い平坦面を有し、下面は丸みを帯びる。壺cの把手と思われる。

土師器

甕a(13) 口縁部が外反する器形を呈する。外面には縦方向のハケ目で、内面にはヘラケズリが施される。

製塩土器

製塩土器? (14) 色調は赤褐色を呈し内面に粘土紐をはり合せた痕跡が見られる。調整は内・外面とも見られない。製塩土器と考えればII-b類の可能性が高いと思われる。

焼台

焼台(15-18)

須恵器焼成時に使用されたもので、材質は窯体と同じものを用いたと思われる。全体的によく焼きしめる。15は最大高11.7cm、最大幅12.0cm、断面形状は隅丸三角形、器体設置面と窯床接地面との角度は50.5°を測る。16は最大高4.9cm、最大幅9.5cm、断面形状は不整形、器体設置面と窯床接地面との角度は6°を測る。17は最大高9.6cm、最大幅9.7cm、円形状のくぼみの最大径3.0cm、深さは1.0cm、断面形状は隅丸三角形、器体設置面と窯床接地面との角度は49.0°を測る。一部還元され、青灰色土に変色した部位が見られる。

18は最大高4.9cm、最大幅13.0cm、断面形状は隅丸三角形、円形状のくぼみの最大径3.0cm、深さ0.6cm、器体設置面と窯床接地面との角度は25.0°を測る。焼台の体部には焼台成形時、もしくは焼台設置時のものと思われるユビオサエの痕跡が観察される。焼台上面は須恵器を設置するため平坦に成形され、17・18のように平坦面の中央に円形状にくぼませたものも見られた。これは須恵器蓋のつまみをこのくぼみにはめてこんで焼成していた可能性を示す。

また、焼台の器体設置面と窯床接地面との角度を考えると、15・17は窯焼成部の比較的奥壁に近い部分に設置され、16・18はそれぞれとは対照的に燃焼部に近い部分に設置されたと考えられることができる。

黒灰色土群

土層断面図の3～9層を指す。全体に炭化物を多く含み、大量の須恵器蓋・坏が出土し、いずれも歪みがあり、破損しているものであった。焼台も2点出土しているが、窯体片は出土していない。

窯作業時、須恵器の焼き上がり後に窯内に残った燃料材の燃えかすや焼き損じた須恵器、破損して使えなくなった焼台などを廃棄したものであると考えられる。また7SK105窯周りに灰原が確認できなかったのは、窯から出た灰を窯外に掻き出すのではなく、こうした土坑に直接廃棄していたことも想定し得る。

遺物は、黄灰色土群出土遺物と比較して、特に古い様相は見られず、ほぼ同時期の遺物(大宰府編年のIII期)が出土している。

遺物 (Fig. 283・284, Pl. 49-221)

7SK110黒灰色土

須恵器

蓋c(1～3) 1・2は高く、3は扁平なボタン状を呈するつまみが天井部に貼り付けられる。しっかりと断面三角形の肥厚部を有するが、1・3は小さく、2は大きい。天井部には回転ヘラケズリが施されず、ヘラ切りの痕跡が見られる。3は復原口径18.2cmを測り、7SK110の中で大型の蓋である。

蓋3(4) つまみの形状は不明である。口縁端部は小さいがしっかりと断面三角形の肥厚部を持つ。天井部に回転ヘラ切り痕を残す。

小坏(5) 推定口径11.6cmを測る。体部中位から口縁部にかけて直立し、下位に丸みを帯びる器形である。口縁部が若干外反する。

坏a2(6) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。底部は平坦面ではヘラ切り後にナデが施され、板状圧痕が見られる。

坏c3(7) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられる。高台下面の数箇所に工具痕と思われる凹みが見られる。ヘラ切りである。

坏×蓋(8・9) 未分類資料である。胴部は短く丸みを持って立ち上がる器形を呈する。

坏a2(10) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。底部は平坦面をなす。ヘラ切りで、軟質である。

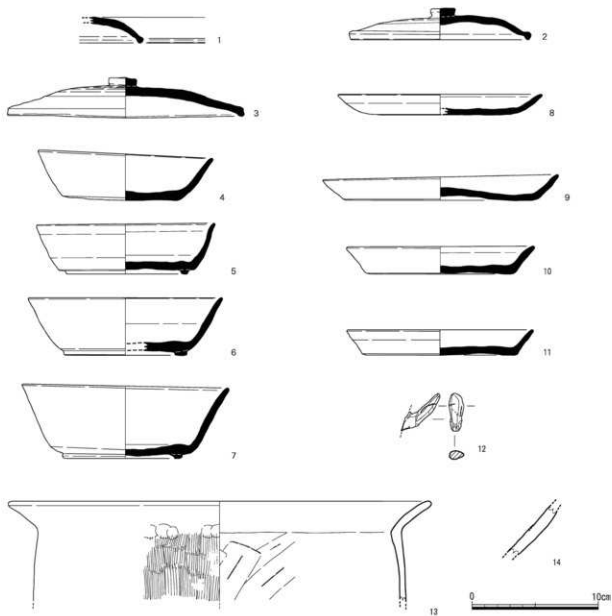


Fig. 282 7SK110出土遺物実測図(1)(1/3)

7SD188

遺構 (Fig. 285, Pl.18-82)

AB15区他で検出された「L」字形の溝である。残存長14.18m, 最大幅1.34m, 深さ0.16mを測り, 南側の調査区外へと続く。本遺構は, 西側から延びる丘陵裾部に位置しており, 7SX105の燃焼部付近から北側に走り, そこから標高の低い東側へと直角に折れ曲がっている。遺物は須恵器の蓋c3, 坏c3が出土しており, 7SX105とはほぼ同時期と思われる, 7SX105および7SK110に付帯する室外排水溝と考えられる。また, 7SX105の東側には平坦面が見られるが, その平坦面を囲むように「L」字状に曲がっており, 平坦部分への雨水の浸入を防ぐ機能も有していたと思われる。

遺物 (Fig. 286, Pl.50-224・1~9, 51-229)

7SD188黒赤色土

須恵器

蓋c3 (1) つまみは扁平なボタン状を呈する。口縁端部は大きくしっかりした断面三角形の肥厚部を

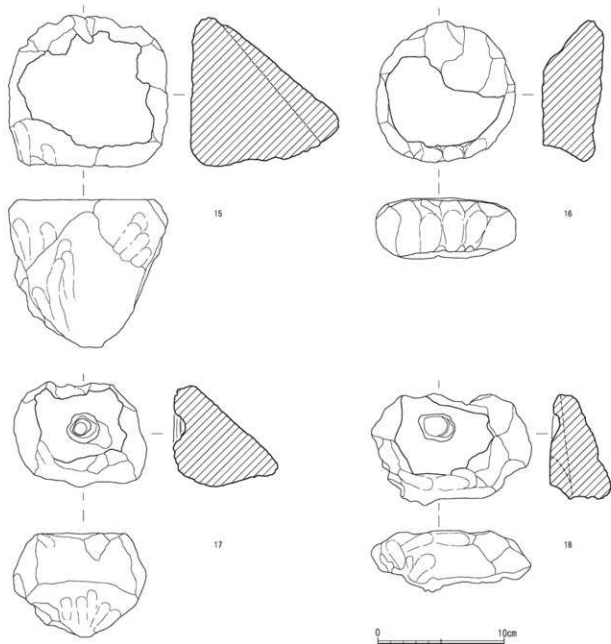


Fig. 283 75K110出土遺物実測図(2)(1/3)

持ち、内面に稜が見られる。天井部は回転ナデが施される。全体的に扁平な形態である。

坏a 2 (2) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。底部は平坦面をなす。ヘラ切りである。

坏c 3 (3) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられる。ヘラ切りである。

小坏c 3 (4) 復原口径11.6cmを測る。底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられる。

皿a (5) 底部と胴部の境に稜を持ち、体部が外に開く器形である。底面が稜よりわずかに突出する。ヘラ切りである。

壺b (6) 底部から丸みを持って胴部が立ち上がる器形である。外面に回転ヘラケズリが施される。高台は底部と胴部の境に施された回転ヘラケズリ部に貼り付けられる。内面は球形でロクロ目を強く残す。

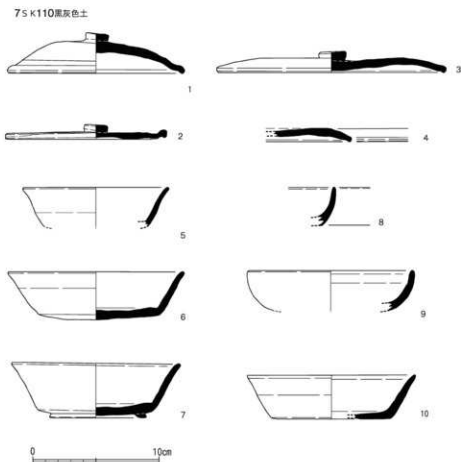


Fig. 284 7SK110出土遺物実測図(3)(1/3)

土師器

蓋×鉢(7) 胴部片が出土した。外面は縦方向のハケ目が施される。把手は指頭圧による調整のみ施されている。

金属製品

鉞(8) 長さ8.6+αcm, 断面は直径0.7cmを測る。頭部が「L」字に曲げられている。

7SD188にふい黄橙色土

須恵器

小蓋c3(1) 復原口径11.6cmを測る。つまみは扁平なボタン状を呈する。口縁端部は大きい断面三角形の肥厚部を持つが、端部は不明瞭である。天井部に回転ヘラケズリは施されない。

壺b(2) 肩部片が出土した。鈍角に屈曲する器形であるため、長頸壺と思われる。

7SD189

遺構 (Fig. 285, Pl. 18-82)

AB14区他で検出した。7SD188の東側を併走する「L」字形の溝である。残存長10.70m, 最大幅1.06m, 深さ0.20mを測り, 調査区南側へと延びている。出土遺物は, 蓋c3が出土しており, 7SX105とほぼ同様の時期と思われる, 室外排水溝と考えられる。

また, 7SD188との切り合いがなく両者の先後関係は不明であるが, 7SD188と同様に7SX105の東側の平坦部分への排水も兼ねていたものと思われる。

遺物 (Fig. 287, Pl. 50-224・10)

7SD189にふい黄褐色土

須恵器

蓋c3(1) つまみはないが貼り付けに伴う回転ナデが見られる。口縁端部は大きくしっかりした断面

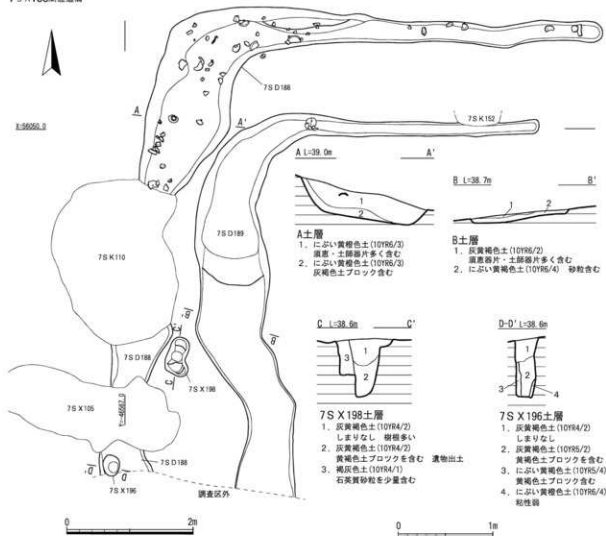


Fig. 285 7S X105関連遺構実測図・土層図 (1/40, 1/60)

三角形の肥厚部を持ち、内面に稜が見られる。

7S X196

遺構 (Fig. 285)

AB15区で検出した。平面形は不整形円形の柱穴である。長軸0.31m, 短軸0.25m, 深さ0.62mを測る。断面にて幅0.12mの柱痕が見られる。柱材は残存していなかった。遺物はⅢ期(8c中)以降の須恵器蓋3の小片が出土した。

7S X198

遺構 (Fig. 285)

AC14区他で検出した。平面形は不整形の柱穴である。長軸0.61m, 短軸0.31m, 深さ0.60mを測る。明確な柱痕は確認できなかった。柱材は残存していない。

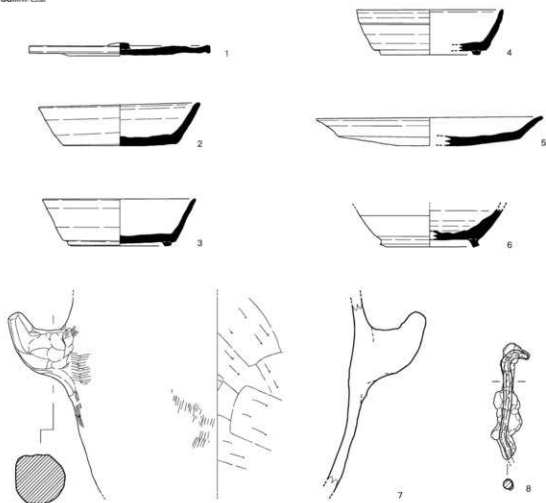
遺物 (Fig. 288, Pl. 50-224・11・12)

7SX198灰黄褐色土

須恵器

蓋c 3 (1) つまみはないが貼り付けに伴う回転ナデが見られる。口縁端部は大きくしかりした断面

7SD188黒赤色土



7SD188にぶい黄褐色土



Fig. 286 7SD188出土遺物実測図 (1/3)

7SD189にぶい黄褐色土



Fig. 287 7SD189出土遺物実測図 (1/3)

7SX198灰黄褐色土



Fig. 288 7SX198出土遺物実測図 (1/3)

三角形の肥厚部を持ち、内面に稜が見られる。天井部へラ切り後に回転ナデが施される。

環c3(2)底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられる。へラ切りである。

7S X200

遺構 (Fig. 289, Pt. 18-83, 84, 19-87, 88, 20-89)

須恵器を焼成した窯で、B地区の南側斜面AL15区他、標高38~40mの地点に位置している。表土の除去直後は窯体の一部が平面逆「U」字状に見られ、窯周辺の崩落土の除去にともない焚き口と燃焼部から焼成部にかけての一部を検出した。

主軸方向はN-62°-Wを測り、全長2.62+ α m、最大幅1.01m、床面傾斜角度最大61°である。窯内土層は7層あり、土質により上層・下層の2層に大別される。

上層は花崗岩風化土層で、窯内だけでなく窯外の斜面にも拡がることから上の斜面から流入した土である可能性が高い (Fig. 289, 1~3層)。1・2層には窯体片は出土しておらず、既に窯が崩落した後で堆積したと思われる。3層からは窯体片が出土しており、窯が完全に崩壊する前に堆積していた可能性がある。

下層は粘質土層で、窯が放棄された後で堆積した層と思われる (Fig. 289, 4~8層)。4層は窯外に延びており、5~8層は焚き口付近までしか延びていない。5層には比較的大きい窯体の塊が出土しており、7層の焚き口付近から焼台や完形に近い須恵器が出土している。

① 焚き口・前庭部

焚き口の幅は0.64mで、いったん焚き口付近で狭まるが前庭部に至って最大幅1.64mと大きく開く。前庭部から7SX205の間には0.14mの段がある。

焚き口から前庭部にかけて焚き口両袖の壁面があり、還元面は見られないが、硬化していた。これは、この付近まで熱の影響を受けていたことを示していると考えられる。

② 燃焼部

焚き口から傾斜面までの部位をさす。床面長は0.36m、床幅0.74m、床面の傾斜角は11°である。傾斜面への変換点の周辺に遺物が集中して出土している。焼成部から落ちた遺物と思われる。大宰府編年III期に帰属する遺物が出土しているが、蓋の天井部回転へラケズリが認められないなど、新しい様相も見られる。

③ 焼成部

床面長は1.40m、最大傾斜角61°で上部に行くほど傾斜が急になる。床面には焼台を設置したくぼみが3列に並んで検出された。また1箇所、焼台が原位置で出土している。

④ 奥壁・煙道部

窯尾と思われる床の屈曲部が認められたが、煙道部などは削平のためか確認できなかった。

⑤ 灰原 (7SX205, Fig. 291, 4, 15, 19, 21層)

7SX205と設定して調査を行った。炭化物が見られる層は4層 (14・15・19・21層)あり、そのうちの3層 (14・15・21層)は局所的な拡がりであったが、これら4層が灰原と考えられる。主に須恵器が出土した。

14・15層の灰原を掘削していくと、19層が広範囲に堆積しており、その上面から切り込む形で7SX250、7SK260が検出された。7SX250内からは、須恵器蓋c3等の遺物が少量出土した。また、同面上では焼土範囲も検出されており (7SX245)、さらに、18層の掘削中に、7SX245の北側から多量の焼台片を含む土器溜まり (7SX255)も検出された。その後、19層を掘削した後に、窯燃焼部の東側あるいは北東側から、7SX498やピット群が検出された。

これらのことから、窯操業開始後、灰原がある程度堆積した後に、7SX250や7SK260が形成され、その後、再び、窯を操業して灰を廃棄している状況が窺える。

また、7SK260を完掘後に、小規模ではあるが、焼土範囲 (7SX265)も検出された。

遺物は、大宰府編年III期 (8c中)以降の時期のものがほとんどであり、窯内出土遺物の時期と概ね一致する。

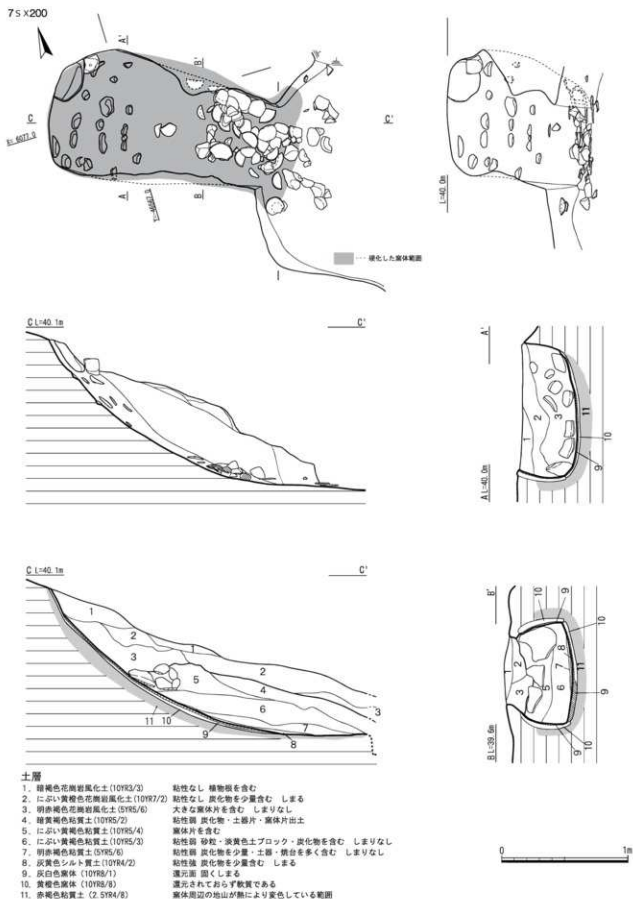


Fig. 289 7SX200平面図・土層図および断面見通し図 (1/30)

遺物 (Fig. 290, Pl. 50-225)

7SX200明赤褐色土

須恵器

蓋c 3 (1・2) つまみは扁平なボタン状を呈する。口縁端部は大きい、端部の不明瞭な断面三角形の肥厚部を持つ。天井部はヘラ切り後回転ナデが施される。

坏c 3 (3) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられる。ヘラ切りである。

皿a (4) 底部と胴部の境に稜を持ち、胴部は短く口縁部が外反気味に立ち上がる器形である。ヘラ切りである。

7S X200周辺遺構 (Fig. 291)

7SX200の左右には7SX419・494が検出されている。これらはいずれも浅く、性格は不明である。土層で検証した結果、7SX419は7SX200を覆った崩落土の上から切り込まれているため窯との直接的な関係はないと判断した。

他に、焚き口の南側には焼台を含むピット (7SX496) が、そして7SX419の東側には炭化物が入った土坑 (7SK210) が確認された。

また、炭化物がつまったピット (7SX250) と、その東側では焼土が広がっている箇所 (7SX245) および土器溜まり (7SX255) が見られた。さらに、7SX245の東側には不整形の土坑 (7SK260) が見られた。

これらの遺構の性格は不明であるが、7SX245・250・7SK260は灰原上に存在することから、窯の操業当初にはなかったものと考えられる。

土坑

7S K210

遺構 (Fig. 293, Pl. 18-85, 86)

7SX200の北側で検出された。直径1.50mの円形の土坑である。埋土に多く炭化物を含んでいた。性格は不明である。

7S K260

遺構 (Fig. 291)

7SX200の東側、灰原を切って (Fig. 291, 19層) 検出された。長軸1.30mの不整形の土坑である。

その他の遺構

7S X205出土遺物 (Fig. 292, Pl. 51-226)

7SX205灰黄色土

須恵器

蓋c 3 (1・2) つまみは扁平なボタン状を呈し、1は口縁端部に大きくしっかりした断面三角形の肥厚部を持つ。2は口縁端部に大きい三角形だが端部の不明瞭な肥厚部を持つ。天井部は回転ナデが施され

7S X200明赤褐色土

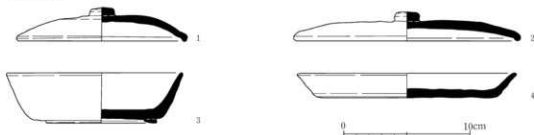


Fig. 290 7SX200出土遺物実測図 (1/3)

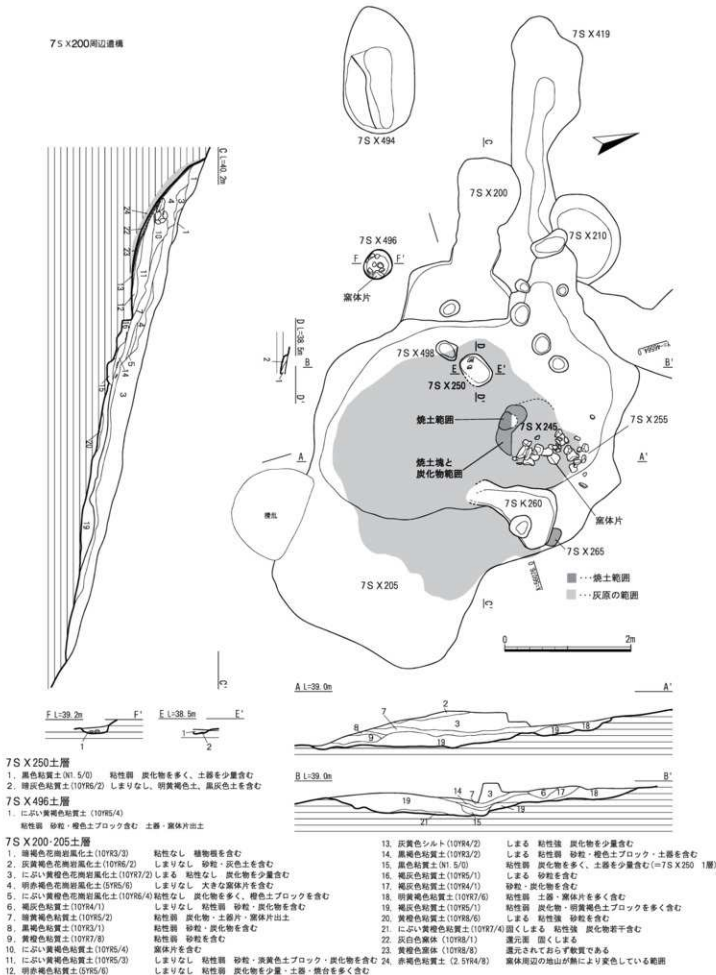


Fig. 291 7SX200および周辺遺構平面図・土層図 (1/60)

る。

坏a 2 (3) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。底部は平坦面をなしている。

坏c 3 (4) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられる。底面はへら切り後に回転ナデが施され、板状圧痕が見られる。

皿a (5) 底部と胴部の境に稜を持ち、胴部は短く口縁部が外反気味に立ち上がる器形である。底面が稜よりわずかに突出する。へら切りである。

7SX205暗黒褐色土

須恵器

蓋c 3 (1) つまみは高いボタン状を呈する。口縁端部は大きいが端部の不明瞭な断面三角形の肥厚部を持つ。天井部はへら切り後に回転ナデが施される。

皿a (2) 底部と胴部の境に稜を持ち、胴部は短く口縁部が外反気味に立ち上がる器形である。へら切りである。

7SX205黒色土

須恵器

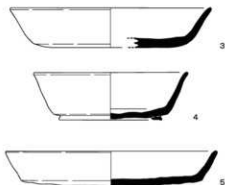
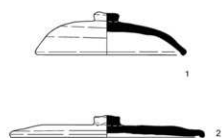
蓋 3 (1) つまみの形状は不明である。口縁端部は小さいがしっかりした断面三角形の肥厚部を持つ。天井部は回転へらケズリが施される。

7SX205褐灰色土

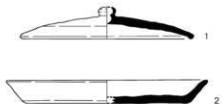
須恵器

皿a (1) 底部と胴部の境に稜を持ち、胴部は短く口縁部が外反気味に立ち上がる器形である。へら切りである。

7S×205灰黄色土



7S×205暗黒褐色土



7S×205黒色土



7S×205褐灰色土



0 10cm

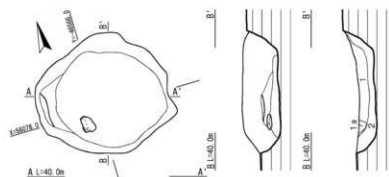
Fig. 292 7SX205出土遺物実測図 (1/3)

7S X245

遺構 (Fig. 291)

7SX200の東側、灰原 (Fig. 291 19層) 上面から掘り込まれた形で検出された。長軸0.28mの不整形を範囲として、焼土範囲や焼土塊、焼土が広がる範囲が見られることから灰原上で火が焚かれた状況が考えられる。遺物は出土していない。

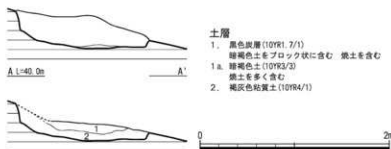
7S X210



7S X250

遺構 (Fig. 291)

7SX200の東側、灰原を切って (Fig. 291, 19層) 検出された。直径0.54mの楕円形プランをしており、埋土は炭化物を多く含んだ黒色土である。性格は不明である。



土層

1. 黒色炭層 (10R1, 7/1)
暗褐色土をブロック状に含む 焼土を含む
- 1.a. 暗褐色土 (10R2/2)
焼土を多く含む
2. 褐色粘質土 (10R4/1)

7S X255

遺構 (Fig. 291)

7SX200の東側、灰原を切って (Fig. 291, 19層) 検出された土器溜まりである。明確なプランはなく、土器溜まりを構成する多くが焼台・窯体片で占められるのが特徴である。

遺物 (Fig. 294, Pl. 51-227・1・4)

7SX255明黄褐色土

須恵器

皿a (1) 底部と胴部の境に稜を持ち、胴部は短く口縁部が外反気味に立ち上がる器形である。底面が稜よりわずかに突出する。ヘラ切りである。

焼台

焼台 (2) 須恵器焼成時に使用されたもので、材質は窯体と同じものをを用いたと思われる。全体的によく焼きしめる。最大高7.1cm, 最大幅11.5cm, 断面形状は台形状である。器体設置面と窯床接地面との角度は3°を測る。体部中ほどで粘土継ぎ足し痕が残り、焼台成形時、もしくは焼台設置時のものと思われるユビオサエの痕跡も観察された。床接地面と遺物設置面との角度はほとんどなく、燃焼部に近い部分に設置していた可能性がある。

7S X255明黄褐色土

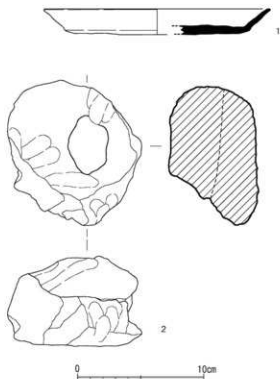


Fig. 294 7SX255出土遺物実測図 (1/3)

7S X265

遺構 (Fig. 291)

7SK260に南西側を切られた状態で検出した焼土範囲である。灰原のおよぶ範囲外ではあるが窯に関係している可能性も考えられる。

7S X419

遺構 (Fig. 291)

7SX200の北側で検出された。深さは10~30cmで、埋土は褐色土の1層のみであった。土層断面観察においては、窯との関係についての詳細は不明であった。

遺構の埋没時期は、出土遺物から大宰府編年VIA期(9c初)以降と考えられる。

遺物 (Fig. 295, Pl.51-228・1)

7SX419黒褐色土

土師器

坏a(1) 底部と胴部の境に不明瞭な稜を持ち、胴部は外へ直線的に開く器形である。底面が稜よりわずかに突出する。ヘラ切りである。ヘラケズリ・ミガキは見られない。

7S X494

遺構 (Fig. 291)

7SX200の南側で検出された。長軸2.04mの楕円形プランである。窯のすぐそばに位置していることから、窯に関連した遺構の可能性も考えられるが、性格は不明である。遺物は出土していない。

7S X496

遺構 (Fig. 291)

7SX200の焼き口の南側で検出された。直径0.46mの円形のピットである。深さは10cm程度で、焼台と須恵器片が多く出土している。性格は不明である。

7S X498

遺構 (Fig. 291)

16層下から検出されたピットである。前庭部東側の段差下にあり、窯に伴うピットの可能性がある。埋土は褐色土の一層のみである。遺物は出土していない。

7S X903

遺構 (Fig. 276)

7SX200の南側で検出された。樹根により攪乱をうけているものの、斜面を削って段差を設けている状況がうかがえる。

上段は幅1.4mほどの平坦面があり、下段は、7SX200の前庭部に続く。遺物は上段で須恵器片が出土している。

窯に付属した作業場としての空間や燃料の炭を置いておく場の可能性も考えられる。

遺物 (Fig. 296, Pl.51-228・2)

7SX903暗灰色土

須恵器

皿a(1) 底部と胴部の境に稜を持ち、胴部は短く口縁部が反外気味に立ち上がる器形である。ヘラ切りである。

(文責 黒木正行・宇田貞将)

7S X419黒褐色土

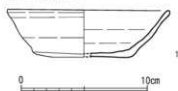


Fig. 295 7SX419出土遺物実測図 (1/3)

7S X903暗灰色土



Fig. 296 7SX903出土遺物実測図 (1/3)

Tab.20 窯一覽表

	遺構名	全長	前庭部		奥口		前庭部		奥庭部		軸方向
			幅	傾斜角度	幅	傾斜角度	幅	傾斜角度	幅	傾斜角度	
1	7 S X103	2.80+a	1.10	-	0.85	-	-	-	0.68	45°	S-75° →#
2	7 S X200	2.62+a	1.64	6°	0.64	1°	0.74	14°	1.00	61°	S-62° →#

※ 単位:1.5m

Tab.21 土坑一覽表

※ 単位:2m, () は異径, 1 a は複存在値, - は計測不可。

遺構名	プラン	長軸	短軸	深さ	備考	
1	7 S K041	不整形	0.71	0.53	0.16	溝上灰
2	7 S K058	不整形	0.96	0.37	0.11	
3	7 S K059	隅丸方形	0.72	0.55	0.30	
4	7 S K116	不整形	2.60	1.92	1.04	多くの無磨盤、鏡台、窯体出土
5	7 S K125	隅丸反方形	2.07	1.09	0.29	
6	7 S K181	不整形	2.31	0.75	0.52	
7	7 S K197	楕円形	0.87	0.70	0.40	
8	7 S K210	不整形	1.48	-	0.18	炭化物出土
9	7 S K223	不整形	3.40	1.70	0.20	
10	7 S K236	不整形	8.10	3.20	-	
11	7 S K250	楕円形	0.54	0.46	0.08	
12	7 S K260	不整形	1.40+a	0.28	0.16	
13	7 S K259	楕円形	0.53	0.50	0.20	
14	7 S K366	隅丸長方形	1.02+a	0.49+a	0.19+a	小児墓の可能性あり
15	7 S K367	隅丸反方形	0.77+a	1.21	0.28	土坑プランは方形の可能性もあり
16	7 S K391	楕円形	0.92	0.72	0.18	
17	7 S K487	隅丸長方形	0.74	0.32+a	0.16	
18	7 S K468	楕円形	0.87+a	0.47+a	0.07	
19	7 S K469	楕円形	1.06	0.37+a	0.17	
20	7 S K471	不整形	1.61	0.56	0.55	
21	7 S K472	隅丸方形	0.54	-	0.16	
22	7 S K481	隅丸方形	0.41	0.37	0.11	
23	7 S K482	不整形	1.57	0.90	1.04	
24	7 S K491	不整形	7.10	1.10	-	
25	7 S K632	不整形	0.93	0.42	0.14	
26	7 S K632	不整形	0.51	-	0.16	
27	7 S K634	不整形	1.14+a	1.20	0.20	
28	7 S K737	隅丸長方形	1.60	0.58	0.16	
29	7 S K746	楕円形	1.90	1.23	0.27	製鉄関連遺構
30	7 S K745	隅丸反方形	0.80	0.58	0.22	壁面に被焼者あり
31	7 S K767	隅丸反方形	0.91	0.63	0.17	砂埃出土
32	7 S K812	隅丸長方形	0.41	0.34	0.27	炭石を記さして土坑内に入れていた
33	7 S K824	隅丸長方形	0.54	0.72	0.21	小児墓の可能性あり
34	7 S K868	隅丸長方形	1.87	0.63	0.48	製鉄関連遺構
35	7 S K869	-	0.52+a	0.33+a	0.10	製鉄関連遺構
36	7 S K871	-	0.33	0.21+a	0.08	製鉄関連遺構
37	7 S K872	不整形	0.76	0.50+a	0.02	製鉄関連遺構
38	7 S K873	不整形	0.54	0.15+a	0.06	製鉄関連遺構
39	7 S K877	-	0.50	0.11+a	0.14	製鉄関連遺構
40	7 S K878	不整形	0.10+a	0.16	0.20	製鉄関連遺構
41	7 S K895	不整形	0.62	0.56	0.20	製鉄関連遺構

5) 製鉄関連遺構

7SK746

遺構 (Fig. 298・300, P1.22-101・102, 23-103, 104)

D地区中央部よりやや北側, BK14区に位置する廃滓土坑である。7SK868・869・871・872・873・877・878を切る。

平面形は不整形な楕円を呈し, 長軸1.90m, 短軸1.23m, 深さ0.27mを測る。

土坑内では鉄滓をはじめ, 炉壁・鉄鉱石・被熱痕跡が見られる礫(花崗岩)等の製錬作業に関連する遺物が多く出土した。製錬関連遺物の出土状況は, 土坑内上位(床面から10cm地点より上位)において比較的大きな鉄滓(約20cm大以上)や礫が出土し, 下位では鉄滓の小破片が見られた。鉄鉱石については, 当初鉄鉱石と認識していなかったため, 詳しい出土状況については記録できなかったが, 特定の地点に集中する出土状況ではなかった。また, 鉄滓の中には炉形を反映している炉内滓も見られた。

出土土器については, 検出面近くで鉄滓に紛れて裏返された状態の2つの須恵器蓋が並んで出土した。この状況が意図的かどうかは不明である。遺構の埋没時期は, 大宰府編年III期(8c中)以降と思われる。

7SK746周辺遺構

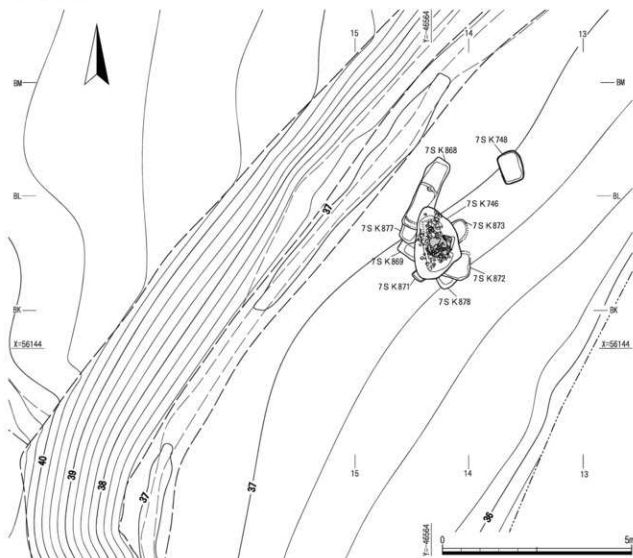


Fig. 297 7SK746周辺遺構配置図 (1/100)

7SK746

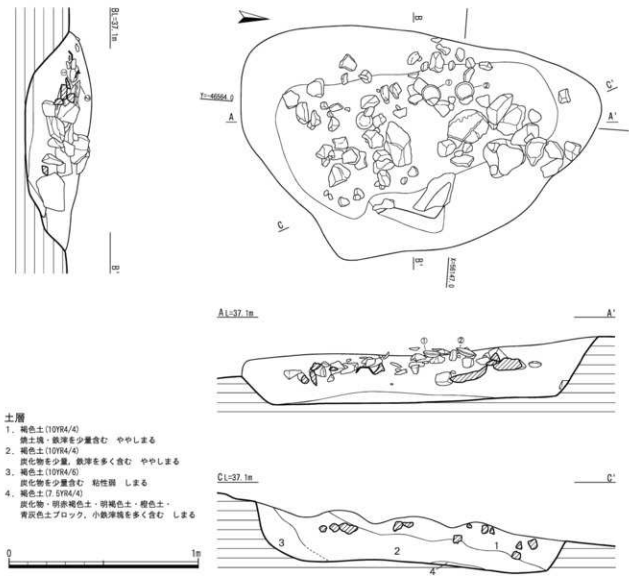


Fig. 298 7SK746遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

7SK746

7SK746にのみ褐色赤土



Fig. 299 7SK746出土遺物実測図 (1/3)

土坑床面では淡赤色の被熱範囲と考えられる痕跡が検出された (Fig.300)。その被熱範囲は不整形・不整長方形が幾つか重なったように見え、4回以上の切り合い (図中a~d) が想定される。切り合い関係は、時期が新しい痕跡から、a→b→cとなっている。dは切り合いが不明で、被熱痕跡aの延長である可能性もある。また、被熱痕跡aは長さ約56cm、幅約40cmを測る。

これら被熱範囲は、出土した鉄滓によるが形の復原から、廃滓土坑を造成する以前、この場所に製鉄 (製錬) 炉が存在した可能性を示している⁽²⁾。

また、7SK746の周囲から検出された土坑 (前述した7SK746に切られる土坑) の出土遺物の中には、廃滓土坑出土遺物と類似する様相が見られる。したがって、廃滓土坑は、廃棄された製鉄炉跡と共に7SK746周辺土坑も破壊して造成された可能性が考えられる。その際、7SK746周辺土坑内の遺物が廃滓土坑に混入したと思われる。

廃滓土坑床面で検出された被熱痕跡は色調から酸化層と思われる。したがって、製鉄炉は廃滓土坑床面より被熱層位 (還元層・酸化層) の上位に構築していたと考えられる。他の製鉄遺跡の製鉄炉を例に挙げ被熱層位の平均厚を割出すと約8cm前後を測った⁽¹⁾。検出された被熱範囲が被熱層位の最下層と想定すると、廃滓土坑床面から上記の平均厚に近い高さに製鉄炉が存在していた可能性がある。

これらの被熱痕跡は肉眼視で確認したもので、科学的分析は行っていない。また、床面では溝状の遺構が検出され、製錬作業に関連する遺構の可能性もある。

遺物 (Fig.299, Pl.54-237・1~4)

須恵器

小蓋a1 (1・2) 1は口径10cm程で、かえりが大きく口縁端部より下方に突出する。天井部は丸みを有する。2は口径11cm程で、1と同じ口縁形態を示すが、天井部は平坦につくられる。1・2とも回転ヘラ切りのままで、回転ヘラケズリは施されない。

7SK746にふい掲赤色土

須恵器

蓋3 (1・2) 1は口縁端部が小さいが、しっかりした断面三角形で、内面に稜がつく。2の断面は、大きい三角形を呈するが、端部は不明瞭である。

7SK748

遺構 (Fig.301)

D地区中央部よりやや北側、BL13区に位置する焼土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸0.80m、短軸0.58m、深さ0.22mを測る。

土坑内壁面全体が赤色に被熱している。床面には被熱範囲は見られない。

遺物 (Fig.302, Pl.54-237・5)

7SK748にふい掲赤色土

須恵器

皿a (1) 底部と胴部の境に稜がつき短く胴部が立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。底部は底部の稜より突出する。回転ヘラ切り後に板状圧痕が見られる。

7SK868

遺構 (Fig.300, Pl.23-105, 106)

D地区中央部よりやや北側、BK14区他に位置する土坑である。7SK746に切られ、7SK877を切る。

平面形は長方形を呈し、長軸1.87m、短軸0.63m、深さ0.58mを測る。土坑内は二段掘りされている。

前述した7SK746造成の工程や製鉄炉の存在を想定すると、鉄滓が出土していることや製鉄炉位置に近接していることから製鉄関連遺構の可能性が考えられる。

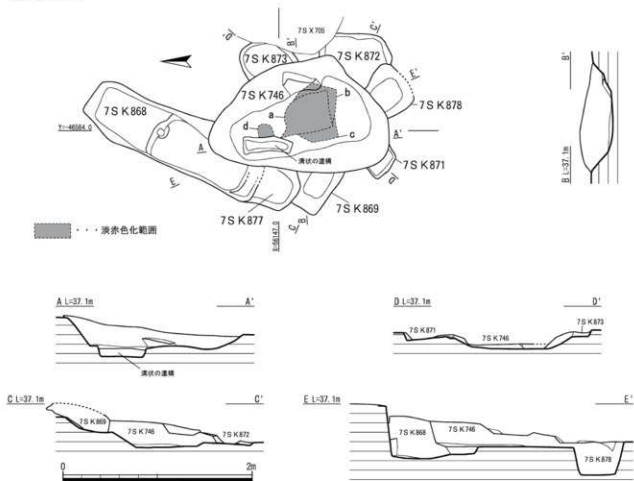


Fig. 300 7SK746周辺遺構平面図・断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig. 303, Pl. 54-237・6)

7SK868黒褐色土

須恵器

小蓋a1 (1) かえりは大きく、口縁端面より下方に突出する。天井部は平坦につくられる。平面面はへら切り痕が顕著に残る。天井屈曲部と口縁端部に回転へらケズリが施される。

7S K869

遺構 (Fig. 300)

D地区中央部よりやや北側、BK14区に位置する土坑である。7SK746・877に切られる。

平面形は方形か長方形を呈するものと考えられ、長軸 $0.52 + \alpha m$ 、短軸 $0.33 + \alpha m$ 、深さ $0.10 m$ を測る。

7SK746造成の工程や製鉄炉の存在を想定すると¹²⁾、7SK746に近接していることから製鉄関連遺構の可能性が考えられる。

7S K871

遺構 (Fig. 300)

D地区中央部よりやや北側、BK14区に位置する土坑である。7SK746に切られる。

平面形は方形か長方形を呈すと考えられ、長軸 $0.33 + \alpha m$ 、短軸 $0.21 + \alpha m$ 、深さ $0.08 m$ を測る。

7SK869と同様に、製鉄関連遺構の可能性が考えられる。遺物は出土していない。

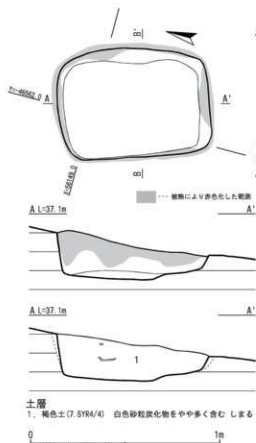


Fig.301 7SK748遺構平面図・土層図
および断面見通し図 (1/20)

7SK748に3品1褐色土



Fig.302 7SK748出土遺物実測図 (1/3)

7SK868黒褐色土



Fig.303 7SK868出土遺物実測図 (1/3)

7SK878暗褐色土

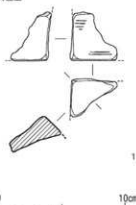


Fig.304 7SK878出土遺物
実測図 (1/3)

7SK872

遺構 (Fig.300)

D地区中央部よりやや北側, BK14区に位置する土坑である。7SX705・7SK746・878に切られる。

平面形は不整形を呈し, 長軸0.76m, 短軸0.50+ α m, 深さ0.02mを測る。また, 出土遺物に須恵器蓋3や鉄滓等を含む。

7SK746造成の工程や製鉄がの存在を想定すると¹²⁾, 鉄滓が出土していることや7SK746に近接していることから製鉄関連遺構の可能性が考えられる。

7SK873

遺構 (Fig.300)

D地区中央部よりやや北側, BK14区に位置する土坑である。7SX705・7SK746に切られる。

平面形は不整形を呈し, 長軸0.54m, 短軸0.43+ α m, 深さ0.06mを測る。

7SK746に近接していることから製鉄関連遺構の可能性が考えられる。遺物は出土していない。

7SK877

遺構 (Fig. 300)

D地区中央部よりやや北側、BK14区に位置する土坑である。7SK746・868に切られ、7SK869を切る。平面形は方形か長方形を呈すると考えられ、長軸 $0.50+\alpha$ m、短軸 $0.41+\alpha$ m、深さ0.14mを測る。

7SK746に近接していることから製鉄関連遺構の可能性が考えられる。

7SK878

遺構 (Fig. 300)

D地区中央部よりやや北側、BK14区に位置する土坑である。7SK746・872に切られる。平面形は不整形を呈すと考えられ、長軸 $0.56+\alpha$ m、短軸 $0.50+\alpha$ m、深さ0.32mを測る。また、出土遺物に須恵器蓋3や鉄滓等を含む。

7SK746造成の工程や製鉄炉の存在を想定すると⁽²⁾、鉄滓が出土していることや7SK746に近接していることから製鉄関連遺構の可能性が考えられる。

遺物 (Fig. 304, Pl. 54-238)

7SK878暗褐色土

土製品

三叉状土製品 (1) 三叉状に伸びる器形で不明品である。平坦面をもつ底部から上部はやや外反気味に立ち上がる。内面は丸みを有しており外面に横方向のハケ目が見られる。土師質である。風炉の一部と思われる。

(文責 平島義孝)

註1 以下に挙げる遺跡の出土製鉄炉跡の床面被熱層厚を平均した。()内は被熱層厚の数値である。

門田遺跡	製鉄炉跡 (8cm)
松丸F遺跡	1号炉跡 (9cm)
大原A遺跡	SX1027 (約10cm)
	SX1045 (約5cm)
御崎製鉄A遺跡	093 (約8cm)

註2 本書の、「IV 日鏡遺跡第7次調査で出土した製鉄炉について」(P.371)を参照

【参考文献】

- 福岡県教育委員会編 1978 「門田遺跡」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7集
築城町教育委員会編 1992 「松丸F遺跡」『城井谷1』築城町文化財調査報告書 第2集
福岡市教育委員会編 1995 「大原A遺跡1」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第430集
福岡市教育委員会編 1997 「御崎古墳群2」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第506集

6) 竪 状遺構

7S X065

遺構 (Fig. 305, Pl. 20-90, 21-92)

D地区BG14区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.3m前後の緩斜面に形成された竪状遺構である。

切り合い関係は7SX750を切る。平面形態は長方形を呈し、南北辺はN-5°-Eを測る。長軸1.71m、短軸1.34m、深さ0.15+ α mを測る。

7S X065

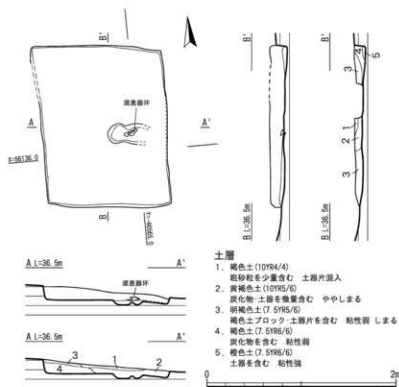


Fig. 305 7SX065遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7S X065焼灰色土

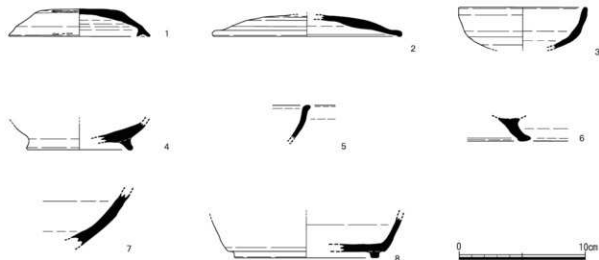


Fig. 306 7SX065出土遺物実測図 (1/3)

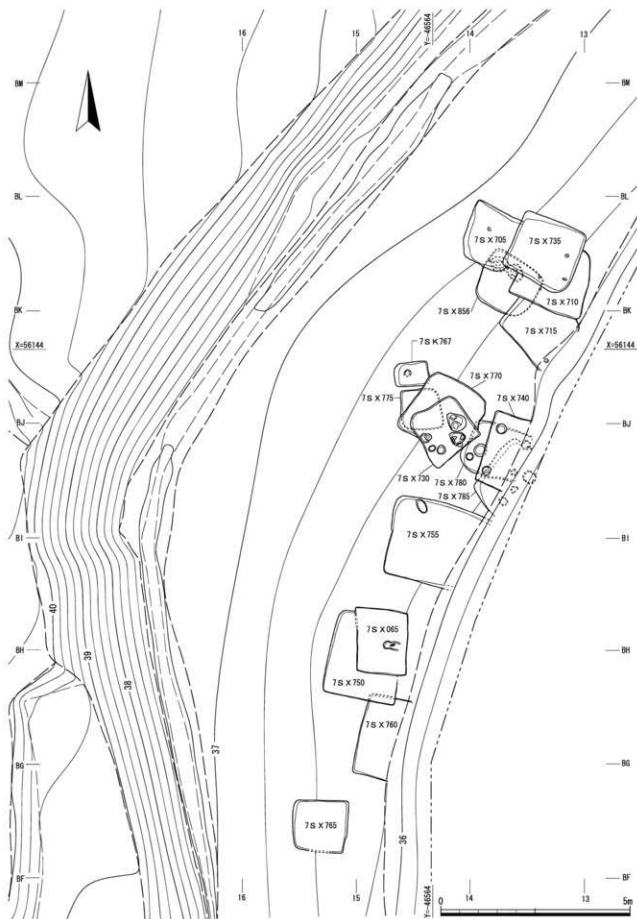


Fig. 307 竖穴状遺構周辺遺構配置図 (1/100)

遺物は、中央部窪みから須恵器杯c 3が出土し、また、埋土中より須恵器鉢・蓋・坏片等が出土した。遺構の埋没時期は大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期（8c前～中）以降と考えられる。

遺物 (Fig. 306, Pl. 52-230・1～8)

7SX065褐色土

須恵器

蓋a 1 (1) かえりは口縁端部と同一面をなし、天井部径が広い。回転ヘラ切りである。

蓋c 3 (2) つまみはないが貼り付けに伴うナデがはいるためcタイプに分類した。口縁端部は不明瞭につくられる。天井部に回転ヘラケズリが施される。

小坏a 1 (3) 口径10.2cmを測る。底部から胴部の立ち上がりにかけては手持ちヘラケズリが施されている。

坏c 1 (4) 底部から丸みを持って胴部が立ち上がる。高台は高く断面三角形の形状を呈する。赤焼けである。

坏×蓋 (5) 未分類資料である。口縁端部がわずかに外反する。

壺×脚付盤 (6) 高台片が出土した。高台が高く長い。端部下面はやや広い平坦面をなす。底部との接合面は平坦である。

鉢a (7) 胴部片が出土した。外に開く傾きを示すことから、3タイプの鉢になるか。

坏c 3 (8) 底部から胴部の境に稜があり、底面に高台が貼り付けられる。高台の形状は低く下面は平坦である。板状圧痕が見られる。

7S X 705

遺構 (Fig. 308)

D地区BK13区に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.6m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX735に切られ、7SX856を切る。平面は不整形な方形を呈し、南北辺はN-23°-Eを測る。長軸1.52m、短軸1.28+ α m、深さ0.09mを測る。

遺物は須恵器蓋片・坏片のほか、鉄滓が出土している。遺構の埋没時期は大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期（8c前～中）以降と考えられる。

遺物 (Fig. 309, Pl. 52-230・9～11, 53-236・1・2)

7SX705にふい褐色土

須恵器

蓋3 (1) 端部片が出土した。端部は小さいがしっかりした断面三角形の肥厚部を持つ。天井部に回転ヘラケズリは見られない。

坏c 2 (2) 底部と胴部の境には回転ヘラケズリが施され、断面四角形の低高台が回転ヘラケズリ部分に貼り付けられている。

坏c 3 (3) 底部と胴部の境に稜を持つ。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられている。

金属製品

鉄針 (4・5) どちらも先端部付近が残存している。断面は直径0.1cm前後である。

7S X 710

遺構 (Fig. 310)

D地区BJ13区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.4m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX735に切られ、7SX715・856を切る。平面不整形な方形で、南北辺はN-13°-Eを測る。長軸1.89m、短軸1.82+ α m、深さ0.06mを測る。

7S X705

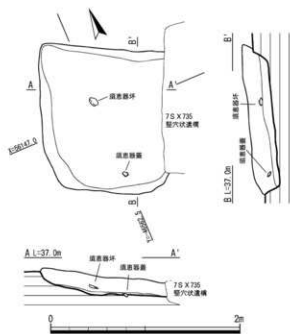


Fig.308 7SX705遺構平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

7S X705にぶい褐色土

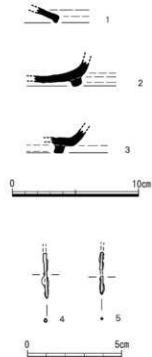


Fig.309 7SX705出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

7S X710

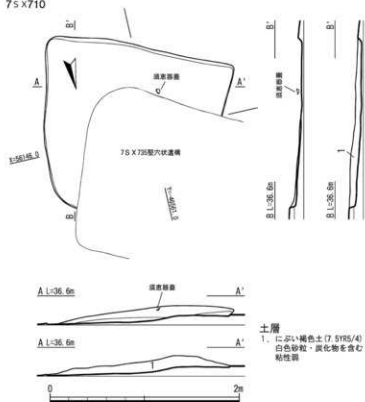


Fig.310 7SX710遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7S X710にぶい褐色土

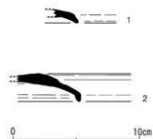


Fig.311 7SX710出土遺物
実測図 (1/3)

遺物は須恵器蓋片のほか、鉄滓が出土している。

遺物 (Fig. 311, Pl. 52-230・12・13)

7SX710にふい褐色土

須恵器

蓋2(1) つまみの有無は不明である。端部外面には稜を持ち下方に短く屈折する。内面は凹みや稜は見られない。蓋3タイプのバリエーションの可能性もある。

蓋3(2) つまみの有無は不明である。端部は大きくしっかりした断面三角形の肥厚部を持ち、内面に稜が見られる。天井部に回転ヘラケズリが施されている。

7S X715

遺構 (Fig. 312)

D地区BJ12区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.5m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX710に切られ、7SX856を切る。平面形は方形を呈し、南北辺はN-46°Eを測る。長軸1.70+ α m、短軸1.18+ α m、深さ0.15mを測る。

遺物は須恵器蓋片・小坏片のほか、鉄滓が出土している。

遺物 (Fig. 313, Pl. 52-230, 14・15)

7SX715にふい褐色土

須恵器

蓋3(1) 小さいがしっかりしたタイプの肥厚部を持ち、内面に稜が見られる。三角形ではなく丸みを帯びる。天井部に回転ヘラケズリが施される。

小坏c3(2) 底部と胴部の境に稜を持つ。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられている。

7S X730

遺構 (Fig. 314, Pl. 20-91, 21-92)

D地区BI13区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.5m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX770・775・780を切る。平面形はやや不整形な方形を呈し、南北辺はN-35°Wを測る。長軸1.42m、短軸1.38m、深さ0.07mを測る。床面ではビットa・b・cが検出されたが、それぞれの配置を見ると柱穴の可能性は低い。ビットa・cから鉄滓も出土している。

また、竪穴内南側で窪みが確認された。窪み内や周辺においては赤褐色の被熱痕跡が見られることから、炬跡と考えられる。

遺物 (Fig. 315, Pl. 52-231)

7SX730褐色土

須恵器

蓋3(1) 口縁端部は小さいがしっかりした三角形のタイプである。軟質で調整は磨耗により不明である。

坏c3(2) 底面に高台を貼り付けるc3タイプである。高台は低い端部を横に拡張する。

碗c(3) 復原口径は17.3cmを測り、深い形態であるため碗に分類した。高台貼り付け部に回転ヘラケズリである。高台は低い。坏c2のタイプと特徴が同じである。底部に穿孔が施される。

皿a2(4) 底部と胴部の境に稜を持つ。底面が稜より突出するタイプのもの。ヘラ切りである。

7S X735

遺構 (Fig. 316, Pl. 21-92)

D地区BK12区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.6m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX705・710・856を切る。平面形は方形を呈し、南北辺はN-35°Eを測る。長軸1.81m、

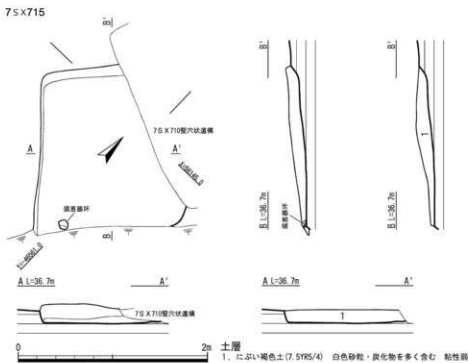


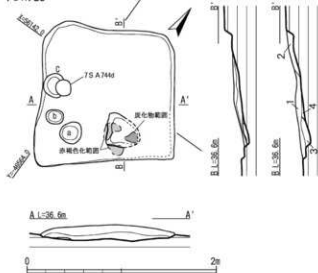
Fig. 312 75X715遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75 X 715 にぶい褐色土



Fig. 313 75X715出土遺物実測図 (1/3)

75 X 730



土層

1. にぶい褐色土 (7.5YR5/4)
2. 白色砂粒・砂粒を多く含む しまる
3. 白色砂粒を多く含む しまる
4. 反褐色土 (7.5YR4/2)
5. 白色砂粒・砂粒・炭化物・明赤褐色土ブロックを多く含む
6. 褐色土 (7.5YR4/4)
7. 白色砂粒・砂粒・炭化物・黄褐色土ブロックを多く含む

Fig. 314 75X730遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75 X 730 褐色土

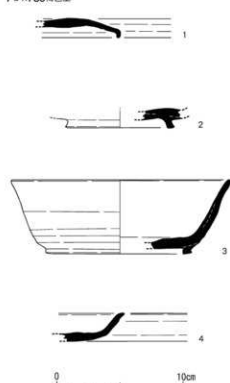


Fig. 315 75X730出土遺物実測図 (1/3)

短軸1.69m、深さ0.18mを測る。

遺物は須恵器坏片・小坏片・小壺片、鉄滓等が出土している。

遺物 (Fig. 317, Pl. 52-232, 53-236・3)

7SX735にふい黄褐色土

須恵器

蓋c 3 (1) 端部は大きくしっかりした断面三角形の肥厚部を持つ。天井部は回転ヘラケズリが施される。つまみの形態は不明であるが、貼り付けに伴う回転ナデが確認された。

坏c 2 (2) 底部と胴部の境には回転ヘラケズリが施され、断面四角形の低高台が貼り付けられている。

小坏c 3 (3) 底部と胴部の境に稜を持つ。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられている。

坏c 3 (4) 底部平坦面から胴部が丸みを帯びて立ち上がるため稜は不明瞭である。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられている。底部と胴部の境におずかにヘラケズリの痕跡が見られ、2タイプの特徴を受け継ぐ。

小壺 (5) 底部平坦面から胴部が直立気味に立ち上がり、肩部は丸みを有し頸部が立ち上がる器形である。短頸、長頸の区別はつかない。底部から胴部上半まで回転ヘラケズリが施される。底面には墨痕が見られる。

小蓋 1 (6) つまみの有無は不明である。かえりは口縁端部よりわずかに下方へ延びる形状を呈する。天井部に回転ヘラケズリが施され、ヘラ記号が見られる。流入品である。

金属製品

鉄釘 (7) 長さ $2.1+\alpha$ cm、断面は長さ0.35cm、幅0.4cmを測る。

7S X740

遺構 (Fig. 318, Pl. 21-92, 94)

D地区BI13区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.3m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX780・785を切る。遺構東側は調査区外になり、近代の土地整備により破壊されている。平面形は方形か長方形を呈すると考えられ、南北辺はN-17°-Eを測る。長軸1.91m、短軸 $0.97+\alpha$ m、深さ0.10mを測る。床面では竪穴内西側でビットa・bが検出され、その配置から柱穴である可能性が高い。また、竪穴内東側にも対称的な配置でビットが存在していたと考えられる。

遺物 (Fig. 319, Pl. 52-233・1)

7SX740茶褐色土

須恵器

壺蓋 (1) 口縁部片が出土した。端部に稜を持ち直立する。

7S X750

遺構 (Fig. 320)

D地区BG14区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.4m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX760を切り、7SX065に切られる。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、南北辺はN-11°-Eを測る。長軸 $1.45+\alpha$ m、短軸 $1.25+\alpha$ m、深さ $0.24+\alpha$ mを測る。遺物は、須恵器片、鉄滓等が出土した。

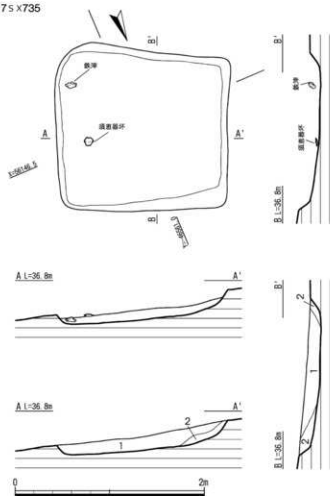
遺物 (Fig. 321, Pl. 52-233・2)

7SX750褐色土

須恵器

坏a 2 × 皿a (1) 底部から胴部の境に稜が見られる。

75X735

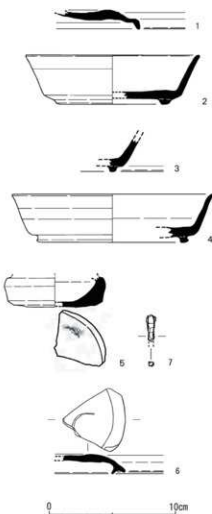


土層

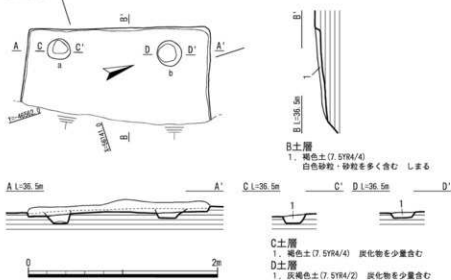
1. にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまる 粘性弱 白色砂粒・炭化物・褐色土ブロックを含む
 2. にぶい黄褐色土(10YR6/4) 褐色土ブロックが1層より若干多く含む

Fig. 316 75X735遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75 X735に於く黄褐色土

Fig. 317 75X735出土遺物
実測図 (1/3)

75X740



B土層

1. 褐色土(7.5YR4/4) 白色砂粒・砂粒を多く含む しまる

C土層

1. 褐色土(7.5YR4/4) 炭化物を少量含む

D土層

1. 灰褐色土(7.5YR4/2) 炭化物を少量含む

75X740茶褐色土

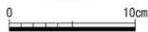


Fig. 318 75X740遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

Fig. 319 75X740出土遺物
実測図 (1/3)

7S X755

遺構 (Fig. 322)

D地区BH14区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.4m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7ST807・7SA744に切られる。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、遺構東側は調査区外になり、近代の土地整備により破壊されている。南北辺はN-16-Eを測る。長軸 $2.38+\alpha$ m、短軸2.19m、深さ $0.20+\alpha$ mを測る。遺物は、須恵器片等と鉄滓が出土した。遺構の埋没時期は大宰府編年II・III期(8c前～中)以降と考えられる。

遺物 (Fig. 323, Pl. 52-233・3～5)

7SX755黄褐色土

須恵器

蓋3(1) 口縁端部は小さいがしっかりした断面三角形の肥厚部を持つ。天井部に回転ヘラケズリが施される。

蓋3(2) 口縁端部は大きくしっかりした断面三角形の肥厚部を持つ。内面に稜がつく。

坏c3(3) 底部から胴部の境に稜があり、口縁部がやや外反気味に立ち上がる。底面には、低く下面が平坦な高台が貼り付けられる。

7S X760

遺構 (Fig. 324)

D地区BG14区に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.3m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX750に切られる。平面形は隅丸方形が長方形を呈すると考えられ、遺構東側は調査区外になり、近代の土地整備により破壊されている。南北辺はN-10-Eを測る。長軸2.18m、短軸 $1.10+\alpha$ m、深さ $0.08+\alpha$ mを測る。遺物は、須恵器片や鉄滓等が出土した。

遺物 (Fig. 325, Pl. 52-233・6～8)

7SX760黄褐色土

須恵器

蓋c(1) つまみは扁平な擬宝珠状を呈する。天井部に回転ヘラケズリが施される。端部の形状は不明である。

蓋3×4(2) 端部は肥厚せず長めに直行する形状を呈する。蓋2タイプが屈折せずに直行した形状である。

坏c2(3) 底部から胴部の境に回転ヘラケズリが施される。低く下面の平坦な高台が貼り付けられている。

7S X765

遺構 (Fig. 326)

D地区BF15区に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.5m前後の緩斜面に形成され、最も南側で検出された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7ST589に切られ、7SK634を切る。平面形はほぼ正方位の隅丸方形を呈する。南北辺はN-1-Wを測る。長軸1.44m、短軸1.32m、深さ $0.16+\alpha$ mを測る。遺物は、須恵器片、鉄滓等が出土した。遺構の埋没時期は大宰府編年II・III期(8c前～中)以降と考えられる。

遺物

(Fig. 327, Pl. 52-233・9～11)

7SX765褐色土

須恵器

蓋c3(1) つまみは扁平な擬宝珠状を呈する。口縁端部は大きくしっかりした断面三角形の肥厚部を持つ。天井部に回転ヘラケズリが施される。

7s x 750

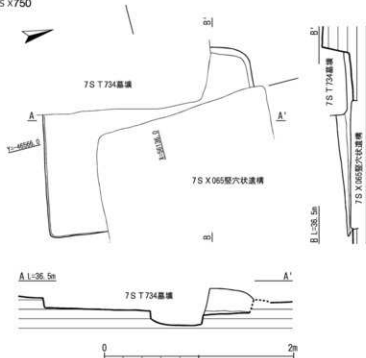


Fig. 320 7SX750遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7s x 750 褐色土

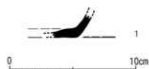


Fig. 321 7SX750出土遺物
実測図 (1/3)

7s x 755

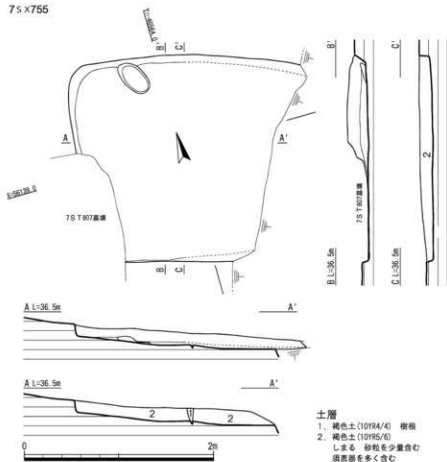


Fig. 322 7SX755遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7s x 755 黄褐色土



- 土層
1. 褐色土 (10YR4/4) 樹根
 2. 褐色土 (10YR5/6) しまる 砂粒を少量含む 炭素層を多く含む

Fig. 323 7SX755出土遺物
実測図 (1/3)

環c 2 (2) 底部と胴部の境に回転ヘラズリが施される。低く下面の平坦な高台が貼り付けられている。高台下面には板状工具痕が見られる。

環c 3 (3) 底部と胴部の境に不明瞭な稜が見られる。底面に低く下面の平坦な高台が貼り付けられている。高台下面に板状圧痕が見られる。

7S X 770

遺構 (Fig. 328)

D 地区 BI13 区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.5m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX730に切れ、7SX775・780・7SK767を切る。平面形はやや不整な方形を呈し、南北辺はN-32°-Eを測る。長軸1.82m、短軸1.77m、深さは0.08mを測る。

床面でビットが検出されたが、ビットの配置と対応するビットが検出されなかった状況から柱穴の可能性は低い。遺物は、須恵器片、鉄滓等が出土した。

遺物 (Fig. 329, Pl. 53-234・1・2)

7SX770黒褐色土

須恵器

環c 3 (1) 底部から稜を持って胴部が立ち上がる器形で、高台が底面の内側に貼り付けられる。高台は低い。

IIIa (2) 底部から稜を持って胴部が短く立ち上がり口縁部で外反する。

7S X 775

遺構 (Fig. 330)

BI14区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.5m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

7S X 760

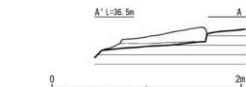
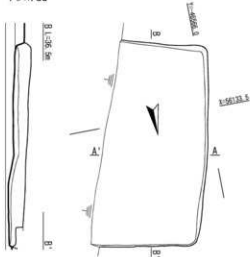


Fig. 324 7SX760遺構平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

7S X 760黄褐色土



Fig. 325 7SX760出土遺物
実測図 (1/3)

7S X 765

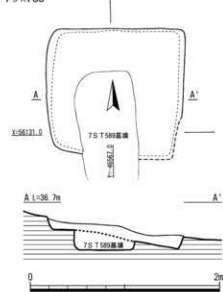


Fig. 326 7SX765遺構平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

7S X 765褐色土

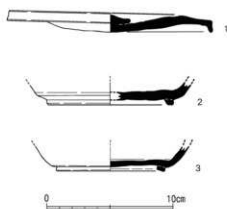
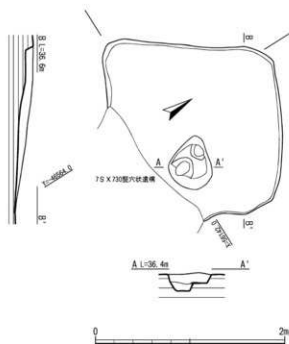


Fig. 327 7SX765出土遺物
実測図 (1/3)

7S X770

Fig. 328 7SX770遺構平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

7S X770黒褐色土

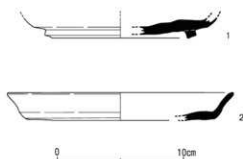


Fig. 329 7SX770出土遺物実測図 (1/3)

切り合い関係は7SX770に切られる。平面形は方形を呈し、南北辺はN-4°Eを測る。1辺約1.07m、深さ0.13mを測る。本遺構と7SK767は平行に並んで配置している。遺物は、鉄棒が出土した。

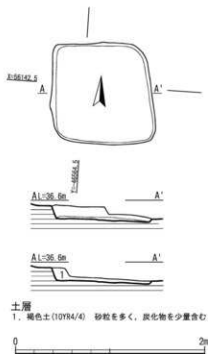
7S X775周辺遺構

7S K767

遺構 (Fig. 331)

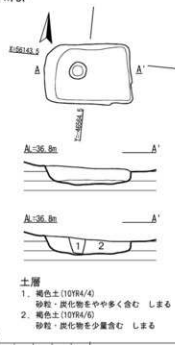
BJ14区に位置する土坑である。7SX730・770に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、長軸0.91m、短軸0.63m、深さ0.17mを測る。本遺構と7SX775は平行に並んで検出された。遺物

7S X775

Fig. 330 7SX775遺構平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

土層
1. 褐色土(10YR4/6) 砂粒を多く、炭化物を少量含む

7S K767

Fig. 331 7SK767遺構平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

土層
1. 褐色土(10YR4/6)
砂粒・炭化物をやや多く含む しまる
2. 褐色土(10YR4/6)
砂粒・炭化物を少量含む しまる

は、鉄滓が出土した。

7S X780

7S X780

遺構 (Fig. 332, Pl. 22-95・96)

D地区BII3区他に位置し、丘陵裾部から東に拡がる標高36.3m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX785を切り、7SX730・740・770に切られる。遺構南東側は調査区外になり、近代の土地整備により破壊されている。平面形は長方形を呈すと考えられ、南北辺はN-36°-Wを測る。長軸 $1.60 + \alpha$ m、短軸1.42m、深さ0.18m前後を測る。床面ではピットa・b・c・dが検出された。ピットa・c・dが柱穴と考えられる。遺構の埋設時期は大宰府編年II・III期（8c前～中）以降と考えられる。遺物は、埋土中およびピットdから鉄滓が出土した。

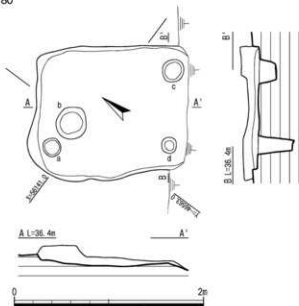


Fig. 332 7SX780遺構平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

遺物 (Fig. 333, Pl. 53-234・3～5, 236・4)

7SX780暗茶色土

須恵器

蓋 2 × 3 (1) 口縁端部は下方に長めに屈折するタイプである。口縁部と胴部の境で器壁が薄くなるため2 × 3タイプとした。

蓋 (2) 未分類資料である。口縁端部が外に屈曲する。全面に回転ナデが施される。

鉢a (3) 口縁部は内湾気味で器壁が薄い。口縁端部は丸く、強くナデを施すためわずかに外に開く。胴部は丸みを有する。底部は平底である。底部から胴部の下半まで回転ヘラズリが施される。胴部上半は回転ナデが施される。底部に板状圧痕も見られる。

金属製品

鉄斧 (4) 長さ $8.4 + \alpha$ cm、幅4.4cm、厚さ0.4～0.5cmを測る。錆が厚く付着しているため、細部の構造は不明であるが、鍛造鉄斧であると考えられる。

7S X780暗茶色土

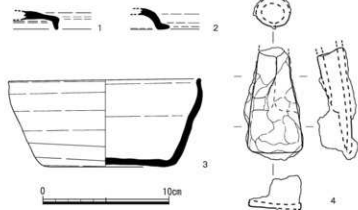


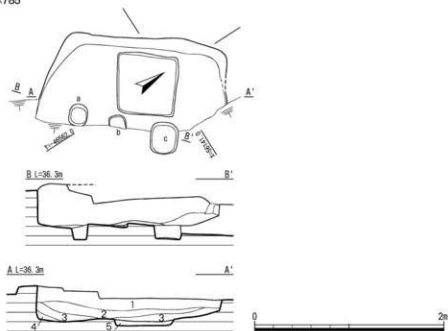
Fig. 333 7SX780出土遺物実測図 (1/3)

7S X785

遺構 (Fig. 334, Pl. 22-97～100)

D地区BII3区に位置し、丘陵裾部から東に拡がる標高36.2m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX740・780に切られる。遺構南東側は調査区外になり、近代の土地整備により破壊されている。平面形は方形か長方形を呈すると考えられ、南北辺はN-32°-Eを測る。長軸 $1.98 + \alpha$ m、短軸



土層

1. 褐色土 (7.5YR4/3) 白色砂粒・砂粒を多く、炭化物を少量含む しまる
2. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 白色砂粒・砂粒を多く、炭化物を少量含む しまる
3. 褐色土 (7.5YR4/4) 砂粒・炭化物・褐色土ブロックを少量含む ややしまる
4. 褐色土 (7.5YR4/5) 砂粒・炭化物を少量含む しまる
5. 褐色土 (10YR4/4) 砂粒・炭化物を多く、明赤褐色・黄褐色土ブロックを少量含む ややしまる

Fig. 334 75X785遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

75x785暗褐色土

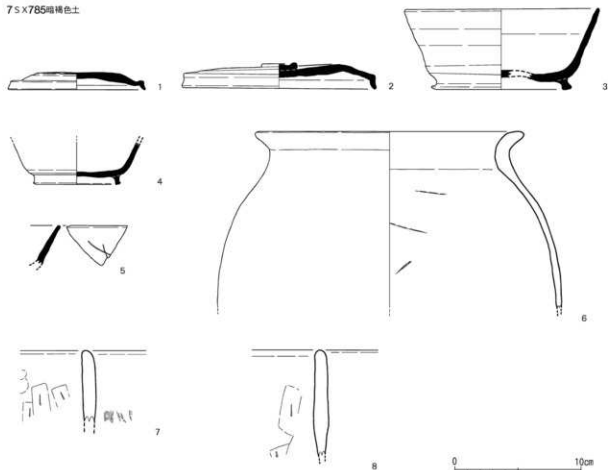


Fig. 335 75X785出土遺物実測図 (1/3)

0.95+ α m、深さ0.46mを測る。遺物は、埋土中から鉄滓等が出土した。

床面ではビットa・b・cが検出された。ビットの配置からビットa・cが柱穴と考えられ、2本柱構造の建物であると考えられる。また、竪穴内西側では1辺0.64mの方形を呈する溜り状土坑が検出されたが、この遺構の性格は不明である。遺物は埋土中から鉄滓等が出土した。

遺物 (Fig.335, Pl.53-234・6~13)

7SX785暗褐色土

須恵器

小蓋a3 (1) 推定口径が10.9cmを測る。口縁端部は端部が断面三角形で下方に延びる。端部付近で器壁が薄くなる。天井部は回転ヘラ切りの痕跡が見られ、口縁部から天井部にかけて回転ヘラケズリが施されている。つまみは見られない。

蓋c3 (2) つまみは扁平なボタン状を呈し、口縁端部は下方に延びる。上面は回転ヘラケズリを丁寧に施している。胴部の中程の屈曲部から若干器壁が薄くなる。

坏c2 (3) 底部から胴部の境に回転ヘラケズリが施され、胴部が直立する。高台は回転ヘラケズリ部にやや斜めに貼り付けられる。碗のように深い形態である。

小坏c2×3 (4) 底部から胴部の境に回転ヘラケズリが施され胴部が立ち上がる。高台は低い。高台内は板状圧痕が見られる。回転ヘラ切りである。

坏 (5) 外面にヘラ記号が見られる。

土師器

甕 (6) 口縁部が外反し胴部が丸みを帯びる。外面は磨耗のため調整不明である。内面は工具痕が見られ、ケズリが施される。

甕×鉢 (7・8) 口縁部が直立する器形である。外面は回転ナデ、内面は口縁部回転ナデを施し、胴部は縦方向の工具によるケズリが施される。内面は黒褐色に変色する。

7Sx856

遺構 (Fig.336)

D地区BJ13区他に位置し、丘陵裾部から東に広がる標高36.5m前後の緩斜面に形成された竪穴状遺構である。

切り合い関係は7SX705・710・715・735に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、南北辺はN-31°Eを測る。長軸1.60+ α m、短軸1.45+ α m、深さ0.27mを測る。遺物は須恵器蓋片・坏片・鉢片、鉄滓等が出土している。

遺物 (Fig.337, Pl.53-235)

7SX856褐色土

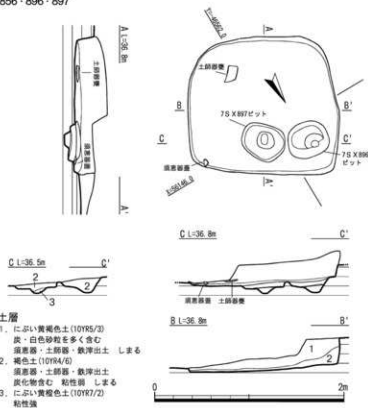
須恵器

蓋2 (1) 端部に稜を持ち下方に短く屈折する。3タイプのバリエーションの可能性もある。

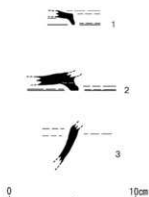
坏c1×壺 (2) 底部片が出土した。高く、端部下面にやや広い平坦面を持つ高台が貼り付けられている。

鉢 (3) 未分類資料である。胴部片が出土した。内面に段が見られ、粘土紐貼り付けの痕跡と思われる。

(文責 平島義孝・黒木正行・小石龍信)

Fig. 336 7S X856・896・897遺構平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

7S X856褐色土

Fig. 337 7S X856出土遺物
実測図 (1/3)

Tab. 22 竪穴状遺構一覧表

単位は1cm, 1 mは略す。

遺構名	プラン	北端	南端	南方位	出土	
1	7S X965	長方形	1.71	1.36	N-5°-E	
2	7S X795	不整形	1.52	1.23+α	N-23°-E	鉄滓出土
3	7S X719	不整形	1.99	1.82+α	N-13°-E	鉄滓出土
4	7S X715	方形	1.7+α	1.16+α	N-49°-E	鉄滓出土
5	7S X730	不整形	1.12	1.38	N-35°-W	
6	7S X735	方形	1.87	1.69	N 35° E	鉄滓出土
7	7S X740	不明	1.91	0.97+α	N-17°-E	鉄滓出土
8	7S X750	隅丸長方形	1.43+α	1.25+α	N-14°-E	鉄滓出土
9	7S X754	隅丸長方形	2.39+α	2.13	N-16°-E	鉄滓出土
10	7S X760	隅丸(長)方形	2.18	1.19+α	N-10°-E	鉄滓出土
11	7S X785	隅丸方形	1.11	1.32	N-1°-W	鉄滓出土
12	7S X770	不整形	1.82	1.77	N 32° E	鉄滓出土
13	7S X778	不明	1.07+α	1.07+α	N-4°-E	鉄滓出土
14	7S X780	長方形	1.60+α	1.42	N-35°-W	鉄滓出土
15	7S X781	不明	1.96+α	0.95+α	N-12°-E	鉄滓出土
16	7S X856	隅丸方形	1.69+α	1.45+α	N-31°-E	鉄滓出土

7) 旧河川

7SD115

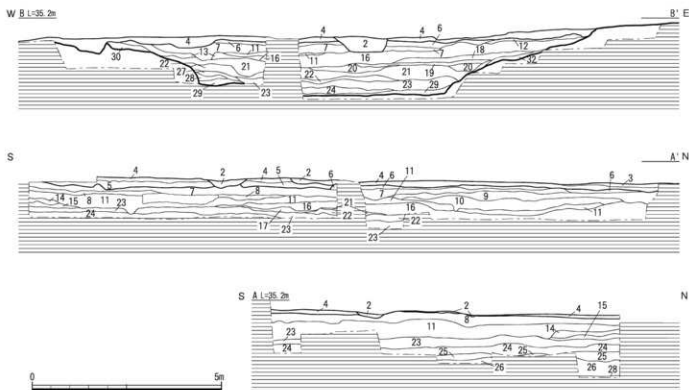
遺構 (Fig. 338・339, Pl. 23-107, 24-108~110)

C地区東半部, AG1区他に位置し, 南北方向に縦断する形で検出した旧河川である。

河幅は最大で約15.0m, 河床の幅は約6.5m, 深さは約1.7mを測る。土層は1トレンチで河川の縦断面, 2・3トレンチで横断面を観察した。1~3トレンチとも粘土層と砂層が交互に堆積している状況を確認することができた。また, 粘質土層においては, 流木・堅果類等の植物遺体が良好な保存状態で確認することができた。砂層は粒子が粗く薄い粘土層が縞状に堆積し, 植物遺体等は出土していない。

この粘質土層と砂層の互層は3~4層単位で確認された。河床面上層は砂礫層で親指大の小礫を主体とした層である。また, 1トレンチでは土層全体が緩やかに北側に落ちていく堆積を示し, 河川が南から北に流れていたことが把握できた。

出土遺物は, 縄文時代~弥生時代早期の土器・石器が11・23~25層にかけて出土した。土器は縄文時代後期~弥生時代早期にかけて粗製の深鉢, 精製の浅鉢, 弥生時代早期の夜白式土器といった刻目突帯文土



土層	説明	特徴	出土品
1. 灰オリブ粘質土 (516/2)	粘性強	山からの流れ込み	しまる
2. にぶい黄褐色砂質土 (7. 519E/6)	自然沈降による堆積	しまりなし	
3. にぶい黄褐色砂質土 (1019E/4)	2層と同様自然沈降	しまる	
4. 橙色砂質土 (2. 519E/6)	砂質土	粘性弱	しまる
5. 黒褐色粘質土 (519E/1)	粘性強	しまる	
6. オリブ黒粘質土 (512/2)	粘性強	しまる	
7. 黒褐色砂質土 (2. 519E/2)	しまりなし		
8. 黒褐色粘質土 (7. 519E/1)	粘性弱	白色砂粒を多く含む	しまる
9. 黒褐色粘質土 (1019E/1)	粘性弱	ややしまる	
10. 灰色砂質土 (516/1)	青灰色の砂質土と縞状に堆積	植物遺体を含む	
11. 灰白色砂質土 (58E/0)	白色砂粒を含む	しまりなし	
12. 黒褐色粘質土 (507/1)	砂粒ブロックを含む	黒褐色粘質土と砂質土が互層となる	しまりなし
13. 黒褐色粘質土 (1050/1)	粘性弱	しまる	
14. 黒褐色粘質土 (52/0)	黒色粘質土と縞状に堆積	炭化物を含む	しまりなし
15. 黒褐色粘質土 (52/0)	青灰色粘・白色砂粒ブロックを含む	しまりなし	
16. 灰白色砂質土 (512/0)	粒子の粗い砂と細かい砂が互層	ややしまる	
17. 黒粘質土 (2. 512/1)	粘性弱	白色砂粒を多く含む	しまりなし
18. 青灰色砂質土 (587/1)	粘性弱	しまりなし	
19. 明青灰色砂質土 (10807/1)	粘性弱	シルト状	しまる
20. 緑褐色砂質土 (564/1)	粘性弱	互層	しまる
21. 緑灰色粘質土 (506/1)	粘性弱	青灰色粘土と縞状に堆積	しまりなし
22. 青灰色粘質土 (580E/1)	粘性弱	青灰色粘土と縞状に堆積	しまりなし
23. 黒色粘質土 (2. 512/1)	粘性弱	砂粒を含む	植物遺体を多く含む
24. 灰白色砂質土 (7. 519E/1)	縄文時代の包合層	しまりなし	
25. 黒色粘質土 (1012/1)	粘性弱	多くの植物遺体を多く含む	しまりなし
26. 灰色砂質土 (56/1)	礫を少量含む	しまりなし	
27. 灰色砂質土 (7. 516/1)	黒色粘質土と縞状に堆積	植物遺体を含む	しまりなし
28. 黒褐色粘質土 (1019E/1)	粘性弱	23・25層と同様植物遺体を含む	しまりなし
29. 灰色砂礫層 (56/0)	礫を多く含む	しまりなし	
30. 黒褐色粘質土 (7. 519E/2)	粘性弱	河床内埋土と地山との境界的な層	しまりなし
31. 黒色シルト質土 (52/0)	粘性弱	河床内埋土と地山との境界的な層	しまりなし
32. 緑褐色粘質土 (1050/1)	質は地山とほぼ同じ	河床内埋土と地山との境界的な層	しまりなし
33. 緑褐色粘質土 (519E/2)	粘性弱	礫を多く含む	縄文時代の黒礫石, 土器を含む
34. 灰オリブ粘質土 (516/2)	粘性弱	礫を少量含む	石器が出土

Fig. 338 7SD115土層断面図 (1/100)

7SD115

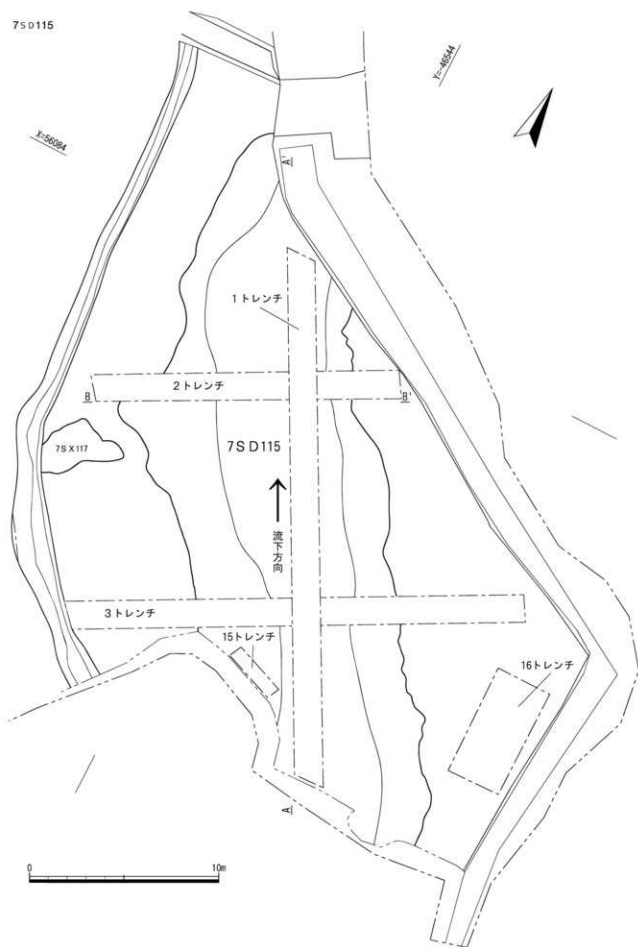


Fig.339 7SD115遺構平面図 (1/200)

器が出土している。石器は黒曜石の石鏃、剥片が出土している。

遺物 (Fig. 340, Pl.55-244, 245)

7SD115緑灰色砂

縄文土器

深鉢 (1) 粗製の底部片が出土した。底径は復原で約9.1cmを測る。胎土は白色の砂粒を多く含み、金雲母を少量含んでいる。

7SD115暗黒灰色土

縄文土器

深鉢 (1) 粗製である。口縁部が若干肥厚し内湾気味になる。外面は二枚貝条痕が横方向に粗く施文され、内面は板状工具による横方向のケズリが見られる。口縁端部は、ナデであり、粗製深鉢である。

石製品

石鏃 (2) 腰岳産の黒曜石製石鏃である。幅広でやや厚みのある剥片を素材としている。

7SD115暗黒褐色土

縄文土器

深鉢 (1) 粗製である。口縁部外面は横方向のミガキである。胴部外面は板状工具による不正方向のケズリ、内面は上部に左方向、下部に右方向のケズリが施されている。また、指頭圧痕が見られた。口縁端部はナデにより丁寧につくられる。外面はふきこぼれと思われる煤の付着が確認された。ミガキや調整の具合から半精製の土器である。

浅鉢 (2) 精製である。外面はミガキと思われるが磨耗により確認できない。内面は横方向のミガキが見られる。煤が付着している。

7SD115明灰白褐色砂

弥生土器

甕 (1) 胴部で弱く屈曲する器形である。屈曲部の胴部に比べ口縁部がややすはまる西北九州に偏って見られる器形である。口縁部外面に一条突帯を貼り付けてめぐらす。その突帯には棒状工具による刻目が入る。内・外面は二枚貝条痕である。外面にふきこぼれの可能性のある煤が付着する。弥生時代早期の夜白I式土器である。

(文責 島内浩輔)

Tab.23 石製品観察表

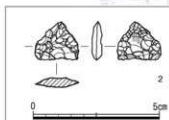
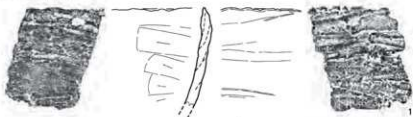
※ 単位1cm、左(右)は観付値。

出土遺物(部位)	土色	深さ%	遺物種	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	番号	保存番号	写真区画%
7SD079	緑灰色土	343	3	不明品	赤石	天井2.0	高さ1.9	左右4.2	18.4	001		50-247・2
7SD115	暗黒灰色土	340	2	AP	o b	1.6	1.8	0.4	0.6	002		50-245
7SA746	黄褐色土	341	1	石錐	赤石	4.4	9.0	1.7	129.4	001		49-219
黒灰茶色土		302	7	打製石鏃	片岩	12.5	6.4	1.3	120.4	008		50-264・7
黄赤茶褐色土		392	2	AP	o b	2.4	1.9	0.3	0.8	002		50-264・6
赤褐色土		364	6	石鏃	o b	3.5	4.7	2.8	47.8	004		50-264・4
赤褐色土		364	7	匕	o b	3.1	1.7	0.5	2.0	005		50-264・5
赤褐色土		361	2	サイドスクレイパー	o b	4.7	1.1	0.4	1.8	006		50-261・2
赤褐色土		364	8	匕	o b	3.3	3.0	0.8	0.6	007		50-264・3
赤褐色土		364	4	AP	a n d	3.3	2.2	0.6	2.4	008		50-264・1
赤褐色土		366	1	磨製石鏃	準珪岩	(12.0)	(7.2)	(2.3)	(201.9)	001		50-264・8

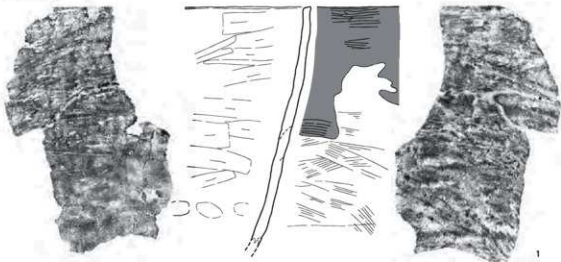
7SD115綠灰色砂



7SD115暗黑灰色土



7SD115暗黑褐色土



7SD115明灰白褐色砂

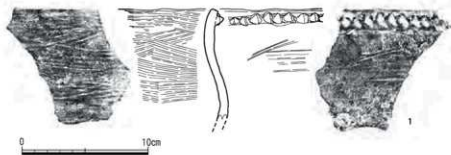


Fig. 340 7SD115出土遺物実測図 (2/3, 1/3)

8) 柵列

7SA744

遺構 (Fig. 342, Pl. 24-111)

D地区中央よりやや南側BG14区他に位置する。丘陵裾部から東に広がる標高36.5m前後の緩斜面に構築された柵列である。

柱穴は5本検出され、内4本は土層断面において柱根が確認されたが、柱材は残存していなかった。

竪穴状遺構(7SX730・740・750・755)を切り、主軸はN-17-Eである。

柱間は、南北間が2.16~2.32m、東西間が2.02mを測る。掘立柱建物の可能性があるが、検出した柱穴からは規模が知り得なかったため柵列とした。

また、7SA744西側を囲む溝(7SD731・732)は、丘陵裾部にあたる本遺構の立地から、施設内への上段からの土砂ないし水をかわす排水施設的性格を持った遺構である可能性が考えられる。

遺物は、7SA744eより滑石製石鍋の再利用品が出土した。また、須石器・土師器片が出土しているが、下位に存在する竪穴状遺構からの混入と考えられる。

遺物 (Fig. 341, Pl. 49-219)

7SA744e褐色土

石製品

滑石製品(1) 石鍋の再利用品である。本来の部位は口縁部である。

口縁に並行する状態で断面三角形の擦り切状の切り込みが確認される。二次加工による小割りの痕跡と考えられる。

端面には刃渡り3.3cmの鑿痕が確認される。口縁部の形状等から縦耳型石鍋と考えられ、平安時代後期頃以降の所産と考えられる。

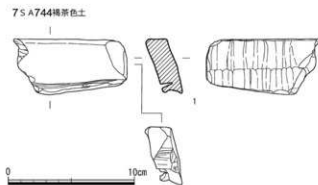


Fig. 341 7SA744出土遺物実測図 (1/3)

9) 溝

7SD079

遺構 (Fig. 345)

AW14区他に位置し、近世墓D群の墓域検出時に確認された溝である。近世墓(7ST048・083・086・092・313・888)に切られる。長さ14.50m、最大幅1.12m、深さ0.59mを測り、断面「U」字状を呈する。

本遺構は、丘陵裾部を沿う様に巡り、D群平坦部中央で東にほぼ直角に曲がることから、排水用の溝と考えられる。

遺物は、国産陶器皿が出土しており、17c中頃以降に埋没したと考えられる。また、瓦質土器の釜や滑石製石鍋の再利用品が出土した。

遺物 (Fig. 343, Pl. 55-246, 56-247)

7SD079暗灰色土

国産陶器

皿(1) 高台から斜め上方に向けて胴部が延びる器形である。削り出し高台で高台脇と高台の境は明瞭である。高台脇にはケズリが施される。灰輪を用いて施軸され高台は露胎である。肥前産である。

瓦質土器

釜(2) 胴部片が出土した。突帯が貼り付けられている。外面の調整は不明である。内面の調整はユビオサエ後に横方向のハケが施される。突帯の下面は二次焼成により変色している。

石製品

滑石製品(3) 楕円状滑石製品で、長軸約4cm、短軸約2cm、器高約2cmの大きさである。この遺物には2箇所の凹みが確認され、中は約1cmの深さで搾取されている。全体的に細かな加工痕が認められるが、このような加工は彫刀状工具を考慮する必要がある。遺物の長軸左右が平行した弧を描くことから、本来、石鍋としての利用されたことが考えられ、部位は休部(胴部)の可能性が高い。

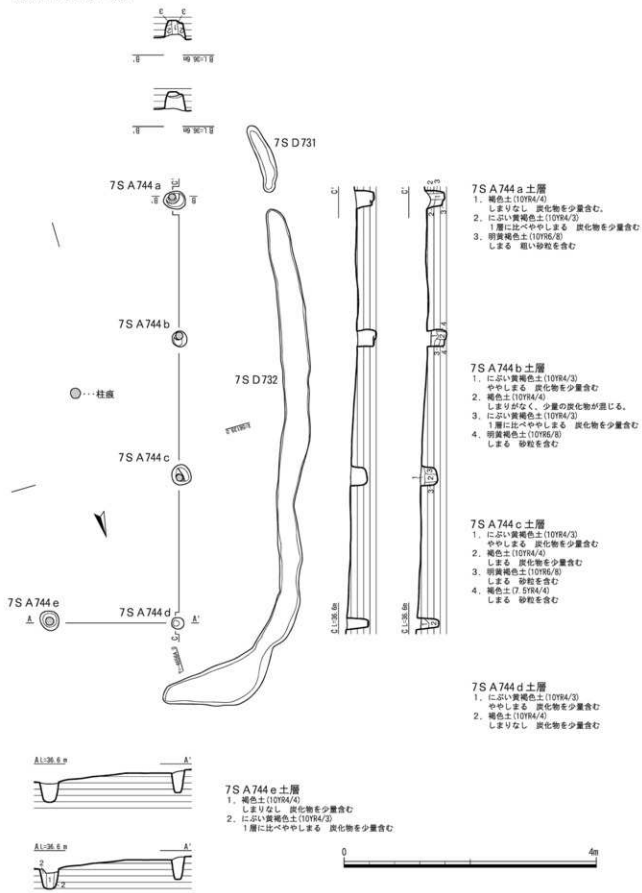


Fig.342 7SA744, 7SD731・732遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/60)

7SD586

遺構 (Fig. 345)

BB14区他に位置し、近世墓D群墓壕検出時に確認された溝である。7SD596を切る。長さ5.20m、最大幅0.80m、深さ0.25mを測り、断面「U」字状を呈する。7ST524北側で東に曲がる。本遺構も7SD079・596同様に、排水用の溝と考えられる。

7SD596

遺構 (Fig. 345)

BB15区他に位置し、近世墓D群墓壕検出時に確認された溝である。近世墓(7ST081・098・524・7SD586)に切られる。長さ8.50+ α m、最大幅1.30m、深さ0.18mを測り、断面「U」字状を呈する。7ST524北側で東に曲がる。本遺構も7SD079・586同様に、排水用の溝と考えられる。

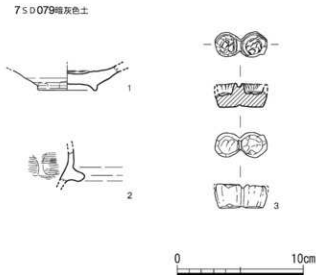


Fig.343 7SD079出土遺物実測図 (1/3)

10) 土坑

7SK041

遺構 (Fig. 344)

AY13区に位置し、近世墓(7ST042・094)と隣接する土坑である。

土坑は、長軸0.71m、短軸0.53m、深さ0.16mを測り、平面形は不整形を呈し、土坑底面には小ビットが点在する。土坑壁は焼けており周辺には炭化物が散在している状況であった。土坑内においても炭化物が多く検出され、精査を行ったが焼骨等は確認できなかった。遺物は出土していない。

また、本遺構から西側の斜面において7ST030が検出されている事から、火葬墓に伴う関連遺構として、焼土坑の可能性も考えられる。

7SK126

遺構 (Fig. 346)

C地区上段AC16区他に位置し、7SK197を切る。平面形は隅丸長方形を呈する。長軸2.07m、短軸1.09m、深さ0.29mを測る。遺物は未分類の龍泉窯系青磁鉢片、須恵器坏c類、土師器碗c等が出土している。遺構の性格は不明である。中世後期以降の所産と思われる。

遺物 (Fig. 347, Pl.56-248, 58-258)

7SK126にふい黄褐色土

龍泉窯系青磁

鉢(1) 口縁部片で未分類資料である。残存器高5.0cmを測る。外面に蓮弁文が見られ、内面にも施文が見られる。器厚は体部から口縁部上がるにつれて厚くなっている。胎土は明灰白色を基調としており、微細な黒色粒子を多く含む。釉調は暗緑灰色で貫入が

7SK041

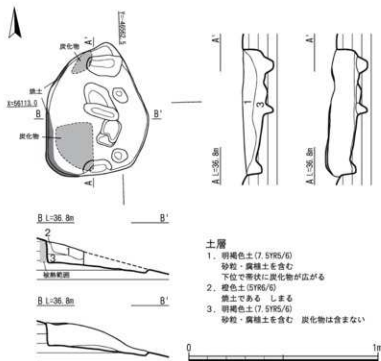


Fig.344 7SK041遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

- 土層
1. 明褐色土(7.SY95/G)
砂粒・腐植土を含む
下位で帯状に炭化物が広がる
 2. 橙色土(5YR6/5)
腐土である しまる
 3. 明褐色土(7.SY95/G)
砂粒・腐植土を含む 炭化物は含まない

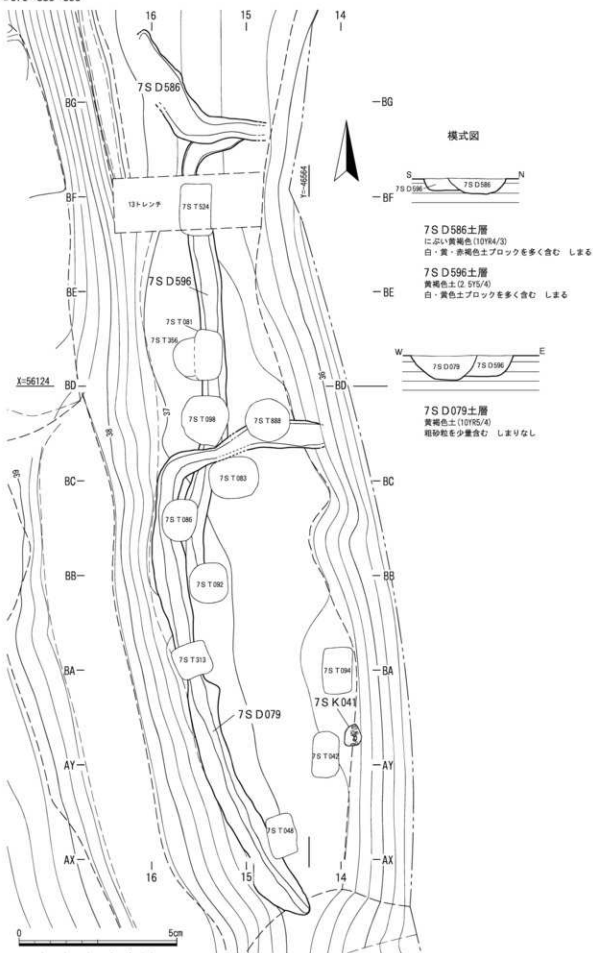


Fig. 345 7SD079・586・596遺構配置図・土層模式図 (1/120)

口縁端部で細かく、大半部では大きく入る。また軸厚は0.5mm以下と非常に薄い。焼成良好である。

銭貨

銅銭(2) 朝鮮通宝(1425年初鑄)である。

7SK184

遺構 (Fig. 348, Pl. 24-112~114)

C地区上段AF16区他に位置する。平面形は不整形を呈する。長軸2.31m, 短軸0.75m, 深さ0.42mを測る。

遺物は、土師器の環・小皿類の出土が圧倒的に多く、また時期も12~14c代と広範囲にわたる。須恵器もわずかに出土しているが時期判別には至らなかった。なお龍泉窯系青磁鉢片も1点出土している。土師器環bが出土しているため、遺構埋没時期を14c以降とする。廃棄土坑と考えられる。

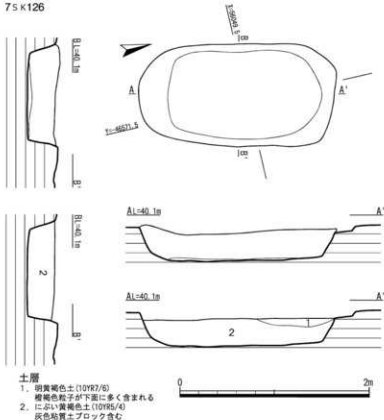
遺物 (Fig. 349, Pl. 56-249)

7SK184褐色土

土師器

小皿a(1~7) 1は口径7.4cm, 底径5.4cm, 器高1.6cmを測り, 2は口径7.2cm, 底径5.6cm, 器高1.5cmを測る。胴部下半は丸みを持ち口縁部が直立する器形である。3は復原口径6.6cm, 復原底径4.6cm, 器高1.1cmを測る。底部と胴部の境に稜を持ち胴部は外反気味に外に開く器形である。4は復原口径6.5cm, 復原底径5.4cm, 器高0.9cmを測る。底部と胴部の境に稜を持ち胴部はやや外開きに短く立ち上がる。5は口径6.2cm, 底径3.8cm, 器高1.2cmを測る。底部と胴部の境の稜は不明瞭である。胴部がやや外開きに立ち上がる。6は口径6.0cm, 底径3.7cm, 器高1.3cmを測り, 7は復原口径6.0cm, 復原底径3.6cm, 器高1.4cmを測る。6は底部と胴部の境に稜を持つが7は不明瞭である。胴部はやや丸みを持って外開きに立ち上がる器形である。すべてイト切りで, 7以外は板状圧痕が見られる。3は工具痕と思われる。1, 5, 6は煤が付着する。

7SK126



土層

1. 明黄褐色土(10YR7/5)
褐色粒子が下面に多く含まれる
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4)
灰色粘質土ブロック含む

Fig. 346 7SK126遺構平面図・土層図
および断面見通し図(1/40)

小皿a×b(8) 口径6.2cm, 底径3.4cm, 器高1.4cmを測る。底部と胴部の境に稜を持ち胴部がやや丸みを持って外に開く器形である。イト切りである。

環a(9~12) 9は口径11.2cm, 底径6.9cm, 器高2.5cmを測り, 10は復原口径10.6cm, 底径7.0cm, 器高2.3cmを測る。底部と胴部の境に稜を持つ。やや外に開きながら胴部が直線的に延びる器形である。底面は平坦で、イト切

7SK126に於い黄褐色土

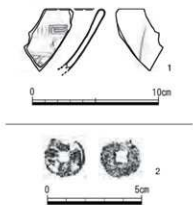


Fig. 347 7SK126出土遺物
実測図(1/2, 1/3)

7SK184

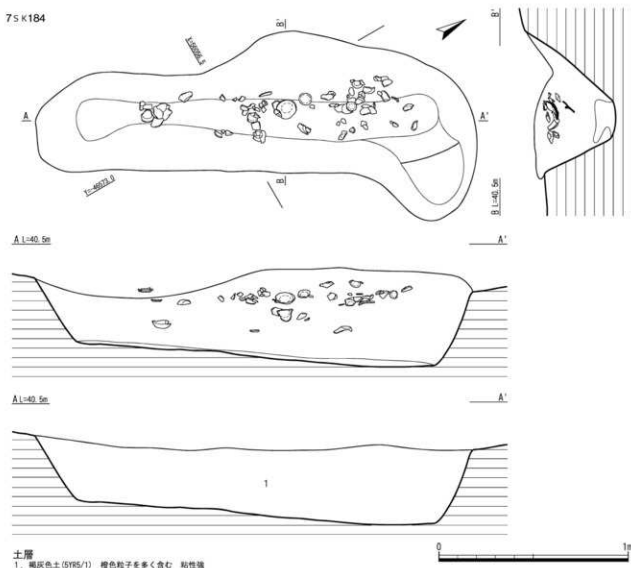


Fig. 348 7SK184遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/20)

りである。11は復原口径10.7cm, 底径6.7cm, 器高3.0cmを測る。9・10に比べ胴部が外に開かない。12は復原口径10.0cm, 底径6.7cm, 器高2.2cmを測る。底部と胴部の境に不明瞭な稜を持つ。胴部下半はやや丸みを持ち、口縁部は短く直線的に立ち上がる。イト切り後に工具痕が見られる

環b (13・14) 13は口径12.3cm, 底径4.9cm, 器高3.8cmを測り, 14は口径12.0cm, 底径5.2cm, 器高3.5cmを測る。底部と胴部の境に稜が付き胴部が直線的に大きく外に開く器形である。底径は環aと比べ縮小する。内面はナデを施さずクロ目を残す。

龍泉窯系青磁

鉢 (15) 体部片で未分類資料である。残存器高2.0cmを測る。明灰白色の胎土で、釉調は暗緑灰色の不透明で光沢がある。硬質で大きな貫入がまばらに入り、花卉のような模様が内面に施してある。焼成良好である。

7SK197

遺構 (Fig. 350)

C地区上段AD16区に位置し, 7SK126に切られる。平面形は楕円形を呈し, 長軸0.87m, 短軸0.70m, 深さ0.40mを測る。土師器・須恵器等が出土しているが小片のため時期の判別には至らなかった。

7SK632

遺構 (Fig. 351)

D地区南側, BF14区他に位置する土坑である。7SK633・634を切る。平面形は不整形を呈し、長軸0.93m、短軸0.42m、深さ0.14mを測る。遺物は小坏c2が出土しているが、それ以外ではIB期の遺物が主体的に出土している。

遺物 (Fig. 352, Pl. 56-250)

7SK632黄褐色土

須恵器

蓋1 (1) かえりは口縁端部と同一面をなす。へら切りである。

坏a1 (2・3) 2は底部から丸みを持って胴部が立ち上がる。へら切りの痕跡が顕著で、底部の成形が悪い。へら記号が施される。3は底部から丸みを持って胴部が立ち上がる。へら切りである。いわゆる「赤焼け」である。

坏c1 (4) 底部から丸みを持って胴部が立ち上がり口縁部は直立する。底部は平坦面で胴部との境に回転へラケズリが施され稜が見られる。底面の内側に高く先端をはねあげる形状の高台が貼り付けられている。

小坏c2 (5) 復原口径9.0cmを測る小型の坏である。底部と胴部の境に断面四角形の低高台を貼り付けている。回転へラケズリ後にナデと思われる。へら切りである。

7SK633

遺構 (Fig. 353)

D地区南側, BF14区他に位置する土坑である。遺構の切り合い関係は7SK634を切り、7SK632に切られる。平面形は不整な長方形を呈し、長軸0.54m、深さ0.16mを測る。遺構の埋没時期は、大宰府編年のIA期以降と考えられる。

遺物 (Fig. 354, Pl. 57-251, 254)

7SK633黄茶色土

須恵器

坏c1 (1) 底部平坦面から丸みを持って胴部が立ち上がり口縁部は直立する。高台は高く先端部をは

7SK184焼灰色土

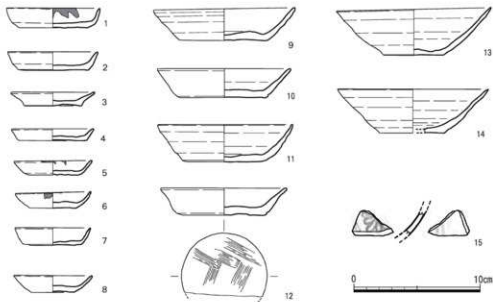
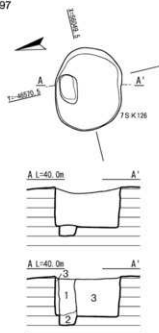


Fig. 349 7SK184出土遺物実測図 (1/3)

7SK197



土層

1. にぶい褐色土(7.5YR5/4) 砂粒を少量含む 暗褐色土を含む
 2. 灰白色土(10YR8/2) 砂粒を少量含む 粘性強
 3. 褐色土(7.5YR6/5) 砂粒を多く含む 炭化物を少量含む



Fig. 350 7SK197遺構平面図・土層図
 および断面見通し図 (1/40)

ねあげる。底部の平坦面に貼り付けられる。高台内にへら記号が施される。

坏×蓋(2) 胴部から丸みを持って口縁部が立ち上がる。小田IVB期に該当するものかと思われる。

土製品

管状土鍾(3) 孔径0.7cmを測る。表面は剥落により調整は不明である。土師質である。

7SK634

遺構 (Fig. 355, Pl. 24-115)

D地区南側, BF14区他に位置する土坑である。切り合い関係は7SK632・633に切られる。平面形は不整形を呈し、長軸1.16+ α m、短軸1.29m、深さ0.32mを測る。

層位は、灰黄色土1層のみで埋没し、多量の須恵器・土師器等の破片が出土している状況から、廃棄土坑と考えられる。また、鉄滓も少量出している。遺構の埋没時期は、大宰府編年のIA期以降と考えられる。

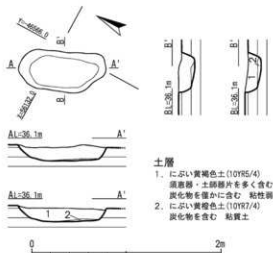
遺物 (Fig. 356, 357, Pl. 57-252, 253, 58-257)

7SK634灰黄色土

須恵器

蓋1(1) つまみは扁平な擬宝珠状を呈し、かえりは口縁端部と同一面をなしている。天井部まで回転ヘラケズリを施し

7SK632



土層

1. にぶい黄褐色土(10YR5/4)
 須恵器・土師器片を多く含む
 炭化物を僅かに含む 粘性弱
 2. にぶい黄褐色土(10YR7/4)
 炭化物を含む 粘質土

Fig. 351 7SK632遺構平面図・土層図
 および断面見通し図 (1/40)

7SK632黄褐色土

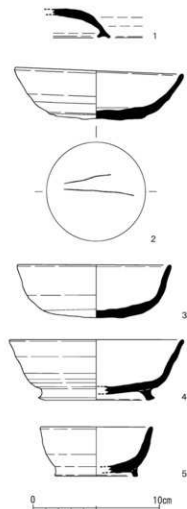


Fig. 352 7SK632出土遺物実測図 (1/3)

ている。

環c1(2) 底部平坦面から胴部下半は回転ヘラケズリを施し丸く成形している。口縁部は直立する。底部平坦面に高台が貼り付けられる。c2タイプに類似する。

環a1(3) 底部平坦面から丸みを持って胴部が立ち上がり口縁部は直立する。口縁端部を強くつまんで回転ナデを施すため沈線状に段がついている。ひずみが大きい。

高環a(4) 短脚の高環である。環aを貼り付ける。高台形は脚端部で内側に屈折する。

小壺(5) 未分類資料である。丸みを持つ胴部が肩部で内に屈曲し口縁部が直立する器形である。内・外面は横方向のナデが施される。

大甕(6・7・8) 6は頸部から大きく外反する器形で端部は複雑な三本の突帯状をなす。7・8は頸部から大きく外反する器形で胴部外面に平行のタタキ、内面に青海波のあて具の痕跡が見られる。7の端部は6に比べ簡略化された形態。8の端部は外に拡張された平坦な端面を持ち、断面は三角形の形状を呈する。

瓦

平瓦(9) 7SX065と接合する。凹面は縦方向の指ナデが施され、爪あとが残る。凸面は工具による横方向のナデが見られる。須恵質である。6c末の神ノ前窯の瓦と類似する。

金属製品

鉄鑿(10) 長さ8.1cm、刃部付近の断面は、長さ0.8cm、幅0.6cm、身部の断面は、長さ0.5cm、幅0.45cmを測る。別の鉄製品が付着する。

7S K737

遺構 (Fig. 358)

D地区BH14区他に位置する土坑である。切り合い関係は7ST807を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.65m、短軸0.68m、深さ0.15mを測る。墓塚の可能性も考えたが、遺物が著しく摩滅していることから分かるように、遺構の残存状況は悪く、遺構の形状も不整形であるため、墓塚とまでは言及しがたい。そのため、土坑として捉えた。

遺物は、土師器小皿a・丸環aが浮いた状態で出土している。また、鉄釘が2点出土しているが、7ST807からの混入と考えられる。

7S K633

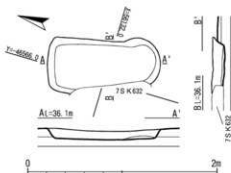


Fig. 353 7SK633遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7S K633黄褐色土

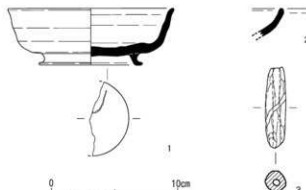


Fig. 354 7SK633出土遺物実測図 (1/3)

7S K634

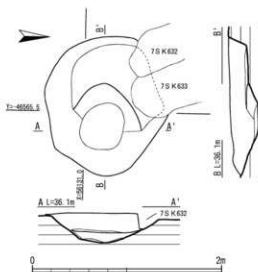


Fig. 355 7SK634遺構平面図・土層図および断面見通し図 (1/40)

7SK634灰黄色土

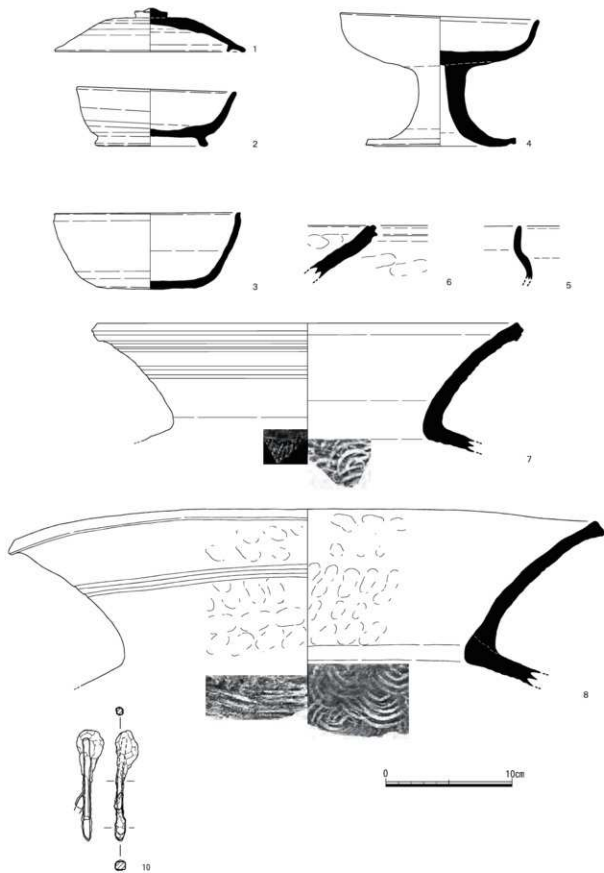


Fig. 356 7SK634出土遺物実測図 (1) (1/3)

75 K634灰黄色土

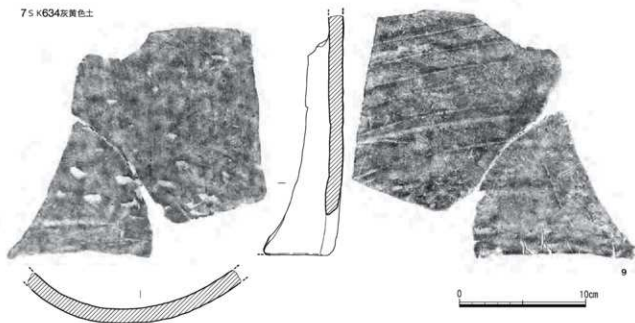


Fig. 357 75K634出土遺物実測図 (2) (1/3)

75 K737

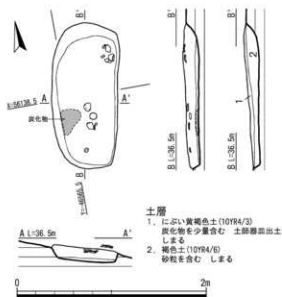


Fig. 358 75K737遺構平面図・土層図
および断面見通し図 (1/40)

75 K737褐色土

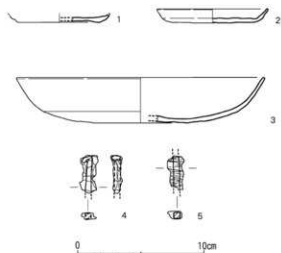


Fig. 359 75K737出土遺物実測図 (1/3)

遺物 (Fig.359, PL.57-255, 256)

7SK737褐色土

土師器

小皿a (1・2) 1はイト切りが見られる。2は回転ヘラ切り後に板状圧痕である。

丸坏a (3) 底部から口縁部まで丸みを持つ。復原口径で19.7cmを測り大型である。調整は磨耗のため不明である。

金属製品

鉄釘 (4・5) 4は頭部が屈曲する。5は棺材の木質が付着し、木質残存範囲は $2.8+\alpha$ cmを測る。

(文責 黒木正行・平島義孝・小石龍信)

Tab.24 柩造構一覧表

※ 単位はcm

遺構名	全長	長軸方向	備考
1 7S A744	6.74	N 47° E	柱穴位置を推測した a b c e 上に柱穴が埋る

Tab.25 溝一覧表

※単位はm, +αは埋存深。

遺構名	全長	最大幅	最小幅	最深部	備考
1 7S D079	15.50	1.12	0.59	0.59	斜面 (B地区) と平野面 (D地区) の境目にある
2 7S D115	30.00+α	15.00	6.50	1.07	北に下る斜面
3 7S D188	11.18	1.31	0.28	0.16	窓に対する排水溝の可能性がある
4 7S D189	10.70	1.06	0.20	0.20	窓に対する排水溝の可能性がある
5 7S D312	1.90	0.61	0.33	0.15	C部とA部を結ぶ道の可能性あり
6 7S D380	5.20	0.90	0.35	0.25	鎌やかたカーブを描きながら東から北に延びる
7 7S D406	8.10+α	1.30	0.47	0.18	北端が両側に若干折れ曲がり影らむ
8 7S D731	1.10	0.25	0.15	0.11	7S D732と同一か?
9 7S D732	8.60	0.70	0.20	0.15	7S D731と同一か?

11) 包含層出土遺物

にぶい茶色土出土遺物 (Fig.360, Pl.58-259・2)

須恵器

小壺 (1) 完形品であり、底部へラ切り後にナデが施され板状圧痕も残る。底部は平坦面となっており、体部との境には稜線が入り、口縁端部はつまみ上げられた様な形状を呈し、回転ナデで仕上げられている。

暗黄茶褐色土出土遺物 (Fig.360, Pl.59-264・6, 60-271)

銭貨

銅銭 (1) 北宋銭の至道元宝 (995年初鑄) である。草書体で文字が描かれている。

石製品

石鉄 (2) 腰岳産黒曜石製の石鉄である。基部の挟りは浅く、二等辺三角形を呈する。

暗褐色土出土遺物 (Fig.360, Pl.60-270)

銭貨

銅銭 (1) 北宋銭の大観通宝 (1107年初鑄) である。

灰黄色土出土遺物 (Fig.360, Pl.58-259・1)

須恵器

坏c1 (1) 高台は薄くつくられ、体部外面に山形のへラ記号を有する。復原口径13.0cm、器高4.6+ α cmである。内底面はナデで、他は回転ナデである。

褐黑色土出土遺物 (Fig.360, Pl.58-260)

須恵器

蓋3 (1・2) 1は口縁部の破片で、口縁は退化的な断面三角形を呈している。2も口縁部の破片であり、口縁部形状は、同型式内でのバリエーションとして捉えられる。

皿a (3) 口縁部から底部の破片で、体部は底部から直線的であるが緩やかに立ち上がる。底部は回転

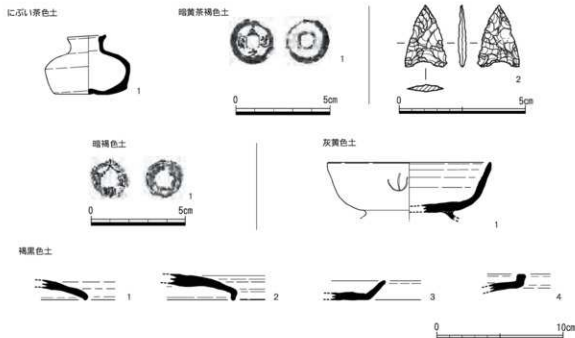


Fig. 360 にぶい茶色土, 暗黄茶褐色土, 暗褐色土, 灰黄色土, 褐黑色土出土遺物実測図 (2/3, 1/2, 1/3)

へラ切り後にナデであり、内・外面とも回転ナデが施されている。

高環b (4) 口縁部破片で、口縁端部は平坦となり、回転ナデが施されている。
褐色土出土遺物 (Fig.361, Pl.58-261)

須恵器

蓋c 3 (1・2) 1はつまみを貼付けた痕跡が残っており、断面三角形の口縁である。内・外面に重ね焼きの痕跡が残る。2はボタン状つまみを有し、口縁は断面三角形を呈する。つまみ径1.7cm、つまみ高0.7cm、高さ2.3cmである。

環c 3 (3) 口縁部から底部にかけての破片で、高さ4.0cmを計る。高台貼付け後に回転ナデが行われ、内底面には不定方向のナデが施される。

瓦

丸瓦 (4) 玉縁部の破片で、外面にわずかに斜格子目のタタキが見られ、内面は布目痕が残る。

黒黄茶色土出土遺物

(Fig.362, Pl.58-262, 59-264・7, 60-266・2)

須恵器

蓋3 (1) 口縁部の破片でやや丸味を持つ断面三角形の口縁端となり、内・外面とも回転ナデである。

環c 3 (2) 高台付近の破片であり、平坦な底部からやや外湾ぎみに体部が立ち上がる。器高 $3.7+\alpha$ cmである。重ね焼きの痕跡も認められる。

高環b (3) 口縁部の破片であり、口縁端部はやや内傾する平坦面を持ち、体部との境は丸味を帯びている。

鉢a 1 (4) 口縁部の破片である。僅かに内湾する口縁を持ち、端部が丸い。胴部は丸みを帯びる。胴部に浅めの沈線が3条見られる。

土製品

土錘 (5) 両端部欠損している。断面楕円形を呈し、穿孔は偏孔する。摩滅が著しい。土師質である。

金属製品

鉄釘 (6) 断面は0.3cm四方を測る。部位は不明である。

石製品

打製石鍬 (7) 片岩製の打製石鍬である。基部の両側縁に浅い抉りを持つ。刃部は偏よっている。

黒褐色土出土遺物 (Fig.363, Pl.60-268, 269)

銭貨

銅銭 (1・2) 1は新寛永である。2は明治9年鑄造の半銭銅貨である。

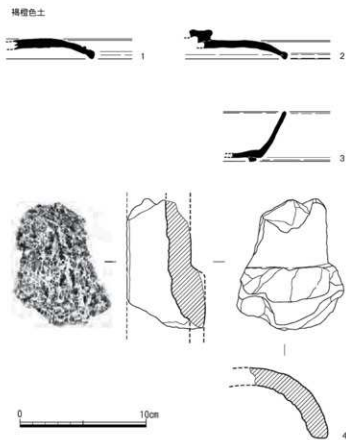


Fig.361 褐色土出土遺物実測図 (1/3)

赤褐色土出土遺物

(Fig.364, Pl.59-263,264・1-5)

縄文土器

浅鉢(1) 精製である。やや外反する器形である。内面に横方向のミガキが施される。

深鉢(2) 粗製である。内に屈曲する器形である。調整は内・外面とも板状工具によるケズリである。

深鉢(3) 粗製である。やや外傾する器形である。外面は二枚貝条痕を横方向に施し、内面は板状工具によるケズリを施す。

石製品

石鎌(4) 安山岩製の石鎌である。幅広くやや厚みのある縦に長い剥片を素材としている。表裏面ともに素材の剥離面を残す。丁寧なつくりである。

削器(5) 腰岳産黒曜石製のサイドスクレイパーである。縦長の剥片の両側縁にやや急斜度の刃部を作出している。表面に自然面を残す。

石核(6) 腰岳産黒曜石製の石核である。4~5cm大の角礫を素材とし、打面を頻繁に変えてサイコロ状に剥片剥離を行っている。

使用痕剥片(7・8) 使用痕のある剥片である。7は両側縁に微細な剥離痕が見られる。8は右側縁に剥離痕が見られる。

赤黒色土出土遺物(Fig.365, Pl.59-265)

須恵器

蓋c3(1) つまみは欠損しており、その痕跡のみ残る。口縁端部は断面三角形を呈している。内・外面に重ね焼きの痕跡を有する。

坏c3(2) 扁平な高台はやや外側に貼付けられ、平坦な底部から直線的に体部が立ち上がる。

淡黄褐色土出土遺物(Fig.366, Pl.59-264・8)

石製品

磨製石斧(1) 暗灰色を呈する堆積岩を素材とした磨製石斧である。基部側を大きく欠損する。刃部には使用による刃こぼれが見られる。

淡茶色土出土遺物(Fig.367, Pl.60-266・1)

金属製品

鉄斧(1) 長さ7.8cm、残存幅3.9+ α cm、厚さ1.5cmを測る。断面を観察すると厚さ0.2cm前後の鉄板が4枚程度重なり合っているように見える。また、棒状鉄製品が2箇所で見られる。

黒黄茶色土

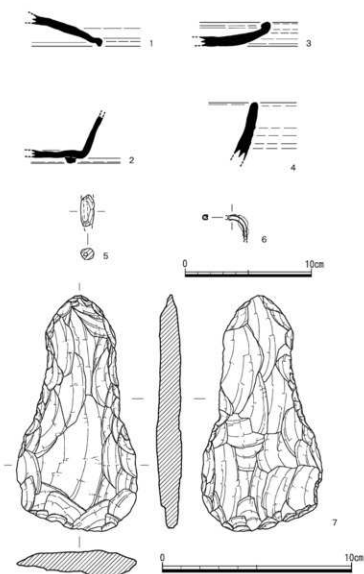


Fig.362 黒黄茶色土出土遺物実測図(1/2, 1/3)

黒褐色土



Fig.363 黒褐色土出土遺物実測図(1/2)

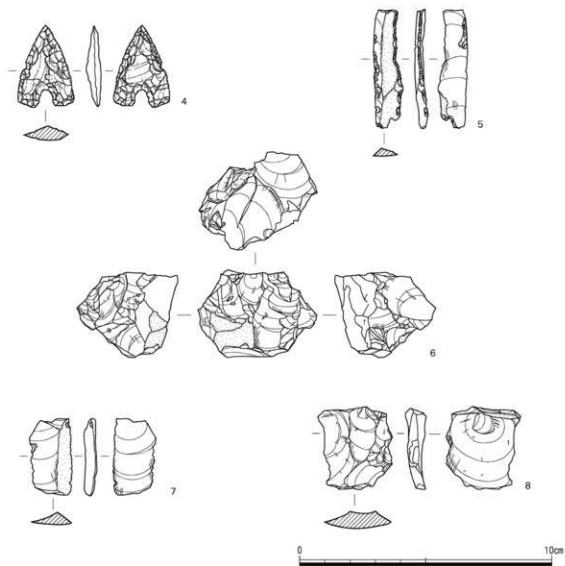
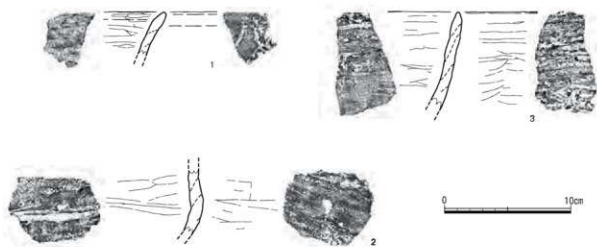


Fig.364 赤褐色土出土遺物実測図 (2/3, 1/3)

12) その他の遺構の出土遺物

7S X046 黒橙色土

(Fig. 368, Pl. 60-273・1)

須恵器

坏c (1) 未分類資料である。7ST043・47で接合した。底部は平坦で胴部が丸みを持って立ち上がり、口縁部は直立する。高台は長く、断面三角形の形状を呈する。高台は底部の平坦面に貼り付けられる。調整は内面にロクロ目を密に残している。回転ヘラ切りである。

赤黒色土

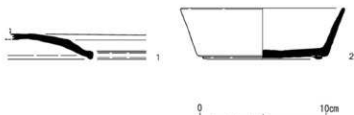


Fig. 365 赤黒色土出土遺物実測図 (1/3)

7S X117 黒灰褐色土

(Fig. 368, Pl. 60-273・2)

須恵器

壺 (1) 長頸壺の胴部と思われる。胴部は稜を持たず丸みを帯びる。表面は横方向のハケ目が見られる。

7S X182 にぶい黄橙色土

(Fig. 368, Pl. 60-273・3)

土師器

坏a (1) 復原底径7.2cmを測る。底部平坦面から段が付き胴部が斜め上方に延びる器形である。回転イト切りである。

淡黄褐色土

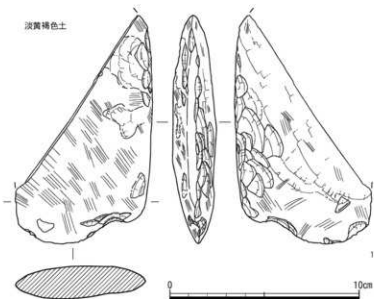


Fig. 366 淡黄褐色土出土遺物実測図 (1/2)

7S X429 暗灰黄色土

(Fig. 368, Pl. 60-273・4)

須恵器

壺 (1) 未分類資料である。底部脇を台状にケズリだし、胴部が斜め上方に延びる器形である。回転ヘラ切りである。

7S X636 (Fig. 368, Pl. 60-273・5)

須恵器

瓶 (1) 底部からやや外に傾く器形である。底部に穿孔が見られる。内面は縦方向のナデが施される。

7S X736 褐色土 (Fig. 368, Pl. 60-273・6, 61-275・1)

須恵器

鉢a 3 (1) 胴部が外開きで丸みを有し、口縁部が内湾する器形である。口縁端部を沈線状に回転ナデを施している。

金属製品

刀子 (2) 鉄製品である。長さ4.0+αcm, 幅1.6cm, 厚さ0.2cmを測る。関部が確認できたため、刀子と判断した。

7S X738 褐色土 (Fig. 368, Pl. 60-273・7)

土師器

碗c (1) 底部片のみ出土した。太くて高い断面三角形の高台が底部と胴部の境に貼り付けられる。器壁が0.8cm程で非常に厚い。

淡茶色土

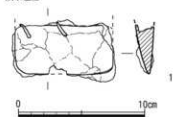


Fig. 367 淡茶色土出土遺物実測図 (1/3)

7S X743褐色土 (Fig. 368, Pl. 61-274・1, 2)

須恵器

坏a (1) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。底面に回転ヘラ切り後に板状圧痕が見られる。胴部外面には黒色に変色した部分が見られた。焼成時の植物の痕跡と思われる。

壺a (2) 短頸壺。丸みを持つ胴部から口縁部が直立気味に短く立ち上がる。口縁端部は平坦面が見られる。

7S X762黄褐色土 (Fig. 368, Pl. 61-274・3~5)

土師器

坏d (1~3) 1は復原口径16.2cm, 復原底径8.9cm, 器高3.6cmを測る。底部と胴部の境に稜があり胴部が直線的に外に開く器形である。胴部外面下位に回転ヘラケズリが施されるが、ミガキは施されない。ヘラ切りである。2は復原口径15.2cm, 復原底径8.6cm, 器高4.3cmを測る。底部と胴部の境の稜は不明瞭で、底面は丸みを帯びる。調整は磨耗が著しく不明である。3は口縁部片が出土した。外開きに傾く。内・外面にミガキが施される。

7S X797褐色土 (Fig. 368, Pl. 61-274・6, 7)

須恵器

蓋 (1) つまみの有無は不明である。口縁端部は若干肥厚する。天井部は回転ヘラ切り痕が顕著に残る。小田編年IVB期と思われる。

坏c 3 (2) 底部と胴部の境に稜を持ち、口縁部が直立する器形である。断面四角形の低高台が底面の内側に貼り付けられる。ヘラ切りである。

7S X823暗褐色土 (Fig. 368, Pl. 61-274・8)

須恵器

壺蓋 (1) 口径8.4cm, 天井径6.0cm, 器高3.1cmを測る小型の蓋である。天井部と胴部の境は丸みを帯び、胴部は直線的に立ち上がる器形である。天井部は不定方向のナデにより平坦面が見られ、端にヘラ記号が施される。

7S X866褐色土 (Fig. 368, Pl. 61-274・9, 10)

須恵器

提瓶 (1) 丸みを有する胴部に、外反した口縁部が貼り付けられる。口縁部は横方向のナデが施されるが、胴部は縦方向のナデが施されている。口縁部を主体として実測したが、横に傾く可能性が考えられる。

蓋 (2) 転用碗である。天井部内面に墨痕が見られる。つまみや口縁端部が欠損しているため詳細な時期は不明である。天井部に回転ヘラケズリがなく、体部の器壁が一段薄くなることから、蓋3を転用したものと思われる。

7S X488黒褐色土 (Fig. 368, Pl. 61-276)

銭貨

銅銭 (1) 新寛永である。

(文責 秀島龍男・島内浩輔)

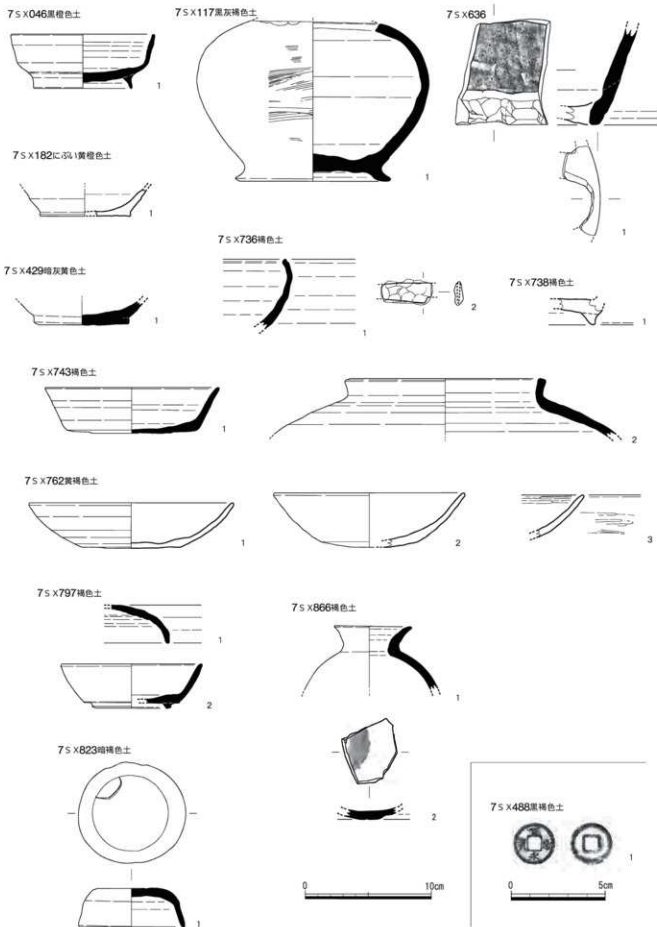


Fig. 368 その他の遺構の出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

Tab.26 土器観察表(1)

所在地(標号)	土器 器名/出土層	採掘年	定年	種類	口径	器高	口径	備考	番号	写真掲載	写真掲載%	
75 T 001	灰褐色土	16	1	四角陶器	柄	-	5.0-a	5.0		0 0 1	25-108-1	
75 T 006	黄褐色土	22	1	肥土	皿	12.9	3.0 ~ 3.1	4.8		0 0 1	25-108-2	
75 T 008	黒褐色土	27	1	四角陶器	突座	(6.5)	1.8 ~ 2.0	(6.0)		0 0 1	25-108-3	
75 T 014	黒褐色土	42	1	四角陶器	埴内筒	(8.0)	3.0	3.8		0 0 1	25-108-4	
75 T 023	灰褐色土	48	1	肥土	埴内筒	(11.6)	3.3	4.0		0 0 1	25-108-5	
75 T 024	灰褐色土	53	1	肥土	小片	(7.7)	5.8	(8.5)		0 0 1	25-108-6	
75 T 027	黄褐色土	82	2	四角陶器	小皿	8.5	2.3 ~ 2.4	3.1	イト	0 0 1	25-108-7	
75 T 027	灰褐色土	82	2	土師器	小皿	8.5	2.3 ~ 2.4	(6.2)		0 0 1	25-108-8	
75 T 028	灰褐色土	82	1	肥土	小片	6.9	4.0 ~ 4.1	3.2	イト	0 0 1	25-108-9	
75 T 029	赤褐色土	87	1	肥土	小片	(6.0)	2.5	2.4		0 0 1	25-108-10	
75 T 029	陶器片	87	1	四角陶器	柄	-	6.0-a	-		0 0 1	25-108-11	
75 T 030	?	250	2	土師器	埴内筒	(15.3)	3.3	(8.0)	ヘア	0 0 1	46-060-1	
75 T 030	?	250	1	黄褐色土	埴内筒	-	28.1-a	-		0 0 2	46-060-2	
75 T 031	黄褐色土	59	1	肥土	小筒	6.2	4.4 ~ 4.5	3.2		0 0 1	25-108-12	
75 T 034	陶器片	81	1	四角陶器	埴内筒	-	6.0-a	-		0 0 1	25-108-13	
75 T 046	黄褐色土	178	1	肥土	埴内筒	(11.4)	4.3	7.8	表分組	0 0 1	60-023-1	
75 T 048	灰褐色土	201	1	土師器	小皿	6.1	1.8	6.3	イト	0 0 1	30-101-1	
75 T 048	灰褐色土	201	2	土師器	小皿	6.5	1.4	7.2	イト	0 0 2	30-101-2	
75 T 067	灰褐色土	233	2	四角陶器	小片	(5.8)	2.0-a	-		0 0 1	31-127	
75 T 084	黄褐色土	112	1	四角陶器	皿	-	1.8-a	-		0 0 1	27-121-1	
75 X 005	陶器片	309	7	灰褐色土	埴内筒	-	4.1-a	-		0 0 1	50-200-8	
75 X 005	陶器片	306	4	灰褐色土	埴内筒	-	3.7-a	(6.4)		0 0 1	50-200-6	
75 X 005	陶器片	306	6	灰褐色土	埴内筒	-	1.8-a	-		0 0 1	65-030-1	
75 X 005	陶器片	306	2	灰褐色土	埴内筒	-	1.7-a	-		0 0 4	52-030-1	
75 X 005	陶器片	306	3	灰褐色土	埴内筒	-	1.7-a	-		0 0 5	52-030-2	
75 X 006	陶器片	306	5	灰褐色土	埴内筒	-	2.7-a	-	表分組	0 0 1	52-030-5	
75 X 006	陶器片	306	1	灰褐色土	埴内筒	-	1.1-a	-	ヘア	0 0 7	52-030-7	
75 X 006	?	306	8	灰褐色土	埴内筒	-	3.3-a	(11.4)	ヘア	0 0 1	52-030-8	
75 T 077	黄褐色土	179	1	肥土	小片	(7.2)	4.0	5.0		0 0 1	29-120-1	
75 T 077	黄褐色土	179	1	肥土	小片	(7.2)	4.0	5.0		0 0 1	29-120-2	
75 T 077	黄褐色土	179	1	肥土	小片	6.2 ~ 6.7	3.9	2.3		0 0 1	29-120-3	
75 T 074	黄褐色土	179	1	肥土	小片	-	2.3-a	-		0 0 1	29-120-4	
75 T 076	黄褐色土	179	1	土師器	小皿	(7.4)	5.1	(6.8)	イト	0 0 1	29-120-6	
75 T 077	黄褐色土	179	1	肥土	小片	(7.2)	4.0	5.0		0 0 1	29-120-5	
75 T 077	オリーブ系土	179	1	土師器	小皿	(6.8)	1.1	6.2	イト	0 0 1	29-120-7	
75 D 079	黄褐色土	343	1	四角陶器	皿	-	7.0	(4.8)		0 0 1	59-046	
75 T 079	黄褐色土	343	2	土師器	小片	-	2.7-a	-		0 0 1	59-047	
75 T 080	黄褐色土	307	1	肥土	小片	6.9	3.9	3.1		0 0 1	30-101-3	
75 T 088	?	211	1	四角陶器	埴内筒	-	3.2-a	-		0 0 1	30-101-4	
75 T 089	黄褐色土	212	1	四角陶器	小片	-	1.6-a	-		0 0 1	30-101-5	
75 T 092	黄褐色土	215	1	肥土	小片	-	2.0	2.0		0 0 1	30-101-7	
75 T 092	江土(黄褐色)	215	1	灰褐色土	埴内筒	-	3.9-a	-	表分組	0 0 1	30-101-6	
75 T 094	黄褐色土	218	1	四角陶器	小片	-	2.5-a	-		0 0 1	30-101-8	
75 T 098	灰褐色土	275	1	四角陶器	埴内筒	-	2.5-a	-		0 0 1	30-101-9	
75 T 098	灰褐色土	275	2	四角陶器	埴内筒	-	2.5-a	-		0 0 1	30-101-10	
75 X 005	灰褐色土	278	2	黄褐色土	埴内筒	-	1.2-a	-		0 0 1	30-220-2	
75 X 005	灰褐色土	278	3	灰褐色土	埴内筒	(13.5)	1.2	(14.8)	ヘア	0 0 1	30-220-3	
75 X 005	灰褐色土	278	8	灰褐色土	埴内筒	-	1.8-a	-	ヘア	0 0 1	30-220-7	
75 X 005	灰褐色土	278	9	灰褐色土	埴内筒	-	3.1-a	-	表分組	0 0 1	30-220-7	
75 X 005	灰褐色土	278	10	灰褐色土	埴内筒	(13.2)	3.1-a	-	表分組	0 0 1	30-220-8	
75 X 005	灰褐色土	278	11	灰褐色土	埴内筒	(11.6)	3.1-a	-		0 0 1	30-220-9	
75 X 005	灰褐色土	278	12	灰褐色土	埴内筒	(14.0)	3.8	8.8	ヘア	0 0 1	30-220-10	
75 X 005	灰褐色土	278	13	灰褐色土	埴内筒	14.9	3.0 ~ 3.2	8.8	ヘア	0 0 1	30-220-11	
75 X 005	灰褐色土	278	14	灰褐色土	埴内筒	13.4	4.3 ~ 4.4	7.7	ヘア	0 0 1	30-220-12	
75 X 005	灰褐色土	278	4	黄褐色土	埴内筒	-	1.1	-	イト	0 0 7	49-021-7	
75 X 005	灰褐色土	278	5	黄褐色土	埴内筒	(13.4)	3.5	(9.4)	ヘア	0 0 1	49-021-9	
75 X 005	灰褐色土	278	2	灰褐色土	埴内筒	12.8	1.1 ~ 1.2	7.9		0 0 1	49-021-5	
75 X 005	灰褐色土	278	3	灰褐色土	埴内筒	(13.2)	1.6 ~ 1.7	8.8		0 0 1	49-021-6	
75 X 005	黄褐色土	285	6	灰褐色土	埴内筒	(15.4)	4.6	9.8	ヘア	0 0 1	49-021-8	
75 X 005	黄褐色土	282	12	黄褐色土	埴内筒	最大(1.4)	最大(1.2)	最大(1.1)	(黄褐色)	0 0 1	49-021-13	
75 X 005	黄褐色土	282	9	黄褐色土	埴内筒	6.8	(16.2)	1.0	(14.3)		0 0 1	49-021-10
75 X 005	黄褐色土	282	13	土師器	埴内筒	(13.6)	5.0-a	-	表分組	0 0 1	49-021-11	
75 X 005	黄褐色土	282	7	黄褐色土	埴内筒	14.8	3.7 ~ 4.0	8.7	ヘア	0 0 1	49-021-9	
75 X 005	黄褐色土	282	4	黄褐色土	埴内筒	12.9	3.7 ~ 4.0	8.8	ヘア	0 0 1	49-021-8	
75 X 005	黄褐色土	282	5	黄褐色土	埴内筒	14.1	3.9 ~ 4.1	8.6	ヘア	0 0 1	49-021-7	
75 X 005	黄褐色土	282	9	黄褐色土	埴内筒	(13.7)	1.7 ~ 2.1	15.3	ヘア	0 0 1	49-021-12	
75 X 005	黄褐色土	282	3	灰褐色土	埴内筒	(13.3)	3.2	(10.4)		0 0 1	49-021-6	
75 X 005	黄褐色土	282	10	黄褐色土	埴内筒	14.9	2.2	11.9	ヘア	0 0 1	49-021-9	
75 X 005	黄褐色土	282	11	黄褐色土	埴内筒	14.8	2.0	(11.1)		0 0 1	49-021-10	
75 X 005	黄褐色土	282	1	黄褐色土	埴内筒	16.1	5.0 ~ 5.0	8.8	ヘア	0 0 1	49-021-5	
75 X 005	黄褐色土	282	1	黄褐色土	小皿	-	2.1	-		0 0 1	49-021-7	
75 X 005	黄褐色土	282	14	黄褐色土	小皿	-	4.0-a	-	(紅土黄褐色土)	0 0 1	49-021-12	
75 D 015	緑褐色土	349	1	土師器	小皿	-	3.3-a	-	(黄褐色)	0 0 1	59-046-5	
75 D 015	緑褐色土	349	2	土師器	小皿	-	8.1-a	-	(黄褐色)	0 0 1	59-046-4	
75 D 015	緑褐色土	349	1	土師器	埴内筒	-	10.0-a	-	(黄褐色)	0 0 1	59-046-3	
75 D 015	黄褐色土	349	1	土師器	埴内筒	-	1.4-a	(6.1)	(黄褐色)	0 0 1	59-046-1	
75 D 015	黄褐色土	349	1	土師器	埴内筒	-	1.2-a	12.3	(黄褐色)	0 0 1	59-046-2	
75 X 005	黄褐色土	347	1	黄褐色土	埴内筒	-	5.0-a	-	表分組	0 0 1	50-208	
75 X 005	黄褐色土	349	1	土師器	小皿	-	3.3-a	(7.1)	イト	0 0 1	50-209-3	
75 X 005	黄褐色土	349	6	土師器	小皿	6.9	1.7 ~ 1.3	3.7	イト	0 0 1	50-209-1	
75 X 005	黄褐色土	319	1	土師器	小皿	7.1	1.6	5.1	イト	0 0 1	50-209-8	
75 X 005	黄褐色土	319	9	土師器	小皿	11.2	2.8 ~ 2.6	6.9	イト	0 0 1	50-209-12	
75 X 005	黄褐色土	319	7	土師器	小皿	8.9	1.4	(3.8)	イト	0 0 1	50-209-7	
75 X 005	黄褐色土	349	10	土師器	埴内筒	(10.6)	2.3	7.0	イト	0 0 1	50-209-10	
75 X 005	黄褐色土	349	13	土師器	埴内筒	12.3	3.5 ~ 3.4	4.9	イト	0 0 1	50-209-14	
75 X 005	黄褐色土	319	8	土師器	小皿	6.5	1.3 ~ 1.4	3.4	イト	0 0 1	50-209-5	
75 X 005	黄褐色土	319	7	土師器	小皿	7.2	1.4	(4.0)	イト	0 0 1	50-209-6	
75 X 005	黄褐色土	319	11	土師器	埴内筒	10.7	3.0	6.7	イト	0 0 1	50-209-11	
75 X 005	黄褐色土	349	8	土師器	埴内筒	(10.0)	2.2	6.1	イト	0 0 1	50-209-8	
75 X 005	黄褐色土	349	4	土師器	小皿	(6.5)	0.9	(6.4)	イト	0 0 1	50-209-9	

Tab.27 土器観察表(2)

出土層序(単位)	土器 数(上) 種類	図記号	発祥地	形状	器形	口径	器高	底径	備考	参考書	写真図版No.
75 K194	黒色土	349	5	土師器	小皿a	8.2	1.2	3.8	イト 内底ナツク 底心○	01 2	36-257-4
75 K194	黒色土	349	3	土師器	小皿a	(9.0)	1.1	(4.0)	イト 内底ナツク 底心○	01 3	36-257-6
75 K194	黒色土	349	14	土師器	小皿a	12.6	1.3	5.2	イト 内底ナツク 底心○	01 4	36-257-9
75 K194	黒色土	349	15	土師器	鉢	-	2.0-0.0	-	未分類	01 5	36-257-13
75 L1186	2	296	1	土師器	器形7	14.4	1.6	-	-	02 2	36-258-1
75 L1186	3	296	2	土師器	器形3	(11.7)	1.7	8.1	ヘラ	02 3	36-258-4
75 D1189	3	296	3	土師器	器形2	12.8	3.1-3.4	9.1	ヘラ	02 4	36-258-5
75 D1189	3	296	5	土師器	器形8	3.0	0.9	(7.9)	ヘラ	02 5	36-258-6
75 D1189	12	296	6	土師器	小皿c3	(11.6)	1.6	-	-	02 6	36-258-7
75 D1189	20	296	7	土師器	器形1	15.0	2.0	-	-	02 7	36-258-11
75 D1189	18	296	6	土師器	器形3	18.0	2.3-2.3	14.5	ヘラ	02 8	36-258-10
75 D1189	12	296	5	土師器	小皿5	(11.4)	1.7	7.4	天押8-340	02 9	36-258-8
75 D1189	1	287	1	土師器	器形3	15.0	1.9	0.0	天押特種3	02 10	36-258-10
75 X149	灰黄色土	288	1	土師器	器形3	-	1.7-0.0	-	-	01 1	36-221-11
75 X149	灰黄色土	288	2	土師器	器形3	-	1.4-0.0	-	ヘラ	02 2	36-221-12
75 X200	6	290	3	土師器	器形3	(14.1)	1.9	8.8	-	02 3	36-221-9
75 X200	2	300	1	土師器	器形3	13.6	2.7	天押特種7.4	-	02 4	36-221-10
75 X200	21	290	4	土師器	器形3	(17.4)	2.0	(12.9)	ヘラ 横正○	02 5	36-221-4
75 X200	6	290	2	土師器	器形3	(16.0)	1.9	-	-	02 6	36-221-5
75 X200	6	292	1	土師器	器形3	-	1.9	-	-	01 1	31-223-3
75 X200	6	292	1	土師器	器形3	13.8	2.5	天押特種8	-	01 1	31-223-1
75 X200	6	292	1	土師器	器形3	(16.0)	1.8	(12.7)	ヘラ	02 2	31-223-2
75 X200	6	292	1	土師器	器形3	-	1.5-0.0	-	-	01 2	31-223-4
75 X200	6	292	3	土師器	器形2	(16.0)	3.2	(12.0)	-	01 3	31-223-7
75 X200	6	292	3	土師器	器形3	16.8	2.7	14.4	ヘラ 横正○	02 1	31-223-9
75 X200	6	292	4	土師器	器形3	(12.2)	2.6	(8.2)	ヘラ 横正○	02 3	31-223-6
75 X200	6	292	5	土師器	器形3	12.1	1.4	天押特種8.6	-	02 4	31-223-8
75 X200	6	292	2	土師器	器形3	18.4	1.7	天押特種8.6	-	02 5	31-223-5
75 T220	1	254	1	土師器	器形1	14.9	4.4-4.8	8.6	イト	02 1	44-201
75 T220	1	257	1	土師器	器形2	19.0	4.8	6.6	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形1	12.5	9.0-9.8	6.6	灰黄色	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○	01 1	31-222-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.1	1.9	7.5	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.5	2.0-2.0	7.4	ヘラ	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○	01 1	31-222-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.1	1.9	7.5	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.5	2.0-2.0	7.4	ヘラ	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○	01 1	31-222-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.1	1.9	7.5	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.5	2.0-2.0	7.4	ヘラ	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○	01 1	31-222-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.1	1.9	7.5	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.5	2.0-2.0	7.4	ヘラ	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○	01 1	31-222-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.1	1.9	7.5	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.5	2.0-2.0	7.4	ヘラ	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○	01 1	31-222-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.1	1.9	7.5	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.5	2.0-2.0	7.4	ヘラ	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○	01 1	31-222-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.1	1.9	7.5	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.5	2.0-2.0	7.4	ヘラ	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○	01 1	31-222-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.1	1.9	7.5	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.5	2.0-2.0	7.4	ヘラ	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○	01 1	31-222-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.1	1.9	7.5	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.5	2.0-2.0	7.4	ヘラ	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○	01 1	31-222-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.1	1.9	7.5	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.5	2.0-2.0	7.4	ヘラ	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○	01 1	31-222-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.1	1.9	7.5	灰黄色 横正	01 1	44-203-1
75 T220	1	257	1	土師器	器形3	12.5	2.0-2.0	7.4	ヘラ	01 1	44-202-2
75 T220	1	254	1	土師器	器形3	(18.0)	1.1	(14.4)	ヘラ 横正○	01 1	44-202-7
75 T220	1	118	1	土師器	小皿	9.4	3.1-3.9	2.4	0.4	0.4	37-121-2
75 T220	1	254	1	土師器	小皿	-	2.0-0.0	2.1	-	01 1	44-202-1
75 T220	1	254	1	土師器	丸筒	-	2.5-0.0	-	-	01 1	36-157-4
75 T220	1	254	1	土師器	器形4	(12.9)	3.8	(8.2)	ヘラ 内底ナツク 横正○		

Tab.28 土器観察表(3)

出土遺構(層位)	土色 及び土質番号	総厚%	磁物%	磁別	器種	口径	器高	底径	備考	層番号	寸法図番号	
78 X727	褐色土	308	1	灰青磁	鉢A	—	3.5+0.0	—		0.0 2	59-272-B	
78 X728	3	309	1	土師器	小皿A	—	6.5+0.0	(6.4)	イト 収中X	0.0 1	57-258-1	
78 X729	褐色土	309	2	土師器	小皿A	(8.95)	1.1	(7.4)	イト 内底ナゾO 収中O	0.0 5	57-258-2	
78 X730	褐色土	309	3	土師器	丸形	(18.7)	5.6	(15.4)	イト 内底ナゾO 収中O	0.0 2	57-258-3	
78 X731	褐色土	308	1	土師器	鉢C	—	2.1+0.0	—	ヘラX	0.0 1	59-272-7	
78 X732	褐色土	311	1	土師器	鉢B	—	2.9+0.0	—	ヘラX	0.0 1	52-234-1	
78 X733	褐色土	308	2	土師器	鉢A	18.0	4.5+0.0	—	ヘラ	0.0 1	51-214-2	
78 X734	褐色土	308	1	土師器	鉢A	(12.9)	2.0	(10.3)	ヘラ 収中O	0.0 1	59-274-1	
78 X746	にぶい褐色土	209	1	灰青磁	小皿A	10.0~10.6	2.7	大井筒6.8	ヘラ	0.0 1	54-237-3	
78 X746	にぶい褐色土	209	2	灰青磁	小皿A	11.0	2.1	大井筒6.4	ヘラ	0.0 2	54-237-4	
78 X746	にぶい褐色土	209	2	灰青磁	器	—	1.1	—	ヘラ	0.0 3	54-237-1	
78 X746	にぶい褐色土	209	1	灰青磁	器	—	1.0	—	ヘラ	0.0 5	51-237-2	
78 X746	にぶい褐色土	302	1	灰青磁	器	(18.0)	2.9	16.3	ヘラ 収中O	0.0 1	54-237-8	
78 X750	褐色土	271	1	土師器	鉢A	—	1.8+0.0	—	ヘラ	0.0 1	52-232-5	
78 X755	褐色土	323	3	土師器	鉢A	(13.4)	4.1	高砂色白磁	ヘラ	0.0 2	52-232-6	
78 X755	褐色土	323	1	土師器	器	—	1.1+0.0	—	ヘラ	0.0 3	52-232-2	
78 X755	褐色土	323	2	土師器	器	—	1.9+0.0	—	ヘラ	0.0 4	52-232-4	
78 X760	褐色土	325	1	土師器	器	—	1.8+0.0	—	ヘラ	0.0 1	52-233-8	
78 X760	褐色土	325	3	土師器	器	—	2.2+0.0	(8.2)	ヘラ	0.0 2	52-233-4	
78 X760	褐色土	325	2	土師器	器	—	1.4+0.0	—	ヘラ	0.0 3	52-233-7	
78 X762	4	308	1	土師器	鉢	(16.2)	2.8	(8.9)	ヘラ 収中X	0.0 1	51-274-9	
78 X762	4	308	2	土師器	鉢	(16.2)	6.2	—	ヘラ	0.0 2	51-274-1	
78 X762	褐色土	308	3	土師器	鉢	—	2.4+0.0	—	ミガキ	0.0 1	51-274-5	
78 X765	褐色土	327	3	土師器	鉢C	—	1.9+0.0	(8.4)	ヘラ 収中O	0.0 1	52-232-11	
78 X765	褐色土	327	2	土師器	鉢C	—	1.8+0.0	(14.0)	ヘラ	0.0 2	52-232-10	
78 X765	褐色土	327	1	土師器	鉢B	18.2	1.7	—	ヘラ	0.0 3	52-232-9	
78 X770	褐色土	329	2	土師器	器	(18.0)	2.2	(15.1)	ヘラ	0.0 1	51-231-2	
78 X770	褐色土	329	1	土師器	器	—	1.8+0.0	(12.0)	ヘラ	0.0 2	52-231-1	
78 X780	褐色土	333	1	土師器	器	器	1.4+0.0	—	赤分	0.0 1	52-234-4	
78 X780	褐色土	333	2	土師器	器	—	1.8+0.0	—	赤分	0.0 2	52-234-5	
78 X780	褐色土	333	3	土師器	器	18.3	6.8~7.0	10.3	収中O	0.0 4	52-234-3	
78 X785	褐色土	335	6	土師器	鉢	(17.3)	14.0~0.0	—	ヘラ	0.0 1	52-234-6	
78 X785	褐色土	335	7	土師器	器	—	8.7+0.0	—	ヘラ	0.0 2	52-234-7	
78 X785	褐色土	335	8	土師器	器	—	8.5+0.0	—	ヘラ	0.0 3	52-234-8	
78 X785	褐色土	335	9	土師器	器	—	8.5+0.0	—	ヘラ	0.0 4	52-234-12	
78 X785	褐色土	335	4	土師器	器	小塚(2)X(2)	—	2.3+0.0	(5.5)	ヘラ 収中O	0.0 5	52-234-13
78 X785	褐色土	335	5	土師器	器	—	2.2+0.0	—	ヘラ	0.0 6	52-234-11	
78 X785	褐色土	335	1	土師器	器	小塚(2)	—	1.4	大井筒 収中	0.0 7	52-234-9	
78 X787	褐色土	325	2	土師器	器	(16.4)	2.0~2.1	大井筒 収中	ヘラ	0.0 8	52-234-10	
78 X787	褐色土	308	1	土師器	器	(11.2)	2.5	(8.2)	ヘラ	0.0 1	51-274-6	
78 X787	褐色土	308	1	土師器	器	—	3.0+0.0	—	ヘラ	0.0 2	51-274-7	
78 X789	1	271	1	灰青土師器	鉢C	18.2	(6.5)	高砂色白磁	ヘラ 内底ナゾO	0.0 7	55-268	
78 X823	褐色土	208	2	土師器	器	8.1	2.1	大井筒 収中	ヘラ	0.0 1	51-274-8	
78 X828	1	59	1	土師器	鉢	11.2~11.6	6.9~7.4	4.6	ヘラ	0.0 1	29-119-4	
78 X866	褐色土	337	1	灰青磁	器	—	1.1+0.0	—	ヘラ	0.0 1	52-235-1	
78 X866	褐色土	337	2	灰青磁	器	—	1.4+0.0	—	ヘラ	0.0 2	52-235-2	
78 X866	褐色土	337	3	灰青磁	器	—	3.5+0.0	—	赤分	0.0 3	52-235-3	
78 X866	褐色土	308	1	土師器	器	(6.1)	4.8+0.0	—	ヘラ	0.0 1	51-274-10	
78 X866	褐色土	308	2	土師器	器	—	6.9+0.0	—	赤分	0.0 4	51-274-9	
78 X868	褐色土	303	1	土師器	小皿A	(18.4)	2.3	大井筒 収中	ヘラ	0.0 1	54-237-6	
78 X888	1	226	1	土師器	器	—	2.6+0.0	—	ヘラ	0.0 1	30-112-8	
78 X888	1	169	1	土師器	器	18.2	1.6~2.0	11.7	ヘラ 内底ナゾO 収中X	0.0 1	27-154-8	
78 X899	1	167	1	土師器	小皿A	8.9	1.3	5.4	イト 収中O	0.0 1	27-154-7	
78 X903	褐色土	296	1	土師器	器	(18.0)	2.1	(15.4)	ヘラ	0.0 1	51-258-2	
78 X903	褐色土	269	1	土師器	小皿A	2.1	1.5~1.7	5.8	木分筒 ヘラ 収中O	0.0 1	58-239-2	
赤褐色土	308	2	土師器	鉢C	(13.0)	4.3	(9.3)	ヘラ	0.0 1	59-268-2		
赤褐色土	305	1	土師器	鉢C	—	2.0+0.0	—	ヘラ	0.0 3	59-268-1		
赤褐色土	302	4	土師器	鉢A	—	4.6+0.0	—	ヘラ	0.0 3	59-268-4		
黒褐色土	302	1	土師器	鉢C	—	2.9+0.0	—	ヘラ	0.0 4	58-262-1		
黒褐色土	302	2	土師器	鉢C	—	3.7+0.0	—	ヘラ	0.0 5	58-262-2		
黒褐色土	302	3	土師器	鉢C	—	1.3+0.0	—	ヘラ	0.0 6	58-262-3		
灰褐色土	300	1	土師器	鉢A	(13.0)	4.6+0.0	—	ヘラ	0.0 1	59-268-1		
灰褐色土	300	1	土師器	鉢B	—	1.8+0.0	—	ヘラ	0.0 2	59-268-1		
灰褐色土	300	2	土師器	鉢B	—	2.0+0.0	—	ヘラ	0.0 3	59-268-2		
灰褐色土	300	3	土師器	鉢B	—	1.3	—	ヘラ	0.0 4	59-268-3		
灰褐色土	300	4	土師器	鉢B	—	1.4+0.0	—	ヘラ	0.0 5	59-268-4		
灰褐色土	301	3	土師器	鉢C	—	4.0	—	ヘラ	0.0 4	59-268-3		
灰褐色土	301	2	土師器	鉢C	—	2.3	—	ヘラ	0.0 5	59-268-11		
灰褐色土	301	1	土師器	鉢C	—	1.6+0.0	—	ヘラ	0.0 6	59-268-2		
赤褐色土	304	1	土師器	器	—	3.5+0.0	—	(複製)	0.0 1	59-263-1		
赤褐色土	301	2	土師器	器	—	6.3+0.0	—	(複製)	0.0 2	59-263-2		
赤褐色土	304	3	土師器	器	—	7.8+0.0	—	(複製)	0.0 3	59-263-3		

Tab.29 金属製品觀察表(1)

単位はmm。()は厚さ、∅は内径、φは外径、数字は金属品番号の付加値。

出上名称 (品名)	上巻 取付位置	図番	品番	種類	材質	長さ	幅	厚さ(断面積)	備考	品番	取付位置
78 T001	取付位置	20	1	金属製品	円盤	0.74φ	0.6	0.2		10 1	20-120-1
78 T001	取付位置	20	2	金属製品	円盤	0.74φ	0.6	0.2		10 2	20-120-2
78 T001a	1	25	1	金属製品	縦棒	10.4φ	3.8	0.1		10 1	20-121-1
78 T001a	1	25	2	金属製品	縦棒	9.9φ	3.8φ+α	0.1~0.2		10 2	20-121-2
78 T001a	2	25	2	金属製品	縦棒	9.9φ	3.5	0.1		10 3	20-121-3
78 T001a	4	20	4	金属製品	縦棒	6.3φ	6.1φ+α	0.5		10 4	20-121-4
78 T001a	3	25	3	金属製品	縦棒	3.4φ	3.3φ+α	0.1		10 3	20-121-5
78 T001a	5	25	5	金属製品	縦棒	3.4φ	4.1	0.5		10 5	20-121-6
78 T001a	取付位置	25	3	金属製品	縦棒	3.8	φ3.8	0.1		10 3	20-121-7
78 T001a	5	25	5	金属製品	縦棒	3.8	3.6φ+α	1.4		10 5	20-121-8
78 T001a	3	25	3	金属製品	縦棒	5.7φ	4.0	2.1		10 3	20-121-9
78 T001a	3	25	1	金属製品	円盤	1.5	0.6	0.2		10 1	20-121-10
78 T016	取付位置	39	1	金属製品	円盤+縦棒	外径6.8	内径4.4	0.7		10 1	20-120-1
78 T016	4	42	1	金属製品	ボリ	4.0φ	0.7-1.5	0.6		10 1	20-120-4
78 T019	取付位置	51	1	金属製品	ボリ	7.2φ	0.1	0.5		10 1	20-120-9
78 T036	2	450	3	金属製品	ボリ	4.4φ	0.4	0.4		10 3	40-207-1
78 T036	2	450	4	金属製品	ボリ	3.2φ	0.4	0.4		10 4	40-207-2
78 T036	3	390	3	金属製品	ボリ	3.5φ	0.4	0.5		10 3	40-207-3
78 T036	4	350	4	金属製品	ボリ	4.4φ	0.4	0.4		10 4	40-207-4
78 T036	5	350	5	金属製品	ボリ	3.4φ	0.4	0.4		10 5	40-207-5
78 T036	6	450	6	金属製品	ボリ	1.2φ	0.6	0.4		10 6	40-207-6
78 T042	取付位置	190	1	金属製品	ボリ	3.5φ	0.3	0.3		10 1	30-133-1
78 T042	取付位置	200	1	金属製品	ボリ	1.0φ	0.2	0.4		10 1	30-133-2
78 T094	取付位置	218	2	金属製品	ボリ	3.3φ	0.4	0.4		10 2	30-133-3
78 T096	取付位置	390	3	金属製品	円盤+縦棒	4.0	3.1φ+α	0.7		10 3	30-133-4
78 T096	取付位置	350	1	金属製品	円盤+縦棒	3.1φ	3.3φ+α	0.5-0.6		10 1	30-133-5
78 T201	1	454	2	金属製品	ボリ	8.4φ	0.7	0.7		10 1	40-209-1
78 T220	1	454	2	金属製品	ボリ	2.7φ	0.3	0.4		10 3	40-209-1
78 T220	2	454	3	金属製品	ボリ	3.2φ	0.6	0.4		10 4	40-209-2
78 T220	3	254	3	金属製品	ボリ	6.5φ	0.6	0.5		10 3	40-209-3
78 T220	4	354	3	金属製品	ボリ	2.3φ	0.6	0.4		10 1	40-209-11
78 T220	5	354	4	金属製品	ボリ	3.3φ	0.6	0.4		10 6	40-209-4
78 T220	6	354	7	金属製品	ボリ	3.1φ	0.1	0.5		10 7	40-209-5
78 T220	7	454	8	金属製品	ボリ	4.0φ	0.7	0.5		10 8	40-209-6
78 T220	8	454	9	金属製品	ボリ	4.0φ	0.7	0.5		10 9	40-209-7
78 T220	9	354	10	金属製品	ボリ	3.3φ	0.3	0.7		10 10	40-209-8
78 T220	10	354	11	金属製品	ボリ	4.3φ	0.7	0.6		10 11	40-209-9
78 T220	11	354	12	金属製品	ボリ	3.3φ	0.6	0.5		10 12	40-209-10
78 T220	13~17	254	13	金属製品	縦棒	φ2.3~φ	断面積 0.5	断面積 0.5		10 13	40-209-11
78 T220	13~17	254	14	金属製品	縦棒	2.1φ	0.3-0.4	0.2-0.3		10 14	40-209-12
78 T220	13~17	254	15	金属製品	縦棒	1.7φ	0.4φ~0.5	0.1		10 15	40-209-13
78 T220	13~17	254	16	金属製品	ボリ	2.2φ	0.4	0.5		10 4	40-209-15
78 T220	13~17	254	17	金属製品	ボリ	2.2φ	0.6	0.1		10 3	40-209-16
78 T220	13~17	254	18	金属製品	ボリ	0.2φ	0.5-0.5	0.2-0.3		10 1	40-209-17
78 T220	13~17	254	19	金属製品	ボリ	0.2φ	0.4φ~0.5	0.1		10 2	40-209-18
78 T220	13~17	254	20	金属製品	ボリ	1.2φ	0.3-0.5	0.3-0.7φ		10 7	40-209-19
78 T220	取付位置	54	1	金属製品	円盤+縦棒	0.7-0.9φ	0.7φ	0.4		10 1	20-120-9
78 T284	取付位置	72	1	金属製品	縦棒	φ2.3	断面積 0.1	断面積 0.1		10 1	20-120-7
78 T284	取付位置	72	2	金属製品	縦棒	2.3	1.2	0.4		10 2	20-120-7
78 T284	2	73	2	金属製品	縦棒	3.3	1.8φ+α	0.2		10 2	20-120-8
78 T284	3	73	3	金属製品	縦棒	3.4φ	0.5	0.5		10 3	20-120-9
78 T284	4	73	4	金属製品	縦棒	3.4φ	0.5	0.5		10 4	20-120-10
78 T284	5	73	5	金属製品	縦棒	3.4φ	0.5	0.5		10 5	20-120-11
78 T284	6	73	6	金属製品	縦棒	3.4φ	0.5	0.5		10 6	20-120-12
78 T284	7	73	7	金属製品	縦棒	3.4φ	0.5	0.5		10 7	20-120-13
78 T284	8	73	8	金属製品	縦棒	3.4φ	0.5	0.5		10 8	20-120-14
78 T284	9	73	9	金属製品	縦棒	3.4φ	0.5	0.5		10 9	20-120-15
78 T284	10	73	10	金属製品	縦棒	3.4φ	0.5	0.5		10 10	20-120-16
78 T284	11	73	11	金属製品	縦棒	3.4φ	0.5	0.5		10 11	20-120-17
78 T284	12	73	12	金属製品	縦棒	3.4φ	0.5	0.5		10 12	20-120-18
78 T284	13	262	8	金属製品	ボリ	2.7φ	0.4	0.5		10 3	21-11
78 T284	14	462	6	金属製品	ボリ	2.1φ	0.4	0.2		10 3	21-3
78 T284	15	462	7	金属製品	ボリ	1.7φ	0.6	0.3		10 4	21-12
78 T284	16	352	8	金属製品	ボリ	3.4φ	0.4	0.4		10 6	21-4
78 T284	17	352	9	金属製品	ボリ	3.4φ	0.4	0.4		10 7	21-5
78 T284	18	352	10	金属製品	ボリ	3.4φ	0.6	0.5		10 8	21-6
78 T284	19	352	11	金属製品	ボリ	2.9φ	0.6	0.5		10 9	21-7
78 T284	20	352	12	金属製品	ボリ	2.9φ	0.6	0.5		10 10	21-8
78 T284	21	262	10	金属製品	ボリ	2.2φ	1.8	0.7		10 11	21-9
78 T284	22	262	11	金属製品	ボリ	2.9φ	0.6	0.5		10 12	21-10
78 T284	23	262	12	金属製品	ボリ	2.2φ	0.6	0.5		10 13	21-11
78 T284	24	363	13	金属製品	ボリ	3.4φ	0.8	0.5		10 5	21-13
78 T284	25	363	14	金属製品	ボリ	3.1φ	0.1	0.2		10 1	21-9
78 T284	26	363	15	金属製品	ボリ	3.1φ	0.1	0.2		10 2	21-9
78 T284	取付位置	309	4	金属製品	ボリ	2.4φ	0.1	0.2		10 4	21-10
78 T284	取付位置	309	5	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 5	21-11
78 T284	取付位置	309	6	金属製品	ボリ	2.6φ	0.2	0.1		10 6	21-12
78 T284	取付位置	309	7	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 7	21-13
78 T284	取付位置	309	8	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 8	21-14
78 T284	取付位置	309	9	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 9	21-15
78 T284	取付位置	309	10	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 10	21-16
78 T284	取付位置	309	11	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 11	21-17
78 T284	取付位置	309	12	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 12	21-18
78 T284	取付位置	309	13	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 13	21-19
78 T284	取付位置	309	14	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 14	21-20
78 T284	取付位置	309	15	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 15	21-21
78 T284	取付位置	309	16	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 16	21-22
78 T284	取付位置	309	17	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 17	21-23
78 T284	取付位置	309	18	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 18	21-24
78 T284	取付位置	309	19	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 19	21-25
78 T284	取付位置	309	20	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 20	21-26
78 T284	取付位置	309	21	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 21	21-27
78 T284	取付位置	309	22	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 22	21-28
78 T284	取付位置	309	23	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 23	21-29
78 T284	取付位置	309	24	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 24	21-30
78 T284	取付位置	309	25	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 25	21-31
78 T284	取付位置	309	26	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 26	21-32
78 T284	取付位置	309	27	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 27	21-33
78 T284	取付位置	309	28	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 28	21-34
78 T284	取付位置	309	29	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 29	21-35
78 T284	取付位置	309	30	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 30	21-36
78 T284	取付位置	309	31	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 31	21-37
78 T284	取付位置	309	32	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 32	21-38
78 T284	取付位置	309	33	金属製品	ボリ	2.4φ	0.2	0.2		10 33	

Tab.30 金属製品観察表(2)

※12cm, ()は位置p, |は埋合部, ※数は金属製品半律の百分率

材質番号 (部位)	土色	灰% ¹	炭物% ²	灰質	石灰	長さ	幅	厚さ	備考	総番号	写真回率%
TS T24	1-2	269	11	金属製品	鉄釘	2.0+α	0.4	0.5		0 1 1	47-214-11
TS T24	1-3	269	12	金属製品	鉄釘	1.5+α	0.5	0.5		0 1 2	47-214-12
TS X25	紅い質軟黄土	517	7	金属製品	鉄釘	2.1+α	0.4	0.3		0 1 0	33-236-3
TS X25	褐色土	296	2	金属製品	釘	4.0+α	1.6	0.2		0 0 1	61-275-1
TS X27	褐色土	269	4	金属製品	鉄釘	2.9+α	0.5	0.5		0 0 1	57-255-1
TS X27	褐色土	359	5	金属製品	鉄釘	2.8+α	0.5	0.5		0 0 2	57-255-2
TS T26	暗褐色土	147	1	金属製品	鉄釘	2.1+α	0.4	0.4		0 0 1	28-126-5
TS T26	暗褐色土	147	2	金属製品	鉄釘	3.3+α	0.4	0.3		0 0 2	28-126-6
TS T26	暗褐色土	147	3	金属製品	鉄釘	3.9+α	0.4	0.4		0 0 4	28-126-7
TS T26	暗褐色土	232	4	金属製品	鉄釘	6.4+α	1.1	0.4~0.2	鉄釘埋合の可能性がある。	0 0 1	33-236-4
TS T26	暗褐色土	271	3	金属製品	鉄釘	2.6+α	0.6	0.9		0 0 1	47-215-1
TS T26	暗褐色土	271	4	金属製品	鉄釘	2.4+α	0.4	0.4		0 0 2	47-215-2
TS T26	暗褐色土	271	5	金属製品	鉄釘	2.5+α	0.1	0.5		0 0 4	47-215-4
TS T26	暗褐色土	271	7	金属製品	鉄釘	1.9+α	0.6	0.1		0 0 6	47-215-6
TS T26	暗褐色土	271	7	金属製品	鉄釘	1.9+α	0.2	0.3		0 0 6	47-215-6
TS T26	暗褐色土	271	1	金属製品	鉄釘	3.2+α	0.5	0.6		0 0 1	47-215-7
TS T26	暗褐色土	271	2	金属製品	鉄釘	3.9+α	0.4	0.5		0 0 2	47-215-8
TS T26	暗褐色土	271	3	金属製品	鉄釘	2.6+α	0.2	0.3		0 0 3	47-215-9
TS T26	暗褐色土	271	4	金属製品	鉄釘	0.9	0.6	0.5		0 0 4	47-215-10
TS T26	暗褐色土	271	5	金属製品	鉄釘	2.4+α	0.4	0.4		0 0 5	47-215-11
TS T26	暗褐色土	271	6	金属製品	鉄釘	5.2+α	0.6	0.4		0 0 6	47-215-12
TS T26	暗褐色土	271	7	金属製品	鉄釘	3.9+α	0.4	0.4		0 0 7	47-215-13
TS T26	暗褐色土	271	8	金属製品	鉄釘	1.1+α	0.3	0.3		0 0 8	47-215-14
TS T26	暗褐色土	271	9	金属製品	八重歯	9.0~10.1 門径約6.P 0.2~0.1			約4mm幅である 調査	0 0 9	58-246
黒質赤色土		262	6	金属製品	鉄釘	1.9+α	0.3	0.3		0 0 2	66-266-2
赤褐色土		267	1	金属製品	鉄釘	2.9+α	0.9	1.9		0 0 1	66-266-1

Tab.31 鉄滓観察表

※ 半径12cm, ()は位置p, |は埋合部

材質番号 (部位)	土色	灰% ¹	炭物% ²	石灰	長さ	幅	厚さ	備考	総番号	写真回率%	
TS K76	紅い褐色赤土	2	4	鉄滓の 塊状塊	37.1+α	0.1+α	約30mm	3.5	2mm前後の塊状塊が観察できる	0 2 4	58-243・2-243
TS K76	紅い褐色赤土	2	2	鉄滓	20.4+α	11.7+α	0.8		0 2 2	66-243-1	
TS K76	紅い褐色赤土	2	3	鉄滓	15.8+α	5.8+α	4.1		0 2 3	54-240-1	
TS K76	紅い褐色赤土	2	3	鉄滓	10.0+α	18.3	6.2		0 2 4	56-230-3	
TS K76	紅い褐色赤土	3	6	鉄滓	11.0	14.2+α	7.0		0 2 5	64-240-2	
TS K76	紅い褐色赤土	3	7	鉄滓	8.6+α	14.0+α	3.6+α		0 2 6	64-230-1	
TS K76	紅い褐色赤土	3	8	鉄滓	10.4+α	(0.5+α)	(1.5)~(2.1)	鉄滓の角部である	0 2 7	56-230-2	
TS K76	紅い褐色赤土	3	9	鉄滓	8.0	7.0+α	(4.6)	塊状塊	0 2 8	55-241-1	
TS K76	紅い褐色赤土	3	11	鉄滓の塊状塊	3.3	6.6+α	3.4		0 2 9	61-239-3	
TS K76	紅い褐色赤土	3	12	鉄滓の塊状塊	(4.6)	9.1	(2.8)		0 3 0	64-241-2	
TS X29	暗褐色土	2	4	鉄滓	14.4+α	17.2+α	6.7		0 0 1	67-275-2	
暗褐色土		3	10	鉄滓	3.7	3.4	1.4		0 0 4	60-267	

※ 鉄滓の塊状塊は付録に掲載しており、図版No.61(鉄滓塊状塊の観察)で詳しく説明されている。付録を参照されたい。

Tab.32 取り上げ遺物土色一覧表(1)

※取り上げ土色の一は土色を付与せずに取り上げたもの、土層の一は対応する土層がない。

	S番号	取り上げ土色	土層	備考	S番号	取り上げ土色	土層	備考	
1	1	褐色土	遺土1~3層		41	黒褐色土	1層		
2	4	緑灰茶色土	基塚4~6層	土層	42	オリーブ褐色土	5層		
3	6	黄褐色土	遺塚1層		43	褐色土	1層		
4	9	緑灰茶色土	遺塚6層	平層	44	灰黄褐色土	4~8層		
5	8	黒褐色土	遺土2層		45	黒褐色土	1層		
6	9	緑灰茶色土	基塚3~4層	新築	46	緑褐色土	基塚7~10層	土層	
7	14	緑灰茶色土	遺塚2~5層	新築	47	にぶい棕色土	1~2層		
8	16	黒褐色土	遺土2層		48	灰赤土	4層	平層	
9	16	緑灰茶色土	基塚5~6層	新築	49	黄灰色土	10層	土層	
10	18	緑灰茶色土	遺土・基塚5層	新築	50	黄灰色土	3~6層		
11	18	黒褐色土	遺土1層		51	黄灰色土	遺塚1~2層		
12	23	黒褐色土	遺土1層		52	黄褐色土	遺塚1層	平層	
13	24	黒褐色土	遺土1層		53	にぶい褐色土	遺塚2~5層		
14	27	黄褐色土	遺塚1層		54	黒褐色土	遺塚9~13層		
15	27	緑灰茶色土	基塚2~3層	土層 新築	55	黄灰色土	基塚10~15層	土層	
16	28	黄褐色土	遺土2層		56	黄灰色土	遺塚3層		
17	29	茶褐色土	遺土1層		57	赤黄褐色土	遺土1~4層		
18	29	褐色土	遺土2~3層		58	黒褐色土	遺塚1層		
19	29	黄褐色土	基塚1層		59	灰褐色土	セクション2層		
20	29	緑灰茶色土	遺塚2層	土層 新築	60	黄褐色土	1~2層		
21	31	黒褐色土	遺土1層		61	黒褐色土	3~6層		
22	34	褐色土	遺土3~4層		62	緑灰色砂	11層		
23	42	黒灰色土	1層		63	緑褐色土	23層		
24	46	黄褐色土	1層		64	黄褐色土	24層		
25	47	黒褐色土	遺塚1層		65	緑黄褐色土	25層		
26	53	灰黄色土	遺塚6層	新築	66	黒黄褐色土	2層		
27	53	黄褐色土	基塚7層	土層	67	にぶい黄褐色土	1層		
28	54	黄褐色土	遺塚1層	土層 新築	68	にぶい黄褐色土	1~2層		
29	54	黄褐色土	遺塚5層	遺塚土層 遺	69	黄褐色土	1層		
30	57	黄褐色土	遺土1層		70	にぶい黄褐色土	Aセクション1~2層		
31	57	緑灰茶色土	基塚3~4層	平層	71	黒褐色土	Bセクション1層		
32	61	赤黄褐色土	基塚6層	土層	72	にぶい黄褐色土	Cセクション1層		
33	61	黄褐色土	遺土2層		73	灰黄褐色土	1~3層		
34	65	黄褐色土	土塚2~4層		74	200	黄褐色土	8層	
35	66	にぶい黄褐色土	遺塚3層	平層	75	200	黒褐色土	78X200M2416層	
36	67	にぶい黄褐色土	遺塚3層		76	200	灰黄色土	78X200M2416層	
37	72	黄褐色土	1層		77	200	黄褐色土	78X200M2416層	
38	74	黄褐色土	1層		78	200	緑黄褐色土	78X200M2416層	
39	74	黄褐色土	6~7層		79	250	にぶい黄褐色土	1層	
40	75	黄褐色土	5層		80	250	にぶい黄褐色土	-	

Tab.33 取り上げ遺物土色一覧表(2)

※取り上げ土色の一は土色を付与せずに取り上げたもの、土層の一は知る土層がない。

S番号	取り上げ土色	土層	備考	S番号	取り上げ土色	土層	備考
81	256	にぶい赤色土		121	719	褐色土	3層
82	255	明黄褐色土	73&2009副15層	122	721	灰褐色土	3層
83	303	にぶい黄褐色土	窪中3層	123	730	褐色土	1~4層
84	303	にぶい褐色土	6層&7層	174	736	にぶい暗褐色土	1層
85	317	黒灰色土	2~6・10~14層	125	736	褐色土	1~3層
86	317	暗褐色土	9層	126	737	褐色土	2層
87	328	黄褐色土	4~9層	127	738	褐色土	-
88	341	灰黄色土	16層	178	740	黄褐色土	1層
89	363	暗灰黄色土	7層	129	743	褐色土	
90	391	暗灰茶色土	5層	130	741c	灰褐色土	1層
91	419	茶褐色土	1層	131	746	にぶい暗赤色土	1~4層
92	429	暗灰黄色土	1層	132	749	にぶい暗赤色土	1層
93	488	黒褐色土	-	133	750	褐色土	1層
94	517	暗灰黄色土	2層	134	755	黄褐色土	1~2層
95	523	暗灰茶色土	2層	135	760	灰褐色土	1層
96	523	暗灰褐色土	4~5層	136	761	暗褐色土	1~3層
97	589	灰黄色土	3~4層	137	762	黄褐色土	3~5層
98	606	褐色土	-	138	765	褐色土	1層
99	622	暗灰赤褐色土	4層	139	770	赤褐色土	1~2層
100	622	灰黄褐色土	16層	140	780	暗褐色土	1層
101	623	褐色土	1層	141	788	暗褐色土	1~2層
102	631	黄褐色土	1~2層	142	797	褐色土	1~2層
103	632	黄褐色土	1~2層	143	814	褐色土	4~5層
104	633	黄褐色土	1層	144	823	暗褐色土	-
106	634	灰黄色土	1~2層	145	832	暗灰茶色土	2~3層
106	636	-	-	146	836	褐色土	2層
107	640	褐色土	-	147	860	褐色土	2層
108	666	-	-	148	868	黄褐色土	2層
109	701	暗灰褐色土	3~5層	149	878	暗褐色土	
110	704	暗灰茶色土	2層	150	888	暗灰黄色土	6層
111	705	にぶい褐色土	1層	161	903	暗灰赤土	1層
112	708	灰褐色土	2層				
113	709	灰褐色土	2~3層				
114	710	にぶい褐色土	1層				
115	711	灰褐色土	1~3層				
116	712	暗褐色土	2層				
117	712	灰褐色土	3層				
118	714	赤褐色土	2~3層				
119	715	にぶい褐色土	1層				
120	719	黄褐色土	5層				

括

日焼遺跡第7次調査地は、縄文時代後期～近・現代に至るまでの複合遺跡であり、様々な種類の遺構・遺物が検出された。検出された遺構は、縄文時代後期以降の旧河川(7SD115)、古墳時代末～奈良期の製鉄関連遺構(7SK746・748・868・869・871・872・873・877・878)、竪穴状遺構(7SX065・705・710・715・730・735・740・750・755・760・765・770・775・780・785・856)、掘立柱建物(7SB035・040)、奈良期の須恵器窯跡(7SX105・200)、奈良・平安期の墳墓(7ST030・220・225・235・253・589・606・631・649・734・798・807)、近・現代の墳墓¹⁾、溝(7SD079・188・189・312・586・596・731・732)である。

以下、各遺構に即して総括を行う。

【旧河川について】

C地区の東半で検出された遺構(7SD115)であり、宮ノ本丘陵裾部を南側から北流して日焼遺跡第3次調査区へと続く旧河川である²⁾。トレンチ調査によると河川形成には人為性が見られなかった。調査区の東側に位置し、南から北へ流下して博多湾へと注ぐ大佐野川の一支流であったと考えられる。

河川内の中～下層にかけては、縄文時代後期～弥生時代早期にかけての遺物が出土した。また、7SD115の右岸に位置する包含層(赤褐色土)中からも縄文時代後期の遺物が出土している。この時期の遺物は、本調査区内では宮ノ本丘陵頂部からの流れ込みを除けばこの地点からのみ出土している。

日焼遺跡第3次調査においては、本調査区との境付近から野岳・休場型細石核が出土しており、調査区南東の丸山神社が位置する小高い丘陵側に後期旧石器時代以降の生活域が存在していたことが想定できる。(文責 松崎卓郎)

【製鉄関連遺構・竪穴状遺構・掘立柱建物について】

D地区では廃滓土坑(7SK746)が検出された。廃滓土坑からは、炉内の形状を反映した炉底滓や廃滓土坑として使用する以前に製鉄炉が存在していたことを示す被熱痕跡が確認され、また、製鉄原料である鉄鉱石も出土した³⁾。

鉄鉱石の出土例は、九州内において非常に数少ない例であり、今回の調査は貴重な成果といえる。また、廃滓土坑(7SK746)周辺では、性格不明の土坑や竪穴状遺構、掘立柱建物、焼土坑が見られ、これらの遺構も製鉄操業に関連していた可能性が考えられる。これらの製鉄関連遺構をもとに当遺跡における鉄生産の様相について考えたい。

(1) 鉄生産の時期について

7SK746では、鉄滓に混じり須恵器や土師器が出土した。その出土須恵器を大宰府福年と対比すると、蓋a1や蓋3等が出土していることから、7c後半～8c中頃に比定される。この状況から7SK746の最終的な埋没時期は8c中頃以降と考えられる。

7SK746の土器出土状況は、8c前半～中頃に比定される小破片の須恵器蓋などが出土している。対して、7c後半に比定される土器は、ほぼ完形の状態で出土している須恵器蓋が見られ、他にも8c代の土器と比べ、比較的大きい破片が確認された。このような遺物出土状況から、鉄滓を廃滓土坑へ廃棄する際に、鉄滓と同時期に存在していた7c後半の土器も一緒に廃棄されたという印象を受ける。7SK634(廃棄土坑)においても7c後半の須恵器や土師器の大型破片が一定量で出土している中、小破片の8c前半の須恵器や鉄滓が少量出土している状況が見られる。

したがって、7SK746(廃滓土坑)が機能していた時期は上記の埋没時期に近いと考えられるが、本調査区における鉄生産は7c後半に操業を開始していた可能性も考えておきたい。

(2) 本調査地における鉄生産の様相

鉄生産の工程は、一般的に大きく四段階に分けられる。

第一段階 製鉄準備段階(原料の採掘、製炭、築炉等)

第二段階 製鉄段階

第三段階 精錬段階(鉄塊成分調整)

第四段階 鍛錬鍛治段階(鉄製品製作)

今回の調査で確認できる工程は、第二段階までであると考えられる。

第一段階に伴う遺構として、焼土坑、竪穴状遺構、掘立柱建物、7SK746周辺土坑が該当する可能性がある。

以上の遺構が、製鉄に関連する遺構であるかどうか検討してみたい。

《原料の下準備に係る遺構》

①焼土坑

7SK746の北側で検出された土坑(7SK748)である。製鉄関連遺構がある遺跡では焼土坑が伴って発見される例が見られる(大原A遺跡・御崎製鉄A遺跡(福岡市)など)。

製鉄遺跡出土の焼土坑の性格としては、一般的に製炭を行ったとする可能性が考えられている。また、鉄鉱石を製錬原料とする地域で、一般的に製炭を行ったとする可能性が考えられている。また、鉄鉱石を製錬原料とする地域では、鉄鉱石を焙焼することで小割りしやすくする技術があり、焼土坑は鉄鉱石を焙焼するために使用された可能性も挙げられる¹⁹⁾。

7SK748は、壁面において被熱痕跡が確認でき、土坑内で火を使用したことは間違いないものとする。

しかし、製鉄関連遺物は出土しなかったため、機能を確定させることはできなかったものの、上記した製鉄遺跡でも焼土坑が検出していることから、製鉄関連遺構である可能性は否定できない。出土遺物は、須恵器の皿、蓋が出土しており、時期は8c前半～中頃に比定される。

②竪穴遺構

竪穴遺構は、D地区東側で検出され、7SX755・765以外は竪穴遺構どうしが切り合った状態で発見された。

竪穴遺構は、その遺物出土状況や遺構の切り合い関係から、8c中頃と思われる遺構(7SX730・740・750・770)と8c前半～中頃と思われる遺構(7SX065・705・710・715・760・765・775・780・856)、7c後半～8c中頃と思われる遺構(7SX755・785)などが見られる。

7c後半～8c中頃までの土器が見られる遺構は、8c代の土器は小破片であるのに対して、7c代の土器は大型破片や完形品が比較的多く見られる。時期としては、7c末～8c前半に比定される可能性が考えられることから、7c末～8c中頃までの半世紀以上の時期幅の中で、竪穴遺構が造り替えられていったことが想定できる。

次に、竪穴遺構の構造については、7SX040・780・785において柱穴が検出され、また、7SX730では炉の痕跡が確認されているが、ほとんどの竪穴遺構では建物構造を類推するだけの遺構属性は抽出できなかった。

しかし、柱穴が竪穴遺構内で確認できなかったものは、遺構外に柱穴が存在していた可能性や、柱を床面に据え置く構造であったことも考えられる²⁰⁾。いずれにせよ、竪穴遺構では、カマドや貼り床等の定住を考えさせるような痕跡は確認できなかった。

このような状況から、竪穴遺構が生活・居住空間として利用されていた可能性は低いと考えられる。また、周辺で検出されたほぼ同時期の遺構であることから、7SK746等と関連する遺構群と考えられる。

7SK746付近の竪穴遺構の埋土中から鉄滓が多く出土しており、また、その埋土を水選別した結果、一見、粒状滓(湯玉)や鍛造剥片と見られる鍛冶関連遺物が発見された。これらのことから、竪穴遺構内では小鍛冶を行っていたとする見解も見られたものの、金属学的調査の結果より鍛造剥片と見たものは製錬滓の破片であることや、粒状滓は製錬工程時に生成されたものであることが分かった²¹⁾。

つまり、これらの遺構は、作業場というような機能が考えられ、また、竪穴遺構では先述の第三・四段階の作業工程は行われなかったと思われる。可能性としては、鉄鉱石の打割作業などの製錬工程作業を行っていた施設であったことが想定できよう。

《架炉に係る遺構》

①掘立柱建物

掘立柱建物は、本調査区において2棟(7SB035・040)検出された。

7SB035は7SK746の北側で発見された1間×3間の建物である。出土遺物には、須恵器の小破片や鉄滓が見られた。須恵器の蓋と思われる破片が出土しているが、時期は断定できない。決定的な確証がないため、鉄生産に関連する遺構かは不明である。しかし、位置的には関連する可能性も棄却できない。

7SB040は7SK746の周囲に柱穴が見られ、7SK746を覆う形で存在している位置の一致性から、製鉄炉に伴う建物と捉えることも可能である。出土遺物には、須恵器の蓋や鉄滓が見られ、遺構の埋没時期が8c中頃に比定されることから、7SK746の時期とほぼ一致する。

両遺構とも、7SK746との位置の関係から、製錬作業場に関連する建物であった可能性は否定できない。

②土坑

7SK746の周囲では、7SK746に切られている状態の土坑(7SK868・869・871・872・873・877・878)が

集中し、偏在していることが確認できた。本文中でも指摘したように、7SK746では廃滓土坑造成以前に製鉄炉として機能していた可能性が考えられる⁹⁾。7SK746周辺土坑で鉄滓が出土していることや7SK746周辺で集中して見られることから、これらの土坑は製鉄炉に関連する遺構である可能性が考えられる。

元岡・桑原遺跡（福岡市）では、製鉄炉の周囲にピット状遺構が4箇所確認されており、その場所に送風施設を設置したと考えられている¹⁰⁾。この事例を見ると、製鉄炉が存在したとする7SK746床面の被熱痕跡aのやや歪な長方形の平面プランに対し、7SK869（あるいは877）・871・872・873はその長方形プランの四隅に位置しており、元岡・桑原遺跡と類似した状況であることから、送風施設があった可能性が考えられる¹⁰⁾。

7SK868・878は、鉄滓が出土しており、製錬作業に伴う可能性を含んでいるが、機能については不明である。出土遺物は、7SK868では7c後半に比定される須恵器の蓋が、また、7SK872・878では8c中頃以降に比定される須恵器の蓋が出土している。

以上、鉄生産第一段階に伴う可能性がある遺構について述べた。これらの遺構時期は7c後半～8c中頃にかけて機能していたと考えられ、7SK746（廃滓土坑）の出土土器から比定される時期幅と調和する。したがって、鉄生産の開始時期は7c後半である可能性があり、8c中頃には製鉄の操作がされなくなると考えられる。また、竪穴状遺構が製鉄関連の工房として使用されていたと想定すると、造り替えを繰り返している状況が見られることから、製鉄炉が複数基存在していた可能性も想定しておきたい。

次に、鉄生産第二段階に伴う遺構と考えられる7SK746（廃滓土坑）について考えてみる。

〈製錬に係る遺構〉

①7SK746

7SK746は、廃滓土坑と製鉄炉の要素を含んだ遺構と考えられる¹⁰⁾。

製鉄炉については、廃滓土坑床面で検出された被熱範囲と製鉄炉の下部形状を反映する鉄滓から復元し、炉内長40～60cm、炉内幅約20cm前後という法量を推定した⁹⁾。他の製鉄遺跡出土の製鉄炉法量は、大原A遺跡（SX1027）では炉内長120cm、炉内幅38cm、大原D遺跡（SX006）（福岡市）では炉内長120cm、炉内幅60cm、松丸F遺跡（1号炉）（福岡県築城町）では炉内長140cm、炉内幅30～55cmとなっている。今回の復元炉内の法量に近い製鉄炉は、須川ノケオ遺跡（福岡県朝倉町）出土の製鉄炉で、炉内長50～70cm、炉内幅15～20cmを測る。

これらの法量を見てみると、本調査区に存在したと推定される製鉄炉は検出例との矛盾はなく、比較的小型のものであることが分かる。

〈廃滓〉

次に、廃滓土坑について考えてみる。北部九州出土の長方形箱型製鉄炉には、炉の長軸両端部に大きな不整形の廃滓土坑が付随している事例が多く見られる。

今回の製鉄炉の復元において、流出孔が一方の小口側にしか設けられないことが判明したが、仮に廃滓土坑があったと仮定すると、製鉄炉小口側のどちらか一方に設けられたと想定し得る¹⁰⁾。しかし、その周囲を観察すると、上記の廃滓土坑に類似するような遺構は確認できなかった。

そこで、7SK746出土の炉底滓に着目すると、滓の流動性はあまり顕著ではなく¹⁰⁾、また、鉄滓の分類により、炉外流出滓の出土量がわずかである状況が確認できた¹¹⁾。

このような状況から、製鉄炉作業時に炉外へ排出された鉄滓は少量であった可能性が考えられる。また、その状況を見越して築炉したと想定すると、廃滓土坑は小規模であることと調和的である。さらに、製鉄炉の作業時に伴う廃滓土坑は、作業終了後の廃滓土坑（7SK746）造成により破壊された可能性が考えられる。

以上のように、本調査区における鉄生産の様相を検討してみた。今回、製錬作業場と推定される場所は1箇所しか確認できなかったが、当遺構を確認したD地区は東側部分が近代の土地整備による掘削で削られている状態であった。

したがって、製鉄関連遺構と推定する竪穴状遺構の検出数や、7c後半～8c中頃に比定する鉄生産の時期幅を考慮すると、掘削されているD地区東側に製鉄関連遺構が埋れていたことも考えられ、鉄滓出土状況¹¹⁾を見るとD地区だけではなく、他の場所でも鉄生産が行われていたことが想定できる。

また、本調査区内の鉄滓出土総量¹¹⁾が他の製鉄遺跡と比較して少量であった状況から、7c後半～8c中頃の時期幅の中で、断続的に鉄生産が行われていた可能性が考えられる。

（3）日焼遺跡での鉄生産の評価

今回の調査で、製鉄遺跡の発見は、太宰府で3例目となった。古代九州の中枢であった「大宰府」にお

いて、その近辺で生産遺跡が出土されたことは、当時の歴史的情勢を知るうえで貴重な発見といえる。そこで、今回発見された製鉄関連遺構を周辺遺跡の調査成果と対比させながら、歴史的背景を考えてみる。

本調査区における鉄生産は、ほぼ7c後半～8c中頃の時期が比定されている。同時期と考えられる遺構は、本遺跡の東側に位置する前田遺跡に見られ、官道跡や竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が検出されている。また、本遺跡の北東側に位置する原口・久郎利遺跡では官衙の様相が見られる掘立柱建物群が検出されている。

これらの遺跡のうち、鉄生産に関連する遺物が出土している前田遺跡では、4次調査において官道の側溝から多量の鉄滓が発見され、また、8次調査においては溝状遺構から輪の羽口、7次調査では取瓶も出土している。これらの鉄生産関連遺物が出土した遺構は、8c代または8c中頃以降に比定されている。

また、同時期に原口・久郎利遺跡の掘立柱建物群が存在していたと考えられ、官衙的建物群とその外縁部における鉄生産との関連性があるかどうか興味を持たれる⁽¹²⁾。

さて、本遺跡の7c後半～8c中頃の製鉄操業時期が、前田遺跡の鉄生産関連遺物出土遺構に比定される8c代または8c中頃以降という時期と同時期ないしは先行している。このことから、鉄生産における本遺跡と前田遺跡との関連は、本遺跡の鉄生産が先行するものとするれば、製鉄作業場が日焼遺跡から東側に位置する前田遺跡へと移行した様相も想定しうる。また、他の遺跡の例によれば、本遺跡においても官衙建物群と関連するのかが、考慮すべき課題である。

ところで、本調査区出土の鉄滓には銅滓が少量ながら混じており⁽¹³⁾、鋳造関連遺構が存在する可能性が考えられたが、今回の調査では発見できなかった。前田遺跡7次調査で金属器生産に関連する取瓶が出土していることを考え合わせると、本調査区周辺で鋳造操業が行われていた可能性が高いと考えられる。

今回の調査で得られた貴重な発見は、製鉄原料が鉄鉱石であったことである。当遺跡で鉄鉱石が出土していたことは、大澤氏と長家氏の検分時に判明した。このことより、鉄鉱石による製鉄工程の準備段階の解明を試み、鉄鉱石の打刺工程を復原することができた⁽¹⁴⁾。鉄鉱石の出土は、希少である九州において、貴重な調査成果であると考えられる。

砂鉄原料による製鉄が中心である九州において、鉄鉱石による製鉄に関しては不明であるのが現状である。鉄鉱石による製錬技術はいくつ頃流入したのか、また、どこから流入したのか等の山積みされている課題は、今後の調査研究成果に委ねたい。(文責 平島義孝)

【窯について】

本遺跡からは、奈良期の須恵器窯跡が2基(7SX105・200)確認されており、牛頭窯跡群に包括される宮ノ本丘陵の東端部に位置する。その丘陵の南裾には、宮ノ本窯群があり、遺跡の西隣に向佐野窯群が隣接する。宮ノ本丘陵は、いくつかの小谷が入り組んでおり、その小谷の一つ、緩く谷状に奥まる地形の入り口付近に、両窯が東西方向に主軸を向け構築されている。

両窯跡は、標高約39m付近のほぼ同一標高に、約30mの距離をおいて検出された。しかし、窯の立地状況には相違が見られ、7SX200は斜面に位置しているのに対し、7SX105は、後背に斜面を抱えているものの前庭部方向の東側は比較的平坦な立地である。

7SX105は、部分的に欠失しているものの残存長約2.9mの規模である。焼成部では床面を補修した痕跡が見られるなど、7SX200と比べて比較的長く使用した状況が窺える。窯の前には灰原が広がらず、北隣に物原(7SK110)を形成している。7SK110下層からは、製塩土器や土師器瓶といった須恵器製作工人が使用したと思われる遺物も出土した。

本窯は緩斜面から平坦部へと傾斜が変換する地点に構築されており、緩斜面裾には窯外排水溝(7SD188・189)も設けられていた。

一方、7SX200は天井部が欠失しているものの、残存長約2.6mの無階無段窯と考えられる。残存状況は比較的良好で、焚き口付近からは焼成部から転落したと思われる須恵器が一定量出土した。また、窯焼成部内からは焼台が出土しており、原位置を留めているものも見られた。

7SX200では、還元層が確認されたのは1面のみであり、灰原は一見広範囲に広がるが、基本的には厚みを持たず、比較的短期間で操業を終えている可能性が高いと考えられる。

両窯から出土している須恵器は、甕・壺・高坏といった比較的大型の器種は見られず、主に蓋・坏・皿等を主体的に生産していたものと考えられる。また、坏・皿に関しては、高台のつかないものが大半を占めていた。これら、窯内から出土した遺物から、窯の操業期間が8c中頃を下らないものと考えられる。

なお、今回の調査において、考古地磁気分析も合わせて行った⁽¹⁵⁾。7SX105では800±20A.D.、7SX200

では760±20A.D.という年代測定の結果が得られている。7SX200では、若干古い測定結果となっているが、窯の最終使用時期の年代であることを考慮すると、ほぼ近い時期に操業していたと考えられる。

(文責 黒木正行・宇田貝将・松崎卓郎)

【近世以前の墳墓について】

今回の調査では、近世以前の墳墓が12基検出された。出土遺物等より時期判別の可能な墳墓について、主に大宰府編年に合わせて整理してみる。

① 8c中頃（大宰府編年III期）以降

B地区の南側丘陵上の標高約38～40m付近に、火葬墓(7ST225・235)が形成される。7ST225は壺bの長頸壺を埋納したものであるが、焼骨等は見られず、また、周辺においても明確に火葬施設と言える遺構は見られなかった。7ST235出土の小壺は未分類資料であるが、宮ノ本丘陵での火葬墓のあり方⁽¹³⁾を考慮すると8c～9c前半頃の所産であるものと考えられる。

② 9c初頭～前半（大宰府編年VIA～VIB期）

D地区にあたる丘陵裾部の緩斜面の標高約36～37m付近、およびB地区の丘陵中腹の標高約46.5m付近に、木蓋土壙墓や木棺墓(7ST589・606・734)が形成される。

標高の低いD地区では、墓壇の長軸を等高線に合わせる形で墳墓形成が成されており、隣接する様相が見られる。7ST589では、副葬品として土師器杯aや椀c、刀子が出土している。土師器杯aには、底部から胴部にかけての稜が見られるVIAタイプのもので主体を占めるが、稜があいまいになるなど後出する要素も部分的に見られる。また、7ST606は、標高の高い位置に単独で構築されており、丘陵際を道路状(7SF608)に造成し、漆製品を副葬するなど、7ST589・734と比べてやや異なる様相が見られる。被葬者の階層の差によって墳墓構築の立地を選択しているものと考えられる。

一方、B地区の丘陵中腹の標高約40.5m付近に、7ST030の火葬墓が形成される時期でもある。墳墓造営に先立ち、土地の造成を行っている様子が見られる(7SK233)。また、それに関連すると思われる遺構(7SK467・469・471・472・481・482)も検出されており、木蓋土壙墓や木棺墓と比較して土地の占有率が広い。出土した須恵器甕は、赤焼けて格子目タキを施すなど、牛頭産のものとは異なる様相も認められる。火葬墓から土壙墓・木棺墓への過渡期にあたる好例であると思われる。

③ 9c後半～10c前半（大宰府編年VII期）

D地区にあたる丘陵裾部の緩斜面の標高約37m付近に7ST798が形成される。7ST589や734と同様に墓壇の長軸を等高線に合わせる形で形成されている。

④ 10c前半～中頃（大宰府編年VIII期）

B地区の丘陵中腹の標高約43.0m付近に、7ST220が形成される。墳墓造営に先行してやや広範囲にわたり土地の造成を行っており(7SK236)、その後、墓壇の長軸を等高線に合わせる形で墳墓を構築している。

以上、時期判別のつく墳墓について整理して見た。宮ノ本丘陵は「大宰府」の公葬地としての役割を担っていたと考えられており、8cから続く火葬墓が9c後半には終息し、木棺あるいは土壙墓(木蓋土壙墓)へと転換していくようである⁽¹⁴⁾。今回の調査においても、火葬墓は8c中頃および9c前半～中頃の時間幅の中で見られ、土壙墓や木棺墓は9c以降に見られることから、先述の結果を追認したものと言える。

7ST225の南側では、ほぼ同時期の窯(7SX200)が検出されている。窯内出土遺物から、8c中頃以降には、窯は操業を停止したと考えられるが、窯操業中にする傍に墳墓を構築するとは考えにくく、窯の操業停止直後に7ST225が形成されたと考えられるのが自然と思われる。火葬墓は群集する様相が見られず、これまでの宮ノ本丘陵での火葬墓の検出例と類似した状況が窺える。

土壙墓や木棺墓は、9c初頭～前半には形成されているが、丘陵上および丘陵裾部と立地にやや異なる状況が窺える。

丘陵上に見られる墳墓は、丘陵裾部に造られる墳墓と比較して、一つの墓域が占有する空間が広く、また、副葬品も比較的多く持つなど、これまで指摘されているように⁽¹⁵⁾、比較的高位の官人が被葬者であったと思われる。

一方、丘陵裾部では、同一斜面上に墓壇が群集して造営されている。先述した以外でも、7ST631・649・807などの木棺墓が造営されており、7ST807では八稜鏡等が出土している。しかし、時期判別に至る土器の出土が見られず、詳細な時期は不明である。おおむね、近接する周囲の墳墓と比較的近似した時期(VI～VII期)と想定したい。

(文責 松崎卓郎)

【近世以降の墳墓について】

今回の調査では近世以降の墳墓が162基検出された。

(1) 日焼遺跡における近世以降の墳墓の展開

近世以降の墳墓群は、北へ延びる丘陵上に展開しており、数度にわたる地業によって複数の墓域が形成されていた。調査上A～E群に分けたが、実際には大きく2つの集団(グループ1・2)によって形成されている。墓地の展開も大きく2様相を呈している。

すなわち、BF区のラインを境として、グループ1の墓地は居宅のあった北側へ向かって形成され、反対にグループ2の墓地は同じく居宅のあった南側へ延びる形で展開している。A・B群が概ねグループ1の墓地に、C～E群が概ねグループ2の墓地に相当する。

盛土上に建立され墓碑銘のある石製墓標には、7ST029の享保2年(1717年)がある。また原位置を動いてはいるものの、墓域内に倒置した状態で宝永4年(1707年)銘の石製墓標が見られる。したがって当墓地は、18c初頭には確実に開始されていたことが分かる。さらに、明治22年作成の「御笠郡向佐野村墓籍簿」^[17]には、当墓地の近辺に所在する2家の墓地埋葬記録が17c後半から認められる。よって当墓地の開始期も、墳墓群の切り合いや副葬品の状況から17c後半まで遡るものと考えられる。

このように一族の墓地が同時期に複数存在するのは、本家や分家・新家筋といった親族構造を反映した配置やまとまりが構成されたものと思われる。

以下、近世以降の墳墓群の形成過程を見てみる。

①A・B群(グループ1墓地)の形成

最段最上段に位置するA群の墓地が、最初に築かれたグループ1の墓地と考えられる。墓域は丘陵中腹を削平して南北に形成されており、この中で長方形墓壇に長方形横棺の主軸がやや北東に向く一群が墓地の南西から北東へ向かって展開している。

これらは17c後半のものと考えられ、まだ六道銭の副葬は見られない。7ST828の17c前半に作られたと思われる国産陶器製椀の副葬と7ST016出土の玉類が見られるだけである。また、桶棺も未だ使用されていない。

18c前半になると、長方形墓壇に長方形横棺の主軸がほぼ南北を向き、最上段の墓域(A群)が飽和状態となり中段および下段のB群にまで墓域が拡張して使用されるようになる。六道銭の副葬も見られるようになり、桶棺も使われ始める。六道銭の副葬は、概ねこの時期に限定されて認められるようである。

18c後半～19c前半では、長方形墓壇に長方形横棺はほぼ使用されなくなり、代わりに正方形あるいは円形墓壇に桶棺・方形縦棺という座葬形式に変化していく。また小型のハンス(半胴)甕が使われ始める。7ST812では甕内に寛政8年(1796年)銘の石製墓標が落ち込んでいた。

19c後半になると、B群墓壇の下段にハンス(半胴)甕を使用した一群の墓地が形成される。この中で7ST719aの甕棺内から出土した土製おはじきは、図柄に軍服や軍艦が見られることから明治期に入ってから埋葬と考えられる。その後のグループ1の墓地は、丘陵先端部(B群の北に位置する)において大正・昭和期の墓地が営まれることになる。

②C・D・E群(グループ2墓地)の形成

グループ2の墓地は、A群の南から始まるE群と、最下段(墓域最東端)のD群との二つに分かれて形成される。17c後半にE群の7ST052・706等の長方形墓壇に長方形横棺のものが営まれ、六道銭の副葬は見られない。

18c前半になると享保2年(1717年)銘の石製墓標が建てられた、7ST029から始まる六道銭を副葬品に持つ近世墓が造営され、C群下段の墓地群へと続く。グループ1の墓地と同様にこの時期から桶棺が使用され始めている。

18c後半～19c前半になると桶棺や方形縦棺の座葬形式だけのものとなる。これ以降にグループ2の墓はここでは見られなくなり、他の場所に営まれたものと思われる。

もう一つのグループ2の墓地であるD群も、最初に墓地中央部に長方形墓壇に長方形横棺の一群が造られ、その後、六道銭を副葬品に持つ近世墓、六道銭を副葬に持たない座葬形式だけのものに移り変わっていく。

(2) 埋葬形態

①盛土形状

残っている盛土から類推すると、盛土の形は基本的には方形台状(截頭四角錐体)を呈し、大きさは一辺が4尺(120cm)から8尺(240cm)までである。盛土の積み土は基本的には墓壇を埋め戻した残りを水平

に積み上げ、最後に周辺の土を掻き上げ明き締めながら方形台状の盛土が形づくられている⁽¹⁸⁾。

民俗例によると、盛土上には基本的に木製墓標が建てられ、一年忌・三年忌等に石製墓標に建て替えられるものもあったとされるようである⁽¹⁹⁾。木製墓標は3寸5分(10.5cm)×4寸(12cm)や3寸5分×3寸(9cm)、3寸×3寸等と幾つかの角材寸法が認められる(7ST071・073など)。また7ST073で検出されたように、2本の竹筒を盛土に差し込んだ花立て等も置かれていたようである。

その他、埋葬時の墓前供養や忌日や年忌等に行われる追善供養の際に使われた、水や酒を入れた小瓶や土師器皿等も盛土の上層から出土している。

②墓壇形状

墓壇の平面形態を大別すると、長方形・方形・円形の3種類に分けられる。いずれの墓壇も垂直に掘り込むことはなく、墓壇底に対して上辺がやや開く形となっている。墓壇深度が浅く、形状の小さいものは乳児ないし小児が埋葬されたものと思われる。また、長方形横棺が埋葬された墓壇では、その掘り込みの浅い方が時期的に古く、深い方が新しい傾向も見られる。総じて、臥葬である長方形横棺をもつ墓壇より、座葬である桶棺・方形縦棺・甕棺が埋葬されたものはその深度が深い様相が窺える。

③棺形状

確認できた棺形式は、長方形横棺・桶棺・方形縦棺・甕棺・小型木製箱棺(長持形棺)・竹籠棺の6種類である。

長方形横棺のほとんどは、仰臥や側臥などの臥葬用のものと考えられるが、中には棺の小口幅と同じか、それ以上の値をもつ高さの棺がある。これらは、座葬として使用されたのではないかとこの可能性も考えられるが、7ST009などを見るに人骨の遺存状態から側臥葬であったことが分かる。

また、細長いタイプの長方形横棺も見受けられるが、成人用の伸展葬の棺長には短すぎ、これもおそらく臥葬用の棺と思われる。伸展葬が行われたとすれば小児用である。基本的に長方形横棺は、臥葬用として捉えられる。

棺の構造は、7ST031・314等に見られるように底板を側板と小口板で挟み込み、竹釘や木釘、あるいは鉄釘で止められている。板材は一枚板使用のもの、複数枚板使用のものがある。複数枚で一枚板を構成しているものは、それぞれ竹釘(木釘)によって接合されていたと考えられる。材は残存していた板片により、スギあるいはヒノキが使用されたようである。

方形縦棺は、いわゆる「早桶」と呼ばれてきたものが大半を占めているが、中には半切桶や小桶・樽等を用いたと思われるものもある。側板は上下幅の違う立板を組み合わせて円形部をつくり、底板を挟み込んで4本の竹製タガによって締められている。棺蓋は複数の竹釘で接合し、さらに椀木によって補強され一枚蓋の形となっている。底板も複数枚を突き合わせて構成されている(7ST317など)。

方形縦棺も7ST098でその形状が確認された。倒壊した状態で出土しているが、棺の形状は窺い知ることが出来る。底板は2枚突き合わせて作られ、側板は通常の方形棺と異なり一枚板が縦に使用されている。また、違う見方をすれば、長方形横棺を縦棺として用いた可能性も考えられる。

甕棺は、18c前半の所産と考えられるE群の7ST054の甕棺がこの墳墓群での初現である。この甕は、いわゆる肥前の大甕とは異なる瓦質甕で、おそらく在地のものと思われる。その他の甕棺はB群にまとまっており、肥前大甕(ハンズ)の一群がある。これらは18c末から使用され始め、その多くは幕末から明治期にかけてのものと考えられる。

小型木製箱(長持形棺)を棺として使用した例も見られる。これらは、日常生活で使っていた飾り金具付きの木製箱物を棺に転用したと思われる。その多くは、乳幼児あるいは小児用として使用されたようである。

竹製の籠を棺としたものもD群において検出された。7ST086・093・313の3例である。7ST086は、六つ目編み、7ST093はザル目編みの縦竹のみが残ったものと思われる。いずれも人骨や玉類が出土していることから、棺であることは確実である。竹籠棺の類例はこれまで報告例がほとんどないことから、当時の農村生活者の墓制を考える貴重な事例と言える。

④埋葬体位

人骨が出土した近世以降の墳墓の中で、埋葬体位の分かるものが十数例程ある。これらは埋葬体位にかかわらず、北あるいは西が意識されている。それが遺構の中で反映されているのは、北枕であったり、顔が北や西向きで埋葬されていることである。

この例は他の近世墓遺跡でも多く見られる事象であり、汎日本的な信仰上の習慣である。側臥葬の状態が良く分かるものとして7ST009がある。頭位は北枕で両膝を屈曲させ、頭部もやや傾かせて胸の前で前肢

を合わせながら合掌する形で棺に横たえられた様子が窺われる。

また、座葬の状態は7ST712から窺われる。頭位は南であるが、座葬であるため顔面は北を向き、立膝、合掌の形で納棺されていた。

7ST814においては、近世以降の墳墓群中ただ一例の伸展葬が検出された¹⁰⁹。棺の痕跡が長さ1m程度であるので、小児が埋葬されたものと考えられる。基本的に長方形横棺に成人を納棺する時は、仰臥ないし側臥の屈葬姿勢で、乳幼児・小児の場合は伸展葬もあったものと思われる。

⑤副葬品

副葬品として出土したものには、銭貨・数珠・ガラス小玉・土師器皿・土製おほじき・煙管・国産陶器の丸椀がある。

銭貨が副葬されていたのは、確認できた近世以降の墳墓162基中28基である。この銭貨はいわゆる六道銭であり、埋納時期が判明している例が2例ある。享保2年(1717年)と享保7年(1722年)の18c前半である。六道銭埋葬禁止令が寛保2年(1742年)に発令されており、他の六道銭埋納もこの時期と相前後するものと思われる。当時の農民層にこの発令がどこまで徹底浸透していたかという問題は残るが、当遺跡における六道銭の副葬は18c前半の時期にはほぼ限定されると言える。

数珠玉あるいは小玉は26基から出土しているが、これらすべてが念珠として使用されていたか判明しがたいものもある。ガラス小玉が1～2個しか出土しないものは、小玉が木製であったため遺存せず母玉だけが残ったとも考えられようが、むしろ銭貨や煙管などを入れた袋物の紐を絞る緒締め玉と捉えることも必要であろう。

土製おほじきが出土したものは、副葬品から子供が埋葬されていたと推定していたが、人類学的所見からも小児との判断がなされた¹⁰⁹。図柄に軍服や軍艦ないし汽船が型押しされ、明治期に入ってから埋葬であることが分かる資料である。

当遺跡の副葬品のあり方は、町墓のそれとは大きな違いを見せ、非常に質素である。当時の農村部の村墓を窺い知れる重要な事例である。(文責 秀嶋龍男)

【溝について】

調査区の地形は、宮ノ木丘陵の東端部丘陵裾にあたり、東に向かって強い勾配角度で下る斜面である。その斜面や斜面との傾斜変換点である平坦面(緩斜面を含む)を土地利用し、古代から近・現代にかけての遺構が形成されている。調査区斜面の土壌は、基本的に水はけが良いが、一方で雨天時には、丘陵上からもたらされる雨水やそれによって削られる土砂等を伴って流失が見られる。斜面や傾斜変換点である平坦面上の遺構は、雨水や土砂により破壊もしくは削平される可能性がある。それらを防ぐためにも排水機能を持つ溝が、遺構周辺に造られる必要性があったと考えられる。本調査区で検出された溝は、古代から近・現代のものである。以下に溝の変遷と性格について追う。

古くは、C地区の縄文時代後期末(広田式土器)から弥生時代早期(夜白I式土器)の遺物が出土した旧河川に直行する形で、B地区とC地区の間に小谷部が見られる。この小谷部は、丘陵上からの自然の排水機能を持っていた可能性がある。

奈良期の須臾器窯である7SX105に関連すると考えられる、断面「U」字状の2条の溝(7SD188・189)がある。2条の溝は、出土遺物(蓋c3・坏c3)から窯(7SX105)の時期とほぼ一致する。7SD188は、窯の両脇から左右に延び、北側へ延びる方は標高が低い東側に「L」字形に折れている。7SX105および7SK110への雨水等の進入を防ぐ窓外排水溝と考えられる。また、7SD189は、「L」字形をなす7SD188の内側に併行し位置しており、7SD189に囲まれた窯前の平坦部に何らかの作業場の施設があったことも考えられる。そのため、窓外排水溝もしくは窓前施設の排水機能の両面が考えられる。

奈良期以降の溝は、D地区で緩斜面に柵列である7SA744を囲む形で断面「U」字状の溝(7SD731・732)が見られた。この溝からは、時期を特定する遺物が出土しなかったが、位置関係より7SA744付近に付帯することも考えられよう。7SA744柱穴eの出土遺物(縦耳型の石鍋?)から平安時代後期以降の排水機能的な役割を持つ溝である可能性がある。

B地区とD群の境目である緩斜面は、近世以降に削平されている。平坦面が形成されている、その削平面上に展開している近世以降の墳墓群(D群)の周囲には、それぞれ時期が異なる断面「U」字状の7SD079・586・596の3つの溝が切り合っている。切り合い関係から7SD596は、7SD079よりも古い。7SD079は、出土遺物(Fig.343 1)から17c中頃以降の溝と思われる。また、7SD079・596は墳墓(楠棺)によって切られており、溝の上に墳墓を造成した頃もしくはそれ以前に排水機能を持つ溝としての役割を終えている。

その後、排水機能をもつ近・現代の溝は、調査区の斜面裾部の傾斜変換点である部分および調査区周辺にあり、その斜面を取り囲むように、近・現代の浅くて細い溝が巡っている。

以上の事から、当遺跡の溝の性格は、斜面という立地的な要因から簡易な雨水排水機能をもつものが多いようである。(文責 大坪芳典)

註1 Tab. 3～5「近世以降の墳墓一覧表」(pp. 169～171)を参照。

註2 本調査区の東隣にて検出された「日3SD001」へ続く。

太宰府市教育委員会編 2004 「太宰府・佐野地区遺跡群18」太宰府市の文化財 第74集を参照。

註3 本書の、「II-3.-(5) 製鉄関連遺構」(p.228)または「IV 日焼遺跡第7次調査で出土した製鉄炉について」(p.341)を参照。

註4 滋賀県木瓜遺跡において、鉄鉱石を焙焼したと推定される焼土坑が出土している。焙焼とは硬質な鉱石を800～900℃の温度で熱し、その効果により鉱石に亀裂を生じさせ破砕しやすくする技術である。また、焙焼には鉱石を還元しやすくなる効果もある。大澤正己氏(九州テクノロジーセンター技術顧問)による御教示。

註5 山村信榮氏(太宰府市教育委員会)や下山覚氏(徳理蔵文化財サポートシステム)による御教示。

註6 本書の、「IV 日焼遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」(p.311)を参照。

註7 第4回西海道古代官衙研究会発表資料集 長家 伸「糸島半島を中心とした鉄生産について」を参照。

註8 本書の、「II-3.-(5) 製鉄関連遺構」(p.228)を参照。

註9 本書の、「IV 日焼遺跡第7次調査で出土した製鉄炉について」(p.371)を参照。

註10 松井和幸氏(北九州市立自然史・歴史博物館学芸員)による御指摘。

註11 本書の、「IV 日焼遺跡第7次調査で出土した鉄滓について」(p.375)を参照。

註12 太宰府市教育委員会編 1999 「太宰府・佐野地区遺跡群IX」太宰府市の文化財 第44集を参照。

註13 本書の、「IV 日焼遺跡第7次調査で出土した鉄原材料の事前加工工程について」(p.365)を参照。

註14 本書の、「IV 福岡県太宰府市日焼遺跡の考古学調査」(p.313)を参照。

註15 太宰府市教育委員会編 2004 「太宰府・佐野地区遺跡群17」太宰府市の文化財 第72集を参照。

註16 太宰府市教育委員会編 2002 「太宰府・佐野地区遺跡群14」太宰府市の文化財 第63集を参照。

註17 荻原善和氏所蔵。

註18 「太宰府市史 民俗資料編」太宰府市史編集委員会編 1993を参照。

註19 本書の、「IV 太宰府市日焼遺跡の近世人骨」(p.389)を参照。

【参考文献】

福岡県教育委員会編 1970 「池田遺跡」『福岡県南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集

築城町教育委員会編 1992 「IX 松丸F遺跡」「城井谷1」築城町文化財調査報告書 第2集

太宰府市史編集委員会編 1993 「太宰府市史 考古資料編」太宰府市

太宰府市教育委員会編 1999 「太宰府・佐野地区遺跡群IX」太宰府市の文化財 第44集

福岡市教育委員会編 1995 「大原A遺跡1」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第430集

福岡市教育委員会編 1995 「大原A遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第431集

滋賀県教育委員会編 1996 「木瓜遺跡」立命館大学びわこ・くさつキャンパス造成工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書

福岡市教育委員会編 1997 「鶴崎製鉄A遺跡第1次調査」「鶴崎古墳群2」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第506集

福岡市教育委員会編 1997 「大原D遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第507集

朝倉町教育委員会編 1999 「須川ノケオ遺跡」朝倉町文化財調査報告書 第8集

太宰府市教育委員会編 1999 「大宰府桑坊跡XI」太宰府市の文化財 第42集

長家 伸 2001 「糸島半島を中心とした鉄生産について」第4回西海道古代官衙研究会 資料集

福岡県教育委員会編 2002 「宝満山遺跡群・浦ノ田遺跡III」福岡県文化財調査報告書 第169集

Tab.34 遺構番号台帳(1)

遺構番号	遺構名称	種別	台帳	切り欠き	地区	区	種
1	757001	近世墓		6号 → 1	BC21区	A	A
2	757002	近世墓		6号 → 2 → 4	BC20区	A	A
3	757003	近世墓		3号 → 3	BC20区	A	A
4	757004	近世墓		2号 → 4	BC20区	A	A
5	757005	近世墓		6号 → 5	B121区	A	A
6	757006	近世墓		6号 → 1 2号	BC21	A	A
7	757007	近世墓	墓塚: bに分離する	7 → 5 6号	D121区	A	A
8	757008	近世墓		8 → 5 6号	D121区	A	A
9	757009	近世墓		8号 → 9	D121区	A	A
10	757010	近世墓	aは墓塚 bはc-058	10 → 11 6号	D120区	A	A
11	757011	近世墓		7号 → 11	D120区	A	A
12	757012	近世墓	墓塚: bに分離する	12 → 11	B121区	A	A
13	757013	近世墓	墓塚: bに分離する	9 13 → 9	BC20区	A	A
14	757014	近世墓		15号 → 14 → 11	D120区	A	A
15	757015	近世墓		15 → 14 6号	D120区	A	A
16	757016	近世墓		16 → 14 6号	BC20区	A	A
17	757017	近世墓	bは墓塚 cはc-069	15 → 17	D120区	A	A
18	757018	近世墓		19 6号 → 18	BC20区	A	A
19	757019	近世墓		16 → 19 → 18	BC19区	A	A
20		墓より			BC21	A	A
21	757021	近世墓		22 6号 → 21	BC21区	A	A
22	757022	近世墓		21 → 22 → 21	BC21	A	A
23	757023	近世墓		23 → 20 1	DF21区	A	A
24	757024	近世墓		24 → 20 1	BF21	A	A
25		墓より			BC19区	A	A
26	757026	近世墓		26 6号 → 26	BC20区	A	A
27	757027	近世墓		28 → 27	BC21区	A	A
28	757028	近世墓		28 → 27 6号	BC21区	A	A
29	757029	近世墓		28 → 29 → 34 2	BC20区	A	A
30	757030	横穴墓			AX10区	E	B
31	757031	近世墓		26号 → 31 → 34 3	BC20区	A	A
32		墓より			D120区	A	A
33		横穴墓			D120区	A	A
34	757034	近世墓		32 6号 → 33	BC19区	A	A
35	757035	横穴柱礎物	ビット a-h	32 6号 → 34	BC19区	D	D
36		墓より			BC21	A	A
37	757037	近世墓	墓みに土砂充填		AY16区	A	D
38		墓より			AY16区	A	D
39		横穴墓			AY16区	A	D
40	757040	横穴柱礎物	ビット a-h		BC16区	D	D
41	757041	横穴墓			AY13	A	D
42	757042	近世墓			AX16区	A	D
43	757043	近世墓			AX16区	A	D
44		墓より	墓みに土砂充填		AX16区	A	D
45							
46							
47	757047	近世墓	墓みに土砂充填	47号 → 46	AX12区	A	D
48	757048	近世墓		49号 → 48 → 50	AX14	A	D
49	757049	ビット		49 → 48	AX15	A	D
50							
51	757051	近世墓			BC21区	A	E
52	757052	近世墓			BC21区	A	E
53	757053	近世墓			BC20区	A	E
54	757054	近世墓			BC20区	A	E
55							
56							
57	757057	近世墓		208号 → 27	BC21区	A	E
58	757058	十石	S-10より変更		B120区	A	D
59	757059	十石	S-17より変更		B120	A	A
60							
61	757061	近世墓			BC19区	A	B
62	757062	近世墓			BC18区	A	B
63	757063	近世墓		63 → 64 6号	BC19区	A	D
64	757064	近世墓		63 → 64 → 35 6	BL19	A	E
65	757065	横穴穴遺構		75C → 63 → 73 6号	BC16区	D	D
66	757066	近世墓		15C → 66	DK19	A	B
67	757067	近世墓			D120区	A	B
68		横穴墓			AX16区	A	D
69		墓より	墓みに土砂充填	69号 → 68	AX14	A	D
70	757070	近世墓		49号 → 69 → 58	AX14	A	D
71	757071	近世墓			BC17区	A	C
72	757072	近世墓			BC17	A	C
73	757073	近世墓		36号 → 73	BC17区	A	C
74	757074	近世墓			BC17区	A	C
75	757075	近世墓			BC18	A	C
76	757076	横穴墓	S-34の盛土		BC18区	A	C
77	757077	近世墓		239号 → 77	BC17区	A	C
78	757078	近世墓		78 → 269	BC17区	A	C
79	757079	横穴墓	系統線をめぐる	79 → 68 6号	AX14区	A	D
80							
81	757081	近世墓		316号 → 81	BC19区	A	D
82			S-888				
83	757083	近世墓		322 → 83	BC16区	A	D
84		墓より		79号 → 84	BC16区	A	D
85							
86	757086	近世墓		76号 → 86	BC19	A	D
87	757087	近世墓			BC16区	A	D
88	757088	近世墓			BC16区	A	D
89	757089	近世墓			BA14区	A	D
90							
91							
92	757092	近世墓		79 → 92	BA15区	A	D
93	757093	近世墓			BA14区	A	D
94	757094	近世墓		763 → 94	AY13区	A	D
95							
96	757096	近世墓		96 → 218	AY16区	A	D
97							
98	757098	近世墓		59 → 507	BC15	A	D
99							
100							
101		ビット			AD16	C	C
102		井列	ビット a-h		AF16区	C	C
103		井列	ビット a-h		AF16区	C	C

Tab.35 遺構番号台帳(2)

番	遺構番号	種別	備考	切り合い	地誌	区	階
104		ビット			AS17	C	
105	75X105	窠		180 → 105	AE15台	C	
106		骨列	ビット a~c		AE17台	C	
107		骨列	ビット a~b		AE17台	C	
108		石帯層			AE18	C	
109		ビット			AG17	C	
110	75X110	漆黒土塊		189台 → 110	AG14台	C	
111		漆黒土塊	ゾノオクツ等混じる		AG2台	C	
112		型まり	土壁の空白		AL3	C	
113		型まり	土壁の空白	114 → 113	AL3	C	
114		型まり	土壁の空白	114 → 113	AL3	C	
115	75X115	瓦葺1階			AG12	C	
116		障子	障子の障子		AE5台	C	
117	75X117	型まり	※自然形の窪み		AE5台	C	
118		型まり	※自然形の窪み		AE10台	C	
119		コンクリート片			AE10台	C	
120					AE10	C	
121		ビット			AG18	C	
122		ビット		124 → 122	AE10台	C	
123		ビット			AE17	C	
124		漆		124 → 122	AE17台	C	
125					AE18	C	
126	75X126	土ブロック		197 → 125	AG18台	C	
127		土ブロック			AG10台	C	
128		ビット			AG18	C	
129		ビット			AG18	C	
130					AG18	C	
131		ビット			AG18	C	
132		ビット		191 → 132	AE18	C	
133		ビット		191 → 133	AE16	C	
134		土ブロック			AG18台	C	
135					AG18	C	
136		土ブロック			AG18台	C	
137		土ブロック			AG13	C	
138		ビット	※-138a 骨列を構成	616 → 138	AG13台	C	
139		ビット	※-138b 骨列を構成	194台 → 139	AG13	C	
140					AG13	C	
141		ビット			AG13	C	
142		ビット			AG13	C	
143		ビット			AG13	C	
144		ビット			AG13	C	
145					AG13	C	
146		ビット			AG13	C	
147		ビット	※-138c 骨列を構成		AG12	C	
148		ビット	※-138c 骨列を構成		AG14台	C	
149		土ブロック			AG14台	C	
150					AG14	C	
151		土ブロック		189 → 151	AE13台	C	
152		土ブロック		189 → 152	AE12台	C	
153		土ブロック		194 → 153	AE12台	C	
154		土ブロック			AE12台	C	
155					AE13	C	
156		型まり	土壁の空白	188 → 156	AE13	C	
157		型まり	土壁の空白	188 → 157	AE13	C	
158		型まり	土壁の空白	188 → 158	AE13台	C	
159		物置			AE13	C	
160					AE13	C	
161		漆黒			AE13	C	
162		土ブロック			AE13	C	
163		漆黒			AG12台	C	
164		漆黒			AG12台	C	
165					AG12台	C	
166		漆黒			AG13	C	
167		漆黒			AG13	C	
168		漆黒			AG13	C	
169		漆黒			AG12	C	
170		物置			AG12	C	
171				179台 → 171	AG14	C	
172		漆黒		178 → 172	AG14	C	
173		漆黒		178 → 173	AG12台	C	
174		物置		178 → 174	AE11	C	
175					AE11	C	
176		瓦葺1階		178 → 176	AE11	C	
177		物置		178 → 177	AG14	C	
178		物置		178 → 178	AG14	C	
179		瓦葺1階		178 → 179	AG12台	C	
180					AG12台	C	
181		漆黒			AG12台	C	
182		型まり			AG12台	C	
183	75X183	物置			AE13	C	
184	75X184	土ブロック	土等型まり		AG10台	C	
185		型まり			AG10台	C	
186			欠番		AG10台	C	
187					AG10台	C	
188	75X188	漆		188 → 183台	AE15台	C	
189	75X189	漆		189 → 181台	AE14台	C	
190					AE14	C	
191		漆		191 → 182台	AG18台	C	
192		漆			AG18台	C	
193		物置		797台 → 193	AE14	C	
194		物置			AE15	C	
195					AE15	C	
196	75X196	ビット		188 → 196	AE15	C	
197	75X197	土ブロック		197 → 128	AE18	C	
198	75X198	ビット			AE14台	C	
199			欠番		AE14台	C	
200	75X200	窠		205 → 200	AL15台	B	
201		漆黒			AE24	B	
202		漆黒			AE24	B	
203		漆黒			AE23	B	
204		漆黒			AE23	B	
205	75X205	瓦葺1階		487 → 205 → 206台	AL13台	B	
206		型まり			AE19台	B	

Tab.36 遺構番号台帳(3)

遺構番号	遺構内容	用途	構造	埋り合い	地区	区	部
207	埋生り				AK219#		
208	溝底				AV22		
209	溝底				AK22		
210	土砂	75K210		205 → 210	AK219#		
211	溝底				AK219#		
212	溝底				AK219#		
213	溝底				AK22#		
214	溝底				AK22		
215	埋生り			486 → 315	AK219#		
216	溝底				AV24#		
217			欠番				
218	溝底				AV22		
219	溝底				AK20		
220	溝底	75T220	約製車出土	320 → 336	AK19		
221	溝底				AK20		
222	溝底				AK20		
223	溝底			224 → 223	AK21		
224	溝底			224 → 223	AK20#		
225	土砂	75T225	長板状		AK21		
226	溝底			226 → 227	AK19#		
227	溝底				AV20#		
228	溝底				AK20		
229	溝底				AK19		
230	土砂				AK19#		
231	溝底			240 → 230	AV19#		
232	溝底				AK17#		
233	土砂	75K233		467# → 333	AK19#		
234	埋生り			239# → 234	AV19		
235	土砂	75T235	狭長板状		AK14		
236	土砂	75K236		220 → 236	AK19#		
237	溝底			236 → 237	AK20		
238	埋生り		片断透板の残み	236 → 234	AV19#		
239	溝底				AK20		
240	土砂			240 → 230	AK14#		
241	石垣			236 → 241	AK20		
242	溝底			246 → 242	AK17#		
243	溝底			245 → 243	AK17#		
244	溝底			244 → 245	AK15		
245	土砂	75K245		235 → 245	AK14		
246	溝底				AK15		
247	溝底				AK15		
248	土砂			248 → 271#	AK15#		
249	溝底			241 → 249	AK19#		
250	土砂	75K250	段がつかえる	235 → 250	AK14		
251	溝底			241 → 251	AK16		
252	溝底				AK22		
253	土砂	75T253	円盤状		AK20		
254	溝底				AK24		
255	土砂	75K255	土砂層埋生り	200 → 255	AK14		
256	溝底				AK20#		
257	溝底			236 → 257	AK19#		
258	溝底			236 → 258	AK19#		
259	溝底			261 → 259	AK20		
260	土砂	75K260		265 → 260	AK14		
261	溝底			259 → 261	AK20		
262	溝底			474 → 262	AK19		
263	溝底				AK19		
264	溝底				AK19		
265	溝底	75K265	狭土敷層	260 → 265 → 300	AK14		
266	溝底				AK19#		
267	溝底				AK15		
268	溝底			269 → 268	AK16		
269	溝底			269 → 268	AK19		
270							
271	土砂			248 → 271	AK14#		
272	溝底			275 → 272	AK19		
273	溝底			275 → 272	AK19#		
274	溝底			248 → 274	AK19#		
275							
276	溝底			248 → 276	AK16		
277	溝底			248 → 277	AK19#		
278	溝底			245 → 278	AK17#		
279	溝底			248 → 279	AK17		
280							
281	溝底			245 → 276	AK17		
282	溝底			248 → 282	AK16		
283	溝底			245 → 283	AK16		
284	溝底			245 → 284	AK11		
285							
286	溝底			248 → 286	AK14		
287	溝底				AK19		
288	溝底			288 → 248	AK17#		
289	溝底			248 → 289	AK19#		
290							
291	溝底				AK19#		
292	溝底				AK17#		
293	溝底			248 → 293	AK15		
294	溝底			248 → 294	AK15		
295							
296	溝底			248 → 296	AK19#		
297	溝底			248 → 297	AK15		
298	溝底			245 → 298	AK15		
299	溝底			248 → 299	AK15		
300							
301	土砂	75T301	土砂		AK20	A	
302	土砂	75T302	溝壁: bに分かれる	62 → 302	AK19#	A	
303	土砂	75T303	溝壁: bに分かれる		AK19#	A	
304	土砂	75T304	溝壁: bに分かれる	304 → 319	AK19#	A	
305							
306	土砂	75T306		306 → 307	AK19#	A	
307	土砂		竹根のぶがり	306# → 307	AK19#	A	
308	土砂		溝壁: bに分かれる	306 → 307	AK19#	A	
309	土砂	75T309	溝壁: bに分かれる	309# → 309# → 307	AK19#	A	

Tab.37 遺構番号台帳(4)

遺構番号	遺構番号	経路	遺構	埋り合い	状況	区	経
210							
211				311 → 307	埋没0位	A	B
212	787012		溝	15位 → 312	埋没1位	A	A
213	787013		近世墓	79 → 313	AT15位	A	D
214	787014		近世墓		埋没4位	A	D
215							
216			文化物の広がり	316 → 307	埋没0	A	B
217	787017		近世墓		埋没1位	A	D
218			ピット	96 → 318	AT15	A	D
219			溝	79位 → 319	埋没1	A	D
220							
221			溝	321 → 96	埋没5	A	D
222			溝	797 → 322 → 349位	埋没15位	A	D
223					埋没16位	A	D
224					AT16	A	D
225							
226			溝		埋没16位	A	D
227	787027		近世墓	906 → 327 → 11	埋没20	A	A
228	787028		近世墓	831位 → 328 → 33	埋没19位	A	A
229	787029		土坑		埋没1	A	A
230							
231	787031		近世墓	331 → 377	埋没18	A	C
232	787032		近世墓	332 → 378	埋没19	A	C
233	787033		近世墓		埋没19位	A	C
234	787034		近世墓		埋没18	A	C
235							
236	787036		近世墓	338 → 384位	埋没19位	A	C
237	787037		近世墓		埋没18	A	C
238	787038		近世墓	381 → 338 → 387位	埋没18	A	C
239	787039		近世墓	339 → 77位	埋没19位	A	C
240							
241	787041		近世墓		埋没19位	A	C
242	787042		ピット	29 → 342	埋没0	A	C
243			溝	31 → 343	埋没0	A	A
244			河原の掘り出し 欠番				
245							
246			溝		埋没19	A	B
247			溝	307 → 347	埋没19	A	B
248			溝と脚部	348 → 307	埋没14位	A	B
249			ピット	592 → 349 → 307	埋没19	A	B
250			ピット	307 → 350	埋没19	A	B
251			ピット	334 → 307	埋没19	A	C
252			溝		埋没19位	A	B
253			溝		埋没19	A	B
254	787054		ピット	333 → 86	埋没19	A	B
255			溝	334 → 84	埋没19	A	B
256	787056		近世墓	336 → 81	埋没15	A	D
257			欠番				
258			溝		埋没19	A	B
259			溝		埋没19	A	B
260							
261			溝		埋没19	A	B
262			溝	361 → 46	埋没19	A	B
263							
264	787064		近世墓	361 → 9	埋没1	A	A
265							
266	787066		土坑	366 → 73	埋没1位	A	C
267	787067		土坑	367 → 339 → 77	埋没12位	A	C
268	787068		ピット	369 → 368	埋没17	A	C
269	787069		ピット	78 → 369 → 368	埋没17	A	C
270							
271	787071		溝		埋没19位	A	C
272	787072		ピット	373 → 374	埋没18	A	B
273	787073		近世墓	373 → 374 → 376	埋没17	A	C
274	787074		近世墓	373 → 374 → 376	埋没17	A	C
275							
276	787076		近世墓	374 → 376	埋没17位	A	C
277	787077		ピット	331 → 377	埋没19	A	C
278	787078		ピット	377位 → 378	埋没19	A	C
279	787079		近世墓		埋没18位	A	C
280							
281			自然地形の崩み	381 → 338位	埋没19	A	C
282	787082		近世墓	382 → 18	埋没20位	A	A
283	787083		近世墓 (小児用)		埋没18	A	C
284	787084		近世墓 (小児用)	336 → 361 → 366	埋没19位	A	C
285							
286	787086		近世墓 (小児用)	384位 → 386	埋没18	A	C
287	787087		ピット	338位 → 387	埋没19	A	C
288	787088		近世墓	389位 → 392	埋没19位	A	A
289	787089		近世墓	389 → 393位	埋没19位	A	A
290							
291	787091		土坑	393位 → 391	埋没19	A	A
292	787092		ピット	519位 → 392	埋没19	A	A
293	787093		近世墓	39 → 392	埋没19位	A	A
294	787094		近世墓	394 → 393	埋没20	A	A
295							
296	787096		近世墓	396 → 393	埋没20位	A	A
297							
298			溝	399 → 398	埋没11	A	D
299			溝	399 → 398	埋没14	A	D
300							
301			溝	218 → 401	埋没15	B	
302			溝	248 → 402	埋没15	B	
303			溝	248位 → 403	埋没17位	B	
304			溝		埋没17	B	
305			溝				
306			溝	407位 → 406	埋没19	B	
307			溝	218 → 407 → 406	埋没19	B	
308			溝	409位 → 408	埋没19	B	
309			溝	248 → 409 → 408	埋没19	B	
310							
311			溝	410位 → 411	埋没19位	B	
312			溝	413位 → 412	埋没19	B	

Tab.38 遺構番号台帳(5)

遺構番号	遺構種類	期	遺構	埋り合い	基区	注	経
412	土坑			248 → 412	411地		
414	溝張り			248 → 414	F019地		
415	土坑			248 → 415	AP14		
417	土坑			248 → 417	AP14		
418	溝張り				AL19地		
419	溝張り	753419	築期不明	205 → 419	SM1地		
420							
421	溝張り				AL15		
422	土坑				AM19地		
423	土坑				AX16		
424	土坑			248 → 424	AX15		
425							
426	土坑				AL16		
427	溝張り			427 → 428	AT17		
428	溝張り			427 → 428	AT17地		
429	溝張り	753429	自然地形の備り	429 → 254	AV19地		
430							
431	土坑			491 → 432	SL22		
432	ピット				AK22		
433	ピット			491 → 433	AK22		
434	土坑			491地 → 434	SL21		
435							
436	溝張り			491地 → 436	AL21地		
437	土坑				AM21地		
438	土坑				AK20		
439	溝張り				AJ20地		
440							
441	土坑				AK19		
442	土坑				AK19		
443	土坑				SJ18		
444	溝張り				AM21地		
445							
446	溝張り				AL20地		
447	溝張り				AM20地		
448	溝張り				AV20		
449	土坑				AK20地		
450							
451	溝張り				AX19地		
452	溝張り				AM19地		
453	溝張り				AM19地		
454	溝張り				SL19地		
455							
456	土坑				AM19地		
457	土坑				AM19地		
458	溝張り				AK18		
459	溝張り				AV17地		
460							
461	溝張り				AK19地		
462	土坑				AK17		
463	土坑				AV17		
464	土坑				AK17		
465							
466	土坑				AJ20地		
467	土坑	753467		467 → 233	AX18		
468	土坑	753468		468 → 233	AX18		
469	土坑	753469		469 → 233	AX18		
470							
471	土坑	753471			AV18地		
472	土坑	753472		473 → 472	AX19地		
473	土坑			473 → 472地	AX18		
474	溝張り			476 → 474 → 262	AS19		
475							
476	土坑				AP19地		
477	土坑				AP14		
478	溝張り		良化粉混入	248 → 477 → 483	AS19地		
479	溝張り			479 → 478 → 474	AT20		
480				479 → 478			
481	土坑	753481		482 → 481	AM17地		
482	土坑	753482		483 → 482 → 481	AM17地		
483	溝張り			483 → 482	AK17		
484	土坑				AM17		
485							
486	溝張り				AK13地		
487	溝張り				AK14地		
488	溝張り	753488	コンクリート混入	488 → 215	SM4地		
489	溝張り				SL17		
490							
491	土坑	753491		491 → 601地	AS15地		
492	溝張り				AK17		
493	土坑				AP14		
494	溝張り	753494	築期不明	477 → 493	AL13地		
495							
496							
497	ピット	753496			AL13地		
498	灰層				AL13地		
499	ピット	753498		498 → 209	SM4		
500	ピット	753499		491 → 499	AK21地		
501			近接代の坑		AX14	A	D
502	坑		近接代の坑		AX14	A	D
503	坑		近接代の坑		BA13	A	D
504	坑		近接代の坑		BA13	A	D
505							
506	坑		近接代の坑		BA14	A	D
507	坑		近接代の坑		BA13	A	D
508	土坑	751508		38 → 407	BM21	A	A
509			欠番				
510							
511	土坑	751511		512地 → 511	BM21	A	A
512	土坑	751512		512 → 511	BM21	A	A
513	土坑	751513		513 → 511	BM20地	A	A
514	土坑	751514		803地 → 514	BM20地	A	A
515							

Tab.39 遺構番号台帳(6)

遺構番号	遺構番号	種別	備考	切り合	台帳	区	群
510	751516	近畿墓		541 → 316	0020	A	A
517	751517	近畿墓		517 → 22	0020他	A	A
518			欠番				
519	751519	近畿墓		519 → 308他	0020	A	A
520							
521	751521	近畿墓		543 → 321 → 811	0020他	A	A
522	751522	近畿墓		519 → 322 → 523	0020他	A	A
523	751523	近畿墓		322他 → 323	0020他	A	A
524	751524	近畿墓		309他 → 324	0015他	A	D
525							
526		ビント	※-344a 総列を構成	547 → 326	0015	D	
527		ビント	※-344a 総列を構成		0015	D	
528		ビント	※-344a 総列を構成	591 → 328	0015	D	
529		ビント	※-344a 総列を構成		0015	D	
530							
531		ビント		532 → 331	0114他	D	
532		ビント	※-344a 総列を構成	532 → 331	0114他	D	
533		ビント	※-344a 総列を構成		0114	D	
534		ビント			0114他	D	
535							
536		ビント	※-344a 総列を構成		0114	D	
537		ビント	※-344a 総列を構成		0114	D	
538		ビント	※-344f 総列を構成		0014	D	
539		ビント	※-344a 総列を構成		0013	D	
540							
541		ビント	※-344a 総列を構成		0013	D	
542		ビント	※-344a 総列を構成		0013	D	
543		ビント	※-344a 総列を構成		0013	D	
544		ビント	※-344a 総列を構成		0013	D	
545							
546		ビント			0011他	D	
547		ビント		547 → 544a	0015他	D	
548		ビント		322他 → 348	0016	D	
549		ビント		322 → 349	0016	D	
550							
551		ビント			0016他	D	
552		溝	S-538上同一?		0016	D	
553		埋まり			0016他	D	
554		埋まり			0016	D	
555							
556		埋まり		557 → 356	0014他	D	
557		埋まり		557 → 356	0015他	D	
558		溝	S-532上同一?	591 → 358	0015他	D	
559		ビント			0014他	D	
560							
561		埋め			0015他	D	
562		埋め			0013	D	
563		埋め		563 → 362	0013	D	
564		埋まり		563 → 362	0014	D	
565							
566		ビント			0013他	D	
567		墓石(石葺)	墓石出土地点		0013	D	
568		埋まり			0013	D	
569		ビント			0013	D	
570					0013	D	
571		ビント	※-703d 総列を構成		0012	D	
572		ビント	※-703a 総列を構成	577 → 372	0012	D	
573		ビント	※-S 703f 総列を構成	577 → 373	0013	D	
574		埋め		577 → 374	0014他	D	
575							
576		埋まり			0012他	D	
577		溝		322 → 377 → 548他	0016他	D	
578		埋まり			0015	D	
579		ビント	※-344a 総列を構成	397他 → 379	0015	D	
580			※-344a 総列を構成				
581	751581	近畿墓		581 → 1	0021他	A	A
582	751582	近畿墓			0021他	A	D
583	751583	近畿墓	欠番	583 → 587	0014他	A	D
584							
585							
586	751586	溝		595 → 386 → 323他	0014他	D	
587		埋め		585 → 587	0015	D	
588			欠番				
589	751589	土壇墓		765 → 389 → 542他	0016他	A	D
590							
591		埋まり		591 → 5441他	0015他	D	
592		ビント		718 → 592	0015	A	D
593		ビント		594他 → 393	0015	A	D
594		ビント		594 → 509他	0015	A	D
595							
596	751596	溝		596 → 5801他	0015他	A	D
597		ビント		322他 → 397 → 544a	0015他	D	
598			欠番				
599			欠番				
600							
601	753001	ビント		491・608 → 601	A211他	B	
602	753002	ビント		491・608 → 602	A121	B	
603	753003	ビント			A223	B	
604	753004	ビント		491・608 → 604	A211	B	
605							
606	753006	不埋墓			A212他	B	
607		ビント			A121	B	
608	753008	溝(墓溝)		608 → 6011他	A121他	B	
609	753009	ビント		491 → 609	A121	B	
610							
611		埋まり		611 → 612	A122	B	
612	753012	ビント		611 → 612	A122	B	
613			欠番				
614		土溝			5016他	C	
615		土溝		129他 → 616	A013	C	
616							
617			欠番				
618	753018	ビント		491他 → 618	A211	B	

Tab.40 遺構番号台帳(7)

台帳番号	遺構番号	類別	備考	初り台 ¹⁾	地区	区	種
819			75-112				
820							
821	751621	伊世墓	1/100のみ		3616号	A	B
822	751622	伊世墓			3616号	A	B
823	751623	伊世墓			3616号	A	B
824		穴溝			3613号	D	
825							
826		ピット			3614	D	
827			穴溝				
828			穴溝				
829			穴溝				
830							
831	751631	木棺墓			3615	D	
832	751632	土坑		634R → 632	3614号	D	
833	751633	土坑		634 → 632 → 632	3614号	D	
834	751634	土坑		634 → 632柱	3614号	D	
835							
836	751636	ピット		649 → 636 → 633	3614	D	
837		土坑			3614号	A	D
838			75-619				
839		ピット			3613	D	
840							
841		ピット			3615	D	
842		ピット			3615号	D	
843		溝			3613号	D	
844		ピット			3615号	D	
845							
846		ピット			3614	D	
847		ピット			3614号	D	
848		ピット			3614	D	
849	751649	木棺墓		649 → 633	3614号	D	
850							
851		ピット			3611	D	
852							
853		穴溝					
854		穴溝					
855							
856		穴溝					
857		穴溝					
858		穴溝					
859		穴溝					
860							
861		穴溝					
862		穴溝					
863		穴溝					
864		穴溝					
865		穴溝					
866	751666	伊世墓			3621	A	B
867							
868		穴溝					
869		穴溝					
870		穴溝					
871		穴溝					
872		穴溝					
873		穴溝					
874		穴溝					
875		穴溝					
876		穴溝					
877		穴溝					
878		穴溝					
879		穴溝					
880		穴溝					
881		穴溝					
882		穴溝					
883		穴溝					
884		穴溝					
885							
886		穴溝					
887		穴溝					
888		穴溝					
889		穴溝					
890		穴溝					
891		穴溝					
892		穴溝					
893		穴溝					
894		穴溝					
895							
896		穴溝					
897		穴溝					
898		穴溝					
899		穴溝					
900							
901		ピット	75-703a 単列を構成		3612	D	
902		ピット	75-702b 単列を構成		3612	D	
903		ピット	75-703a 単列を構成		3611	D	
904	751701	伊世墓		701 → 21	3621	A	A
905	751706	伊世墓		867号 → 705	3615	D	
906	751706	伊世墓		706 → 31	3621	A	A
907		伊まり		707 → 325	3615	D	
908	751708	土坑墓		708 → 伊代墓	3615	A	B
909	751709	伊世墓		709 → 伊代墓	3615	A	B
910	751710	伊世墓		710号 → 710 → 735	3615	D	
911	751711	土坑墓	墓溝はbに分かれる	711a → 711柱	3616	A	B
912	751712	伊世墓		712 → 伊代墓	3615	A	B
913	751713	伊世墓		713 → 伊代墓	3617	A	B
914	751714	土坑墓		714a → 714	3616	A	B
915	751715	伊世墓		906 → 716 → 710	3615	D	
916		穴溝			3615	A	D
917		穴溝			3616	A	D
918		伊まり		994 → 718 → 364柱	3615	A	D
919	751719	伊世墓	墓溝はbに分かれる	719a → 719a	3617	A	B
920							
921		土坑			3617	A	B

Tab.41 遺構番号台帳(8)

号	遺構番号	種別	備考	切り合い	地区	区	群
722	751722	土壁			B177地	A	B
723	751723	現代墓	現代の付置	747 → 723	DL16地	A	B
724	751724	土壁			DM16	A	B
725							
726	751726	土壁		727 → 726	DM17地	A	B
727	751727	土壁		727 → 726	DM17地	A	B
728		ピット			DG15	D	D
729				861 → 729	DM15	D	D
730	751730	懸穴状遺構		770 → 730 → 732地	DM15地	D	D
731	750731	礎			DG15	D	D
732	750732	礎		730地 → 732	DG15	D	D
733		礎			DG15	D	D
734	751734	木柱墓			DG15地	D	D
735	751735	懸穴状遺構		709地 → 735	DM12地	D	D
736	751736	礎		65 → 736	DM14地	D	D
737	751737	礎		807 → 737	DM14地	D	D
738	751738	礎			DM14地	D	D
739		礎			DM14	D	D
740	751740	懸穴状遺構		780地 → 740 → 744c	DM13地	D	D
741		ピット			DM14	D	D
742		ピット			DM19	D	D
743	751743	礎			DM16地	D	D
744	751744	礎		740地 → 744	DM16地	D	D
745							
746	751746	灰磔円形遺構	灰磔土	868地 → 746	DM14	D	D
747		木ノ葉		747 → 723	DL12地	A	B
748	751748	土坑			DL12地	D	D
749		土坑		768 → 749	DL12地	D	D
750	751750	懸穴状遺構		700 → 750 → 734地	DM14地	D	D
751		礎		752 → 751	DM12	D	D
752		礎		789 → 752 → 751	DM12	D	D
753		礎			DM11地	D	D
754		礎		864地 → 754	DM11	D	D
755	751755	懸穴状遺構		755 → 807地	DM14地	D	D
756		ピット			DM14	D	D
757		ピット		767 → 189地	DM14	C	C
758			穴				
759	751759	木柱			AY16地	A	D
760	751760	懸穴状遺構		760 → 760	DG14地	D	D
761	751761	土壁			DL13地	A	B
762	751762	礎		762 → 882地	DM11	A	D
763		礎		763 → 94	DM13地	A	D
764		礎			DM14地	A	D
765	751765	懸穴状遺構		634地 → 765 → 689	DM15	D	D
766			穴				
767	751767	土坑		767 → 770地	B114	D	D
768	751768	土壁		768 → 391	DM21地	A	A
769		礎			DM11	D	D
770	751770	懸穴状遺構		767地 → 770 → 802地	DM11	D	D
771		ピット	※-50c 独立柱礎を構成		DM11	D	D
772		ピット	※-35b 独立柱礎を構成		DM13	D	D
773		ピット	※-35c 独立柱礎を構成		DM13	D	D
774		ピット	※-35d 独立柱礎を構成		DM13	D	D
775	751775	懸穴状遺構	※-60c 独立柱礎を構成	775 → 770地	DM14地	D	D
776		ピット			DM13	D	D
777							
778		ピット			DM12	D	D
779			穴				
780	751780	懸穴状遺構		785 → 780 → 730地	DM13地	D	D
781			穴				
782			穴				
783		礎		783 → 752	DM12	D	D
784		礎		784 → 752	DM12	D	D
785	751785	懸穴状遺構		785 → 740地	DM13	A	D
786		礎			AY13地	A	D
787			穴				
788		ピット		788 → 749	DM13	D	D
789	751789	土壁		381地 → 789 → 387	DM16	A	C
790							
791		礎		817地 → 791	DM12	D	D
792			穴				
793		ピット			DM16	D	D
794		ピット			DM16	D	D
795							
796		礎		796 → 797	DM15地	D	D
797		礎		879 → 798 → 797	DM15	D	D
798	751798	木柱墓			DM15	D	D
799			穴				
800							
801		土坑		802 → 801	B114	D	D
802		礎		767 → 802 → 801	B113地	D	D
803			穴				
804		礎			DM15	D	D
805	751805	土坑			DM15	A	B
806	751806	土坑			DM16地	A	B
807	751807	土坑			DM16地	A	B
808	751808	土坑		755 → 807 → 737	DM16	A	B
809				808 → 現代型	DM16地	A	B
810			穴				
811							
812	751812	土坑		814 → 812	DM17	A	B
813	751813	土坑		814 → 813	DM17	A	B
814	751814	土壁		814 → 812地	DM17	A	B
815							
816			穴				
817		礎			DM12	D	D
818		礎			DM12	D	D
819			穴				
820			穴				
821			穴				
822	751822	土壁		822 → 823	DM19地	A	A
823	751823	礎		823 → 65	DM14	D	D
824	751824	土坑			DM19	A	A

Tab.42 遺構番号台帳(9)

台帳番号	遺構番号	種別	形式	図りかき	地区	PC	照
825			欠番				
826							
827	757827	近世墓			8119地区	A	A
828	757828	近世墓		826 → 829地区	8115	A	A
829	757829	近世墓		826 → 829 → 34	8119	A	A
830							
831	757831	近世墓		836 → 831	8019地区	A	A
832	757832	近世墓		834 → 832	8019地区	A	A
833	757833	埴土り		834 → 833 → 516	8020地区	A	A
834	757834	近世墓		836 → 834 → 832地区	8020地区	A	A
835							
836	757836	近世墓		836 → 831地区	8019地区	A	A
837			欠番				
838			欠番				
839			欠番				
840							
841	757841	ピット		845 → 844 → 516	8020	A	A
842	757842	ピット		845 → 842	8020	A	A
843	757843	近世墓		845 → 821地区	8020地区	A	A
844		ピット			8019	A	A
845							
846							
847			欠番		8019	A	A
848			欠番				
849			欠番				
850							
851			ピット		8019	A	A
852							
853			欠番				
854			-0-734				
855				65地区 → 851	8014	D	
856	757856	船穴状遺構		884 → 856 → 703地区	8113地区	D	D
857		ピット		857 → 705	8013地区	D	D
858					8018地区	D	D
859			-0-734				
860							
861	757861	近世墓		863 → 369	8019	A	B
862	757862	近世墓		863 → 861	8019地区	D	D
863		埴土り		863 → 864 → 754地区	8011	D	
864		埴土り					
865							
866	757866	埴土り		864地区 → 865 → 734	8011地区	D	D
867		土灰		867 → 866	8011地区	D	D
868	757868	船形副遺構		877 → 868 → 746	8014地区	D	D
869	757869	船形副遺構		869 → 746地区	8014地区	D	D
870							
871	757871	船形副遺構		871 → 746	8014	D	D
872	757872	船形副遺構		872 → 703地区	8014	D	D
873	757873	船形副遺構		873 → 703地区	8014	D	D
874							
875			欠番				
876			欠番				
877	757877	船形副遺構		889 → 877 → 746地区	8014	D	D
878	757878	船形副遺構		872 → 878 → 746	8014	D	D
879				879 → 797地区	8115地区	D	D
880							
881		埴土り		881 → 729	8015	D	D
882		船形		762 → 882	8014	A	D
883		船形		762 → 883	8014	A	D
884		埴土り		884 → 835	8013	D	D
885							
886		包式墓		783 → 887	8013	D	D
887		船形		8019地区 → 888	8014	A	D
888	757888	包式墓		889 → 891	8014	A	D
889		包式墓					
890							
891				889地区 → 891 → 888	8014地区	A	D
892					8014地区	A	D
893				883 → 888地区	8014地区	A	D
894					8015	A	D
895							
896	757896	ピット	S-856のピット		8013	D	D
897	757897	ピット	S-856のピット		8013	D	D
898	757898	土灰			8016	A	B
899	757899	近世墓			8016	A	B
900							
901	757901	近世墓			8016地区	A	B
902		土灰		902 → 307	8019	A	B
903	757903	包式墓			8013	D	D
904		土灰			8014地区	D	D
905							
906		土灰		906 → 118地区	8120	A	A
907		ピット		787 → 907	8014	D	D

太宰府・佐野地区遺跡群

佐野土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
日焼遺跡第7次調査

—第2 冊 自然科学 析・写真図版編—

平成 年

太宰府市教育委員会

付 編

自然科学 析

福岡県太宰府市日焼遺跡の 古地磁気調査

川崎地質館北日本支社

菊山 浩喜

秋田大学工学資源学部地球資源学科

西谷 忠師

1. はじめに

福岡県太宰府市日焼遺跡は、風化花崗岩の小山斜面に位置している。遺構面に土壌はほとんどなく、直接風化花崗岩地山を掘り込んで各遺構が分布する。遺跡の直下には、旧河川が埋没していることが確認されている。

日焼遺跡から検出された2つの窯跡から試料を採取して考古地磁気調査を行った。この調査は熱残留磁気の方向から年代を推定することを目的としている。

また、これら2つの窯跡の他、一部の遺構について現場帯磁率測定により、被熱の有無について検証を行った。

なお、本調査は考古地磁気試料採取、現場帯磁率測定と解析、報告書取りまとめを川崎地質館北日本支社 菊山浩喜が担当し、残留磁化測定、解析、取りまとめは秋田大学工学資源学部地球資源学科の西谷忠師教授に依頼した。

2. 遺跡の 古地磁気年代測定

・遺構の状況

Pl.11に7SX105窯跡と7SX200窯跡の位置関係を示す。

7SX105窯跡の底面は厚さ5cm以上還元色を呈し、硬化している。還元色層の下部に赤色化した酸化層が厚く分布する。窯の内壁面には粘土を貼り付けているため、試料を採取した床面の還元色部はこの粘土である可能性が高い。赤色化した酸化部は、現地で確認は難しいが、状況から現地性の土壌か地山であると思われる。

7SX200窯跡底面の還元色部は厚さ1cm以下で、7SX105より薄い。その下の酸化部は7SX105同様に厚い。窯の構造は7SX105と同規模だが、7SX200は壁面とドーム状の天井が一部残存する。7SX105と同様、内部には粘土を貼り付けており、窯上部には粘土による補修痕が残っている。

・試料採取

試料採取は一辺約24mmの立方体状ポリカーボネイト製キューブを地中に打ち込む手法により行った。現場での試料の残留磁化方向を得るため、各試料の走向方向と、傾斜角度を記録した。最終的に使用した試料数は7SX105窯跡が26個、7SX200窯跡が24個の合計50個である。

Tab.1, Tab.2に採取試料の一覧を示す。Fig.1は7SX105窯跡の平面図と試料採取位置を、Fig.2は7SX200窯跡の平面図と試料採取位置を示す。

試料を採取したときの状況をPl.2～Pl.4に示す。Pl.2, Pl.3は7SX105窯跡の採取状況を示し、Pl.4は7SX200窯跡の採取状況である。

・自然残留磁化の測定

採取した試料のまま、何の処理も行っていない状態の残留磁化（自然残留磁化：NRM）を測定した。

測定はスピナー磁気計（夏原技研製）を用いた。磁気計から出力される値は個々の試料に固定した座標系の数値であるため、窯跡の位置での値に変換しなければならない。この変換は試料採取時に記録した走向と傾斜の値（Tab.1, Tab.2）を用いて行う。また、現場では磁北基準の値を用いているため、真北基準の値に変換する必要がある。日焼遺跡における現在の地磁気偏角は -6.393° （マイナスは西偏を示す）である。

磁気計で測定した磁化方向の偏角にこのずれの角度（ -6.393° ）を加えて真北基準の偏角とした。自然残留磁化方向の分布状態を等積投影法で表現したものがFig.3である。試料各々の磁化方向は黒丸で、平均



Pl.1 7SX105窯跡と7SX200窯跡の位置関係

を×印で示してある。95%信頼区間（95%の確率で真の値が含まれる範囲）を楕円で表現した。

自然残留磁化の測定結果をTab.3に示す。Tab.3で示した95%信頼区間は値が小さいほど平均値の信頼性が高く、精密パラメータは値が大きいほど信頼性が高いことを示す。

・ 流消磁

自然残留磁化には熱を受けたときに獲得した成分と二次的に獲得した成分が含まれている。熱を受けたときの残留磁化方向を特定するため、二次磁化成分を除去する必要がある。この操作が交流消磁である。

交流消磁は、ある強度の交流磁場中で試料をランダムに回転させ、交流磁場をゆっくりとゼロまで下げる操作である。交流磁場強度を段階的に大きくして同様の操作を繰り返す。この操作で二次的に獲得した磁化成分を除去することが可能である。

Fig.4は7SX105試料4, 11の段階交流消磁の結果である。NS-WEが残留磁化方向を水平面に投影したものの、UD-WEが垂直面に投影したものである。NRMと表示してある位置から交流磁場が大きくなるにつれて磁化方向が変化する様子が表示されている。試料4,11共にはほぼ直線的に原点へと向かって減少している。よって、これらの試料には二次磁化成分がほとんど含まれていないことが分かる。

Fig.5は7SX105試料19, 22の例で、Fig.4と同様、直線的に原点に向かう減少傾向が見られる。しかし、これらの試料は交流磁場強度を大きくしても磁化強度の減少はわずかである。磁化成分が安定であることを示している。

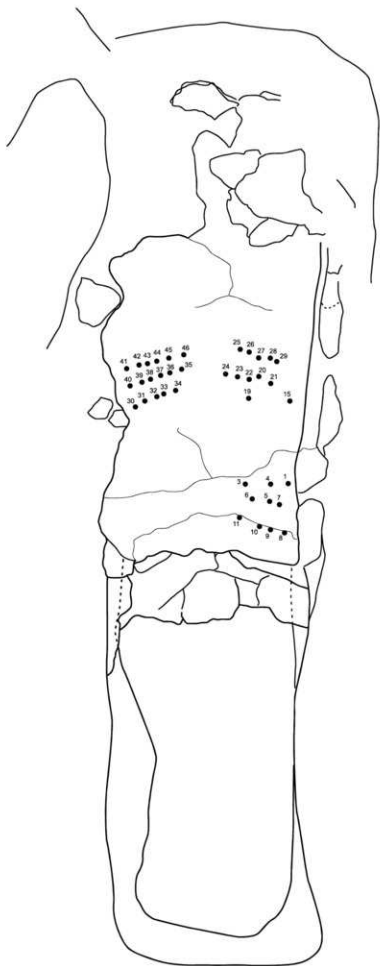
Fig.6は7SX105試料32, 38の場合である。2 mT～4 mTの消磁磁場付近で方向変化が認められる。これより大きな消磁磁場では原点に向かって減少していることから、2 mT～4 mTが二次的な磁化成分を消去できる交流磁場強度だとわかる。

Fig.7は7SX200試料09, 12の例である。1 mT～4 mTで交流消磁を行えば、二次磁化成分を除去できることがわかる。

交流消磁を行った全ての試料の変化傾向を検討して最適の交流磁場を決定する。7SX105では試料01～40を6 mT, 41～46を2 mTで消磁して結果を求めた。7SX200では試料03に対して2 mT, これ以外の試料には全て1 mTで交流消磁を行って結果を求めた。

・ 二次磁化成分 消去後の磁化方向

最適消磁磁場で交流消磁を実行した後の磁化方向は最後に加熱された時の地磁気方向を示しているはずである。しかし、サンプルホルダーの挿入時の誤差や砂レキの影響、ホルダーの変形などで磁化方向が乱



0 20 40 cm

Fig.1 7SX105試料採取位置

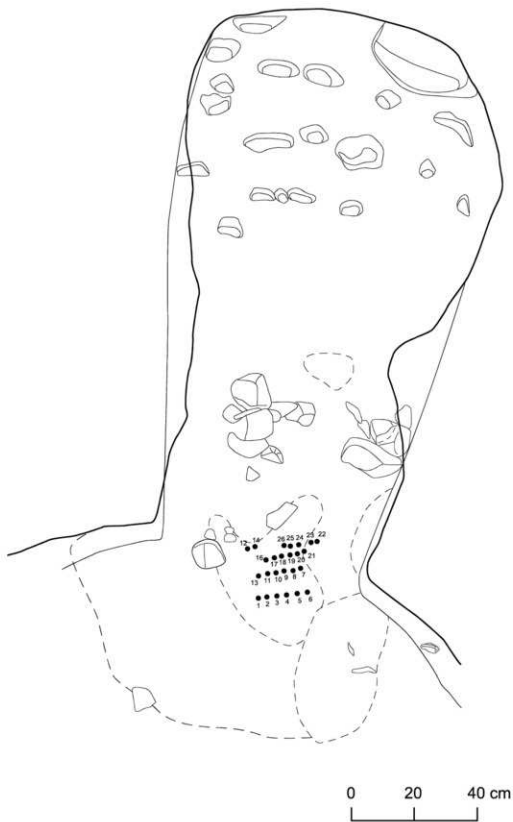


Fig.2 7SX200試料採取位置

Tab.1 日焼遺跡 7SX105窯跡 採取試料一覧表

試料番号	採取方向	採取位置	備 考
1	N33°E 12°20'S	挟き口底面の遷 元面	
2	—		欠番
3	N33°E 12°20'S		
4			
5	N34°E 11°10'S		
6			
7			変形
8	N38°E 19°10'S		
9			
10			変形
11			
12	—		欠番
13	—		欠番
14			欠番
15	N35°E 21°10'S		
16	—	欠番	
17		欠番	
18	—	欠番	
19	N31°E 16°20'S		
20	N33°E 24°20'S		
21			
22			
23			
24			
25	N37°E 24°10'S		
26			
27			
28			
29			
30	N1°E 22°30'S	挟き口底面を 10cm 程度掘り 込んだ赤色面	
31			
32			
33			
34			
35			
36			
37	N5°E 24°20'S		
38			
39			
40	N7°E 27°50'S		
41			
42			
43			
44			
45			
46			

(注) 採取方向は、磁北を基準とした走向角と傾斜角(度、分、傾斜の方向)を示す。

Tab.2 日焼遺跡 7SX200窯跡 採取試料一覧表

試料番号	採取方向	採取位置	備考
1	N24°E 6°00'S	焼き口底面の還元面	
2			
3			
4			
5			
6	N21°E 9°00'S		
7			
8			
9			
10			
11	N16°E 6°50'S		
12			
13			
14	N16°E 6°50'S		
15	—		欠番
16	N18°E 9°00'S		
17			
18			
19			
20			
21	N30°E 9°00'S		
22			
23			
24			
25			
26	—		欠番
27			
28	N23°E 31°30'S		窯上部の底面 (還元面)

(注) 採取方向は、磁北を基準とした走向角と傾斜角（度、分、傾斜の方向）を示す。

されている場合がある。明らかに平均にふさわしくないと判断されるデータを取り除いて平均を求めた。消磁後の残留磁化平均をTab.4に、磁化分布をFig.8に示す。

年代の推定

平均の残留磁化方向と考古地磁気学的手法によって推定された地磁気永年変化（広岡，1977；1988）を比較して年代の推定を行なう。Fig.9は交流消磁後の平均磁化方向および95%信頼区間と地磁気永年変化を同時に示したものである。各時代の地磁気方向の地域差は現在と同じであると仮定して永年変化曲線を日焼遺跡の位置に変換して表示した。誤差の範囲を考慮して年代を推定した結果をTab.5に示す。

なお、7SX105窯跡と7SX200窯跡の平均残留磁化方向は明らかに異なることから、それぞれ別に年代推定を行った。

広岡（1977，1988）の地磁気永年変化曲線と日焼遺跡の窯跡の残留磁化方向は、特に7SX200窯跡において偏角方向に5度程度のずれが認められる。このようなずれは採取試料側の要因と地磁気永年変化曲線側の要因が考えられる。



PI.2 7SX105窯跡 試料採取状況
主に焼き口付近の底面から採取した。



PI.3 7SX105窯跡焼き口付近底面の断面状況
底面表層は還元色を呈し(写真右), その下に
赤色化部が分布する(写真中央から左側)。



PI.4 7SX200窯跡試料採取状況
焚き口付近から主に採取した。

このうち採取試料については、採取位置が花崗岩地山上にあり、斜面変動を受けた可能性が低いこと、獲得されている残留磁化は非常に安定で、十分な強度を有し、2次的な磁化成分がわずかであり、残留磁化方向のまとまりも良いことから、得られた残留磁化方向の信頼性は非常に高いと考えられる。

一方、広岡(1977, 1988)の地磁気永年変化曲線は西南日本各地の遺跡から得られた残留磁化方向の平均値であり、相応の誤差を含むこと、過去の地磁気方向の地域差が不明なため、現在の地域差と同様であるとする仮定が必要であることから、これらが広岡(1977, 1988)の地磁気永年変化曲線と日焼遺跡の残留磁化方向のずれを生じさせたものと推定される。

3. 各遺構の帯磁率測定結果

・目的

全ての物質には、基本的に磁性がある。岩石や堆積物に外部磁場を与えると誘導磁化が生じる。強さFの外部磁場中に置かれた岩石や堆積物の誘導磁化の強度は、 kF となる。このときの k を、帯磁率または磁化率と呼ぶ。つまり、外部磁場をかけた際の磁化のしやすさを帯磁率と呼ぶ。岩石や堆積物の帯磁率は、基本的に構成する鉱物の量比と、各鉱物のもつ帯磁率の強さで決定される。但し、同じ鉱物でも粒径が小さいほど、帯磁率は強い値を示す。一般に土や岩石が熱の影響を被ると、含まれる磁性鉱物の形態に変化が生じるため、帯磁率は高くなる可能性がある。

各遺構について帯磁率を測定し、被熱の状況について検証した。

・測定方法

測定にはZH instruments社製のSM20型携帯型帯磁率計(PI.5)を使用した。

測定は、各遺構について任意の測線を設定し、測線に沿って原則として10cm間隔で実施した。測線は測定値が遺構外と遺構内の両方で得られるよう設定し、遺構外と遺構内の帯磁率測定値を比較することで、遺構の被熱の状況について検証を行った。

Tab.3 自然残留磁化測定結果

露跡	平均 試料数	偏角 (度)	伏角 (度)	95%信頼 区間 (度)	精密パラ メータ	平均磁化強度 ($\times 10^{-3}$ mAm ²)
7SX105	31	-17.957	48.899	3.535	54.392	1.145 \pm 0.998
7SX200	26	-6.536	51.263	2.525	127.069	1.033 \pm 0.629

(注) 偏角は真北基準の値である。

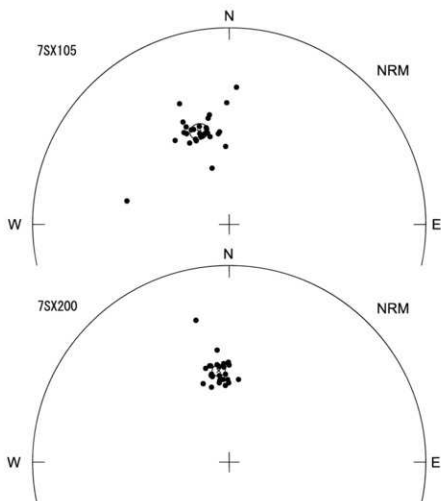


Fig.3 7SX105, 7SX200の自然残留磁化分布

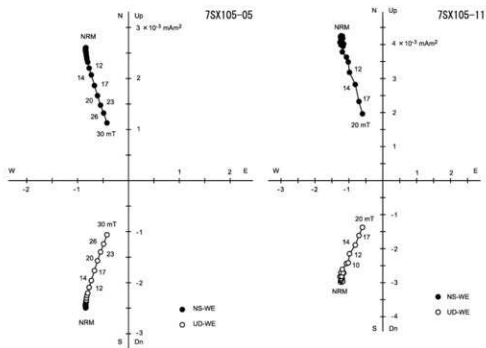


Fig.4 7SX105試料05, 11の交流消磁

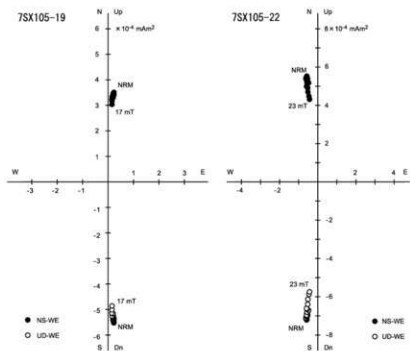


Fig.5 7SX105試料19, 22の交流消磁

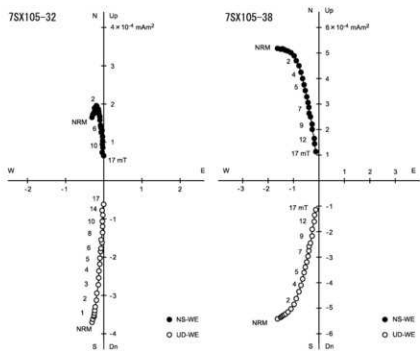


Fig.6 7SX105試料32, 38の交流消磁

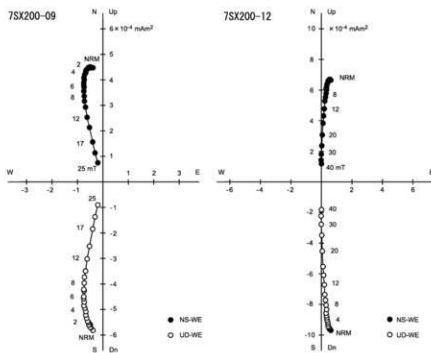


Fig.7 7SX200試料09, 12の交流消磁

Tab.4 交流消磁後の残留磁化測定結果

遺構名	平均 試料数	偏角 (度)	伏角 (度)	95%信頼 区間 (度)	精密度パ ラメータ
7SX105 窯跡	26	-15.550	47.916	1.636	301.352
7SX200 窯跡	24	-6.586	51.292	1.919	238.597

(注) 偏角は真北基準の値である。

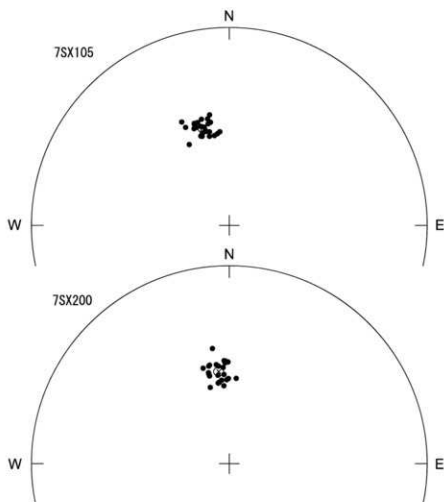


Fig.8 交流消磁後の残留磁化分布

Tab.5 年代推定結果

遺構名	考古地磁気推定年代
7SX105 竈跡	800 ± 20 A.D.
7SX200 竈跡	760 ± 20 A.D.

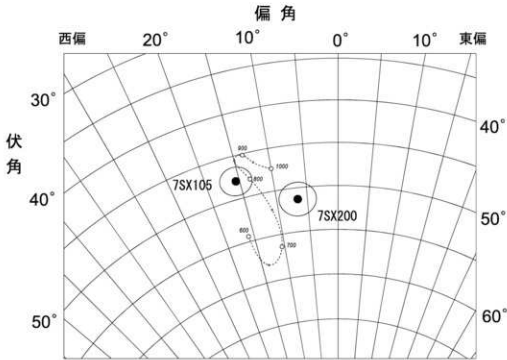


Fig.9 平均磁化方向と地磁気永年変化
 黒丸は平均磁化方向、楕円は95%信頼区間である。
 点線で地磁気永年変化と年代を示した。

測定結果

3-3-1. 7SX105窯跡

考古地磁気年代測定を実施した7SX105窯跡について、帯磁率測定を実施した。本窯跡は被熱による窯内部の土の硬化、赤色化が認められ、残留磁化の測定結果からも熱の影響を被っていることが明らかである。

測定測線は縦断方向に1測線、横断方向に1測線を設定した。測線設定位置をPl.6に、測定結果をTab.6に示す。Tab.7には、窯内部と窯外部のうち窯の構造上熱を被りやすい窯の上側を除いた平均値を示す。

窯内部の帯磁率測定値は窯外部と比較して約1.9倍高い値を示しており、熱の影響により、窯内部の帯磁率が高くなったものと推定される。



Pl.5 ZH instruments社製SM20型携帯型帯磁率計

Tab.6 7SX105窯跡 帯磁率測定結果

測線番号	L-1	L-2
測定地点番号	帯磁率($\times 10^{-3}$ SI units)	
1	0.993	0.34
2	0.778	0.378
3	0.588	0.324
4	0.714	0.512
5	0.693	0.661
6	0.624	0.777
7	0.756	0.423
8	0.838	0.368
9	1.48	0.343
10	1.02	0.853
11	1.16	0.91
12	0.965	0.985
13	0.825	0.465
14	0.76	0.331
15	0.725	0.522
16	0.435	0.486
17	0.455	0.647
18	0.485	0.649
19	0.419	
20	0.435	
21	0.389	
22	0.704	
23	1.22	
24	2.3	



Pl.6 7SX105窯跡 帯磁率測定測線

Tab.7 7SX105窯跡 帯磁率平均値

測定位置	測定地点数	帯磁率平均値 ($\times 10^{-3}$ SI units)
窯外部(側部)	3	0.347
窯内部	36	0.665

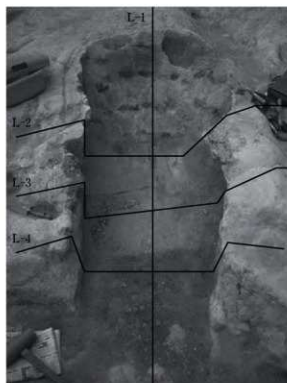
3-3-2. 7SX200窯跡

考古地磁気年代測定を実施した7SX200窯跡について、帯磁率測定を実施した。本窯跡は被熱による窯内部の土の硬化、赤色化が認められ、残留磁化の測定結果からも熱の影響を被っていることが明らかである。

測定測線は縦断方向に1測線、横断方向に3測線を設定した。測線設定位置をPl.7に、測定結果をTab.8に示す。Tab.9には窯内部と窯外部のうち、窯の構造上熱を被りやすい窯の上側を除いた平均値を示す。

窯内部（側壁部）の帯磁率測定値は、窯外部と比較して約6.36倍高い値を示している。窯内部（底面部）の帯磁率測定値は、窯外部と比較して約3.20倍高い値を示している。これらの結果から熱の影響により、窯内部の帯磁率が高くなったものと推定される。

一般的に窯跡では底面より側壁部において高温となるが、帯磁率は窯跡底面に対して側壁部では約2倍の高い値を示しており、このような底面と側壁部の帯磁率の相違は、被熱温度の相違を反映している可能性がある。



Pl.7 7SX200窯跡 帯磁率測定測線

Tab.8 交流消磁後の残留磁化分布

測線番号	L-1	L-2	L-3	L-4
測定地点番号	帯磁率 (×10 ⁻³ SI units)			
1	0.254	0.16	0.327	0.208
2	0.194	0.232	0.098	0.091
3	0.335	0.253	0.09	0.118
4	0.448	0.199	0.227	0.142
5	0.6	0.107	0.525	0.364
6	0.517	0.143	0.315	0.157
7	0.589	0.154	0.364	0.63
8	0.892	0.373	1.32	0.341
9	1.37	3.86	2.97	0.938
10	1.19	2.26	2.82	1.17
11	0.752	1.45	3.88	0.553
12	1.42	0.778	1.59	0.826
13	0.604	0.839	1.86	1.16
14	0.602	0.709	4.36	1.14
15	0.446	0.453	3	0.882
16	0.409	0.368	0.392	1.08
17	0.296	0.462	0.325	1.3
18	0.287	0.635	0.542	1.6
19	0.25	0.632	0.494	0.307
20	0.297	0.398	0.567	1.4
21	0.287	0.564	1.17	1.27
22	0.382	0.252	1.21	0.569
23	1.06	0.222	0.9	2.21
24	0.974	0.158	0.73	0.714
25	1.36	0.09	1.33	0.365
26	1.22	0.024	1.35	0.508
27	1.06		1.27	1.24
28	0.821		0.472	0.355
29	0.752		0.282	0.232
30	0.811		0.126	
31	1.58		0.162	
32	0.685		0.247	
33	0.328		0.163	
34	0.317		0.123	
35	0.35			
36	0.208			
37	0.426			
38	0.118			
39	0.262			
40	0.262			
41	0.581			
42	0.348			

Tab.9 7SX200窯跡 帯磁率平均値

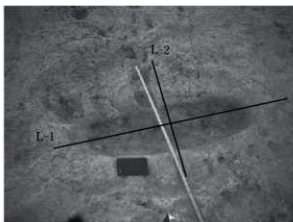
測定位置	測定地点数	帯磁率平均値 ($\times 10^{-3}$ SI units)
窯外部 (側部)	42	0.287
窯内部 (側壁部)	21	1.826
窯内部 (底面)	59	0.919

3-3-3. 7ST253遺構

7ST253遺構について、帯磁率測定を実施した。本遺構は縦1.5m、横0.8mの楕円形を呈し、花崗岩地山を掘り込んだ底面に炭が敷き詰められていたことから、火葬墓である可能性がある。

測定測線は縦断方向に1測線、横断方向に1測線を設定した。測線設定位置をPl.8に、測定結果をTab.10に示す。Tab.11には遺構内部と遺構外部において帯磁率平均値を示す。

遺構内部の帯磁率平均値は遺構外部に対して約0.88倍の値となり、両者に有意な差は認められない。また、遺構内部の帯磁率平均値は、熱の影響を被っている7SX105窯跡、7SX200窯跡の内部の帯磁率平均値と比較して1桁以上小さな値を示している。これらの結果より、帯磁率の測定結果からは、本遺構は熱を被っていないと推定され、即ち本遺構は火葬墓ではなく、敷き詰められていた炭は外部から持ち込まれたものであると考えられる。



Pl.8 7ST253遺構 帯磁率測定測線

Tab.10 7ST253遺構 帯磁率測定結果

測線番号	L-1	L-2
測定地点番号	帯磁率 ($\times 10^{-3}$ SI units)	
1	0.039	0.043
2	0.058	0.033
3	0.045	0.05
4	0.052	0.036
5	0.094	0.059
6	0.038	0.071
7	0.029	0.055
8	0.107	0.082
9	0.032	0.058
10	0.03	0.04
11	0.031	0.065
12	0.035	
13	0.073	
14	0.031	
15	0.047	
16	0.142	
17	0.062	
18	0.183	
19	0.071	
20	0.084	

Tab.11 7ST253遺構 帯磁率平均値

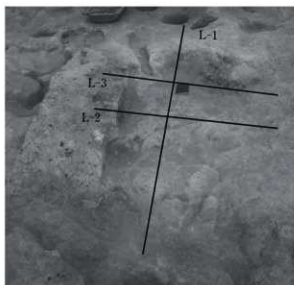
測定位置	測定地点数	帯磁率平均値 ($\times 10^{-3}$ SI units)
遺構外部	12	0.066
遺構内部	19	0.058

3-3-4. 7SX205遺構

焼土と土壌が検出された7SX205遺構について、帯磁率測定を実施した。

測定測線は縦断方向に1測線、横断方向に2測線を設定した。測線設定位置をPl.9に、測定結果をTab.12に示す。Tab.13には遺構内部と遺構外部において帯磁率平均値を示す。

遺構内部の帯磁率平均値は遺構外部に対して約0.66倍の値となり、両者に有意な差は認められない。また、遺構内部の帯磁率平均値は、熱の影響を被っている7SX105窯跡、7SX200窯跡の内部の帯磁率平均値と比較して0.25倍以下の小さな値を示している。これらの結果より、帯磁率の測定結果からは、本遺構は熱を被っていないと推定され、遺構に点在する焼土や炭は外部から持ち込まれたものであると考えられる。



Pl.9 7SX205遺構 帯磁率測定測線

Tab.12 7SX205遺構 帯磁率測定結果

測線番号	L-1	L-2	L-3
測定地点番号	帯磁率 ($\times 10^{-3}$ SI units)		
1	0.167	0.191	0.112
2	0.132	0.17	0.151
3	0.197	0.254	0.189
4	0.187	0.263	0.281
5	0.213	0.164	0.167
6	0.213	0.185	0.205
7	0.227	0.179	0.338
8	0.182	0.184	0.311
9	0.277	0.269	0.342
10	0.366	0.282	0.357
11	0.33	0.216	0.297
12	0.327	0.245	0.221
13	0.327	0.158	0.212
14	0.292	0.183	0.257
15	0.327	0.254	0.175
16	0.293	0.321	0.185
17	0.207	0.253	0.239
18	0.214		0.136
19	0.301		0.179
20	0.309		0.165
21	0.2		
22	0.189		
23	0.464		
24	0.294		
25	0.278		
26	0.301		
27	0.273		
28	0.319		
29	0.207		
30	0.232		

Tab.13 7SX205遺構 帯磁率平均値

測定位置	測定地点数	帯磁率平均値 ($\times 10^{-3}$ SI units)
遺構外部	12	0.256
遺構内部	55	0.170

4. まとめ

年代推定結果

日焼遺跡の2つの窯跡から試料を採取し、残留磁化を測定した。2つの窯跡とも被熱により安定な残留磁化を獲得しており、残留磁化方向も比較的精度の良い結果が得られた。考古地磁気手法により、7SX105窯跡は 800 ± 20 A.D.、7SX200窯跡は 760 ± 20 A.D.と年代を推定した。

帯磁率測定結果

7SX105窯跡

窯跡周辺遺構外と比較して、遺構内の帯磁率は約1.9倍高い値を示しており、熱の影響により、窯内部の帯磁率が高くなったものと推定される。

7SX200窯跡

窯跡周辺遺構外と比較して、遺構内の帯磁率は、遺構底面で約3.20倍、遺構側壁面で6.36倍の高い値を示しており、熱の影響により、窯内部の帯磁率が高くなったものと推定される。

7ST253遺構

遺構底面に炭が敷き詰められており、火葬墓の可能性がある。遺構外と比較して遺構内の帯磁率は約0.88倍で、絶対値も被熱が明らかな7SX105、7SX200窯跡の帯磁率と比較して1桁小さな値を示している。

帯磁率の測定結果からは被熱の影響は認められず、火葬墓ではなく、炭は外部から持ち込まれたものと推定される。

7SX205遺構

焼土と土壌が検出された。遺構外と比較して遺構内の帯磁率は約0.66倍で、7SX105窯跡、7SX200窯跡の内部の帯磁率平均値と比較しても0.25倍以下の小さな値を示している。帯磁率の測定結果からは被熱の影響は認められず、遺構から検出された炭や焼土は外部から持ち込まれたものと推定される。

(文 献)

広岡公夫 (1977) : 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向, 第四紀研究, 第15巻, 200-203.

広岡公夫 (1988) : 古地磁気考古地磁気編年による年代推定, 地質学論集, No. 39, 305-318.

日焼遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤 正己・鈴木 瑞穂

1. いきさつ

日焼遺跡は福岡県太宰府市向佐野に所在する。7世紀後半から8世紀中頃に推定される、不整形の被熱土坑及びその周辺から、製鉄関連遺物がまとめて出土しており、遺跡内で鉄製錬が行われたと推定される。当遺跡の鉄生産の実態を検討する目的から、金属学的調査を実施する運びとなった。

2. 調査方法

2.1 供試材

Tab.1に示す。製鉄・鋼関連遺物計15点の調査を行った。

2.2 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を簡単に記載した。これらをもとに分析試料採取位置を決定している。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の5倍もしくは10倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で順を追って研磨している。なお金属鉄の調査では5%ナイトル（硝酸アルコール液）を、鋼ないし銅合金の調査では酢酸・硝酸・アセトン混合液を腐食（Etching）液に用いた。

(4) ピッカース断面硬度

鉄滓中の鉱物と、金属鉄の組織同定を目的として、ピッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5) EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

(6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO₂）、酸化アルミニウム（Al₂O₃）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K₂O）、酸化ナトリウム（Na₂O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO₂）、酸化クロム（Cr₂O₃）、五酸化燐（P₂O₅）、バナジウム（V）、銅（Cu）、ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

(7) 耐火度

主に炉材の性状調査を目的とする。耐火度は、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示される。胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、1分間当たり10℃の速度で温度1000℃

まで上昇させ、以降は4℃に昇温速度を落し、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度を示している。

3. 調査結果

HYK-1: 炉壁

(1) 肉眼観察: 熱影響を受けて、内面表層が黒色ガラス質化した炉壁片である。また内面表層には部分的に茶褐色部が点在しており、一部はかなり磁着が強い。ただし特殊金属探知機の反応はなく、微細な鉄錆化合物と推測される。胎土は淡褐色の粘土質で、練りは甘く崩れ易い。さらに短く切ったスサや砂粒・石英が混和されている。

(2) 顕微鏡組織: Pl.1 ①~③に示す。①②は試料内面表層の付着層である。①の微細な灰白色は錆化鉄(Goethite: $\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$)である。素地の暗黒色ガラス質洋中には、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)が、また②の個所では、白色粒状結晶ウスタイト(Wustite: FeO)が凝集気味に晶出する。炉内反応の一端が表われている。

③は炉壁胎土部分である。熱影響を受けて、素地の粘土鉱物(セリサイト)は非晶質化が進む。また胎土中には微細な石英・長石などの鉱物粒が多数混在し、石英に高温クラックが発生している。

(3) 化学組成分析: Tab.2に示す。強熱減量(Ig loss)は4.71%であった。熱影響を受け、かなり結晶構造水が飛散した状態での分析となった。また鉄分(Fe_2O_3)は2.13%と低めで、軟化性は有利となり、酸化アルミニウム(Al_2O_3)は20.65%と高値であった。耐火性には望ましい成分系である。なお、萍と鉄の分離を促す自媒料となる塩基性成分($\text{CaO}+\text{MgO}$)は0.90%と低値であった。

(4) 耐火度: 1390℃であった。古代の製鉄炉の炉壁片としては、耐火性の高い性状といえる。

HYK-2: 鉄鉱石

(1) 肉眼観察: 平面は不整六角形で垂んだ台形状断面をもつ磁鉄鉱の小破片(18.5g)である。加撃により表面は全面破面で、全体が強く磁着する。表面には黄褐色の土砂が薄く付着する。光沢のある微細な黒灰色塊状の磁鉄鉱主体で、灰白色の微細な脈石鉱物が若干点在している。鉄分の高い鉄鉱石の小破片である。

(2) 顕微鏡組織: Pl.1 ④~⑧に示す。試料断面の組織観察を行った結果、不透明鉱物を多数含み、表面観察で予想したより鉄分(Total Fe)が低い。

灰褐色の多角形結晶は磁鉄鉱(Magnetite: $\text{FeO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3$)である。暗色部は脈石部分で、へき開が顕著な葉片状結晶は緑泥石(Chlorite: $(\text{Mg}, \text{Fe}, \text{Al})_{12}(\text{Si}, \text{Al})_2\text{O}_{20}(\text{OH})_{10}$)と推定される。また⑦⑧の中央に示したような、光沢の強い銀白色短柱状結晶がごく僅かに散在する。これは硫砒鉄鉱(Arsenopyrite: FeAsS)と推定される。なお鉱物組成に関しては、EPMA調査の項で詳述する。

(3) ピッカース断面硬度: Pl.1 ④の不整多角形状灰褐色部の硬度を測定した。硬度値は500Hvである。磁鉄鉱(鉱石)の文獻硬度値(註1)530~600Hvと比較すると若干軟質であるが、マグネタイトの範囲内であり、磁鉄鉱(Magnetite: $\text{FeO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3$)と同定される。

(4) EPMA調査: Pl.14の1段目に反射電子像(COMP)を示す。6の番号をつけた灰褐色結晶の定量分析値は95.7%FeOであった。面分析調査結果でも、灰褐色結晶の領域は鉄(Fe)、酸素(O)に白色輝点が集中しており、磁鉄鉱(Magnetite: $\text{FeO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3$)に同定される。また7の番号をつけた、銀灰色結晶は面分析調査で、砒素(As)、硫黄(S)に強い反応を示す。定量分析値は40.8%FeO-77.6% As_2O_3 -17.8% S -8.3% CoO -2.4% NiO であった。酸化物定量での測定値のため、総計が100%を超える値となっているが、硫砒鉄鉱(Arsenopyrite: FeAsS)に同定される。さらにコバルト(Co)、ニッケル(Ni)を微量含有する。8の番号をつけた、硫砒鉄鉱外周の青灰色部の定量分析値は53.0%FeO-20.8% As_2O_3 であった。硫砒鉄鉱の表層が風化した酸化物と推定される。さらに9の番号をつけた、暗色脈石部分の定量分析値は31.6%MgO-5.8%FeO-19.9% Al_2O_3 -29.5% SiO_2 であった。緑泥石(Chlorite: $(\text{Mg}, \text{Fe}, \text{Al})_{12}(\text{Si}, \text{Al})_2\text{O}_{20}(\text{OH})_{10}$)の可能性が高い。

(5) 化学組成分析: Tab.2に示す。全鉄分(Total Fe)54.58%に対して、金属鉄(Metallic Fe)<0.01%、酸化第1鉄(FeO)22.35%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)53.20%の割合であった。また主に脈石鉱物に含

まれる諸成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は21.95%と高めであった。特に酸化マグネシウム (MgO) は10.30%で高値傾向が著しい。これに対して、主に磁鉄鉱中に固溶する二酸化チタン (TiO_2) は0.10%、バナジウム (V) も0.01%で非常に低値になる。酸化マンガン (MnO) も0.12%と少ない。鍛造作業及び製品に悪影響を及ぼす銅 (Cu) 0.01%、硫黄 (S) が<0.01%、五酸化燐 (P_2O_5) 0.03%なども微量であった。

当試料は、比較的脈石鉱物の割合が高い鉄鉱石 (磁鉄鉱) であった。なかでもマグネシウム (Mg) の高値傾向が顕著である。さらに微量含まれる砒素 (As)、コバルト (Co)、ニッケル (Ni) 等の元素も特徴的である。当試料と同様の特徴を持つ鉄鉱石が製鉄原料となった場合、これらの元素の影響が、製錬滓及び生成鉄に現れるものと推測される。

HYK-3: 鉄鉱石 (微細破片)

原料鉱石を分割した際の派生物で、ごく微細な磁鉄鉱の剥片である。

HYK-3-1: (17×12×11mm, 3.6g)

(1) 肉眼観察: 不整三角柱状を呈する微細な磁鉄鉱の破片である。表面は全面破面で、各面が接する様は鋭い。また全体が強く磁着する。表面は光沢のない滑らかな黒褐色で、脈石鉱物はみられない。

(2) 顕微鏡組織: Pl.2 ①~③に示す。素地部分は微細な磁鉄鉱の集合体である。なお①③の中央に一部示したように、網状の白色部が見られる。この箇所は素地と比較すると、後述のように硬質である。この結果から、白色部は赤鉄鉱 (Hematite: $\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$) の可能性が高い。更に微細な暗色部は透明ないし半透明の脈石鉱物である。

(3) ピッカース断面硬度: Pl.2 ②③の硬度を測定した。②灰褐色の素地部分の硬度値は535Hvで、磁鉄鉱 (Magnetite: $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) に同定される。また③網状白色部を含む箇所の硬度値は817Hvと高値であった。白色部は赤鉄鉱 (Hematite: $\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$) の可能性が高い。

当試料中にも微細な脈石鉱物が含まれるが、その割合は少なく鉄分 (Total Fe) の高い鉱石であった。

HYK-3-2: (17×9×7mm, 1.3g)

(1) 肉眼観察: 不整三角錐状を呈する微細な磁鉄鉱の破片である。表面は全面破面で、稜が鋭い。全体は強く磁着する。また素地部分は光沢のない黒灰色であるが、表層は広い範囲で茶褐色を呈する。

(2) 顕微鏡組織: Pl.2 ④~⑧に示す。発達した灰褐色の多角形結晶は磁鉄鉱、また磁鉄鉱内部の暗色不定形結晶は石英 (Quartz: SiO_2) である。さらに当試料は不透明の脈石鉱物の割合が高い。磁鉄鉱の周囲にはへき開の顕著な柱状結晶がみられる。これは角閃石 (Hornblende) と推定される。

なお各鉱物の組成に関しては、EPMA調査の項で詳述する。

(3) ピッカース断面硬度: Pl.2 ⑦⑧の鉱物の硬度を測定した。⑦の暗色柱状結晶の硬度値は632Hv、⑧の灰褐色多角形結晶の硬度値は665Hvであった。

(4) EPMA調査: Pl.15の1段目に反射電子像 (COMP) を示す。4の番号を付けた暗色不定形結晶の定量分析値は、101.9% SiO_2 であった。石英 (Quartz: SiO_2) に同定される。また、5の番号をつけた灰褐色多角形結晶の定量分析値は95.6% FeO であった。磁鉄鉱 (Magnetite: $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) に同定される。

更に6の番号をつけた暗色結晶の定量分析値は10.8% CaO -8.3% MgO -24.3% FeO -53.6% SiO_2 であった。普通輝石 (Augite: $\text{Ca}1\text{-P}(\text{Mg}, \text{Fe}^{2+})1+\text{P} \cdot \text{Si}_2\text{O}_6$) に同定される。7の番号をつけた暗色柱状の定量分析値は10.6% CaO -3.7% MgO -27.5% FeO -12.2% Al_2O_3 -40.3% SiO_2 であった。普通角閃石 (Hornblende: $\text{Ca}_2(\text{Mg}, \text{Fe}^{2+})_4(\text{Al}, \text{Fe}^{3+})(\text{Al}, \text{Si})_8\text{O}_{22}(\text{O}, \text{OH})$) に同定される。

当試料は角閃石 (Hornblende)、輝石 (Augite) といった不透明鉱物の脈石の割合が高い。脈石鉱物を構成する珪素 (Si)、アルミナ (Al)、カルシウム (Ca) の割合が高く、鉄分の低い鉄鉱石の小破片と判断される。

HYK-3-3: (11×7×6mm, 0.6g)

(1) 肉眼観察: 不整三角錐状を呈する微細な磁鉄鉱の破片である。表面・破面に気孔はなく、全体に磁

着が強い。ただし1箇所稜が丸みを帯び、表面も丸みを帯びた微細な凹凸ある面がみられる。炉内に装入後熱影響を受け滓化した、マグネタイト系遺物の可能性も考えられる。

(2) 顕微鏡組織：Pl.3①～⑤に示す。素地は灰褐色を呈する微細な半自形・他形の磁鉄鉱の集合体である。その内部の網状青灰色部は、風化により生じた磁赤鉄鉱(Maghemite： $\gamma\text{-Fe}_2\text{O}_3$)と推定される(註2)。

また、暗灰色部は脈石鉱物である。全体的に風化作用を受けており、一部分解・粘土化が進行している。部分的にへき開の発達した柱状結晶が残っているため、輝石ないし角閃石と推測される。

(3) ピッカース断面硬度：Pl.1③の磁鉄鉱部分の硬度を測定した。硬度値は504Hvであった。風化のためか、やや軟質の値となっている。

HYK-3-4：(9×8×2mm, 0.2g)

(1) 肉眼観察：不平整板状を呈する、ごく微細な磁鉄鉱の破片である。表面は全面破面で、全体に磁着は強い。光沢のある黒灰色を呈する塊状の磁鉄鉱で、肉眼では他の脈石鉱物は見られない。

(2) 顕微鏡組織：Pl.3⑥～⑧に示す。鉄鉱石(HYK-2)と酷似する鉱物組成であった。灰褐色多角形結晶は磁鉄鉱(Magnetite： $\text{FeO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3$)である。また内部の白色針状部は離溶した赤鉄鉱(Hematite： $\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$)と推定される。

暗灰色部は脈石部分で、へき開が顕著な葉片状結晶が品出している。緑泥石(Chlorite： $(\text{Mg}, \text{Fe}, \text{Al})_{12}(\text{Si}, \text{Al})_8\text{O}_{20}(\text{OH})_{16}$)であろう。

(3) ピッカース断面硬度：Pl.3⑥の磁鉄鉱部分の硬度を測定した。硬度値は522Hvであった。磁鉄鉱の文献硬度値の下限を若干下回るが、誤差の範囲内といえよう。

断面組織観察の結果、当試料は鉄鉱石(HYK-2)と酷似する鉱物組成であった。化学組成は鉄分がやや低めで、脈石鉱物に由来するマグネシウム(Mg)の高い鉱石と想定される。

HYK-4：鉄鉱石(風化：褐鉄鉱主体)

(1) 肉眼観察：やや歪な柱状の鉄鉱石の破片である。表層は全面茶褐色を呈する。これは鉄分を含む鉱物が酸化し褐鉄鉱(焼ケ)(註3)の可能性が考えられる。また風化の影響か層状の亀裂・剝離が生じている。なお現在の表層も風化による剝離面の可能性が高い。

(2) マクロ組織：Pl.11に示す。非晶質層状・ブドウ状の青灰色部は、褐鉄鉱[Limonite： $\text{FeO}\cdot(\text{OH})\cdot n\text{H}_2\text{O}$]である。磁鉄鉱が風化された褐鉄鉱主体の鉱石といえる。またへき開が顕著な、暗灰色の不透明鉱物の割合が高く、やや品位の低い鉄鉱石である。

(3) 顕微鏡組織：Pl.4①～⑤に示す。試料内部の暗褐色多角形結晶は磁鉄鉱である。その周囲を取り巻くように、層状・ブドウ状に褐鉄鉱が生じており、磁鉄鉱の風化・分解が進んだものと推測される。

また暗灰色部は脈石部分である。へき開が顕著な暗灰色の不透明鉱物は、角閃石類(Amphibole group)の鉱物であろう。

なお各鉱物の組成に関しては、EPMA調査の項で詳述する。

(4) ピッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、試料表層の褐鉄鉱部分の調査を行った。硬度値は144Hvと非常に軟質で、褐鉄鉱の特徴が現れている。[褐鉄鉱のモース硬度は1～5.5と幅があるが、磁鉄鉱(硬度6)より全体に軟質である。]

(5) EPMA調査：Pl.16の1段目に反射電子像(COMP)を示す。1の番号をつけた青灰色部の定量分析値は74.8%FeO-6.8%SiO₂-1.3%Al₂O₃であった。褐鉄鉱[Limonite： $\text{FeO}\cdot(\text{OH})\cdot n\text{H}_2\text{O}$]に同定される。なお微量Si, Alを含む。また褐鉄鉱は水分を含むため、鉄分(FeO換算値)が磁鉄鉱より低い値となっている。

2の番号をつけた、暗灰色結晶の定量分析値は46.3%FeO-6.2%Al₂O₃-43.9%SiO₂であった。角閃石類の鉱物で、直閃石(Anthophyllite)ないしゼードル角閃石(Gedrite)の可能性が高い。

また3の番号をつけた、灰褐色多角形結晶の定量分析値は84.5%FeO-5.0%SiO₂であった。微量Siを含むが、磁鉄鉱(Magnetite： $\text{FeO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3$)に同定される。

(6) 化学組成分析：Tab.2に示す。全鉄分(Total Fe)50.36%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.02%、

酸化第1鉄 (FeO) 53.89%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 12.08%であった。褐鉄鉱 (Limonite: FeO·(OH)·nH₂O) 主体のため、酸化第1鉄が高い割合を示している。

また主に脈石鉱物に含まれ、鉄製錬時には滓となる諸成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は15.93%であった。当試料は珪素 (SiO₂)、アルミナ (Al₂O₃) が大半を占め、酸化マグネシウム (MgO) は0.12%と微量であった。なお磁鉄鉱に固溶する二酸化チタン (TiO₂) は0.09%、バナジウム (V) が0.02%と微量となる。また酸化マンガン (MnO) も0.04%と低値であった。更に製錬で生成鉄中に移行すると、鍛造作業及び製品に悪影響を及ぼす銅 (Cu) は0.06%、五酸化磷 (P₂O₅) は0.26%、硫黄 (S) 0.10%で、いずれも高値傾向を示した。

当試料は風化の進んだ褐鉄鉱主体の鉱石であった。また脈石鉱物を反映して、珪素 (SiO₂)、アルミナ (Al₂O₃) が高値であり、鉄鉱石 (HYK-2) とは成分的な特徴が異なる。

HYK-5: 鉄鉱石 (被熱、表層: 滓化)

(1) 肉眼観察: 平面は不整形三角形を呈し、28gと小型の磁鉄鉱破片とも、滓化したマグネタイト系遺物の端部破片ともみえる遺物である。表面に丸みを帯びた凹凸があり、微細な気孔が若干存在することから、被熱していると判断される。地の色調は黒灰色で全体に磁着は強い。

(2) 顕微鏡組織: P1.5 ①~⑤に示す。①には試料断面の状態を低倍率で提示した。写真上側が試料表層部である。表層は一部被熱・滓化が進み、製錬滓が生じている。②は製錬滓部の拡大である。白色粒状・不定形結晶はウスタイト (Wustite: FeO) ないしマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄)、淡灰色木ずれ状結晶はオリビン (Olivine: 2 (Fe, Mg) O·SiO₂) と推定される。

更に内面にも熱影響は及んでいる。③は試料表層側の熱影響が強く残る部分の拡大で、灰褐色の磁鉄鉱、暗青灰色の脈石鉱物とも、外周部から溶融が進行している。ただし芯部は熱影響が弱い。④⑤は芯部の拡大で、磁鉄鉱は半自形の多角形結晶、脈石鉱物はへき開の顕著な柱状結晶の形態をとどめている。

(3) ピッカース断面硬度: 紙面の構成上硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、被熱磁鉄鉱部分の調査を行った。硬度値は588Hvで、磁鉄鉱の文献硬度値の範囲内であった。

(4) 化学組成分析: Tab.2に示す。全鉄分 (Total Fe) 61.68%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.02%、酸化第1鉄 (FeO) 28.82%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 56.13%の割合であった。鉄分の高い鉱石である。

また主に脈石鉱物ないし製錬滓に由来する諸成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 13.73%であった。このうち酸化マグネシウム (MgO) が5.65%を占め、鉄鉱石 (HYK-2) と同様高値傾向を示した。なお主に磁鉄鉱中に固溶する二酸化チタン (TiO₂) は0.10%、バナジウム (V) も0.01%と微量であった。酸化マンガン (MnO) も0.18%と低値である。更に製錬で生成鉄中に移行すると、鍛造作業及び製品に悪影響を及ぼす銅 (Cu) は0.02%、五酸化磷 (P₂O₅) は0.05%、硫黄 (S) <0.01%で、いずれも非常に低値であった。

当試料は熱影響を受けており、一部表層では溶融滓化している。炉内に装入された鉄鉱石片とみるか焙焼被熱か興味を呼ぶ。また、脈石鉱物による高マグネシウム (MgO) 傾向が特徴的である。

HYK-6: マグネタイト系遺物

(1) 肉眼観察: 平面形は不定形を呈し、46g弱と小型で完形のマグネタイト系遺物である。マグネタイト系遺物とは、製鉄炉の送風孔周辺の高還元空間で磁鉄鉱が加熱を受け、半還元状態で完全に滓化しきっていない塊を指す。磁着が極めて強く、青黒く銀色の光沢を発生するケースが多い。鉱物相はマグネタイトやウスタイトが主体をなす。不定形で表面は微細な凹凸が著しい。色調は黒褐色で全体が強く磁着する。ただし金属探知機での反応はない。炉内から装入された鉄鉱石が溶融・滓化したものの、還元は進まずに凝固している。

(2) 顕微鏡組織: P1.6 ①~④に示す。①②の灰褐色部はマグネタイト (Magnetite: FeO·Fe₂O₃) である。炉内に装入された鉄鉱石が完全に溶融・滓化せず、部分的に磁鉄鉱の痕跡を残す。

これに対して、④⑤は滓化の進行した個所を示した。白色粒状結晶ウスタイト (Wustite: FeO)、その周囲の淡褐色多角形結晶はヘーシナイト (Hercynite: FeO·Al₂O₃)、淡灰色木ずれ状結晶はオリビン (Olivine: 2 (Fe, Mg) O·SiO₂) もしくはファイヤライト (2FeO·SiO₂) が観察される。

なお各鉱物の組成に関しては、EPMA調査の項で詳述する。

(3) ビッカース断面硬度：Pl. 6①の磁鉄鉱残存部分の硬度を測定した。硬度値は592Hvで、磁鉄鉱(Magnetite: $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$)に同定される。

(4) EPMA調査：Pl.16の4段目に被熱磁鉄鉱残存部の反射電子像 (COMP) を示す。9の番号をつけた、白色不定形結晶の素地部分の定量分析値は95.7%FeO-6.4%MgO、10の格子状暗色部の定量分析値は92.0%FeO-3.9% Al_2O_3 -2.9%MgOであった。共に磁鉄鉱(Magnetite: $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$)に同定される。ただしマグネシウム(Mg)を微量固溶しており、さらに格子部分ではアルミニウム(Al)が微量加わる。

また8の番号をつけた、磁鉄鉱周囲の暗灰色品出物の定量分析値は49.0%FeO-24.3%MgO-27.2% SiO_2 、11の番号をつけた磁鉄鉱内の微小球状暗色部の定量分析値は29.6%FeO-18.4%MgO-17.3%CaO-30.9% SiO_2 であった。ともにかんらん石類(Olivine: $2(\text{Fe, Mg, Ca})\text{O} \cdot \text{SiO}_2$) (註4)の鉱物に同定される。

さらにもう一視野、Pl.16の5段目に滓化が進んだ部分の反射電子像 (COMP) を示す。暗褐色多角形結晶のうち、13の番号をつけた個所の定量分析値は68.9%FeO-20.3% Al_2O_3 -4.8%MgO、17の番号をつけた個所の定量分析値は61.0%FeO-31.8% Al_2O_3 -8.1%MgOであった。ともにスピネル(Spinel)類(註5)の鉱物で、ヘーシナイト(Hercynite: $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$)に近い組成である。さらにマグネシウム(Mg)を少量固溶している。

14の番号をつけた灰褐色結晶の定量分析値は99.9%FeO-3.6%MgOであった。磁鉄鉱(Magnetite: $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$)に同定される。ただしマグネシウム(Mg)を微量固溶する。

そして暗灰色柱状結晶のうち、15の番号をつけた暗色部は24.1%FeO-41.0%MgO-39.5% SiO_2 、16の番号をつけた明色部は32.9%FeO-31.9%MgO-37.8% SiO_2 であった。ともにオリビン(Olivine: $2(\text{Fe, Mg})\text{O} \cdot \text{SiO}_2$)に同定される。

(5) 化学組成分析：Tab.2に示す。全鉄分(Total Fe)54.42%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.12%、酸化第1鉄(FeO)54.18%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)17.42%であった。鉄分が高く、鉄鉱石(HYK-2, 4, 5)とはほぼ同等の含有量であった。ただし滓化・還元が進行しているため酸化第1鉄の割合が高くなっている。

また造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は26.97%と高値である。このうち塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)は5.62%を含む。さらに製鉄原料の磁鉄鉱、ないしが材中の砂鉄粒子に由来する二酸化チタン(TiO_2)は0.23%、バナジウム(V)が0.02%で、共に低値であった。酸化マンガン(MnO)も0.24%と少ない。なお、銅(Cu)0.02%、硫黄(S)も0.02%と微量であるが、五酸化燐(P_2O_5)は0.29%と若干高めであった。

当試料は焙焼を受けたか、製鉄炉内に装入された被熱磁鉄鉱石で、溶融しきらずに残存する部分と、滓化した部分が混在する遺物であった。磁着の強さは磁鉄鉱残存部分によるものである。

HYK-7：マグネタイト系遺物

HYK-7-1：(18×12×9 mm, 2.1 g)

(1) 肉眼観察：平面は多角形状のチップ状で小型のマグネタイト系遺物の可能性が高い。表面には微細な凹凸が顕著であり、微細な気孔も散在する。凹部には褐色の土砂が固着する。地の色調は暗黒褐色で、一部表層は茶褐色を呈する。全体に磁着は強い。

(2) 顕微鏡組織：Pl.6⑤-⑦に示す。⑤写真左側の灰褐色部は、炉内に装入された磁鉄鉱が溶融しきらずに残存したものである。

⑥⑦は滓部で灰褐色多角形結晶はマグネタイト、淡灰色木ずれ状結晶はファイヤライト(オリビン)である。

(3) ビッカース断面硬度：Pl.6⑦の灰褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は700Hvであった。マグネタイトとしては硬質である。マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)などを微量固溶しているため、硬質化している可能性が高い。

当試料は一部、製鉄炉内に装入された原料の磁鉄鉱が溶融しきらずに残存していた。更に滓化が進んだ部分でもマグネタイト結晶が多数品出している。このために、当試料は全体が強い磁性を持つと判断される。

HYK-7-2: (12×11×6 mm, 0.7 g)

(1) 肉眼観察: 該品も平面は多角形状のチップ状で被熱された剥片である。小型の鉄滓片の可能性が高い。表面は細かい凹凸が著しく、一部は流動状を呈する。また微細な気孔が散在する。なお凹部には褐色の土砂が固着するが、地の色調は暗黒褐色である。当試料は磁着するが、他の鉄鉱石(磁鉄鉱破片)やマグネタイト系遺物と比較すると磁力は弱い。滓化が進んだ試料の可能性が考えられる。

(2) 顕微鏡組織: P1.7 ①に示す。複数点に在する不定形の明灰色部は錆化鉄である。また淡灰色木ずれ状のファイヤライト(オリビン)が、素地の暗黒色ガラス質滓中に品出する。

当試料は全体に滓化が進んだ、微細な製錬滓片であった。ただし弱い磁性を持つのは、内部に微細な錆化鉄部が散在するためと推定される。

HYK-7-3: (18×12×9 mm, 2.1 g)

(1) 肉眼観察: 平面は不整形形状の被熱剥片である。小型の製錬滓片の可能性が高い。表面は一面が滑らかな流動状を呈しており、この面は本来の滓表面であろう。他は不規則な凹凸のある破面で、径1mm前後の気孔が散在している。当試料は磁着するが、他の鉄鉱石(磁鉄鉱破片)やマグネタイト系遺物と比較すると磁力はやや弱い。HYK-14-2と同様に、滓化が進んだ試料の可能性が考えられる。

(2) 顕微鏡組織: P1.7 ②に示す。写真中央の不定形の明灰色部は錆化鉄である。

また、淡灰色木ずれ状のファイヤライト(オリビン)が、素地の暗黒色ガラス質滓中に品出する。

当試料も微細な製錬滓の破片に分類される。HYK-14-2と同様、弱い磁性を持つのは、内部に微細な錆化鉄部が存在するためであろう。

HYK-8: 炉底塊

(1) 肉眼観察: 平面は不整形形状で厚手の炉底塊の破片である。640 gを測る。色調は黒灰色で、上面表層は弱い流動状の凹凸があり、長さ3cm程の木炭痕が残存する。下面には淡褐色の炉床土が固着している。また側面5面は全面破面であるが、一部炉壁が溶融した黒色ガラス質滓が固着する面もあり、炉底塊の角部付近と推測される。破面には上下方向に伸びる気孔や、木炭の噛み込みがみられるが、全体に緻密で重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織: P1.7 ③~⑦に示す。③は滓中の微細な錆化鉄部である。金属組織痕跡は残存していないため、鉄中炭素含有量などの情報は得られなかった。

④~⑦は滓部である。白色粒状結晶はウスタイト(Wustite: FeO)、ないしマグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)。また暗褐色多角形結晶はヘーシナイト(Hercynite: FeO·Al₂O₃)、発達した淡灰色盤状結晶はファイヤライト(2FeO·SiO₂) (オリビン [Olivine: 2(Fe, Mg)O·SiO₂])に同定される。

(3) ピッカース断面硬度: P1.7 ⑤中央の白色不定形結晶の硬度を測定した。硬度値は502Hvであった。ウスタイトの文献硬度値450~500Hvを僅かに上回り、マグネタイトの文献硬度値500~600Hvの範囲に入る。このため当結晶はマグネタイトの可能性が高い。

またP1.7 ⑦中央の暗灰色盤状結晶の硬度値は677Hvであった。ファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)の文献硬度値600~700Hvの範囲内であり、鉄(Fe)主体のかんらん石類(ファイヤライト) (Olivine: 2(Fe, Mg)O·SiO₂)と判断される。

(4) 化学組成分析: Tab.2に示す。全鉄分(Total Fe)39.59%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.11%、酸化第1鉄(FeO)44.33%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)7.18%の割合であった。

また主に炉材や鉄鉱石中の脈石鉱物に由来する造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は45.67%と非常に高値であった。このうち塩基性成分(CaO+MgO)も8.56%と高値傾向を示す。さらに主に製鉄原料の磁鉄鉱、ないし炉材中の砂鉄粒子に含まれる二酸化チタン(TiO₂)は0.31%、バナジウム(V)が0.02%と低値であった。酸化マンガン(MnO)も0.37%と微量である。なお銅(Cu)は0.01%、硫黄(S)も0.01%と少ないが、五酸化燐(P₂O₅)は0.33%で若干高めであった。

当試料は鉄鉱石を製錬した際の排出滓に分類される。また成分的にはマグネシウム(MgO)の高値傾向がみられる。出土鉄鉱石(HYK-2, 5)と同様の、脈石鉱物を含む鉄鉱石が製鉄原料であったと推測される。

HYK-9: 炉内滓

(1) 肉眼観察: 平面不整半円形状で、やや扁平な58gを測る鉄滓である。試料表層は風化気味で淡褐色を呈する。また上下面とも細かい木炭痕による凹凸があり、微細な気孔が散在する。やや質感の軽い滓である。

(2) 顕微鏡組織: Pl.8①に示す。発達した淡灰色盤状のオリビン類のファイヤライトが、素地の暗黒色ガラス質中に晶出する。

(3) ピッカース断面硬度: Pl.8①の淡灰色盤状結晶の硬度を測定した。硬度値は635Hvであった。ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) の文献硬度値600~700Hvの範囲内であり、鉄 (Fe) 主体のかんらん石類 (Olivine: $2(\text{Fe}, \text{Mg})\text{O}\cdot\text{SiO}_2$) と判断される。

(4) 化学組成分析: Tab. 2に示す。鉄分はやや低めで、全鉄分 (Total Fe) 27.21%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.12%、酸化第1鉄 (FeO) 28.52%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 7.04%の割合であった。

これに対して、主に炉材や鉄鉱石中の脈石鉱物に由来する造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 56.62%と非常に高値であった。ただしこのうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) の割合は6.96%とあまり高くない。当試料の造滓成分は鉄鉱石中の脈石鉱物より、炉壁内面の溶融物の影響が強い。また主に製鉄原料の磁鉄鉱、ないし炉材中の砂鉄粒子に含まれる二酸化チタン (TiO_2) は0.46%、バナジウム (V) が0.02%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) も0.34%と低めである。なお銅 (Cu) は0.01%と低値であったが、硫黄 (S) は0.06%、五酸化磷 (P_2O_5) は0.46%と若干高めであった。

当試料も鉄鉱石を製錬した際の排出滓に分類される。炉壁内面の溶融物の割合が高い製錬滓であった。

HYK-10: 流出孔滓

(1) 肉眼観察: 横断面が半円形の流出孔滓の破片である。短軸両端と側面1面が直線状の破面で、平面は不整台状を呈する。色調は光沢の強い暗灰色である。また破面には中小の気孔が散在するが、緻密で重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織: Pl.8②に示す。ごく微細な白色粒状結晶ウスタイトと、発達した淡灰色盤状結晶オリビン類のファイヤライトが、素地の暗黒色ガラス質中に晶出する。

(3) ピッカース断面硬度: Pl.8②の淡灰色盤状結晶の硬度を測定した。硬度値は720Hvと、ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) の文献硬度値600~700Hvの上限を超える値であった。この結果から、当結晶は比較的マグネシウム (Mg) の固溶量が高いかんらん石類 (Olivine: $2(\text{Fe}, \text{Mg})\text{O}\cdot\text{SiO}_2$) と判断される。

(4) 化学組成分析: Tab. 2に示す。全鉄分 (Total Fe) %41.43に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.15%、酸化第1鉄 (FeO) 49.79%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 3.69%の割合であった。

主に炉材や、鉄鉱石中の脈石鉱物に由来する造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は45.22%と高値であった。このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は9.08%あり、高値傾向がみられる。また主に製鉄原料の磁鉄鉱、ないし炉材中の砂鉄粒子に含まれる二酸化チタン (TiO_2) は0.27%、バナジウム (V) が0.02%とごく微量で、酸化マンガン (MnO) も0.43%と低めである。なお銅 (Cu) は0.02%、硫黄 (S) も0.02%と低値であったが、五酸化磷 (P_2O_5) は0.26%と僅か高めであった。

当試料も鉱石製錬滓である。また成分的には、マグネシウム (MgO) の高値傾向がみられ、炉底塊 (HYK-8) と酷似した化学組成であった。

HYK-11: 粒状滓様遺物 (微細球状製錬滓)

HYK-11-1 3.4mm径

(1) 肉眼観察: 色調は黒褐色を呈する。歪な球状で1個所短い棘状の突起がある。更に表面には凹凸があり、径1mm程の気孔がみられる。

(2) マクロ組織: Pl.11に示す。断面は不整形を呈する。内部には気孔が多数散在するが、内部は大きく空洞化していない。気孔の直径は最大で1mm程である。

(3) 顕微鏡組織: Pl.8③に示す。鉄かんらん石系淡灰色木ずれ状でオリビン類のファイヤライトが、素地の暗黒色ガラス質中に晶出する。

HYK-11-2 3.0mm径

(1) 肉眼観察：色調は灰褐色で、僅かに歪な球状を呈する。表層はやや風化気味で、微細な気孔が点在する。

(2) マクロ組織：Pl.11に示す。断面は比較的きれいな円形を呈する。内部には気孔が若干散在するが、内部は粒状滓特有の空洞化はしていない。

(3) 顕微鏡組織：Pl.8④に示す。鉱物相は鉄かんらん石系の発達した淡灰色盤状でオリビン類のファイヤライトが、素地の暗黒色ガラス質中に品出する。

HYK-11-3 2.9mm径

(1) 肉眼観察：色調は灰褐色でやや歪な球状を呈する。表面は風化気味で、ごく微細な気孔が点在する。

(2) マクロ組織：Pl.11に示す。断面は比較的きれいな円形を呈する。中心に不定形の空隙が見られるが、内部は空洞化していない。白色粒状結晶のウスタイトが強く目に付く。

(3) 顕微鏡組織：Pl.8⑤に示す。白色樹枝状結晶ウスタイト、鉄かんらん石系淡灰色木ずれ状結晶オリビン類ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質中に品出する。

以上のように、分析調査を実施した粒状滓様遺物3点は全て、製錬滓（HYK-8～10）と同様の鉱物組成であった。このため、鍛冶工程の鍛打に伴って派生する粒状滓（註6）ではなく、製錬工程での微細な球状の派生物と推定される。

HYK-12：鍛造剥片様遺物

HYK-12-1 6.0×6.0×1.9mm

(1) 肉眼観察：非常に厚手で凹凸が著しい。鍛打で派生した鍛造剥片というより、微細な滓片の可能性が高い。上下面は比較的滑らかな自然面で、地の色調は黒灰色であるが、酸化雰囲気さらされたためか、一部赤味を帯びる。側面は全面破面で、微細な凹凸が散在する。

(2) マクロ組織：Pl.12に示す。厚手で、表裏面の凹凸に伴う厚みの変動が著しい。また表側表層部には、層状の鉄酸化物で占められる。

(3) 顕微鏡組織：Pl.9①に示す。灰褐色多角形結晶マグネタイトが、素地の暗黒色ガラス質中に品出する。

HYK-12-2 5.0×3.9×1.5mm

(1) 肉眼観察：当試料も厚みの変動が著しく、微細な滓片の可能性が高い。地の色調は黒灰色で、表層には淡褐色の土砂が付着する。破面には気孔はほとんど見られない。

(2) マクロ組織：Pl.12に示す。平均的厚みは1mm程度でこれに0.5mm径の気孔を発する。平坦性を欠き、ガラス地中に鉱物相を品出して鍛造剥片とは被膜を異にする。

(3) 顕微鏡組織：Pl.9②に示す。灰褐色多角形結晶マグネタイトが、素地の暗黒色ガラス質中に品出する。HYK-12-1と酷似する鉱物組成であった。

鍛造剥片様遺物(HYK-12-1, 2)は、以上の鉱物組成から、鍛冶工程で鍛打に伴い派生する鍛造剥片(註7)ではなく、製錬工程で派生した微細な滓片と推定される。

HYK-12-3 4.9×3.7×0.4mm

(1) 肉眼観察：比較的薄手で、鍛造剥片の可能性のある試料である。色調は表裏面とも黒褐色で、表面には皺状の凹凸が見られるが比較的平坦である。

(2) マクロ組織：Pl.12に示す。暗黒色ガラス質の剥片である。厚みは不均一で鍛造剥片ではない。

(3) 顕微鏡組織：Pl.9③に示す。非晶質の暗黒色ガラス質中に、光沢の強い青灰色の、ごく微細な品出物が点在する。色調からは銅錆化物の可能性が考えられる。この品出物から、当試料は銅（ないし銅合金）を溶解・鋳造する際に、坩堝などの土製品が熔融金属と触れてガラス質化した表層剝離片の可能性がある。

HYK-13：鉄塊系遺物

(1) 肉眼観察：平面が不整楕円形状で19g弱の小型で塊状の鉄塊系遺物である。表面は黄褐色の酸化土砂に厚く覆われている。端部に1箇所茶褐色の錆化鉄部が確認された。ただし特殊金属探知機での反応はなく、完全に錆化している。

(2) マクロ組織：Pl.12に示す。小型であるがまとまった鉄主体の遺物であった。ただし鉄部は完全に錆化している。また表層には、僅かに暗黒色のガラス質滓が固着している。

(3) 顕微鏡組織：Pl.9④～⑥に示す。④は試料表層に若干固着する暗黒色ガラス質滓の拡大である。内部には微細な錆化鉄が多数散在している。

⑤⑥は錆化鉄部の金属組織痕跡を示した。⑤の灰色部はフェライト、黒色層状部分はパーライトで、亜共析組織(<0.77%C)痕跡が残存する。当試料断面では同様の亜共析組織痕跡が広い範囲で確認された。また⑥の黒色部はセメントイトが錆化剥落したあとで、過共析組織～亜共析組成白錆鉄痕跡であろうか。

当試料は表層にガラス質滓が固着しており、製鉄炉の炉壁に接する位置で生じた小鉄塊の可能性が高い。また金属組織痕跡からは、部位による炭素量の偏析があったと推定される。ただし全体的には低炭素鋼の部分が大半を占めている。

HYK-14：鉄塊系遺物

(1) 肉眼観察：平面は不整三角形形状で7.2gと小型で塊状の鉄塊系遺物である。表面は黄褐色の酸化土砂に厚く覆われている。試料表層には茶褐色の錆色がみられ、比較的磁着も強い。内部に鉄部を含むものと判断される。ただし特殊金属探知機の反応はなく、錆化している。

(2) マクロ組織：Pl.13に示す。当試料も鉄塊系遺物(HYK-13)とよく似た、小型でまとまりのある小鉄塊であった。やはり表層には一部ガラス質滓が固着する。

(3) 顕微鏡組織：Pl.10①～③に示す。当試料の付着滓も大半は非晶質のガラス質滓であったが、局部的に灰白色木ずれ状鉄かんらん石系でオリビン類のファイヤライトが晶出している。①はその拡大である。

②③は錆化鉄部の拡大である。当試料中には広範囲で針状セメントイトの痕跡が残り、比較的浸炭の進んだ高炭素鋼であったと推定される。

HYK-15：青銅塊

(1) 肉眼観察：平面が不整形形状で12g弱の小型で偏平な青銅塊である。表面全体は緑青に覆われている。特殊金属探知機での反応はなく、全体が錆化している。

(2) マクロ組織：Pl.13に示す。面としての白色部が遺存せず全体に錆化が進行しているが、試料上面側の素地部分には、若干金属が残存する。

(3) 顕微鏡組織：Pl.10④～⑦に示す。光沢の強い白色を呈する赤銅色部分は、残存金属銅でほぼ純銅に近い組成である。また柱状の暗褐色部は酸化錫であった。各相の組成に関しては、EPMA調査の項で詳述する。

(4) EPMA調査：Pl.17の1段目に反射電子像(COMP)を示す。1の番号をつけた赤銅色部分は、面分析調査結果をみると銅(Cu)にのみ強く白色輝点が集中し、定量分析値は99.6%Cuであった。純銅と同等とされる。2の番号をつけた柱状暗褐色部は錫(Sn)に反応があり、定量分析値は73.8%Sn-26.2%Oであった。錫の酸化物であり、本来は金属錫であったものが錆化した可能性が高い。

さらに3は反射顕微鏡下で明灰色、4は暗灰色を呈する錆化部分である。面分析結果をみると銅(Cu)濃度に差があり、錆化(酸化)の度合いが色調差となっている。3の定量分析値は66.0%Cu-4.2%Pb-28.4%O、4の定量分析値は90.2%Cu-9.4%Oであった。

なお銅(Cu)、錫(Sn)以外の微量元素として鉛(Pb)、硫黄(S)が検出された。

以上の調査の結果から、当試料は銅(Cu)と錫(Sn)を溶解した青銅塊と判断される。ただし両成分がきれいに固溶、合金化しておらず、それぞれ純度の高い二相に分かれてしまっている。遺跡出土の銅鋳造関連遺物では、同様の事例が時折り見受けられる。

4. まとめ

・製鉄関連遺物

日焼遺跡では、鉄鉱石（岩鉄）を原料として鉄生産が行われたことが明らかになった。

福岡・佐賀県境付近には、磁鉄鉱系列の糸島花こう岩（註8）が分布する。周辺地域にはこれを母岩とする低チタン砂鉄（ TiO_2 ：1%前後）を利用した、古代の製鉄遺跡が多数確認されている。宝満山遺跡でも福岡県教育委員会による第23次調査において、低チタン砂鉄を原料とした8世紀代の箱形炉1基が調査された（註9）。周辺地域で鉄鉱石を原料とする製鉄遺跡は当遺跡が初出であり、地域の鉄生産と製鉄原料利用の実態を検討する上で、貴重な事例となる。以下に調査結果の詳細を述べる。

①今回分析調査を実施した、鉄鉱石（HYK-2~5）は、緑泥石・角閃石・輝石などの不透明鉱物を多数含んでおり、鉄分の含有率は若干低めであった。

なお当遺跡からは、花こう岩質の岩に細い筋状の磁鉄鉱が固着する破片が多数出土した。この細い筋状の鉄鉱石部分を割り取って、製鉄原料としたのであろう。こうした出土鉱石の特徴から、近接地域で小規模な鉱産を採掘した可能性が考えられる。

②採掘された磁鉄鉱は、ある程度粒度を揃えて炉内へ入れないと、大塊であれば還元が遅れ、粉状になると通風を悪くして炉況は不良となろう。古代製鉄の鉱石投入粒度は定かでないが、HYK-3鉄鉱石及びHYK-7マグネタイト系遺物にみられる6~17mm程度が一つの目安であろうか。また、粒度調整に際しての焙焼などの事前処理の痕跡は、当遺跡内出土遺物では明瞭でなかった。

③分析調査を実施した鉄滓（HYK-7~9）はいずれも、鉄鉱石を製錬した際の排出滓であった。成分的にはマグネシウム（MgO）の含有率が3.1~5.3%と高めで、出土鉄鉱石との関連性が指摘できる。マグネシウム（MgO）は滓の流動性を高め、生成鉄への磷（P）の移行を抑制するなど溶剤として優れた性質を持つ。ただしその反面、滓の融点を上昇させるため、送風機能の制約が大きい古代の製鉄技術では、溶剤として積極的に利用することは困難であったと推察される。含Mg鉄石使用は偶発的な所作であろう。

Tab. 4は当遺跡出土鉄鉱石と製錬滓の化学分析結果を、 $CaO+MgO-SiO_2-FeO$ 系の三角図表上で整理したものである。製錬滓はOlivine（ $2(Fe, Ca, Mg)O \cdot SiO_2$ ）の高FeO領域（マグネシウム・ファイヤライト）に分布している。製錬温度が低いため、鉄鉱石中の脈石鉱物に由来する塩基性成分（ $CaO+MgO$ ）は、ファイヤライト（Fayalite： $2FeO \cdot SiO_2$ ）を、若干希釈するにとどまっている。

④当遺跡の出土遺物は、金属鉄（銹化鉄）を含む遺物が非常に少なく、僅かに確認できたのは鉄塊系遺物（HYK-13-14）2点の調査に止まった。どちらも完全に銹化しているが、まとまりの良い小鉄塊であった。当遺跡の生成鉄はこうした長径2~3cm程の小型の鉄塊であつたらうか。

また残存する金属組織痕跡をみると、HYK-13は部位によって炭素量の偏析が大きく、一部は白銹鉄組織を呈するが、亜共析組織部分が大半を占める。またHYK-14は比較的浸炭の進んだ過共析組織痕跡が残存する。炉内生成位置等により、様々な炭素含有量の鉄塊が生じたと推測される。

⑤当遺跡内で鍛冶作業が連続して行われた可能性を検討するため、粒状滓様遺物（HYK-11）、鍛造剥片様遺物（HYK-12）の調査を実施した。しかしこれらは1点を除き製錬工程の微細な派生物に分類される。残る1点は青銅鑄造に伴う派生物の可能性が考えられる。

今回の分析調査では、確実な鍛冶関連遺物は全く確認されず、製鉄から連続して鍛冶作業が行われた可能性は極めて低い。なお、鉱石製錬における微細遺物の出土例として、滋賀県所在で7世紀後半代に属する源内峠のものがある。（註10）粒状滓様遺物の鉱物相は日焼遺跡出土品に酷似する。

・鑄造関連遺物

当遺跡の出土遺物から、小型の青銅塊（HYK-15）が発見された。銅（Cu）・錫（Sn）合金の青銅塊であった。ただし両成分がきれいに固溶、合金化しておらず、それぞれ純度の高い二相に分かれていた。青銅鑄物の鑄造に伴う派生物だろう。

当遺跡では鉄製錬に加え、青銅鑄物の製作も行っていた可能性が考えられるが、出土遺物が乏しく、その詳細は明らかでない。

(註)

- (1) 日刊工業新聞社『焼結組織写真および識別法』1968

磁鉄鉱は530～600Hv、赤鉄鉱(α - Fe_2O_3)1000Hv、ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

- (2) 黒田吉益・源助兼位『偏光顕微鏡と造岩鉱物 [第2版]』共立出版株式会社 1983 第5章 鉱物各論 E、磁鉄鉱(magnetite)の記載に加筆

磁鉄鉱は広義のスピネル類に属し、 $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$ の理想組成を持っているが、多くの場合Tiをかなり多く含んでいる。(中略)ウルボスピネル(Ulvospinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)と連続固溶体をつくり、この固溶体の中間組成のものをチタン磁鉄鉱(Titanomagnetite)とよぶ。また火山岩中の磁鉄鉱はマグネシオフィエライト(Magnesianomagnetite: $\text{MgO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$)分子を2～3%モル固溶することがある。(中略)反射顕微鏡下では磁鉄鉱は灰褐色、マグヘマイトは青灰色にみえる。

- (3) 木下亀城・小川留太郎『岩石鉱物』保育社 1995

褐鉄鉱(Limonite: $\text{FeO} \cdot (\text{OH}) \cdot n\text{H}_2\text{O}$)の記載に加筆

鉄を含んだ鉱物や岩石が分解すると常温でもできて、土壌をかっせまたは赤色に着色し、鉱床の露頭に見る“焼ケ”も大部分が褐鉄鉱である。(中略)非晶質で、乳房状、ブドウ状などの塊をなすほか、結核・団塊・土状などとして産する(後略)。

- (4) 前掲註(2)第4章 主要な造含鉱物 4、7かんらん石類(Olivine Group)

かんらん石類は X_2SiO_4 で表される。XにはMg、 Fe^{2+} 、 Mn^{2+} 、Caなどがはいる。このXの位置は2価のイオンだけで占められ、Alや Fe^{3+} のような3価の金属イオンはほとんど存在しない。Siの位置をAlが置換することもない。代表的なかんらん石としては、 Mg_2SiO_4 (苦土かんらん石)、 Fe_2SiO_4 (鉄かんらん石)、 Mn_2SiO_4 (テフロかんらん石)、 CaMgSiO_4 (モンチセリかんらん石)などがある。

- (5) 前掲註(2)第5章 鉱物各論 D、尖晶石類・スピネル類(Spinel Group)

尖晶石類の化学組成の一般式は XY_2O_4 と表記できる。Xは2価の金属イオン、Yは3価の金属イオンである。その組み合わせでいろいろの種類のものがある。(略)

スピネル(Spinel: MgAl_2O_4)、ヘーシナイト(鉄スピネル)(Hercynite: $\text{Fe}_2\text{Al}_2\text{O}_4$)、マグネタイト(磁鉄鉱)(Magnetite: $\text{Fe}^{2+}\text{Fe}_2^3\text{O}_4$)、クロム磁鉄鉱(Chromite: $\text{Fe}_2\text{Cr}_2\text{O}_4$)、マグネシオクロマイト(Magnesianochromite: MgCr_2O_4)、ウルボスピネル(Ulvospinel: TiFe_2O_4)またこれらを端成分とした固溶体をつくる。

- (6) 粒状洋は鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶の中で赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱塊塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である。

- (7) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。

鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色(光沢を失する)へと変化する。粒状洋の後継派生生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる⁽²¹⁰⁾。鍛造剥片も粒状洋同様に極めて微細な鍛冶派生生物であり、発掘調査中に土中より肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶釜の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工場の調査に当たっては、鍛冶釜を中心にメッシュを切って土砂を取り上げ、水洗。選別、秤量により分布状況を把握できれば、工房内の作業空間配置の手掛りとなりうる重要な遺物でもある⁽²¹²⁾。

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト(Hematite: Fe_2O_3)、中間層マグネタイト(Magnetite: Fe_3O_4)、大部分は内層ウスタイト(Wustite: FeO)の3層から構成される⁽²¹³⁾。

鍛造剥片を王水(塩酸3:硝酸1)で腐食すると、外層ヘマタイト(Hematite: Fe_2O_3)は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト(Magnetite: Fe_3O_4)は黄変する。内層のウスタイト(Wustite: FeO)は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ウスタイト(Wustite: FeO)が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

- (8) 久城育夫・荒牧重雄・青木謙一郎『日本の火成岩』岩波書店 1989

- (9) 大澤正己・鈴木瑞穂『宝満山遺跡出土鉄・銅生産関連遺物の金属学的調査』『宝満山遺跡群・浦ノ田遺跡III』福岡県教育委員会 2002

- (10) 大澤正己・鈴木瑞穂『源内峠遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査』『源内峠遺跡』(びわこ文化公園整備事業に伴う発掘調査報告書9) 滋賀県教育委員会 財滋賀県文化財保護協会 2001.3

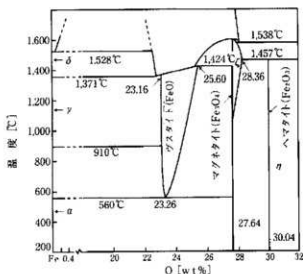
- (11) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘 年報15』（平成3年度）千葉県房総風土記の丘 1992
- (12) ②大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』（今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告第一13集）福岡県教育委員会 1991
- ③大澤正己「重留遺跡鍛冶工房跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『重留遺跡第4地点』～若園町線住宅移転用地整備事業関係埋蔵文化財調査報告4～（北九州市埋蔵文化財報告書第303集）（北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2003, 3
- (13) 森岡ら「鉄鋼腐食化学」『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1975

追記：原稿提出後に鉱石製鉄滓3点の粉末X線解析を行った。以下に結果を記しておく。

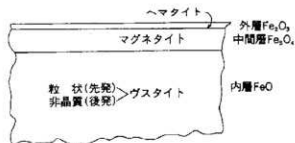
HYK-8：Fayalite, syn. Spinel, Ferrian, Fayalite, Magnesian.

HYK-9：Fayalite, syn.

HYK-10：Fayalite, syn. Quartz, syn.



Fe-O系平衡状態図



鍛造製片3層分離型模式図

Tab.1 試験試材の履歴と調査項目

符号	道庁名	出土位置	遺物名称	計測値			調査項目							
				推定年代	最大径(mm)	重量(g)	メタリウム	マクロ 組織	顕微鏡 組織	X線CT	EDXMA	化学分析	耐火度	備考
HYK-1	日鏡	BK14 S-746	伊豆	6c代	201 × 124 × 40	704.3 ㉿		〇				〇	〇	
HYK-2			鏡蓋石		30 × 28 × 14	18.5 ㉿		〇				〇	〇	
HYK-3			鏡蓋石 (4点, 検出破片)		—	—	㉿	〇				〇		
HYK-4			鏡蓋石 (原北, 得勝墓主体)		38 × 31 × 18	㉿		〇				〇		
HYK-5			鏡蓋石 (装飾, 表裏淨化)		69 × 20 × 14	㉿		〇				〇		
HYK-6		BJ13 S-715	7734作系遺物		40 × 32 × 30	45.5 ㉿		〇				〇		
HYK-7		BK14 S-746	7734作系遺物 (3点, 検出破片)		—	—	㉿	〇				〇		
HYK-8			伊豆埋		88 × 81 × 62	639.2 ㉿		〇				〇		
HYK-9		BI14	伊内津		63 × 41 × 33	38.4 ㉿		〇				〇		
HYK-10		BK14 S-746	鹿出五津		47 × 38 × 51	99.5 ㉿		〇				〇		
HYK-11		BK13 S-705	越後津橋遺物		—	—	㉿	〇						
HYK-12		BI+BJ14 S-730	藤澤副片橋遺物		—	—	㉿	〇				〇		
HYK-13		BK13 S-656	鏡蓋基遺物		27 × 23 × 23	18.5 磨化(Δ)		〇				〇		
HYK-14			鏡蓋基遺物		23 × 20 × 15	7.2 磨化(Δ)		〇				〇		
HYK-15		BK S-577	青野埋		25 × 24 × 11	11.8 磨化(Δ)		〇				〇		

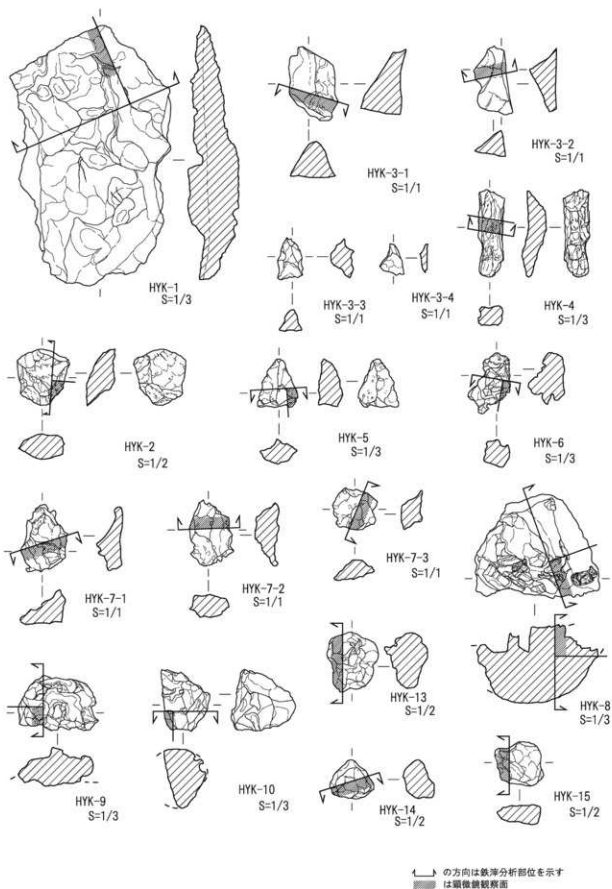
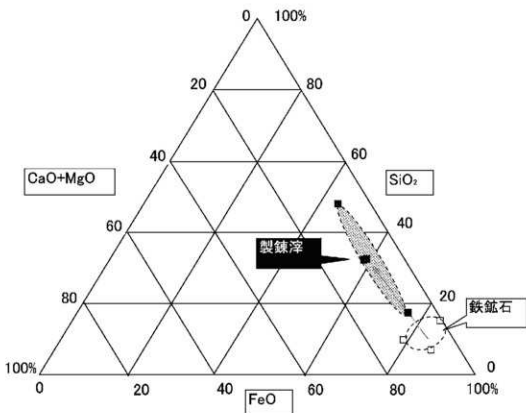
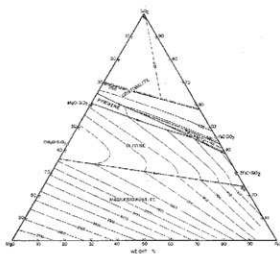


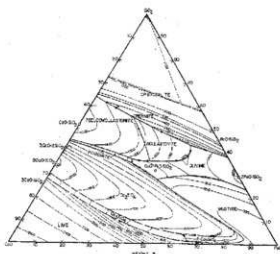
Fig.1 金属学的分析のための供試材実測図と分析位置 (S=1/3, S=1/2, S=1/1)



Tab.4 日焼遺跡出土鉄鉱石・製鍊滓の化学分析結果



MgO-SiO₂-FeO三元系状態図



CaO-SiO₂-FeO三元系状態図

参考文献：「改訂3版金属データブック」日本金属学会 1997

HYK-1

か壁

①、②内面表層：沖部

①×100 灰色部：

微細結晶化鉄ファイヤライト

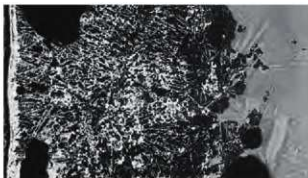
②×100 ウスタイト凝集・

ファイヤライト

③×50 砂粒粘土

素地：粘土鉱物 非晶質化

石英・長石粒混在



①

②



③

HYK-2

鉄鉱石

④×200 灰褐色部、硬度圧痕

500Hv、磁鉄鉱(Magnetite: $FeO \cdot Fe_2O_3$)

⑤、⑥×100 灰褐色部：磁鉄鉱

褐色部：綠泥石

[Chlorite: $(Mg, Fe, Al)_{10}(Si, Al)_2$

$O_{16}(OH)_{12}$]

⑦×100、⑧×400 中央明白色部：

硫砷鉄鉱(Arsenopiritite: $FeAsS$)



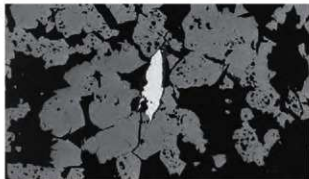
④

⑤



⑥

⑦



⑧

PI.1 炉壁・鉄鉱石の顕微鏡組織

HYK-3-1

鉄鉱石

①×100 基地灰褐色部：磁鉄鉱

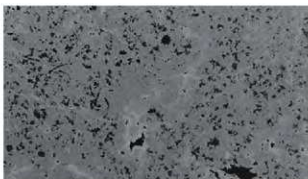
網目状白色部：赤鉄鉱

(Hematite: Fe_2O_3)、暗色部：鉄石鉱物

②③×200 硬度圧痕：

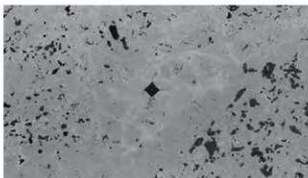
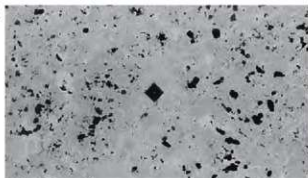
②535Hv、磁鉄鉱

③817Hv、(白色部) 赤鉄鉱か



①

②



③

HYK-3-2

鉄鉱石

④×100 灰褐色多角形結晶：磁鉄鉱

磁鉄鉱内部 暗色不定形結晶：石英

暗色柱状結晶：角閃石

⑤×100、⑥×400 同上

⑦⑧×200 硬度圧痕：

⑦632Hv、⑧665Hv



④

⑤



⑥

⑦



⑧

Pl.2 鉄鉱石の顕微鏡組織

HYK-3-3

鉄鉱石

①×200 硬度圧痕：504Hv

磁鉄鉱

②×100, ③×400 基底灰褐色部：

磁鉄鉱。間隙青灰色部：磁赤鉄鉱

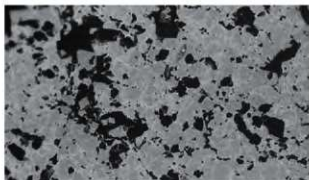
(Maghemite： $\gamma\text{-Fe}_2\text{O}_3$)

暗色部：脈石鉱物。輝石ないし角閃石、粘土化進行



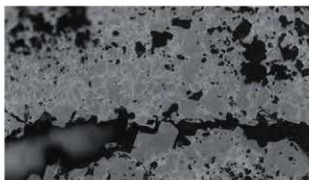
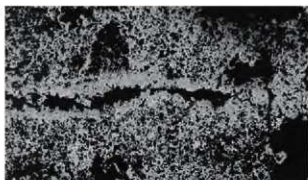
①

②



③

④



⑤

HYK-3-4

鉄鉱石

⑥×200 硬度圧痕：522Hv

磁鉄鉱

⑦×100, ⑧×400 灰褐色多角形結晶：磁鉄鉱。針

状白色部：赤鉄鉱。暗色部 脈石鉱物：緑泥石



⑥

⑦



⑧

PI.3 磁鉄鉱の顕微鏡組織

HYK-4

鉄鉱石(風化・褐鉄
鉱主体)

①×25, ②~⑤×
100 灰褐色多角形
結晶:磁鉄鉱, 非
晶質青灰色部:褐
鉄鉱 [Limorite:
 $\text{FeO} \cdot (\text{OH}) \cdot n\text{H}_2\text{O}$]
暗色部:黒石鉱物:
角閃石



①

←
②撮影位置

←
③撮影位置

←
④撮影位置

←
⑤撮影位置

PI.4 鉄鉱石の顕微鏡組織

HYK-5

鉄鉱石 (焼熱・表層：浮化)

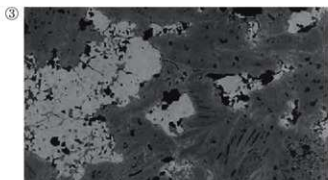
①×25 表層：製錬滓、内層：焼熱
鉄石

②×100 左上：製錬滓、ウスタイト・
マグネタイト・オリビン類フェイ
セラライト

③～⑤ 焼熱鉄石

③×100 細鉄鉱・脈石鉱物ともに焼
熱痕跡顕著

④×100, ⑤×400 細鉄鉱, 脈石: 綠
泥石



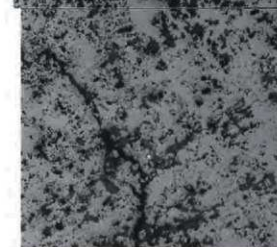
①

製錬滓部分

← ②撮影位置

焼熱鉄石部分

← ③撮影位置



← ④⑤撮影位置

PI.5 鉄鉱石の顕微鏡組織

HYK-6

マグネタイト系遺物

①×200 硬度圧痕：592Hv、磁鉄鉱

②×50 灰褐色部：マグネタイト

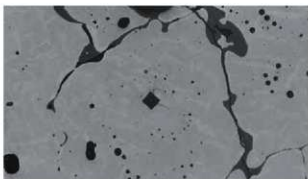
鉄鉱石痕跡残存

③×100, ④×400 珪部：ウスタイト

(FeO)・オリピン [2(Fe, Mg)O·

SiO₂] 類ファイヤライト・ヘーシナイ

ト (FeO·Al₂O₃)



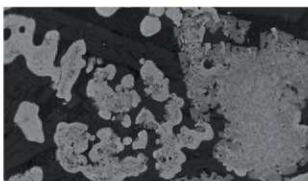
①



②



③



④

HYK-7-1

マグネタイト系遺物

⑤×100 左側白色部：マグネタイト、鉄鉱石

痕跡

⑥×100 マグネタイト(Mg, Al固溶)・オリピ

ン類ファイヤライト

⑦×200 硬度圧痕：700Hv

マグネタイト(Mg, Al固溶)



⑤



⑥



⑦

Pl.6 マグネタイト系遺物の顕微鏡組織

HYK-7-2

マグネタイト系遺物?

①×100 明灰色部：錆化鉄

周囲輝部：オリビン類ファイヤライト晶出
(微細な製錬滓片)



①

HYK-7-3

マグネタイト系遺物?

②×100 明灰色部：錆化鉄

周囲輝部：オリビン類ファイヤライト晶出
(微細な製錬滓片)



②

HYK-8

炉底塊

③×100 錆化鉄部

④~⑦ 輝部

④×100 暗色部：ヘシ
ナイト・オリビン、明色
部：ウスタイトないしマ
グネタイト

⑤×200 硬度圧痕：502
Hv、マグネタイトか

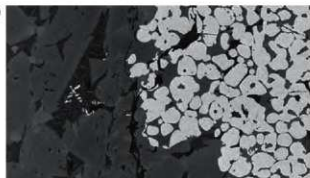
⑥×100 ヘシナイト・オ
リビン類ファイヤライト

⑦×200 硬度：677Hv、
オリビン類ファイヤライト



③

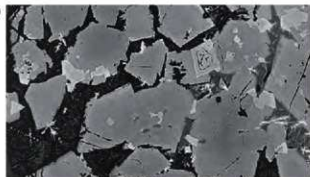
④



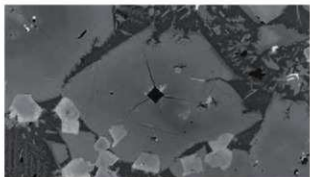
⑤



⑥



⑦



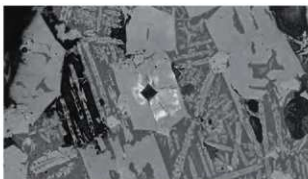
Pl.7 マグネタイト系遺物・炉底塊の顕微鏡組織

HYK-9

炉内滓

①×200 硬度任痕：635Hv

オリビン類ファイヤライト



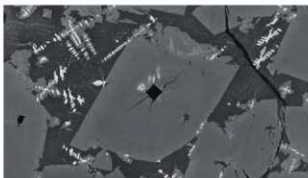
①

HYK-10

流出孔滓

①×200 硬度任痕：720Hv

オリビン類ファイヤライト



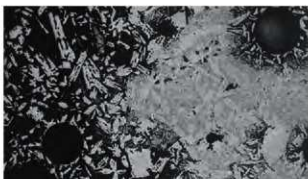
②

HYK-11-1

粒状滓様遺物

③×100 オリビン類ファイヤライト

(微細な球状の製錬滓)



③

HYK-11-2

粒状滓様遺物

④×100 オリビン類ファイヤライト

(微細な球状の製錬滓)



④

HYK-11-3

粒状滓様遺物

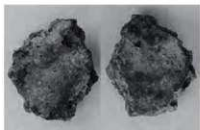
⑤×100 ウスタイト・オリビン類ファイヤライト



⑤

Pl.8 炉内滓・流出孔滓・粒状滓様遺物の顕微鏡組織

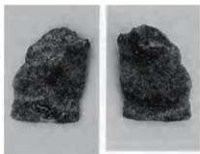
HYK-12-1
鍛造銅片様遺物
①×100 マグネタイト
(微細な製錬滓片)



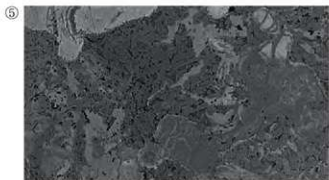
HYK-12-2
鍛造銅片様遺物
②×100 マグネタイト
(微細な製錬滓片)



HYK-12-3
鍛造銅片様遺物
③×100 暗黒色ガラス質滓
微細明灰色部：銅硫化物か
(鉄銅関連遺物の可能性が考えられる)



HYK-13
鉄塊系遺物
④×100 滓部：暗黒色ガラス質滓
⑤⑥ 錆化鉄部
⑤×100 フェライト・パーライト
亜共析組織痕跡
⑥×100 黒色部：セメントライト剥落
過共析組織～亜共晶組成
白錆鉄組織痕跡



Pl.9 鍛造銅片様遺物・鉄塊系遺物の顕微鏡組織

HYK-14

鉄塊系遺物

①×100 浮部：オリビン晶出

②③×100 錆化鉄部

セメントタイト・バーライト

過共析組織組織



①

②



③

HYK-15

青銅塊

④×100 ⑤の左側拡大

柱状明褐色部：酸化錫

赤銅色部：銅基地

⑤×50 明色部：残存金属銅

銅基地 (Metallic Cu)

⑥×100, ⑦×400, ⑤の右側表面部拡大, 錆化部分

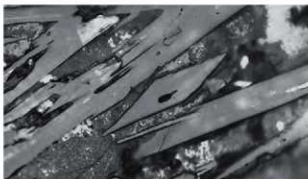


④



⑤

⑥



⑦

Pl. 10 鉄塊系遺物・青銅塊の顕微鏡組織

Pl.4①~⑤
↓撮影箇所



HYK-4×10



HYK-11-1



HYK-11-2



HYK-11-3

Pl.11 上段：鉄鉱石（風化：褐鉄鉱主体）(HYK-4) のマクロ組織
下段：粒状滓様遺物 (HYK-11) のマクロ組織 (×20)



HYK-12-1



HYK-12-2

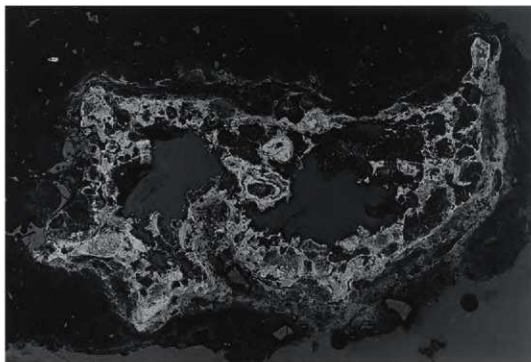


HYK-12-3



HYK-13×5

PI.12 上段：鍛造刺片様遺物 (HYK-12) のマクロ組織 (×20)
下段：鉄塊系遺物 (HYK-13) のマクロ組織 (×5)



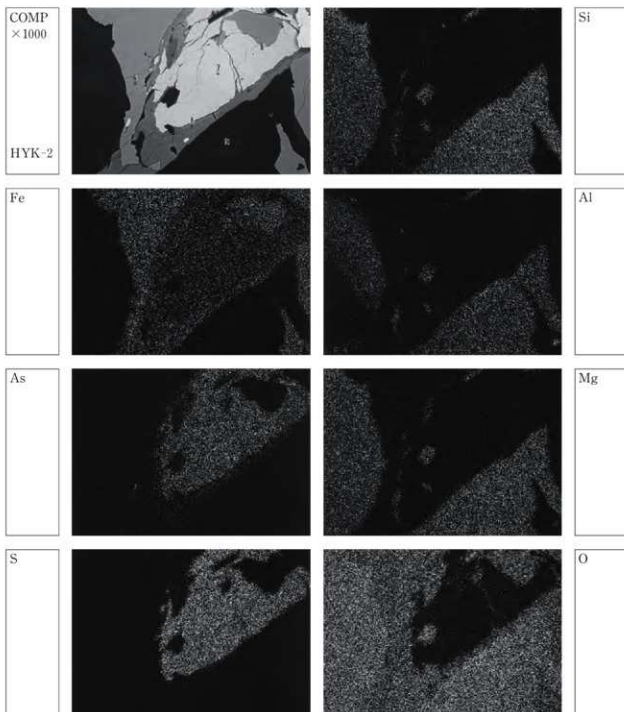
HYK-14×10

↓ Pl.10 撮影箇所



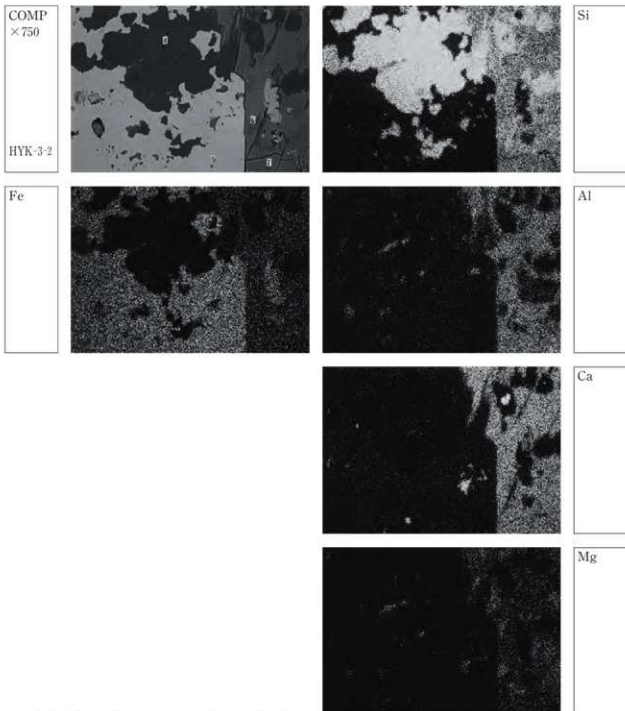
HYK-15×10

Pl.13 上段：鉄塊系遺物 (HYK-14) のマクロ組織 (×10)
下段：青銅塊 (HYK-15) のマクロ組織 (×10)



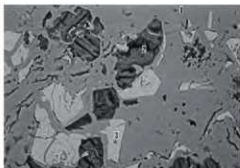
Element	g	γ	g	g
H ₂ O	0.475	-	-	31.544
Al ₂ O ₃	0.420	-	0.127	19.939
SiO ₂	0.960	-	2.293	29.249
P ₂ O ₅	0.041	-	0.633	-
S	-	17.792	1.186	0.626
K ₂ O	0.006	-	0.161	0.019
CaO	-	-	1.140	0.629
TiO ₂	0.032	-	0.652	-
MnO	0.132	-	0.004	0.063
FeO	95.736	90.819	59.617	5.836
ZrO ₂	-	-	0.059	-
CrO	-	-	-	-
V ₂ O ₅	0.013	0.671	-	-
As ₂ O ₃	0.057	77.604	20.771	0.475
NiO	0.029	2.491	0.596	0.021
CoO	0.068	8.313	1.805	0.119
Total	97.295	142.389	76.972	67.632

PI.14 EPMA調査結果
 反射電子像 (COMP) と特性X線像 [70%縮小] 及び定量分析値



Element	4	5	6	7
K ₂ O	0.002	0.011	0.290	3.899
Al ₂ O ₃	0.066	0.278	1.512	12.249
SiO ₂	104.875	0.739	33.616	40.251
P ₂ O ₅	-	-	0.008	0.009
S	-	-	-	-
K ₂ S	-	0.006	0.241	1.911
CaO	0.027	0.063	19.912	10.845
TiO ₂	-	0.041	0.084	0.418
MnO	0.008	-	1.297	0.435
FeO	0.814	95.576	21.329	27.496
ZnO	-	-	-	0.031
Cr ₂ O ₃	-	0.024	-	0.035
V ₂ O ₅	0.034	0.022	-	-
As ₂ O ₃	-	0.057	-	0.007
Total	102.809	96.916	199.209	96.572

PI.15 EPMA調査結果
 反射電子像 (COMP) と特性X線像 [70%縮小] 及び定量分析値

COMP
×1000

HYK-4

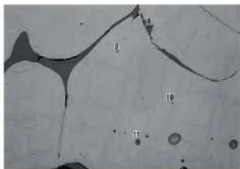


Si



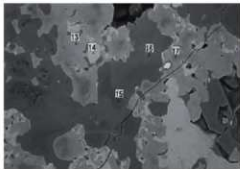
Al

Element	1	2	3
Wd	0.028	0.124	0.120
Al2O3	1.302	6.105	0.987
SiO2	6.822	43.857	0.644
P2O5	0.074	0.049	-
S	0.522	0.079	-
FeO	0.005	0.166	0.525
CaO	-	0.216	0.697
TiO2	-	0.109	0.069
MnO	0.054	0.071	0.196
Ta5	74.934	46.336	84.476
ZrO2	-	-	-
CrO	0.064	0.189	-
Y2O3	-	-	0.014
As2O5	0.023	-	-
Total	83.659	97.519	91.939

COMP
×1000

HYK-6

Element	8	9	10	11
Wd	21.250	0.299	2.291	18.290
Al2O3	0.259	0.450	3.295	0.289
SiO2	27.171	0.227	0.277	50.904
P2O5	0.328	0.030	0.212	1.933
S	0.014	-	0.324	0.027
K2O	0.014	-	-	0.304
CaO	0.472	-	-	17.206
MnO	0.165	0.053	0.055	0.039
FeO	0.210	0.107	0.028	0.246
ZrO2	98.629	96.762	91.999	29.981
CrO	0.067	0.067	0.067	0.067
Y2O3	-	-	0.223	0.038
As2O5	0.373	0.061	0.061	0.190
Total	132.949	193.206	99.746	99.720

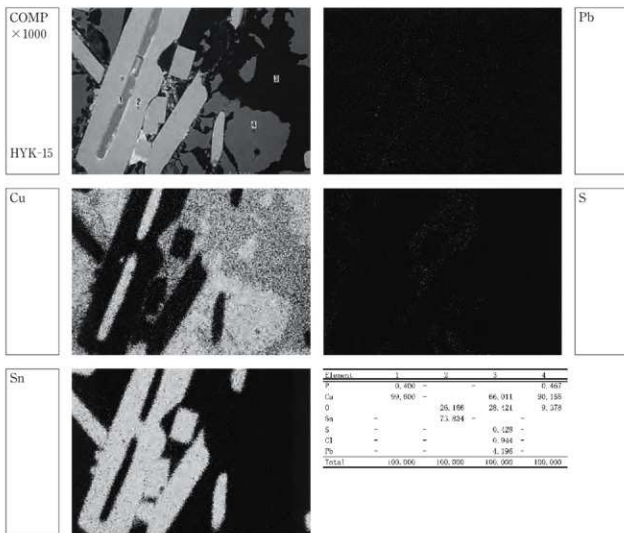
COMP
×1000

HYK-6

Element	13	14	15	16	17
Wd	4.816	3.603	41.010	21.910	8.288
Al2O3	30.794	0.188	0.162	0.942	11.757
SiO2	0.214	0.222	30.375	37.845	0.207
P2O5	-	0.001	0.090	0.056	0.002
S	-	0.018	-	0.048	0.004
FeO	0.003	-	-	-	0.007
CaO	-	-	0.067	0.473	-
Ta5	0.386	0.040	0.034	0.030	0.311
MnO	0.287	0.113	0.009	0.172	0.596
TaO	68.961	99.938	24.002	32.805	60.993
ZrO2	0.049	-	0.040	-	-
CrO	0.007	-	0.011	0.014	-
Y2O3	-	0.011	0.008	-	0.049
As2O5	0.269	0.050	0.499	0.282	0.115
Total	94.773	101.201	105.498	103.789	101.720

PI.16 EPMA調査結果

反射電子像 (COMP) と特性X線像 [70%縮小] 及び定量分析値 (上段: HYK-4, 下段: HYK-6)



PI.17 EPMA調査結果
 反射電子像 (COMP) と特性X線像 [70%縮小] 及び定量分析値

日焼遺跡第7次調査で出土した鉄原材料の事前加工工程について

柳埋蔵文化財サポートシステム福岡支店
下山 覚

1. はじめに

日焼遺跡では、鉄製錬を行ったと考えられる箱型炉跡を含む、廃滓土粒(7SK746)が検出され、その中から、鉄原材料(磁鉄鉱)が比較的多く出土した。

この7SK746及びその周辺では、その他の鉄滓などの関連遺物の存在から、製鉄、特に一次的な製錬作業を行っていたと考えられる(本報告書付編 大澤・鈴木報告 参照)。

さて、鉄鉱石系の素材を用いた製錬作業では、製錬工程の前に素材を破碎し、溶融しやすいように加工を施すことが知られているが、当遺跡でもこれら鉄鉱石系の素材は、粒度に応じてバリエーションが認められ、事前の鉄素材の破碎工程が存在していることが示唆された。

そこで、日焼遺跡における製鉄の状況について、金属学的な調査とともに、原材料の事前加工ともいえるべき作業工程の復原は重要であると考えられ、得られた資料により磁鉄鉱の事前加工工程について分析する。ここでは、得られた岩片の体積と重量等によって粒度分析を行うと同時に、打割の工程段階を復原する。

2. 資料

鉄鉱石と考えられる資料は、微細なものについては、約1.5mm目のふるいで選別したあと磁石をもちいて遺構埋土の中から選別した。また、比較的大型のものについても磁石により、磁力が存在するかどうか確認した。

用いる資料は、7SK746から出土した鉱石で、Tab.1-3に示すとおり191点である。しかし、微細なチップ状の素材は相当数(総重量32g程度)存在している。資料191は、それらの総量を示す。

日焼遺跡から得られた磁鉄鉱は、堆積岩系の変成岩で、層理が明瞭なシルト質の白色の部分(以下、「シルト質」と呼ぶ)と、さらに泥質の灰色の部分(以下、「泥岩質」と呼ぶ)とが見られる。

この両者は、同一の資料で両者が分離されていない状況で見られる資料があることから、本来、同じ露頭で採取され、一括して持ち込まれたものであろう。

3. 析

① 粒度(体積)と重量の相関

Fig.2は、製鉄原材料の体積、重量分布である。これを見ると、おおむね6群に分けることができると思われる。このうち、6群は、1g以下の微細なチップ状のものを示している。

1群は、重量が500g以上のもので、搬入段階を想定できる鉄鉱石塊である。2群は、荒割段階のものであると考えられ、さらに、3群にいたるものと考えられる。4、5群では、シルト質と泥岩質の分離作業が行われていたと考えられ、選別されたものであろう。さらに、微細な粒度のものが、これを6群とした。

シルト質の白色部と泥質の灰色部の分離状況を見ると、4群に単独でシルト質部分が見られるものの、最終段階である6群では、これが認められないことから、最終的な原材料として、泥岩質の部分を微細(5mm程度、1g以下)に破碎して炉に投入したものであると考えられる。すなわち、主に4、5群の段階(第3工程)において、泥岩質とシルト質の分離がほぼ完了していたものと推察される。

泥岩質とシルト質の比重は、泥岩質の方がやや大きく、両者が意識的に分離されていることを考えると、両者に鉄の含有量に差異があることが認知されていた可能性がある。

1群から6群までの群のグループングは一定の傾向を示すものであり、破碎工程が厳密に各段階を経たものというよりは、これらの群はおおむね連続的な工程を示すものと思量する。

Tab.1 出土鉄鉱石一覧(1)

サンプル No.	磁力反応		石材部位		酸化程度		炭素痕跡		体積	重量	比重
	強	弱	部分	無	シルト	泥岩	全体	部分			
1	○		○			○		?	108	588.2	3.45
2		○				○	○	○	141	622	4.41
3	○		○			○	○	○	132	671	6.08
4	○		○			○	○	○	52	194.8	3.75
5	○		○			○	○	○	64	282.8	4.42
6	○		○			○	○	○	94	364.2	3.87
7	○		○			○	○	○	76	237	3.04
8		○				○	○	○	96	297.6	3.13
9		○				○	○	○	63	160	3.02
10	○					○	○	○	48	121.8	2.54
11						○	○	○	51	120.8	2.37
12						○	○	○	60	107.8	2.16
13						○	○	○	48	90.8	1.89
14						○	○	○	28	78.4	3.02
15						○	○	○	51	80.6	1.58
16		○	○			○	○	○	45	109.2	2.43
17				○		○	○	○	40	115.4	2.89
18		○				○	○	○	23	65.6	2.42
19	○					○	○	○	24	74.8	3.12
20			○			○	○	○	19	34.2	1.80
21						○	○	○	10	19.89	1.99
22	○		○			○	○	○	19	71	3.74
23	○					○	○	○	7	18.6	2.68
24	○		○			○	○	○	11	25.2	2.29
25	○					○	○	○	12	31.6	2.63
26	○					○	○	○	9	22	2.44
27	○					○	○	○	19	63.6	3.35
28						○	○	○	8	19	2.38
29						○	○	○	18	45	2.50
30	○		○			○	○	○	23	91.4	3.97
31						○	○	○	10	36	3.60
32						○	○	○	10	34.2	3.12
33						○	○	○	4	8.6	2.15
34						○	○	○	3	8.2	2.73
35						○	○	○	8	16.2	2.03
36						○	○	○	10	25	2.50
37						○	○	○	19	58.2	3.06
38	○		○			○	○	○	38	122.8	3.23
39						○	○	○	18	41.2	2.29
40						○	○	○	10	25.2	2.52
41						○	○	○	9	26	2.89
42						○	○	○	8	17	2.13
43						○	○	○	8	20.2	2.53
44		○	○			○	○	○	11	34.6	3.15
45	○					○	○	○	10	28.4	2.84
46						○	○	○	5	22.8	4.56
47						○	○	○	8	23.6	2.95
48						○	○	○	7	22.6	3.23
49						○	○	○	8	19.6	2.45
50						○	○	○	8	18.2	2.28
51						○	○	○	15	46.4	3.09
52						○	○	○	9	17.6	1.96
53						○	○	○	10	21	2.10
54						○	○	○	8	20.4	2.55
55						○	○	○	8	18.2	2.28
56						○	○	○	6	15.2	2.53
57						○	○	○	9	18	2.00
58						○	○	○	8	26.2	3.28
59	○		○			○	○	○	9	24.8	2.76
60						○	○	○	10	39.6	3.96
61						○	○	○	2	11	5.50
62						○	○	○	8	30.8	3.85
63						○	○	○	7	21.8	3.11
64						○	○	○	8	28.4	3.55
65						○	○	○	8	17.6	2.20
66						○	○	○	10	34.4	3.44
67						○	○	○	9	19.8	2.20
68						○	○	○	8	20	2.50
69	○		○			○	○	○	8	17.6	2.20
70	○					○	○	○	6	15.6	2.60
71		○				○	○	○	6	15	2.50
72	○					○	○	○	3	9.2	3.07
73	○					○	○	○	5	13.8	2.76

Tab.2 出土鉄鉱石一覽(2)

サンプル No.	磁力反応			心材部位		酸化程度		被熱炭跡		比重	比差	
	強	弱	部分	基	シルト 記号	全体	部分	基	有			無
74	○					○			?	4	14	3.50
75	○					○			?	4	11.6	2.90
76	○	○	○			○			?	3	7	2.33
77						○			?	2	8.2	4.10
78	○					○	○		?	2	9.2	4.60
79	○					○		○	?	1	6.2	6.20
80	○					○			?	2	9.6	4.80
81	○					○			?	1	3.2	3.20
82	○					○			?	1	2.2	2.20
83	○					○			?	8	23.6	2.95
84	○					○			?	7	18.6	2.66
85	○					○			?	9	30.8	3.42
86	○	○				○			?	5	17.2	3.44
87	○	○			○	○			?	5	15.8	3.16
88	○	○				○			?	9	23.4	2.60
89	○					○			?	5	21.2	4.24
90	○					○			?	5	14	2.80
91	○					○			?	8	22.2	2.78
92	○	○	○			○			?	9	33.2	9.69
93	○					○			?	8	24.2	3.03
94	○					○			?	9	38	4.22
95	○					○			?	8	21.2	3.03
96	○		○		○	○			?	5	15.6	3.12
97	○				○	○		○	?	2	9.6	4.80
98	○					○			?	2	14	7.00
99	○					○			?	3	14.6	4.87
100	○					○			?	3	17	5.67
101	○					○			?	2	10.5	5.30
102	○		○		○	○			?	1	6.8	6.80
103	○				○	○			?	1	11.6	11.60
104	○					○		○	?	1	8.6	8.60
105	○					○		○	○	1	11.2	11.20
106	○					○			?	1	8.4	8.40
107	○					○			?	1	6.4	6.40
108	○					○			?	1	9.6	9.60
109	○					○			?	1	13	13.00
110	○					○			?	1	8.8	8.80
111	○					○		○	?	1	6	6.00
112	○					○			?	1	7.8	7.80
113	○					○			?	1	8	8.00
114	○	○				○		○	?	1	5.4	5.40
115	○					○			?	1	9.2	9.20
116	○					○			?	1	11.8	11.80
117	○					○			?	1	6.4	6.40
118	○					○			?	1	4.4	4.40
119	○					○			?	1	5.6	5.60
120	○					○		○	?	1	3.8	3.80
121	○					○			?	1	6.8	6.80
122	○			○		○			?	11	44	4.00
123	○	○	○			○			?	8	15.2	1.90
124	○					○			?	8	15.8	1.98
125	○					○			?	9	19.2	2.13
126	○					○		○	?	8	12.8	1.60
127	○					○			?	2	8	4.00
128	○				○	○			?	2	6.6	6.60
129	○					○			?	2	13.6	6.80
130	○				○	○			?	2	10	5.00
131	○					○			?	1	5.4	5.40
132	○					○			?	1	5	5.00
133	○					○			?	1	3.2	3.20
134	○	○				○			?	1	3	3.00
135	○					○			?	1	2.8	2.80
136	○	○				○			?	1	2.6	2.60
137	○					○			?	1	2.6	2.60
138	○					○		○	?	1	1.2	1.20
139	○					○			?	1	3.6	3.60
140	○	○				○			?	1	3	3.00
141	○	○				○			?	1	1.6	1.60
142	○					○		○	?	1	2.4	2.40
143	○					○			?	1	2.2	2.20
144	○					○			?	1	2.6	2.60
145	○					○			?	1	3.2	3.20
146	○	○				○			?	1	2	2.00
147	○					○			?	1	2.2	2.20
148	○					○			?	1	2.2	2.20

Tab.3 出土鉄鉱石一覧(3)

サンプル No.	磁化反応		心材部位		酸化程度		被熱痕跡		体積	重量	比量
	強	弱 部分	無	シルト 配岩	全体	部分	有	無			
149	○				○	○	?	?	1	1.2	1.2
150	○				○	○	?	?	1	2.1	2.1
151	○	○			○	○	?	?	1	2.6	2.6
152	○				○	○	?	?	1	1.8	1.8
153	○				○	○	?	?	1	1.2	1.2
154	○				○	○	?	?	1	2.4	2.4
155	○				○	○	?	?	1	3.4	3.4
156	○				○	○	?	?	1	4.2	4.2
157	○				○	○	?	?	1	2.8	2.8
158	○				○	○	?	?	1	1.6	1.6
159	○				○	○	?	?	1	2.2	2.2
160	○				○	○	?	?	1	2.8	2.8
161	○		○		○	○	?	?	1	2	2
162	○		○		○	○	?	?	1	2.8	2.8
163	○		○		○	○	?	?	1	3.4	3.4
164	○		○	○	○	○	?	?	1	4	4
165	○		○	○	○	○	?	?	1	1.6	1.6
166	○	○			○	○	?	?	1	0.6	0.6
167	○	○			○	○	?	?	1	1	1
168	○	○			○	○	?	?	1	0.6	0.6
169	○	○			○	○	?	?	1	1	1
170	○	○			○	○	?	?	1	0.6	0.6
171	○	○			○	○	?	?	1	0.4	0.4
172	○	○			○	○	?	?	1	1.2	1.2
173	○	○			○	○	?	?	1	1	1
174	○	○			○	○	?	?	1	0.8	0.8
175	○	○			○	○	?	?	1	0.6	0.6
176	○	○			○	○	?	?	1	1	1
177	○	○			○	○	?	?	1	0.6	0.6
178	○	○			○	○	?	?	1	0.8	0.8
179	○	○	○		○	○	?	?	1	0.6	0.6
180	○	○			○	○	?	?	1	0.8	0.8
181	○	○			○	○	?	?	1	0.4	0.4
182	○	○			○	○	?	?	1	0.4	0.4
183	○	○			○	○	?	?	1	0.4	0.4
184	○	○			○	○	?	?	1	0.6	0.6
185	○	○			○	○	?	?	1	0.8	0.8
186	○	○			○	○	?	?	1	0.8	0.8
187	○	○			○	○	?	?	1	1	1
188	○	○			○	○	?	?	1	0.8	0.8
189	○	○			○	○	?	?	1	0.4	0.4
190	○	○			○	○	?	?	1	0.8	0.8
191	○	○			○	○	?	?	9	32.6	3.62222

① 鉄鉱石の破碎に関する工具 (Fig 1)

7SK746からは、その他、花崗岩製の台石が出土している。1, 2は、破碎された状態で出土しており、使用面は比較的平滑である。

使用面には、敲打痕や鉄分付着物(酸化鉄)が残ることから、打撃による鉄鉱石の粉碎などの用途などを考えることができる。出土した遺構、遺物の関連から、製鉄に伴って用いられたものである可能性が高い。以上、鉄鉱石素材の工程に応じたバリエーションが存在することから、7SK746付近では、鉄鉱石を原材料とする一次製錬が行われていたと考えられる。

8世紀前半期の箱型炉が検出された宝満山遺跡¹⁾では、砂鉄を原材料とする製錬が行われていたことが明らかになったが、本例は、同時期でありながら鉄鉱石を主な素材としていた。

これは、本例が製鉄素材が鉄鉱石から砂鉄へ変化する時期の遺構に該当し、過渡的な状況にある資料であるとする解釈と調和的である。

(文責 下山 覚)

註1 砂鉄を素材とする製鉄炉(8世紀前半:箱型炉)の良好な資料は宝満山で出土している。福岡県教育委員会「宝満山遺跡群」2002

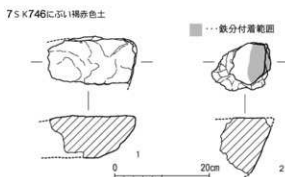


Fig.1 鉄鉱石の破碎に関する工具 (S=1/8)

鉄原材料のシルト質・泥岩質片重量・体積分布

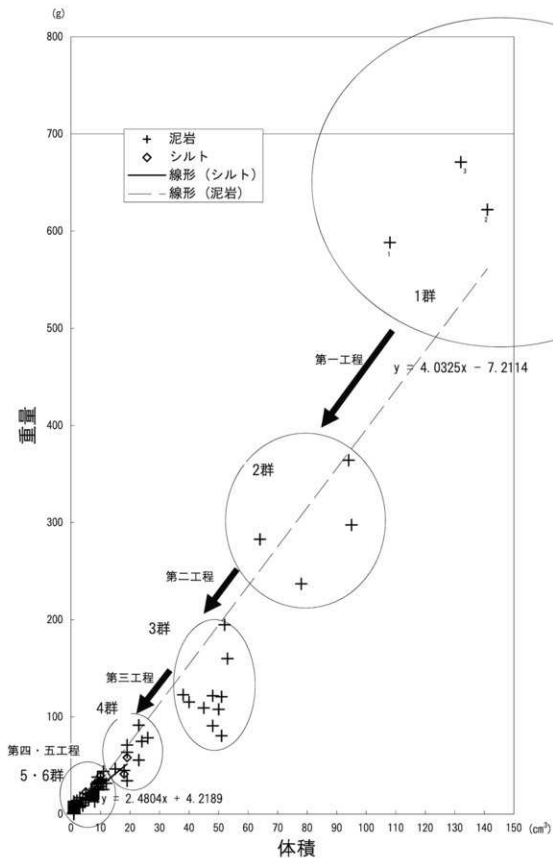


Fig. 2 鉄原材料のシルト質・泥岩質片の重量・体積分布



Sample No. 1

PI.1 鉄原材料 (1群)



Sample No. 6

PI.2 鉄原材料 (2群)



Sample No. 9

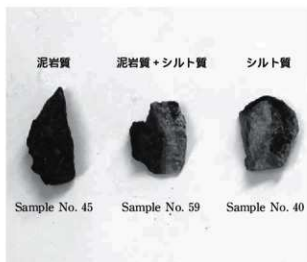
PI.3 鉄原材料 (3群)



Sample No. 37

Sample No. 19

PI.4 鉄原材料 (4群)



Sample No. 45

Sample No. 59

Sample No. 40

PI.5 鉄原材料 (5群)



Sample No. 191

Sample No. 180

Sample No. 167

Sample No. 166

PI.6 鉄原材料 (6群)

日焼遺跡第7次調査で出土した製鉄炉について

榊埋蔵文化財サポートシステム
平島 義孝

※PI番号は、報告書写真図版に対応する。

本調査区では廃滓土坑(7SK746)を検出した。ここから出土した鉄滓を生成したと考えられる製鉄炉は直接的には確認できなかったものの、廃滓土坑出土鉄滓の中には製鉄炉の形状を反映する鉄滓が発見された。

また、廃滓土坑床面では製鉄炉設置痕跡と考えられる長方形を呈する被熱範囲が検出されたことから、製鉄炉の復原が可能な情報を得ることができた。

これらの情報から製鉄炉の復原を試みる。

① 炉の形状を反映する鉄滓からの製鉄炉の構造に関する情報

① 炉底部の平面形態

製鉄炉下部の平面形状を反映する炉底滓(Fig.2, PI.54-240, 55-242)は長方形を呈すると考えられ、約18cm~23cmの炉内幅が確認できたが、長さは不明である。

また、長さ約14cm×幅約11cmを測る小型の炉底滓と考えられるものも存在する(Fig.3, 6)。

② 炉底部の立ち上がり角度

炉底滓の炉底から炉壁への立ち上がり角度は、おおまかに分類して直角に近い角度、緩やかな角度、その中間の角度がみられる。したがって、本調査区ではこれらのバリエーションからのべ4基以上の製鉄炉が操業されたことが想定される。

③ 流出孔滓

炉底滓の中には長方形の角2箇所に鉄滓を炉外に流出させる為の穴の痕跡(流出孔滓)が確認できた(Fig.2, 1, PI.55-243)。製鉄炉の角形状を反映する炉底滓は幾つかみられるが、短軸角2箇所に流出孔の痕跡がない炉底滓や、短軸角2箇所に流出孔の痕跡のあるものがある(Fig.2, 1・2・4・5, PI.54-240, 55-242・1)。

このことから、流出孔は製鉄炉の短軸角の2箇所にのみ作られていた可能性が高い。

また、流出孔の孔径は、流出孔滓の径から約7cm前後だと推定できる。

さらに、Fig.1, 1の炉底滓では流出孔滓の残存状態から流出孔の長さの情報を得ることができた。その長さは11.3cmを測る。

なお、この長さは製鉄炉下部の炉壁の厚さも反映していると考えられ、炉壁の厚さが均等ではない場合

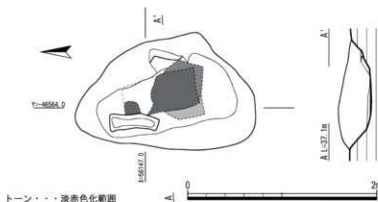


Fig.1 7SK746で検出された箱型炉の痕跡 (S=1/40)

を想定しても、11cm前後を測るものといえる。

④炉外流出滓

炉外流出滓 (Fig. 3, 11, Pl. 54-239・3) は、滓の下部に溝状遺構の形態を反映した「型」がみられ、淡赤色土(焼土)が付着している。したがって、炉外にも流出孔から続く溝が作られていたと考えられる。

⑤炉壁内面

炉壁内面は、滓がガラス質に溶融しており、製鉄炉上部の溶融部は薄く、下部は厚くなる (Fig. 3, 7・8・9, Pl. 54-239・1・2, 241・1)。

⑥送風孔

送風孔の痕跡がみられる炉壁の溶融部を観察すると、炉壁に厚く滓が付着しているため、炉底に近い部位であると考えられる。このことから、送風孔は製鉄炉下部に設置された事がわかる (Fig. 3, 9, Pl. 54-241・1)。

しかし、製鉄炉一基に対し送風孔が幾つ備えられていたのかは、得られた情報からは判断できない。送風孔の直径は2.5cm程度と考えられる。

⑦その他の情報

他に、性格不明の痕跡が残存している滓もみられた。

円柱状を呈し中心が空洞になっている滓 (Fig. 3, 10, Pl. 60-267) は、円柱軸に対して外面の1/2の範囲で炉壁の付着が確認できた。また、この滓は多数の粒状滓が融着し合い、円柱形状を形成しているように見える。

外面は粒状の凹凸が顕著であるのに対し、空洞部内面は、比較的平滑であることから、棒状の原体を取り巻いて滓が付着したものと思われる。

次に、不整形な楕円柱状の滓 (Fig. 3, 12, Pl. 54-241・2) は、両端部以外の部位に多量の炉壁片が付着している状態である。両端部の一方では滓が内側に向かって凹状を呈し、もう一方では外側に向かって凸状になり、滓が製鉄炉内から炉外に向かい流出しているように見える。

この状態から流出孔滓だと判断できるが、滓は炉壁の溶融滓であるため、送風孔から流出している可能性も考えられる。

Ⅱ) 炉底部の被熱範囲と鉄滓の炉底形状との対比

次に、製鉄炉の形状を反映する鉄滓資料の平面形態と、廃滓土坑(7SK746)で検出された被熱範囲と照合してみる (Fig. 1参照)。

被熱範囲は、4つの不整形な長方形と不整形が切り合った状態で確認できた。その中で幅と長さが測定できる比較的良好に残存していた被熱範囲の平面形の法量は、長さ約56cm×幅約40cmを測る。しかし、長さはさらに延びる可能性もあり、全体的な被熱範囲の長さを測定すると約80cmとなる。

この被熱範囲の幅と、炉底滓の炉内幅約18cm～23cm及び推定の炉壁厚(約11cm)を加えた数値の差は、炉内幅18cmの場合で炉外幅40cm(炉内幅+推定の炉壁厚×2)とほぼ同じ数値を示す。

炉内幅23cmの場合では炉外幅45cmとなり、被熱範囲の幅とは5cmの差がみられたが、比較的近い数値であると考えられる。

したがって、廃滓土坑内の被熱範囲は製鉄炉の規模をほぼ反映していると考えられ、また、被熱範囲の位置に製鉄炉が存在していたことを示している。

これらの条件を踏まえて炉底滓と被熱範囲を元に製鉄炉の法量を復元してみると、長さ60～80cm前後×幅40cm前後、炉内長40～60cm前後×炉内幅20cm前後となる。

炉底滓は複数の製鉄炉により生成されたものであるため、復元法量は平均的な数値となるが、廃滓土坑(7SK746)地点に存在していたと思われる製鉄炉(箱型炉)の規模は、上記の法量の範囲内に納まると考えられる。

以上のことから、本遺構例は、製鉄炉(箱型炉)としての規模と構造を持ち、かつ、その大きさにもバリエーションがあることが確認され、炉の構造復原に関する貴重な情報が得られた事例であるといえる。

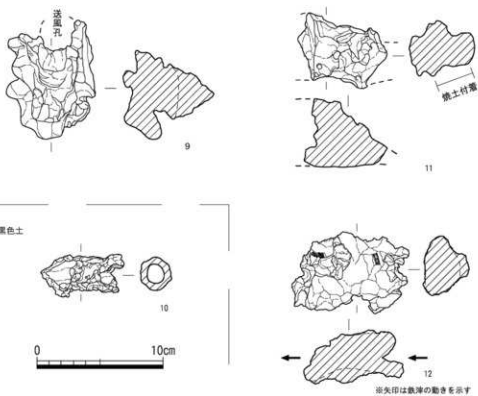
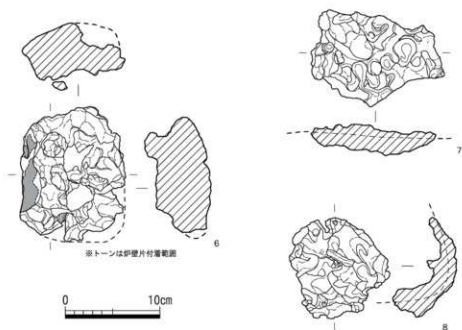


Fig.3 本調査区内で出土した製鉄炉の形状を示す鉄滓(2) (6～8；S=1/4，9～12；S=1/3)

日焼遺跡第7次調査で出土した鉄滓について

柳埋蔵文化財サポートシステム
平島 義孝

本調査ではD地区より廃滓土坑(7SK746)が検出されており、多くの鉄滓が出土した。しかし、鉄滓は廃滓土坑内だけではなく他の遺構や包含層からも出土している。したがって、ここでは鉄滓が出土した遺構を一覧表(Tab.1~11)と鉄滓出土量状況図(Fig.1)にまとめ、そこから窺える製鉄関連情報の収集を試みた。また、一覧表では鉄滓を以下のように分類した。

- ・炉壁滓 製鉄炉の炉壁または炉壁片が付着した滓(PI.1・1・2)。送風孔の痕跡が残存している滓(PI.1・3)。
- ・炉底滓 製鉄炉の下部形状を反映している滓(PI.2・4・5)。
- ・炉内滓 製鉄炉内にあったと考えられる滓。または、炉壁、炉底滓、流出孔滓、炉外流出滓に当てはまらない滓(PI.3)。
- ・流出孔滓 製鉄炉の流出孔に溜まっていたと考えられる滓。流出孔の形状を反映する。
- ・マグネタイト系遺物 炉内滓の内磁力に反応する滓(PI.4)。
- ・鉄塊系遺物 錆に覆われている鉄製品以外の遺物(PI.5)。
- ・炉外流出滓 流出孔から製鉄炉外に流出した滓。流出孔の形状を反映し、表面が酸化により赤色を呈している。
- ・磁鉄鉱 製鉄の原料である鉱石(PI.6・6)。酸化により赤色を呈するもの(PI.6・7)。被熱し、溶融途中のもの(PI.6・8)。磁力に反応するものがほとんどだが、反応が極めて微弱な物もある。

鉄滓の分類に伴い、廃滓土坑(7SK746)以外の鉄滓出土遺構の性格を明確にすることができると期待していたが、鉄滓出土量状況から遺構の機能を復元できるものは、廃滓土坑(7SK746)だけである。

鉄滓出土状況図(Fig.1)では、廃滓土坑を検出したBK14グリッド周辺を境とした南側のグリッドで多量に鉄滓が出土した。廃滓土坑から離れる距離に比例して鉄滓出土量は少量となっている。この状況は北から南にかけて傾斜している地形も関係していると考えられる。また、鉄滓出土量状況図には掲載していないが、A・B・C地区でも僅かながら鉄滓が出土している。さらに、包含層では表土とする黒褐色土から廃滓土坑検出面上層の褐黑色土まで鉄滓が出土している。以下、鉄滓出土状況をまとめる。

- ①廃滓土坑(7SK746)以外の鉄滓出土遺構は鉄滓出土状況等により機能を明らかに出来なかった。
 - ②多量の鉄滓が出土したグリッドは廃滓土坑(7SK746)周辺である。したがって、廃滓土坑(7SK746)が製鉄作業の中心的な施設であったと考えられる。
 - ③廃滓土坑(7SK746)周辺のD地区よりも標高の高くなるA・B・C地区からも鉄滓が出土している。
- ①・②から、廃滓土坑(7SK746)以外の遺構は、製鉄関連遺構とするには論拠に乏しく、廃滓土坑などに廃棄された鉄滓が、破棄された遺構に混入したという印象を受ける。また、③からは、製鉄操業がD地区だけではなく他の地区でも行われていた可能性が考えられる。

また、総括の「製鉄関連遺構について」でも報告しているが、廃滓土坑より先行する時期の遺構(7SK634)で鉄滓が出土している。

したがって、製鉄操業開始時期は、廃滓土坑の下限年代(8世紀前半期)よりも以前であると考えられる。

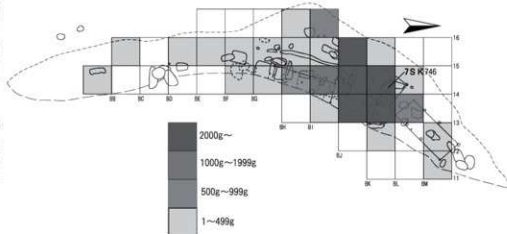
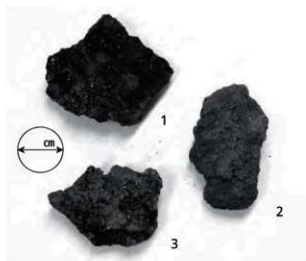


Fig.1 D地区における鉄滓出土量状況図(S=1/400)



PI.1 炉壁滓
(1・2 7SK746, 3 7SX856)



PI.2 炉底滓 (7SK746)



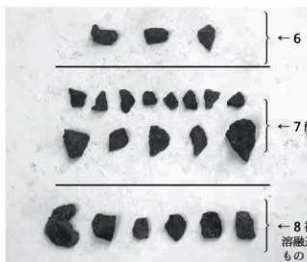
PI.3 炉内滓 (7SK746)



PI.4 マグネタイト系遺物 (7SK746)



PI.5 鉄塊系遺物 (7SX735)



PI.6 磁鉄鉱 (7SX735)

Tab.1 遺構別鉄滓出土一覧(1)

※ log乗算の単位は(個/g)とし、組成のみを基準

遺構番号	伊達		伊達川		伊内川		荒川上流		マダネタイノ系遺物		鉄屑系遺物	
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)
8K12 S-95 黄褐色土	-	-	-	-	1	15.4	-	-	-	-	-	-
	伊内川出流		遺物記		その他		総数	重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	15.4				
8K14 S-100 黄褐色土	2	36.8	1	206.8	1	6.6	-	-	-	-	-	-
	伊内川出流		遺物記		その他		総数	重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	4	270.2				
8M17 S-75 付イリーブ土	-	-	-	-	1	15.1	-	-	-	-	-	-
	伊内川出流		遺物記		その他		総数	重量(g)	備考			
	-	-	1	179.6	-	-	1	179.6				
8M15 S-79 緑灰色土	-	-	1	246.8	1	15.4	-	-	-	-	-	-
	伊内川出流		遺物記		その他		総数	重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	246.8				
8A14 S-94 黒灰色土	-	-	1	20.6	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内川出流		遺物記		その他		総数	重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	20.6				
8M14世 S-189 にない黄褐色土	-	-	-	-	1	6	-	-	-	-	-	-
	伊内川出流		遺物記		その他		総数	重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	6				
AC15 S-189 にない黄褐色土	-	-	1	246.8	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内川出流		遺物記		その他		総数	重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	246.8				
8M19 S-328 黄褐色土	-	-	-	-	1	31.6	-	-	-	-	-	-
	伊内川出流		遺物記		その他		総数	重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	31.6				
8D-8M00 S-514 黄褐色土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	6	
	伊内川出流		遺物記		その他		総数	重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	6				

Tab.2 遺構別鉄滓出土一覧(2)

※1(遺構別の量は(重量)とし、遺量のみを出現)

遺構番号	伊波		伊波洋		伊内洋		掘出孔		マグネサイト系遺物		鉄滓系遺物	
	総鉄	比重(g)	総鉄	比重(g)	総鉄	比重(g)	総鉄	比重(g)	総鉄	比重(g)	総鉄	比重(g)
8016 S-553 段茶褐色土	1	163.8	-	-	-	-	1	37.6	-	-	-	-
	伊内洋出洋		朝鮮鉄		その他		総鉄	比重(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	2	203.4				
831b S-656 段茶褐色土	-	-	1	293.8	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出洋		朝鮮鉄		その他		総鉄	比重(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	293.8				
81+831b S-657 段茶褐色土	-	-	-	-	1	62.8	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出洋		朝鮮鉄		その他		総鉄	比重(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	62.8				
8113 S-643 段茶褐色土	1	21	-	-	3	16	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出洋		朝鮮鉄		その他		総鉄	比重(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	4	37				
8613 S-663 段茶褐色土	2	33.2	3	229	9	56.8	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出洋		朝鮮鉄		その他		総鉄	比重(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	14	348				
8613 S-677 黒白色土	-	-	2	267.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出洋		朝鮮鉄		その他		総鉄	比重(g)	備考			
	-	-	-	-	1	11.9	3	269.3				
8F13 S-659 灰褐色土	-	-	-	-	1	9.6	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出洋		朝鮮鉄		その他		総鉄	比重(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	9.6				
8F14 S-634 灰褐色土	1	19.1	-	-	2	16.9	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出洋		朝鮮鉄		その他		総鉄	比重(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	3	66.2				
8F15 S-638 黄褐色土	-	-	-	-	1	13.2	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出洋		朝鮮鉄		その他		総鉄	比重(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	13.2				

Tab.3 遺構別鉄滓出土一覧(3)

遺構番号	伊波				伊波洋				伊内洋				現出孔目		マグネサイト系遺物		鉄滓系遺物	
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)
BK13・14 S-611 褐色土	-	-	-	-	1	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		船跡区		その他		船跡	伊波区	備考									
	-	-	-	-	-	-	-	-	1	8								
B14 S-616 褐色土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4.8	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		船跡区		その他		船跡	伊波区	備考									
	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4.8								
B14 S-611 褐色土	-	-	2	328.8	2	39.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		船跡区		その他		船跡	伊波区	備考									
	-	-	-	-	-	-	-	-	4	368								
BK14 S-703 におい褐色土	5	163.6	3	192	196 (磁石)	1223.4 212.2	1	66.6	22	192.2	2	10.2	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		船跡区		その他		船跡	伊波区	備考									
	-	-	211 1b (磁石)	9 39.2 6.4	-	-	-	-	4b	1847.6								
BK13 S-708 緑灰色土	-	-	-	-	3	51.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		船跡区		その他		船跡	伊波区	備考									
	-	-	-	-	-	-	-	-	3	41.2								
BK13 S-710 におい褐色土	-	-	-	-	-	150 (磁片)	873 112.2	-	-	11	219 (磁片)	5	10.4	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		船跡区		その他		船跡	伊波区	備考									
	-	-	11 (酸化)	20.1 56.4 7.2	-	-	-	-	231	1027.4	磁石 船跡区中磁石に酸化応じなりの 1個 1個 (酸化) +1.8g							
B13 S-715 におい褐色土	8	115	8	503.2	182 (磁片)	1126.2	-	-	29 (磁片)	136.2	8	20.8	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		船跡区		その他		船跡	伊波区	備考									
	-	-	13 (酸化)	36.8 4 (磁石)	30.8 21.4	16.6	254	210.2	磁石 船跡区中磁石に酸化応じなりの (シムス質) 1個 +10.4									
B14 S-720 褐色土	1	16.8	-	-	10 (磁片)	172.4	-	-	3 (磁片)	60.8	1	0.4	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		船跡区		その他		船跡	伊波区	備考									
	-	-	1 (酸化)	2.2 1	-	-	-	-	27	288								
B14 S-730a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	20.4	-	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		船跡区		その他		船跡	伊波区	備考									
	-	-	-	-	-	-	-	-	1	20.4								

Tab.4 遺構別鉄滓出土一覧(4)

※ 1kg未満の肉片(骨片)とし、重量のみを測定

遺構番号	伊勢		伊弉保		伊内保		炭山孔保		マガネタイト系遺物		鉄塊系遺物	
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
851a S-734 オリーブ褐色土	-	-	-	-	3	22.4	-	-	-	-	-	-
	伊内保出土		輪針芯		その他		鉄塊	総重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	3	22.4				
8K13 S-733 にがい青色土	16	900.2	8	1856	4+1 (破片)	2092.6	-	-	10 (破片)	422.8	11	87
	伊内保出土		輪針芯		その他		鉄塊	総重量(g)	備考			
	-	-	13 (鉄片)	46.2	2 (鉄片)	10	678	5216.2				
8515 S-737 褐色土	-	-	1	37.6	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内保出土		輪針芯		その他		鉄塊	総重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	37.6				
8I13 S-740 茶褐色土	-	-	1	72	7	32.0	-	-	4 (破片)	13.4	1	1.0
	伊内保出土		輪針芯		その他		鉄塊	総重量(g)	備考 鉄片は1破片に限定			
	-	-	2 (酸化)	4.6	-	-	1a	12b.8				
8I16 S-743 褐色土	1	1032	-	-	1	3	-	-	-	-	-	-
	伊内保出土		輪針芯		その他		鉄塊	総重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	2	105b				
8K14 S-746 にがい褐色土	150	9072.8	77	22029.6	375 (破片)	1622.6	-	-	31 (骨片)	618.2	3	20
	伊内保出土		輪針芯		その他		鉄塊	総重量(g)	備考 鉄片はFl.6, 7で詳しく整理している			
	1	145	1691 (破片)	668a.8	78.1	32.6	660	43473.6				
8L13 S-749 にがい褐色土	1	18.6	5	631	17	115	1	74	1	2	-	-
	伊内保出土		輪針芯		その他		鉄塊	総重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	2b	810.6				
8M15 S-749 黄土色土	8	12.4	3	365.4	36 (破片)	353.2	1	26.2	9	89	3	45.6
	伊内保出土		輪針芯		その他		鉄塊	総重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	89	907.6				
8515 S-750 褐色土	1	7.4	-	-	2 (破片)	29	-	-	1	1.8	-	-
	伊内保出土		輪針芯		その他		鉄塊	総重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	879.2				

Tab.5 遺構別鉄滓出土一覧(5)

※ 1㎥未満の滓は(紐片)とし、重量のみを測定

遺構番号	伊波		伊波岸		伊内岸		尻上り岸		マダステイト系遺物		鉄滓系遺物	
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)
8B12 S-734 土色不明赤色土	1	29.4	4	313.2	5	19.2	-	-	1	30.2	-	-
	伊内訳口岸		総鉄部		その他		総鉄	総重量	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)				
-	-	-	-	-	-	-	11	392				
8B11 S-734 障気色土	-	-	1	40	1	6	-	-	-	-	-	-
	伊内訳口岸		総鉄部		その他		総鉄	総重量	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)				
-	-	-	-	-	-	-	2	44				
8B14 S-735 黄褐色土	3	346.8	2	34.2	19 (紐片)	92 5.6	-	-	1 (紐片)	4.6	-	-
	伊内訳口岸		総鉄部		その他		総鉄	総重量	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)				
-	-	1 (紐片)	29.4	-	-	-	28	978				
8B13 S-739 障気色土	-	-	1	1728	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内訳口岸		総鉄部		その他		総鉄	総重量	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)				
-	-	-	-	-	-	-	1	1728				
8B14 S-760 黄褐色土	-	-	2	162.8	6 (紐片)	40.6 6.4	-	-	-	-	-	-
	伊内訳口岸		総鉄部		その他		総鉄	総重量	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)				
-	-	-	-	-	-	-	8	203.4				
8B15 S-761 障気色土	-	-	1	98.8	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内訳口岸		総鉄部		その他		総鉄	総重量	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)				
-	-	-	-	-	-	-	1	98.8				
8B16 S-765 障気色土	-	-	1	98.6	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内訳口岸		総鉄部		その他		総鉄	総重量	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)				
-	-	-	-	-	-	-	1	98.6				
8B14 S-767 障気色土	1	14.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内訳口岸		総鉄部		その他		総鉄	総重量	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)				
-	-	-	-	-	-	-	1	14.8				
8B11 S-769 障気色土	-	-	-	-	14	113	-	-	-	-	-	-
	伊内訳口岸		総鉄部		その他		総鉄	総重量	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)				
-	-	-	-	-	-	-	14	113				

Tab.6 遺構別鉄滓出土一覧(6)

※ 1kg未満のものは(単位)とし、遺棄のみを調査

遺構番号	伊勢		伊弉洋		伊内洋		段出孔洋		マガネタイト系遺物		鉄塊系遺物	
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
B1・B14 S-72 暗褐色土	-	-	1	26	3	130.6	-	-	-	-	-	-
	伊弉洋出土		新神弘		その他		拾得	拾得量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	4	161.6				
B14 S-73 茶褐色土	-	-	1	22.1	1	8.2	-	-	-	-	-	-
	伊弉洋出土		新神弘		その他		拾得	拾得量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	2	26.6				
B14 S-79 暗茶色土	1	4.1	-	-	9	131.4	-	-	1	9.6	-	-
	伊弉洋出土		新神弘		その他		拾得	拾得量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	11	149.4				
B14 S-79D -	-	-	-	-	1	10.4	-	-	-	-	-	-
	伊弉洋出土		新神弘		その他		拾得	拾得量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	1	10.4				
B14 S-78 暗褐色土	2	89.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊弉洋出土		新神弘		その他		拾得	拾得量(g)	備考			
	-	-	1	14.8	-	-	3	104				
B14 S-78 褐色土	-	-	11	142.6	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊弉洋出土		新神弘		その他		拾得	拾得量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	11	112.6				
B14 S-78c 褐色土	-	-	1	26.6	2	7	-	-	-	-	-	-
	伊弉洋出土		新神弘		その他		拾得	拾得量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	3	32.6				
B812 S-791 褐色土	2	19	2	86.4	3	294.4	-	-	1	16.6	1	6.6
	伊弉洋出土		新神弘		その他		拾得	拾得量(g)	備考			
	-	-	2	12.2	-	-	53	431.2				
B15 S-798 暗褐色土	-	-	2	1146.2	6	93.4	-	-	-	-	-	-
	伊弉洋出土		新神弘		その他		拾得	拾得量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	8	1672.8				

Tab.7 遺構別鉄滓出土一覧(7)

※ 1kg未満の屑(製片)とし、量成のみを測定

遺構番号	伊勢		伊波洋		伊内洋		段山孔洋		マダネタイト系遺物		鉄塊系遺物	
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
BK14 S-807 褐色土	1	29	1	58	(製片)	6.4	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		磁鉄片		その他		総数	総重量(g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	2	97.4				
BK12 S-817 茶褐色土	伊勢		伊波洋		伊内洋		段山孔洋		マダネタイト系遺物		鉄塊系遺物	
	-	-	-	-	1	4	-	-	1	13.6	1	6.8
	伊内洋出土		磁鉄片		その他		総数	総重量(g)	備考			
-	-	-	-	-	-	3	24.4					
BK12 S-818 茶褐色土	伊勢		伊波洋		伊内洋		段山孔洋		マダネタイト系遺物		鉄塊系遺物	
	-	-	-	-	4	26.8	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		磁鉄片		その他		総数	総重量(g)	備考			
-	-	-	-	-	-	4	26.8					
BK13 S-836 褐色土	伊勢		伊波洋		伊内洋		段山孔洋		マダネタイト系遺物		鉄塊系遺物	
	11	430.6	2	183.4	122	799.2	-	-	34	402	2	16.2
	伊内洋出土		磁鉄片		その他		総数	総重量(g)	備考			
-	-	11	84.2	1	177.4	219	2121.8	鉄塊系中磁石に加工したもの、 1個 0.8g				
BV11 S-866 褐色土	伊勢		伊波洋		伊内洋		段山孔洋		マダネタイト系遺物		鉄塊系遺物	
	-	-	1	75.6	1	32	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		磁鉄片		その他		総数	総重量(g)	備考			
-	-	-	-	-	-	3	107.6					
BV11 S-867 褐色土	伊勢		伊波洋		伊内洋		段山孔洋		マダネタイト系遺物		鉄塊系遺物	
	1	23	1	83.2	2	34.9	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		磁鉄片		その他		総数	総重量(g)	備考			
-	-	-	-	-	-	4	141					
BK14 S-883 褐色土	伊勢		伊波洋		伊内洋		段山孔洋		マダネタイト系遺物		鉄塊系遺物	
	2	10.6	5	1262.8	10	228.8	-	-	2	26	-	-
	伊内洋出土		磁鉄片		その他		総数	総重量(g)	備考			
-	-	5	(酸化) 78.9	-	-	21	1640					
BK14 S-872 茶褐色土	伊勢		伊波洋		伊内洋		段山孔洋		マダネタイト系遺物		鉄塊系遺物	
	2	112.4	1	416.2	7	123.8	-	-	-	-	-	-
	伊内洋出土		磁鉄片		その他		総数	総重量(g)	備考			
-	-	1	(酸化) 11	-	-	11	669.4					
BK14 S-878 褐色土	伊勢		伊波洋		伊内洋		段山孔洋		マダネタイト系遺物		鉄塊系遺物	
	2	41	1	21.2	2	47.4	-	-	1	16.4	1	19.6
	伊内洋出土		磁鉄片		その他		総数	総重量(g)	備考			
-	-	1	(酸化) 11.9	-	-	8	121.4					

Tab.8 遺構別鉄滓出土一覧(8)

※ 1kg未満の量は(単位)とし、重量のみを記載

遺構番号	伊達		伊達川		伊内川		荒川		マクストイト系遺物		鉄滓系遺物	
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
BK13 S-881 褐色土	4	252.2	2	118.8	16	132.1	-	-	-	-	1	2.8
	伊内川		伊内川		その他		総数	総重量(g)	備考			
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)				24	165.8	
-	-	1(板瓦)	7.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
BK13 S-886 茶褐色土	1	8.6	-	-	1	9.4	-	-	1	33.8	-	-
	伊内川		伊内川		その他		総数	総重量(g)	備考			
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)				3	51.8	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
BK13 S-896 褐色土	-	-	-	-	1	5.6	-	-	-	-	-	-
	伊内川		伊内川		その他		総数	総重量(g)	備考			
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)				1	5.6	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
BK10 黒褐色土	2	82.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内川		伊内川		その他		総数	総重量(g)	備考			
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)				2	82.6	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
BK11 黒褐色土	-	-	-	-	1	3.4	-	-	-	-	-	-
	伊内川		伊内川		その他		総数	総重量(g)	備考			
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)				1	3.4	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
BK11 黒褐色土	-	-	-	-	2	64	-	-	-	-	-	-
	伊内川		伊内川		その他		総数	総重量(g)	備考			
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)				2	64	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
BK15 灰褐色土	1	97.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内川		伊内川		その他		総数	総重量(g)	備考			
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)				1	97.2	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
BK14 灰褐色土	1	47	3	789.1	1	101.6	-	-	-	-	-	-
	伊内川		伊内川		その他		総数	総重量(g)	備考			
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)				5	916	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

Tab.9 遺構別鉄滓出土一覧(9)

遺構番号	伊勢		伊豆半		伊内半		段山孔半		マグネサイト系遺物		鉄滓系遺物	
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
B13 焼茶色土	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
	2	96.6	1	35.8	3	66.6	-	-	1	29.5	-	-
	伊丹塚出土	新緑沢	木の柵	総数	総重量(g)	備考						
-	-	-	-	-	-	-	8	222.8				
B7・B13 焼茶色土	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
	6	132.4	1	15.6	25	322.4	-	-	2	45.4	-	-
	伊丹塚出土	新緑沢	木の柵	総数	総重量(g)	備考						
-	-	-	-	-	-	21	711.6					
B12 焼茶色土	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
	-	-	1	39	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊丹塚出土	新緑沢	木の柵	総数	総重量(g)	備考						
-	-	-	-	-	-	1	39					
B11 焼褐色土	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
	1	56	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊丹塚出土	新緑沢	木の柵	総数	総重量(g)	備考						
-	-	-	-	-	-	1	56					
B13 焼褐色土	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
	1	53	-	-	2	66.8	-	-	-	-	-	-
	伊丹塚出土	新緑沢	木の柵	総数	総重量(g)	備考						
-	-	-	-	-	-	3	119.8					
B11 焼褐色土	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
	2	77.6	4	1431.2	3	77.2	-	-	-	-	-	-
	伊丹塚出土	新緑沢	木の柵	総数	総重量(g)	備考						
-	-	-	-	-	-	9	1586					
B19 焼褐色土	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
	-	-	1	102.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊丹塚出土	新緑沢	木の柵	総数	総重量(g)	備考						
-	-	-	-	-	-	1	102.4					
B14 焼褐色土	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
	5	69.8	4	128	12	200	-	-	2	16.2	-	-
	伊丹塚出土	新緑沢	木の柵	総数	総重量(g)	備考						
-	-	-	-	-	-	21	414					
B15 焼褐色土	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
	-	-	1	232	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊丹塚出土	新緑沢	木の柵	総数	総重量(g)	備考						
-	-	-	-	-	-	1	232					

Tab.10 遺構別鉄滓出土一覧 (10)

※ 1kg未満の滓は(軽P)とし、重量のみを測定

遺構番号	伊波		伊波坪		伊内坪		尻上孔坪		マダステイト系遺物		鉄滓系遺物	
	遺数	重量 (g)	遺数	重量 (g)	遺数	重量 (g)	遺数	重量 (g)	遺数	重量 (g)	遺数	重量 (g)
B112 赤褐色土	-	-	-	-	2	14.6	-	-	-	-	-	-
	伊内波口坪		総鉄滓		その他		総数	総重量 (g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	2	14.6				
B119 赤褐色土	1	37.6	2	81	3	80.8	-	-	-	-	-	-
	伊内波口坪		総鉄滓		その他		総数	総重量 (g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	6	219.4				
B112 赤褐色土	2	414.2	6	209	19 (軽P)	124.8 5.8	-	-	-	-	-	-
	伊内波口坪		総鉄滓		その他		総数	総重量 (g)	備考			
	-	-	-	-	遺棄(115g) 1	36.2	28	1100.2				
B611 黒褐色土	1	b	-	-	b	b	-	-	-	-	-	-
	伊内波口坪		総鉄滓		その他		総数	総重量 (g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	6	63				
B814 黒褐色土	-	-	2	63.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内波口坪		総鉄滓		その他		総数	総重量 (g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	2	63.4				
B713 黒褐色土	1	12.4	-	-	2	18	-	-	2	59.6	-	-
	伊内波口坪		総鉄滓		その他		総数	総重量 (g)	備考			
	-	-	1 (軽鉄)	14.2	-	-	6	95.2				
B714 黒褐色土	-	-	-	-	3	33.6	-	-	-	-	-	-
	伊内波口坪		総鉄滓		その他		総数	総重量 (g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	3	33.6				
B113 黒褐色土	2	18.6	4	639.6	21	306	-	-	5	128.4	1	7.4
	伊内波口坪		総鉄滓		その他		総数	総重量 (g)	備考			
	-	-	2 (軽P)	33	-	-	11	1353				
B114 黒褐色土	2	270.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内波口坪		総鉄滓		その他		総数	総重量 (g)	備考			
	-	-	-	-	-	-	2	270.6				

Tab.11 遺構別鉄滓出土一覧 (11)

※ 1kg未満の滓は (g)とし、産量のらを測定

遺構番号	伊波		伊波岸		伊内岸		堤ノ口岸		マダステイト系遺物		鉄滓系遺物	
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)
3A14 明褐色土	-	-	-	-	1	1.2	-	-	(鉄片)	0.8	-	-
	伊内岸口岸		船体部		木の地		総数	総重量 (g)	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)						
	-	-	-	-	-	-	1	2				
3B16 明褐色土	-	-	-	-	1	6.2	-	-	-	-	-	-
	伊内岸口岸		船体部		木の地		総数	総重量 (g)	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)						
	-	-	-	-	-	-	1	6.2				
3B13 暗褐色土	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)
	1	21.2	1	23.6	27 (破片)	204	-	-	(鉄片)	4.4	-	-
	伊内岸口岸		船体部		木の地		総数	総重量 (g)	備考			
	-	-	1 (破片)	1 0.8	-	-	30	31.9				
3K12 暗褐色土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)
	1	97.4	3	245.2	6	111.8	-	-	1	7.8	-	-
伊内岸口岸		船体部		木の地		総数	総重量 (g)	備考				
	-	-	-	-	-	-	11	352.2				
3K14 暗褐色土	-	-	1	19.8	-	-	-	-	-	-	-	-
	伊内岸口岸		船体部		木の地		総数	総重量 (g)	備考			
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)						
	-	-	-	-	-	-	1	19.8				

鉄滓出土総計	個数	重量 (g)
	2462	80,530.1 (内破片は2768g)

太宰府市日焼遺跡出土の近世人骨

松下 孝幸*

はじめに

福岡県太宰府市向佐野342-1に所在する日焼遺跡の発掘調査が区画整理事業に伴って、2003年(平成15年)から2004年(平成16年)におこなわれ、箱棺、桶棺、襷棺、籠棺などの埋葬施設が検出された。本遺跡は、奈良期の須恵器の窯跡や近世墓からなる複合遺跡であるが、その主体は埋葬跡である。

太宰府市ではこれまで人骨を伴う近世墓の調査はおこなわれていない。近隣の筑紫野市で大規模な発掘調査がおこなわれているが(原田第1・2・40・41号墓地, 上巻, 筑紫野市教委, 2003), 人骨形質についての所見はまだ刊行されていない。

福岡県では北九州市で以前から近世墓地の調査が精力的に行なわれており、人骨が多数出土している。上清水遺跡(松下・他, 1992, 松下, 2003), 宗玄寺跡(松下, 1995), 普濟院跡(松下, 1996a), 京町遺跡(松下, 1993), 京町遺跡第3地点(生往寺)(松下, 2002)などから出土した近世人骨は北部九州地域の近世人骨の貴重な例として活用されている。福岡県の例としてはこの他に、福岡市の天福寺(中橋, 1987), 北九州市の下到津遺跡(松下, 1998c), 北九州市中貫ミカシキ遺跡(松下, 2004a), 犀川町の古川平原遺跡(松下, 1997b)などの例がある。また、周辺地域で多数の近世人骨が出土した遺跡としては山口県柳井市向田遺跡がある。

本遺跡の埋葬施設としては、土壌墓、箱棺、桶棺、襷棺の他に竹で編んだ籠状の施設も確認されている。墓坑が花崗岩のバイラン土壌に掘り込まれていたために人骨の遺存状態は悪く、ほとんどの墓坑には人骨が残っていなかったが、なかには人骨が残存しているものがあり、性別を推定することができるものや計測が可能なものもあり、貴重な所見を得たので、その推測結果や鑑定結果などを報告しておきたい。

資料

本遺跡からは合計174基の墓坑が検出されたが、そのうち162基が近世墓で、12基は古代墓である。174基のうち人骨が残存していたのは58基で、検出された人骨は合計58体である。Tab.1に示すとおり、成人骨は51体で、残りの7体は幼小児骨である。成人骨のうち、男性骨は14体、女性骨は8体で、その他に性別を明らかにできなかったものが29体あったが、これらは骨片などごくわずかな骨しか残っていなかった。各人骨の性別・年齢などはTab.2のとおりである。なお、年齢区分はTab.3のとおりである。

この58体の人骨は、考古学的所見から、近世に属する人骨群である。計測方法は、Martin-Saller(1957)によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木(1963)と松下ら(1983)の方法で計測した。

人骨の発掘調査および人骨の実測は、筆者の他に当館の職員の磯部美枝子、松下玲子、中野江里子、松下真実がおこない、人骨の整理・復元・計測値の計算・写真の焼き付けなどは、磯部美枝子、松下玲子、中野江里子が担当した。

*Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

【キーワード】: 福岡県, 近世人骨, 箱棺, 襷棺, 長頭型, 低・広頭



Fig.1 遺跡の位置 (1/25,000)

Fig.1 Location of the Hiyake site, Dazaifu City, Fukuoka Prefecture

Tab.1 資料数
Table 1. Number of materials

	成人			幼小児	合計
	男性	女性	不明		
	14	8	29	7	58

Tab.3 年齢区分
Table 3. Division of age

年齢区分		年 齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 次発掘調査報告書()を参照されたい。

所 見

埋葬姿勢

現場で埋葬姿勢について検討をおこなったので、現場で観察ができた人骨について、埋葬姿勢、出土状況などを記載しておきたい。

7ST061人骨

墓坑は楕円形。棺は箱棺。埋葬姿勢は不明。残存していたのは右側(おそらく)の脛骨のみ。

7ST064人骨

墓坑は楕円形。棺は箱棺。埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。膝関節は両側とも屈曲していた。左側は膝を強く曲げた状態で腹部の上にあったが、右側は強く曲げた状態で、左側に倒れていた。左側上腕骨が頭蓋の下から出土した。

7ST066人骨

埋葬施設は箱棺。墓坑は隅丸長方形。頭蓋と右側大腿骨のみが残存。仰臥。頭位は西。下肢は屈曲。上肢の状態は不明。顔は西向き。

7ST067人骨

埋葬施設はおそらく桶棺。人骨は墓坑の北壁に接着状態で検出された。当初は北壁を背にして南を向けて埋葬されていたものと思われたが、顔が北向き状態で検出されたために、別の遺構があるのではないかと疑いを持ち始めた。しかし、頭蓋が墓坑の上面から出土したので、四肢骨や軀幹骨を露出させてみて、体軸を確認することにした。その結果やはり人骨はこの墓坑内に取まった状態で検出され、その姿勢は墓坑の北壁に体全体を密着させるような格好であることが判明した。桶棺を埋置する際になかに入っていた遺体が北側に傾斜し、このような姿勢になったのではないかとと思われる。

姿勢は座位。また、顔面に付着するような状態で銅銭が出土した。

7ST301人骨

墓坑は円形。棺は箱棺。埋葬姿勢はおそらく座位で、膝関節は屈曲状態であった。

7ST306人骨

墓坑は円形。棺は桶棺。埋葬姿勢は座位。頭の位置は西。顔は東を向いていたと思われる。

7ST394人骨

墓坑は長方形。棺は箱棺。頭蓋の一部と大腿骨体1本が残存していた。頭位は北。埋葬姿勢はおそらく

仰臥。膝関節は強屈状態。

7ST523人骨

埋葬施設は甕棺。A群から検出。A群では甕棺はこの1基のみ。坐葬。

7ST708人骨

埋葬施設は甕棺。坐葬。おそらく軀幹は前向きに倒れていたものと思われる。顔は北向き。

7ST709人骨

埋葬施設は桶棺。7ST708の西に位置。坐葬。顔の向きは西。

7ST712人骨

埋葬施設は甕棺。坐葬。顔は北向き。これは隣接する甕棺7ST708と同じ向き。坐葬の状態がよくわかる状態で出土した。毛髪が残存していた。水洗したらツメも残っていた。保存状態は良好。

7ST719人骨

埋葬施設は甕棺。中型の甕棺。坐葬。残っていたのは左右の寛骨など、少ない。顔は北西を向いていた。

7ST722人骨

埋葬施設は箱棺。墓坑は長方形。仰臥。下肢は左側の大腿骨と脛骨しか残存していなかった。左側の膝関節は強く屈曲。頭位は北。

7ST724人骨

埋葬施設は甕棺。坐葬で立て膝。顔の向きは北西だったと思われるが、頭蓋は残っていなかった。歯が残っていたことから本来頭蓋もあったと思われるが、改葬された際に頭蓋が抜き取られたのであろう。保存状態は良好である。

7ST727人骨

埋葬施設は箱棺。墓坑は楕円形。仰臥。四肢骨の残存量が少ないので、膝関節の様態は不明だが、頭蓋の状態から仰臥。頭位は北。

7ST761人骨

埋葬施設は桶棺。坐葬。顔の向きは北西だったと思われるが、腐敗の途中で軀幹が右方へ傾き上半身は全体として右側へ倒れてしまっている。頭蓋は発見できなかった。

7ST806人骨

埋葬施設は箱棺。墓坑は楕円形。仰臥。頭位は北。右側の腕骨と右側の下肢骨を現場で確認。右側肘関節は伸展状態だったと思われる。右側膝関節は屈曲。

7ST808人骨

埋葬施設はおそらく桶棺。墓坑は円形。骨片しか残っていなかったので、埋葬姿勢は不明。

7ST812人骨

埋葬施設は小型甕棺。肋骨が上部から出土。甕棺の底部に頭蓋が残存していた。埋葬姿勢は不明。頭位も不明。顔の向きも不明。

7ST814人骨

埋葬施設は箱棺。墓坑は長方形で、長さが長い。仰臥。頭位は北。頭蓋と右側の大腿骨が残存していた。残存していた大腿骨の位置から膝関節は伸展していたと思われる。下肢の伸展例は本例が本遺跡では初例である。頭蓋壁は薄い。

7ST828人骨

埋葬施設は箱棺。隅丸長方形。頭蓋、左側上腕骨、左右の大腿骨と脛骨が残存していた。左右とも膝関節は屈曲状態。仰臥。頭位は北東。

7ST861人骨

墓坑がもっとも深かった。埋葬施設は桶棺。骨片が残っていたに過ぎない。

7ST862人骨

墓坑の形状は方形であるが、埋葬施設は桶棺。頭蓋および右側脛骨と大腿骨の膝関節部分が残存していた。脛骨の近位端が骨体と遊離していたので、未成人骨である。埋葬姿勢は坐位と思われる。右側膝関節は屈曲状態。

人骨の形質所見

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1. 頭蓋

）脳頭蓋

男性の脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が186.00mm（4例）、頭蓋最大幅は136.67mm（3例）、バジオン・プレグマ高は139.67mm（3例）である。頭蓋長幅示数は73.83（3例）、頭蓋長高示数は74.84（3例）、頭蓋幅高示数は102.29（2例）となり、頭型はdolicho-,ortho-,akrokran（長，中，尖頭型）に属している。また、頭蓋水平周は522.50mm（2例）、横弧長は314.67mm（3例）、正中矢状弧長は385.00mm（3例）である。

女性の脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が179.50mm（2例）、頭蓋最大幅は134.00mm（2例）、バジオン・プレグマ高は133.00mm（2例）である。頭蓋長幅示数は74.66（2例）、頭蓋長高示数は74.09（2例）、頭蓋幅高示数は99.35（2例）となり、頭型は男性と同じくdolicho-,ortho-,akrokran（長，中，尖頭型）に属している。また、頭蓋水平周は508.00mm（2例）、横弧長は303.00mm（2例）、正中矢状弧長は375.00mm（2例）である。

）顔面頭蓋

男性の顔面頭蓋の計測値は、顔長が97.33mm（3例）、頬骨弓幅は〔139.00mm〕（2例）、中顔幅は98.50mm（2例）、顔高は113.50mm（2例）、上顔高は（62.33mm）（3例）で、顔示数は（80.28）（K）（1例）、116.33（V）（1例）、上顔示数は〔45.35〕（K）（2例）、（63.96）（V）（2例）となり、顔面には低・広顔傾向が認められる。

女性の顔面頭蓋の計測値は、顔長が98mm（1例）、頬骨弓幅は〔129.50mm〕（2例）、中顔幅は100.00mm（2例）、顔高は118mm（1例）、上顔高は66.00mm（2例）で、顔示数は〔93.65〕（K）（1例）、124.21（V）（1例）、上顔示数は〔51.00〕（K）（2例）、66.16（V）（2例）となり、1例には高・狭顔傾向が、もう1例には広顔傾向が認められる。

男性の眼窩幅は45mm（右）（1例）、45.00mm（左）（2例）、眼窩高は37mm（右）（1例）、35.00mm（左）（3例）で、眼窩示数は82.22（右）（1例）、77.87（左）（2例）となり、両側ともmesokonch（中眼窩）に属している。

女性の眼窩幅は43.00mm（右）（2例）、43.50mm（左）（2例）、眼窩高は33.50mm（右）（2例）、34.50mm（左）（2例）で、眼窩示数は77.91（右）（2例）、79.44（左）（2例）となり、両側ともmesokonch（中眼窩）に属している。

男性の鼻幅は27.33mm（2例）、鼻高は48.67mm（3例）で、鼻示数は56.25となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。

女性の鼻幅は28mm（1例）、鼻高は50.50mm（2例）で、鼻示数は53.85となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。

男性の鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が18.67mm（3例）、鼻根横弧長は21.33mm（3例）、鼻根彎曲示数は87.42（3例）となり、鼻根部は扁平である。両眼窩幅は99mm（1例）で、眼窩間示数は17.17（1例）となり、顔の幅に対して、眼窩間幅が広い。鼻骨最小幅は10.00mm（3例）で、前頭突起水平傾斜角は105.00度（2例）を示し、前頭突起の向きは前額、矢状方向である。鼻根角は143度（1例）、鼻根陥凹示数は15.38（1例）である。

女性の鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が16.00mm（2例）、鼻根横弧長は18.00mm（2例）、鼻根彎曲示数は88.75（3例）となり、鼻根部は扁平である。両眼窩幅は97.00mm（2例）で、眼窩間示数は16.44（2例）となり、顔の幅に対して、眼窩間幅が広い。鼻骨最小幅は7.00mm（2例）で、前頭突起水平傾斜角は101.50度（2例）を示し、前頭突起の向きは前額方向である。鼻根角は141度（1例）、鼻根陥凹示数は15.15（1例）である。

男性の鼻頬骨角は147.50度（2例）で、側面角は、全側面角が85.33度（3例）、鼻側面角が89.33度（3例）、歯槽側面角は70.00度（3例）で、歯槽性突顎の傾向は弱い。

女性の鼻頬骨角は152.50度(2例)で、側面角は、全側面角が84.00度(2例)、鼻側面角が87.50度(2例)、歯槽側面角は70.50度(2例)で、歯槽性突顎の傾向は弱い。

2. 四肢骨

上肢骨

上腕骨

男性の計測値は、最大長が301mm(右)(1例)、300mm(左)(1例)、骨体最小周は64.00mm(右)(3例)、66.00mm(左)(2例)、中央周は67.50mm(右)(2例)、70.00mm(左)(2例)で、長厚示数は21.59(右)(1例)、21.67(左)(1例)である。また、中央最大径は23.67mm(右)(3例)、23.50mm(左)(3例)、中央最小径は18.00mm(右)(2例)、18.50mm(左)(2例)で、骨体断面示数は76.91(右)(2例)、78.80(左)(2例)となり、骨体の扁平性は弱い。

女性の計測値は、最大長が277mm(右)(1例)、(271.00)mm(左)(2例)、骨体最小周は59.00mm(右)(3例)、61.00mm(左)(2例)、中央周は64.00mm(右)(3例)、65.50mm(左)(2例)で、長厚示数は20.94(右)(1例)、(22.51)(左)(2例)である。また、中央最大径は22.00mm(右)(3例)、23.00mm(左)(2例)、中央最小径は17.00mm(右)(3例)、17.50mm(左)(2例)で、骨体断面示数は77.27(右)(3例)、76.48(左)(2例)となり、骨体の扁平性は弱い。

下腿骨

大 骨

男性の計測値は、最大長が413mm(右)(1例)、422mm(左)(1例)、骨体中央周は87.50mm(右)(2例)、89.75mm(左)(4例)で、長厚示数は22.33(右)(1例)、21.43(左)(1例)となり、骨体は頑丈である。骨体中央矢状径は28.50mm(右)(2例)、29.00mm(左)(4例)、横径は27.50mm(右)(2例)、28.20mm(左)(5例)で、骨体中央断面示数は104.33(右)(2例)、104.15(左)(4例)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。また、上骨体断面示数は85.66(右)(4例)、81.71(左)(5例)となり、骨体上部には扁平性は認められない。

女性の計測値は、最大長が393.50mm(右)(2例)、398.00mm(左)(2例)、骨体中央周は78.50mm(右)(4例)、78.67mm(左)(3例)で、長厚示数は19.77(右)(2例)、20.19(左)(2例)となり、骨体はきゃしゃである。骨体中央矢状径は25.25mm(右)(4例)、24.67mm(左)(3例)、横径は25.00mm(右)(4例)、25.67mm(左)(3例)で、骨体中央断面示数は101.04(右)(4例)、96.10(左)(3例)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はあまりよくない。また、上骨体断面示数は74.64(右)(4例)、70.25(左)(4例)となり、女性の場合は骨体上部は扁平である。

脛骨

男性の計測値は、脛骨最大長が331mm(右)(1例)、335mm(左)(1例)、骨体周は84mm(右)(1例)、84.00mm(左)(2例)、最小周は77mm(右)(1例)、76.50mm(左)(2例)で、骨体は太く、長厚示数は23.77(右)(1例)、23.62(左)(1例)で、骨体は頑丈である。中央最大径は31mm(右)(1例)、30.50mm(左)(2例)、中央横径は23mm(右)(1例)、23.00mm(左)(2例)で、中央断面示数は74.19(右)(1例)、75.75(左)(2例)となり、骨体には扁平性は認められない。

女性の計測値は、脛骨最大長が326.50mm(右)(2例)、327.50mm(左)(2例)、骨体周は74.00mm(右)(4例)、74.00mm(左)(3例)、最小周は67.50mm(右)(4例)、67.00mm(左)(3例)で、骨体は細く、長厚示数は20.97(右)(2例)、21.03(左)(2例)で、骨体は頑丈ではない。中央最大径は27.75mm(右)(4例)、27.33mm(左)(3例)、中央横径は19.50mm(右)(4例)、19.67mm(左)(3例)で、中央断面示数は70.90(右)(4例)、73.23(左)(2例)となり、骨体には扁平性は認められない。

3. 推定身長値

大腿骨最大長から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、男性では158.95cm(Pearson, 右)(1例)、160.64cm(Pearson, 左)(1例)、156.91cm(藤井, 右)(1例)、159.06cm(藤井, 左)(1例)となり、この1例は近世人としては身長が高い。一方、女性では149.38cm(Pearson, 右)(2例)、150.26cm(Pearson, 左)(2例)、149.19cm(藤井, 右)(2例)、150.58cm(藤井, 左)(2例)

となり、女性も近世人としては身長が高い。

察

1. 頭蓋

) 脳頭蓋

まず男性の頭型をみてみよう。頭蓋長幅示数が算出できたのは3例であるが、そのうち1例は過長頭型(7ST708)に、1例は長頭型(7ST306)で、残りの1例(7ST623)は短頭型に属しており、変異幅がやや大きい。しかし、3例中2例は長頭型であるので、本近世人の頭型は長頭型に傾いていると判断しても差し支えない。この3例の平均値は73.83となり、頭型としては長頭型に属している。Tab.4は、男性の脳頭蓋の比較表である。日焼の頭蓋長幅示数は、大河浜、白浜よりは大きい、宗玄寺、生住寺、天福寺、開善寺、京町より小さく、上清水と大差ない。筆者は、都市部では近世になると長頭性が弱くなり、中頭型になるが、地方では近世になっても依然として長頭型を示す傾向が強いことを指摘してきた(松下, 2002)。北九州市の近世人をみてみると、宗玄寺や生住寺では頭蓋長幅示数が大きく、中頭型であるが、上清水と京町では長頭型に属しており、開善寺は長頭に近い中頭型である。宗玄寺と生住寺の例は甕棺から出土した人骨で、被葬者は武家階級と推測されており、また、宗玄寺は小笠原一族であることが判明している。上清水遺跡は小倉南区の農村地帯にあり、甕棺は存在しない。被葬者はおそらく農民層であろう。京町遺跡は小倉北区にあるが、埋葬遺構の種類から、町人主体の墓地と考えられる。開善寺人骨も甕棺から出土した人骨であるので、被葬者はおそらく武家層と考えられるが、頭蓋長幅示数が小さいことから、宗玄寺や生住寺の人々とはやや異なる位置にある武家層だった可能性もある。日焼遺跡の場合は、数の上では圧倒的に箱棺と桶棺が多く、甕棺は少ない。しかし人骨の保存状態がよかったのは甕棺出土人骨である。日焼の7ST306(長頭型)と7ST623は坐棺(短頭型)、7ST708(過長頭型)は甕棺であるが、埋葬施設と頭型との関係は例数が少なく、明確ではない。

次いで女性の頭型を検討してみたい。女性の場合は2例しか頭蓋長幅示数が算出できなかった。2例のうち1例は中頭型に、残りの1例は長頭型に属している。2例の平均値は74.66となり、中頭型に近い長頭

Tab.4 脳頭蓋計測値(男性, mm)
Table 4. Comparison of male calvarial measurements and indices

	日焼	開善寺		京町		生住寺		宗玄寺		上清水		天福寺		大河浜		白浜		
		近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 山口県	近世人 山口県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	
1. 頭蓋最大長	4	188.00	6	185.17	37	190.26	19	190.58	37	180.92	7	181.43	38	182.8	3	186.67	16	165.68
8. 頭蓋最大幅	3	138.67	4	138.75	30	135.23	19	139.47	45	140.49	6	132.50	38	135.6	3	135.33	16	134.69
17. パジオン・プレグマ率	3	138.67	1	143	14	136.93	17	139.00	32	141.03	5	134.33	33	139.2	3	137.00	14	126.57
8/1 頭蓋長幅示数	3	73.83	4	75.21	23	74.64	18	77.35	36	78.20	5	73.64	37	76.0	3	73.89	16	72.55
17/1 頭蓋長幅示数	3	74.84	1	75.68	11	75.70	17	76.80	26	78.15	3	75.02	33	76.2	3	72.82	14	73.85
17/8 頭蓋長幅示数	2	102.29	-	12	101.81	17	99.83	29	100.31	3	100.35	33	102.8	3	101.48	14	101.38	
14+17/3 頭蓋半ズルス	2	154.17	-	11	150.27	17	153.16	25	154.52	3	149.22	-	-	3	153.67	14	152.26	
23. 頭蓋水平度	2	522.50	4	526.50	22	508.55	18	517.83	31	518.01	3	507.00	38	519.1	3	525.67	16	519.94
24. 傾斜長	3	314.67	4	322.00	27	308.04	18	314.56	36	321.23	3	334.33	37	313.8	3	320.06	16	308.98
25. 正中矢状延長	3	385.00	3	384.00	14	370.71	16	378.94	24	380.00	1	372	35	380.6	1	367	14	365.50

Tab.5 脳頭蓋計測値(女性, mm)
Table 5. Comparison of female calvarial measurements and indices

	日焼	開善寺		京町		生住寺		宗玄寺		上清水		天福寺		大河浜		白浜		
		近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 山口県	近世人 山口県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	近世人 福岡県	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	
1. 頭蓋最大長	2	179.80	6	172.33	24	172.06	14	174.00	35	172.71	7	174.57	38	174.7	3	165.67	12	176.53
8. 頭蓋最大幅	2	134.00	5	134.70	24	132.33	14	137.21	38	138.50	8	131.50	38	133.5	3	133.67	11	126.73
17. パジオン・プレグマ率	2	133.00	2	132.00	10	134.70	10	134.00	27	136.33	5	128.00	30	132.7	11	130.91	11	130.91
8/1 頭蓋長幅示数	2	74.66	5	78.71	22	77.10	14	78.98	33	78.40	4	73.50	38	76.5	3	71.99	11	72.24
17/1 頭蓋長幅示数	2	74.00	2	71.43	10	72.78	10	72.68	25	78.48	4	74.53	35	76.1	3	75.76	11	73.43
17/8 頭蓋長幅示数	2	89.25	2	102.34	8	100.60	10	99.22	27	99.61	3	97.73	35	99.4	3	105.32	11	101.73
14+17/3 頭蓋半ズルス	2	148.83	2	143.83	8	147.00	10	148.00	25	149.07	3	144.00	-	-	3	153.33	11	145.97
23. 頭蓋水平度	2	508.00	4	498.25	11	496.91	13	500.23	32	498.97	1	495	36	497.4	3	525.00	10	498.30
24. 傾斜長	2	303.00	4	308.75	10	301.20	13	312.34	34	309.03	3	299.00	35	303.0	3	302.67	11	294.91
25. 正中矢状延長	2	378.00	7	359.50	6	357.13	6	366.00	25	364.48	7	352.90	34	364.2	3	363.32	11	364.45

型に属している。Tab.5は、女性の顔頭蓋の比較表である。本例の頭蓋長幅示数は宗玄寺、生往寺、開善寺、京町、天福寺よりは小さいが、大河浜、白浜、上清水よりも大きい。上清水にもっとも近い。女性の頭型も男性と同じ傾向が認められ、都市部では長頭型になっているのに反し、地方（大河浜、白浜、上清水）ではまだ長頭型を示している。本例の女性2例は甕棺から出土した人骨であるが、両者とも長頭型に傾いており、太宰府周辺では女性は長頭型に傾いていたようである。

顔面頭蓋

まず、男性について各個体の計測値をみてみよう。顔の幅径と高径の計測ができたものは3例しかない。顔の全体の幅径を表す頬骨弓幅が広いものが1例（7ST623）、狭いものが1例（7ST708）存在する。中顔幅はわずかに狭い。顔高は低く、1例は113mm（7ST009）、1例は114mm（7ST623）である。上顔高は3例計測できたが、61mmから63mmしかなく、上顔高はかなり低い。顔示数は1例（7ST623）しか算出できなかったが、その値は小さい。上顔示数は2例計算ができたが、ともに小さな示数値である。すなわち、男性の顔面頭蓋は、低・広顔傾向が認められる。

Tab.6は、男性の顔面頭蓋の比較表である。頬骨弓幅はTab.6では最大値となる。中顔幅は、大河浜、天福寺、生往寺、上清水、白浜よりは小さく、京町、宗玄寺、開善寺とは大差ない。顔高は大河浜の平均値に一致し、Tab.6では最小値である。上顔高は大河浜よりも小さく、Tab.6では最小値を示している。顔のプロポーションを示す顔示数を見ると、コルマンの顔示数は最小値、ウィルヒョウウの顔示数は上清水、大河浜よりは大きい、その他の資料よりは小さい。コルマンの上顔示数は最小値を示し、ウィルヒョウウの上顔示数は大河浜に次いで小さく、男性の顔面は「低・広顔」である。その程度は、大河浜近世人なみと考えて差し支えない。

眼窩示数は、白浜よりは大きい、大河浜と大差なく、その他の資料よりは小さく、低眼窩である。鼻示数はTab.6では最大値となり、低鼻である。また、歯槽側面角は天福寺について小さい値であるが、歯槽性の突顎傾向は弱い。

Tab.6 顔面頭蓋 (男性, mm, 度)

Table 6. Comparison of male facial measurements and indices

	日 境		明善寺		京 町		生往寺		宗玄寺		上清水		天福寺		大河浜		白 浜			
	近世人 程野橋	n	近世人 松浦	n	近世人 松浦	n	近世人 松浦	n	近世人 松浦	近世人 松浦	n	近世人 松浦	近世人 松浦	近世人 山口	n	近世人 山口	近世人 長崎	n		
40.	顔高	3	97.33	-	12	101.58	9	80.11	17	97.06	2	103.00	17	101.8	3	103.00	11	97.08		
45.	頬骨弓幅	2	[139.00]	3	136.53	2	135.00	4	135.00	18	135.88	1	136	25	136.4	3	137.67	12	[137.25]	
46.	中顔幅	2	98.50	4	98.25	24	98.13	12	101.58	31	98.87	3	101.00	24	101.8	3	105.87	14	[100.58]	
47.	顔高	2	113.50	1	133	14	125.00	11	125.09	18	128.94	2	115.00	14	126.9	2	112.50	10	[118.00]	
48.	上顔高	3	30.33	3	71.00	19	30.32	9	69.22	17	73.28	3	66.33	18	74.5	2	63.00	11	[68.30]	
47/48	顔示数(K)	1	[80.26]	1	[100.76]	1	93.28	9	92.72	10	83.31	-	13	93.2	2	84.82	8	87.35		
48/45	上顔示数(K)	2	[45.35]	2	51.36	2	52.80	8	51.83	8	84.41	-	17	84.4	2	47.11	10	[60.50]		
47/46	鼻高示数(V)	1	116.33	1	[144.87]	8	127.12	7	123.23	17	130.13	1	107.89	13	123.9	2	110.78	10	[118.51]	
48/48	上顔示数(V)	2	[83.86]	2	72.35	12	70.24	6	89.67	16	73.51	2	66.14	17	73.1	2	61.48	11	[66.32]	
40+48+47/3	顔面モリスL	1	[116.87]	1	[116.87]	1	120.33	7	118.48	9	123.50	-	-	-	-	2	117.17	8	[117.54]	
50.	前額高	3	18.67	4	18.00	32	17.16	14	17.93	27	17.67	7	17.71	-	3	20.00	14	15.84		
44	眼窩高	1	99	3	89.33	22	88.36	14	98.71	25	99.32	5	98.80	-	3	102.00	12	98.92		
50-44	眼窩示数	1	17.17	3	17.83	21	17.29	14	18.14	25	17.86	5	18.24	-	3	19.70	12	17.12		
51.	眼窩(左)	2	45.00	5	43.80	(右)	29	42.88	15	43.13	29	43.72	6	43.00	24	42.6	3	44.00	13	43.00
52.	眼窩(左)	3	35.00	6	36.83	(右)	32	34.97	16	35.38	34	35.69	6	33.83	24	34.1	3	34.00	14	34.93
52/51	眼窩示数(左)	2	77.87	4	85.43	(右)	26	81.19	14	81.30	29	83.09	6	78.51	23	80.9	3	77.05	12	70.72
54.	鼻高	3	27.33	2	23.50	32	25.47	12	26.58	28	25.43	4	26.25	24	26.3	2	20.00	12	25.87	
55.	鼻高	3	48.87	3	58.67	32	52.41	14	53.71	31	55.45	4	48.80	24	52.9	3	51.34	14	[53.29]	
54/35	鼻示数	3	36.25	2	40.83	28	48.21	12	49.72	28	45.46	4	54.19	24	50.1	3	64.53	12	[45.51]	
72	全顔側角	3	85.33	2	84.60	13	81.92	11	87.09	22	85.30	2	81.50	16	83.2	3	84.33	10	86.00	
73.	鼻側面角	3	89.33	2	85.90	19	88.42	15	88.93	27	86.85	3	83.33	-	3	85.87	11	88.27		
74.	歯槽側面角	3	70.00	2	81.00	13	72.00	11	78.30	12	77.83	2	71.00	16	67.0	3	77.33	10	76.20	

一方、女性では2例について顔面頭蓋の計測が可能であった。顔の幅を示す頬骨弓幅と中顔幅は1例(7ST523)は狭いが、もう1例(7ST712)は広い。顔高は1例(7ST523)しか計測できないが、118mmとやや高い。上顔高は2例とも66mmで、女性としてはやや高い方である。顔面のプロポーションを示す顔示数

は1例しか計算できないが、この1例は、コルマンの顔面指数が[93.65]、ウィルヒョウの顔面指数は[124.21]で、顔面指数はかなり大きい値となり、高・狭顔傾向が認められる。上顔面指数は2例が計算できたが、1例(7ST523)はコルマンの上顔面指数もウィルヒョウの上顔面指数も大きい、もう1例(7ST712)は小さな値である。

Tab.7は、女性の顔面頭蓋の比較表である。計測できた2例の顔面頭蓋には明らかに差異が認められるので、比較表にはこの2例の計測値をそれぞれ示し、あわせて平均値も掲載した。7ST523の頬骨弓幅は、大河浜、京町、日焼(7ST712)よりも小さく、その他の資料とは大差ないが、7ST712はTab.7では最大値である。上顔面指数は7ST523は大河浜よりは小さいが、開善寺、上清水、生往寺、宗玄寺、白浜よりは大きく、天福寺、京町に近い。7ST712はTab.7では最大値を示している。一方、7ST523の顔高は京町について大きく、上清水との差はかなり大きい。上顔高は、7ST523も7ST712も同じ値で、上清水、開善寺よりは大きい、京町、天福寺よりは小さく、生往寺、宗玄寺、白浜、大川浜に近い。7ST523のコルマンの顔面指数は、京町、開善寺、生往寺、宗玄寺よりも小さいが、大川浜、天福寺、白浜よりは大きく、7ST523は高・狭顔である。同じく7ST523のウィルヒョウの顔面指数は、大川浜、上清水、天福寺、白浜よりも大きい、開善寺、宗玄寺よりも小さく、生往寺、京町に近い。コルマンの上顔面指数とウィルヒョウの上顔面指数は7ST523と7ST712では示数値に違いがあり、前者は大きく、後者は小さい。7ST523のコルマンの上顔面指数は、京町、天福寺、宗玄寺には及ばないものの、生往寺、白浜に近く、また、ウィルヒョウの上顔面指数は開善寺、京町、生往寺、天福寺、白浜に近い。しかし、7ST712のコルマンの上顔面指数とウィルヒョウの上顔面指数はともにTab.7では最小値となり、7ST712は低・広顔である。

7ST523の眼窩高示数は大きい、7ST712はTab.7では最小値となり、7ST712は低眼窩である。鼻示数は上清水について大きく、広鼻である。また、7ST523歯槽側面角はTab.7ではもっとも小さく、歯槽性突顎の傾向が強い、7ST712は開善寺について大きく、歯槽性突顎の傾向は認められない。

Tab.7 顔面頭蓋 (女性, mm, 度)
Table 7. Comparison of female facial measurements and indices

	日焼 遊世人	日焼 遊世人	日焼 遊世人	開善寺 堀間橋	京町 遊世人	生往寺 遊世人	宗玄寺 遊世人	上清水 遊世人	天福寺 遊世人	大川浜 山口島	白浜 遊世人	平均値	
												n	M
	S-523	S-712										n	M
43	顔長	86	-	1 96	2 86.00	8 95.83	8 92.50	13 93.92	8 94.33	20 95.1	3 97.33	9	97.78
45	頬骨弓幅 [126]	123	2 [129.90]	2 126.00	1 132.00	7 127.57	16 125.19	-	20 126.5	2 130.67	8 125.62		
46	歯槽高	95	105	2 100.00	2 90.00	10 94.90	9 91.33	21 93.00	4 90.50	25 95.5	2 100.67	10	93.00
47	顔高	118	-	1 116	1 115	8 121.17	3 118.00	15 116.97	4 109.25	15 115.9	2 114.50	3	114.76
48	上顔高	99	66	2 95.00	2 94.50	12 92.15	5 95.40	15 95.72	6 93.22	22 98.9	2 95.22	10	95.20
47/45	顔示数(K)	[93.85]	-	1 [93.45]	1 95.63	1 94.48	2 94.99	8 94.67	-	15 91.1	2 97.7	2	92.60
46/45	上顔示数(K)	[92.21]	49.62	2 [91.00]	1 91.67	1 97.98	4 92.29	10 92.47	-	22 94.2	3 96.4	8	92.64
47/46	顔示数(V)	[124.21]	-	1 124.21	1 127.78	4 123.50	3 124.61	12 126.75	4 120.90	15 120.9	2 112.45	9	122.41
46/48	上顔示数(V)	89.47	82.68	2 88.18	2 71.87	10 71.88	5 71.48	13 72.92	4 67.98	22 71.8	3 65.94	3	67.81
49+45+47/2	顔高モリスス [114.90]	114.90	-	1 [114.90]	1 107.00	1 118.00	2 110.50	7 110.57	-	2 115.00	6 114.67		
50	眼窩高	14	18	2 16.00	1 14	15 18.53	10 18.80	27 18.30	7 15.71	-	3 18.30	10	17.30
44	歯槽角	93	101	2 97.00	1 93	10 92.30	10 92.90	23 93.96	4 93.25	-	3 97.33	9	93.22
50/44	眼窩突出度	15.05	17.82	2 16.44	1 15.00	10 18.19	10 17.89	23 18.93	4 17.93	-	3 18.46	9	18.22
51	眼窩突出度	42	46	2 43.50	2 42.50	13 45.98	9 41.11	27 41.74	8 40.00	30 46.5	3 42.33	9	46.87
52	眼窩突出度	35	34	2 34.90	3 33.67	10 34.90	9 35.00	27 35.22	8 32.33	30 34.3	3 34.33	7	34.43
52/51	眼窩突出度(%)	63.33	75.56	2 78.44	2 81.50	10 84.57	8 85.15	25 84.51	6 78.27	29 84.6	3 81.10	7	84.59
54	鼻傾	-	28	1 28	2 22.00	15 24.55	8 24.25	25 24.48	5 25.60	26 25.3	3 25.33	10	24.30
55	鼻傾	49	52	2 50.50	2 49.00	14 51.07	8 50.00	26 50.19	6 45.83	28 49.9	3 52.00	9	49.22
54/55	鼻示数	-	53.05	1 53.85	2 45.15	14 46.34	8 48.55	28 48.84	5 55.78	26 51.0	3 45.71	9	49.55
72	全歯側角	78	90	2 84.00	2 87.50	10 85.90	9 87.20	17 82.47	18 82.5	2 81.33	3 82.38		
73	歯槽側角	82	83	2 87.50	2 89.50	10 90.30	8 89.25	24 87.04	6 88.90	-	3 84.67	8	87.13
74	歯槽側面角	83	78	2 70.90	2 82.00	10 73.70	9 75.90	18 72.83	8 88.83	17 85.9	2 88.00	8	71.75

Tab.8は男性の鼻根部の比較表である。鼻根彎曲示数は上清水について大きく、鼻根部は扁平である。Tab.9は女性の鼻根部の比較表である。顔面のプロポーションには差があったが、鼻根部については2体で大差はない。鼻根彎曲示数は白浜と大差なく、上清水について大きく、男性同様、鼻根部は扁平である。

Tab.8 鼻根部 (男性, mm, 度)
Table 8. Comparison of male nasal root measurements and indices

	日 産		開善寺		京 町		生往寺		宗玄寺		上清水		大河浜		白 浜		
	近世人 福岡県	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 山口県 (松下)	近世人 山口県 (松下)	近世人 長崎県 (松下)	近世人 長崎県 (松下)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
50.	前額突部幅	3	18.87	4	18.00	32	17.16	14	17.93	26	17.62	7	17.71	3	20.90	14	16.64
50A.	鼻根部長	3	21.29	4	22.06	27	20.52	13	20.77	24	21.25	7	19.71	3	23.33	12	21.08
50/50A	鼻根幅係数	3	87.42	4	81.83	27	84.85	13	86.56	24	82.86	7	90.01	3	89.05	12	79.84
57.	鼻骨最大幅	3	10.00	4	8.25	28	7.72	13	7.54	26	7.38	6	7.90	3	10.33	14	8.21
44.	鼻根角幅	1	9	3	69.33	22	66.56	14	66.71	24	69.29	5	69.80	3	100.02	12	68.92
50/44	鼻根突部上傾角 (度)	1	17.17	3	17.83	21	17.29	14	18.14	24	17.82	5	18.24	3	18.70	12	17.12
a.	前額突起水平傾角 (度)	2	9.50	4	9.50	26	9.38	17	9.76	21	8.43	8	10.13	4	8.75	13	10.54
b.	鼻根角	3	9.00	3	8.00	28	9.59	14	9.43	23	8.30	8	10.50	3	8.87	13	10.00
c.	鼻根角	1	146.00	2	139.00	12	138.42	10	136.20	14	138.29	3	141.87	3	141.00	4	138.75
d.	0°傾角距離	2	3.00	4	3.00	18	2.06	16	2.94	21	2.33	1	2.75	-	-	15	2.87
e.	鼻根高	1	26.00	2	35.00	12	33.33	9	29.78	14	34.38	3	29.33	3	33.87	4	34.25
f.	鼻根高	1	4.00	2	3.00	12	5.75	9	5.33	13	5.85	3	4.87	3	5.87	4	6.25
f/a	鼻根高係数	1	15.38	2	14.17	12	17.43	9	18.92	12	16.24	3	16.80	3	18.62	4	18.46
77.	鼻骨内	2	147.50	2	139.00	20	142.55	15	147.53	23	147.22	-	-	-	-	14	144.93
Fa	frontal距離	2	99.00	2	97.50	21	95.24	15	96.53	-	-	-	-	-	-	-	-
Fh	鼻根高	2	14.50	2	15.00	21	14.62	15	13.33	-	-	-	-	-	-	-	-
Fh/Fa	顔面扁平指数	2	14.62	2	15.52	21	15.38	15	13.79	23	14.84	-	-	-	-	12	14.94

Tab.9 鼻根部 (女性, mm, 度)
Table 9. Comparison of female nasal root measurements and indices

	日 産		開善寺		京 町		生往寺		宗玄寺		上清水		大河浜		白 浜			
	近世人 福岡県	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 福岡県 (松下)	近世人 山口県 (松下)	近世人 山口県 (松下)	近世人 山口県 (松下)	近世人 山口県 (松下)	近世人 山口県 (松下)	近世人 山口県 (松下)	近世人 山口県 (松下)		
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M		
50.	前額突部幅	2	16.00	1	14	15	16.03	10	16.60	28	16.12	7	15.71	3	18.00	10	17.30	
50A.	鼻根部長	2	18.00	1	17	13	18.65	10	18.50	25	19.20	7	17.71	3	21.00	9	18.58	
50/50A	鼻根幅係数	2	88.75	1	82.35	13	87.28	10	85.97	24	84.89	7	86.97	3	85.63	9	88.70	
57.	鼻骨最大幅	2	7.00	-	-	13	7.08	10	7.30	24	7.29	8	7.50	3	8.33	9	8.58	
44.	鼻根角幅	2	97.00	1	80	10	92.30	10	92.90	24	94.21	4	93.25	3	97.33	9	93.22	
50/44	鼻根突部上傾角 (度)	2	18.44	1	15.05	10	18.19	10	17.89	24	17.01	4	17.93	3	18.48	9	18.22	
a.	前額突起上傾角 (度)	2	9.50	1	13	14	9.07	11	9.45	28	8.22	7	8.88	3	9.67	9	9.44	
b.	鼻根角	2	8.00	1	12	14	9.64	10	8.80	26	12.85	7	9.00	3	10.33	9	8.44	
c.	前額突起水平傾角 (度)	2	101.50	1	114	7	93.14	10	92.80	23	88.48	6	87.17	-	-	7	82.43	
d.	0°傾角距離	2	2.00	2	2.00	7	1.88	10	1.20	25	1.28	6	1.17	-	-	9	2.00	
e.	鼻根高	1	141	-	-	5	145.00	8	148.13	14	144.79	3	149.23	3	151.00	6	130.20	
f.	鼻根高	1	33	-	-	5	32.63	8	33.38	13	35.00	3	38.87	3	31.00	5	33.65	
f/a	鼻根高係数	1	5	-	-	5	4.65	8	4.38	13	4.54	3	3.23	3	3.23	5	3.82	
f/a	鼻根高係数	1	15.15	-	-	5	14.91	8	15.22	13	13.01	9	11.73	9	10.77	5	11.40	
77.	鼻骨内	2	152.50	3	137.67	9	146.33	10	145.20	22	147.32	-	-	-	-	9	145.67	
Fa	frontal距離	2	96.00	3	93.67	9	91.67	10	92.00	-	-	-	-	-	-	-	-	
Fh	鼻根高	2	12.00	3	14.00	9	12.69	10	13.60	-	-	-	-	-	-	-	-	
Fh/Fa	顔面扁平指数	2	12.48	3	15.44	9	14.08	10	14.72	22	13.86	-	-	-	-	-	9	15.03

2. 四肢骨
) 上腕骨

Tab.10は男性上腕骨の比較表である。最大長は上清水と同じ計測値で、Tab.10では最大値を示しており、近世人としては長さは長い。中央周は生往寺と大差なく、Tab.10では大河浜について大きく、最小周は大河浜、生往寺について大きく、骨体は太い。長厚示数は大河浜よりは小さいが、開善寺よりも大きく、その他の資料とは大差ない。骨体断面示数は大河浜、白浜、宗玄寺、生往寺よりは小さいが、上清水、京町よりはわずかに大きく、開善寺と大差なく、骨体の扁平性は弱い。

Tab.11は女性上腕骨の比較表である。最大長は大河浜、白浜について大きく、長さは近世人としてはやや長い方である。中央周も最小周もTab.11では大河浜について大きいが、両計測値とも大河浜に近く、骨体は男性と同様に太い。長厚示数はTab.11では最大値となり、骨体は頑丈である。また、骨体断面示数はTab.11では最大値となるが、生往寺とは大差なく、男性と同様に骨体の扁平性は弱い。

Tab.10 上腕骨計測値 (男性, 右, mm)
Table 10. Comparison of measurements and indices of male right humeri

	日 鏡 近世人 樺岡溝	開善寺 近世人 樺岡溝 (松下)	京 町 近世人 樺岡溝 (松下)	生住寺 近世人 樺岡溝 (松下)	宗玄寺 近世人 樺岡溝 (松下)	上清水 近世人 樺岡溝 (松下)	大河浜 近世人 山口集 (松下)	白 浜 近世人 長崎溝 (松下)														
									n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
									n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 上腕骨最大長	1	201	1	279	5	287.40	12	291.75	23	290.61	1	(201)	3	288.33	8	292.75						
5. 中央最大径	3	23.67	10	23.20	112	22.36	16	23.06	57	22.05	11	22.91	4	23.25	18	22.28						
8. 中央最小径	2	16.00	10	15.40	112	16.96	16	17.78	57	17.16	11	17.00	4	18.25	18	17.39						
7. 骨体最小径	3	64.30	11	67.45	109	62.13	17	65.35	49	61.84	8	62.25	4	65.50	18	63.00						
7(a). 中央部	2	67.50	10	69.10	112	66.34	16	67.77	57	65.74	11	66.91	4	69.00	18	66.59						
6/5 骨体断面示数	2	76.91	10	76.71	112	75.38	16	77.56	57	76.91	11	74.32	4	80.07	18	78.24						
7/1 長厚示数	1	21.59	1	20.43	4	21.39	11	21.58	16	21.39	1	(20.60)	3	22.82	8	21.70						

Tab.11 上腕骨計測値 (女性, 右, mm)
Table 11. Comparison of measurements and indices of female right humeri

	日 鏡 近世人 樺岡溝	開善寺 近世人 樺岡溝 (松下)	京 町 近世人 樺岡溝 (松下)	生住寺 近世人 樺岡溝 (松下)	宗玄寺 近世人 樺岡溝 (松下)	上清水 近世人 樺岡溝 (松下)	大河浜 近世人 山口集 (松下)	白 浜 近世人 長崎溝 (松下)												
									n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
									n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 上腕骨最大長	2	(271.00) (左)	1	242	5	268.20	9	280.28	12	269.83	1	282	3	285.00	6	281.33				
5. 中央最大径	3	22.00	7	18.57	46	19.43	17	19.76	44	19.80	14	20.93	3	22.00	11	20.84				
8. 中央最小径	3	17.00	7	13.86	46	14.85	17	15.16	44	14.86	14	14.71	3	15.67	11	14.73				
7. 骨体最小径	3	59.00	7	50.42	37	53.62	18	54.50	36	54.47	8	55.50	3	60.00	11	55.27				
7(a). 中央部	3	64.00	7	53.86	46	56.85	17	58.12	44	57.84	14	60.07	3	64.33	12	58.75				
6/5 骨体断面示数	3	77.27	7	74.81	6	75.71	17	77.09	44	74.27	14	70.49	3	71.31	11	71.52				
7/1 長厚示数	2	(22.51) (左)	1	19.01	5	19.87	9	20.34	9	20.20	1	16.41	3	20.38	6	20.20				

)大 骨

Tab.12は男性の大腿骨の比較表である。最大長はTab.12では白浜について大きく、長さは近世人としてはやや長い。中央周はTab.12では最大値となるが、比較資料の中では大河浜、上清水に近く、骨体は太い。長厚示数は開善寺について大きく、骨体はやや頑丈である。骨体中央断面示数は開善寺、白浜について大きな値となり、大腿骨後面や粗線の発達はやや良好である。また、上骨体断面示数はTab.12では最大値となり、骨体上部の扁平性は弱い。

Tab.13は女性の大腿骨の比較表である。最大長は大河浜について大きく、長さは近世人としては長い方である。中央周は大河浜について大きな値となり、骨体は太い。長厚示数は大河浜よりは小さいが、その他の比較資料とはあまり大差ない。骨体中央断面示数は白浜について大きな値であるが、資料の中では開善寺の平均値に近く、近世人としては男性同様、骨体両側面の後方への発達がみられる。また、上骨体断面示数は大河浜、上清水、生住寺よりも大きい、開善寺、宗玄寺よりも小さく、京町に近く、骨体上部はかなり扁平である。

Tab.12 大腿骨計測値 (男性, 右, mm)
Table 12. Comparison of measurements and indices of male right femora

	日 鏡 近世人 樺岡溝	開善寺 近世人 樺岡溝 (松下)	京 町 近世人 樺岡溝 (松下)	生住寺 近世人 樺岡溝 (松下)	宗玄寺 近世人 樺岡溝 (松下)	上清水 近世人 樺岡溝 (松下)	大河浜 近世人 山口集 (松下)	白 浜 近世人 長崎溝 (松下)												
									n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
									n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 最大長	1	413	1	389	15	401.27	8	405.75	23	407.83	-	4	401.25	12	418.25					
2. 自然性全長	1	412	1	387	14	398.50	7	403.43	24	401.75	-	4	398.00	12	415.25					
9. 骨体中央矢状径	4	29.00 (左)	6	28.50	182	26.58	23	26.48	45	26.78	8	26.63	4	28.25	16	27.50				
7. 骨体中央横径	5	28.20 (左)	6	24.83	182	26.99	23	25.83	45	25.93	8	29.38	4	28.00	16	28.19				
8. 骨体中央周	4	89.75 (左)	6	81.17	181	84.91	23	82.30	44	83.41	8	88.50	4	88.75	16	84.88				
9. 骨体上横径	5	31.00 (左)	11	29.27	137	31.08	20	30.69	47	31.28	9	33.06	4	35.25	16	32.31				
10. 骨体上矢状径	5	25.20 (左)	11	22.91	136	24.41	20	23.90	47	24.49	9	24.11	4	25.75	16	24.38				
6/2 長厚示数	1	22.35	1	23	13	20.44	8	20.24	16	20.87	-	4	22.16	12	20.78					
6/7 骨体中央断面示数	4	104.15 (左)	6	106.99	182	98.98	23	102.94	45	103.32	8	91.51	4	100.64	16	105.25				
10/9 上骨体断面示数	5	81.71 (左)	11	78.40	136	76.84	20	78.53	47	78.57	9	72.65	4	72.04	16	75.52				

Tab.13 大腿骨計測値 (女性, 右, mm)

Table 13. Comparison of measurements and indices of female right femora

	日 籍 近世人 福岡県	開善寺 近世人 福岡県 (松下)	京 町 近世人 福岡県 (松下)	生住寺 近世人 福岡県 (松下)	宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)	上清水 近世人 福岡県 (松下・他)	大洞浜 近世人 山口県 (松下)	白 浜 近世人 長崎県 (松下)								
									n	M	n	M	n	M	n	M
1. 最大長	2	383.50	2	370.00	6	367.17	4	360.50	15	370.93	3	371.67	2	403.50	7	386.29
2. 最低位全長	2	389.50	2	386.00	5	368.80	4	356.00	14	367.64	1	362.00	2	394.50	7	383.14
6. 骨体中央矢状径	4	25.25	8	22.75	87	23.13	16	23.08	49	23.22	17	22.24	3	26.87	13	24.77
7. 骨体中央横径	4	25.00	8	23.63	87	23.52	17	23.71	49	23.66	17	25.76	3	26.80	13	23.77
8. 骨体中央高	4	38.50	8	37.50	87	37.46	16	37.24	49	37.16	17	38.86	3	40.87	13	35.00
9. 骨体上縁径	4	31.00	8	28.25	73	27.86	17	27.68	51	27.60	17	29.59	3	34.67	12	28.50
10. 骨体上矢状径	4	22.00	8	20.25	73	21.02	17	20.53	50	21.28	17	20.76	3	23.67	12	21.83
8/2 基準指数	2	16.77	2	20.00	5	19.81	4	20.67	8	20.64	1	19.89	2	21.70	7	19.80
6/7 骨体中央断面指数	4	191.04	8	100.90	87	98.05	16	99.17	49	97.57	17	98.56	3	95.23	13	100.69
10/9 上骨体断面指数	4	74.64	8	78.25	73	75.67	17	73.61	50	77.34	17	70.42	3	68.46	12	76.74

) 脛骨

Tab.14は男性脛骨の比較表である。最大長は白浜, 上清水よりも小さいが, 京町よりも大きく, 生住寺, 宗玄寺, 大洞浜に近い。骨体間はTab.14では最大値となり, 最小間は大洞浜について大きく, 骨体は太い。長厚指数はTab.14では最大値となり, 骨体は頑丈である。中央断面指数はTab.14では最大値となり, 骨体には扁平性は認められない。

Tab.15は女性脛骨の比較表である。最大長はTab.15では最大値となり, 長さは近世人としては長い。骨体間と最小間ともにTab.15では大洞浜について大きな値となり, 男性と同じように骨体は太い。長厚指数は大洞浜, 白浜, 上清水よりは小さいが, 開善寺, 京町よりは大きく, 生住寺, 宗玄寺に近い。中央断面指数は宗玄寺について小さいが, 骨体には扁平性は認められない。

Tab.14 脛骨 (男性, 右, mm)

Table 14. Comparison of measurements and indices male right tibiae

	日 籍 近世人 福岡県	開善寺 近世人 福岡県 (松下)	京 町 近世人 福岡県 (松下)	生住寺 近世人 福岡県 (松下)	宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)	上清水 近世人 福岡県 (松下・他)	大洞浜 近世人 山口県 (松下)	白 浜 近世人 長崎県 (松下)								
									n	M	n	M	n	M	n	M
1. 脛骨全長	1	324	-	7	324.97	12	324.76	21	326.19	1	346	3	318.33 (注)	8	336.68	
1a. 脛骨最大長	1	331	-	8	327.63	12	330.33	22	332.55	2	359(50)	4	330.00 (注)	8	341.75	
8. 中央最大径	1	31	11	26.73	81	26.23	19	27.84	43	28.02	10	28.90	4	30.50 (注)	8	29.19
8a. 実質孔位最大径	1	36	6	32.33	55	32.36	17	32.82	41	32.00	7	32.71	4	34.29 (注)	5	33.07
8. 中央横径	1	23	11	19.62	62	20.76	19	20.85	42	20.51	10	20.60	4	21.26 (注)	8	21.36
9a. 実質孔位横径	2	25.00 (注)	6	23.50	55	23.15	17	23.82	43	22.74	8	22.30	4	24.75 (注)	5	23.80
10. 骨体間	2	84.90 (注)	11	73.09	81	77.07	19	77.05	43	77.92	10	79.40	4	83.50 (注)	8	79.61
10a. 実質孔位間	2	99.00 (注)	6	88.50	54	87.93	17	88.12	41	87.10	7	90.00	4	97.50 (注)	5	89.53
10b. 最小間	2	78.90 (注)	10	68.10	59	70.19	17	70.24	43	70.00	7	70.71	4	77.25 (注)	5	72.73
9/8 中央断面指数	2	75.75 (注)	11	74.34	81	73.63	19	74.42	43	73.31	10	71.49	4	68.82 (注)	8	73.29
9a/8a 実質孔位断面指数	2	67.82 (注)	6	72.95	55	71.71	17	73.04	41	71.44	7	70.11	4	70.89 (注)	5	72.40
10b/1 長厚指数	1	23.82	-	7	20.93	11	21.00	15	21.68	1	20.23	3	23.49 (注)	8	22.23	

Tab.15 脛骨 (女性, 右, mm)

Table 15. Comparison of measurements and indices female right tibiae

	日 籍 近世人 福岡県	開善寺 近世人 福岡県 (松下)	京 町 近世人 福岡県 (松下)	生住寺 近世人 福岡県 (松下)	宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)	上清水 近世人 福岡県 (松下)	大洞浜 近世人 山口県 (松下)	白 浜 近世人 長崎県 (松下)								
									n	M	n	M	n	M	n	M
1. 脛骨全長	2	319.50	2	267.00 (注)	2	297.50	5	293.20	9	305.87	1	280	3	319.67	7	303.00
1a. 脛骨最大長	2	326.50	2	291.00 (注)	1	291	6	303.83	11	312.55	3	306.33	3	326.00	7	309.57
8. 中央最大径	4	27.75	8	22.25	37	24.36	13	23.62	34	24.03	12	24.50	3	28.00	12	26.17
8a. 実質孔位最大径	3	32.33	8	25.83	23	27.52	11	27.27	32	27.81	11	28.55	2	31.11	11	25.27
9. 中央横径	4	19.50	8	16.63	37	17.97	14	17.43	34	17.87	12	18.42	3	21.33	12	19.67
9a. 実質孔位横径	3	21.33	8	18.67	28	19.98	12	19.92	32	19.53	11	20.38	2	20.00	11	21.73
10. 骨体間	4	74.00	8	62.75	37	67.35	13	65.69	34	66.85	12	69.25	3	78.67	12	72.83
10a. 実質孔位間	3	85.67	8	71.83	23	75.70	11	74.27	32	75.36	11	79.09	2	87.00	11	79.82
10b. 最小間	4	67.50	8	58.25	37	61.50	12	58.92	34	61.12	8	63.88	3	71.87	12	66.67
9/8 中央断面指数	4	70.90	8	70.28	37	74.13	13	73.43	34	70.49	12	70.19	3	76.04	12	70.61
9a/8a 実質孔位断面指数	3	66.25	8	72.49	23	72.98	11	72.32	32	70.49	11	71.59	2	74.46	11	74.32
10b/1 長厚指数	2	20.97	2	19.82 (注)	2	19.80	5	20.67	8	20.11	1	21.79	3	22.46	7	22.17

3. 推定身長値

Tab.16は男性の推定身長値の比較表である。大腿骨からの推定値 (Pearson式) を比較してみると、本例の推定値はTab.16では白浜、天福寺について大きな値となり、生往寺の平均と大差ない。身長は近世人としては高い方である。Tab.17は女性の推定身長値の比較表である。同じように大腿骨からの推定値 (Pearson式) を比較してみると、大河浜について大きく、男生と同様、女性も近世人としては身長が高い。Tab.17から女性の身長については、都市部よりも地方の方が高いという傾向が読み取れる。

Tab.16 推定身長値 (男性, 右, mm)
Table 16. Comparison of estimated male statures

	日 渡		同善寺		京 街		生往寺		第五寺		上清水		天徳寺		大河浜		白 浜	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
Pearsonの式																		
上肢骨	1	157.75	2	(150.66)	8	153.37	14	154.96	32	155.79	1	(157.75)	-	-	3	153.51	10	155.44
腕骨	1	159.20	6	155.11	5	154.81	15	159.78	35	157.65	-	-	-	-	2	152.17	9	160.14
大腿骨	1	158.95	1	154.44	23	157.83	13	158.43	29	157.62	-	-	24	159.4	4	158.74	12	159.84
脛骨	1	155.65	-	-	12	156.02	13	156.07	25	156.64	1	160.87	-	-	3	152.88	11	158.43
藤井の式																		
上肢骨	1	157.22	2	(150.77)	8	153.30	14	154.59	32	155.83	1	(157.22)	-	-	3	153.13	10	155.16
腕骨	1	157.32	6	152.01	5	152.42	15	156.41	35	155.53	-	-	-	-	2	148.70	9	157.23
大腿骨	1	156.91	1	150.80	23	155.54	13	156.19	29	155.31	-	-	-	-	4	154.01	12	158.21
脛骨	1	154.03	-	-	11	155.74	13	155.82	25	155.24	2	(157.86)	-	-	3	153.12	11	158.20

Tab.17 推定身長値 (女性, mm)
Table 17. Comparison of estimated female statures

	日 渡		同善寺		京 街		生往寺		第五寺		上清水		天徳寺		大河浜		白 浜	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
Pearsonの式																		
上肢骨	2	(146.80)	1	138.1	8	145.85	12	144.38	17	145.72	1	143.83	-	-	3	152.72	8	147.82
腕骨	2	149.59	5	144.7	5	150.15	9	147.01	21	146.95	-	-	-	-	3	153.88	9	149.20
大腿骨	2	149.38	2	144.8	10	146.82	8	144.86	19	145.22	3	145.13	20	146.5	2	151.33	10	146.12
脛骨	2	149.92	2	142.3	4	145.10	6	144.47	13	146.22	1	140.63	-	-	3	150.43	7	146.04
藤井の式																		
上肢骨	2	(146.80)	1	138.30	8	145.45	12	144.41	17	145.58	1	143.66	-	-	3	151.51	8	147.19
腕骨	2	146.16	5	142.5	5	147.71	9	144.53	21	144.77	-	-	-	-	3	150.86	9	146.65
大腿骨	2	149.19	2	143.9	10	145.19	8	143.88	19	144.43	3	144.33	-	-	2	151.43	10	147.22
脛骨	2	149.70	2	141.8	4	145.40	7	145.01	13	144.72	3	143.26	-	-	3	151.86	7	145.98

要 約

福岡県太宰府市向佐野342-1にある日焼遺跡の発掘調査が区画整理事業に伴って、2003年(平成15年)から2004年(平成16年)におこなわれ、箱棺、桶棺、甕棺などの埋葬施設から人骨が検出された。出土人骨の人類学的観察と計測をおこない、以下の結果を得た。

1. 埋葬遺構は大部分が箱棺、桶棺で、その他に甕棺・籠棺が使用されていた。人骨の保存状態がよかったのは甕棺出土人骨であった。
2. 本調査で出土した近世人骨は合計58体である。58体のうち成人骨は51体で、7体は幼小児骨である。成人骨のうち、男性骨は14体、女性骨は8体で、その他に性別を判別できないものか29体あった。
3. 本人骨の所属時期は、考古学的所見から、近世(江戸時代)と推測されている。
4. 男性の脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長186.00mm(4例)、頭蓋最大幅136.67mm(3例)、バジオン・プレグマ高139.67mm(3例)で、頭蓋長幅示数73.83(3例)、頭蓋長高示数74.84(3例)、頭蓋幅高示数は102.29(3例)となり、頭型はdolicho-,ortho-,akrokran(長,中,尖頭型)に属している。

女性の計測値は頭蓋最大長179.50mm(2例)、頭蓋最大幅134.00mm(2例)、バジオン・プレグマ高133.00mm(2例)で、頭蓋長幅示数74.66(2例)、頭蓋長高示数74.09(2例)、頭蓋幅高示数99.35(2例)となり、頭型は男性と同じくdolicho-,ortho-,akrokran(長,中,尖頭型)に属している。

5. 男性の顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅139.00mm(2例)、中顔幅98.50mm(2例)、顔高113.50mm(2例)、上顔高62.33mm(3例)で、顔示数(80.28)(K)(1例)、116.33(V)(1例)、上顔示数(45.35)(K)(1例)、63.96(V)(2例)となり、顔面には低・広顔傾向が認められる。

一方、女性の顔面頭蓋の計測値は、顔長98mm(1例)、頬骨弓幅[129.50mm](2例)、中顔幅100.00mm(2例)、顔高118mm(1例)、上顔高66.00mm(2例)で、顔示数(93.65)(K)(1例)、124.21(V)(1例)、上顔示数[51.00](K)(2例)、66.16(V)(2例)となるが、1例は高・狭顔、もう1例は広顔であった。

6. 男女ともに歯槽性突顎の傾向は弱い。
7. 上腕骨、大腿骨、脛骨の長さは男女とも近世人としては長く、またそれぞれの骨体も太い。上腕骨体の扁平性は男女とも弱い。大腿骨の骨体両側面の後方への発達には男女とも良好であるが、男性には骨体上部の扁平性は認められないが、女性の骨体上部はかなり扁平である。また、男女ともに脛骨体には扁平性は認められない。
8. 大腿骨最大長からの推定身長値は、男性が158.95cm(Pearson式)(1体)、女性は149.38cm(Pearson式)(2体)となり、男女ともに低身長ではあるが、近世人としてはやや高い。
9. 日焼遺跡の埋葬施設の主体は箱棺、桶棺であったが、その他に甕棺・籠棺も認められた。人骨の保存状態は箱棺、桶棺ではよくなかったが、甕棺からは保存良好な人骨が出土した。男性では桶棺と甕棺から出土した人骨が観察・計測できたが、頭型は長頭型に傾いており、顔面は低・広顔であった。一方、女性は甕棺から出土した2体の特徴を明らかにすることができたが、頭型はやや長頭型に傾いており、顔面は1体は高・狭顔、もう1体は広顔であった。高・狭顔の女性骨が1体あったことは注目しておくべき。また、鼻根部は男女とも扁平であった。四肢骨は男女とも長さが長く、骨体も太く、大腿骨では骨体両側面の後方への発達や粗線の発達は良好であり、身長は近世人としてはやや高かった。これまで筆者が近世人の研究を進めてきたところ、都市部と地方では形質に差異が認められることが次第にわかってきた。都市部、あるいは武家層では中世的形質が弱まり、頭型は中頭型へ変化し、鼻根部の扁平性も中世人よりは弱くなっている。顔面は都市部と地方という違いよりも、所属する階層の違いによって、「高・狭顔」と「低・広顔」タイプに分かれるようである。また、四肢骨は都市部よりも地方の近世人の方が太くて頑丈であるが、これも階層によって、換言すれば従事していた職業の形態によって生じた差異と考えられる。

日焼遺跡出土の近世人には、地方の近世人が示す特徴が認められた。これは太宰府周辺地域の近世の様子を反映したものかもしれない。本地域での近世人骨の資料が少ないので、資料が増加すれば、もっと詳しい考察が可能となるであろう。

《謝辞》 拙筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた太宰府市教育委員会の皆様方に感謝致します。
《参考文献》

1. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag, Stuttgart: 429-597.
2. 松下孝幸・他, 1980a: 熊本県川田京坪遺跡出土の近世人骨。車塚古墳・川田京坪遺跡・川田小筑遺跡・塩塚古墳(熊本県文化財調査報告46) 付: 1-17
3. 松下孝幸・他, 1980b: 熊本県興善寺四郎九道跡出土の近世人骨。興善寺 I (熊本県文化財調査報告45): 61-68
4. 松下孝幸・他, 1983: 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次調査概報(豊北町埋蔵文化財調査報告2): 19-30.
5. 松下孝幸・他, 1992: 北九州市上清水遺跡出土の近世人骨。上清水遺跡V区(奈良時代以降編)(北九州市埋蔵文化財調査報告書第117集): 416-441.
6. 松下孝幸, 1993: 北九州市京町遺跡出土の近世人骨。京町遺跡(北九州市文化財調査報告書第59集): 177-248.
7. 松下孝幸・他, 1994: 山口県豊北町大河浜遺跡出土の人骨。大河浜遺跡(山口県埋蔵文化財調査報告第165集): 11-21.
8. 松下孝幸, 1995: 北九州市宗玄寺跡出土の近世人骨。宗玄寺跡(北九州市埋蔵文化財調査報告書第172集) 502-542.
9. 松下孝幸, 1996a: 北九州市普濟院跡出土の近世人骨。折尾横穴群内普濟院跡: 95-121.
10. 松下孝幸, 1996b: 長崎県有川町頭ヶ島白浜遺跡出土の近世人骨。頭ヶ島白浜遺跡(有川町文化財調査報告書第1集): 67-87.
11. 松下孝幸, 1997a: 柳井市鳥越遺跡出土の近世人骨。鳥越遺跡発掘調査報告一和田山浄水場配水池建設に伴う発掘調査一: 6-12.
12. 松下孝幸, 1997b: 福岡県犀川町古川平原古墳出土の古墳時代・近世人骨。古川平原古墳群(犀川町文化財調査報告書第5集): 82-98.
13. 松下孝幸, 1998a: 山口県豊北町堤道・道祖ノ本遺跡出土の近世人骨。堤道・道祖ノ本遺跡(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第15集): 37-59.
14. 松下孝幸, 1998b: 山口県阿知須町神正遺跡出土の近世人骨。赤迫遺跡B地区発掘調査報告(阿知須町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集): 116-122.
15. 松下孝幸, 1998c: 北九州市下津近世墓出土の火葬骨。下津近世墓一福岡県北九州市所在の下津近世墓の発掘調査報告書一: 9-11.
16. 松下孝幸, 1999a: 熊本県五木村頭地松本B遺跡出土の近世人骨。頭地松本B遺跡(2)(熊本県文化財調査報告第173集): 83-97.
17. 松下孝幸, 1999b: 熊本県唐津郡錦町蔵城遺跡出土の近世人骨。蔵城遺跡(熊本県文化財調査報告第172集): 96-123.
18. 松下孝幸, 1999c: 北九州市常盤橋西勢瀨り跡出土の近世・近代人骨。常盤橋西勢瀨り跡(北九州市埋蔵文化財調査報告書第229集): 付論1-12.
19. 松下孝幸, 2000: 愛媛県今治市矢田平山近世墓出土の近世人骨。阿方春岡遺跡・阿方牛ノ江遺跡・矢田八反坪遺跡・矢田大出口遺跡・矢田平山近世墓・矢田平山古墳・矢田平山遺跡(一般国道196号今治北道路埋蔵文化財調査報告書)(埋蔵文化財発掘調査報告書第88集): 271-318.
20. 松下孝幸, 2001: シェレコウベが語る, 日本人のルーツと未来, 長崎新聞社(長崎新聞社新書)。
21. 松下孝幸, 2002: 北九州市京町遺跡第3地点出土の近世人骨。北九州市京町遺跡第3地点(北九州市生住寺境内発掘調査報告): 99-140.
22. 松下孝幸, 2003: 上清水遺跡VII区出土の近世人骨。上清水遺跡VII区(北九州市埋蔵文化財調査報告書第290集): 53-66.
23. 松下孝幸, 2004a: 北九州市中貫ミカシキ遺跡出土の近世人骨。中貫ミカシキ遺跡(5a区の調査)(北九州市埋蔵文化財調査報告書第321集): 126-132.
24. 松下孝幸, 2004b: 「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』: 444-454. 朝倉書店
25. 松下孝幸, 北九州市間善寺跡出土の近世人骨。(投稿中)
26. 中橋孝博, 1987: 福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨。人類誌, 95: 89-106.
27. 鈴木尚, 1963: 日本人の骨。岩波書店, 東京。

Tab.2 出土人骨一覧
Table 2. List of skeletons

人骨番号	性別	年齢	埋葬施設	備考(身長値など)
7ST001	不明	壮年	箱棺	
7ST002	不明	不明	箱棺	
7ST003	不明	小児	箱棺	歯・骨片
7ST004	不明	不明	箱棺	黄
7ST008	不明	不明	箱棺	骨片
7ST009	男性	熟年	箱棺	
7ST014	—	小児	箱棺	
7ST015	女性	不明	箱棺	
7ST016	不明	不明	箱棺	歯・骨片
7ST018	男性	不明	箱棺	
7ST019	不明	不明	箱棺	
7ST027	不明	不明	箱棺	
7ST030	不明	不明		火葬骨(古代)
7ST037	不明	不明	箱棺	骨片
7ST053	不明	不明	桶棺	歯
7ST061	不明	不明	箱棺	骨片
7ST062	—	幼児	箱棺	
7ST064	男性	壮年	箱棺	
7ST066	女性	小児	箱棺	
7ST067	女性	壮年	不明	
7ST083	不明	不明	桶棺	骨片
7ST089	不明	不明	箱棺	歯
7ST092	男性	不明	桶棺	
7ST093	男性	不明	桶棺	
7ST301	男性	壮年	箱棺	
7ST303	不明	不明	箱棺	
7ST306	男性	壮年	桶棺	
7ST313	不明	不明	桶棺	下顎のみ
7ST317	不明	不明	桶棺	骨片
7ST328	不明	不明	箱棺	歯
7ST356	不明	不明	桶棺	骨片
7ST388	不明	不明	箱棺	骨片
7ST394	不明	不明	箱棺	骨片
7ST508	男性	熟年	箱棺	
7ST513	不明	不明	箱棺	骨片
7ST521	不明	不明	箱棺	歯
7ST523	女性	老年	甕棺	147.42cm(楕骨・右)
7ST622	不明	不明	甕棺	
7ST623	男性	熟年	桶棺	
7ST666	—	幼児	甕棺	2歳前後
7ST708	男性	熟年	甕棺	158.95cm
7ST709	女性	熟年	桶棺	
7ST711b	不明	不明	甕棺	頭蓋片
7ST712	女性	老年	甕棺	148.50cm、第12胸椎と第1腰椎が癒合
7ST719a	—	小児	甕棺	9~10歳
7ST722	男性	壮年	箱棺	
7ST724	女性	不明	甕棺	150.26cm
7ST727	不明	熟年	—	
7ST761	男性	不明	不明	
7ST806	女性	壮年	—	
7ST808	—	幼児	桶棺	
7ST812	—	乳児	甕棺	6ヶ月前後
7ST814	不明	不明	箱棺	
7ST828	不明	不明	箱棺	骨片
7ST861	不明	不明	—	骨片
7ST862	—	小児	桶棺	8歳
7ST899	男性	不明	箱棺	
7ST901	男性	不明	—	



頭蓋上面
Superior view of the Skull



頭蓋正面
Frontal view of the Skull



頭蓋側面
Lateral view of the Skull
日焼7ST623 (男性・熟年)
The Hiyake 7ST623, mature male



頭蓋上面
Superior view of the Skull



頭蓋正面
Frontal view of the Skull



頭蓋側面
Lateral view of the Skull
日焼7ST708 (男性・熟年)
The Hiyake 7ST708, mature male



頭蓋上面
Superior view of the Skull



頭蓋正面
Frontal view of the Skull



頭蓋側面
Lateral view of the Skull
日焼7ST523 (女性・老年)
The Hiyake 7ST523, senile female



頭蓋上面
Superior view of the Skull



頭蓋正面
Frontal view of the Skull



頭蓋側面
Lateral view of the Skull
日焼7ST712 (女性・老年)
The Hiyake 7ST712, senile female



頭蓋上面

Superior view of the Skull

日焼7ST306 (男性・壮年) The Hiyake 7ST306, young adult male



頭蓋正面

Frontal view of the Skull

日焼7ST009 (男性・熟年) The Hiyake 7ST009, mature male



上肢骨
Bones of the upper limb

日鏡7ST708 (男性・熟年)
The Hiyeke 7ST708, mature male



下肢骨
Bones of the lower limb



下肢骨

Bones of the lower limb

日縄7ST712 (女性・老年)
The Hiyake 7ST712, senile female



上肢骨

Bones of the upper limb

Tab.18 脳頭蓋 (男性, mm) (Calvaria)

		日焼	日焼	日焼	平均値			Min.	-	Max.	
		S-9	S-306	S-623	日焼	n	M				σ
1.	頭蓋最大長	188	184	182	190	4	186.00	3.65	182	-	190
8.	頭蓋最大幅	-	136	146	128	3	136.67		128	-	146
17.	バジオン・プレグマ高	140	-	139	140	3	139.67		139	-	140
8/1	頭蓋長幅示数	-	73.91	80.22	67.37	3	73.83		67.37	-	80.22
17/1	頭蓋長高示数	74.47	-	76.37	73.68	3	74.84		73.68	-	76.37
17/8	頭蓋幅高示数	-	-	95.21	109.38	2	102.29		95.21	-	109.38
14+17/3	頭蓋モズルス	-	-	155.67	152.67	2	154.17		152.67	-	155.67
5.	頭蓋底長	99	-	99	103	3	100.33		99	-	103
9.	最小前頭幅	-	95	-	100	2	97.50		95	-	100
10.	最大前頭幅	-	-	125	113	2	119.00		113	-	125
11.	両耳幅	-	123	135	123	3	127.00		123	-	135
12.	最大後頭幅	-	-	110	105	2	107.50		105	-	110
13.	乳突幅	-	-	104	-	1	104				
7.	大後頭孔長	33	-	37	38	3	36.00		33	-	38
16.	大後頭孔幅	26	-	33	31	3	30.00		26	-	33
16/7	大後頭示数	78.79	-	89.19	81.58	3	83.19		78.79	-	89.19
23.	頭蓋水平周	-	520	-	525	2	522.50		520	-	525
24.	横径長	-	305	325	314	3	314.67		305	-	325
25.	正中矢状弧長	-	380	381	394	3	385.00		380	-	394
26.	正中矢状前頭弧長	-	121	127	136	3	128.00		121	-	136
27.	正中矢状頂頭弧長	-	140	110	-	2	125.00		110	-	140
28.	正中矢状後頭弧長	-	119	144	-	2	131.50		119	-	144
29.	正中矢状前頭弦長	-	109	111	116	3	112.00		109	-	116
30.	正中矢状頂頭弦長	-	123	101	-	2	112.00		101	-	123
31.	正中矢状後頭弦長	-	99	118	-	2	108.50		99	-	118
29/26	矢状前頭示数	-	90.08	87.40	85.29	3	87.59		85.29	-	90.08
30/27	矢状頭頂示数	-	87.86	91.82	-	2	89.84		87.86	-	91.82
31/28	矢状後頭示数	-	83.19	81.94	-	2	82.57		81.94	-	83.19

Tab.19 脳頭蓋 (女性, mm) (Calvaria)

		日焼	日焼	平均値			Min.	-	Max.
		S-523	S-712	n	M	σ			
1.	頭蓋最大長	179	180	2	179.50	179	-	180	
8.	頭蓋最大幅	137	131	2	134.00	131	-	137	
17.	バジオン・プレグマ高	130	136	2	133.00	130	-	136	
8/1	頭蓋長幅示数	76.54	72.78	2	74.66	72.78	-	76.54	
17/1	頭蓋長高示数	72.63	75.56	2	74.09	72.63	-	75.56	
17/8	頭蓋幅高示数	94.89	103.82	2	99.35	94.89	-	103.82	
14+17/3	頭蓋モズルス	148.67	149.00	2	148.83	148.67	-	149.00	
5.	頭蓋底長	95	104	2	99.50	95	-	104	
9.	最小前頭幅	92	98	2	94.00	92	-	98	
10.	最大前頭幅	107	111	2	109.00	107	-	111	
11.	両耳幅	122	121	2	121.50	121	-	122	
12.	最大後頭幅	105	110	2	107.50	105	-	110	
13.	乳突幅	97	101	2	99.00	97	-	101	
7.	大後頭孔長	36	31	2	33.50	31	-	36	
16.	大後頭孔幅	30	29	2	29.50	29	-	30	
16/7	大後頭示数	83.33	93.55	2	88.44	83.33	-	93.55	
23.	頭蓋水平周	508	508	2	508.00	508	-	508	
24.	横径長	303	303	2	303.00	303	-	303	
25.	正中矢状弧長	375	375	2	375.00	375	-	375	
26.	正中矢状前頭弧長	-	126	1	126.00				
27.	正中矢状頂頭弧長	-	131	1	131.00				
28.	正中矢状後頭弧長	-	118	1	118.00				
29.	正中矢状前頭弦長	-	111	1	111.00				
30.	正中矢状頂頭弦長	-	116	1	116.00				
31.	正中矢状後頭弦長	-	100	1	100.00				
29/26	矢状前頭示数	-	88.10	1	88.10				
30/27	矢状頭頂示数	-	88.55	1	88.55				
31/28	矢状後頭示数	-	84.75	1	84.75				

Tab.20 顔面頭蓋 (男性, mm, 度) (Facial skeleton)

		日焼	日焼	日焼	日焼	平均値		Min.	-	Max.
		S-9	S-306	S-623	S-708	n	M			
40.	顔長	99	-	94	99	3	97.33	94	-	99
41.	側顔長	-	-	72	76	2	74.00	72	-	76
42.	下顔長	-	-	-	-	-	-	-	-	-
43.	上顔幅	-	111	-	105	2	108.00	105	-	111
45.	頬骨弓幅	-	-	[142]	136	2	[139.00]	136	-	142
46.	中顔幅	-	-	98	99	2	98.50	98	-	99
47.	顔高	113	-	114	-	2	113.50	113	-	114
48.	上顔高	61	-	(63)	63	3	(62.33)	61	-	(63)
47/45	顔示数(K)	-	-	[80.28]	-	1	[80.28]	-	-	-
48/45	上顔示数(K)	-	-	[44.37]	46.32	2	[45.35]	44.37	-	46.32
47/46	顔示数(V)	-	-	116.33	-	1	116.33	-	-	-
48/46	上顔示数(V)	-	-	(64.29)	63.64	2	(63.96)	63.64	-	64.29
40+45+47/3	顔面モズルス	-	-	[116.67]	-	1	[116.67]	-	-	-
50.	前眼窩間幅	21	18	-	17	3	18.67	17	-	21
44.	両眼窩幅	-	-	-	99	1	99	-	-	-
50/44	眼窩間示数	-	-	-	17.17	1	17.17	-	-	-
51.	眼窩幅(右)	-	-	-	45	1	45	-	-	-
	(左)	-	46	-	44	2	45.00	44	-	46
52.	眼窩高(右)	-	-	-	37	1	37	-	-	-
	(左)	-	34	35	36	3	35.00	34	-	36
52/51	眼窩示数(右)	-	-	-	82.22	1	82.22	-	-	-
	(左)	-	73.91	-	81.82	2	77.87	73.91	-	81.82
54.	鼻幅	26	-	29	27	3	27.33	26	-	29
55.	鼻高	49	-	47	50	3	48.67	47	-	50
54/55	鼻示数	53.06	-	61.70	54.00	3	56.25	53.06	-	61.70
55(1).	梨状口高	28	-	-	31	2	29.50	28	-	31
56.	鼻骨長	21	-	-	20	2	20.50	20	-	21
57.	鼻骨最小幅	13	10	-	7	3	10.00	7	-	13
57(1).	鼻骨最大幅	-	-	-	20	1	20.00	-	-	-
60.	上顎齒槽長	56	-	-	50	2	53.00	50	-	56
61.	上顎齒槽幅	67	-	67	59	3	64.33	59	-	67
62.	口蓋長	47	-	-	-	1	47	-	-	-
63.	口蓋幅	38	-	39	-	2	38.50	38	-	39
64.	口蓋高	14	-	13	-	2	13.50	13	-	14
61/60	上顎齒槽示数	119.64	-	-	118.00	2	118.82	118.00	-	119.64
63/62	口蓋示数	80.85	-	-	-	1	80.85	-	-	-
64/63	口蓋高示数	36.84	-	33.33	-	2	35.09	33.33	-	36.84
72.	全側面角	86	-	90	80	3	85.33	80	-	90
73.	鼻側面角	90	-	94	84	3	89.33	84	-	94
74.	齒槽側面角	73	-	69	68	3	70.00	68	-	73

Tab.21 顔面頭蓋 (女性, mm, 度) (Facial skeleton)

		日焼	日焼	平均値		Min.	-	Max.
		S-523	S-712	n	M			
40.	顔長	98	-	1	98			
41.	側顔長	70	73	2	71.50	70	-	73
42.	下顔長	103	-	1	103			
43.	上顔幅	101	108	2	104.50	101	-	108
45.	頬骨弓幅	[126]	133	2	[129.50]	126	-	133
46.	中顔幅	95	105	2	100.00	95	-	105
47.	顔高	118	-	1	118			
48.	上顔高	66	66	2	66.00	66	-	66
47/45	顔示数(K)	[93.65]	-	1	[93.65]			
48/45	上顔示数(K)	[52.38]	49.62	2	[51.00]	49.62	-	52.38
47/46	顔示数(V)	124.21	-	1	124.21			
48/46	上顔示数(V)	69.47	62.86	2	66.16	62.86	-	69.47
40+45+47/3	顔面モズルス	[114.00]	-	1	[114.00]			
50.	前眼窩間幅	14	18	2	16.00	14	-	18
44.	両眼窩幅	93	101	2	97.00	93	-	101
50/44	眼窩間示数	15.05	17.82	2	16.44	15.05	-	17.82
51.	眼窩幅(右)	43	43	2	43.00	43	-	43
	(左)	42	45	2	43.50	42	-	45
52.	眼窩高(右)	33	34	2	33.50	33	-	34
	(左)	35	34	2	34.50	34	-	35
52/51	眼窩示数(右)	76.45	79.07	2	77.91	76.74	-	79.07
	(左)	83.33	75.56	2	79.44	75.56	-	83.33
54.	鼻幅	-	28	1	28			
55.	鼻高	49	52	2	50.50	49	-	52
54/55	鼻示数	-	53.85	1	53.85			
55(1).	梨状口高	-	28	1	28			
58.	鼻骨長	-	26	1	26			
57.	鼻骨最小幅	6	8	2	7.00	6	-	8
57(1).	鼻骨最大幅	-	19	1	19			
60.	上顎前槽長	-	-	-	-			
61.	上顎前槽幅	-	56	1	56			
62.	口蓋長	-	-	-	-			
63.	口蓋幅	-	-	-	-			
64.	口蓋高	-	-	-	-			
61/60	上顎前槽示数	-	-	-	-			
63/62	口蓋示数	-	-	-	-			
64/63	口蓋高示数	-	-	-	-			
72.	全側面角	78	90	2	84.00	78	-	90
73.	鼻側面角	82	93	2	87.50	82	-	83
74.	歯槽側面角	63	78	2	70.50	63	-	78

Tab.22 鼻根部 (男性, mm, 度) (Nasal root)

	日焼 S-9	日焼 S-306	日焼 S-708	平均值		Min.	-	Max.	
				n	M				
50.	前眼窩間幅	21	18	17	3	18.67	17	-	21
50A.	鼻根横弧長	22	22	20	3	21.33	20	-	22
50/50A	鼻根彎曲示數	95.45	81.82	85.00	3	87.42	81.82	-	95.45
57.	鼻骨最小幅	13	10	7	3	10.00	7	-	13
44.	两眼窩幅	-	-	99	1	99			
50/44	眼窩間示數	-	-	17.17	1	17.17			
a.	前頭突起上幅(右)	9	-	10	2	9.50	9	-	10
	(左)	10	7	10	3	9.00	7	-	10
b.	前頭突起水平傾斜角	122	-	88	2	105.00	88	-	122
c.	G-N投影距離	3	-	3	2	3.00	3	-	3
d.	鼻根角	-	-	143	1	143			
e.	G-R距離	-	-	26	1	26.00			
f.	垂線高	-	-	4	1	4.00			
f/e	鼻根陷凹示數	-	-	15.38	1	15.38			
77.	鼻頰骨角	-	145	150	2	147.50	145	-	150
Fa	fmo間距離	-	101	97	2	99.00	97	-	101
Fh	垂線高	-	16	13	2	14.50	13	-	16
Fh/Fa	顔面扁平示數	-	15.84	13.40	2	14.62	13.40	-	15.84

Tab.23 鼻根部 (女性, mm, 度) (Nasal root)

	日焼 S-523	日焼 S-712	平均值		Min.	-	Max.	
			n	M				
50.	前眼窩間幅	14	18	2	16.00	14	-	18
50A.	鼻根横弧長	16	20	2	18.00	16	-	20
50/50A	鼻根彎曲示數	87.50	90.00	2	88.75	87.50	-	90.00
57.	鼻骨最小幅	6	8	2	7.00	6	-	8
44.	两眼窩幅	93	101	2	97.00	93	-	101
50/44	眼窩間示數	15.05	17.82	2	16.44	15.05	-	17.82
a.	前頭突起上幅(右)	10	9	2	9.50	9	-	10
	(左)	9	7	2	8.00	7	-	9
b.	前頭突起水平傾斜角	97	106	2	101.50	97	-	106
c.	G-N投影距離	2	2	2	2.00	2	-	2
d.	鼻根角	-	141	1	141			
e.	G-R距離	-	33	1	33			
f.	垂線高	-	5	1	5			
f/e	鼻根陷凹示數	-	15.15	1	15.15			
77.	鼻頰骨角	155	150	2	152.50	150	-	155
Fa	fmo間距離	93	99	2	96.00	93	-	99
Fh	垂線高	11	13	2	12.00	11	-	13
Fh/Fa	顔面扁平示數	11.83	13.13	2	12.48	11.83	-	13.13

Tab.24 下顎骨 (mm, 度) (Mandibula)

		日燒遺跡					日燒遺跡				
		男性					女性				
		n	M	σ	Min.	- Max.	n	M	Min.	- Max.	
65.	下顎關節突起幅	1	129				1	131			
65(1).	下顎筋突起幅	1	107				1	102			
66.	下顎角幅	1	93			2	94.00	92	-	96	
67.	前下顎幅	3	46.67		42 - 50	2	44.00	44	-	44	
68.	下顎長	1	70			1	66				
68(1).	下顎長	2	105.00		104 - 106	1	102				
69.	オトガイ高	1	31			1	36				
69(1).	下顎体高(右)	1	32			1	29				
	(左)	1	31			1	30				
69(2).	下顎体高(右)	2	27.50		27 - 28		-				
	(左)	1	25				-				
70.	枝高(右)	1	54			2	53.00	53	-	53	
	(左)	3	56.33		54 - 58	1	55				
70(1).	前枝高(右)	1	63			2	59.00	58	-	60	
	(左)	3	64.00		63 - 65	1	61				
70(2).	最小枝高(右)	1	47			2	47.00	47	-	47	
	(左)	3	47.00		45 - 48	1	47				
70(3).	下顎切痕高(右)	1	15			2	12.50	12	-	13	
	(左)	4	15.25	0.96	14 - 16	1	14				
71(1).	下顎切痕幅(右)	1	40			2	37.00	34	-	40	
	(左)	4	38.25	1.26	37 - 40	1	41				
71.	枝幅(右)	1	33			2	32.50	30	-	35	
	(左)	3	32.67		31 - 34	1	34				
71a.	最小枝幅(右)	1	32			2	31.50	29	-	34	
	(左)	3	32.67		31 - 34	1	34				
79.	下顎枝角(右)	1	127			2	129.50	127	-	132	
	(左)	3	130.33		128 - 132	1	130				
66/65	下顎幅示数	1	72.09			1	73.28				
68/65	幅長示数	1	54.26			1	50.38				
68(1)/65	幅長示数	1	80.62			1	77.86				
69(2)/69	下顎高示数(右)	1	87.10				-				
	(左)	1	80.62				-				
71/70	下顎枝示数(右)	1	61.11			2	61.32	56.60	-	66.04	
	(左)	3	58.10		53.45 - 62.96	1	61.82				
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	1	68.09			2	67.02	61.70	-	72.34	
	(左)	3	69.58		64.58 - 73.33	1	72.34				
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	1	37.50			2	34.12	30.00	-	38.24	
	(左)	4	39.96	3.66	35.00 - 43.24	1	34.15				

Tab.25 肩甲骨 (mm) (Scapula)

		日焼遺跡		日焼遺跡				
		男 性		女 性				
		n	M	n	M	Min.	Max.	
12.	關節窩長(右)	1	36	2	34.50	34	-	35
	(左)	1	37		-			
13.	關節窩幅(右)	1	29	2	26.00	25	-	27
	(左)	1	29		-			
14.	關節窩深(右)	1	6	2	5.00	4	-	6
	(左)	1	6		-			
13/12	關節窩長幅示数(右)	1	80.56	2	75.42	71.43	-	79.41
	(左)	1	78.38		-			
14/12	關節窩彎曲示数(右)	1	16.67	2	14.45	11.76	-	17.14
	(左)	1	16.22		-			

Tab.26 鎖骨 (mm) (Clavicula)

		日焼遺跡				日焼遺跡					
		男 性				女 性					
		n	M	Min.	Max.	n	M	Min.	Max.		
1.	鎖骨最大長(右)	1	153			1	120				
	(左)	1	156			1	123				
2a	骨体彎曲高(右)	1	37			3	28.33	26	-	30	
	(左)	1	33			1	27				
2(1)	肩峰端彎曲高(右)	1	31			1	29				
	(左)	1	30			1	30				
4.	中央垂直徑(右)	3	11.00	10	-	13	9.33	9	-	10	
	(左)	3	11.00	10	-	12	9.00	9	-	9	
5.	中央矢狀徑(右)	3	13.33	12	-	15	3	11.67	11	-	12
	(左)	3	12.67	11	-	15	2	11.50	11	-	12
6.	中央周(右)	3	40.00	38	-	44	3	35.33	35	-	36
	(左)	3	38.67	34	-	43	2	33.50	32	-	35
6/1	長厚示数(右)	1	24.84			1	29.17				
	(左)	1	21.79			1	26.02				
2a/1	彎曲示数(右)	1	24.18			1	24.17				
	(左)	1	21.15			1	21.95				
4/5	鎖骨断面示数(右)	3	82.31	76.92	-	86.67	3	80.30	75.00	-	90.91
	(左)	3	87.53	80.00	-	91.67	2	78.41	75.00	-	81.82
2(1)/1	肩峰端彎曲示数(右)	1	20.26			1	24.17				
	(左)	1	19.23			1	24.39				

Tab.27 上腕骨 (mm) (Humerus)

	n	日焼遺跡			日焼遺跡					
		男性			女性					
		M	Min.	-	Max.	n	M	Min.	-	Max.
1. 上腕骨最大長(右)	1	301				1	277			
(左)	1	300				2	(271.00)	(270)	-	272
2. 上腕骨全長(右)	1	295				1	272			
(左)	1	295				2	268.00	267	-	269
3. 上端幅(右)	1	50				1	43			
(左)	1	48				1	43			
3(1). 横上径(右)	1	52				1	43			
(左)	1	52				2	44.50	41	-	48
4. 下端幅(右)	1	60				2	54.00	52	-	56
(左)	1	61				1	57			
5. 中央最大径(右)	3	23.67	22	-	25	3	22.00	22	-	22
(左)	2	23.50	23	-	24	2	23.00	21	-	25
6. 中央最小径(右)	2	18.00	18	-	18	3	17.00	16	-	18
(左)	2	18.50	18	-	19	2	17.50	17	-	18
7. 骨体最小周(右)	3	64.00	60	-	67	3	59.00	58	-	60
(左)	2	66.00	65	-	67	2	61.00	59	-	63
7(a). 中央周(右)	2	67.50	65	-	70	3	64.00	63	-	66
(左)	2	70.00	70	-	70	2	65.50	62	-	69
8. 頭周(右)	1	133				1	127			
(左)	1	135				2	121.00	121	-	121
9. 頭最大横径(右)	1	43				1	39			
(左)	1	43				2	38.00	38	-	38
10. 頭最大矢状径(右)	1	45				1	41			
(左)	1	44				2	39.50	39	-	40
11. 滑車幅(右)	1	22				2	21.00	21	-	21
(左)	1	22				1	21			
12. 小頭幅(右)	1	15				2	15.50	15	-	16
(左)	1	17				1	14			
12(a). 滑車幅および小頭幅(右)	1	43				1	41			
(左)	1	44				1	41			
13. 滑車深(右)	1	25				2	24.50	24	-	25
(左)	1	26				1	24			
14. 肘頭高幅(右)	1	25				3	24.67	24	-	25
(左)	1	26				1	23			
15. 肘頭窩深(右)	1	13				3	12.33	11	-	14
(左)	1	14				1	11			
6/5 骨体断面示数(右)	2	76.91	72.00	-	81.82	3	77.27	72.73	-	81.82
(左)	2	78.80	75.00	-	82.61	2	76.48	72.00	-	80.95
7/1 長厚示数(右)	1	21.59				1	20.94			
(左)	1	21.67				2	(22.51)	21.69	-	(23.33)

Tab.28 橈骨 (mm) (Radius)

		日燒遺跡					日燒遺跡					
		男 性					女 性					
		n	M	σ	Min.	-	Max.	n	M	Min.	-	Max.
1.	最大長(右)		-				2	201.50	198	-	205	
	(左)	1	224				1	203				
1b.	平行長(右)		-				1	204				
	(左)	1	223				1	201				
2.	機能長(右)		-				2	188.00	182	-	194	
	(左)	1	213				1	192				
3.	最小周(右)	3	43.00		42	-	45	3	40.00	40	-	40
	(左)	1	43					2	39.00	37	-	41
4.	骨體橫徑(右)	4	18.00	0.82	17	-	19	3	17.33	16	-	19
	(左)	1	17					3	17.33	16	-	19
4a.	骨體中央橫徑(右)	4	18.75	0.96	16	-	18	3	16.33	15	-	18
	(左)	1	15					3	17.00	15	-	19
4(1).	小頭橫徑(右)		-					1	20			
	(左)	1	21					1	20			
4(2).	頸橫徑(右)	1	12					3	12.67	12	-	14
	(左)	1	13					3	12.00	11	-	13
5.	骨體矢狀徑(右)	4	12.75	1.26	11	-	14	3	11.00	10	-	12
	(左)	1	13					3	11.00	10	-	12
5a.	骨體中央矢狀徑(右)	4	12.75	0.50	12	-	13	3	11.33	10	-	12
	(左)	1	13					3	11.00	10	-	12
5(1).	小頭矢狀徑(右)		-					1	19			
	(左)	1	23					1	20			
5(2).	頸矢狀徑(右)	1	13					3	13.33	11	-	15
	(左)	1	14					3	13.33	12	-	15
5(3).	小頭周(右)		-					1	62			
	(左)	1	71					1	64			
5(4).	頸周(右)	1	42					3	42.00	37	-	45
	(左)	1	42					3	40.33	39	-	43
5(5).	骨體中央周(右)	4	47.25	2.63	45	-	50	3	44.33	43	-	47
	(左)	1	44					3	45.00	43	-	49
5(6).	骨下端幅(右)		-					1	30			
	(左)		-					1	30			
3/2	長厚示數(右)		-					2	21.30	20.62	-	21.98
	(左)	1	20.19					1	19.27			
5/4	骨體斷面示數(右)	4	71.09	9.11	57.89	-	77.78	3	64.11	52.63	-	75.00
	(左)	1	78.47					3	63.91	57.89	-	75.00
5a/4a	中央斷面示數(右)	4	78.24	3.78	72.22	-	81.25	3	70.19	55.56	-	80.00
	(左)	1	86.67					3	65.57	57.89	-	80.00

Tab.29 尺骨 (mm) (Ulna)

		日燒遺跡					日燒遺跡					
		男 性					女 性					
		n	M	σ	Min.	— Max	n	M	Min.	— Max.		
1.	最大長(右)		—				2	217.50	212	—	223	
	(左)		—				2	217.00	213	—	221	
2.	機能長(右)	1	213				2	190.00	183	—	197	
	(左)	1	212				2	190.00	186	—	194	
2(1).	肘頭尺骨頭長(右)	1	238				2	214.00	209	—	219	
	(左)	1	238				3	221.67	209	—	240	
3.	最小周(右)		—				3	34.33	34	—	35	
	(左)		—				3	34.00	33	—	36	
6.	肘頭幅(右)	1	24				1	25				
	(左)	1	25				2	24.00	23	—	25	
6(1).	上幅(右)	1	32				2	32.50	32	—	33	
	(左)	1	33				1	34				
7.	肘頭深(右)		—				2	26.00	23	—	29	
	(左)	1	25				2	23.50	22	—	25	
8.	肘頭高(右)	1	22				3	19.00	19	—	19	
	(左)	1	21				3	19.00	18	—	20	
11.	尺骨矢狀徑(右)	4	13.50	0.58	13	—	14	3	11.00	11	—	11
	(左)	1	12				3	11.00	11	—	11	
12.	尺骨橫徑(右)	4	18.25	1.26	17	—	20	3	16.00	15	—	17
	(左)	1	16				3	15.67	15	—	16	
S	中央最小徑(右)	4	13.00	0.82	12	—	14	3	10.67	10	—	11
	(左)	1	11				3	10.67	10	—	11	
L	中央最大徑(右)	4	18.50	1.29	17	—	20	3	16.00	15	—	17
	(左)	1	17				3	15.67	15	—	16	
C	中央周(右)	4	49.50	4.36	44	—	53	3	45.67	43	—	47
	(左)	1	47				3	45.33	43	—	47	
3/2	長厚示數(右)		—				2	17.92	17.26	—	18.58	
	(左)		—				2	18.18	17.01	—	19.35	
11/12	骨體断面示數(右)	4	74.26	6.20	65.00	—	77.78	3	68.93	64.71	—	73.33
	(左)	1	75				3	70.28	68.75	—	73.33	
S/L	中央断面示數(右)	4	70.45	5.40	65.00	—	77.78	3	66.97	58.82	—	73.33
	(左)	1	64.71				3	68.19	62.50	—	73.33	

Tab.30 大腿骨 (mm) (Femur)

	日烧遺跡 男 性						日烧遺跡 女 性					
	n	M	σ	Min.	-	Max	n	M	σ	Min.	-	Max.
1. 最大長(右)	1	413					2	393.50		389	-	398
(左)	1	422					2	398.00		392	-	404
2. 自然位全長(右)	1	412					2	389.50		383	-	396
(左)	1	420					2	394.00		387	-	401
3. 最大軀子長(右)	1	404					1	380				
(左)	1	405					2	392.50		387	-	398
4. 自然位軀子長(右)	1	396					1	367				
(左)	1	398					2	380.00		374	-	388
6. 骨体中央矢状径(右)	2	28.50		28	-	29	4	25.25	1.26	24	-	27
(左)	4	29.00	1.41	28	-	31	3	24.67		24	-	25
7. 骨体中央横径(右)	2	27.50		25	-	30	4	25.00	1.41	24	-	27
(左)	5	28.20	1.92	25	-	30	3	25.67		25	-	28
8. 骨体中央周(右)	2	87.50		83	-	92	4	78.50	4.04	75	-	84
(左)	4	89.75	2.87	86	-	93	3	78.87		77	-	80
9. 骨体上横径(右)	4	31.50	3.51	28	-	35	4	31.00	2.58	28	-	34
(左)	5	31.00	2.35	27	-	33	4	31.00	2.00	30	-	34
10. 骨体上矢状径(右)	4	26.75	0.50	26	-	27	4	23.00	0.82	22	-	24
(左)	5	25.20	1.10	24	-	27	4	21.75	1.89	19	-	23
15. 頸垂直径(右)	1	32					2	27.00		27	-	27
(左)	1	32					2	29.50		29	-	30
16. 頸矢状径(右)	1	24					2	22.00		22	-	22
(左)	1	23					2	22.00		22	-	22
17. 頸周(右)	1	94					2	82.50		82	-	83
(左)	1	94					2	86.50		86	-	87
18. 頭垂直径(右)	1	46					2	41.00		41	-	41
(左)	1	45					2	41.50		41	-	42
19. 頭横径(右)	1	45					2	41.50		41	-	42
(左)	1	44					2	41.00		40	-	42
20. 頭周(右)	1	145					2	133.50		132	-	135
(左)	1	144					2	132.50		130	-	135
21. 上顆幅(右)		-						-				
(左)		-					1	75				
8/2 長厚示数(右)	1	22.33					2	19.77		19.58	-	19.95
(左)	1	21.43					2	20.19		19.70	-	20.67
6/7 骨体中央断面示数(右)	2	104.33		96.67	-	112.00	4	101.04	2.08	100.00	-	104.17
(左)	4	104.15	10.93	93.33	-	116.00	3	96.10		96.00	-	96.15
10/9 上骨体断面示数(右)	4	85.66	9.01	77.14	-	96.43	4	74.64	7.77	67.65	-	85.71
(左)	5	81.71	7.76	75.00	-	92.59	4	70.25	5.92	63.33	-	76.67

Tab.31 脛骨 (mm) (Tibia)

		日燒遺跡				日燒遺跡				
		男 性				女 性				
		n	M	Min.	Max.	n	M	σ	Min.	Max.
1.	脛骨全長(右)	1	324			2	319.50		309	- 330
	(左)	1	326			2	321.00		312	- 330
1a.	脛骨最大長(右)	1	331			2	326.50		317	- 336
	(左)	1	335			2	327.50		320	- 335
1b.	脛骨長(右)	1	319			2	316.50		308	- 325
	(左)	1	319			2	317.00		309	- 325
2.	顆距間距離(右)	1	303			2	303.00		293	- 313
	(左)	1	306			2	303.00		284	- 312
3.	最大上端幅(右)	1	78			1	69			
	(左)	1	78			2	70.00		70	- 70
3a.	上內關節面幅(右)	1	33			1	29			
	(左)	1	30			2	29.00		29	- 29
3b.	上外關節面幅(右)	1	32			1	29			
	(左)	1	33			2	27.50		26	- 29
4a.	上內關節面深(右)	1	47			1	44			
	(左)	1	50			2	40.00		35	- 45
4b.	上外關節面深(右)	1	39			1	38			
	(左)	1	38			2	39.00		36	- 42
6.	最大下端幅(右)	1	55			3	50.33		48	- 52
	(左)	1	53			2	46.00		46	- 46
7.	下端矢狀徑(右)	1	35			2	33.00		32	- 34
	(左)	1	35			1	34			
8.	中央最大徑(右)	1	31			4	27.75	2.63	25	- 30
	(左)	2	30.50	29	- 32	3	27.33		23	- 31
8a.	榮養孔位最大徑(右)	1	36			3	32.33		30	- 35
	(左)	2	37.00	36	- 38	2	34.50		33	- 36
9.	中央橫徑(右)	1	23			4	19.50	0.58	19	- 20
	(左)	2	23.00	22	- 24	3	19.67		19	- 20
9a.	榮養孔位橫徑(右)	1	24			3	21.33		21	- 22
	(左)	2	25.00	25	- 25	2	20.50		20	- 21
10.	骨體周(右)	1	84			4	74.00	4.08	70	- 78
	(左)	2	84.00	82	- 86	3	74.00		69	- 79
10a.	榮養孔位周(右)	1	96			3	85.67		82	- 92
	(左)	2	99.00	98	- 100	2	87.00		84	- 90
10b.	最小周(右)	1	77			4	67.50		65	- 70
	(左)	2	78.50	76	- 77	3	67.00	2.38	66	- 69
9/8.	中央断面示數(右)	1	74.19			4	70.90		63.33	- 80.00
	(左)	2	75.75	68.75	- 82.76	3	73.23	8.82	61.29	- 86.96
9a/8a	榮養孔位断面示數(右)	1	66.67			3	66.25		60.00	- 70.00
	(左)	2	67.62	65.79	- 69.44	2	59.60		55.56	- 63.64
10b/1	長厚示數(右)	1	23.77			2	20.97		20.91	- 21.04
	(左)	1	23.62			2	21.03		20.91	- 21.15

Tab.32 腓骨 (mm) (Fibula)

		日燒遺跡		日燒遺跡				
		男 性		女 性				
		n	M	n	M	Min.	-	Max.
1.	最大長(右)	1	325	2	321.00	312	-	330
	(左)	1	329	2	320.00	310	-	330
2.	中央最大徑(右)	1	17	2	14.00	13	-	15
	(左)	1	16	2	14.00	13	-	15
3.	中央最小徑(右)	1	10	2	9.00	8	-	10
	(左)	1	11	2	8.50	8	-	9
4.	中央周(右)	1	46	2	37.50	35	-	40
	(左)	1	45	2	39.00	37	-	41
4a.	最小周(右)	1	38	2	33.00	32	-	34
	(左)	1	35	2	31.50	30	-	33
4b.	頸橫徑(右)	1	14	2	9.00	8	-	10
	(左)	1	13	2	8.50	8	-	9
4c.	頸矢狀徑(右)	1	11	2	11.50	11	-	12
	(左)	1	10	2	10.50	9	-	12
4(1).	上端幅(右)	1	26	2	24.00	24	-	24
	(左)		-	2	22.50	21	-	24
4(1a).	上端矢狀幅(右)	1	28	2	24.50	24	-	25
	(左)		-	2	24.00	23	-	25
4(2).	下端幅(右)	1	19	1	19			
	(左)	1	20	1	20			
4(2a).	下端矢狀幅(右)	1	27	1	24			
	(左)	1	27	1	24			
3/2	中央断面示數(右)	1	58.82	2	64.10	61.54	-	66.67
	(左)	1	68.75	2	60.77	60.00	-	61.54
4a/1	長厚示數(右)	1	11.69	2	10.28	10.26	-	10.30
	(左)	1	10.64	2	9.84	9.68	-	10.00

Tab.33 膝蓋骨 (mm) (Patella)

		日燒遺跡		日燒遺跡				
		男 性		女 性				
		n	M	n	M	Min.	-	Max.
1.	最大高(右)	1	40	1	38			
	(左)	1	42	1	38			
2.	最大幅(右)	1	46	2	42.50	42	-	43
	(左)	1	47	3	42.00	41	-	43
3.	最大厚(右)	1	19	3	18.67	18	-	19
	(左)	1	19	3	19.33	18	-	20
4.	關節面高(右)	1	31	2	28.00	26	-	30
	(左)	1	31	2	30.00	28	-	32
5.	內關節面幅(右)	1	24	3	20.67	20	-	22
	(左)	1	23	3	20.00	19	-	21
6.	外關節面幅(右)	1	26	3	24.67	24	-	26
	(左)	1	29	3	26.00	26	-	27
1/2	膝蓋骨高幅示數(右)	1	86.96	1	88.37			
	(左)	1	89.36	1	90.48			

Tab.34 推定身長値 (cm) (Stature)

		日焼	日焼	日焼	日焼	日焼遺跡					
		S-708	S-523	S-712	S-724	女性					
		男性	女性	女性	女性	n	M	Min.	-	Max.	
Pearsonの式	上腕骨(右)	157.75	-	147.76	-	1	147.76				
	(左)	157.46	(145.83)	146.38	-	2	(146.11)	(145.83)	-	146.38	
	橈骨(右)	-	147.42	149.76	-	2	148.59	147.42	-	149.76	
	(左)	159.20	-	149.09	-	1	149.09				
	大腿骨(右)	158.95	-	148.50	150.26	2	149.38	148.50	-	150.26	
	(左)	160.64	-	149.09	151.42	2	150.26	149.09	-	151.42	
	脛骨(右)	155.65	-	147.45	152.39	2	149.92	147.45	-	152.39	
	(左)	156.12	-	148.16	152.39	2	150.27	148.16	-	152.39	
	藤井の式	上腕骨(右)	157.22	-	147.23	-	1	147.23			
		(左)	157.81	(145.97)	146.47	-	2	(146.22)	(145.97)	-	146.47
橈骨(右)		-	145.91	147.10	-	2	146.00	144.91	-	147.10	
(左)		157.32	-	147.09	-	1	147.09				
大腿骨(右)		156.91	-	148.18	150.20	2	149.19	148.18	-	150.20	
(左)		159.06	-	149.18	151.97	2	150.58	149.18	-	151.97	
脛骨(右)		154.03	-	147.61	151.79	2	149.70	147.61	-	151.79	
(左)		154.48	-	148.63	152.14	2	150.39	148.63	-	152.14	

Tab.35 最大長の比

		日焼遺跡		日焼遺跡				
		男性		女性				
		n	M	n	M	Min.	-	Max.
橈骨/上腕骨	(右)	-	-	1	74.01			
	(左)	1	74.67	1	74.63			
橈骨/尺骨	(右)	-	-	2	92.66	91.93	-	93.40
	(左)	-	-	1	91.86			
橈骨/大腿骨	(右)	-	-	1	52.70			
	(左)	1	53.08	1	51.79			
橈骨/脛骨	(右)	-	-	1	64.67			
	(左)	1	66.87	1	63.44			
上腕骨/大腿骨	(右)	1	72.88	1	71.21			
	(左)	1	71.09	1	69.39			
上腕/脛骨	(右)	1	90.94	1	87.38			
	(左)	1	89.55	1	85.00			
脛骨/大腿骨	(右)	1	80.15	2	82.96	81.49	-	84.42
	(左)	1	79.38	2	82.28	81.63	-	82.92
腓骨/脛骨	(右)	1	98.19	2	98.42	98.21	-	98.42
	(左)	1	98.21	2	97.69	96.88	-	98.51
鎖骨/上腕骨	(右)	1	50.83	1	43.32			
	(左)	1	52.00	1	45.22			
上肢骨/下肢骨	(右)	-	-	1	68.27			
	(左)	1	69.22	1	66.71			

Tab.36 中央周の比

		日焼遺跡				日焼遺跡				
		男 性				女 性				
		n	M	Min.	Max.	n	M	σ	Min.	Max.
桡骨/尺骨	(右)	3	96.67	84.91	111.36	3	97.43		91.49	109.30
	(左)	1	93.62			2	102.72		91.49	113.95
橈骨/上腕骨	(右)	2	66.76	64.29	69.23	2	69.73		68.25	71.21
	(左)	1	62.86			2	70.18		69.35	71.01
鎖骨/上腕骨	(右)	1	54.29			2	55.05		54.55	55.56
	(左)	2	55.00	48.57	61.43	2	51.17		50.72	51.61
上腕骨/大腿骨	(右)	2	77.20	76.09	78.31	2	85.42		84.00	86.84
	(左)	2	76.52	75.27	77.78	3	82.29		77.50	89.61
上腕骨/脛骨	(右)	1	83.33			2	91.48		90.00	92.96
	(左)	2	83.38	81.40	85.37	3	87.84		79.75	100.00
脛骨/大腿骨	(右)	1	91.30			4	94.29	3.07	91.67	98.73
	(左)	2	91.86	88.17	95.56	3	94.04		89.61	100.00
腓骨/脛骨	(右)	1	54.76			2	50.64		50.00	51.28
	(左)	1	52.33			2	50.95		50.00	51.90

Tab.37 形態小変異 (Non-metric crania variants)

	日焼		日焼		日焼		日焼		日焼		日焼			
	S-9		S-306		S-623		S-708		S-623		S-712		S-724	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
1. Medial palatine canal	-	/	/	/	/	/	-	/	/	-	/	/	-	/
2. Pterygospinous foramen	-	-	/	/	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/
3. Hypoglossal canal bridging	-	+	/	/	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/
4. Clinoid bridging	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
5. Condylar canal absent	-	/	/	/	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/
6. Tympanic dehiscence, Foramen of Huschke(>1mm)	+	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	/
7. Jugular foramen bridging	-	-	/	/	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/
8. Precondylar tubercle	-	-	/	/	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/
9. Supra-orbital foramen (incl. frontal foramen)	/	/	+	-	/	/	-	-	-	-	+	+	-	/
10. Accessory infraorbital foramen	-	-	/	/	+	-	-	-	/	/	-	-	-	/
11. Zygo-facial foramen absent	/	/	/	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	/
12. Auril exostosis	-	/	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/
13. Metopism	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/
14. Os incae	/	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/
15. Ossicle at the lambda	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	/
16. Parietal notch bone	/	/	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	/
17. Transverse zygomatic suture(>5mm)	/	/	/	/	/	/	-	-	-	-	+	-	-	/
18. Asterionic ossicle	/	/	+	-	/	-	+	-	-	-	-	-	-	/
19. Occipitomastoid ossicle	-	/	/	/	/	-	-	-	+	+	-	-	-	/
20. Epipterice ossicle	/	/	/	/	/	-	/	/	-	-	-	-	-	/
21. Frontotemporal articulation	/	/	/	/	/	-	-	-	-	-	-	-	-	/
22. Blastericonic suture(>10mm)	-	/	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/
23. Mylohyoid bridging	-	/	/	/	-	-	-	-	-	-	-	-	-	/
24. Accessory mental foramen	-	-	/	/	-	-	-	-	-	-	+	-	-	/
25. Mandibular torus	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	/
26. 滑車上孔	/	/	/	/	/	-	-	-	-	-	-	-	-	/

Tab.38 上腕骨 (mm) (Humerus)

		日 焼
		S-812
		6ヶ月
1.	骨体最大長(右)	-
	(左)	-
2.	骨体中央最大径(右)	-
	(左)	8
3.	骨体中央最小径(右)	-
	(左)	6
4.	骨体中央周(右)	-
	(左)	24
5.	骨体上端幅(右)	-
	(左)	-
6.	骨体下端幅(右)	-
	(左)	20
7.	骨体最小周(右)	-
	(左)	23
3/2	骨体中央断面示数(右)	-
	(左)	75.00
7/1	長厚示数(右)	-
	(左)	-

Tab.39 大腿骨 (mm) (Femur)

		日 焼	日 焼
		S-812	S-666
		6ヶ月	2歳
1.	骨体最大長(右)	-	-
	(左)	-	-
2.	骨体中央横径(右)	8	-
	(左)	-	11
3.	骨体中央矢状径(右)	7	-
	(左)	-	10
4.	骨体中央周(右)	25	-
	(左)	-	36
5.	骨体上横径(右)	-	13
	(左)	-	-
6.	骨体上矢状径(右)	-	13
	(左)	-	-
7.	骨体上端幅(右)	-	-
	(左)	-	-
8.	骨体下端幅(右)	-	-
	(左)	-	-
4/1	長厚示数(右)	-	-
	(左)	-	-
3/2	骨体中央断面示数(右)	87.50	-
	(左)	-	90.91
6/5	上骨体断面示数(右)	-	100.00
	(左)	-	-

Tab.40 脛骨 (mm) (Tibia)

	日 燒	日 燒
	S-666	S-862
	2歲	8歲
1. 骨體最大長(右)	-	-
(左)	-	-
2. 骨體中央橫徑(右)	10	16
(左)	-	-
3. 骨體中央最大徑(右)	11	19
(左)	-	-
4. 骨體中央周(右)	35	57
(左)	-	-
5. 骨體上端幅(右)	-	-
(左)	-	-
6. 骨體下端幅(右)	-	-
(左)	-	-
7. 骨體最小周(右)	-	-
(左)	-	-
7/1 長厚示數(右)	-	-
(左)	-	-
2/3 骨體中央断面示數(右)	90.91	84.21
(左)	-	-

近世期における葬送儀礼—筑紫地区周辺の様相—

倫理蔵文化財サポートシステム
秀嶋 龍男

(1) 葬送儀礼

1 魂呼び

人が死期を迎え臨終となると、枕元に集まった近親者や親族が亡くなった人の名を呼ぶ。これを「魂呼び」と言い、烏の羽や綿に水を含ませ唇を湿らせてやる「末期の水」・「死水」なども魂呼びの一種である。また、白米を少し炊いて口に含ませることもあったという。

2 死後の処置

息を引き取ると死者のまふたや口を閉じ、耳や鼻に綿をつめ、手を合掌させて北枕に寝かせる。この時、体を清めるための「湯灌」を先に行うこともあった。その後掛け布団の上に故人の好んでいた、あるいは、一番上等の着物を上下逆さに着せかけ、顔に白布を被せて胸の上に魔除けとしての刃物を置く。枕元に逆さに屏風を立てることもあり、経枕を置いて炊いた一合飯を山盛りにつき、一本箸を立てた枕飯（マクラメシ）やお茶湯（オチャトウ・オサユ）、一本ロウソク、一本線香、一本花を飾る。49個の枕団子（マクラダゴ）を供えることもあった。その後、僧侶を呼んで枕経を上げてもらう。

神棚には不浄除けの白い紙を貼って目隠しとし、忌明けまでそのまましておく。また戸口には忌中・喪中の紙が貼られた。

3 死の通知

死者がでると門内（カドウチ）・組内（クミウチ）の世話人に報告し、そこから村中に知らされる。親戚や知人の家へ知らせる時は、組内から男性二人が連れ立って行く。これを「シラセ」・「トウライツゲ」・「トウライ」・「タヨリ」などと呼び、使いに行く人を「ツゲヒト」（告げ人）という。この使いは基本的には男性であるが、手が足りない時は女性が行くこともあった。

4 葬式組

村落共同体であった組内の人々が葬儀の準備いっさいを引き受け、世話人や長老が采配を振るい各自の役割分担を決めた。寺行き（僧侶への連絡）、トウライ（知らせ）、棺さし（棺の準備）、野道具作り（アオヤ・モトダイ・龍頭などの野辺送りの道具づくり）、ドトリ（土取り・墓穴掘り）、マカナイカタ（ヨトギやオトキの準備）などを指図した。

5 通夜

オツーヤ、ヨトギ（夜御）という。枕経の後、身内の者で一晩中線香の煙りやロウソクの灯りを絶やさないようにして、最後の夜を一緒に過ごした。お悔やみに来た弔問客には茶菓子で接待し、親しい人とはヨトギの夜食や酒と一緒に食することもあった。この間組内の人達は、翌日の葬式の段取りを決めたり、お斎の準備などを話したり手配したりする。

6 湯灌

通夜の客が帰った後、家族の者で行く。畳をあげ床板にムシロやゴザを敷きタライを据える。その中に水を入れて次に湯を入れる。このことを逆水（サカミズ）・敷水（シキミズ）と呼ぶ。タライの中に男はアグラ、女は正座させ座らせて、柄杓で湯をかけながら身体を洗う。身体を洗った後、女の人は髪を切り化粧（死化粧・シニゲショウ）がされ、男の人はヒゲや髪を剃り、「オコゾリ」（お髪剃り）と呼ばれている。

7 死葬束

湯灌後、死葬束を着せる。晒一友で経帷子・手甲・脚絆・腰巻き・裨・三角布・頭陀袋を作って死者に着せる。経帷子は左前に着せ、紐は縦結び、帯はカラ結びにして手甲・脚絆は左右反対に付ける。足袋の小鉤（コハセ）ははずし、頭に三角布を付け、首に六道銭を入れた頭陀袋を下げ、手に数珠を掛けてやる。

8 納棺

棺は木製の箱棺や桶棺、陶製の甕棺があり、時代やその家の経済状況によって異なっていた。膝を曲げ

て屈葬姿勢で納棺する時は、帯や紐で緊縛して入れ、棺内にハナ柴、茶殻、ワラ、古着など結め遺体を安置させた。切った髪や剃ったヒゲは、紙に包んで一緒に納棺する。また、生前愛用した品や好物も一緒に入れてやる。

9 お斎

オトキヤオヒジと呼ばれ、野辺送りの前に死者を送る最後の別れの食事である。お斎の内容は精進料理であり、酒は冷酒で別れの盃とする。出された料理は一口でも食べなければならぬものとされ、余ったご飯はおにぎりを作って近所の子供達に食べさせたという。箸は竹の箸で、使用後は川に流すものとされていた。

出棺

最後の別れをした後、喪主から血縁の濃い順に棺蓋の釘打ちをする。これを「石打ち」といい、用いた石を釘打ち石という。方形棺や襖棺の外側には、顔の向いている方向に赤い紙（念仏紙）や錦の布ぎれを貼り正面を取り違えないようにした。

棺を担ぐ時は、左ないの繩を楯に巻き付け、孟宗竹の荷ない棒を2本通し、4人で担ぐ。棺台を使う場合もあり、台に棺を固定し同じ楯に担ぐ。担がれた棺は左回りに3回か3回半回され、そのまま座敷から土間・入り口と出てゆく。その時故人の使っていた茶碗が割られ、座敷と庭内が掃き清められる。

野辺送り

野辺だし、野辺だちともいって、納棺された死者を葬列をつくって埋葬地まで送ることである。葬列の順序は必ずしも一定していないが、大体次のような順序であった。

ワラ松明であるモトグイを持った人を先頭に旗幟、龍頭、シカバナ、天蓋などの装具を持つ人々、次に僧侶、位牌を持つ喪主、ぜん網を引く近親者、アコヤに飾られた棺、最後に会葬者が続く。

墓までの道筋には、角々に六箇所（六道）と呼ばれるローソク立てや灯明台が立っていた。埋葬地への道順は決まっている所もあれば、決まっていない所もあったが、神社や鳥居・祠のある前は通らないようにしていた。

埋葬

葬列が墓地に近づくのとドリさん（墓穴掘りの人）が、松葉や木を煙ぶらかしその炎と煙で迎え火とした。僧侶の説経がすむと棺の四方に繩をかけ、墓穴の底に降ろした。担いできた孟宗竹を穴の真中に息抜き竹（通し竹）として一本立てる場合もあり、近親者が順に一握りあるいは一銀づつ土をかけた。最後に土取りの人が完全に埋め戻し、その上に方形台状のいわゆる土まんじゅうを盛り上げる。埋め戻す際には、野道具などは一緒に穴の中に入れることもあった。また、モトグイやシカバナは、そこで燃やされた。盛土の上に野位牌を置き、上からアコヤが被せられた。アコヤや息抜き竹をしない時は、四角の木製墓標が建てられる。盛土の前には野机が置かれ、線香立てや野辺送りダゴ・お茶・花が供えられた。

埋葬から家へ戻ると、水で手を洗い、身体に塩をかけて浄めをした。また葬式に使った道具も川や池で洗い、塩で浄めた。埋葬の翌日は身内の者は、水や線香を持って「墓直し」（灰よせ）へ行き、盛土を整えた後お参りをする。

墓地

親族一統で墓所を持ったり、各家で持つこともある。村で共有しているものは、村墓と呼ばれている。その中で一族は同じ場所に墓を寄せ、さらに各家で墓を営んでいる。

墓地は家や村近くの山や田・畠に営まれるのが普通であったが、屋敷墓として家の敷地内に造ることもあった。シゲ（地元）以外の他所からの移住者（ヨソモノ）や行倒れ人・異常死の人などは、村墓以外の地に墓所が築かれることが多い。

墓

墓は墓地内で一定の規制のもとにその埋葬場所が決められ、墓壙（墓穴）が掘られた。

墓壙は時代や棺の種類によってその平面形は変わるが、長方形（隅丸長方形含む）・方形（隅丸方形含む）・円形（楕円形含む）に分けられる。深さも4尺から6尺（120cm～180cm）が多いが、中には8尺から10尺（2.4m～3m）掘られるものもあった。特に伝染病などで死んだ人は深く埋葬されることが多い。

棺も長方形木棺・方形木棺・円形棺・襖棺・籠棺などがあり、その大きさもバリエーションがある。長方形・方形木棺・箱棺は桶屋や指物師が作っていたが、地方の村では村内の人が作ったりもした。円形木

棺（桶棺）は出職の桶職人に作ってもらったり、町の桶屋で調達され、購入する棺は、その材質や厚さによって値段に差があるため、その家の経済状況によって決められた。また棺専用としての箱棺だけでなく、長持ちや物入れの箱、その他木製の箱が棺として代用されることもあり、円形木棺も桶棺だけでなく、半切桶や小桶、樽などが代用されたりもした。甕棺はハンズ（半胴）甕と呼ばれる肥前大甕の掲軸のかかった甕が一般的に使われたが、日常生活雑器の甕が使われることもある。甕の蓋は木製であるが、円形以外にも多角形の蓋が使われることもあり、その上に重しとして石を置く場合もあった。古道跡では籠棺と考えられるものが検出されており、当時は臨機応変に棺の代用品が使用されたものと思われる。

盛土は棺が埋葬された後の残った土で積み上げられるが、その形状は土まんじゅうと称されているが、円形ではなく方形台状（截頭四角錐体）である。盛土の表面は、形を整える目的と盛土が流失しにくいよう叩き締められている。盛土中央には息抜き竹が立てられることもあるが、アコヤが被せられたり、木製墓標が建てられる。何もしない時は、単に野面石が置かれる。木製墓標は杉か檜の白木づくりで、三寸角・四寸角があり、盛土を積み上げる時に一緒に建て込む場合と後から盛土を掘り込んで建てる時がある。正面に成名、側・背面に俗名や没年月日が書かれている。盛土正面には、木箱や碗に灰や砂を入れた線香立てや水を入れた湯呑や小杯が置かれ、両脇に竹筒の一方を斜めに切り落とした花立てが立てられる。卒塔婆は墓標の後ろに立てたり、単に立て掛けられたりした。木製墓標やアコヤはその後朽ちるので、一年忌・三年忌などに石製墓標に建て替えられることもある。

(2) 葬送儀礼の装具・風習の名称

ここでは主に臨終から埋葬時までの装具・風習について扱う。

【装具】

阿小屋（アコヤ）	…もとは盛土に被せる霊屋としてだけのものであったが、野辺送りの葬列時に棺覆いを使用されるようになった。底の抜けた家形の棺覆いである。
息抜き竹（イキヌキダケ）	…通し竹ともいう。棺担ぎに使用した竹や龍頭の竹を節を抜いて盛土に差し込んだもの。
棺かき縄（カンカキナワ）	…ワラ打ちしていないワラを左ないで作り、棺蓋や棺と棺台を固定するための縄。
経机（キョウソクエ）	…死者の枕元に置く、枕飯や線香・ろうソクなどを供えた小机。
香箱（コウバコ）	…墓前に置く、線香立てや水を入れた碗を入れる箱。
逆棒（サカボウ）	…棺を担ぐ棒のことで、根元（太い方）が前で先の細い方が後になる。
三夜袋（サンヤブクロ）	…六道銭などを入れる頭陀袋の別名。
死花（シカ）	…紙華とも書く。シカバナのことで地域・宗派によって形・つくりが異なる装具。
死花花（シカバナ）	…四華花とも書く。半紙に刻目を入れ、木や竹に挟んだり巻いたりした飾り装具のことで、地域や宗派によって形・つくりが異なる。
死葬束（シニショウソク）	…死者に着せる経帷子・手甲・脚絆・裨・腰巻きなど、白ザラシー反で作られた衣裳のこと。
頭陀袋（ズダブクロ）	…三夜袋ともいう。納棺の際、首にかけてやる六道銭や愛用の品を入れた袋のこと。
砂止め（スナドメ）	…墓標周辺の盛土が崩れず、また雨水の跳ね返りで汚れないように墓標の根元に置く木枠のこと。
蛇口（ジャノクチ）	…龍頭の別名で、野辺送りの葬列時に使われる龍を形どった装具。
善綱（ゼンツナ）	…縁の綱・銭の綱ともいう。棺や棺台の前に取り付けられた白ザラシー反で作られた引き綱のことで、近視者がそれを引く。
葬式箸（ソウシキバシ）	…真竹を削って作り、オトキの時に使用する。後で燃やしたり川に流す。
龍頭（タツガシラ）	…リュウ・リョウとも呼ぶ。地域によって呼び名は異なり、野辺送りの葬列時に使われる龍を形どった装具のこと。

魂石 (タマシイシ)	…釘打ち石ともいう。棺の蓋を釘付けする時に使った石で、墓に置いてくることもある。
天蓋 (テンガイ)	…阿小屋や輿の上にかざしていく、カサ形の飾り装具のこと。
野位牌 (ノイハイ)	…墓地に置く位牌で、盛土上に置かれ上から阿子屋が被せられた。
野机 (ノツクエ)	…墓の前に置く小さな白木の机で、供膳物が置かれる。
野面石 (ノズライシ)	…盛土に置く墓標代わりの石のこと。あるいは墓標を建てる際の目印とするための石。
野道具 (ノドウグ)	…阿小屋・天蓋・龍頭などの野辺送りに使う装具のこと。
幟旗 (ノボリバタ)	…野辺送りの葬列に立てていく、家名や家紋、故人名が書かれたノボリのこと。
鏡飯 (ニョウバツ)	…ジャンバラン・ジャバラ・ジャンガラともいう。葬列の際に打ち鳴らす楽器のこと。
もと台 (モトダイ)	…稲ワラを束ねて作り、芯に松葉や線香を差すこともあり、野辺送りの先頭にたち煙ふらせていくワラ松明のこと。
六道 (ロクロウ)	…青竹を一節残し半載して作るロウソク立て。墓穴の周り、葬列の道筋の角々に立てておく。竹を割って半紙を挟んだものを立てる所もある。
〔風習〕	
上法事 (アゲホウジ)	…四十九日の忌み明け法事のこと。また、五十回忌の法要もアゲホウジという。
稲屋加勢 (イナヤカセイ)	…葬儀に使う諸道具を作る手伝いのこと。
炒り物飯 (イリモンママ)	…大豆を炒ってご飯に炊き込んだもので、通夜の時に出される。
内部 (ウチブ)	…屋内で行う諸準備や詣り手伝うこと。
お浄め (オキヨメ)	…お清めともいう。葬家から家へ帰った際、入る前に水で手を洗い、身体に塩をふりかけ不浄を取り払うこと。
御髪剃り (オコゾリ)	…お頭剃り、オコウゾリともいう。湯灌の際、男性の顔と頭を剃ること。
お茶湯 (オチャトウ)	…枕元の経机に供える水・お茶のこと。
お斎き (オトキ)	…オヒジともいう。葬式の際、出棺前にする死者との別れの意味を持つ食事のこと。
御平 (オヒラ)	…ツヤやおトキに出されるナマモノを使わないお煮しめのこと。
形見分け (カタミワケ)	…初七日以降に故人の持物を身内・親族で分け、故人をいつまでも忘れないようにすること。
被り着物 (カブリギモン)	…カブセギモンともいう。死者を北枕に寝かせた後、故人の好んでいた着物を逆さに布団の上に着せかけること。
棺さし (カンサシ)	…お棺や野辺送りの装具一切を準備すること。
願戻し (ガンモドシ)	…故人が生前願をかけていたお宮や寺へ行って、願ときをすること。
北枕 (キタマクラ)	…遺体の頭部を北にして寝かせること。釈迦入滅の際の頭北面西にならった風習。
釘打ち (クギウチ)	…釘づけともいう。棺の蓋を小石あるいは木槌で釘を打ちつけて閉じること。
後家髪 (ゴケガミ)	…夫を亡くした婦人が、結っていた長い髪を切る風習。
米切り (コメキリ)	…キリマイともいう。供養米やお斎米を集めるのにカマスを担いで村中を廻ること。
逆さ湯 (サカサユ)	…湯灌の時にタライに水を先に入れ、後から湯をそそぐこと。
逆水 (サカミズ)	…サカサ湯と同じ意味。
敷米 (シキマイ)	…式米とも書く。お寺にお礼として納められるお米のことで、通常は俵米である。
敷水 (シキミズ)	…サカミズ・サカサ湯の別名。
死水 (シニミズ)	…末期の水ともいう。臨終の際、鳥の羽や綿に水を含ませ、唇や口元を湿らせてやること。
座禪豆 (ジャゼンマメ)	…通夜に出される大豆ご飯の炒った大豆のこと。

- 精進上げ(ショウジンアゲ)…精進揚げ・精進落とともいう。忌みの期間である四十九日が過ぎてナマモノ(ナマノクサケ)を用いた料理を飲食する風習。
- 膳ざらい(ゼンザライ)…葬式の翌日、オトキに使った膳道具に湯どおしをして、身内の女・手伝いの女性を招いてご馳走すること。
- 外部(ソトブ)…関係者への諸連絡や墓穴掘りなどの屋外での手伝いのこと。
- 魂呼び(タマシイヨバイ)…臨終の際、近親者が枕元に集まりその人の名を呼び、魂を呼び戻したいという願いからきた風習。
- 地取り(ジドリ)…墓穴を掘ること。掘る人をジドリサンという。
- 通夜(ツヤ)…オツヤ・ヨトキと呼ばれ、亡くなった当日の夜に親族が集まり、故人を偲び一晩中線香やロウソクの灯りを絶やさないようにすること。
- 寺行き(テラユキ)…檀那寺の僧侶への連絡と出迎え・荷物運びをすること。
- 道具流し(ドウグナカシ)…ドウグキヨメともいう。墓穴掘りや棺・野道具を作るのに使った道具を洗い、酒や塩をかけて清める風習。
- 到来(トウライ)…トレイ・シラセ・タヨリとも呼ばれ、故人の親類・知人に男性二人で知らせに行くこと。
- 斎米(トキマイ)…通夜の時、葬家へ持っていくお米のこと。
- 生臭気(ナマクサケ)…魚介・肉類などのナマモノのこと。
- 念仏米(ネンブツマイ)…キリマイともいう。葬式用に村内の各戸が出し合うお米のこと。
- 野辺送り(ノベオクリ)…僧侶・親族・会葬者達で、故人を入れた棺を墓地まで運ぶ風習のこと。
- 野辺団子(ノベダango)…野辺送りの際に墓地に供えるために持っていく団子のこと。
- 野辺出ち(ノベダチ)…ノベダシともいう。野辺送りのこと。
- 墓直し(ハカナオシ)…葬儀の翌日身内で墓地へ行き、盛土の形を整えたり、水や花・線香を供えお参りする風習。
- 忌明け(ヒアケ)…ヒアキともいう。死後四十九日か家族の忌明けとし、法事を取り行う。
- 忌明けの餅(ヒアケノモチ)…忌明けの日、米一升で作った寺へ納める49個の餅。
- 左柄杓(ヒダリビシヤク)…湯灌の際に柄杓を左手に持ち、逆手で湯水をかける風習。
- 外行き(ホカイキ)…関係者に諸連絡すること。
- 脂方(マカナイカタ)…ヨトキ(通夜)の諸準備や買物などすること。
- 枕経(マクラキョウ)…通夜の時、僧侶に上げてもらうお経のこと。
- 枕団子(マクラダango)…モドリダgoともいう。枕元の経机に供える白ダangoで、その数は地域によって異なる。
- 枕務め(マクラツトメ)…枕経の時、僧侶に続いて親族がお経を上げること。
- 枕直し(マクラナオシ)…死者を北枕に寝かせ直し、枕机など整えること。
- 枕飯(マクラメシ)…一膳飯(イチゼンメシ)ともいう。茶碗にご飯を山盛りにし、まん中に箸を1本立てて経机に供える。
- 末期の水(マツゴノミズ)…死に水ともいう。臨終の時、口元を湿らせてやること。
- 水掛け着物(ミズカケギモン)…亡くなった人の着物を北向きに竿に干し、三日から七日あるいは四十九日間、柄杓で水をかける風習。
- 山行き(ヤマイキ)…墓穴掘りのこと。掘る人をヤマイキサンという。
- 山弁当(ヤマベントウ)…ヤマイキサンに持たせる酒や食事のこと。
- 湯灌(ユカン)…亡くなった人を湯の入ったクワイや桶に入れ、全身を洗い清めてあげること。
- 夜伽(ヨトギ)…お通夜のこと、ヨトキとも呼ばれた。
- 夜伽米(ヨトギマイ)…トキマイともいう。通夜の時に葬家へ持っていく米のこと。

【参考文献】

- 太宰府市史編集委員会編 1993 『太宰府市史 民俗資料編』太宰府市
 太宰府市市史編集委員会編 1990 『太宰府の民俗』第1集 太宰府市

- | | | |
|--------------|------|-----------------------|
| 太宰府市市史編集委員会編 | 1992 | 『太宰府の民俗』 第2集 太宰府市 |
| 筑紫野市史編さん委員会編 | 1999 | 『筑紫野市史 民俗編』 筑紫野市 |
| 大野城市史編纂委員会編 | 1990 | 『大野城市史 民俗編』 大野城市 |
| 篠栗町文化財専門委員会編 | 1990 | 『篠栗町誌 民俗編』 篠栗町 |
| 志免町町史編纂委員会編 | 1988 | 『志免町誌』 志免町 |
| 筑穂町誌編集委員会編 | 2003 | 『筑穂町誌 下巻』 筑穂町 |
| 小郡市史編集委員会編 | 1998 | 『小郡市史』 第三巻通史編 小郡市 |
| 甘木市史編纂委員会編 | 1980 | 『甘木市史 下巻』 甘木市 |
| 佐々木 哲哉 | 1993 | 『福岡の民俗文化』 九州大学出版会 |
| 筑紫 豊 | 1973 | 『40 日本の民俗』 福岡 第一法規出版会 |

写真図版



1. 遺跡全景（東より）



2. 近世以降の墳墓検出状況（北より）



3. A群近世墓検出状況（南より）



4. A群近世墓完掘状況（南より）



5. 7ST001近世墓検出状況（東より）



6. 7ST001人骨出土状況（南より）



7. 7ST007a棺検出および隅金具出土状況（東より）



8. 7ST007a蜂番出土状況（東より）



9. 7ST009検出状況（東より）



10. 7ST009人骨出土状況（南より）



11. 7ST022炭化物検出状況（東より）



12. 7ST029検出状況（西より）



13. 7ST029棺内遺物出土状況（東より）



14. 7ST029棺内完掘状況（北より）



15. 7ST031棺内完掘状況（東より）



16. 7ST523棺内人骨出土状況（北より）



17. B群近世墓検出状況（東より）



18. B群近世墓完掘状況（東より）



19. 7ST709人骨出土状況（北より）



20. 7ST712人骨出土状況（東より）



21. 7ST722棺検出状況（北より）



22. 7ST722人骨出土状況（東より）



23. 7ST814人骨出土状況（東より）



24. 7ST899人骨出土状況（北より）



25. C群近世墓検出状況（南東より）



26. 7ST070検出状況（東より）



27. 7ST070墓壇検出状況（東より）



28. C群近世墓完掘状況（南東より）



29. 7ST070墓墳完掘状況（南より）



30. 7ST074検出状況（東より）



31. 7ST341検出状況（東より）



32. 7ST341棺内完掘状況（東より）



33. D群近世墓検出状況（西より）



34. 7ST083検出状況（東より）



35. 7ST083棺蓋検出状況（西より）



36. 7ST083木棺完掘状況（西より）



37. 7ST086竹籠棺検出状況（北東より）



38. D群近世墓完掘状況（北より）



39. 7ST092検出状況（南東より）



40. 7ST092人骨出土状況（南東より）



41. 7ST092棺内完掘状況（南より）



42. 7ST093竹籠棺および人骨出土状況（東より）



43. 7ST093竹籠棺検出状況（東より）



44. 7ST313竹籠棺残存状況（東より）



45. 7ST314棺内完掘状況（東より）



46. 7ST314棺内遺物出土状況（東より）



47. 7ST317棺内検出状況（東より）



48. 7ST356桶棺および桶蓋検出状況（東より）



49. E群近世墓検出状況（西より）



50. E群近世墓完掘状況（北より）



51. 7ST053検出状況（北東より）



52. 7ST053棺底および遺物出土状況（東より）



53. 7ST054検出状況（西より）



54. 7ST054棺内完掘状況（北より）



55. 7ST220遺物出土状況（西より）



56. 7ST220漆製品および鉄製鈴車出土状況（南東より）



57. 7ST220完掘状況（南西より）



58. 7ST606,7SF608調査区壁土層（北より）



59. 7ST606棺内漆製品および土師器出土状況(南より)



60. 7ST606完掘状況(南より)



61. 7ST606棺内漆製品および土師器出土状況(近景)(南より)



62. 7SX602・609完掘状況(北より)



63. 7SX602柱痕検出状況(南より)



64. 7SX609柱痕検出状況(南より)



65. 7SF608検出状況（南西より）



66. 7SF608発掘状況（北より）



67. 7ST807八稜鏡出土状況（西より）



68. 7ST807完掘状況（西より）



69. 7ST030検出状況（東より）



70. 7ST030完掘状況（東より）



71. 7ST253検出状況（南より）



72. 7ST253遺物および炭化物出土状況（東より）



73. 7ST253遺物および炭化物出土状況（南より）



74. 7ST253完掘状況（南より）



75. C地区遺構検出状況（西より）



76. C地区遺構完掘状況（西より）



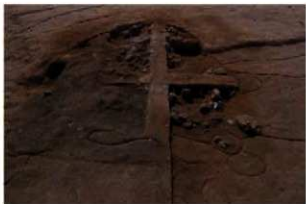
77. 7SX105遺物出土状況（東より）



78. 7SX105床面検出状況（東より）



79. 7SX105床面修復痕検出状況近影 (東より)



80. 7SK110遺物出土状況 (東より)



81. 7SK110土層断面 (南より)



82. 7SD188,189完掘状況 (西より)



83. 7SX200土層断面 (東より)



84. 7SK200,205土層断面 (南より)



85. 7SK210検出状況 (東より)



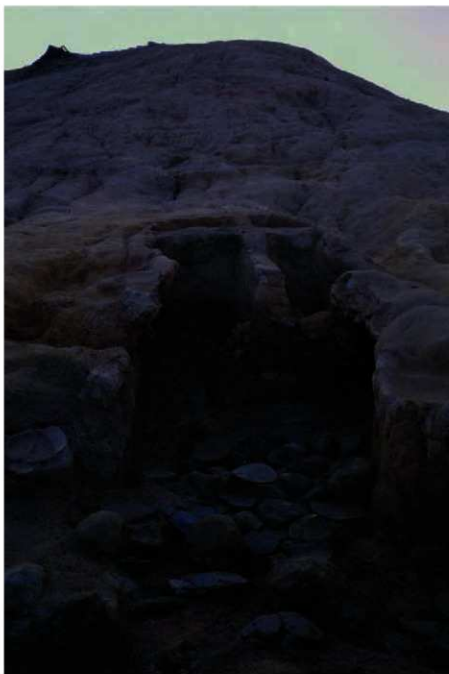
86. 7SK210完掘状況 (東より)



87. 7SX200遺物出土状況（東より）



88. 7SX200発掘状況（東より）



89. 7SX200遺物出土状況（東より）



90. 7SX065完掘状況（南より）



91. 7SX730完掘状況（北より）



92. 7SX065, 730, 735, 740検出状況（北より）



93. 7SX740土層断面（北より）



94. 7SX740完掘状況（東より）



95. 7SX780土層断面 (南より)



96. 7SX780完掘状況 (南より)



97. 7SX785検出状況 (東より)



98. 7SX785土層断面 (東より)



99. 7SX785床面および土坑検出状況 (東より)



100. 7SX785完掘状況 (東より)



101. 7SK746土層断面 (西より)



102. 7SK746鉄滓・炉壁出土状況 (西より)



103. 7SK746炉跡検出状況（南より）



104. 7SK746完掘状況（西より）



105. 7SK868土層断面（東より）



106. 7SK868完掘状況（東より）



107. 7SD115検出状況（北西より）



108. 7SD115検出状況（北西より）



109. 7SD115トレンチ2土層断面（東より）



110. 7SD115河床面検出状況（南より）



111. 7SA744完掘状況（東より）



112. 7SK184検出状況（北西より）



113. 7SK184土層断面（北西より）



114. 7SK184遺物出土状況（東より）



115. 7SK634遺物出土状況（西より）



116. 7ST001・006・008・018・023・024・027・028出土遺物



117. 7ST029・031出土遺物

118. 7ST034出土遺物



119. 7ST517・704・828出土遺物



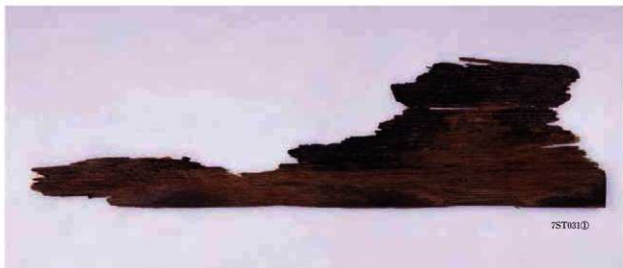
120. 7ST004 · 016 · 018 · 029 · 328 · 394 · 517 · 523 · 704出土金属製品



121. 7ST007出土金属製品



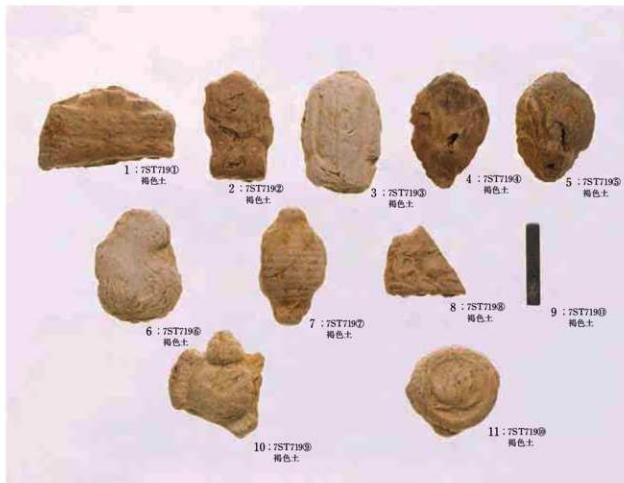
122. 7ST523出土木製品



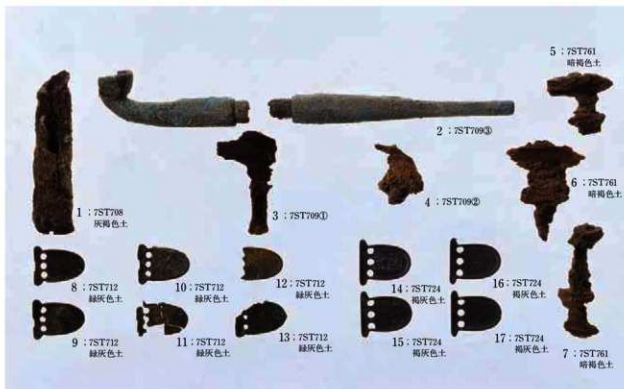
123. 7ST031出土木製品



124. 7ST064・303・622・666・711・7SK898・7ST899出土遺物



125. 7ST719出土遺物



126. 7ST708・709・712・724・761出土金屬製品



127. 7ST712出土木製品



128. 7ST712出土木製品



129. 7ST072・074・075・077出土遺物



130. 7ST384出土金属製品



131. 7ST048・086・088・089・092・094出土遺物



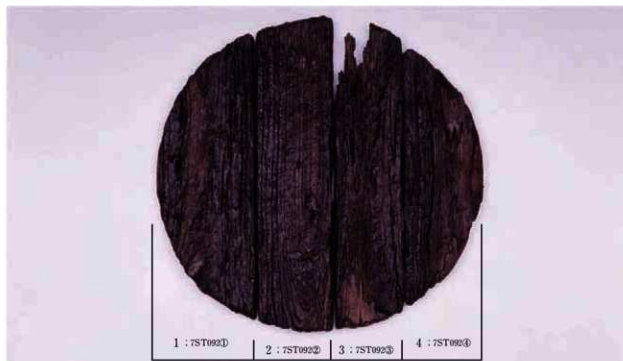
132. 7ST096・317・888出土遺物



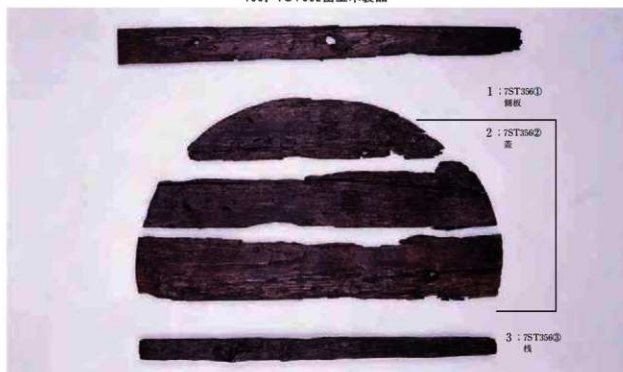
133. 7ST042・047・094・096出土金属製品



134. 7ST087出土遺物



135. 7ST092出土木製品



136. 7ST356出土木製品



137. 7ST057出土遺物



138. A群出土玉類(1~84:7ST004 暗灰茶色土, 85~86:7ST006 暗灰茶色土, 87~102:7ST016 暗灰茶色土, 103~105:7ST027 暗灰茶色土, 106~202:7ST029 暗灰茶色土, 203~221:7ST832 暗灰茶色土)



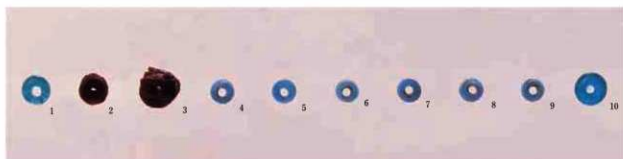
139. B群出土玉類(1:7ST061 明赤褐色土, 2~8:7ST066 にぶい黄褐色土, 9~17:7ST067 にぶい黄褐色土, 18~126:7ST303 にぶい黄褐色土, 127~130:7ST623 褐色土, 131~178:7ST708 灰褐色土, 179・180:7ST709 灰褐色土, 181~188:7ST814 褐色土)



140. C群出土玉類



141. D群出土玉類 (1~5: 7ST083 灰黄褐色土, 6~147: 7ST086 暗黑色土, 148~156: 7ST087 灰色土, 157~174: 7ST088 黄灰色土, 175~234: 7ST089 黄灰色土, 235~236: 7ST093 黄灰色土, 237: 7ST888 暗灰黄色土)



142. E群出土玉類 (1~3: 7ST053 褐灰色土, 4~9: 7ST054 白灰色土, 10: 7ST057 暗灰茶色土)



表 7ST009暗灰茶色土 裏

143. 7ST009出土遺物 錢貨



表 7ST009暗灰茶色土 裏

144. 7ST009出土遺物 錢貨



表 7ST014暗灰茶色土 裏

145. 7ST014出土遺物 錢貨

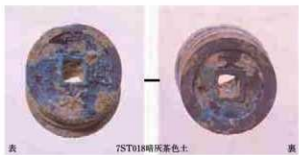


表 7ST018暗灰茶色土 裏

146. 7ST018出土遺物 錢貨

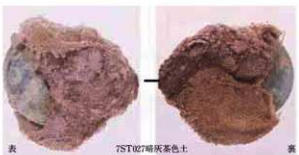


表 7ST027暗灰茶色土 裏

147. 7ST027出土遺物 錢貨

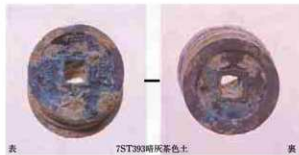


表 7ST393暗灰茶色土 裏

148. 7ST393出土遺物 錢貨



表 7ST061明赤褐色土 裏

149. 7ST061出土遺物 錢貨



表 7ST061明赤褐色土 裏

150. 7ST061出土遺物 錢貨



表 7ST714D 裏

151. 7ST714出土遺物 錢貨

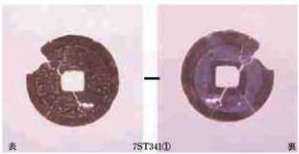


表 7ST341D 裏

152. 7ST341出土遺物 錢貨

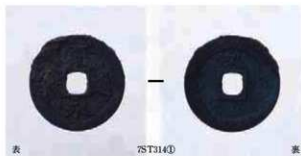


表 7ST314D 裏

153. 7ST314出土遺物 錢貨



表 7ST317D 裏

154. 7ST317出土遺物 錢貨



表 7ST054D灰色土 裏

155. 7ST054出土遺物 錢貨

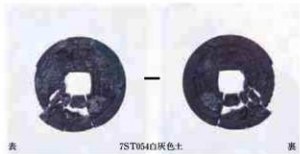


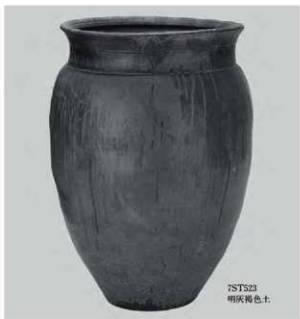
表 7ST054D灰色土 裏

156. 7ST054出土遺物 錢貨



7ST622
暗黒赤褐色土

159. 7ST622出土遺物



7ST523
明灰褐色土

157. 7ST523出土遺物



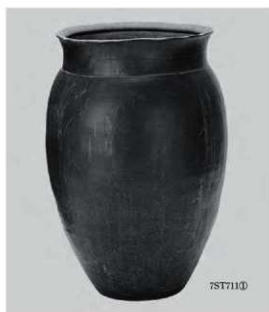
158. 7ST523出土遺物 (拡大) 7ST523
明灰褐色土



160. 7ST666出土遺物



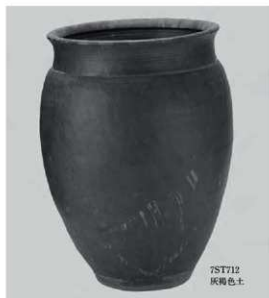
161. 7ST708出土遺物



162. 7ST711出土遺物



163. 7ST711出土遺物 (拡大) 7ST711D



164. 7ST712出土遺物



165. 7ST712出土遺物 (拡大) 7ST712 灰褐色土



166. 7ST714出土遺物



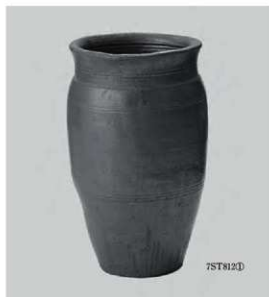
167. 7ST719出土遺物



168. 7ST723出土遺物



169. 7ST724出土遺物



170. 7ST812出土遺物



171. 7ST054出土遺物



正面 7ST001 側面

172. 7ST001出土石製墓標



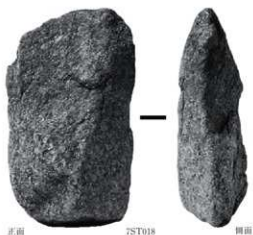
正面 7ST011 側面

173. 7ST011出土石製墓標



正面 7ST014 側面

174. 7ST014出土石製墓標



正面 7ST018 側面

175. 7ST018出土石製墓標



正面 7ST019 側面

176. 7ST019出土石製墓標



正面 7ST029 側面

177. 7ST029出土石製墓標



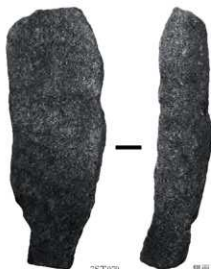
正面 7ST053 側面

178. 7ST053出土石製墓標



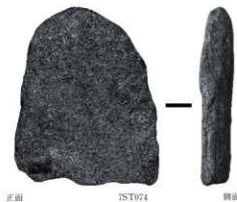
正面 7ST054 側面

179. 7ST054出土石製墓標



正面 7ST070 側面

180. 7ST070出土石製墓標



正面 7ST074 側面

181. 7ST074出土石製墓標



正面



側面



背面

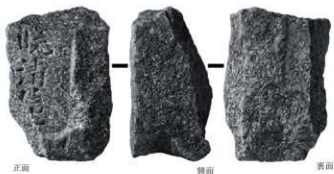
7ST081

182. 7ST081出土石製墓標



正面 7ST713 側面

183. 7ST713出土石製墓標



正面 側面 裏面

7ST806

184. 7ST806出土石製墓標



正面 側面

7ST808

185. 7ST808出土石製墓標



正面 側面 裏面

7ST812

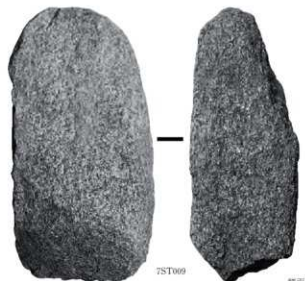
186. 7ST812出土石製墓標



側面 正面

7SK813

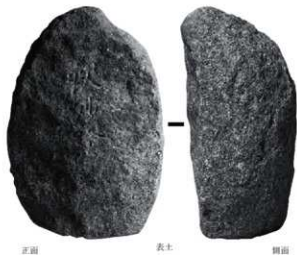
187. 7SK813出土石製墓標



正面 側面

7ST009

188. 石製墓標



正面

表土

側面

189. 石製墓標



正面

表土

側面

190. 石製墓標



正面

表土

側面

191. 石製墓標

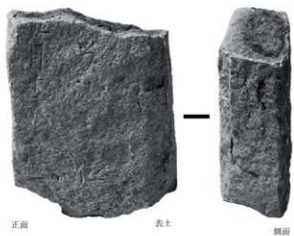


正面

表土

側面

192. 石製墓標



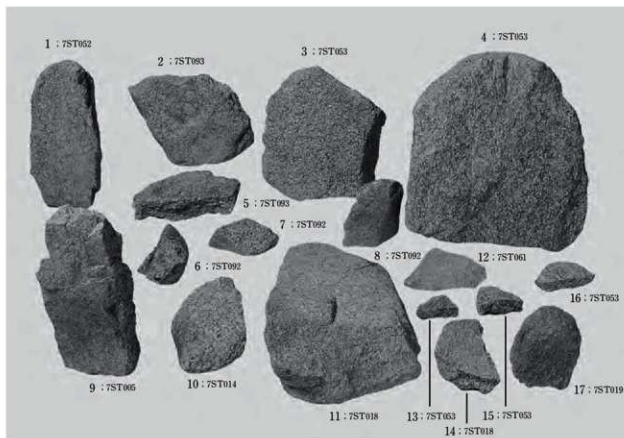
正面

表土

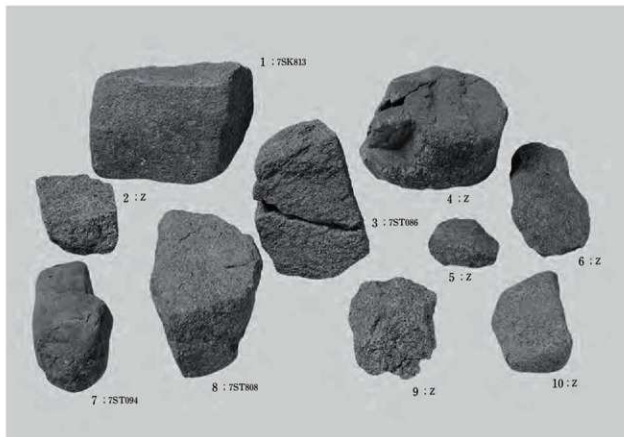
側面

193. 石製墓標





198. 近世以降の墳墓出土石製品等



199. 近世以降の墳墓出土石製品等



200. 7ST030出土遺物



201. 7ST220出土遺物



202. 7ST225・235出土遺物



203. 7ST589出土遺物



204. 7ST606・631出土遺物



205. 7SX638出土遺物



206. 7ST98出土遺物



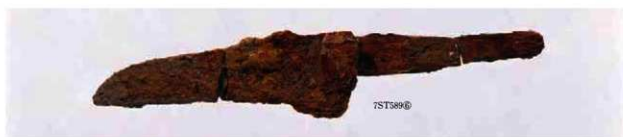
207. 7ST030出土金属製品



208. 7ST220出土金属製品



209. 7ST220出土金属製品



210. 7ST589出土金属製品



211. 7ST606出土金属製品



212. 7ST631出土金属製品



213. 7ST649出土金属製品



214. 7ST734出土金属製品



215. 7ST798・807出土金属製品



216. 7ST807出土金属製品



217. 7ST220出土木製品

7ST220



218. 7ST606出土木製品

7ST606



219. 7SA744e出土遺物



220. 7SX105出土遺物



221. 7SK110出土遺物



222. 7SK110出土遺物



223. 7SK110出土遺物



224. 7SD188・189・7SX198出土遺物



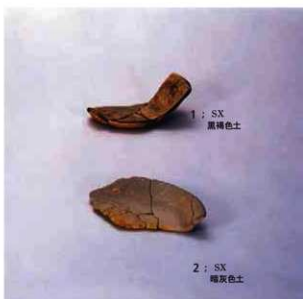
225. 7SX200出土遺物



・ SX 出土遺物



・ SX 出土遺物



・ SX 出土遺物



・ SD 出土金属製品



230. 7SX065・705・710・715出土遺物



231. 7SX730出土遺物



232. 7SX735出土遺物



233. 7SX740・750・755・760・765出土遺物



234. 7SX770・780・785出土遺物



235. 7SX856出土遺物



236. 7SX705・735・780出土金属製品



237. 7SK746・748・868出土遺物



238. 7SK878出土遺物



239. 7SK746出土鉄滓



240. 7SK746出土鉄滓



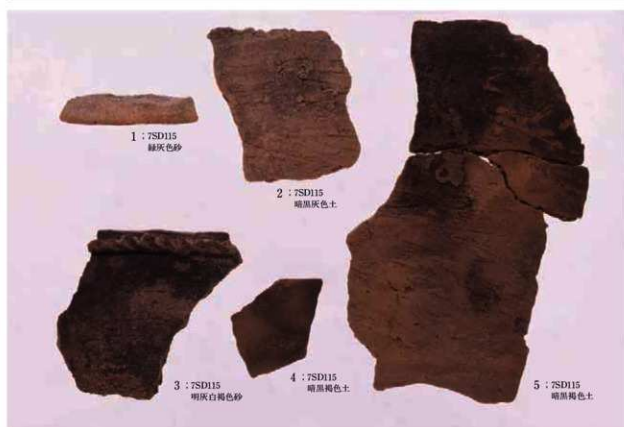
241. 7SK746出土鉄滓



242. 7SK746出土鉄滓



243. 7SK746出土鉄滓 (拡大)



244. 7SD115出土遺物



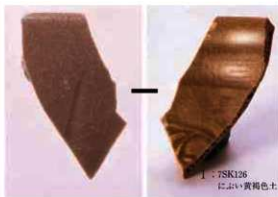
245. 7SD115出土石製品



246. 7SD079出土遺物



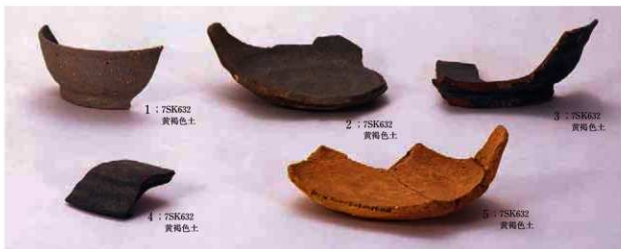
247. 7SD079出土遺物



248. 7SK126出土遺物



249. 7SK184出土遺物



250. 7SK632出土遺物



251. 7SK633出土遺物



252. 7SK634出土遺物



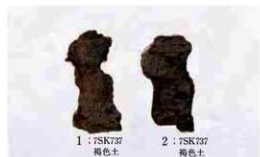
253. 7SK634出土遺物



254. 7SK633出土遺物



255. 7SK737出土遺物



256. 7SK737出土金屬製品

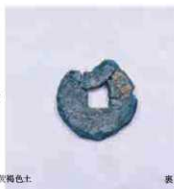


7SK634
灰黄色土

257. 7SK634出土金属製品



表



裏

7SK126にぶい・灰褐色土

258. 7SK126出土遺物 錢貨



1: 灰黄色土

2: にぶい茶色土

259. 灰黄色土・にぶい茶色土出土遺物



1: 褐黑色土

2: 褐黑色土

3: 褐黑色土

4: 褐黑色土

260. 褐黑色土出土遺物



1: 褐橙色土

2: 褐橙色土

3: 褐橙色土

4: 褐橙色土

261. 褐橙色土出土遺物



1: 黒黄茶色土

2: 黒黄茶色土

3: 黒黄茶色土

4: 黒黄茶色土

5: 黒黄茶色土

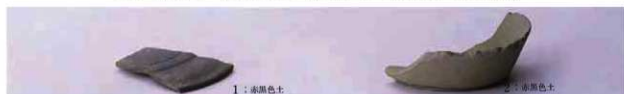
262. 黒黄茶色土出土遺物



263. 赤褐色土出土遺物



264. 赤褐色土・暗黄茶褐色土・黑黄茶色土・淡黄褐色土出土土製品



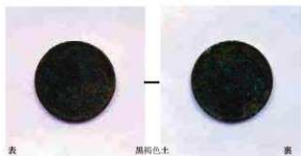
265. 赤黑色土出土遺物



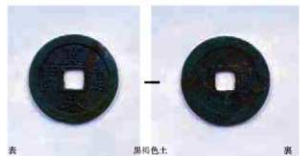
266. 淡茶色土・黒黄茶色土出土金属製品



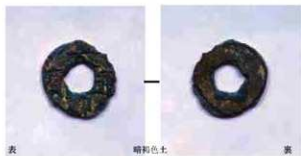
267. 赤黒色土出土鉄滓



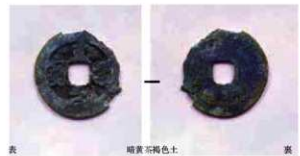
268. 黒褐色土出土遺物 銭貨



269. 黒褐色土出土遺物 銭貨



270. 暗褐色土出土遺物 銭貨



271. 暗黄茶褐色土出土遺物 銭貨



272. 赤茶褐色土出土玉類



273. 7SX046・117・182・429・636・736・738出土遺物



274. 7SX743・762・797・823・866出土遺物



275. 7SX736・759出土遺物



276. 7SX488出土遺物 錢貨

報告書抄録

ふりがな	だざいふ・さのちくいせきぐん						
書名	太宰府・佐野地区遺跡群						
副書名	日焼遺跡第7次調査						
巻次							
シリーズ名	太宰府市の文化財						
シリーズ番号	集						
編著者名	下山 覚・崎卓郎・平島義孝・小石龍信 榊埋蔵文化財サポートシステム						
編集機関	太宰府市教育委員会・榊埋蔵文化財サポートシステム						
所在地	太宰府市教育委員会 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号 榊埋蔵文化財サポートシステム 佐賀県佐賀市新中町1番7号						
発行年月日	(平成) 年 3月 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ-ド 市町村 遺跡番号	北緯 "	東経 "	調査期間	調査 面積 ㎡	調査起因
日焼遺跡第7次	太宰府市 向佐野 他		" "	" "	~		区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
日焼遺跡第7次	墓・窯・製鉄	奈良・平安・近世	近世墓・窯跡・掘立 柱物・墳墓・製鉄 関連遺構		須恵器・土師器・鉄 製品・瓦・陶磁器・ 玉類・石器		
要約	縄文時代～近・現代に至る複合遺跡で、宮ノ本の丘陵一帯にかけて立地する。縄文時代では後期から続く自然河川が検出されており、縄文時代後期から弥生時代早期の土器・石器などが出土した。7c後半～8c中頃では、製鉄に関連する遺構や、それらに付帯するとえられる掘立柱物跡や竪状遺構が検出されており、佐野地区周辺での鉄生産の一端を明らかにすることができた。古代では奈良期の須恵器窯跡や、奈良・平安期の火葬墓・木棺墓・土墳墓が検出された。窯跡は2基検出されており、牛頭窯跡群の最東端に位置する。また、墳墓の検出によって宮ノ本丘陵が太宰府の葬地として利用されていたことが改めて再確認された。近世に入ると丘陵の一部が墓地として利用されており、墓ほどの近世墓が検出された。太宰府では、近世墓が人骨を伴い且つまとまって検出された例は初めてであり、この地域における近世墓の構築・展開について明らかにすることができた。						

太宰府市の文化財 第 集	
太宰府・佐野地区遺跡群	
日焼遺跡第7次調査	
第2冊 自然科学 析・写真図版編	
平成 ()年3月	
編集	太宰府市教育委員会 〒 福岡県太宰府市観世音寺
編集協力	榊埋蔵文化財サポートシステム 〒 佐賀県佐賀市新中町
印刷	九州電算株式会社 〒 佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉

太宰府・佐野地区遺跡群 20

日焼遺跡第7次調査全体図

-1:300-

